

一般国道180号（南部バイパス）道路改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ

鳥取県西伯郡南部町

さ か い う ち か い ど う に し

境内海道西遺跡

2014. 11

一般財団法人 米子市文化財団

一般国道180号（南部バイパス）道路改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ

鳥取県西伯郡南部町

さ か い う ち か い ど う に し

境内海道西遺跡

2014. 11

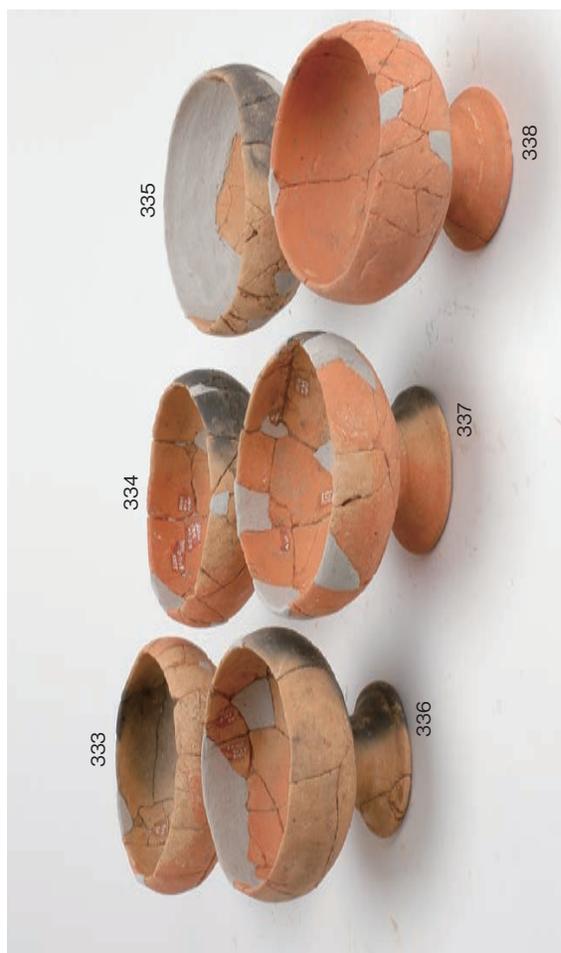
一般財団法人 米子市文化財団



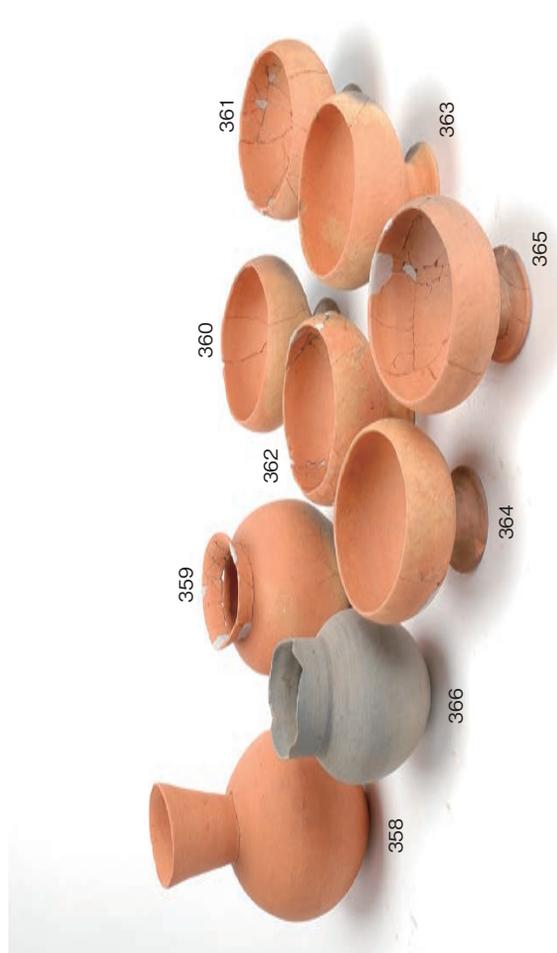
境内海道西遺跡遠景



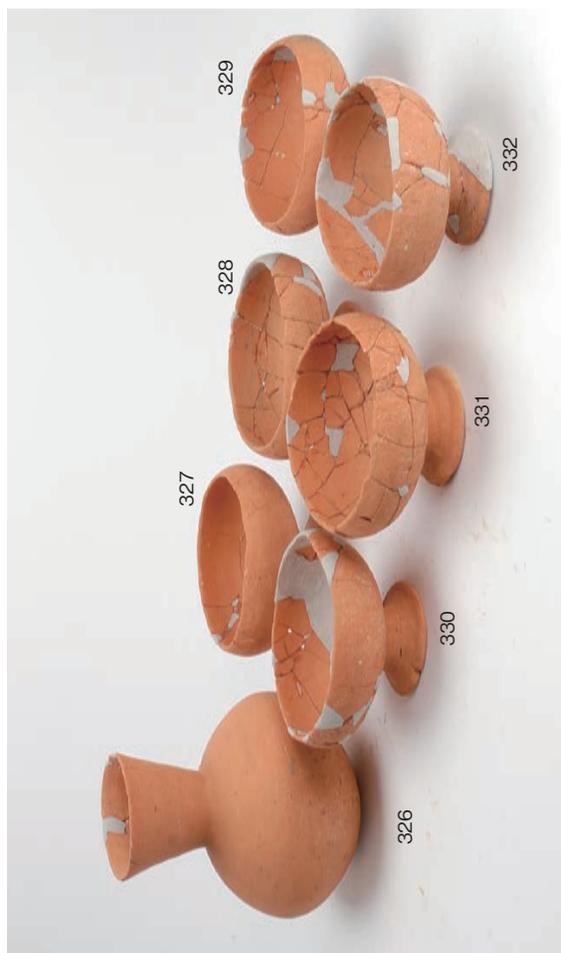
境内海道西遺跡全景



早里17号墳 SX10出土遺物



早里18号墳 SX6出土遺物



早里17号墳 SX9出土遺物



早里18号墳 SX2出土遺物

序

鳥取県西部に位置する南部町は、県下有数の古墳密集地帯で、古来ゆたかな文化が栄えた土地です。県下では、現在、山陰自動車道の整備が着々と進められており、これに伴い、山陰道米子西ランプから南部町を繋ぐ基幹線として、一般国道180号（南部バイパス）の道路改良工事整備事業が行われました。

当財団では、平成21年度から鳥取県の委託を受けて、この事業に係わる埋蔵文化財の発掘調査を実施してきました。境内海道西遺跡は、平成24年度に行われた発掘調査で、弥生時代後期から古代にかけての集落跡や古墳4基などを発見することができました。特に、古墳の周溝内埋葬墓からは供献土器が良好な状態で出土しており、当時の葬送儀礼の一端をうかがい知ることができました。今回発見された遺構や遺物は整理分析・研究を経て、このたび報告書として刊行することができました。これら先人達の足跡を、郷土の歴史を探る資料として、活用していただければ幸いです。

本書をまとめるにあたり、鳥取県西部総合事務所県土整備局はじめ多くの方々にお世話になりました。指導、ご協力いただいた方々に心より感謝申し上げます。

平成26年11月

一般財団法人 米子市文化財団

理事長 杉原 弘一郎

例 言

1. 本書は鳥取県が計画する一般国道180号（南部バイパス）道路改良工事に伴い、平成24年度に西伯郡南部町で実施した境内海道西遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本報告書に収録した遺跡の所在地は、鳥取県西伯郡南部町境1198である。
3. 発掘調査は、鳥取県の委託を受けて、財団法人米子市教育文化事業団（現 一般財団法人 米子市文化財団）が実施した。
4. 発掘調査に当たっては、東西町地域振興協議会より多大なる協力を得た。
5. 本報告に示したX・Yの数値は世界測地系：国土座標第V系の座標値であり、方位は公共座標北を用いた。また、レベルは海拔標高を示す。
6. 本報告書に掲載した地図は、国土地理院発行の1/50,000地形図「米子」、1/25,000地形図「母里」、鳥取県西部総合事務所県土整備局作成の1/1,000「一般国道180号（南部バイパス）道路改良工事平面図」を縮小、加筆して使用した。
7. 本発掘調査にあたり、北陸学院大学教授 小林正史氏に竪穴建物の炉・竈についての現地指導を頂いた。記して感謝いたします。
8. 出土遺物を整理、評価するにあたり、突帯文土器については 鳥取県むきばんだ史跡公園 濱田竜彦氏に、出土石器の石材鑑定については、鳥取県教育文化財団 高橋章司氏、北 浩明氏に御教示頂いた。記して感謝いたします。
9. 出土鉄製品のX線撮影については鳥取県埋蔵文化財センターの協力を得た。記して感謝いたします。
10. 本発掘調査における遺跡の調査前地形測量、航空写真撮影、自然科学分析、種実同定、放射性炭素年代測定を業者に委託した。
11. 突帯文土器の種子圧痕については『よどえまるごと道草日和プログラム20』「ドキドキ昔のタネ探し」においてレプリカ法調査を行い、鳥取県立むきばんだ史跡公園 濱田竜彦氏に御寄稿頂いた。
12. 本報告書の作成は小原貴樹、平木裕子、濱野浩美の協議に基づいて行い、執筆および編集は濱野浩美が行った。
13. 発掘調査によって作成された図面、写真などの記録類は米子市教育委員会、出土遺物は南部町教育委員会によって保管されている。
14. 現地調査及び報告書の作成にあたっては多くの方から御指導、御助言を賜った。明記して感謝いたします。（敬称略・五十音順）

北 浩明、君嶋俊行、国田俊雄、楳木敬太、佐藤浩司、下江健太、高橋章司、玉木秀幸
中原 斉、中森 祥、濱田竜彦、濱 隆造、平野芳英、牧本哲雄、村上 勇

凡 例

1. 発掘調査時における遺構番号と報告書記載の遺構番号は、整理、保管作業の煩雑さを考慮して一致させた。このため欠番となった番号も生じている。
2. 本報告における遺構記号は、次のように記している。なお、調査を進める段階で遺構の性格が変更されたものについても当初の記号を踏襲した。

SB：掘立柱建物 SI：竪穴建物 SS：段状遺構 SX：土壙墓 SK：土坑・貯蔵穴
SD：溝状遺構 Pit・P：柱穴・ピット

3. 遺跡の略称は「SUKN」である。
4. 遺構・遺物挿図の縮尺は図中に示す通りである。
5. 本文中、挿図中及び写真図版の遺構・遺物番号は一致する。
6. 遺構図版中の網掛け部分及び記号については以下のとおりである。

 貼床・粘土層  焼土・地山  天井土
 硬化面  炭化物  激しい燃焼部
●：土器出土地点 ▲：石器出土地点 □：鉄器出土地点

7. 本報告書における遺物の実測図は下記の縮尺で掲載した。
土器・土製品・陶磁器：1/4・1/3、石器、石製品：1/1・1/2・1/3・2/3・4/5、
金属製品：1/3・1/4・2/3
8. 遺物実測図のうち弥生土器、土師器、陶磁器は断面白抜き、須恵器は断面黒塗りで示した。
遺物実測図における記号は以下の通りにする。
→：ケズリの方向 ↔：研磨範囲 ┌─┐：潰れ範囲

9. その他の遺物実測図中の網掛けの指示は以下の通りである。

 被熱範囲  土器赤彩範囲  研磨痕

10. ピット計測表において（ ）で表したものは遺構残存部分での計測値である。
11. 遺構・遺物の時期決定については主に下記の文献を参照した。

岡田宏之他 2010「出雲地域における古代須恵器の編年」『出雲国の形成と国府成立の研究』
鳥根県古代文化センター

清水真一 1992「因幡・伯耆地区」『弥生土器の形式と編年（山陽・山陰）』木耳社

中森 祥 2010「因幡・伯耆における古代土器の編年とその様相」『出雲国の形成と国府成立
の研究』鳥根県古代文化センター

濱田竜彦 2008「中国地方東部の凸帯文土器と地域性」『古代文化』第60巻第3号（財）古代学
協会

宮崎泰士・藤永正明編 2006『年代のものさし—陶邑の須恵器』大阪府立近つ飛鳥博物館

山本信夫 2000『大宰府条坊跡』XV 太宰府市教育委員会

渡邊 誠 2009「古墳時代開始期前後における土器編年研究」『鳥根考古学界誌』第26号 鳥
根考古学会

九州近世陶磁学会編 2000『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会

土器持寄会編 2000『突帯文と遠賀川』土器持寄会論文集刊行会

目 次

卷頭カラー	
序文	
例言	
凡例	
目次	
第Ⅰ章 調査の経緯と経過	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	2
第3節 調査体制	2
第4節 調査日誌抄	3
第Ⅱ章 遺跡概観	4
第1節 自然、地理的環境	4
第2節 歴史的環境	5
第Ⅲ章 調査の概要	12
第1節 測量方眼の設定と調査の方法	12
第2節 土層堆積状況	13
第Ⅳ章 検出した遺構と遺物	17
第1節 縄文時代	17
陥穴	20
第2節 弥生時代～古墳時代前期初頭	25
1. 弥生時代前期～中期の遺構	25
1) 段状遺構	25
2) 貯蔵穴	31
3) 土坑	33
2. 弥生時代後期～古墳時代前期初頭	35
1) 竪穴建物	35
2) 段状遺構	60
3) 土坑	96
第3節 古墳時代前期前葉～古墳時代後期	100
1) 竪穴建物	101
2) 溝状遺構	106
3) 古墳	108
早里17号墳	108

	早里18号墳	116
	早里19号墳	129
	早里20号墳	135
	4) 土壙墓・土坑	137
第4節	古代	146
	1) 掘立柱建物	146
	2) 段状遺構	149
	3) 溝状遺構	172
	4) 土坑	174
第5節	中世	177
第V章	遺構外の出土遺物	178
第1節	突帯文土器	178
	1) 深鉢形土器	178
	2) 浅鉢形土器	185
	3) 壺形土器	186
第2節	弥生時代の遺物	187
第3節	古墳時代～古代の遺物	193
	1) 土師器類	193
	2) 須恵器類	197
	3) 鉄製品	200
第4節	遺構外出土の石器類	201
	1) 遺構外出土石器	201
	2) 石器石材組成について	212
第5節	中世の遺物	214
第6節	近世以降の遺物	216
第7節	表採遺物	217
第VI章	自然科学分析	218
第1節	米子市内遺跡出土東播系須恵器の胎土分析…(岡山理科大学 白石 純)	218
第2節	境内海道西遺跡における炭化物科学分析…(株式会社古環境研究所)	220
第3節	境内海道西遺跡における種実同定…(株式会社古環境研究所)	233
第4節	境内海道西遺跡出土の突帯文土器を対象とした種実圧痕調査 ……(濱田竜彦・中山 恵・松岡 藍・濱野浩美)	235
第VII章	総括	239

遺物観察表
写真図版

挿 図 目 次

第1図	一般国道180号（南部バイパス）道路 関係遺跡位置図	1	第41図	SI 2	40
第2図	遺跡位置図	4	第42図	SI 2 出土遺物	40
第3図	周辺遺跡分布図	6	第43図	SI 3	41
第4図	調査地周辺の遺跡	8	第44図	SI 3 断面図(1)	42
第5図	調査区測量方眼設定図	12	第45図	SI 3 断面図(2)	43
第6図	土層断面柱状対比図	13	第46図	SI 3 出土遺物(1)	44
第7図	調査区西壁土層断面図	14	第47図	SI 3 出土遺物(2)	45
第8図	中央土層断面図	15	第48図	SI 3 出土遺物(3)	46
第9図	調査前地形測量図	18	第49図	SI 4	48
第10図	調査後地形測量図	19	第50図	SI 4 炉	49
第11図	SK 2	20	第51図	SI 4 出土遺物	49
第12図	SK 3	20	第52図	SI 5	50
第13図	SK 7	21	第53図	SI 5 断面図(1)	51
第14図	SK10	21	第54図	SI 5 断面図(2)	52
第15図	SK11	21	第55図	SI 5 出土遺物	52
第16図	SK12	22	第56図	SI 7	53
第17図	SK14	22	第57図	SI 7 断面図(1)	54
第18図	SK17	22	第58図	SI 7 断面図(2)	55
第19図	SK21	23	第59図	SI 7 出土遺物	56
第20図	SK22	23	第60図	SI 8・SD 6	57
第21図	SK26	23	第61図	SI 8 断面図	58
第22図	SK28	24	第62図	SI 8 出土遺物	59
第23図	SK29	24	第63図	SD 6 出土遺物	60
第24図	SS29・31・34	26	第64図	SS 5～7・13～17	61
第25図	SS29出土遺物	27	第65図	SS 5～7	63・64
第26図	SS31出土遺物	28	第66図	SS 5～7 遺物出土状況図	65
第27図	SS34出土遺物	28	第67図	SS 5～7 断面図	66
第28図	SS35	29	第68図	SS 5 出土遺物	67
第29図	SS35出土遺物	30	第69図	SS 6 出土遺物(1)	68
第30図	SK13	31	第70図	SS 6 出土遺物(2)	69
第31図	SK13出土遺物	32	第71図	SS 7 出土遺物	69
第32図	SK15	32	第72図	SS13～17	71・72
第33図	SK20	33	第73図	SS13～17断面図(1)	73
第34図	SK20出土遺物	33	第74図	SS13～17断面図(2)	74
第35図	SK27	34	第75図	SS13出土遺物	75
第36図	SK27出土遺物	34	第76図	SS14出土遺物	76
第37図	SI 1	36	第77図	SS15出土遺物	76
第38図	SI 1 断面図(1)	37	第78図	SS17出土遺物	78
第39図	SI 1 断面図(2)	38	第79図	SK 5	79
第40図	SI 1 出土遺物	39	第80図	SK 5 甕棺出土状況	80
			第81図	SK 5 甕棺復元図	81

第 82 図	SK 5 出土遺物	82	第125 図	SX 2 出土遺物	121
第 83 図	SS 9	83	第126 図	SX 5・6	122
第 84 図	SS10・18	84	第127 図	SX 5・6 断面図	123
第 85 図	SS10 出土遺物	85	第128 図	SX 6 遺物出土状況	124
第 86 図	SS18 出土遺物	85	第129 図	SX 6 出土遺物	124
第 87 図	SS19	86	第130 図	SX 4	125
第 88 図	SS21	88	第131 図	SX 8	126
第 89 図	SS22・SD 2	89	第132 図	SX14	127
第 90 図	SS24・25	90	第133 図	SX14 出土遺物	127
第 91 図	SS24 石組	90	第134 図	早里19号墳	128
第 92 図	SS24 出土遺物	90	第135 図	早里19号墳断面図	129
第 93 図	SS25 出土遺物	91	第136 図	早里19号墳遺物出土状況	129
第 94 図	SS12・33	93	第137 図	早里19号墳出土遺物	130
第 95 図	SS12・33 断面図	94	第138 図	SX18	131
第 96 図	SS12 出土遺物	94	第139 図	SX19	132
第 97 図	SS33 出土遺物	95	第140 図	SK16	133
第 98 図	SK 4	96	第141 図	SK16 出土遺物	133
第 99 図	SK 6	97	第142 図	早里20号墳	134
第100 図	SK23	97	第143 図	早里20号墳周溝出土遺物	135
第101 図	SK24	98	第144 図	SX20	136
第102 図	SK25	99	第145 図	SX21	136
第103 図	SI 6	100	第146 図	SX17	137
第104 図	SI 6 出土遺物	101	第147 図	SX 3・SD 3	138
第105 図	SI 9	102	第148 図	SX 3 出土遺物	138
第106 図	SI10	104	第149 図	SX 7	139
第107 図	SI10 炉	105	第150 図	SX 7 出土遺物	139
第108 図	SI10 出土遺物	105	第151 図	SX11・SD 4	140
第109 図	SD 8	106	第152 図	SX15	141
第110 図	早里17号墳	107	第153 図	SX15 出土遺物	141
第111 図	早里17号墳周溝出土遺物(1)	108	第154 図	SX16	142
第112 図	早里17号墳周溝出土遺物(2)	109	第155 図	SX22	142
第113 図	SX 9	111	第156 図	SK 1	143
第114 図	SX 9 出土遺物	112	第157 図	SK 1 出土遺物	143
第115 図	SX10	113	第158 図	SK 8	144
第116 図	SX10 出土遺物	113	第159 図	SK 8 出土遺物	144
第117 図	SX12	114	第160 図	SK19	144
第118 図	SX13	115	第161 図	SK19 出土遺物	144
第119 図	SX13 出土遺物	116	第162 図	古代遺構全体図	145
第120 図	早里18号墳	116	第163 図	SB 4～6	146
第121 図	早里18号墳断面図	117	第164 図	SB 4	147
第122 図	早里18号墳周溝出土遺物	118	第165 図	SB 4 出土遺物	147
第123 図	SX 2	120	第166 図	SB 5	147
第124 図	SX 2 遺物出土状況	121	第167 図	SB 5 ピット54	148

第168図	SB 5 出土遺物	148	第203図	包含層出土突帯文深鉢(4)	182
第169図	SB 6	148	第204図	包含層出土突帯文深鉢(5)	183
第170図	SS 1 ~ 4	150	第205図	包含層出土突帯文深鉢(6)	184
第171図	SS 1 出土遺物	151	第206図	包含層出土突帯文深鉢(7)	184
第172図	SS 2 出土遺物	152	第207図	包含層出土突帯文深鉢(8)	184
第173図	SS 3 出土遺物	153	第208図	包含層出土突帯文深鉢(9)	185
第174図	SS 4 竈	153	第209図	包含層出土突帯文深鉢(10)	185
第175図	SS 4 炉	154	第210図	包含層出土突帯文浅鉢	185
第176図	SS 4 出土遺物	155	第211図	包含層出土突帯文壺	186
第177図	SS 8	156	第212図	包含層出土弥生土器(1)	188
第178図	SS11	157	第213図	包含層出土弥生土器(2)	189
第179図	SS20	158	第214図	包含層出土弥生土器(3)	190
第180図	SS23・SD 5・SB 7	159	第215図	包含層出土弥生土器(4)	191
第181図	SS23・SD 5・SB 7 断面図(1)	160	第216図	包含層出土弥生土器(5)	192
第182図	SS23・SD 5・SB 7 断面図(2)	161	第217図	包含層出土土師器(1)	194
第183図	SS23出土遺物	162	第218図	包含層出土土師器(2)	195
第184図	SD 5 出土遺物	162	第219図	包含層出土土師器(3)	196
第185図	SS26~28	164	第220図	包含層出土須恵器(1)	198
第186図	SS26~28断面図	165	第221図	包含層出土須恵器(2)	199
第187図	SS26 竈	166	第222図	包含層出土鉄器	200
第188図	SS26出土遺物(1)	167	第223図	包含層出土石器(1)	202
第189図	SS26出土遺物(2)	168	第224図	包含層出土石器(2)	203
第190図	SS27出土遺物	169	第225図	包含層出土石器(3)	204
第191図	SS28出土遺物	169	第226図	包含層出土石器(4)	205
第192図	SS30・32	170	第227図	包含層出土石器(5)	206
第193図	SS30出土遺物	171	第228図	包含層出土石器(6)	207
第194図	SD 7	173	第229図	包含層出土石器(7)	208
第195図	SD 7 出土遺物	173	第230図	包含層出土石器(8)	209
第196図	SK18	174	第231図	包含層出土石器(9)	210
第197図	SK18出土遺物	175	第232図	包含層出土石器(10)	211
第198図	SX 1	177	第233図	包含層出土中世遺物	215
第199図	SX 1 出土遺物	177	第234図	包含層出土近世遺物	216
第200図	包含層出土突帯文深鉢(1)	180	第235図	表土中出土遺物	217
第201図	包含層出土突帯文深鉢(2)	181	第236図	表土中出土中世遺物	217
第202図	包含層出土突帯文深鉢(3)	181	第237図	福成早里遺跡と境内海道西遺跡	241

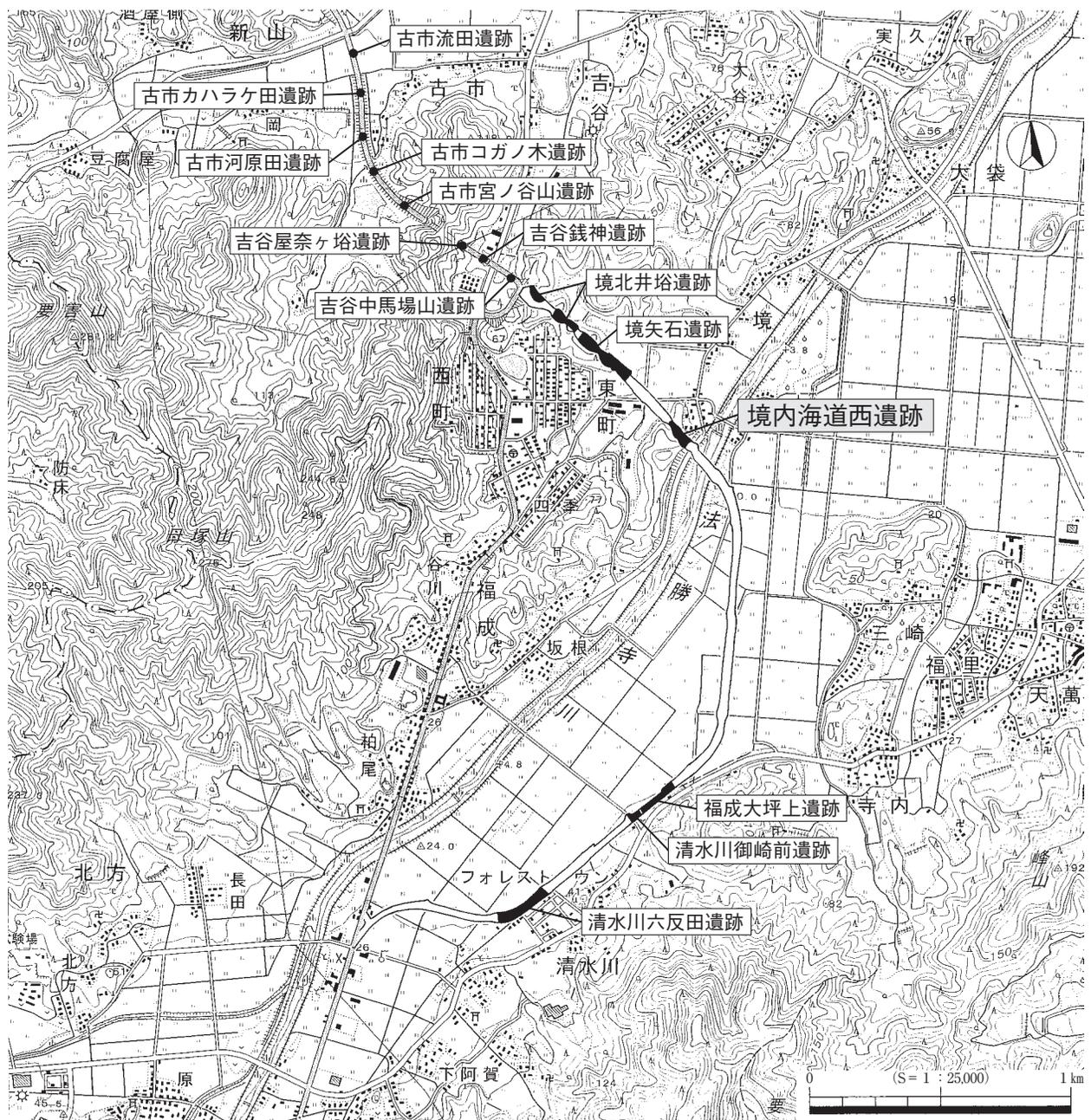
挿表目次

第1表	出土石器組成表	213	第2表	境内海道西遺跡出土中世遺物集計表	214
-----	---------	-----	-----	------------------	-----

第I章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

本発掘調査は、一般国道180号（南部バイパス）道路改良工事に伴い、鳥取県西伯郡南部町境における埋蔵文化財の記録保存を目的とした調査である（第1図）。当該事業は山陰道米子西ランプを起点として、米子市新山、古市を経て、南部町の境、清水川を通り阿賀で現180号に接続するバイパスで、南部町域路線を南部バイパスと呼称する。この事業計画地内の埋蔵文化財の保護協議が行われ、既に米子市域では古市遺跡群、吉谷遺跡群などが調査されている。南部バイパス予定地内については、平



第1図 一般国道180号（南部バイパス）道路関係遺跡位置図

成20年度に南部町教育委員会により試掘調査が行われた結果、道路予定地内に埋蔵文化財の存在が確認された。これを受け、鳥取県西部総合事務所は南部町教育委員会と協議し、発掘調査を財団法人米子市教育文化事業団（現一般財団法人米子市文化財団）に委託した。これにより米子市教育文化事業団埋蔵文化財調査室が文化財保護法第92条第1項に基づく発掘届を提出し、調査を実施することとなった。

第2節 調査経過

現地調査は、平成24年4月5日から着手した。西側が丘陵、南東側が急崖、北東側に民家という環境のため、発生する排土は場内処理する必要が生じた。このため、調査は中央谷部から行い、終了後尾根上の調査で生じる排土はフレコンパックによる土留め養生を行いながら谷部に順次仮置きすることとした。急斜面が殆どである調査地の安全性を考慮し、後半に発生した北側斜面部の排土については、鳥取県西部総合事務所及び南部町教育委員会と協議の上、隣接する天津総合公園内に仮置きすることとした。調査が終了した部分を順次排土置き場にした関係上、全景写真についてはラジコンヘリによる空撮を3回に分けて行った。猛暑や厳寒の中、調査は順調に進められ、平成25年1月24日にすべての現地調査を終了した。

整理作業は、平成24年度から平成26年度にかけて行った。自然科学分析に関しては、種実同定、放射性炭素年代測定を専門業者に委託し、平成26年11月に報告書を刊行した。

第3節 調査体制

平成24年度

- ・調査主体 財団法人 米子市教育文化事業団
 - 理事長 杉原弘一郎
 - 埋蔵文化財調査室
 - 室長 岡 雄一（米子市教育委員会文化課長）
 - 事務長兼調査員 小原 貴樹
 - 非常勤職員 田中 昌子
- ・調査担当 統括調査員 平木 裕子
 - 主任調査員 濱野 浩美

平成25～26年度

- ・事業主体 一般財団法人 米子市文化財団（平成25年4月1日改称）
 - 理事長 杉原弘一郎
 - 埋蔵文化財調査室
 - 室長 岡 雄一（米子市教育委員会文化課長）
 - 事務長 小原 貴樹（平成26年4月1日～）
 - 非常勤職員 田中 昌子
- ・事業担当 主任調査員 濱野 浩美

調査指導 米子市教育委員会・南部町教育委員会

第4節 調査日誌抄

2012	4	5	調査前地形測量開始	10	12	早里17・18号墳空撮	
	4	13	重機搬入、現場事務所整地	10	18	北側谷部表土掘削、遺構検出作業開始	
	4	16	トレンチ設定部分表土掘削開始	10	25	早里19・20号墳周溝掘削開始	
	4	17	トレンチ内遺構確認調査	10	29	SI 8 調査開始	
	4	18	表土掘削開始	10	31	SI 6・7 調査開始	
	4	23	中央谷部、南尾根部遺構検出作業開始	11	6	北側谷部段状遺構調査開始	
	4	25	谷部調査開始	11	12	SI 8 全景写真撮影	
	4	26	測量杭設置作業	11	19	SS26～28調査開始	
	5	8	SS 1～4 全景写真撮影	11	30	SS31全景写真撮影	
	5	9	SI1 掘削、尾根部遺構検出作業開始	12	5	SS34全景写真撮影	
	5	18	SI 2 調査開始	12	7	SS26竈調査開始	
	5	21	尾根部遺構検出作業開始	12	10～12	積雪により現場中止	
	5	28	SI 1 全景写真撮影	12	13	SS35全景写真撮影	
	5	29	谷部コンター図作成	12	14	北側谷部コンター図作成	
	6	4	谷部全景写真撮影	12	18～19	積雪により現場中止	
	6	7	南側尾根部調査開始	12	20	除雪作業	
	6	8	中央部SS 5～7 掘削開始	2013	1	7	SS12調査、包含層掘削作業
	6	11	甕棺（SK 5）検出	1	8	SI10調査開始	
	6	14	フレコンパックによる土留養生開始	1	16	現場精査	
	6	27	谷部調査終了	1	17	現場説明会記者発表	
	7	2	北側尾根部遺構検出作業開始	1	18～19	除雪、現場精査	
	7	13	SI 3・SS12掘削開始	1	20	現場説明会	
	7	20	酷暑のため、尾根部調査中断、北側谷部調査	1	23	ラジコンヘリによる空撮	
	7	27	夏休み子供発掘体験ツアー	1	24	調査終了	
	8	1	酷暑のため現場中止				
	8	2	SI 3 全景写真撮影				
	8	6	SS13～17調査開始				
	8	11～19	お盆休み				
	8	23	SS13～17全景写真撮影				
	9	3	早里18号墳周溝掘削開始				
	9	13	早里18号墳周溝内埋葬墓調査				
	9	14	SI 4 掘削開始				
	9	18	早里17号墳周溝掘削開始				
	10	3	北側尾根部遺構検出作業開始				
	10	6	人力による樹根伐開作業				



現場説明会の様子

第Ⅱ章 遺跡概観

第1節 自然、地理的環境（第2図）

境内海道西遺跡は、鳥取県西伯郡南部町境1198に所在する、縄文時代から中世にかけての複合遺跡である。

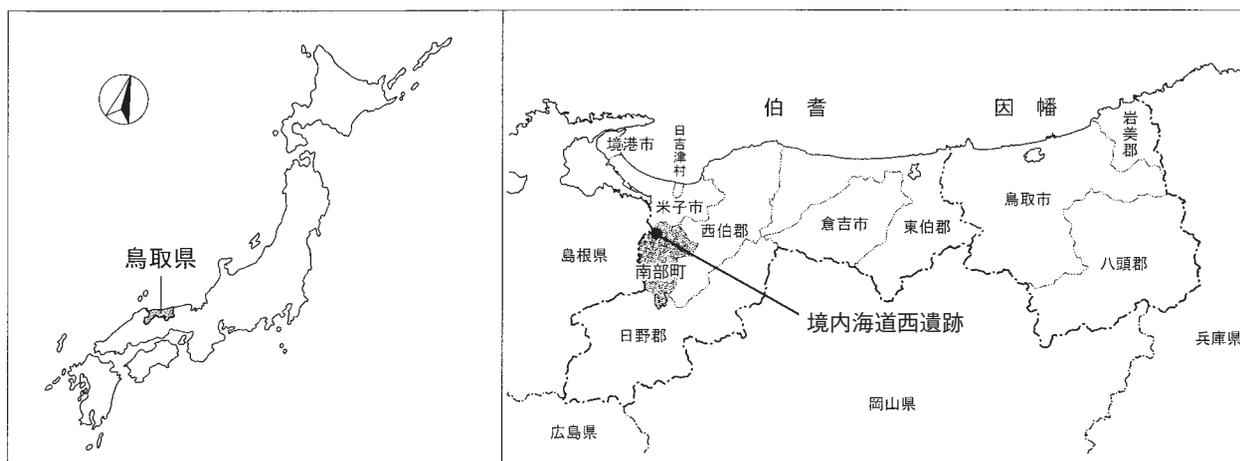
南部町は鳥取県西部に位置し、鳥取県西伯郡の西伯町と会見町が2004年10月1日に合併して誕生した町である。北は米子市、東は伯耆町、南は日南町、日野町、西は島根県安来市と接している。

町域の地形は大きく分けて法勝寺川流域に広がる沖積低地と、それを取り囲む丘陵部に大別される。

丘陵部は、大山を中心とした中国山脈から続く丘陵性山地と、大山火山に起因する火山性台地で構成される。この丘陵の地質は、第三紀中新世の流紋岩質凝灰岩及び角礫凝灰岩よりなる。南方の鎌倉山を中心にして西北稜線上に夏牛山、大熊谷山、寺谷山、高小屋山、母塚山があり、東北稜線上に奥山、八子山、大蔵山、手間要害山がある。この丘陵部は風化・浸食がすすみ、流紋岩質凝灰岩は粘土化している部分が多い。角礫凝灰岩の山塊で浸食残丘として標高200m程度のピークがいくつかみられ、新山要害山や手間要害、掛相要害のように中世以降の砦跡が点々と築かれている。

法勝寺川は日南町境の五輪峠麓に源を発する日野川水系の一級河川で、日野町境に聳える鎌倉山（731m）を主峰とする山稜を開析しながら日本海に向かって北流し、支流をあわせ米子市戸上地内で日野川と合流し、日本海に注いでいる。法勝寺川本流の上流部は急流で浸食が進み、鴨部、能竹の境辺りから急に緩流となり花崗岩の風化、崩落した砂礫、表土を流送、堆積して沖積平野を形成している。この沖積地は天津地区では粘土質の堆積層となっている。

境内海道西遺跡は、南部町の北東端、米子市との町境に位置する米子ニュータウンの東0.5kmの丘陵上に位置している。この丘陵は法勝寺川左岸を南北に延びる早里山から荒神山にかけての標高50～60mをピークとし、遺跡はその北端に位置している。調査地から南東方向には法勝寺川の沖積地を隔てて三崎殿山、手間要害山などの丘陵をはじめ越敷原や大山が遠望でき、一方北西方向に目を転ずると小支谷を挟んで、米子市域南西から島根県安来市にかけての丘陵が展望できる。



第2図 遺跡位置図

第2節 歴史的環境（第3・4図）

旧石器時代

南部町域では、旧石器時代の遺構は現在のところ確認されていない。ただし、大山山麓や周辺の台地上では当概期の遺物が出土している。長者原台地の諏訪西山ノ後遺跡（73）、坂長村上遺跡（72）ではナイフ形石器が出土しているが、遺構が検出された例は今のところ確認されていない。

縄文時代

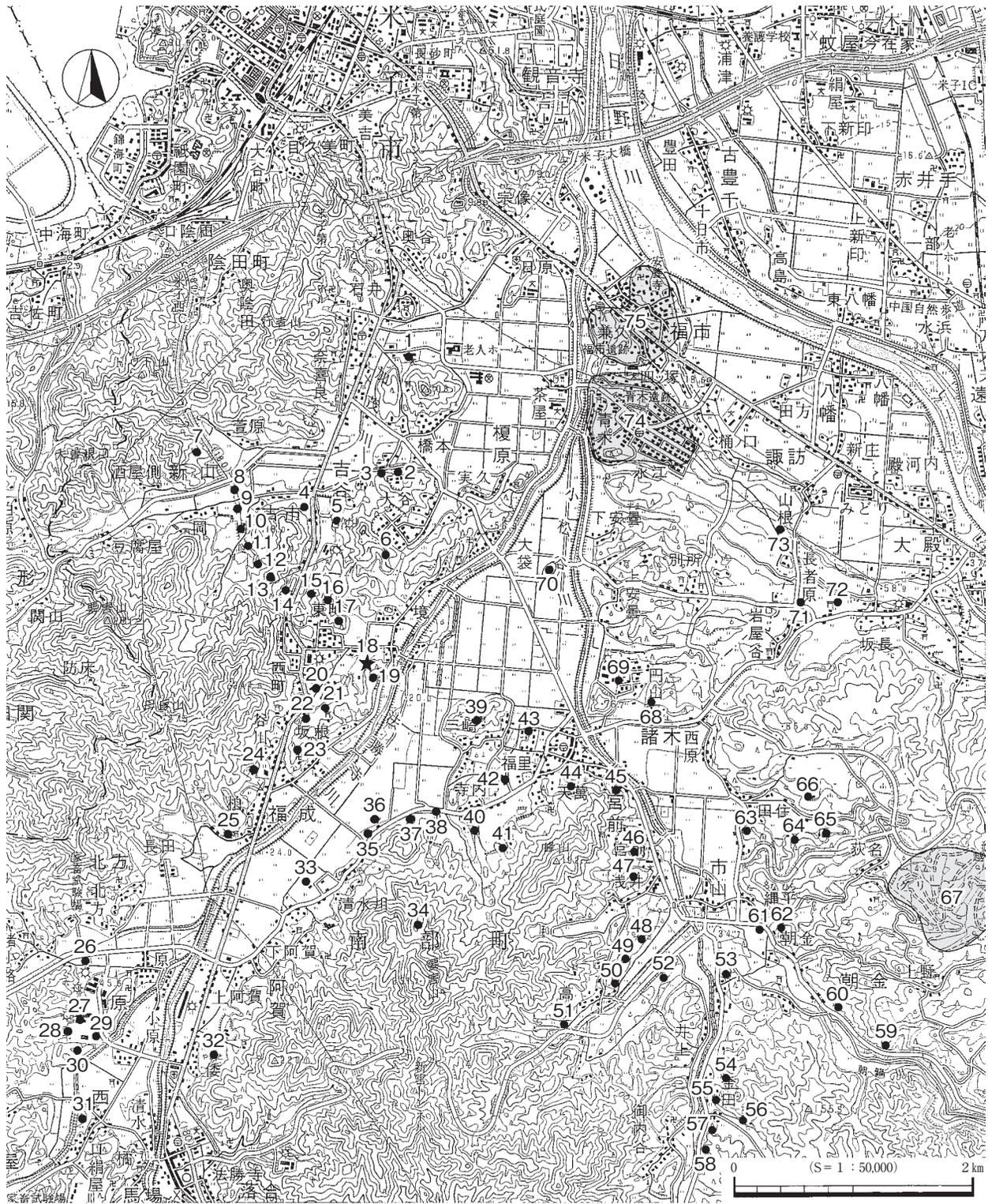
米子平野域では、縄文時代初頭より人々の居住が始まっているが、草創期において確認されている遺跡は少ない。まず坂長村上遺跡（72）においてローム漸移層中より尖頭器5点を含む石器群が出土している。また、陰田第6遺跡、橋本徳道西遺跡（2）では尖頭器が、奈喜良遺跡（1）、陰田宮の谷遺跡、福成石佛前遺跡（20）、境北井垆遺跡（16）ではサヌカイト製の有舌尖頭器が出土している。

遺跡が本格的に展開するのは、早期の押型文土器段階以降である。大山山麓、佐陀川上流の山間部に位置する上福万遺跡は、早期の大規模な遺跡で集石遺構や土坑が多数検出されている。清水谷遺跡（24）では縄文時代早期の押型文土器が発見されている。縄文早期末～前期以降は、安定した環境下において集落が形成され、中海や淀江の入海に沿った低地と大山の北・西麓の丘陵上に遺跡が集中する。中海沿岸は、中国地方を代表する縄文遺跡の密集地で陰田遺跡を始め目久美遺跡、タテチョウ遺跡、西川津遺跡などが知られている。

前期は縄文海進期で、中海沿岸地域は豊富な水産資源を利用した漁撈生活と背後の丘陵の狩猟生活活動に支えられ、目久美遺跡等山陰屈指の縄文遺跡の集中域となる。陰田第9遺跡では、縄文時代前期初頭の土器と貝殻層が出土しており、目久美遺跡と時期・地形が同様であることから、関連性の高い遺跡と考えられる。中期には遺跡数が減少し、海岸部では新たな遺跡はみられない。後期・晩期になると、再び遺跡数が増加する。低湿地周辺では、目久美遺跡、古市河原田遺跡（10）、陰田第1遺跡などの小規模遺跡が存在する。台地・丘陵部では非常に多くの陥穴が確認されており、妻木晩田遺跡、青木遺跡（74）など何百基と検出された遺跡もある。また、枇杷谷遺跡（37）からは縄文時代晩期の土器が出土しており、貯蔵されたとみられるドングリが土坑より検出された。この時期には、古市カハラケ田遺跡（9）古市河原田遺跡（10）をはじめ突帯文土器を伴う遺跡が多く見つかっている。特に古市河原田遺跡は、縄文晩期後葉の標式遺跡として提唱されている。

弥生時代

縄文時代晩期末から弥生時代に入ると、海退が進むことで中海沿岸は低湿地化し、農耕に適した土地が広がっていたと推測でき、こうした所に水田が開かれ、周辺の微高地には集落が形成される。遺跡の多くは低地もしくは、低地にほど近い丘陵裾部に選地しており、稲作の需要・定着の過程における現象として興味深い。前期の代表的な遺跡としては、目久美遺跡や長砂第2遺跡がある。両遺跡では前期から中期にかけての水田が重層して検出され、農耕具などの木製品も多く出土している。陰田から新山にかけての丘陵部では、弥生時代前期から断続的に集落の形成が始まる。法勝寺川流域では、台地上の広い範囲に集落が多く検出されており、特に清水谷遺跡（24）、宮尾遺跡（43）、天王原遺跡（53）、諸木遺跡（69）など前期の環濠を伴う集落が比較的集中して検出されている地域である。な



第3図 周辺遺跡分布図

1 奈喜良遺跡	2 橋本徳道西遺跡	3 吉谷亀尾ノ上遺跡	4 吉谷ノ原山遺跡
5 吉谷トコ遺跡	6 境古墳群	7 新山山田遺跡	8 古市流田遺跡
9 古市カハラケ田遺跡	10 古市河原田遺跡	11 古市コガノ木遺跡	12 古市宮ノ谷山遺跡
13 吉谷屋奈ヶ谷遺跡	14 吉谷銭神遺跡	15 吉谷中馬場山遺跡	16 境北井塔遺跡
17 境矢石遺跡	★18 境内海道西遺跡	19 福成早里遺跡	20 福成石佛前遺跡
21 福成春日山古墳	22 谷川横穴墓群	23 福成古墳群	24 清水谷遺跡
25 柏尾城跡(小鷹城跡)	26 北方廣畑遺跡	27 マケン堀古墳群	28 北福王寺遺跡
29 竹山遺跡	30 小堤山横穴墓群	31 西横穴墓群	32 倭孫谷山遺跡
33 清水川六反田遺跡	34 手間要害	35 清水川御崎前遺跡	36 福成大坪上遺跡
37 枇杷谷遺跡	38 オノ木遺跡	39 三崎殿山古墳	40 寺内8号墳
41 普段寺古墳群	42 天萬土井前遺跡	43 宮尾遺跡	44 天万遺跡
45 宮前古墳群	46 宮前遺跡	47 浅井11号墳	48 浅井土居敷遺跡
49 高姫古墳群	50 高姫根小松遺跡	51 高姫近藤遺跡	52 井上古墳群
53 天王原遺跡	54 金田瓦窯跡	55 小松城跡	56 両部太郎窯跡
57 金田堂ノ脇遺跡	58 御内谷向田遺跡	59 朝金天田遺跡	60 朝金小チヤ遺跡
61 口朝金遺跡	62 朝金古墳群	63 田住楠川遺跡	64 田住松尾平遺跡
65 田住滝山遺跡	66 田住古墳群	67 越敷山遺跡群	68 後谷山古墳
69 諸木遺跡	70 大袋丸山遺跡	71 長者屋敷遺跡	72 坂長村上遺跡
73 諏訪西山ノ後遺跡	74 青木遺跡	75 福市遺跡	

かでも、清水谷遺跡（24）では長径125mを測る大規模な環濠内部に竪穴建物などが認められない点で注目される。また、古市コガノ木遺跡（11）、古市流田遺跡（8）では、山陰地方最古の遠賀川式土器とされる出雲原山式土器が出土している。

中期には宮前遺跡（46）、浅井土居敷遺跡（48）、青木遺跡（74）、越敷山遺跡（67）など平野周辺の台地上、山間部へと集落が拡大していく。丘陵上には妻木晩田遺跡、青木遺跡（74）、福市遺跡（75）など大規模な拠点集落が出現する。青木遺跡（74）は中期後半から後期にかけて長期間存続した集落跡で、山陰の弥生土器編年の基準となった遺跡でもある。淀江町と大山町にまたがる妻木晩田遺跡は、弥生時代中期中葉から古墳時代前期前葉までおよそ300年続いた遺跡で、弥生時代集落遺跡としては淀江平野最大の規模である。このほか南部町と岸本町にまたがる越敷山遺跡群（67）などでも、地域の拠点集落が丘陵上に出現する。天萬土井前遺跡（42）では外来系の搬入遺物が出土しており、他地域との交流が窺える。このように、中期になると遺跡の増加、大規模集落の出現、山間部の開発などが行われる一方、平野部でも目久美遺跡のように長期間存続する遺跡が展開するが、後期後半には洪水災害などにより断絶している。丘陵部の大規模集落の出現には様々な社会的背景が考えられるが、平野部における環境変化も大きな要因であると考えられる。

後期になると、中期から継続する遺跡の他に新しい集落を形成する遺跡が出現する。後期中葉以降、清水谷遺跡（24）、北福王子遺跡（28）、陰田遺跡群などの低丘陵性集落が再び、短期間各地に営まれる。古市コガノ木遺跡（11）、古市流田遺跡（8）では竪穴建物とそれに伴う数棟の掘立柱建物が集落内に散在する形で構成される小規模な集落像が窺える。この他福成石佛前遺跡（20）は、丘陵裾部にごく短期間営まれた小規模集落である。これら後期に営まれる低丘陵性集落の出現は、当該期に大きな変動要因があったことが窺える。遺跡周辺では境矢石遺跡（17）の丘陵上に集落が形成される。

後期後半になると、妻木晩田遺跡などで弥生から古墳時代への墓制の移行期として四隅突出型墳丘墓が出現する。中でも三重の逆台形環濠を巡らせた城塞的要素を持つ尾高浅山遺跡は、後期前半の一時期営まれた低丘陵性環濠集落で、これとセットで発見された四隅突出型墳丘墓を含めて日野川右岸流域の支配者像を垣間見ることができる。この時期の世帯共同体が単位とされる集団墓として、木棺墓群がある。吉谷上ノ原山遺跡（4）は終末期の木棺墓10基が検出されており、なかでも6号墓はガラス製管玉3個とガラス製小玉271個を副葬し木棺墓中最多の副葬数である。田住桶川遺跡（63）では、後期前葉～後葉の土壙墓8基、木棺墓6基、石棺墓4基が検出され、朝金小チャ遺跡（60）では中期の貼石墳丘墓1基、方形周溝墓1基、箱式棺8基、石蓋土壙墓2基が検出されている。こうした動きが次代の古墳群を築く母体を生み出していく。

古墳時代

この時期の米子平野の集落遺跡は主に台地上や丘陵上に分布しており、福市遺跡（75）や青木遺跡（74）のように、弥生時代後期から継続して営まれたものが見られるほか、坂長第8遺跡や坂長尻田平遺跡などのように中期から集落が形成されるものもある。遺跡周辺域を見ると、集落遺跡では清水谷遺跡（24）で前期から後期まで展開されており、古市カハラケ田遺跡（9）吉谷亀尾ノ上遺跡（3）新山山田遺跡（7）で古墳時代中期の竪穴建物が検出されている。今回の調査区に隣接する福成早里遺跡（19）では古墳時代後期に斜面を切り開いた集落と古墳、横穴墓が存在したことが明らかとなっている。

米子平野の古墳総数は、現在までに2749基、横穴墓241基、総数約2900基余りが確認されている。最初の首長墓は日原6号墳で、弥生墓制の伝統を継続している。その後、普段寺1・2号墳(41)では三角縁神獣鏡が出土しており、大和政権との関わりを示唆している。中期古墳については、西伯耆最大規模の全長108mの前方後円墳である三崎殿山古墳(39)が著名であるが、最近の研究では、前期古墳である可能性が指摘されている。その他、画文帯神獣鏡が出土した浅井11号墳(47)、宮前3号墳(45)といった小型の前方後円墳が築造されている。また、加茂川流域の陰田・新山遺跡群でも古墳の造営が行れる。新山山田古墳群(7)はいずれも6~10mの小円墳で、尾根の上方を掘削して弧状の周溝とし、墳丘は地山整形と盛土からなる。最高位の1号墳を盟主墳として古墳時代中期から後期初頭にかけて形成された在地小豪族の古墳群と思われる。後期になると古墳数は爆発的に増加し、多くの群集墳が営まれる。米子平野の横穴墓は、33か所で241基、日野川左岸、法勝寺川流域に集中している。なかでも代表的なものが陰田横穴墓群で、古墳時代後期における鳥取県最大の横穴墓群である。この地域の横穴墓は後背墳丘を伴う例が多く、県境を越えて出雲東部にも類例が見られる。



第4図 調査地周辺の遺跡

早里古墳群について（第4図）

南部町は、鳥取県内でも有数の古墳密集域であり、当該期に法勝寺川中流域の支配者が米子平野一帯を支配していたことが想定できる。概して法勝寺川右岸に古墳時代前期から中期に比定される大型古墳が築かれるのに対し、法勝寺川左岸丘陵には主に古墳時代後期の群集墳が形成されている。特に馬場古墳群（37基）、絹屋古墳（39基）、原古墳群（30基）、徳永古墳群（36基）鴨部古墳群（71基）などは30基以上からなる群集墳である。また横穴墓は、大規模なものとしてマケン堀古墳群（27）が知られるが、2～3基の小単位からなる小提山横穴墓群（30）、西横穴墓群（31）、谷川横穴墓群、今長龍徳横穴墓群なども存在する。マケン堀古墳群（27）では標高65m前後の丘陵上及び斜面において2基の円墳と35基の横穴墓、横穴墓に伴うと考えられる6基の後背墳丘が検出されており、横穴墓の断面形態は三角形に限定されており、当地域の特殊性を示している。

境内海道西遺跡周辺の丘陵も、福成古墳群（23）、境古墳群（6）などの古墳密集域であり、直径33mの円墳である福成13号墳（23）などが築造されている（第4図）。また、遺跡から小支谷を隔てた西側の春日山丘陵上には福成古墳群（23）が存在する。なかでも全長40mの前方後円墳である福成春日山古墳（21）では頭蓋骨を朱塗りにした人骨が箱式石棺内に埋葬されていたことが知られており、古墳時代中期のものと推定されている。

境内海道西遺跡は、位置的に古墳時代後期の群集墳の一つである早里古墳群に属する（第4図）。早里古墳群は、標高50～60mの早里山尾根上に3基の前方後円墳と13基の円墳が構築されており、各規模は丘陵南側の荒神山山頂付近の4号墳（前方後円墳）が最大で全長29.7m、早里山山頂の8・9号墳（前方後円墳）で全長20mを測り、その他の円墳は直径10m前後である。隣接する福成早里遺跡（19）も同じ早里古墳群に属しており、既に早里14～16号墳が調査されている。この古墳はいずれも円墳で、埋葬主体は14号墳が横穴式石室、15号墳が土壙墓または木棺直葬、16号墳は周溝のみの検出であったが、いずれも6世紀中頃から7世紀初頭に築造された古墳であり、7世紀中葉までは追葬行為が行われている。このように遺跡周辺域は、この地域に勢力をもった集団の首長墓の存在が窺える地区であり、今回の調査地点の南北の丘陵上にも早里12・13号墳が存在していることから、調査範囲内にも未知の古墳が包蔵されていることは当然予想された。

古代

古代律令体制下において、伯耆国は『和名類聚抄』によれば河村・久米・八橋・汗入・会見・日野郡の6郡48郷が記載されている。会見郡は、現在の旧五千石村から旧幡郷村の地域で、日下・細見・美濃・安曇・巨勢・蚊屋・天万・千太・会見・星川・鴨部・半生の12郷が記載されている。このうち南部町域は鴨部郷、天万郷、星川郷に比定されている。東大寺文書には、神護景雲四（770）年、会見郡加茂部（鴨部）の一族の青年秋磨が東大寺に入って僧になったことが記されている。

会見郡衙については伯耆町坂長と南部町天万に求める説があるが、近年の発掘調査例の増加から、坂長地区に所在する可能性が高まっている。この地区では長者屋敷遺跡（71）や坂長下屋敷遺跡、坂長第6遺跡等で奈良時代の官衙的配置の大型掘立柱建物跡群が、坂長第6遺跡では鍛冶工房が検出されており、坂長村上遺跡（72）や坂長第7遺跡では円面硯や刻書土器など、官衙的な性質が強い遺物が出土している。周辺には、白鳳期の法起寺式伽藍配置をとる寺院で、重文の石製鴟尾を持つ大寺廃寺や、塔心礎が残存する坂中廃寺等の古代寺院跡がある。この大寺廃寺で使用された瓦については、

創建時のものと同一文様の瓦が金田瓦窯（54）から出土したようであり、そこで焼かれた可能性がある。7世紀後半以降には陰田・吉谷周辺の遺跡でも官衙との関連を窺わせるような資料が見られる。すなわち、吉谷銭神遺跡（14）では「目」あるいは「四」、陰田遺跡群では「館」「多知」「田知」と記された墨書土器が出土しており、館の存在が推定される。これらの地域では、谷に面した斜面を造成、段状に加工した上で掘立柱建物や竪穴建物を構築している。また陰田ハタケ谷遺跡・陰田広畑遺跡・陰田マノカンヤマ遺跡、新山下山遺跡等、陰田地区の丘陵には傾斜地を利用した鍛冶関連の遺構が多く検出されている。

遺跡周辺域では、福成石佛前遺跡（20）、清水谷遺跡（24）で山裾部に掘立柱建物が検出されている。また、境北井塔遺跡（16）、境矢石遺跡（17）、福成早里遺跡（19）では山の斜面をL字状に掘削して平坦面を造成した遺構が数多く検出されており、製塩土器や赤色塗彩土師器が出土している。平安時代後期になると遺跡数も少なくなり、陰田遺跡群も終焉する。古市宮ノ谷山遺跡（12）では9世紀後半以降の土器生産活動を示す遺構が検出されている。また、金華山からは平安時代後期のものと考えられる経筒が出土している。

古代山陰道については、大寺廃寺、坂中廃寺、長者屋敷遺跡（71）を通過して、伯耆町岩屋谷から南部町天万を抜ける南側のルート、もしくは米子市諏訪から古市を抜ける北側のルートが想定されており、国境は『出雲国風土記』の手間割に比定されている。ただし、この北側の山陰道については、ルート上の候補地である古市流田遺跡（8）、橋本遺跡群（2）などの調査では検出されていない。

中世

鎌倉期に活躍した在地領主層として、紀氏の子孫と伝えられる紀成盛がいる。彼については、承安元（1171）年大山寺権現堂焼失の翌年、大山寺に奉納した厨子の銘文に「伯州会東郡地主、本系紀納言」とあることから、会見郡東部に勢力基盤を持つ一族が武士化したものと思われる。伯耆町坂長には「紀成森長者ノ塔」と記された石碑があり、紀氏が古代以来の郡衙域に居宅を構えていたという伝承が残る。また、坂長前田遺跡では平安末期から鎌倉時代の甲冑に用いられた小札が出土している。

『大山寺縁起』養和元（1181）年には、紀氏と伯耆東部に力を持つ在庁官人である小鴨氏の争いの記述がある。この他、伯耆の日野氏や藤原氏、金持氏等は、荘園内に勢力をもった地頭などが武士階級に成長したものと思われる。建武3（1336）～4（1337）年、足利幕府方の石橋和義、次いで山名時氏が守護に任命され、以後、室町時代には山名氏の子孫が伯耆を支配し、かつての地頭である赤松・福頼・小鴨氏などは山名氏に被官し、伯耆衆と呼ばれる。『応仁記』によれば、伯耆からは小鴨・南条・進・村上氏ら国侍の出陣が記されている。この時期、南部町域では長田庄を基盤とした地頭、藤原氏が勢力を振るっていたと伝えられる。

南北朝から戦国時代の動乱期には、国境の交通要衝や山陰道沿いの要地を中心に法勝寺城、柏尾小鷹城、鎌倉城などが築造される。西伯耆の領国支配をめぐる山名氏、尼子氏、毛利氏はこれら諸城を舞台に激しい戦闘を繰り返した。塩冶高貞に攻略されたと伝えられる小松城跡（55）、大永4（1524）年の尼子氏により落城したとされる手間要害（34）等は文献上にも登場する代表的な城跡である。この他標高287mの要害山上に新山要害（長台寺城）が築かれ、出雲・伯耆の国境地域の拠点となっていた。南部町法勝寺の経久寺には尼子経久夫妻の墓と伝えられる宝篋印塔2基が現存している。

この時期の発掘調査事例としては、居館跡と思われる建物が浅井土居敷遺跡（48）、天王原遺跡（53）

で検出されている。また、葬送関連の遺跡としては、橋本漆原山遺跡、福成早里遺跡（19）から15～16世紀の火葬墓、土壙墓が検出されている。

近世

近世期には、1600年に中村一忠が西伯耆の領主となり、慶長15(1610)年から加藤貞泰、元和3(1617)年から池田由之へと国替えが続いた後、寛永9(1632)年岡山藩主から国替えとなった池田光仲が鳥取藩主となると、家老職荒尾氏が米子城預かりとなり、「自分手政治」を行うことが許された。南部町南域では、たたらを利用した製鉄業が主要産業となる。鎌倉山麓の奥山鉄山所たたらは江戸時代後期、文化年間に操業された高殿たたらである。当時の主要街道は、参勤交代路としての出雲街道あるいは智頭街道などであったが、奥日野と米子、出雲と上方を結ぶ法勝寺街道は製鉄運搬の重要ルートとして宿駅も置かれ、街道の要衝として賑わいを見せた。町内には県指定保護文化財として吉持家住宅が現存している。境地区については「元禄郷名帳」に江戸期の村名として境の名がみえるが、上境とも書いて境港と区別した。地内には文政8(1825)年の銘を持つ石灯籠がある宇賀神社がまつられている。この他、東光寺という地名が残るが、寺院については不明である。

この時期、南部町内では行者信仰が広まっていたものと思われる。元和4(1618)年の赤谷村検地帳には山伏の土地所有もみられ、伐株村の行者堂には天明5(1785)年などの棟札も現存し、堂内には石像も安置されている。金華山の石造行者像の台座には、寛政6(1798)年の銘が刻まれている。また、地藏信仰も広汎に信仰されていたようで、町指定文化財の柏尾薬師堂境内の六角石地藏や、江戸期の刻銘を持つ落合の延命地藏、笹畑の烏帽子岩に彫られた地藏尊及び、鎌倉山山頂の地藏群などの存在が知られている。

(引用・参考文献)

- 大村雅夫 2010「米子平野の考古学史」『新修米子市史』第15巻資料編考古補遺 米子市
大村雅夫他2003『新修米子市史』第1巻 通史編 原始・古代・中世 米子市
岡田昌孫他1973『会見町誌』第一編 会見町
岡田昌孫他1995『会見町誌続編』第一編 会見町
遠藤静波 1990『ふるさとの石造物』西伯町教育委員会
国田俊雄他 1997『新修米子市史』第12巻 資料編 絵図・地図
西伯町誌編纂委員会編1975『西伯町誌』西伯町
田中精夫他 1988『鳥取県埋蔵文化財シリーズ3 旧石器・縄文時代の鳥取県』鳥取県埋蔵文化財センター
中原 齊ほか1999『新修米子市史』第7巻資料編 考古・原始・古代・中世 米子市
中村 保 1997『因幡・伯耆の町と街道』富士書店
野田久雄他 1987『鳥取県埋蔵文化財シリーズ1 鳥取県の古墳』鳥取県埋蔵文化財センター
野田久雄他 1987『鳥取県埋蔵文化財シリーズ2 弥生時代の鳥取県』鳥取県埋蔵文化財センター
野津弘雄他1999『安来市誌』上巻 通史編 安来市
*引用・参考文献の内、報告書の記載については紙面の都合で割愛した。

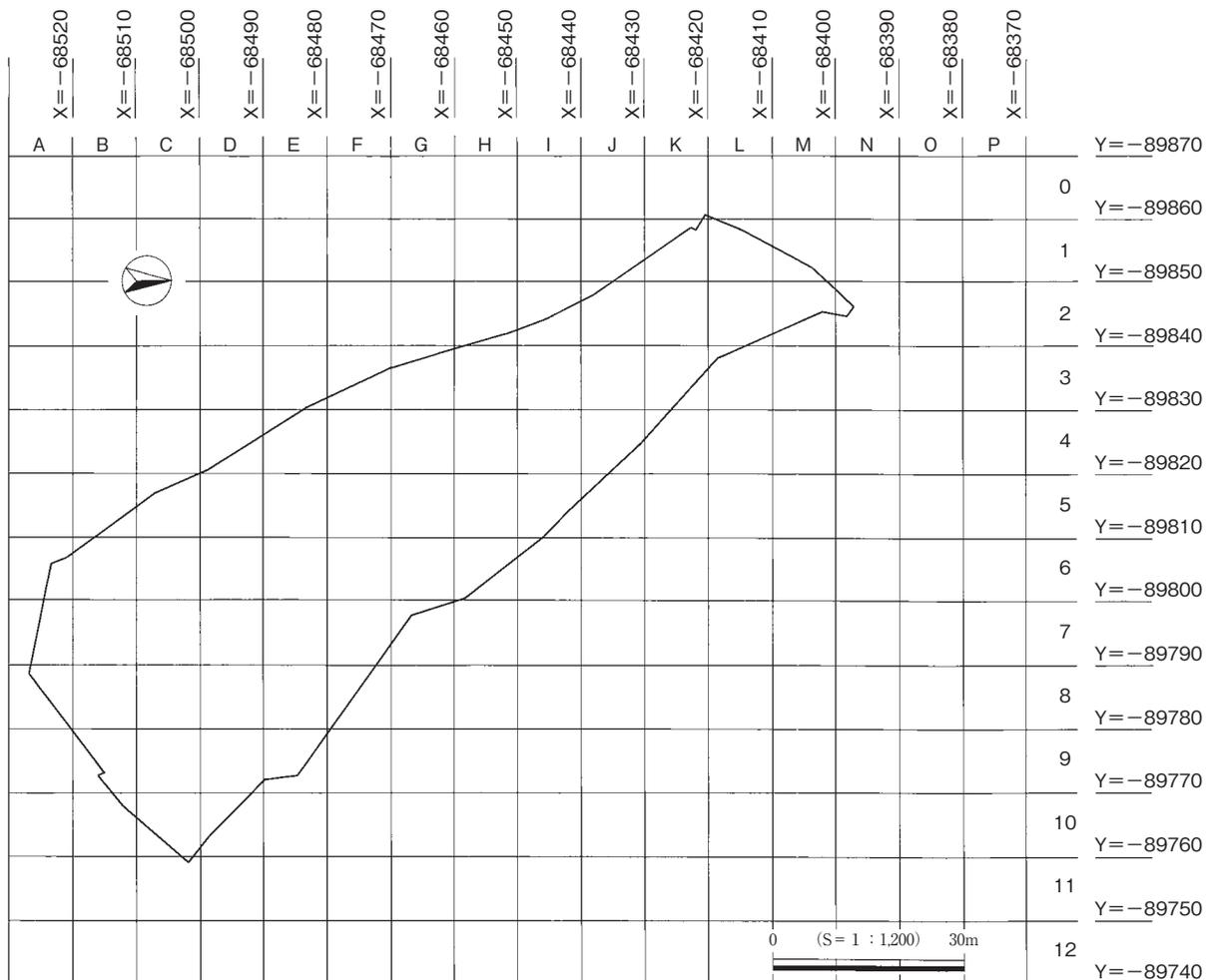
第Ⅲ章 調査の概要

第1節 測量方眼の設定と調査の方法 (第5図)

調査は前述のように道路改良工事に伴うものであり、従って対象範囲は道路建設により地下の埋蔵文化財が破壊される部分4,800㎡を対象とした(第5図)。

調査に先立ち、遺跡の地理的位置を把握し、遺構測量の便宜を図るために調査区内を網羅する測量方眼を設定した。すなわち調査区周辺の世界測地系：公共基準点を基に既往の工事用杭(FT20-1-2)に座標(X: -68523.104 Y: -89807.686)を持たせ、これをもとに平面直角座標系に基づいた10m間隔の測量方眼を調査区上に設定した。表記方法については、南から北に向かってはアルファベット(A・B…),西から東に向かっては算用数字(0・1・2…)を用い、各グリッドはアルファベットと算用数字を併記した。

事前協議により調査時に生じる排土を場内処理することとしたため、調査は中央谷部から行い、調査終了後はその部分に丘陵斜面部の排土を仮置きすることとした。ただし、これはあくまで便宜上のことであり、調査の進行や遺構の性格などに影響することのないように努めた。掘削は表土を重機で



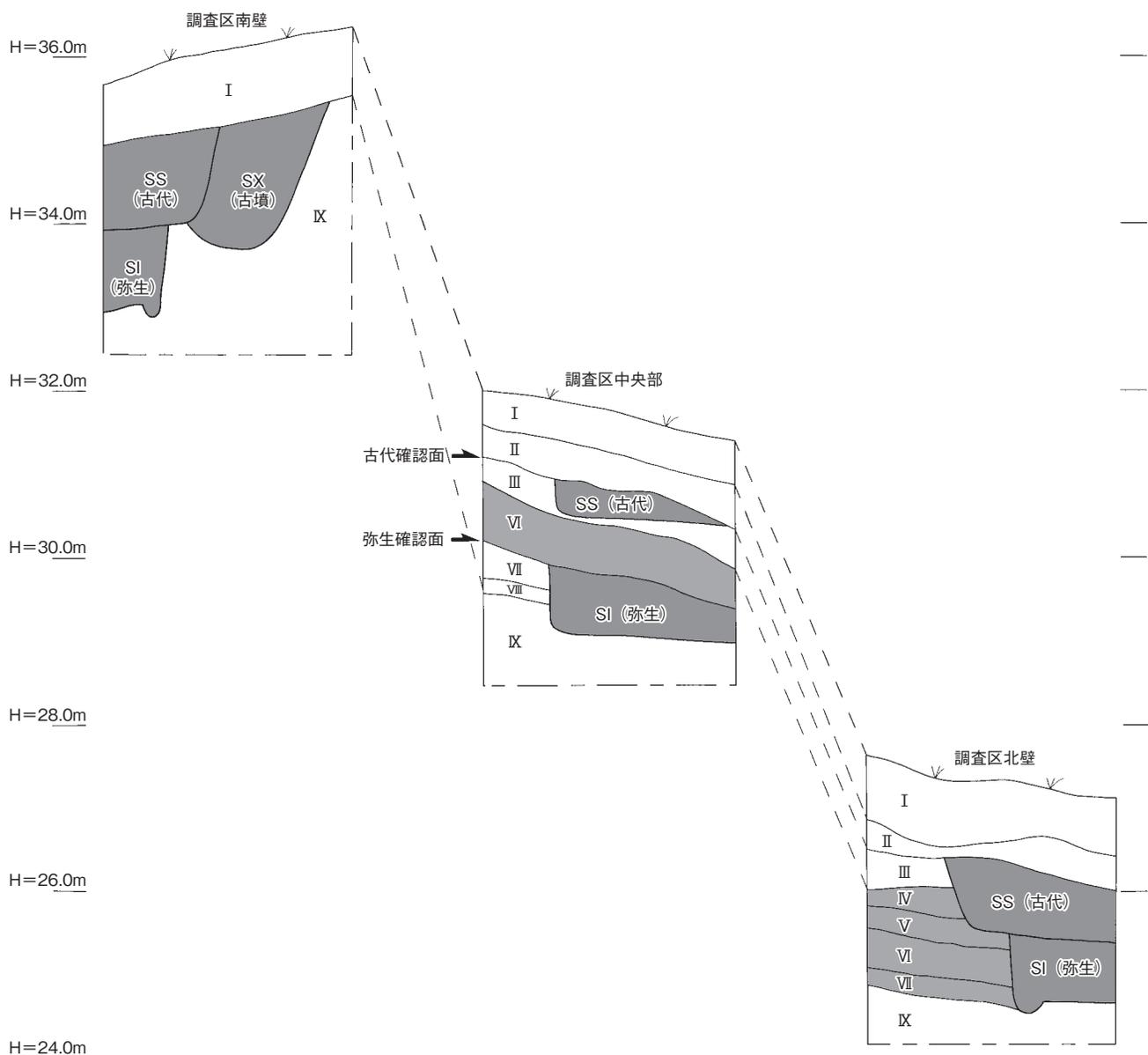
第5図 調査区測量方眼設定図

除去した後、包含層は人力で行った。図面記録に関しては、平面図の作成および、出土遺物の取り上げはトータルステーションを用い、断面図は手測りで行った。写真撮影は一眼レフカメラによるリバーサルフィルム、白黒フィルム、補助的にデジタルカメラを使用した。

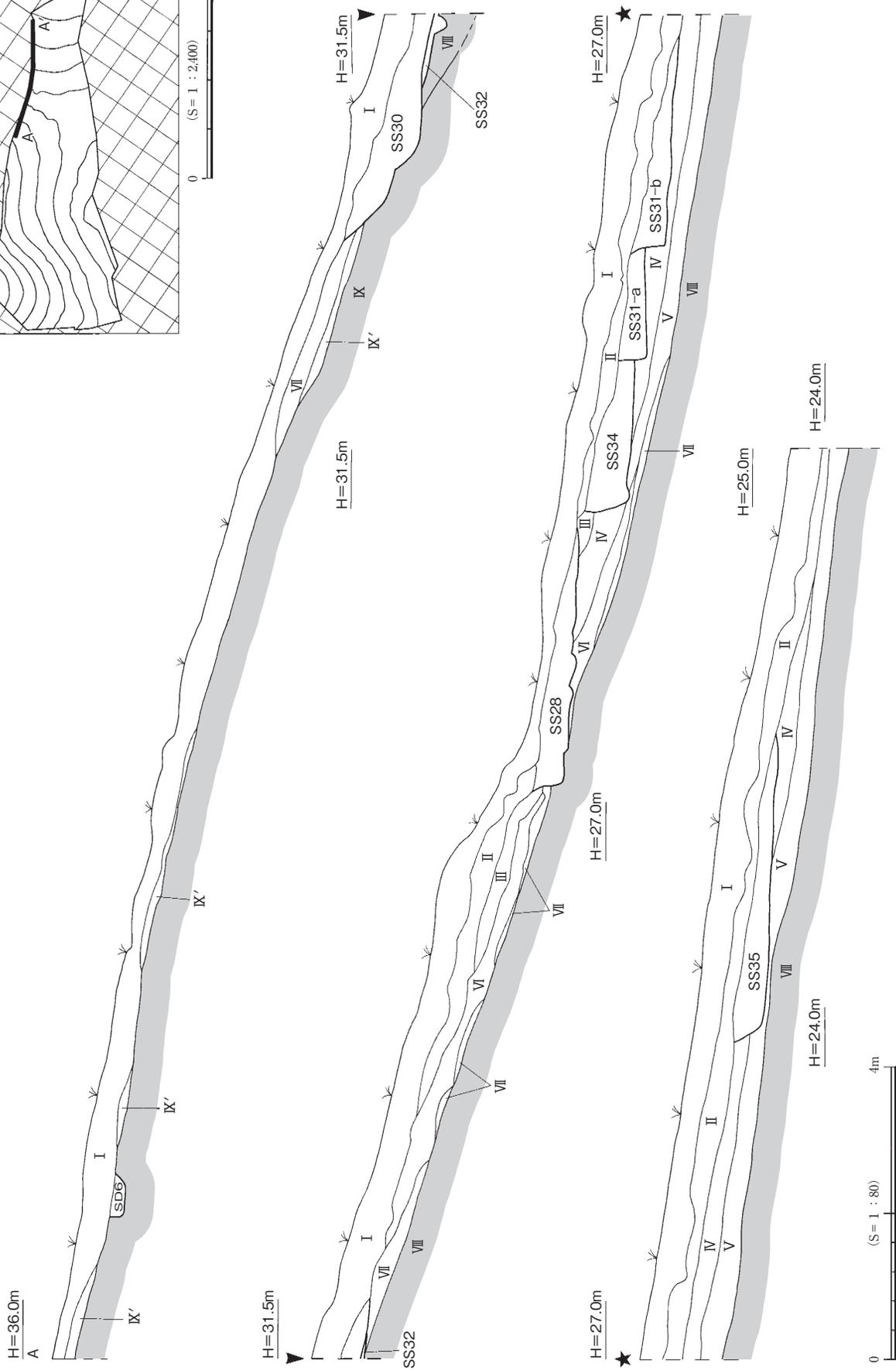
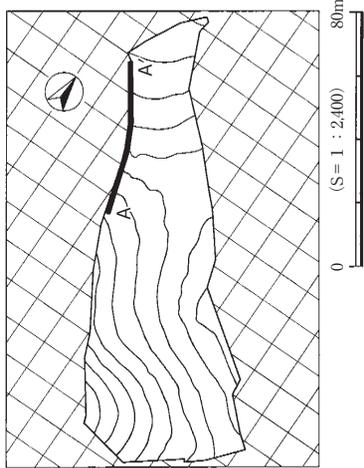
第2節 土層堆積状況（第6～9図）

境内海道西遺跡は、地勢的には法勝寺川左岸の南北方向に延びる丘陵の先端部付近に位置している。調査前の状況は標高22～46mの山林で、南側と中央部の小尾根二筋とそれに挟まれた小支谷からなる。従って、丘陵頂部と谷壁部では埋土の堆積状況が異なる（第6図）。調査地内の土は尾根部から谷部にかけて緩やかに堆積しており、谷にかけて互層状に厚かったほかは、比較的薄いものであった。

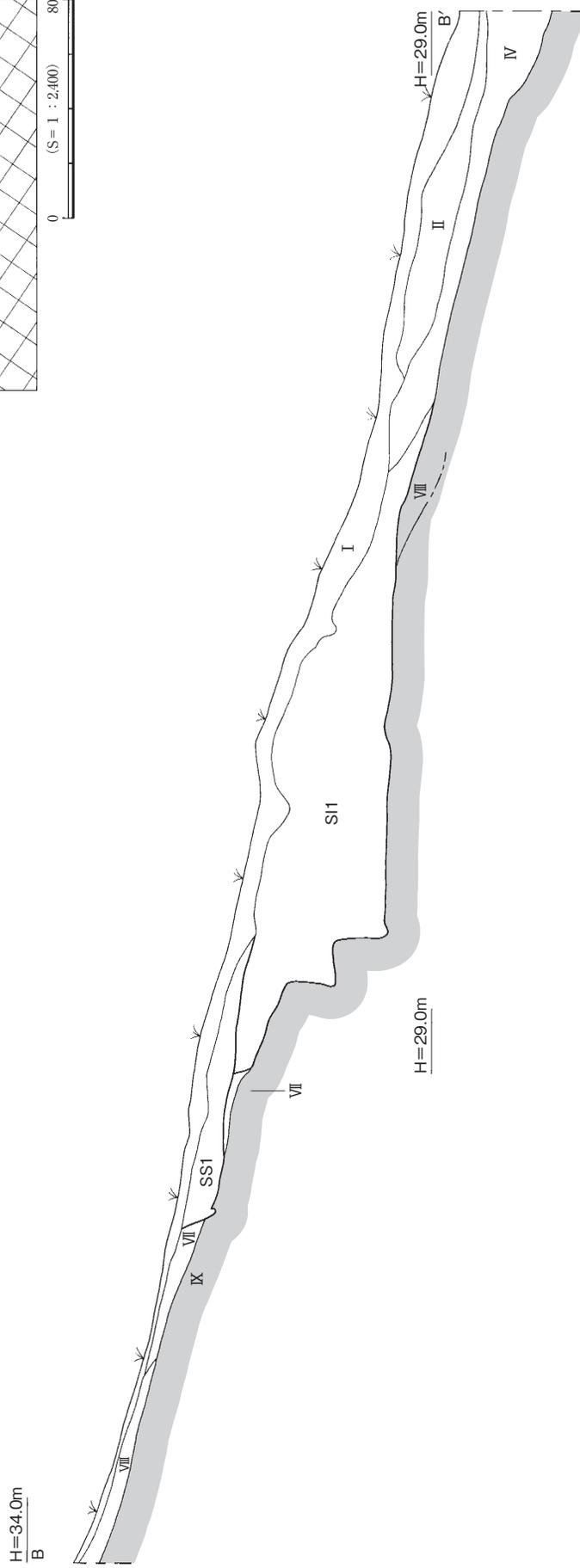
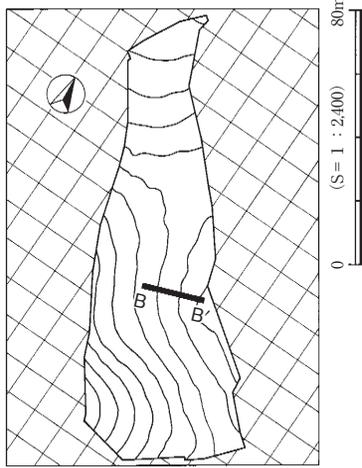
すなわち、土層断面の観察によれば、調査区南壁などの丘陵部では厚さ40cm程堆積する表土下は地山のソフトローム（IX）層で、弥生時代から古代にかけての遺構はこの地山面上に検出された。古墳



第6図 土層断面柱状対比図



第7図 調査区西壁土層断面図



第8図 中央土層断面図

盛り土は後世の削平により失われ、地山に掘り込まれた周溝部分のみが遺存している。これに対し中央部の谷部では厚さ20cm程の表土の下に、厚さ20cm程の暗褐色土の古代遺物包含層（Ⅱ層）が堆積している。古代の遺構確認作業は、この包含層を除去した黒褐色土（Ⅲ）層上面で行った。この部分では段状遺構及び面上には、土師器、須恵器、ミニチュア土器などが出土しており、硬化面も検出されたことから、古代のある時期に使用されたと考えられる。さらに、弥生時代の遺構確認作業は、黒褐色土（Ⅲ）及び黒色土（Ⅵ）を除去した後、暗茶褐色土（Ⅶ）層上面で行った。中央谷部においては、先行しておこなった深堀トレンチの土層断面の観察から、表土下1.5mのⅧ層下で無遺物の黄灰色粘質土（ソフトローム層）を確認し、この上面を最終遺構面とした。ただし、その下層に当該期の遺構が包蔵されている可能性も考えられたために、トレンチを入れて確認作業を行ったが、ローム漸移層（Ⅷ）、ソフトローム（Ⅸ）層中から遺物は出土していない。また、北側谷部では、黒褐色土及び黒色土（Ⅳ～Ⅵ）層の堆積は厚くなる。特にⅣ・Ⅴ層は遺物を多く含んでおり、斜面の再堆積土の可能性が考えられる。弥生時代前期～中期の遺構はこの黒色土中に掘り込まれており、遺構確認作業は非常に困難であった。

各層の概要は、以下のとおりである。

- I層…近現代の堆積土、層厚20cm～50cm程で、斜面の傾斜に沿ってほぼ水平堆積している。表土中の遺物から、この削平は近世以降と考えられるが、良好な中世遺物も僅かながら出土していることから、近世以降の削平以前には中世期の段状遺構なども存在した可能性がある。調査区北壁際では天津運動公園整備時の削平により段状に削平されている。
- Ⅱ層…暗褐色土、締まり、粘性有り。含黒色土、やや砂質、古代包含層。層厚20cm、中央谷部と北側谷部で堆積している。古代遺物を包含する。
- Ⅲ層…黒褐色土、締まり、粘性有り。層厚20cm、中央谷部から北側谷部では本層上面を古代遺構確認面とした。層中に弥生土器を少量含有する。
- Ⅳ層…黒褐色土、締まり、粘性やや有り。層厚15～20cm、北側谷部でのみ確認された。ブロック状に暗褐色土を含有し、弥生土器を非常に多く含む。ブロック状にぼろぼろしており、斜面の再堆積土の可能性はある。
- Ⅴ層…黒色土、締まり、粘性有り。層厚15cm、暗褐色土を少量含有する。Ⅳ層と同様に弥生土器を非常に多く含む。ブロック状で締まりがなく、斜面の再堆積土の可能性はある。
- Ⅵ層…黒色土、締まり、粘性有り。層厚25～40cm、中央谷部では堆積が厚くなる。
- Ⅶ層…暗茶褐色土、締まり、粘性強。層厚20cm、黒色土を多く含む。
- Ⅷ層…ローム漸移層。暗茶褐色土から茶褐色土を呈し、締まり、粘性が強い。層厚10cmを測り、谷部での堆積である。
- Ⅸ層…ソフトローム層。黄褐色土、締まり、粘性有り。丘陵斜面部では表土直下が本層となる。

第Ⅳ章 検出した遺構と遺物

前述のように、境内海道西遺跡は法勝寺川沿いの丘陵上に位置する遺跡で、一般国道180号（南部バイパス）道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査により発見された。

境内海道西遺跡は、法勝寺川中流域左岸の標高22～46mの丘陵斜面に立地している。遺跡周辺域の丘陵上には境矢石遺跡、境北井塔遺跡などの集落が存在しており、斜面に段状遺構による平坦面を設けた上で、建物を構築するタイプの集落が発見されている。また、隣接する福成早里遺跡では、急斜面域に弥生時代から奈良時代にかけての竪穴建物や段状遺構が構築されており、同様の遺構が今回の調査地点に続く様相を見せている。遺跡を含む丘陵一帯は早里古墳群の包蔵地内に位置しており、福成早里遺跡においても、早里14～16号墳、福成早里横穴墓1基などの古墳が発見されている。今回の調査に際して、試掘調査の段階でも古墳周溝が確認されたことから、当該遺跡地に古墳や集落が存在するであろうことは当然予想された。

それを裏付けるように、今回の調査では、早里17～20号墳の4基の円墳の他、縄文時代の陥穴、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての竪穴建物や段状遺構、古墳時代中期後半から後期にかけての円墳、奈良・平安時代の掘立柱建物や段状遺構などが発見された。

遺跡からは土師器、須恵器、陶磁器、金属製品、石製品、土製品などの遺物が出土した。中でも、古墳時代中期の円墳、早里17・18号墳の周溝からは供献土器が良好な状態で出土している。

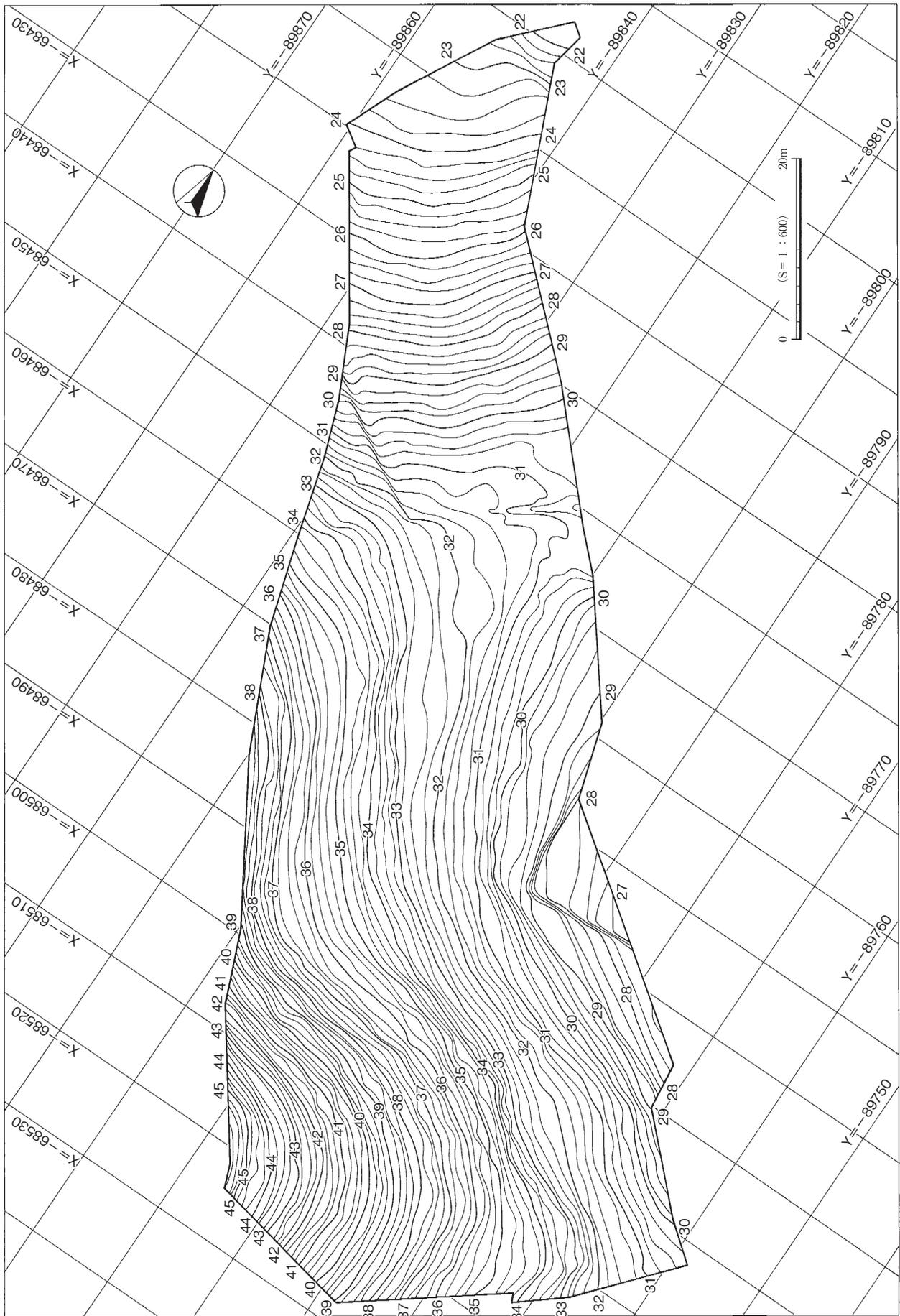
以下に各時代ごとにその詳細を述べていくことにする、なお同一地点に重層的に検出された複数の遺構については、遺構解釈の煩雑さを避けるため帰属時期がそれ以降の遺構も同一項に述べている。

第1節 縄文時代

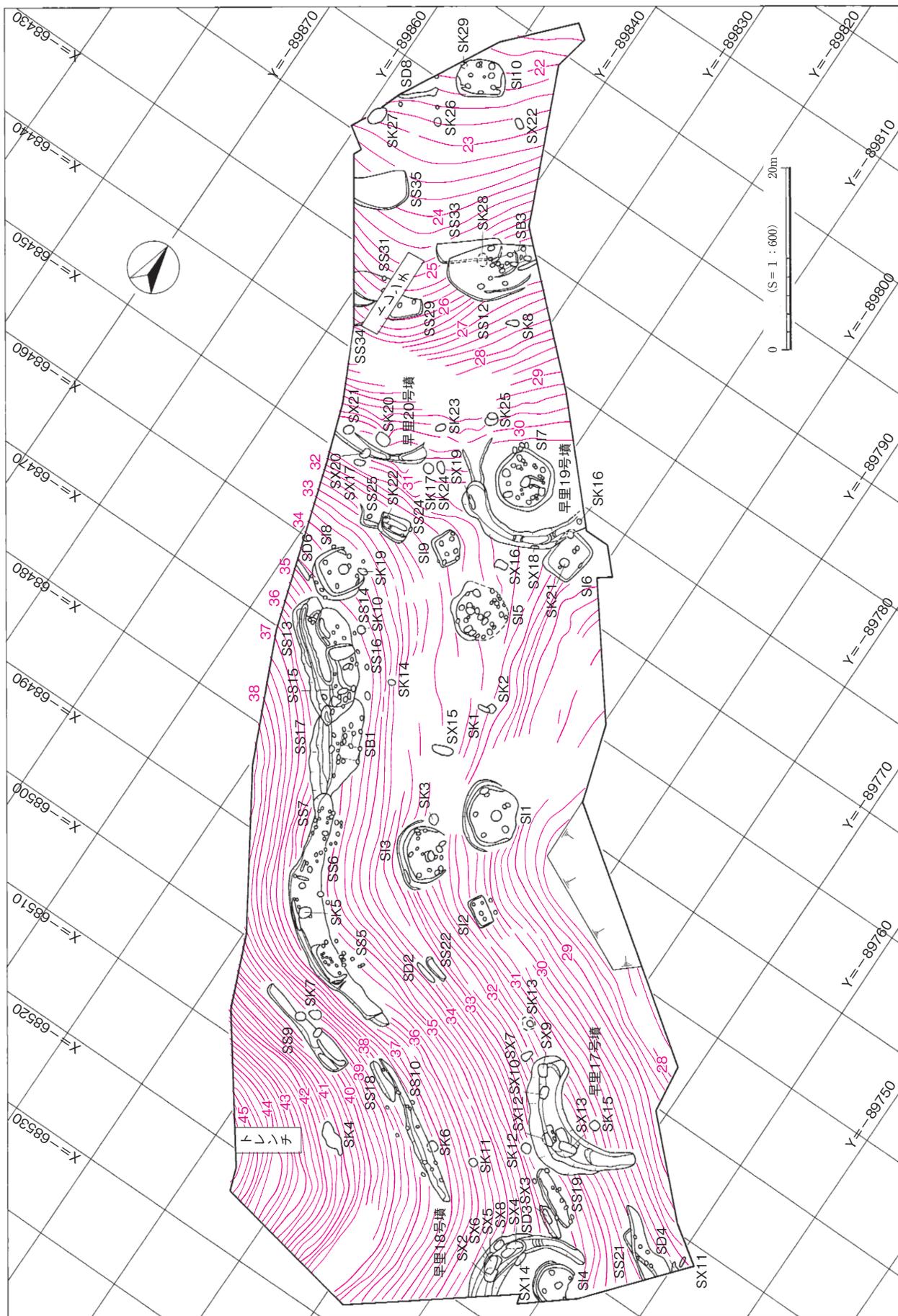
縄文時代の遺跡の概要（第10図）

今回の調査では、地山面上から縄文時代に帰属する陥穴13基が確認された。遺構は調査区の全域に亘って検出されたが、その中でも分布状況からいくつかの群に分けられる。すなわち南西―北東方向に張り出した尾根筋に列状に掘り込まれる群（SK7・11・12）と、北側の谷筋に列状に掘り込まれる群（SK17・22・26・28・29）、中央部谷壁斜面の等高線にそって掘り込まれる群（SK2・3・21）、尾根筋の等高線に沿って掘り込まれる群（SK10・14）である。

形状については、平面形はすべて楕円形を呈し、断面形は垂直形（SK10・15・22・29）、外傾形（SK2・7・21・28）、外反形（SK14）、袋形（SK17）、二段掘形（SK3・12・26）がある。付随施設については、底面ピットが設けられるものが3基（SK7・14・28）ある。埋土については、ある程度埋没した段階において、掘り直しなど再利用されたものが見られる。以下、個別に詳細を述べることとする。



第9図 調査前地形測量図



第10図 調査後地形測量図

陥穴

SK2 (第11図)

位置 G-5グリッド、南西—北東方向に張り出した支尾根南東側の上部谷壁斜面に検出された。上面はSK1により削平される。形状から陥穴と考えられる(第11図)。南側13.8mにSK3が、西側11.5mにSK14が存在する。確認面上の標高は31.3mを測る。

形状 平面形は上縁部が楕円形、底面は円形を呈し、長軸方位はN-70°-Eを指す。断面形は概ね箱型を呈するが、中位から上位はやや漏斗型に開く。底面は平坦である。規模は上面で長径122cm、短径110cm、底面で直径50cm、確認面からの深さは135cmを測る。

埋土 下層に黄褐色土、上層に暗褐色土が堆積しており、黄褐色土が堆積した段階で再び使用され、その後上層の暗褐色土(①~③層)は一気に埋没した可能性がある。

遺物 本址から遺物は出土していない。

時期 形状から、本址は縄文時代頃の陥穴と考えられる。

SK3 (第12図)

位置 F-6グリッド、中央の南西—北東方向の谷頭凹地に検出された。上層にSS1が構築される。形状から陥穴と考えられる(第12図)。北側13.8mにSK2が、北西側6.5mにSK10が存在する。確認面上の標高は31.7mを測る。

形状 平面形は上縁部、底面共に楕円形を呈し、長軸方位はN-8°-Wを指す。断面形は概ね箱型を呈するが、底面から50cmの所に段を持つ。壁面は一部オーバーハングする。底面は平坦である。規模は上面で長径132cm、短径120cm、底面で長径85cm、短径70cm、確認面からの深さは170cmを測る。

埋土 黄褐色土及び黒色土を主体とし、概ね自然埋没の状況を呈するが、段下層の黄褐色土(⑦層)が堆積した段階で再利用された可能性が考えられる。

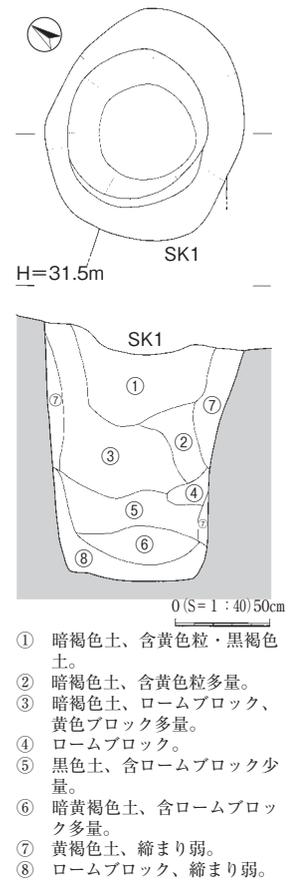
遺物 本址から遺物は出土していない。

時期 形状から、本址は縄文時代頃の陥穴と考えられる。

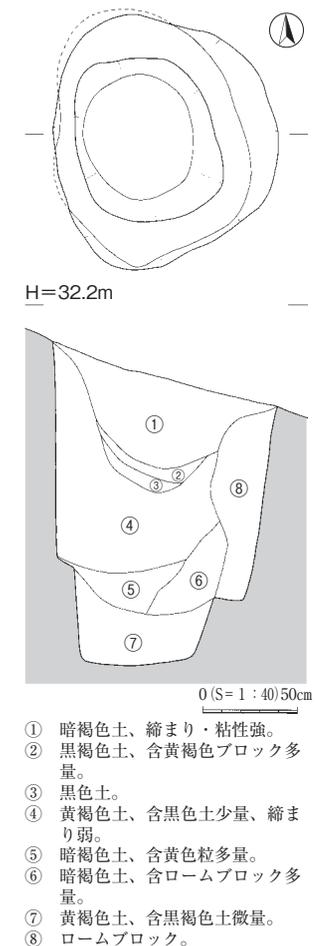
SK7 (第13図)

位置 C-6グリッド、南西—北東方向に張り出した支尾根北東側の谷頭急斜面に検出された。上層にSS9が構築される。上面は木の根により攪乱されているが、形状から陥穴と考えられる(第13図)。北側25.5mにSK3が存在する。確認面上の標高は38.7mを測る。

形状 上面が攪乱されているが、残存部での平面形は上縁部、底面共に隅丸長方形を呈し、長軸方位はN-50°-Eを指す。断面形は概ね箱型を呈する。底面は平坦であり、中央部に直径23cm、深さ22cmの円形の小ピットが掘り込



第11図 SK2



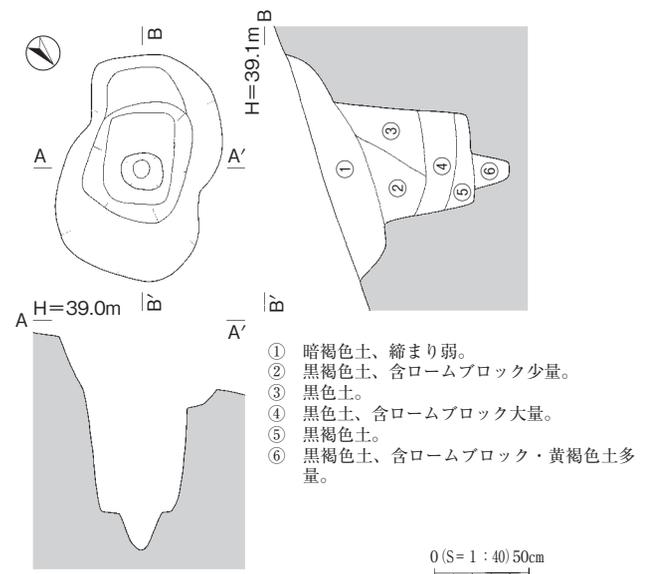
第12図 SK3

まれる。遺存部での規模は上面で長軸64cm、短軸53cm、底面で長軸48cm、短軸36cm、確認面からの深さは85cmを測る。

埋土 黒色土を主体とし、概ね自然埋没の状況を呈する。上層の暗褐色土（①層）は締まりがなく、後世の堆積と考えられる。

遺物 本址から遺物は出土していない。

時期 形状から、本址は縄文時代頃の陥穴と考えられる。



第13図 SK7

SK10 (第14図)

位置 G-4グリッド、南西—北東方向に張り出した支尾根南東頂部斜面に検出された。付近は後世のSS14により削平されて平坦面が作られている。形状から陥穴と考えられる（第14図）。南東側6.5mにSK14が存在する。確認面上の標高は34.5mを測る。

形状 平面形は上縁部が楕円形、底面は円形を呈し、長軸方位はN-51°-Wを指す。断面形は概ね箱型を呈するが、上縁部は崩落により広がっている。底面は平坦である。規模は上面で長径78cm、短径65cm、底面は直径45cm、確認面からの深さは135cmを測る。

埋土 下層に黒褐色土、上層に黒色土が堆積し、概ね自然埋没の状況を呈する。

遺物 本址から遺物は出土していない。

時期 形状から、本址は縄文時代頃の陥穴と考えられる。

SK11 (第15図)

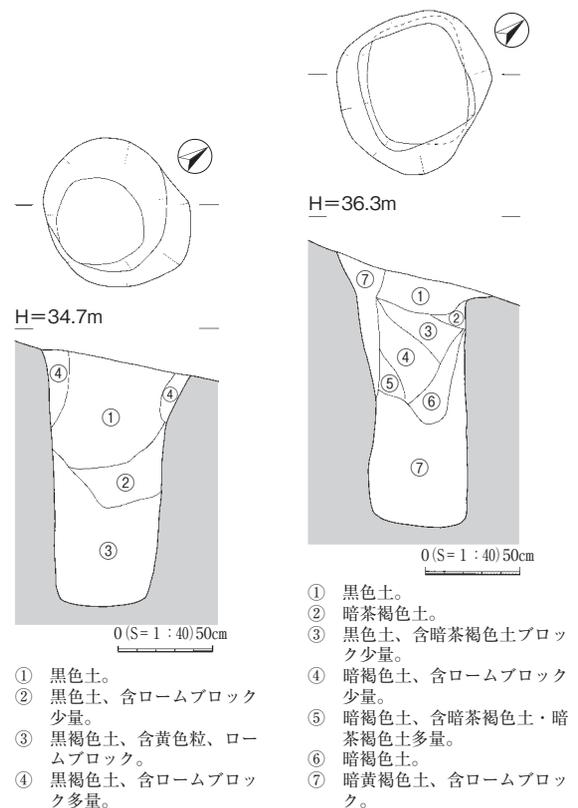
位置 C-8グリッド、南西—北東方向に張り出した支尾根頂部斜面に検出された。形状から陥穴と考えられる（第15図）。北東側6.5mにSK12が存在する。確認面上の標高は36.0mを測る。

形状 平面形は上縁部、底面共に隅丸長方形を呈し長軸方位はN-65°-Wを指す。断面形は概ね箱型を呈するが、底面付近は一部斜面上方にオーバーハングしている。上縁部は崩落により広がっている。底面は平坦である。規模は上面で長軸60cm、短径55cm、底面は長軸56cm、短軸52cm、確認面からの深さは146cmを測る。

埋土 下層の暗黄褐色土（⑦層）が一気に堆積した後、上層は概ね自然埋没の状況を呈する。

遺物 本址から遺物は出土していない。

時期 形状から、本址は縄文時代頃の陥穴と考えられる。



第14図 SK10

第15図 SK11

SK12 (第16図)

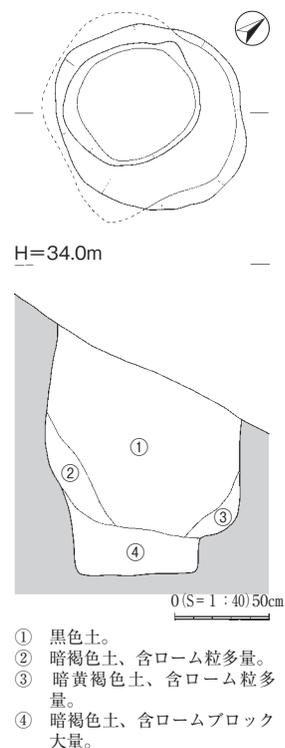
位置 C-8グリッド、南西—北東方向に張り出した支尾根頂部斜面に検出された。早里17号墳に近接しており、上面は削平された可能性がある。形状から陥穴と考えられる(第16図)。北側13.8mにSK2が、南西側6.5mにSK11が存在する。確認面上の標高は33.3mを測る。

形状 平面形は上縁部円形、底面は楕円形を呈し、長軸方位はN-8°-Eを指す。断面形は概ね箱型を呈するが、底面から45cmの所に段を持つ。斜面上方の壁面は一部オーバーハングする。底面は平坦である。規模は上面で直径100cm、底面で長径58cm、短径54cm、確認面からの深さは85cmを測る。

埋土 下層に暗褐色土、上層に黒色土を主体とし、概ね自然埋没の状況を呈する。

遺物 本址から遺物は出土していない。

時期 形状から、本址は縄文時代頃の陥穴と考えられる。



第16図 SK12

SK14 (第17図)

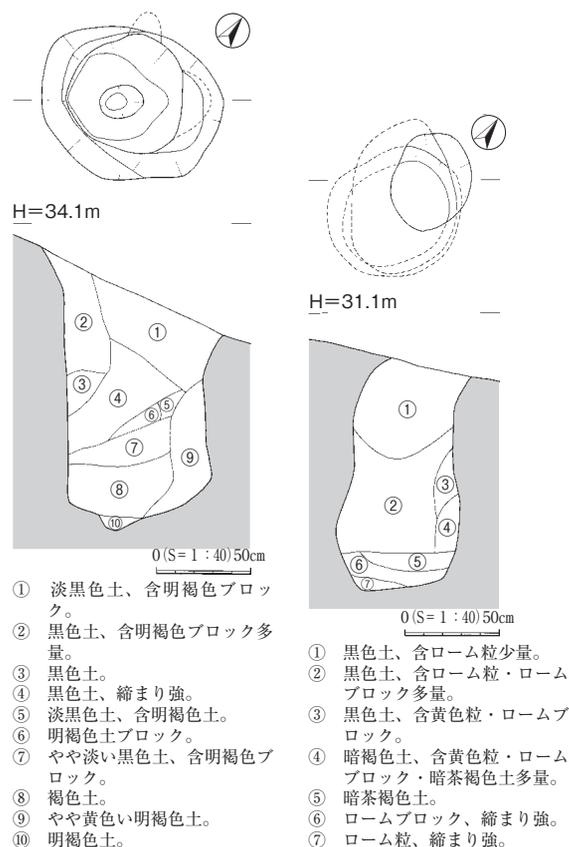
位置 G-4グリッド、南西—北東方向に張り出した支尾根南東側頂部斜面に検出された(第17図)。付近は後世のSS13~17により削平され平坦面が作られている。形状から陥穴と考えられる。北西側6.5mにSK10が存在する。確認面上の標高は33.7mを測る。

形状 平面形は上縁部、底面共に楕円形を呈し、長軸方位はN-88°-Wを指す。断面形は概ね箱型を呈するが東側が一部オーバーハングし、上縁部は漏斗状に広がっている。斜面上方側の壁面中位に幅18cm、奥行き20cmの掘り込みが穿たれている。底面は平坦で、中央部に長径24cm、短径18cm、深さ8cmの楕円形の小ピットが掘り込まれる。規模は上面で長径100cm、短径84cm、底面は長径48cm、短径42cm、確認面からの深さは135cmを測る。

埋土 下層に褐色土、上層に黒色土が堆積し、概ね自然埋没の状況を呈する。

遺物 本址から遺物は出土していない。

時期 形状から、本址は縄文時代頃の陥穴と考えられる。



- ① 淡黒色土、含明褐色ブロック。
- ② 黒色土、含明褐色ブロック多量。
- ③ 黒色土。
- ④ 黒色土、縮まり強。
- ⑤ 淡黒色土、含明褐色土。
- ⑥ 明褐色土ブロック。
- ⑦ やや淡い黒色土、含明褐色ブロック。
- ⑧ 褐色土。
- ⑨ やや黄色い明褐色土。
- ⑩ 明褐色土。

第17図 SK14

SK17 (第18図)

位置 I-3グリッド、南西—北東方向に張り出した支尾根北側谷頭凹地に検出された。形状から陥穴と考えられる(第18図)。北側4.5mにSK23が存在する。確認面上の標高は30.9mを測る。

形状 平面形は上縁部、底面共に楕円形を呈し、長軸方位はN-24°-Eを指す。断面形は中位でやや膨らむ形状を呈し、西側は中位で底面より23cm程広がる。規模は上面で長径54cm、短径42cm、下位の広がった部分で長径75cm、短径65cm、底面で長径58cm、短径54cm、確認面からの深さは

- ① 黒色土、含ローム粒少量。
- ② 黒色土、含ローム粒・ロームブロック多量。
- ③ 黒色土、含黄色粒・ロームブロック。
- ④ 暗褐色土、含黄色粒・ロームブロック・暗茶褐色土多量。
- ⑤ 暗茶褐色土。
- ⑥ ロームブロック、縮まり強。
- ⑦ ローム粒、縮まり強。

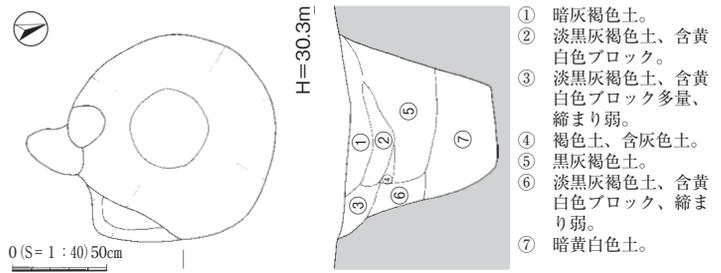
第18図 SK17

124cmを測る。

埋土 下層に黄褐色ローム層、上層に黒色土が堆積し、底面付近の堆積土（⑤～⑦層）が非常に締まっていることから本層が堆積した段階で再利用された可能性が考えられる。

遺物 本址から遺物は出土していない。

時期 形状から、本址は縄文時代頃の陥穴と考えられる。



第19図 SK21

SK21 (第19図)

位置 I-5グリッド、南西—北東方向に張り出した支尾根頂部斜面に検出された。上面はSI6により削平される。形状から陥穴と考えられる（第19図）。南側18.0mにSK2が存在する。確認面上の標高は30.2mを測る。

形状 平面形は上縁部底面共に円形、断面形は逆台形を呈する。底面は平坦である。規模は上面で直径108cm、底面で直径40cm、確認面からの深さは80cmを測る。

埋土 下層に暗黄白色土が堆積するが、上層は木の根による攪乱を受けている。

遺物 本址から遺物は出土していない。

時期 形状から、本址は縄文時代頃の陥穴と考えられる。

SK22 (第20図)

位置 H-3グリッド、南西—北東方向に張り出した支尾根北東側の谷頭斜面に検出された。上面をSS24により切られる。形状から陥穴と考えられる（第20図）。南側12.5mにSK10が存在する。確認面上の標高は31.4mを測る。

形状 平面形は上縁部、底面共に楕円形を呈し、長軸方位はN-64°-Eを指す。断面形は概ね箱型を呈する。底面は平坦である。規模は上面で長径92cm、短径68cm、底面で長径48cm、短径45cm、確認面からの深さは105cmを測る。

埋土 黄褐色土及び暗褐色土を主体とし、概ね自然埋没の状況を呈する。

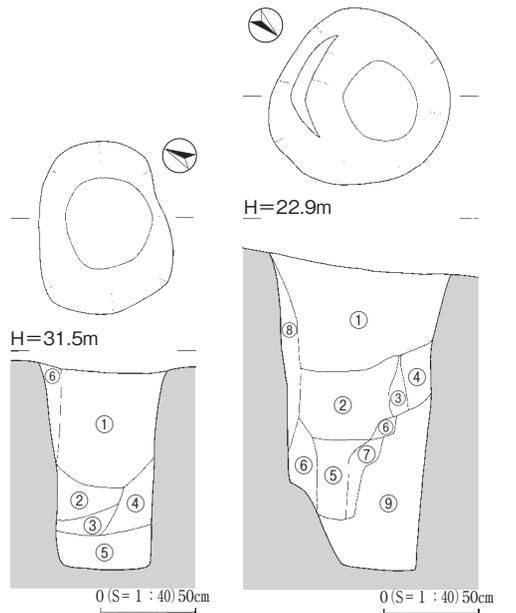
遺物 本址から遺物は出土していない。

時期 形状から、本址は縄文時代頃の陥穴と考えられる。

SK26 (第21図)

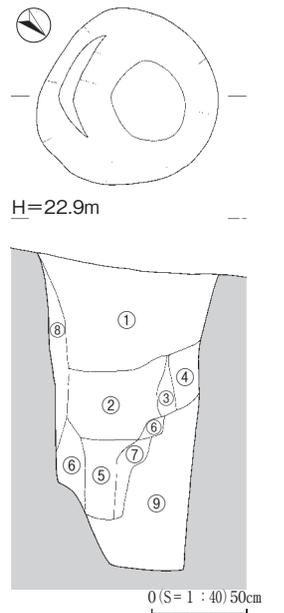
位置 L-1グリッド、調査区北側の丘陵麓部緩斜面に検出された。形状から陥穴と考えられる（第21図）。北側7.2mにSK29が、南東側16.0mにSK28が存在する。確認面上の標高は22.7mを測る。

形状 平面形は上縁部、底面共に円形を呈する。断面形は概ね



- ① 暗褐色土、含ローム粒少量・黒褐色土多量。
- ② 黄褐色土、含ロームブロック多量・暗褐色土少量。
- ③ 暗黄褐色土、含暗褐色土多量。
- ④ 黒褐色土、含ロームブロック多量。
- ⑤ 暗褐色土、含黄褐色ブロック多量。
- ⑥ 暗黄褐色土、含黄褐色ブロック少量。

第20図 SK22



- ① 黒褐色土、含暗褐色土、締まり弱。
- ② 黒色土、締まり強。
- ③ 暗褐色土、含ローム粒多量。
- ④ 暗茶褐色土、含ロームブロック大量、締まり弱。
- ⑤ 黒色土、含褐色ブロック多量。
- ⑥ 黒色土、含褐色ブロック、締まり強。
- ⑦ やや褐色を帯びた黒色土、含褐色ブロック。
- ⑧ 暗黄褐色土、含ロームブロック多量。
- ⑨ ロームブロック。

第21図 SK26

箱型を呈するが、斜面上方側の底面から42cmの所に幅8cmの段を持つ。底面は平坦である。規模は上面で直径94cm、底面で直径40cm、確認面からの深さは165cmを測る。

埋土 下層に黄褐色土、上層に黒褐色土及び黒色土が堆積し、概ね自然埋没の状況を呈する。

遺物 本址から遺物は出土していない。

時期 形状から、本址は縄文時代頃の陥穴と考えられる。

SK28 (第22図)

位置 K-2・3グリッド、調査区北側の下部谷壁緩斜面に検出された。付近は後世のSS12・33により削平されて平坦面が作られている。形状から陥穴と考えられる(第22図)。北西側16.0mにSK26が存在する。確認面上の標高は25.6mを測る。

形状 平面形は上縁部、底面共に楕円形を呈し、長軸方位はN-87°-Wを指す。断面形は概ね逆台形を呈する。底面は平坦で、中央部の主軸方向に沿って長径14cm、短径8cm、深さ25cmの楕円形の小ピットと直径5cm、深さ16cmの円形の小ピットが掘り込まれる。規模は上面で長径144cm、短径117cm、底面は長径60cm、短径53cm、確認面からの深さは180cmを測る。

埋土 下層にローム混じりの黄褐色土、上層に黒色土が堆積し、概ね自然埋没の状況を呈する。

遺物 本址から遺物は出土していない。

時期 形状から、本址は縄文時代頃の陥穴と考えられる。

SK29 (第23図)

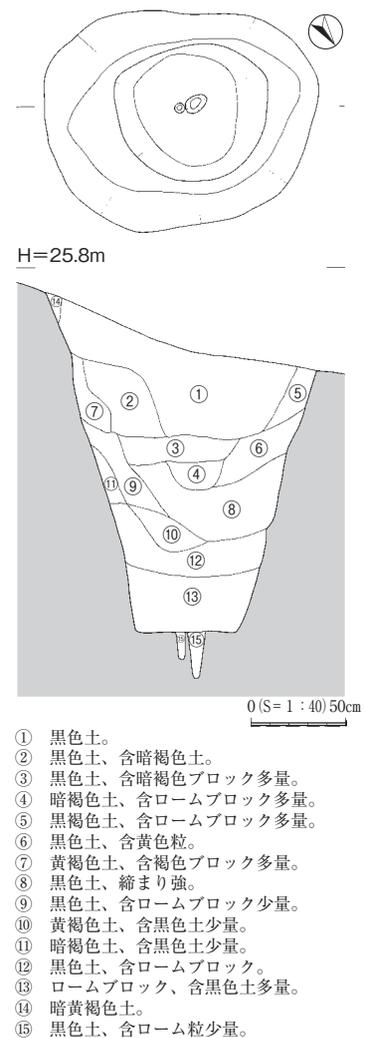
位置 M-1グリッド、調査区北側の丘陵麓部緩斜面に検出された。本址はSI10の堀方検出中に発見されたもので、上面は後世のSI10により削平され、貼床が構築されている。形状から陥穴と考えられる(第23図)。南側7.2mにSK26が存在する。確認面上の標高は21.7mを測る。

形状 平面形は上縁部、底面共に楕円形を呈し、長軸方位はN-46°-Eを指す。断面形は概ね逆台形を呈する。底面は平坦である。規模は上面で長径98cm、短径84cm、底面は長径44cm、短径35cm、確認面からの深さは135cmを測る。

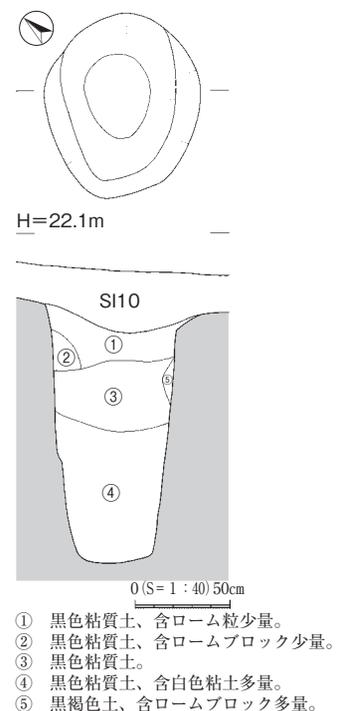
埋土 黒色土を主体とし、湧水の影響を受けて粘性が非常に強い。

遺物 本址から遺物は出土していない。

時期 形状から、本址は縄文時代頃の陥穴と考えられる。



第22図 SK28



第23図 SK29

第2節 弥生時代～古墳時代前期初頭

弥生時代～古墳時代前期初頭の遺跡の概要（第10図）

今回の調査では、当該期の遺構が遺跡の中心時期であり、竪穴建物7棟、段状遺構21基、掘立柱建物1棟、貯蔵穴2基、土壙墓1基、土坑8基、溝状遺構2条が丘陵斜面全域に検出されている。时期的な分布傾向を見ると、弥生時代前期～中期にかけての遺構は調査区北側谷部に、弥生時代後期の遺構は丘陵南東側にそれぞれ集中している。本節では、弥生時代前期～中期と弥生時代後期～古墳時代前期初頭の遺構に分けて以下に述べることとする。

なお、本来的には古墳時代前期初頭の遺構に関しては別項を設けるべきであるが、今回検出された当該期の遺構は弥生時代終末期から継続して使用された遺構であり、遺構の性格上区分して述べることが困難であるため古墳時代前期初頭も含め、ここに述べることとする。また、前述のように、同一地点に重層的に検出された複数の遺構については、遺構解釈の煩雑さを避けるため、帰属時期がそれ以降のものについても同一項に述べている。

1. 弥生時代前期～中期の遺構（第10図）

検出された当該期の遺構は段状遺構4基（SS29・31・34・35）、貯蔵穴2基（SK13・15）、土坑2基（SK20・27）である。分布状況を見ると、段状遺構は調査区北側斜面部の西壁際に階段状に展開しており、さらに、調査区外の西側の斜面部に広がっていく様相を呈する。これに対し、貯蔵穴は南側尾根部の標高31.4m付近に等高線にそって2基掘り込まれている。この2基の距離は13mを測り、SK13からは前期中葉の甕が出土している。

出土遺物は壺、甕が主体で、段状遺構が展開する北側斜面に集中して検出された。この地区では、包含層中からも比較的復元可能な遺物が多く出土していることから、調査区外の西側丘陵上にも当該期の遺構が包蔵されている可能性が高い。

1) 段状遺構

SS29・31・34・35（第24図）

位置 J～K-1～2グリッド、調査区北側の下部谷壁の標高27.5m～25.3mの斜面をL字状にカットし、平坦面を作成した段状遺構4基が検出された（第24図）上段のSS29・31・34と下段のSS35はやや空閑地をあけて階段状に構築されている。遺構間に明瞭な新旧関係は認められず、ほぼ同時期の構築と考えられる。以下遺構ごとに個別に述べることとする。

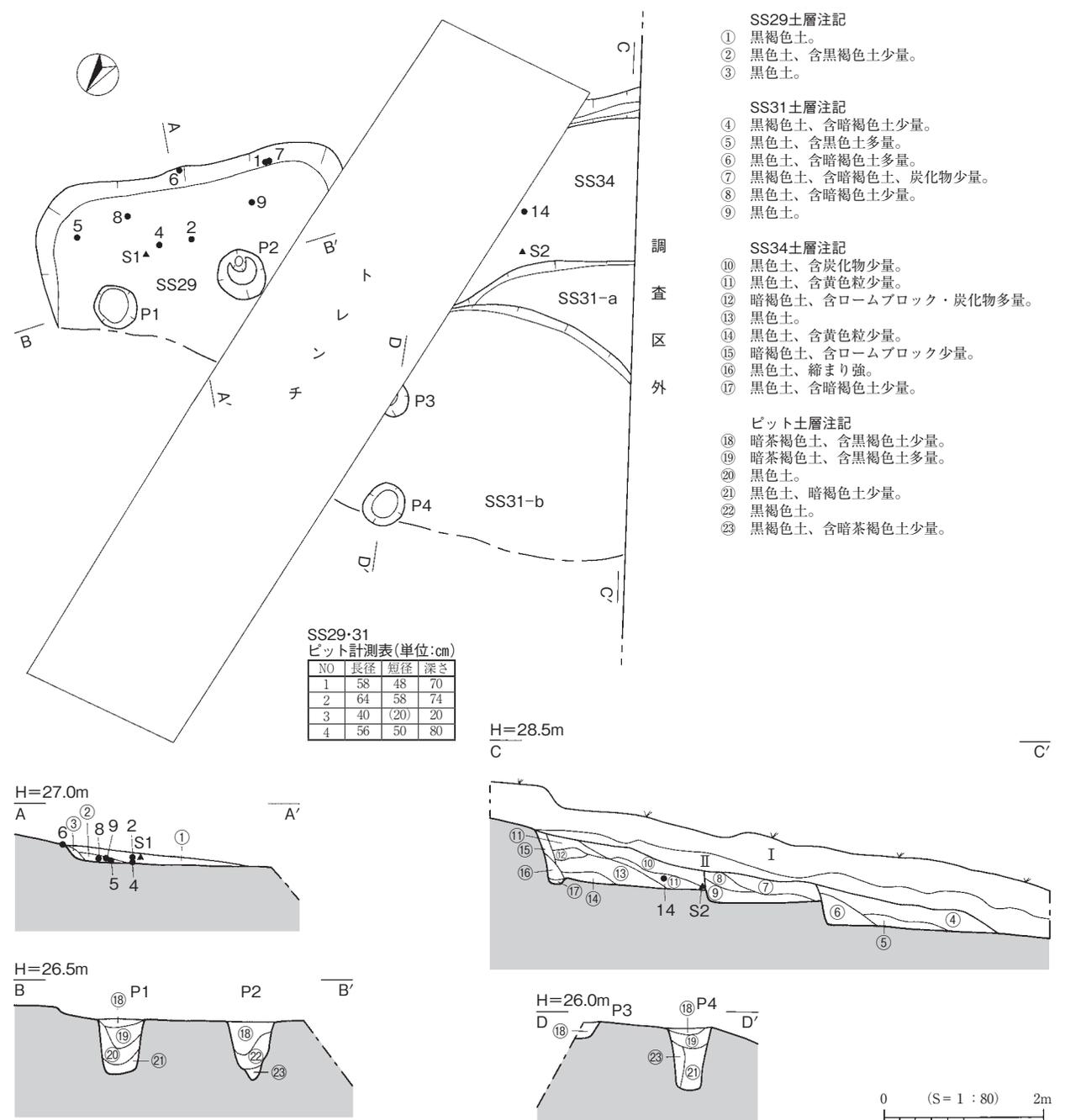
SS29（第24・25図）

形状 I層を除去したところ検出された（第24図）。斜面の高位側のIV・V層をL字状に掘り込んで、平坦面を形成している。東側については、南部町が行った試掘トレンチにより失われている。確認面上の標高は27.5mを測る。平面形は長方形を呈する。傾斜面の等高線に直交する方向を主軸と考えた場合の主軸方位はN-46°-Wである。規模は南北2.5m以上、東西2.0m以上、確認面からの深さは壁際で25cmを測る。壁は開きながら立ち上がり、検出範囲での床面積は3.4㎡を測る。床面はほぼ平坦である。

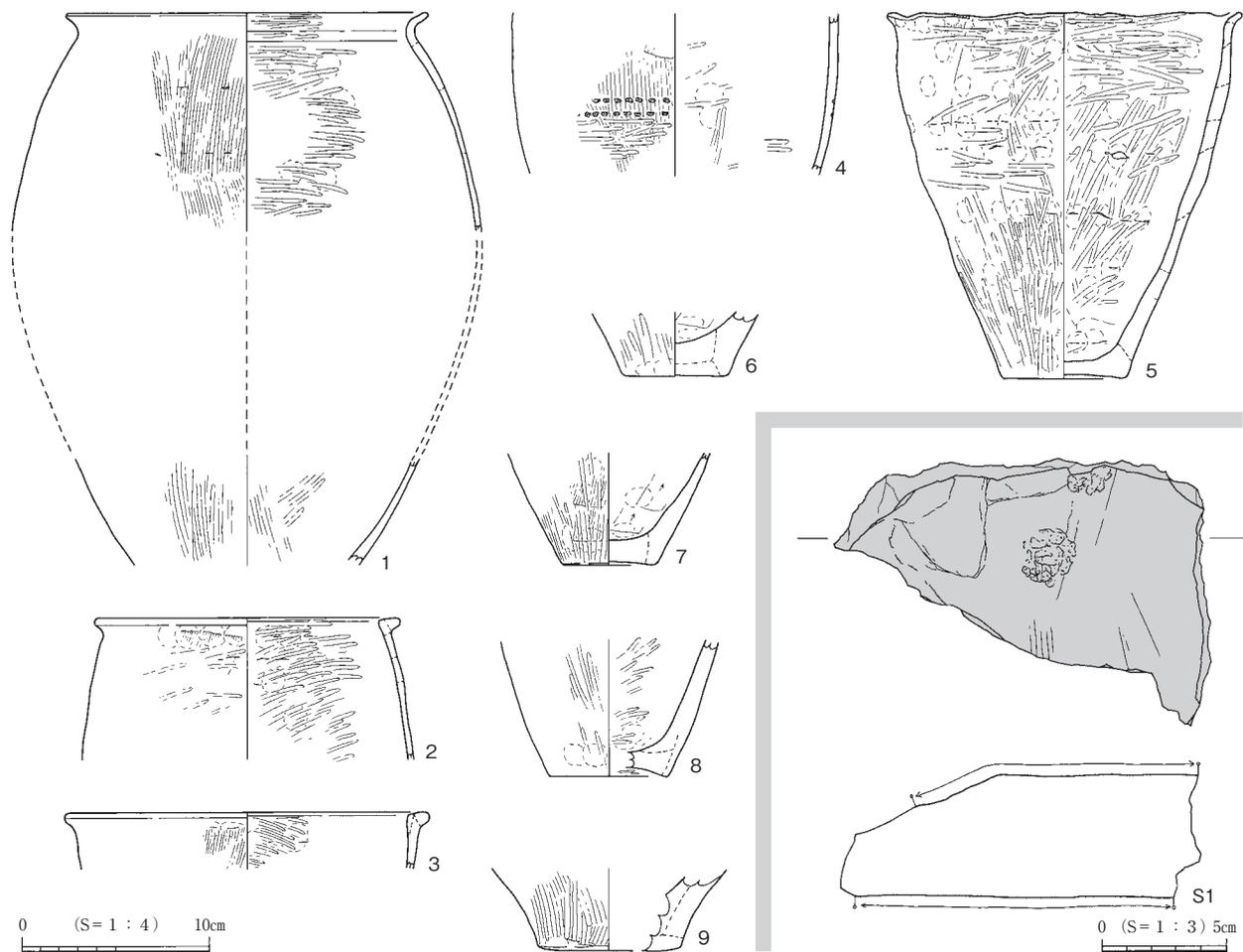
本址に伴うピットはP1～2の2基である。斜面上方の南東壁はほぼ平行している。位置や形状から考えて、支柱穴と考えられる。平面形は円形を呈し、P2は底面中央部に柱痕とみられる直径18cmの小穴が掘り込まれている。柱穴間距離は1.8mである。詳細はピット計測表を参照されたい。

埋土 下層に黒色土、上層に土器を多く含む黒褐色土が堆積し、下層より順次堆積していることから、自然埋没の様相を呈する。

遺物 本址からは弥生時代前期後半から中期中葉にかけての遺物が出土した。このうち図示し得たのは甕9点、台石1点である（第25図）。1は埋土上層出土の弥生時代中期中葉の特徴を持つ甕、口縁部は「く」の字状に屈曲し、胴部は倒卵形を呈する。2・3は前期後半から中期前半の特徴を持つ甕の口縁部である。口縁端部に接して貼付突帯が巡り逆「L」字状を呈する。4は下層出土の甕胴部、中位にヘラ状工具による連続刺突文が2段巡る。5は下層出土の甕、口縁は短く外反し、逆台形を呈する。6～9は甕底部、いずれも平底である。S1は角礫凝灰岩の台石、破片であるが、大型で扁平



第24図 SS29・31・34



第25図 SS29出土遺物

な素材の表裏面に使用による研磨痕が、表面中央部に敲打痕2か所が認められる。全体に廃棄後被熱を受けている。

時期 埋土下層の出土遺物から、本址の時期は弥生時代前期後半頃と考えられる。

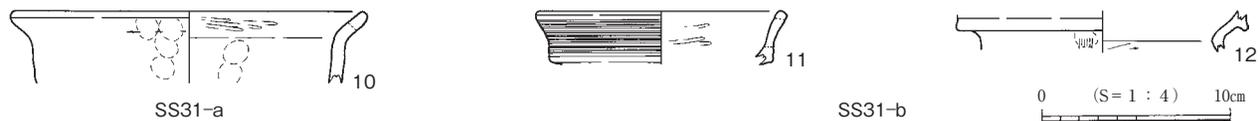
SS31 (第24・26図)

位置 J~K-1~2グリッドの一群の内、下段のJ-1・2グリッドに位置する。この付近にはSS29・31・34が存在するが、このうち本址はSS34を切る。確認面上の標高は26.9mを測る。本址は床面検出段階で、下位側にもう一段の落ち込みが検出された。埋土の観察から新旧二時期の段状遺構であると考える。このため上位の古い遺構をSS31-a、下位の新しい遺構をSS31-bとし、以下に述べることとする。

SS31-a

形状 SS31-bに切られており遺存状態は悪い。西壁側はさらに調査区外に広がる。SS34を掘り込んで、平坦面を形成している。平面形は横長の半円形を呈すると推測される。傾斜面の等高線に直交する方向を主軸と考えた場合の主軸方位はN-40°-Wである。規模は南北1.4m以上、東西2.4m以上、確認面からの深さは壁際で42cmを測る。壁はやや開きながら立ち上がり、検出範囲での床面積は1.7㎡を測る。床面はほぼ平坦である。

埋土 下層に黒色土、上層に黒褐色土が堆積し、下層より順次堆積していることから、自然埋没の



第26図 SS31出土遺物

様相を呈する。

遺物 大半をSS31-bに切られており、本址からの出土遺物は少なく、図示し得たのは甕1点である（第26図-10）。10は埋土下層出土の弥生時代前期後半の甕口縁部、口縁部は緩く外反する。

時期 出土遺物と形状から、本址の時期は弥生時代前期後半以降と考えられる

SS31-b

形状 SS31-aの床面上に検出されたが、出土遺物及び、調査区南壁の土層断面の観察状況からSS31-aを切る新しい時期の段状遺構と考えられる。西壁側はさらに調査区外に広がり、東壁側は南部町の試掘トレンチにより失われている。SS31-aを掘り込んで、平坦面を形成している。平面形は横長の半円形を呈する。斜面下方は削平により失われている。斜面の等高線に直交する方向を主軸と考えた場合の主軸方位はN-14°-Wである。規模は南北3.0m以上、東西3.8m以上、確認面からの深さは壁際で58cmを測る。壁はやや開きながら立ち上がり、検出範囲での床面積は11.0㎡を測る。床面はほぼ平坦である。本址に伴うピットはP3~4の2基である。平面形は円形を呈する。詳細はピット計測表を参照されたい。

埋土 黒褐色土を主体とし、壁際に黒色土が堆積している。下層より順次堆積していることから、自然埋没の様相を呈する。

遺物 出土遺物のうち図示し得たのは埋土下層出土の甕2点である（第26図-11・12）。11は複合口縁部に10条以上の横位の櫛描沈線が施される。12は複合口縁部分である。

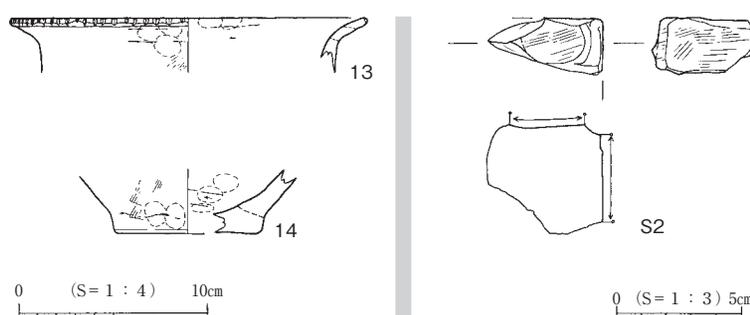
時期 出土遺物から、本址の時期は弥生時代後期後半以降と考えられる

SS34（第24・27図）

形状 I層を除去したところ検出された。斜面の高位側の地山のIV層V層を掘り込んで、平坦面を形成している。西壁側はさらに調査区外に広がり、東側は南部町試掘トレンチにより失われ、北側はSS31-aにより切られているため、遺存状態は悪く、平面形は不明である。確認面上の標高は27.5mを測る。傾斜面の等高線に直交する方向を主軸と考えた場合の主軸方位はN-45°-Wである。残存範囲での規模は南北2.0m以上、東西2.4m以上、確認面からの深さは壁際で60cmを測る。壁はやや開きながら立ち上がり、検出範囲での床面積は2.4㎡を測る。床面はほぼ平坦である。高位側の壁面直下に長さ100cm、幅40cm、深さ10cmの溝が検出された。位置と形状から壁溝と考えられる。

埋土 黒色土を主体とし、下層より順次堆積していることから、自然埋没の様相を呈する。

遺物 遺存状態が悪く、本址からの出土遺物は少ないが、僅かに甕2点、



第27図 SS34出土遺物

石器1点が図示し得た（第27図）。13は弥生時代前期後半の甕口縁部、緩く外反する口縁端部にはヘラ状工具によるキザミが施される。14は平底の甕底部、外底面に穀粒圧痕が認められる。S2は凝灰岩製の砥石破片、破片であるが方形の仕上砥の上面と右側面の2面が使用されている。

時期 出土遺物と形状から、本址の時期は弥生時代前期後半以降と考えられる

SS35（第28・29図）

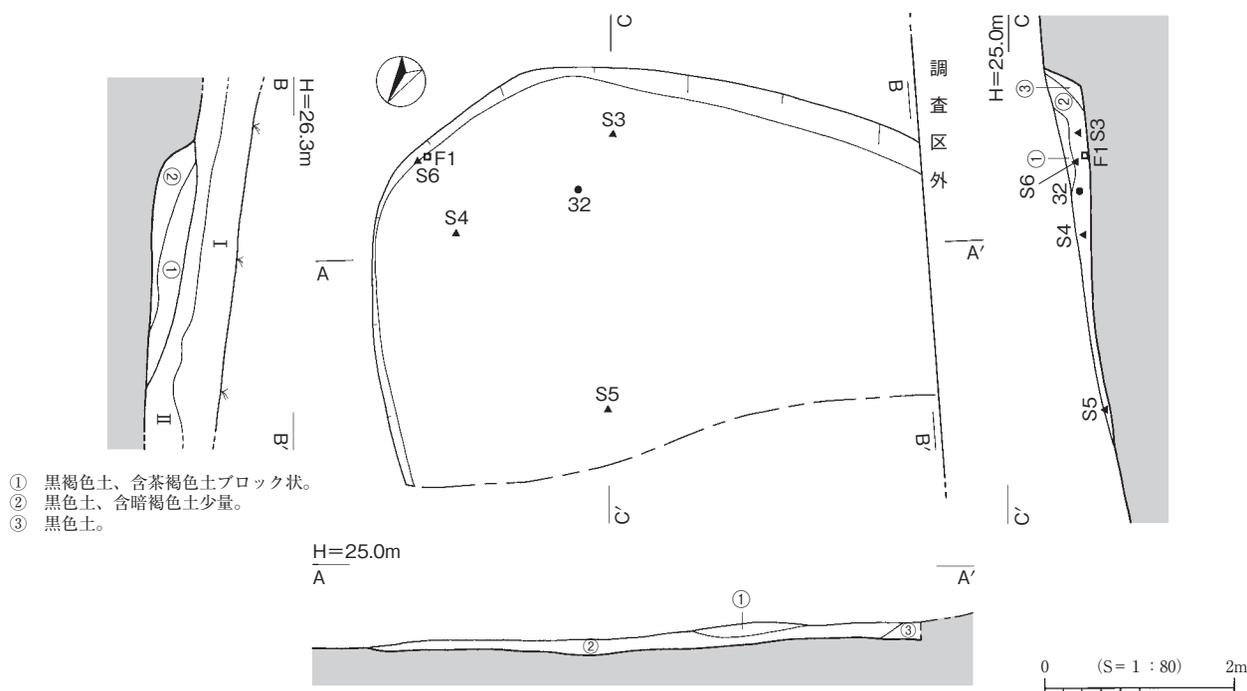
位置 J～K-1～2グリッドの一群の内、最下段のK-1グリッドに位置する。南東8.0mにSS31が位置する。確認面上の標高は25.3mを測る。

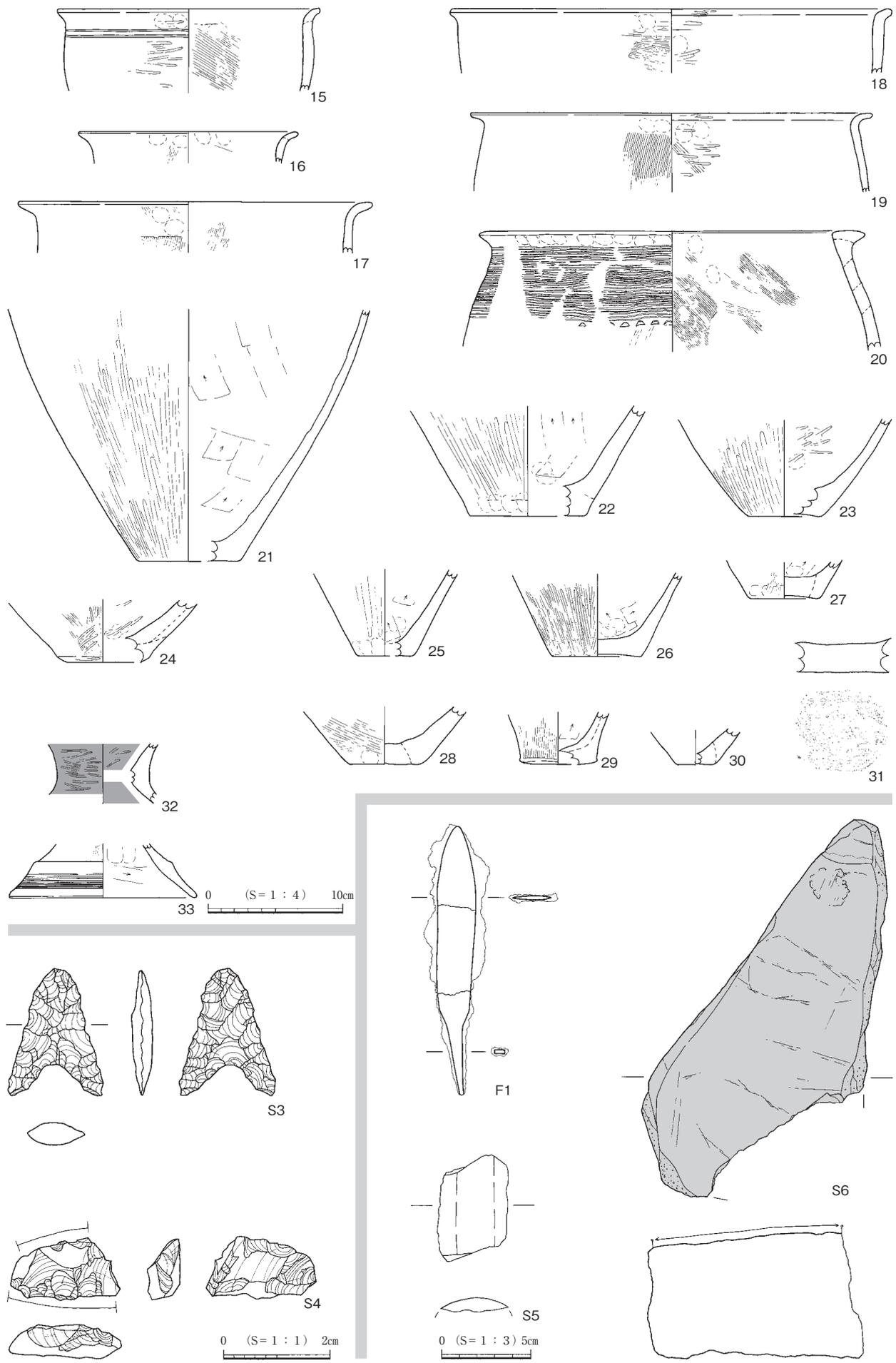
形状 II層を除去したところ検出された。斜面の高位側の地山のIV層、V層を掘り込んで、平坦面を形成している。西壁側はさらに調査区外に広がる。平面形は横長の半円形を呈する。斜面下方は削平により失われている。傾斜面の等高線に直交する方向を主軸と考えた場合の主軸方位はN-14°-Wである。規模は南北4.2m、東西6.0m以上、確認面からの深さは壁際で40cmを測る。壁はやや開きながら立ち上がり、検出範囲での床面積は25.2㎡を測る。床面はほぼ平坦である。

埋土 下層に黒色土、上層に黒褐色土が堆積し、下層より順次堆積していることから、自然埋没の様相を呈する。

遺物 本址からは埋土上層を中心に比較的多くの遺物が出土した。このうち図示し得たのは24点である（第29図）。15～19は弥生土器の甕口縁部である。15～17は緩やかに外反する口縁部を持ち、15は肩部に2条のヘラ状工具による沈線が施される。18～19は口縁の屈曲が大きい。20はやや胴が張る鉢、内湾する口縁部が肥厚し、逆L字状に屈曲する端部上面はフラットになる。外面は体部上面にかけて櫛描直線文が施され、下端は三角形の連続刺突文が施される。21～31は甕の底部、いずれも平底で、31の外底面には粗いハケ状工具の痕跡が残る。32・33は器台、33は埋土上層出土の脚部、外面に9条の櫛描沈線が巡る。

F1は床面直上出土の有茎鉄族、柳葉式の刃部はやや大型である。





第29図 SS35出土遺物

S3は埋土下層出土の黒曜石製の石鏃、凹基無茎で刃部角50°、長幅比1.27を測り、両側縁は外湾する。S4は黒曜石製の楔形石器、横長の剥片を素材とし、上下に潰しを加えている。S5は安山岩製の磨製石斧、破片であり全体の形状は不明である。S6は角礫凝灰岩製の台石、方形に切り出した素材の表面を使用している。全体に廃棄後被熱が認められる。

時期 埋土上層の出土遺物が多く時期比定が困難であるが、本址の時期は弥生時代中期前葉以降と考えられる。

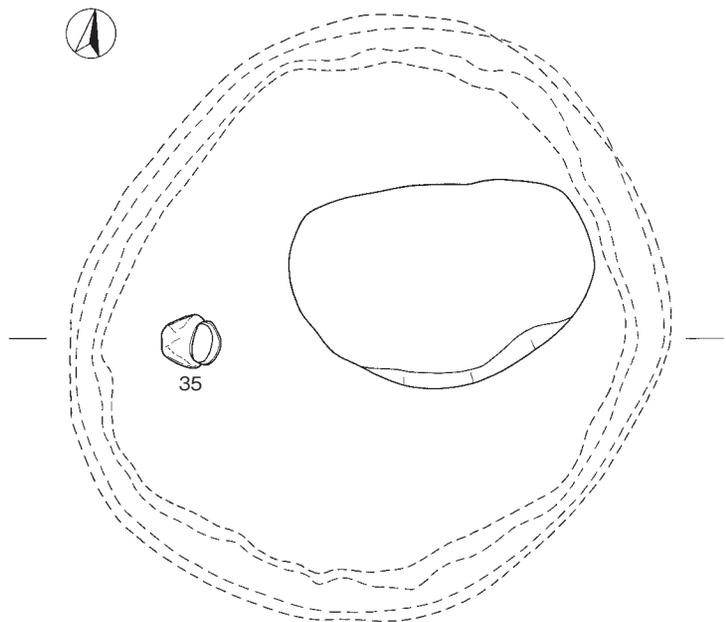
2) 貯蔵穴

SK13 (第30・31図)

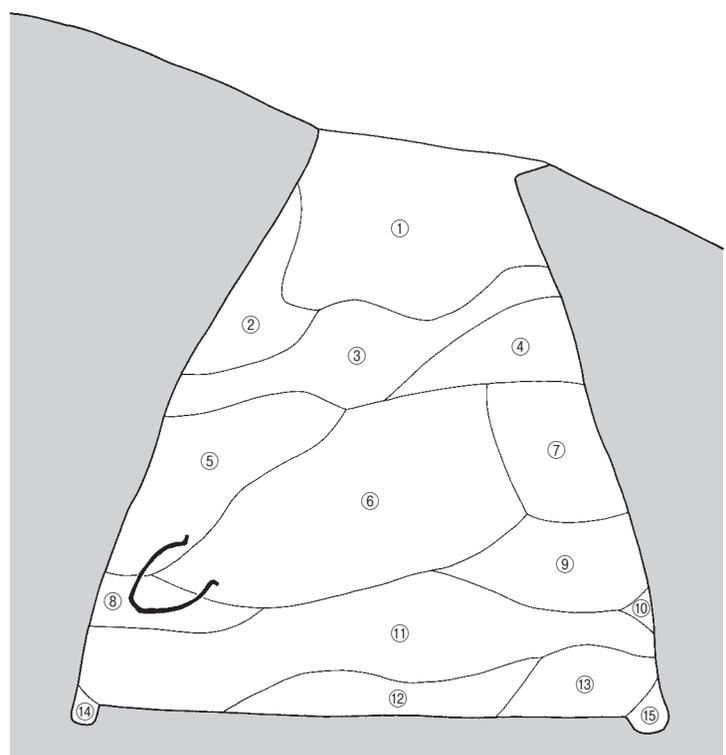
位置 C-8グリッド、南西—北東方向に張り出した支尾根北側の下部谷壁斜面に検出された(第30図)。形状から貯蔵穴と考えられる。東側13.0mにSK15がほぼ同一レベルで存在する。確認面上の標高は31.6mを測り、本址より下位の斜面の傾斜は若干緩やかになるが、後世の削平による可能性も考えられる。

形状 平面形は上縁部、底面共に楕円形を呈し、長軸方位はN-22°-Eを指す。断面形は台形の袋状を呈する。底面は平坦で、幅12cm、深さ5cmの壁溝が全周する。本址はその形状から貯蔵穴と考えられる。規模は上面で長径80cm、短径53cm、底面で長166cm、短径148cm、確認面からの深さは156cmを測る。

埋土 黒色土を主体とし、概ね自然埋没の状況を呈する。埋土中に焼土、炭化物の痕跡は認められない。西壁寄りの底面より25cmの所に完形の甕が出

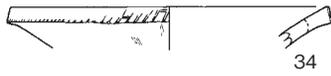


H=32.0m

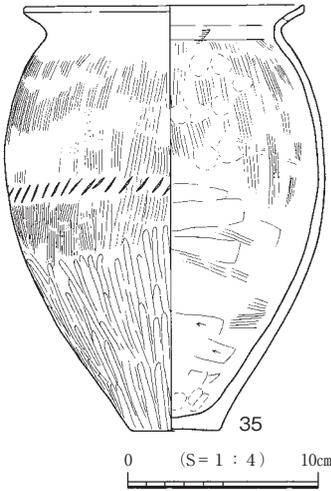


- ① 黒色土。
- ② 黒色土、含黄色粒微量。
- ③ 黒色土、含ロームブロック大量。
- ④ 黒色土、含黄色ブロック少量。
- ⑤ 黒色土、含黄色ブロック多量。
- ⑥ 黒色土、含暗褐色土。
- ⑦ 黒色土、含ロームブロック。
- ⑧ 黒色土、含ローム粒少量。
- ⑨ 黒色土、含ローム粒多量。
- ⑩ 黄褐色土、含ローム粒。
- ⑪ 黒色土、含暗褐色土多量。
- ⑫ 黒色土、含ローム粒。
- ⑬ 黒色土、含ロームブロック・ローム粒・黄色土。
- ⑭ 黒色土、締まり強。
- ⑮ 黄褐色土。

第30図 SK13



34



35

第31図 SK13出土遺物

土した。甕と共に出土した炭化材は、自然化学分析の結果クリと特定された（第VI章第2節）。

遺物 本址からは弥生土器2点が図示し得た。（第31図）。34は埋土中出土の壺口縁部破片、口縁端部は二条の凹線の上に斜目方向の刻みが施される。35は埋土下層の完形の甕、平底で胴張り、口縁は強く屈曲する。体部中位に櫛状工具による簡素な列点文が施される。甕外面には厚い層状煤が、内面体部下半にはコゲと穀粒痕が付着しており、炊飯時の使用痕跡が認められる。

時期 出土遺物と形状から、本址の時期は弥生時代中期前葉頃と考えられる。

SK15（第32図）

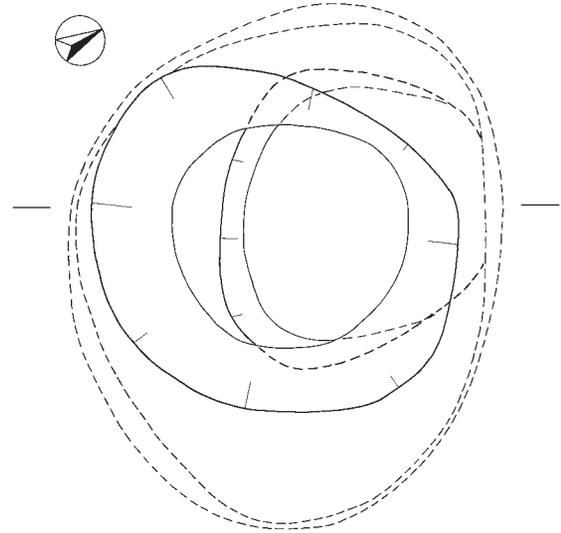
位置 D-9グリッド、南西—北東方向に張り出した支尾根頂部緩斜面に検出された（第32図）。形状から貯蔵穴と考えられる。西側13.0mにSK13が存在する。確認面上の標高は31.2mを測る。

形状 平面形は上縁部、底面共に楕円形を呈し、長軸方位はN-50°-Wを指す。断面形は袋状を呈する。底面は平坦で、中央部北寄りに直径80cm、深さ15cmの掘り込みがある。規模は上面で長径98cm、短径87cm、中断の窄まった部分で長径64cm、短径58cm、底面で長径140cm、短径115cm、確認面からの深さは152cmを測る。

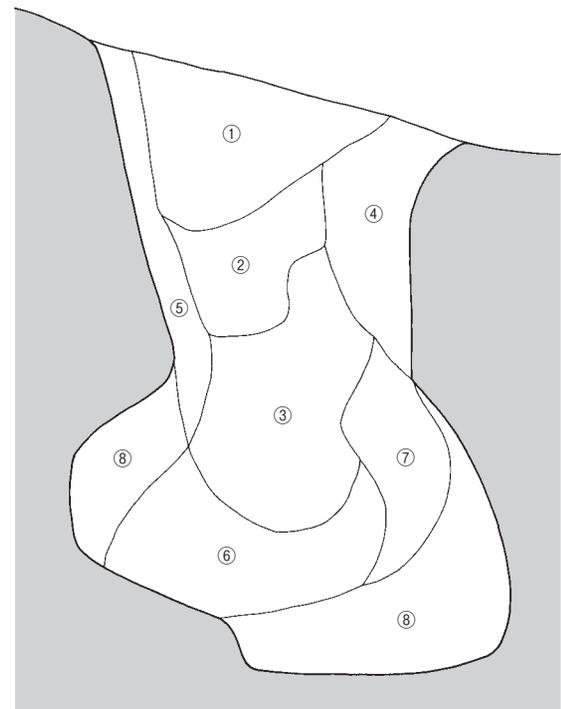
埋土 下層に黄色ローム層、上層に黒色土が堆積し、堆積状況を観察する限り黄色ロームブロック（⑧）が堆積した段階で掘り直しが行われた可能性が考えられる。

遺物 本址から遺物は出土していない。

時期 遺物が出土していないので時期比定が困難であるが、位置と形状から、本址の時期はSK13と同時代の弥生時代中期前葉頃と考えられる。



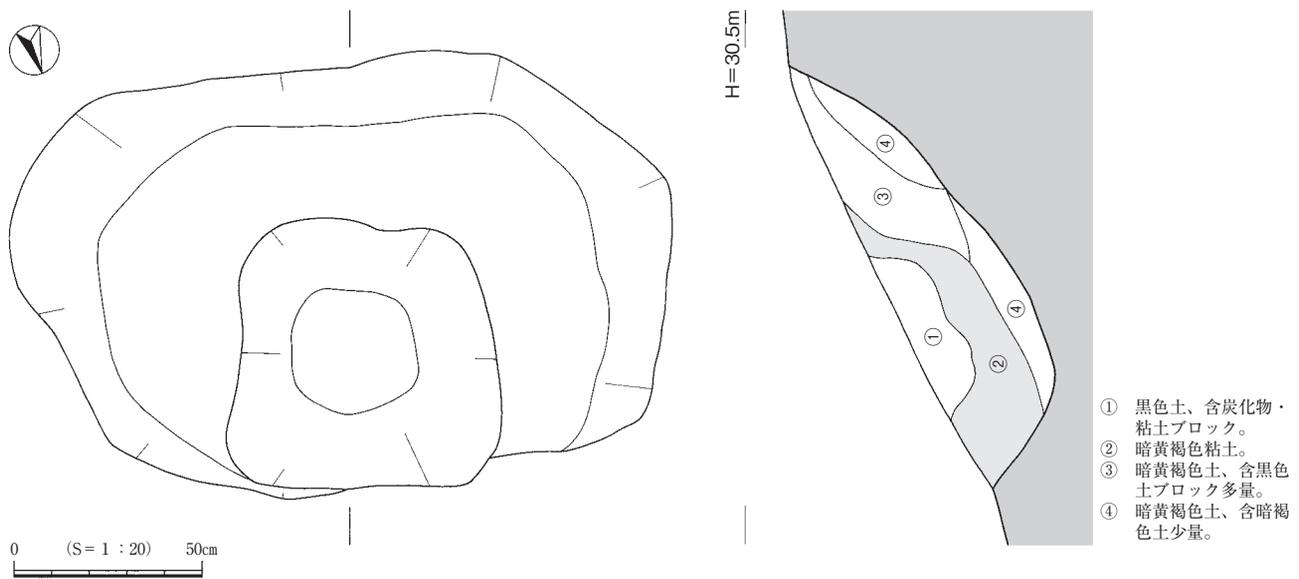
H=31.4m



- ① 黒色土、含黒褐色土少量。
- ② 黒色土。
- ③ 黒色土、含明褐色土少量。
- ④ 暗褐色土、含暗黄褐色土・ローム粒多量。
- ⑤ 暗褐色土、含暗茶褐色土、ロームブロック。
- ⑥ 黒色土、縮まり有。
- ⑦ 黒色土、含黄色土。
- ⑧ ロームブロック。

0 (S=1:20) 50cm

第32図 SK15



第33図 SK20

3) 土坑

SK20 (第33・34図)

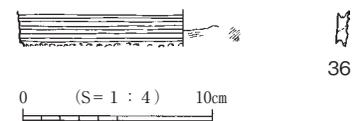
位置 I-3グリッド、南西—北東方向に張り出した支尾根北側谷頭凹地に検出された(第33図)。確認面上の標高は29.3mを測る。

形状 平面形は上縁部、底面共に不整形な楕円形を呈し、長軸方位はN-74°-Eを指す。断面形は緩やかなU字形を呈する。規模は上面で長径176cm、短径114cm、底面で長径74cm、短径68cm、確認面からの深さは38cmを測る。

埋土 埋没状況から概ね自然埋没の状況を呈する。暗黄褐色粘土(②層)の堆積が認められるが、形状からは粘土郭等の土壙墓とは考えにくいことから、粘土備蓄坑の可能性が想定できる。

遺物 本址からの出土遺物は少なく僅かに1点が図示し得た(第34図)。36は弥生土器の甕肩部破片、外面に4条以上の凹線と下端に竹管文が連続施文される。

時期 出土遺物から本址の時期は弥生時代中期前葉と考えられる。



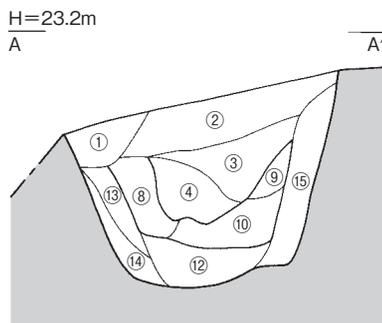
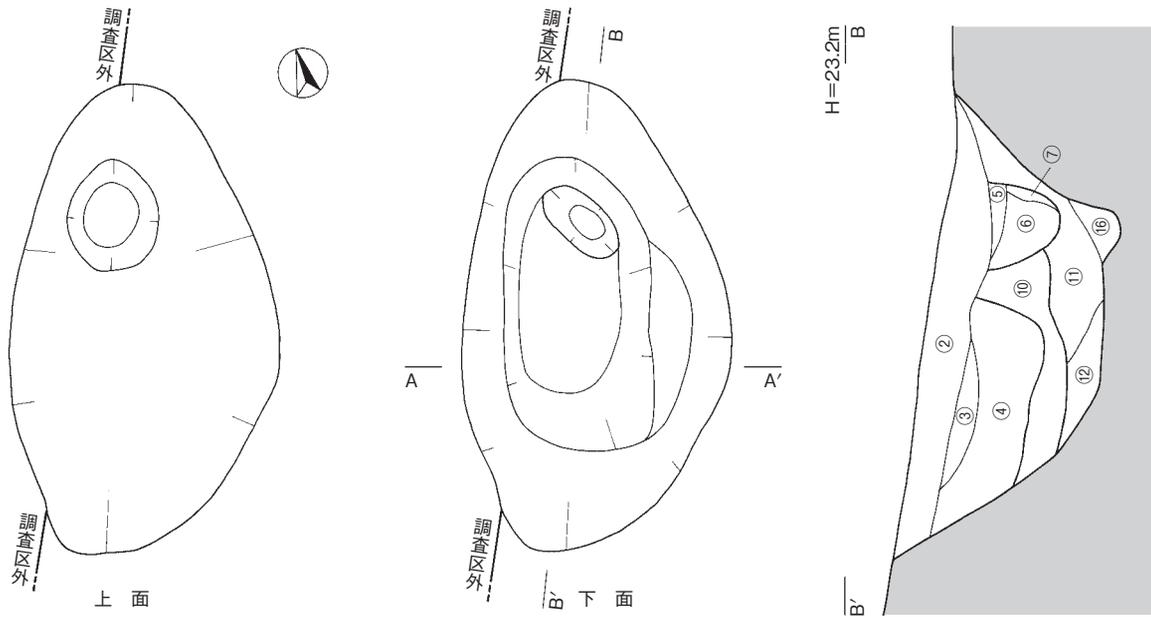
第34図 SK20出土遺物

SK27 (第35・36図)

位置 L-1グリッド、調査区北壁際の丘陵麓部緩斜面に単独で検出された(第35図)。確認面上の標高は22.8mを測る。

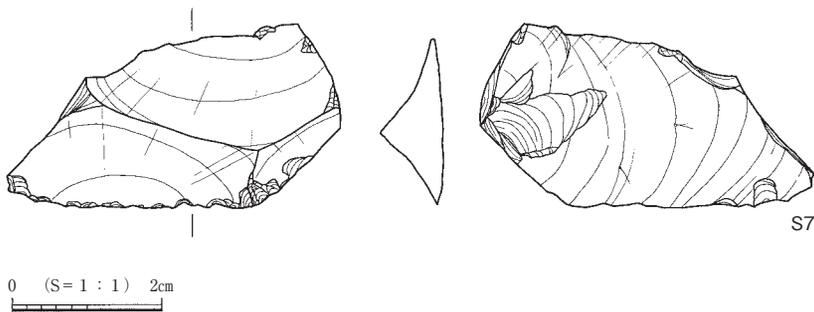
形状 平面形は上縁部、底面共に不整形な長楕円形を呈し、底面の形状および埋土の堆積状況を観察すると何回かの掘り直しが行われたようであり、最終的には埋土上層(③層以下)まで埋没した段階(上面)で直径30cm程の土坑が掘り込まれたようである、長軸方位はN-24°-Eを指す。断面形は緩やかな逆U字形で、底面には段が存在していることから、少なくとも2つの土坑が重複していると考えられる。規模は、上面で長径152cm、短径113cm、底面で長径57cm、短径26cm、確認面からの深さは56cmを測る。

埋土 黄褐色土と黒色土を主体とし、堆積状況から何回かの掘り直しの後、最終的には暗褐色土及び黒色土(①・②層)により人為的に埋め戻された可能性が高い。



- ① 暗褐色土、締まり・粘性弱。
- ② 黒色土。
- ③ 黒色土、含暗茶褐色土少量。
- ④ 黒褐色土、含暗茶褐色土ブロック。
- ⑤ 黒褐色土、含ロームブロック多量。
- ⑥ 暗茶褐色土、含ロームブロック少量。
- ⑦ 暗茶褐色土、含暗黄褐色土多量。
- ⑧ 暗茶褐色土、含ロームブロック多量。
- ⑨ 暗茶褐色土、含ローム粒多量。
- ⑩ 黒色土、含ローム粒少量、締まり強。
- ⑪ 黄褐色土。
- ⑫ 黒色土、含ロームブロック多量。
- ⑬ 黄褐色土、含ローム粒少量。
- ⑭ 暗黄褐色土、含黒色土少量。
- ⑮ 黄褐色土、含黒色土少量。
- ⑯ 黄褐色土。

第35図 SK27



第36図 SK27出土遺物

遺物 本址からは石器1点が出土したが、埋土の堆積状況から混じり込みの可能性も考えられる(第36図)。S7は黒曜石製の二次加工剥片、横長の剥片素材の下端部に二次加工を施している。

時期 出土遺物からの時期比定は困難であるが、埋土の状況から弥生時代中期頃と考えられる。

2. 弥生時代後期～古墳時代前期初頭

検出された当該期の遺構は最も多く、竪穴建物7棟（SI1・2・3・4・5・7・8）、段状遺構16基（SS5～7・13～17・10・18・19・21・22・24・25・33）、土墳墓1基（SK5）、土坑4基（SK6・23～25）、溝状遺構2基（SD2・6）が検出された。分布状況を見ると、竪穴建物は調査区中央の谷頭から北側尾根頂部にかけて集中している。段状遺構は調査区南から中央にかけての標高36m付近の等高線にそって細長く構築されている。出土遺物から、この段状遺構は古墳時代前期まで継続して使用されていたようである。

当該期の出土遺物は竪穴建物を中心に復元可能な遺物が多く出土している。以下、遺構別に詳述することとするが、重層的な遺構の場合は解釈の煩雑さを避けるために、後世の遺構もここに含めて述べることとする。

1) 竪穴建物

SI1（第37～40図）

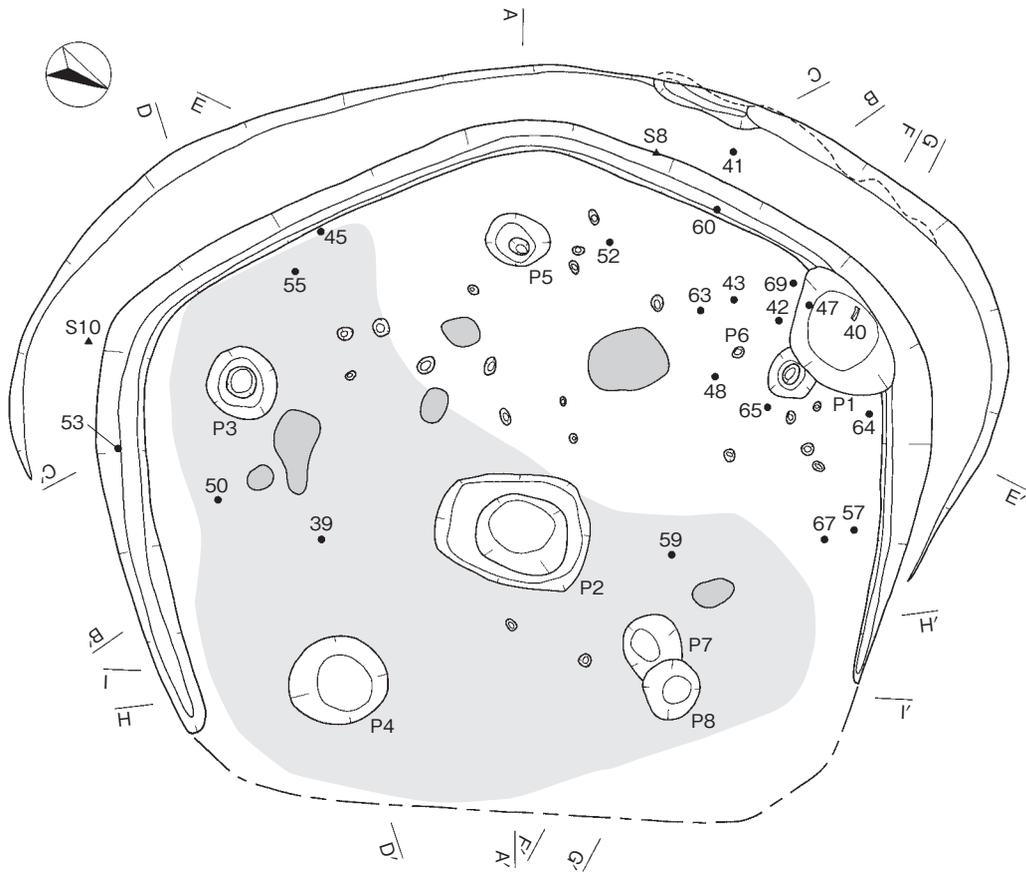
位置 F-6グリッド、調査区中央の南西―北東方向の谷頭凹地の斜面に検出された竪穴建物である。（第37～39図）。南西側3mにSI3が、南側6mにSI2が存在する。上層にSS2が構築されている。確認面上の標高は31.2mを測る。

形状 埋土上層にSS2が構築されているが、遺存状態は良好で、平面形はやや扁平な五角形を呈する。斜面上方を主軸と考えた場合の主軸方位はS-62°-Wである。規模は長軸長6.6m、短軸長5.5m、確認面からの深さは最大で130cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、床面積は19.7㎡を測る。床面は平坦で、全体に硬化している。斜面下方部分に向かってローム層（Ⅸ層）が落ち込み、暗茶褐色土（Ⅷ層）に掘り込まれているところではロームブロックによる貼床（⑩層）が約10cmの厚さで認められた。また、床面中央付近には被熱痕と焼土の堆積が6か所認められた。いずれも不整形を呈するが、掘り込みは認められない。

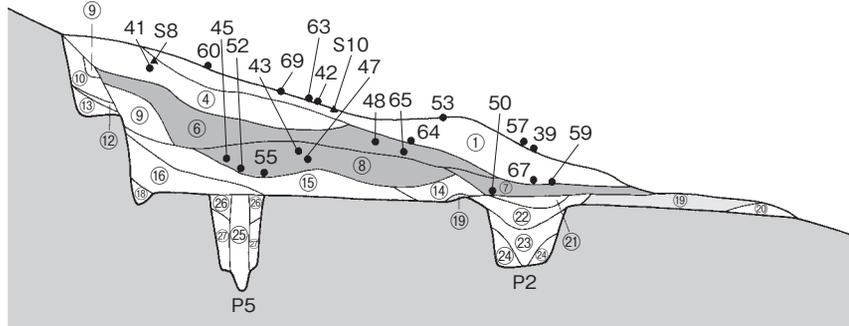
本址に伴うピットは全部で8基検出された。位置や形状からP3～8を支柱穴とする5本柱構造の建物と考えられる。このうち斜面上方側のP3・5・6の底面は柱位置のみ段掘りされている。P8はP7の建て替えと考えられる。支柱穴間距離はいずれも2.4mを測る。柱痕跡はP3・5・7で直径15～20cmほどのものが認められた。柱掘方は45～80cmを測る。P2は浅いテラス状の掘り込みを持つピットで、位置的に中央ピットと考えられる。さらにP1は他のピットより浅いこと、壁際に掘り込まれていることなどから貯蔵穴の可能性もある。各ピットの詳細については計測表を参照されたい。この他、本址床面には直径10cm、深さ5cm程の小ピットが21基掘り込まれている。壁溝は斜面下方をのぞいてU字形に巡る。幅15～25cm、深さ12cmを測り、断面の形状は浅いU字形を呈し、底面は平坦である。

本址斜面の高位側では竪穴部の外周の地山を削り、幅50cm程のテラス状の平坦面が巡っている。この部分の壁面は部分的にオーバーハングし、壁溝が竪穴部に向かって斜めに掘り込まれている。垂木を竪穴外周部のテラス部分の壁に斜めに配する構造であれば、伏屋式の構造が考えられる。本址は貼床の遺存状態が良好であることから、斜面下方の竪穴部の遺構が失われたとは考えにくい。また支柱穴が5本であり、平面形も五角形であることから、斜面下方を切妻屋根とした構造が想定できる。

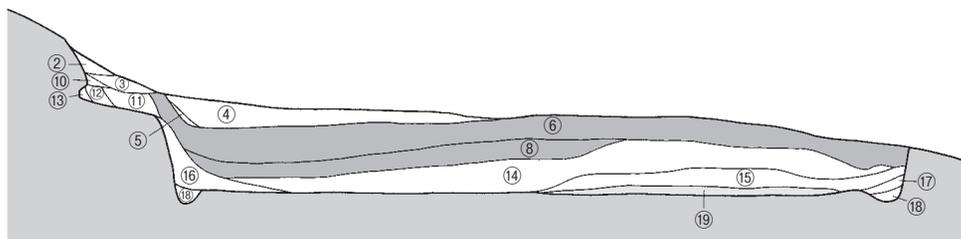
埋土 黒色土を主体とし、下層より順次正層堆積していることから、自然埋没した状況が考えられる。埋土中位にロームブロック（⑥～⑧）層の堆積が認められる。これは建物廃絶後、斜面上方から



H=31.3m
A



H=31.3m
B



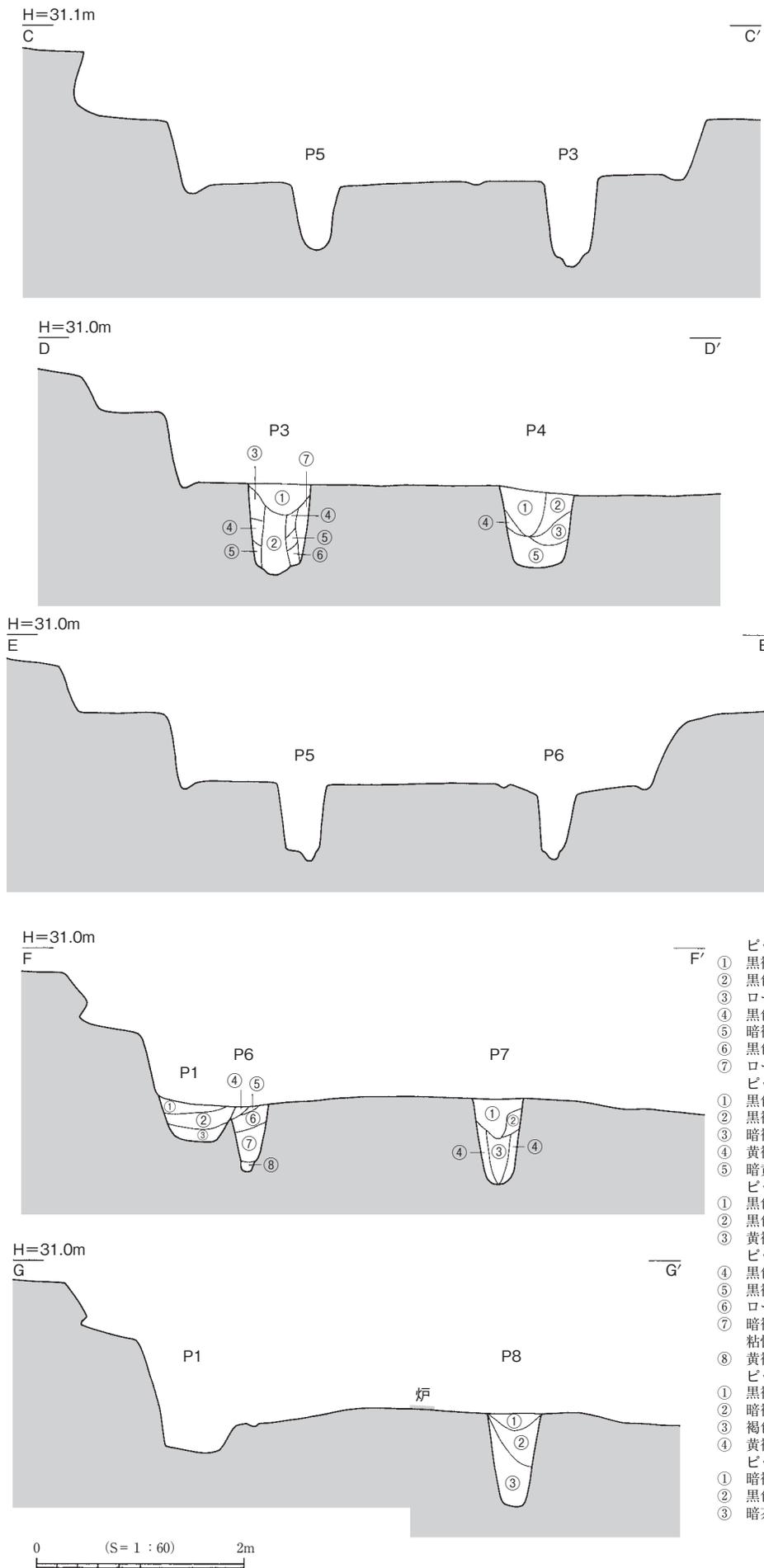
0 (S=1:60) 2m

SI1土層注記

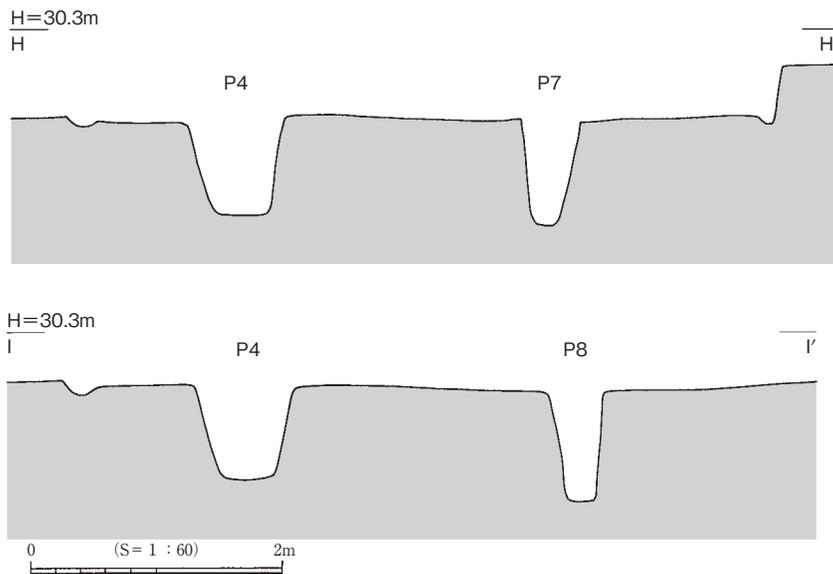
- ① 暗褐色土、含黒褐色土・ロームブロック少量。
- ② 暗褐色土、含炭化物多量、黄色粒少量。
- ③ 暗褐色土、含黒色土・黄色粒少量。
- ④ 黒褐色土、含ロームブロック多量、黒色粒・炭化物少量、縮まり・粘性強。
- ⑤ 暗褐色土、含ロームブロック少量。
- ⑥ ロームブロック、含暗褐色土。
- ⑦ 黒色土、含ロームブロック多量、炭化物少量。
- ⑧ ロームブロック、含黒色土。
- ⑨ ロームブロック。
- ⑩ 黒褐色土。
- ⑪ 黒褐色土、含ロームブロック多量、炭化物少量。
- ⑫ 黒色土、含ロームブロック塊多量。
- ⑬ 黄褐色土、含黒色土。
- ⑭ 黒色土、含暗褐色土。

- ⑮ 黒色土、含黄褐色土。
 - ⑯ 黒褐色土、含黄褐色土・土器片・炭化物多量。
 - ⑰ 暗褐色土、含黄色粒・黒色粒少量。
 - ⑱ 黒褐色土。
 - ⑲ ロームブロック塊、含黒色土、縮まり・粘性強。貼床構成土。
 - ⑳ 黒色土。
- ビット2土層注記
- ㉑ ローム粒、含黒褐色土、縮まり・粘性強。
 - ㉒ 黒褐色土、含ロームブロック少量。
 - ㉓ 黒褐色土、含ロームブロック多量。
 - ㉔ 黄褐色土、含黒色土少量。
- ビット5土層注記
- ㉕ 黒色土、含ローム粒少量。
 - ㉖ 黄褐色土、含黒色土少量、縮まり・粘性強。
 - ㉗ 暗黄褐色土、縮まり・粘性強。

第37図 SI1



第38図 SI1断面図(1)



SI1
ビット計測表(単位:cm)

NO	長径	短径	深さ
1	102	70	46
2	124	88	56
3	60	54	88
4	80	70	78
5	52	40	76
6	(32)	36	64
7	(40)	46	82
8	48	44	90

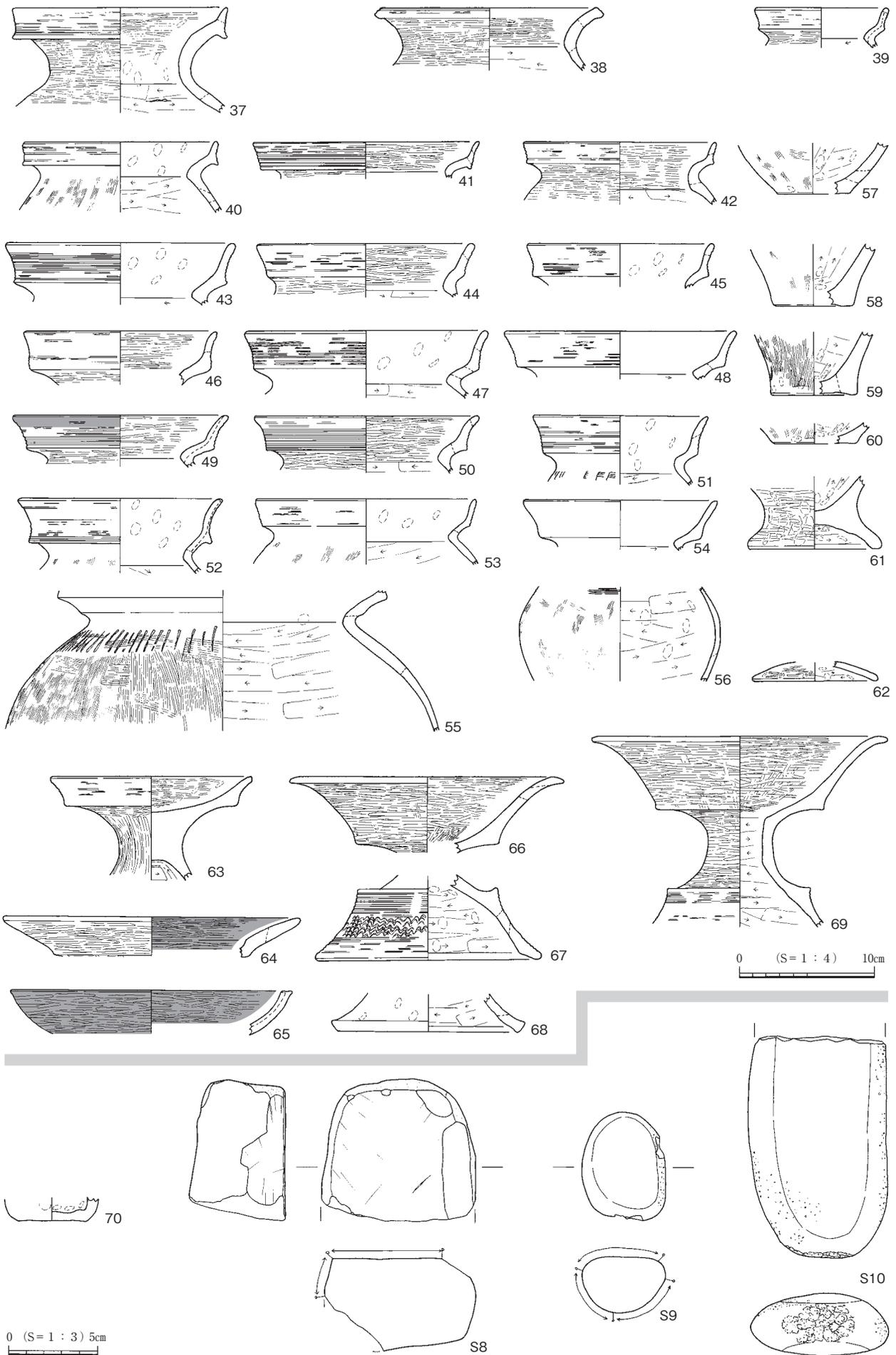
第39図 SI1断面図(2)

建物床面がある程度埋没した後、葺土など建物の構造材が埋積した層だと考えられる。このことから、この建物は土屋根であった可能性が考えられる。

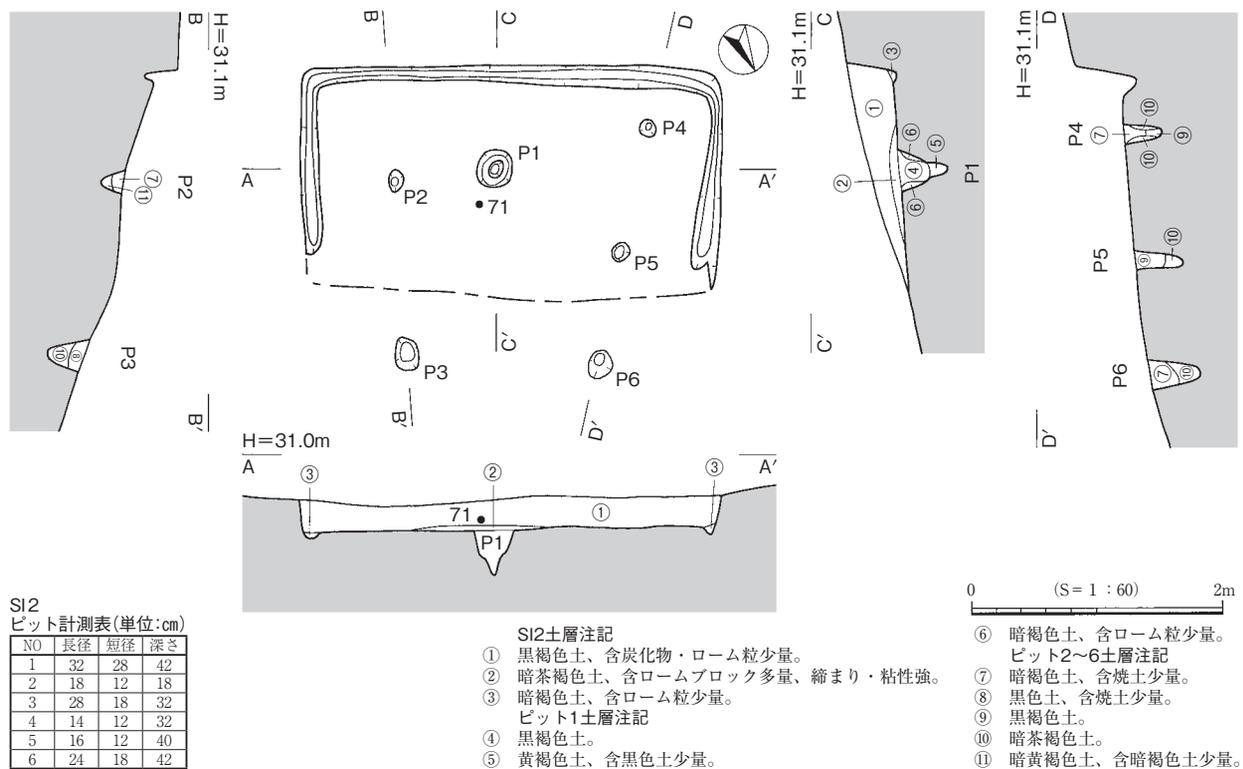
遺物 本址からは埋土中層と上層から多量の遺物が出土している。このうち弥生土器、石器など37点が図示し得た。(第40図)。37は壺、複合口縁端部は上下に拡張され、櫛描沈線がナデ消される。38は単口縁の壺、外傾する口縁端部には2条の凹線が施される。39～61は複合口縁の甕、複合帯の幅は広く、やや外反する下端が下垂するタイプとそうでないタイプがある。41はP1より出土している。61は甕の底部、台状を呈し、端部は内湾気味である。62は蓋、器壁は薄く端部はやや内湾する。63～69は高坏、複合口縁のものとそうでないものがある。67は脚部外面に櫛状工具による直線文、波状文が施される。70は手捏ね土器である。

石器は上層及び上段テラスから出土している。S8は凝灰岩製の砥石、長方形の素材の表面、左側面を使用し、裏面に被熱痕が認められる。S9は安山岩製の磨石、楕円形の素材の全体を使用している。S10はデイサイト製の磨石敲石、表裏面を使用し、下端に敲打痕が認められる。

時期 出土遺物は層位的に見て、遺構廃絶後の投げ込みに伴う土器が主体であり、本址の時期を明瞭に示すものではない。ただし床面直上出土の遺物ともそう時期差がみられないことから、本址の時期は弥生時代後期後葉と考えられる。



第40図 S11出土遺物



第41図 SI2

SI2 (第41～42図)

位置 E-6～7グリッド、調査区中央の南西—北東方向の谷頭凹地の斜面に検出された竪穴建物である。(第41図)。北東側5mにSI3が、北側6mにSI1が存在する。確認面上の標高は30.8mを測る。

形状 平面形は長方形を呈する。斜面上方を主軸と考えた場合の主軸方位はS-28°-Wである。規模は長軸長3.3m、短軸長1.8m、確認面からの深さは最大で38cmを測る。壁面はやや開きながら立ち上がり、床面積は4.7㎡を測る。床面は平坦で、全体に硬化している。

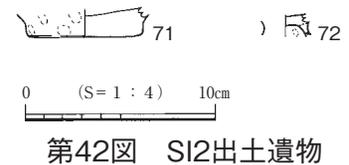
本址に伴うピットは全部で6基検出された。P3・6は位置的に見て本址の入口施設に伴うものと考えられる。柱痕跡は認められなかった。柱掘方は18～38cmを測る。P1は底面段掘りの形状を呈し、位置的に中央ピットと考えられる。各ピットの詳細については計測表を参照されたい。壁溝は斜面下方をのぞいてコの字状に巡る。幅12～22cm、深さ10cmを測り、断面の形状は浅いU字形を呈し、底面は平坦である。

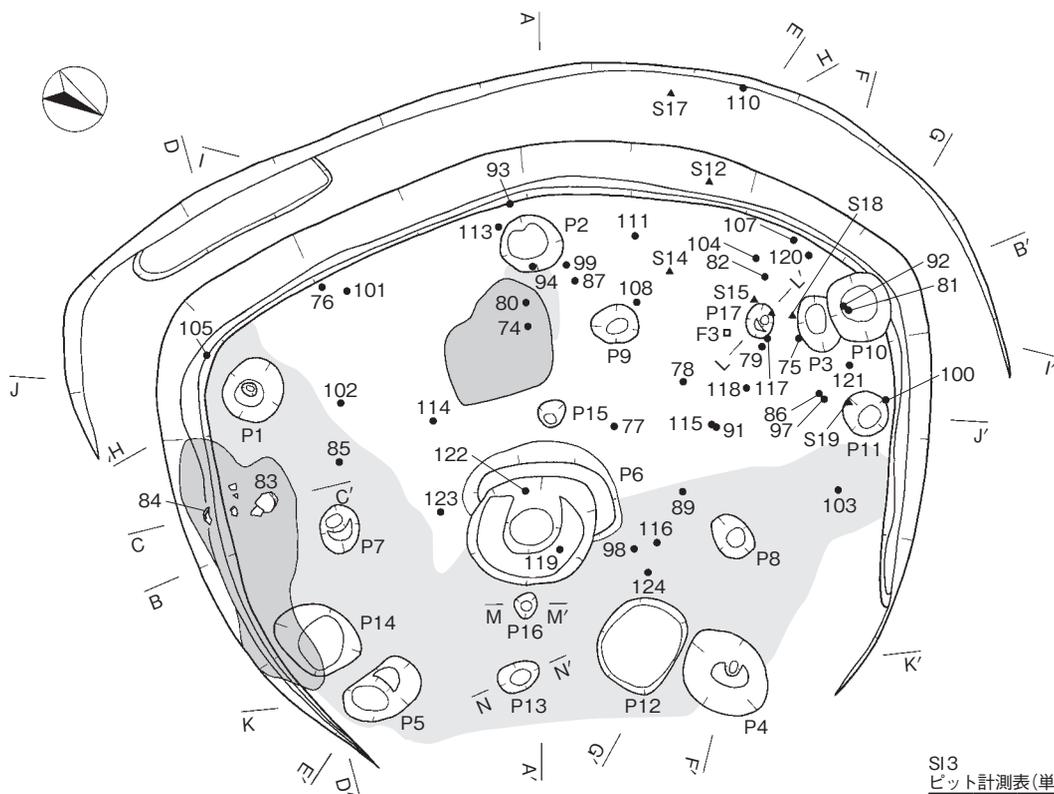
本址は時期的にはSI1・3と同時期であるにもかかわらず、平面形は長方形を呈し、規模も他の建物に比べ、小規模であることから、SI1に付随する小屋等の簡易的な施設の可能性があると考えられる。

埋土 黒褐色土を主体とし、ほぼ単層が堆積しているため、一気に埋没した様相を呈する。中央付近のP1の上面付近に堆積する暗茶褐色土(②層)は非常に締まりが強く、上面が硬化していることから、P1を人為的に埋めた後の貼床土の可能性はある。

遺物 本址からの出土遺物は少なく、僅かに2点が図示し得た(第42図)。71は弥生土器の甕底部破片。暗茶褐色土(②層)直上からの出土であり、P1埋没後の床面直上からの出土と考えられる。72は埋土上層出土の高杯の接合部、小型品である。

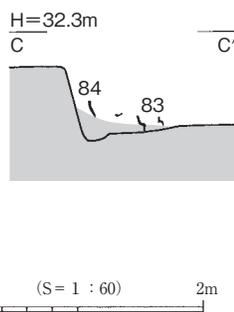
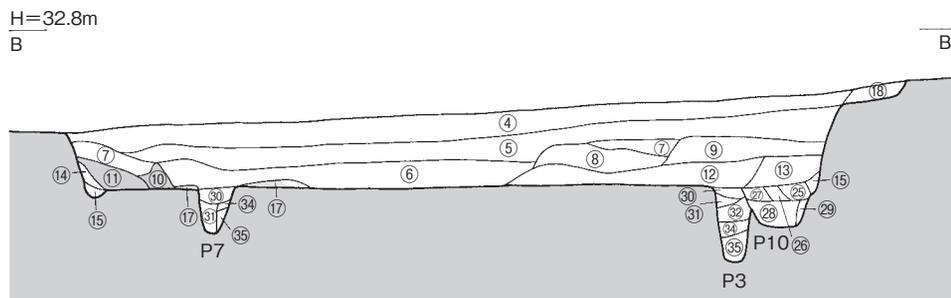
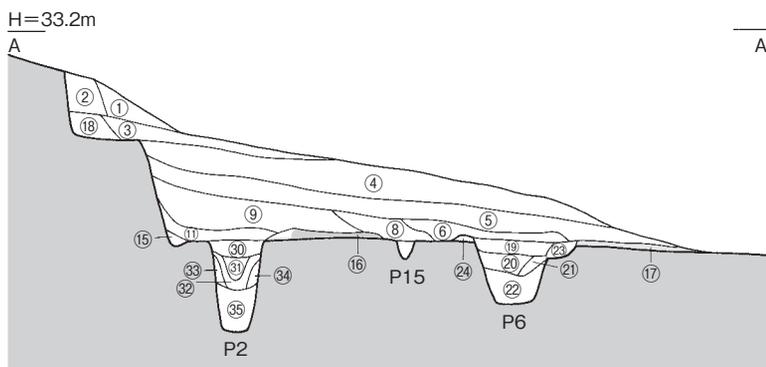
時期 出土遺物が少なく時期比定が困難であるが、位置的に見てSI1と同時期の弥生時代後期後葉が考えられる。





SI3
ビット計測表(単位:cm)

NO	長径	短径	深さ
1	50	46	80
2	50	44	72
3	46	(26)	60
4	76	60	82
5	64	40	76
6	108	84	52
7	38	30	38
8	38	28	32
9	38	30	32
10	54	48	34
11	36	34	80
12	78	62	16
13	34	22	32
14	72	52	36
15	22	20	36
16	22	18	18
17	28	22	16



SI3土層注記

- ① 灰黒色土、縮まり強。
- ② 暗灰黒色土、縮まり強。
- ③ 黒灰黒色土、縮まり強。
- ④ 灰黒褐色土。
- ⑤ 暗灰黒褐色土、含褐色土ブロック・炭化物。
- ⑥ 黒灰褐色土、含褐色土ブロック。
- ⑦ 黒灰褐色土、含褐色小ブロック。
- ⑧ 灰褐色土、含褐色小ブロック・炭化物。
- ⑨ 明灰褐色土、含褐色小ブロック・炭化物。
- ⑩ 黒灰褐色土、含焼土塊。
- ⑪ 焼土層、含黒灰褐色土。
- ⑫ 暗茶灰色土、縮まり強。
- ⑬ 暗茶灰色土、含褐色土ブロック多量。
- ⑭ 黒灰褐色土、含ロームブロック。
- ⑮ 黒灰褐色土、含ロームブロック。
- ⑯ 焼土層。
- ⑰ ロームブロック、含黒色土、縮まり・粘性強。
- ⑱ 貼床構成土。
- ⑲ ロームブロック塊、含黒色土。

ビット6土層注記

- ⑲ 黒灰褐色土、含褐色土ブロック多量。
 - ⑳ 黒色土、含褐色土ブロック多量。
 - ㉑ 黒色土、含褐色土ブロック少量。
 - ㉒ 黒色土。
 - ㉓ 灰褐色土、縮まり強。
 - ㉔ 黒色土、含褐色土多量、縮まり強。
- ビット10土層注記
- ㉕ 灰褐色土、含褐色土ブロック。
 - ㉖ 暗灰褐色土、含褐色土ブロック少量。
 - ㉗ 暗灰褐色土、含褐色土ブロック少量。
 - ㉘ 明灰褐色土、含褐色土ブロック。
 - ㉙ 灰褐色土、縮まり強。
- ビット2・7・3土層注記
- ㉚ 黒灰褐色土、含褐色小ブロック多量。
 - ㉛ 黒色土、含褐色小ブロック多量。
 - ㉜ 黒色土、縮まり強。
 - ㉝ 灰褐色土、縮まり強。
 - ㉞ 明褐色土、含黒色土。
 - ㉟ 黒色土、含褐色土。

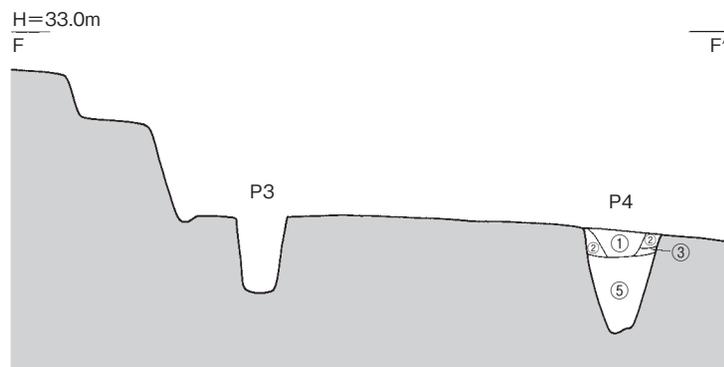
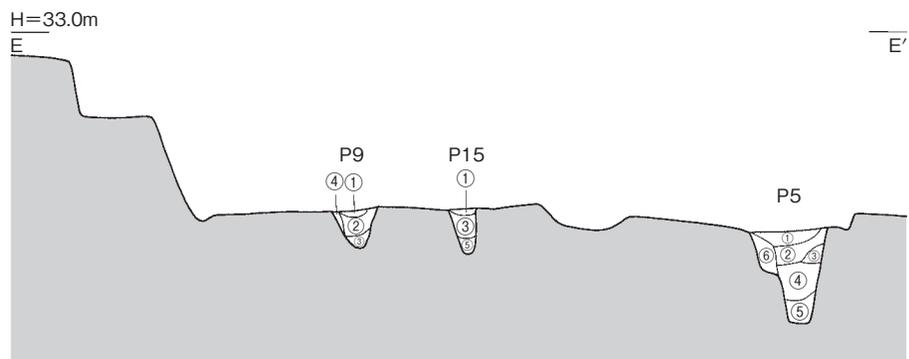
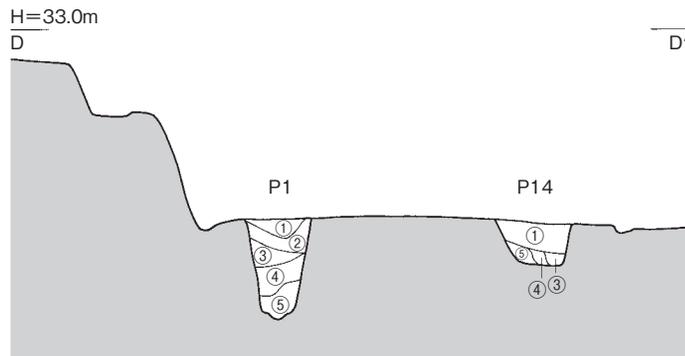
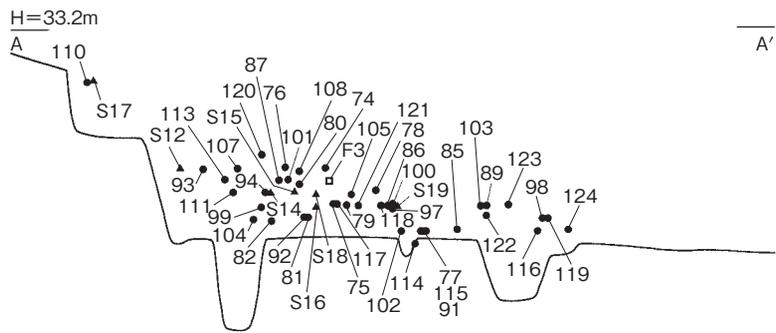
第43図 SI3

SI3 (第43~48図)

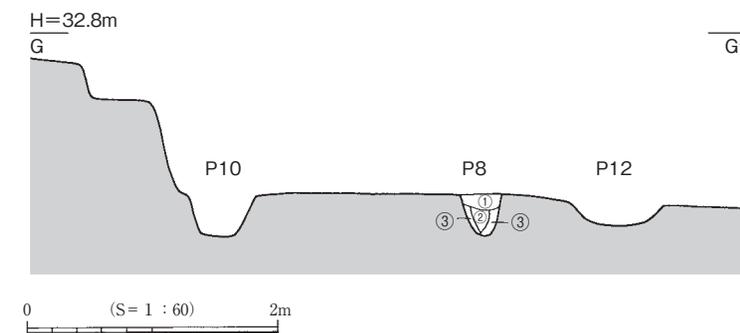
位置 E~F-5~6グリッド、調査区中央の南西一北東方向の谷頭凹地の斜面に検出された竪穴建物である。(第43図)。北東側3mにSI1が、南東側5mにSI2が存在する。確認面上の標高は32.9mを測る。

形状 遺存状態は良好で、平面形はやや扁平な五角形を呈する。斜面上方を主軸と考えた場合の主軸方位はS-58°-Wである。規模は長軸長6.1m、短軸長4.6m、確認面からの深さは最大で95cmを測る。壁面はやや開きながら立ち上がり、床面積は12.9㎡を測る。床面は平坦で、全体に硬化している。斜面下方部分に向かって傾斜する部分にはロームブロックによる貼床(17層)が約5cmの厚さで認められた。床面中央のP2とP15の間の床面には直径90cm程の不整円形の被熱痕が認められた。床面上に掘り込みは認められない。

本址に伴うピットは全部で17基検出された。位置や形状からP1~5を主柱穴とする5本柱構造の建物と考えられる。このうちP1・4の底面は柱位



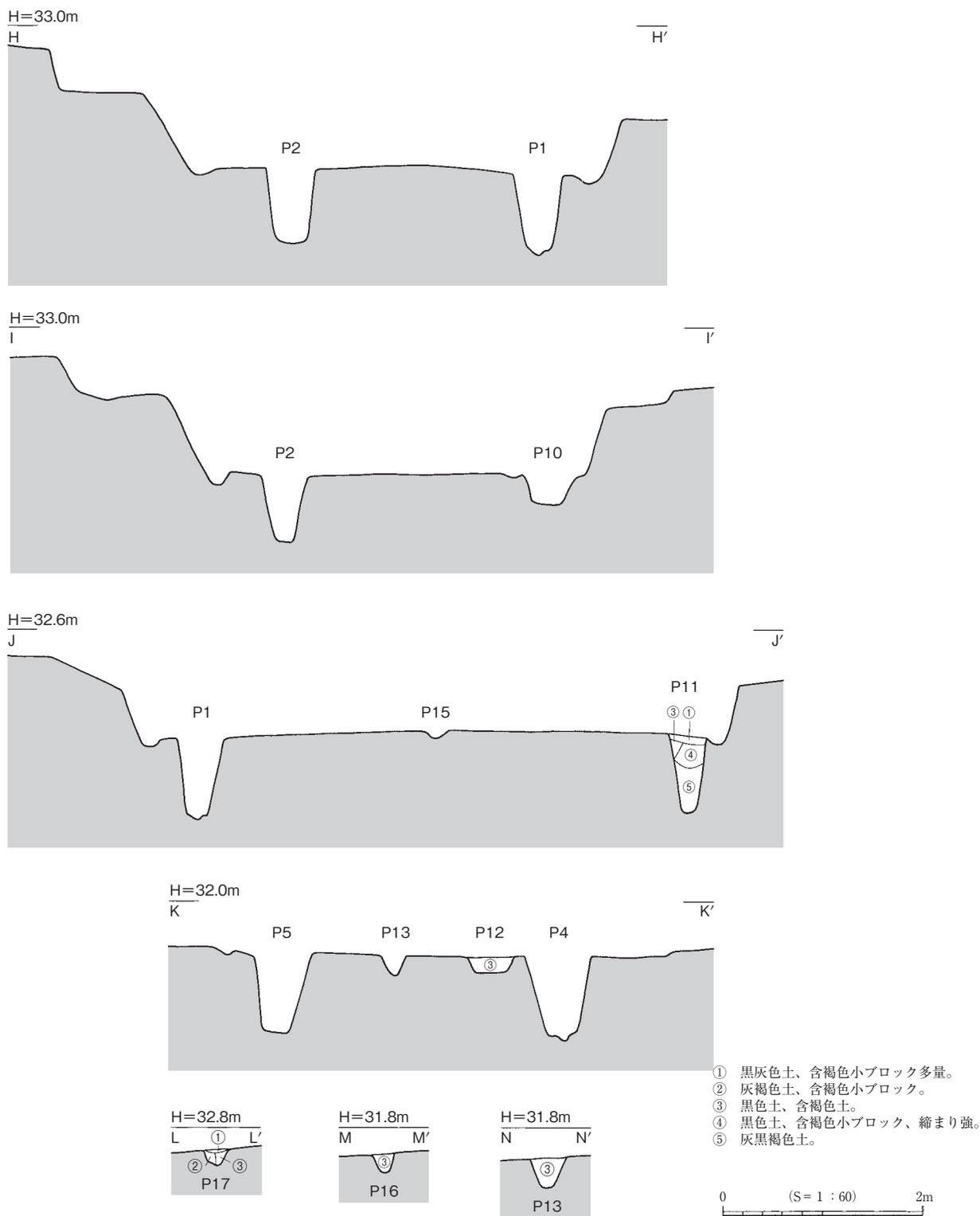
- ① 黒灰色土、含褐色小ブロック多量。
- ② 灰褐色土、含褐色小ブロック。
- ③ 黒色土、含褐色土。
- ④ 黒色土、含褐色小ブロック、縮まり強。
- ⑤ 灰黒褐色土。
- ⑥ 暗黒褐色土、縮まり強。



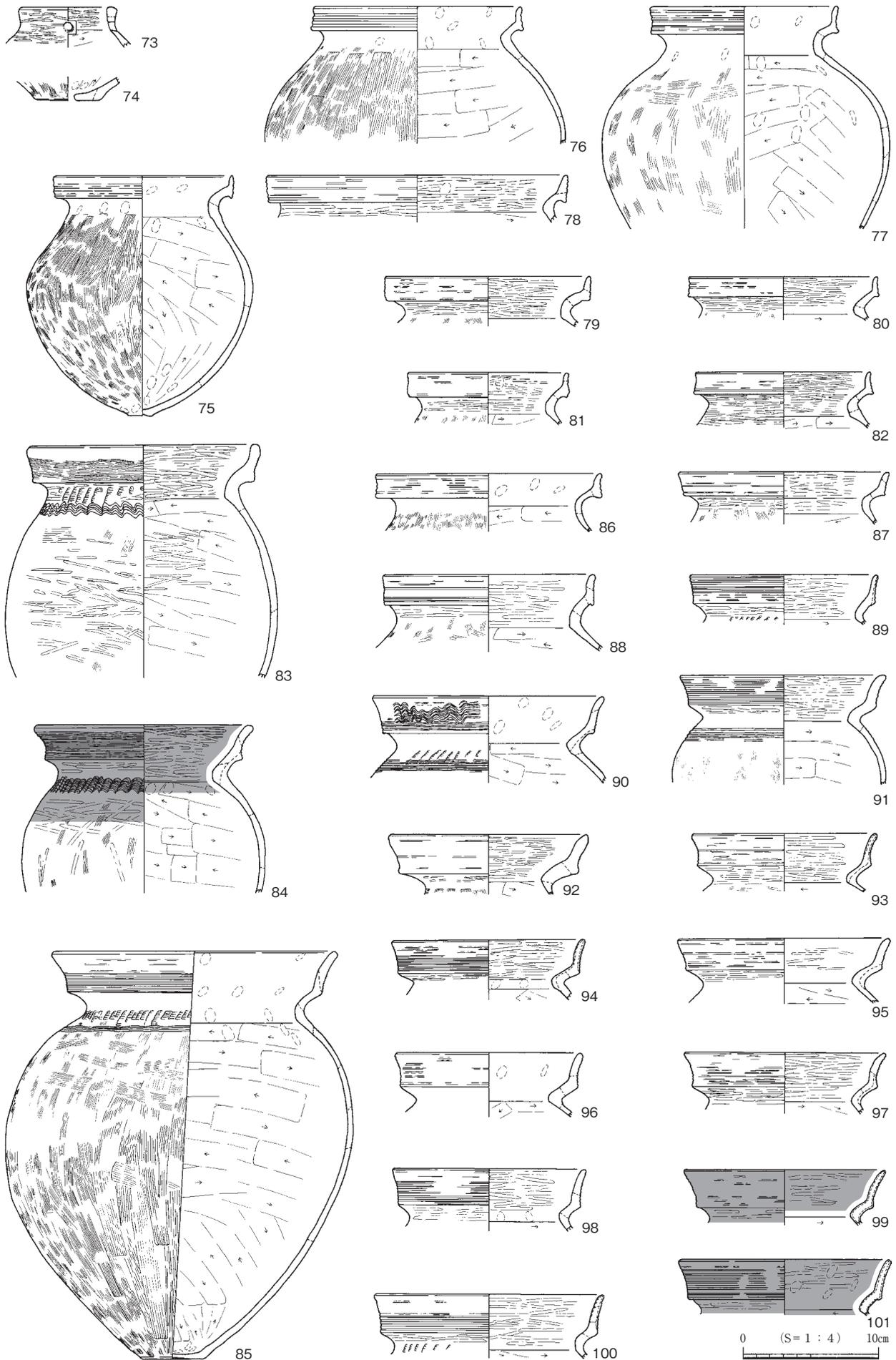
第44図 SI3断面図(1)

置のみ段掘りされている。主柱穴間距離は2.4~2.9m、柱掘方は45~75cmを測る。P6は高さ5cmの周堤と浅いテラス状の掘り込みを持つピットで、位置的に中央ピットと考えられる。また、P10は他のピットより浅いこと、壁際に掘り込まれていることなどから貯蔵穴の可能性はある。各ピットの詳細については計測表を参照されたい。壁溝は斜面下方をのぞいてU字形に巡る。幅15cm、深さ8cmを測り、断面の形状は浅いU字形を呈し、底面は平坦である。

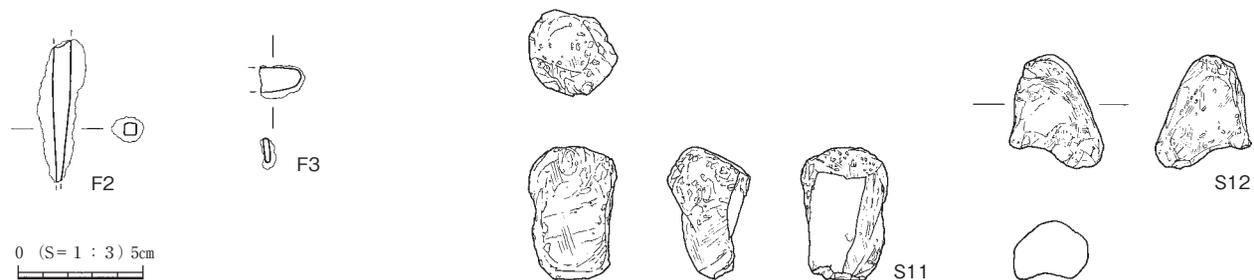
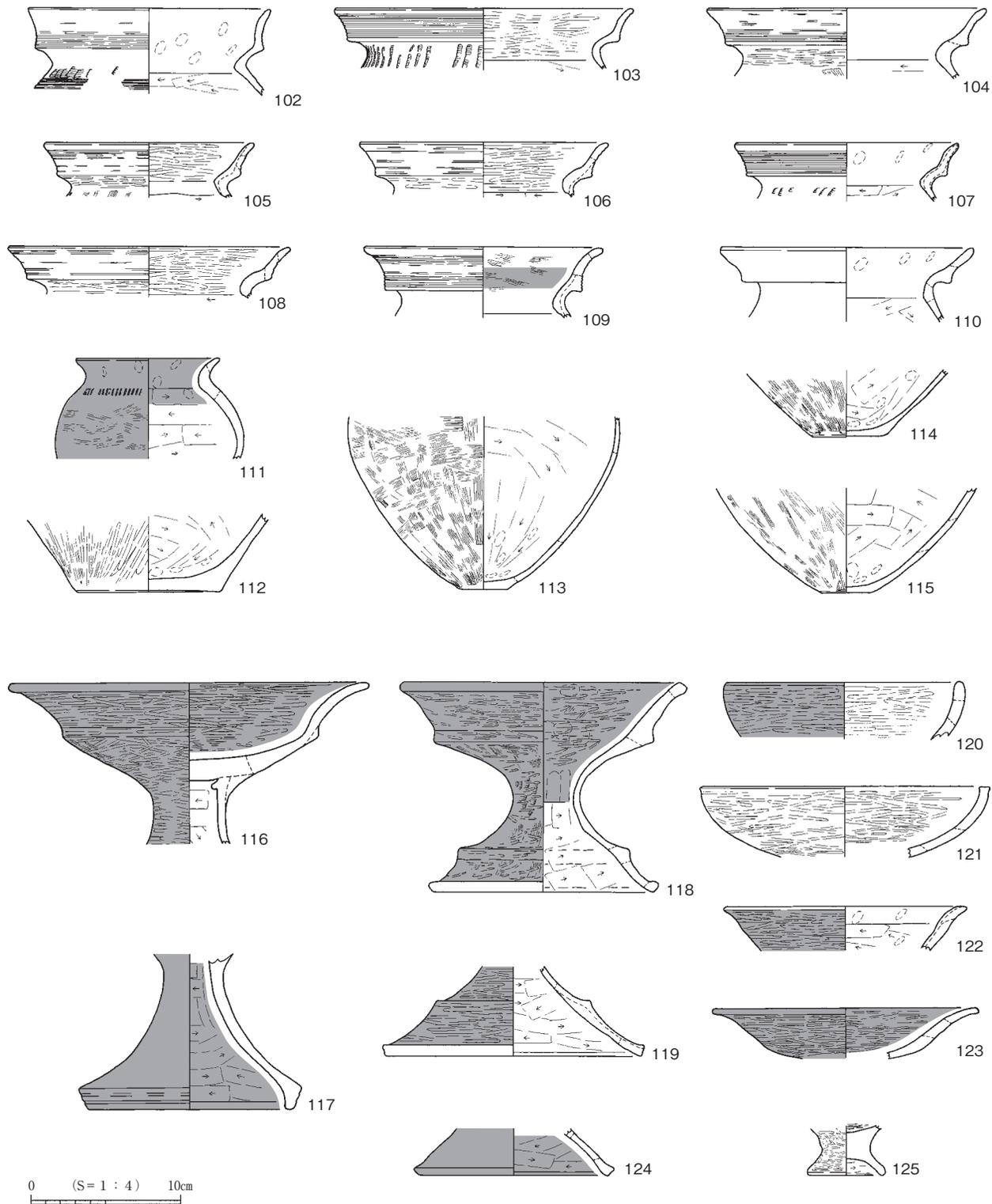
本址斜面の高位側では堅穴部の外周の地山を削り、幅50cm程のテラス状の平坦面が巡っている。このテラス部分の壁面は部分的に幅30cm、深さ5cm程の壁溝が掘り込まれている。垂木を堅穴外周部の



第45図 SI3断面図(2)



第46図 SI3出土遺物(1)



第47図 SI3出土遺物(2)



第48図 S13出土遺物(3)

壁面に配する構造であるとする、伏屋式の構造が考えられる。本址は貼床の遺存状態が良好であることから、斜面下方の竪穴部の遺構が失われたとは考えにくい。また支柱穴が5本であり、平面形も五角形であることから、S11と相似形の斜面下方を切妻屋根とした構造が想定できよう。

埋土 灰黒色土を主体とし、下層より順次正層堆積していることから、自然埋没した状況が考えられる。斜面上方側の床面直上～中層にかけて焼土(⑩・⑪・⑯)層の堆積が認められる。このことから本址は焼失家屋であると考えられる。またこの焼土層中からは多量の土器が出土している。廃絶に伴って廃棄物を投げ込んで一緒に焼いたものであろうか。

遺物 本址からは多量の弥生土器及び石器が出土した。このうち64点が図示し得た。(第46～48図)。73は小型の無頸壺、口縁部下端に穿孔が認められる。74は底部穿孔の壺である。75～115は甕、小

型の平底に胴上位最大径を持ち複合口縁を呈する。口縁帯の幅はやや広く、直立するものと外反するものがある。下端は下垂するタイプと形骸化しているタイプがあり、櫛描沈線はナデ消されるものが多い。肩部には波状文、列点文、押引文等の装飾が施される。体部外面には層状煤が付くものが多い。111は小型の単口縁の甕、外面全体に赤彩が施される。116～117・120～124は高坏、坏部が有段のタイプと、無段で内湾するタイプがある。118～119は有段の器台、125は低脚坏の脚台部である。

F2～3は鉄器、F2は鑿、F3は刀子の茎部と考えられる。S11～12は軽石製の砥石で、全体を使用している。

時期 床面直上出土遺物から、本址の時期は弥生時代後期後半から終末期頃と考えられる。

SI4 (第49～51図)

位置 B-9～10グリッド、調査区南壁際の上部谷壁の急斜面に単独で検出された竪穴建物である。(第49図)。南側は調査区外に広がる。上層に早里18号墳及びSS20が構築されている。調査区中央部のSII群とは尾根を隔てて50m離れている。確認面上の標高は34.3mを測る。

形状 埋土上層にSS20が構築されているが、遺存状態は良好で、平面形は胴張隅丸方形を呈する。斜面上方を主軸と考えた場合の主軸方位はS-70°-Wである。規模は長軸長4.5m以上、短軸長3.5m、確認面からの深さは最大で80cmを測る。壁面はやや開きながら立ち上がり、床面積は7.3㎡を測る。床面は平坦で、全体に硬化している。

床面中央付近のP5の北側に炉1基が認められた(第50図)。平面形は不整円形を呈し、長軸長40cm、短軸長30cmを測り、深さ8cm程の浅い掘り込みを持つ。燃烧部は中心部と周縁部付近が激しく被熱し、硬化し黒赤色化している。

本址に伴うピットは全部で5基検出された。位置や形状からP1～4を主柱穴とする4本柱構造の建物と考えられる。主柱穴間距離はいずれも2.3mを測る。柱痕跡はP4で直径15cm程のものが認められた。柱掘方は25～60cmを測る。P5は浅いテラス状の掘り込みを持つピットで位置的に中央ピットと考えられる。各ピットの詳細については計測表を参照されたい。壁溝は斜面下方をのぞいてU字形に巡る。幅20～30cm、深さ18cmを測り、断面の形状は浅いU字形を呈し、底面は平坦である。

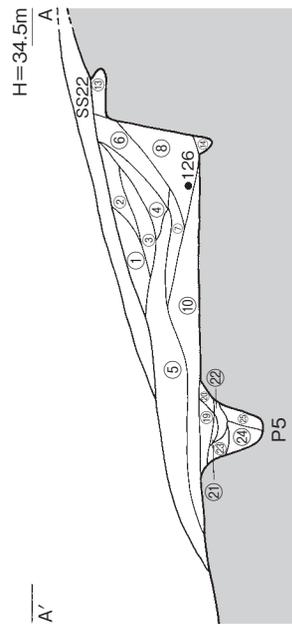
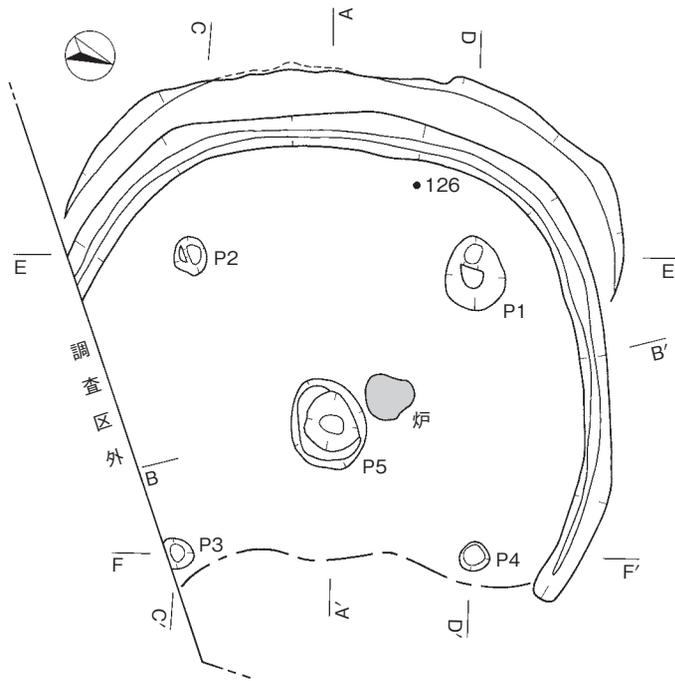
本址斜面の高位側では、竪穴部の外周の地山を削り、幅18～42cm程のテラス状の平坦面が巡っている。このテラス部分の壁面は主軸中央部付近ではオーバーハングしていることから、垂木を竪穴外周部の壁面に斜めに配する伏屋式の構造が考えられる。斜面下方の竪穴部の遺構は後世の削平により失われたものと考えられる。

埋土 暗褐色土を主体とするが、全体的に遺物を全く含まないブロック状の埋土による締まりのない空隙のある堆積であり、人為的に埋められた可能性が高い。削平により失われているが、本址上面には早里18号墳の主体部が存在していたと思われることから、本址は18号墳構築時に一気に埋められた可能性が想定できる。

遺物 前述のように、本址は早里18号墳築造時の攪乱により出土遺物は非常に少なく、僅かに1点が図示し得た。(第51図)。

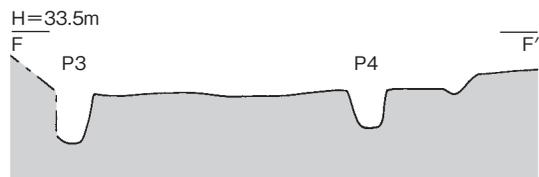
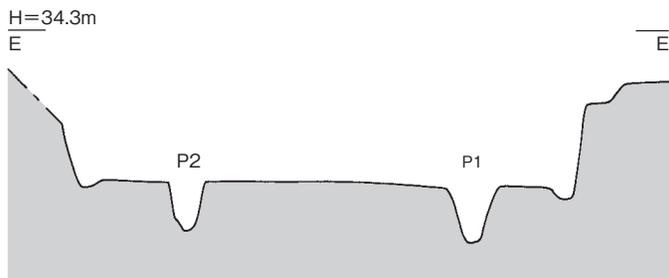
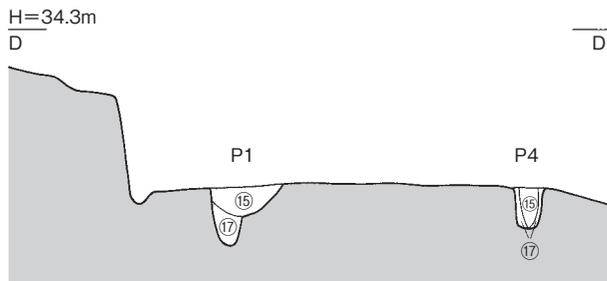
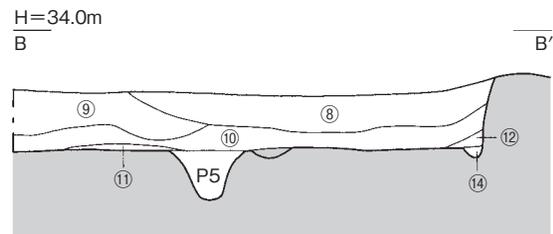
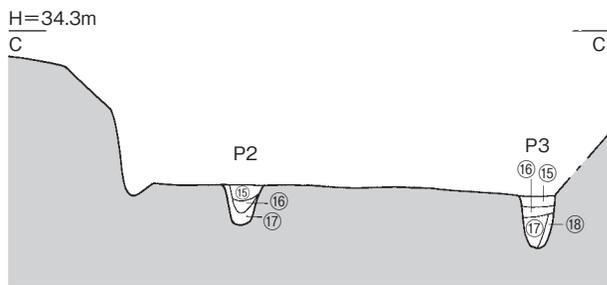
126は埋土下(⑧)層出土の弥生土器の甕である。上下に張り出す複合口縁を呈し、肩部には櫛状工具の小口による連続刺突文が施される。

時期 形状と出土遺物から本址の時期は弥生時代後期後半から終末期頃と考えられる。



SI4
ピット計測表(単位:cm)

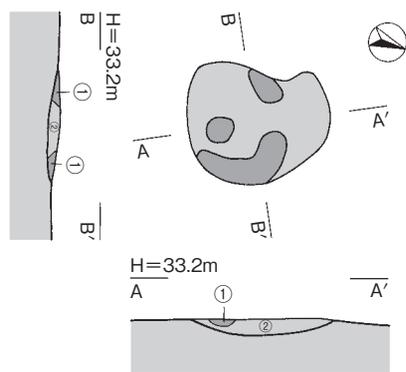
NO	長径	短径	深さ
1	58	46	48
2	32	24	32
3	26	22	42
4	24	22	32
5	76	58	52



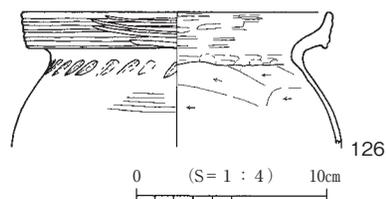
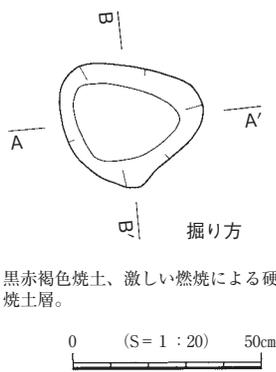
- SI4土層注記
- ① 黒色土、含黄褐色土、縮まり・粘性弱。
 - ② 暗黄褐色土、縮まり・粘性弱。
 - ③ 暗黄褐色土、含黒色土ブロック、縮まり・粘性弱。隙間有り。
 - ④ 暗褐色土、含黄褐色土多量、黒色粒少量。
 - ⑤ 黒色土。
 - ⑥ 黒色土、含暗褐色土・黄褐色土少量。
 - ⑦ 黒褐色土、含黄色ブロック。
 - ⑧ 暗褐色土、含暗黄褐色土少量、縮まり・粘性弱。
 - ⑨ 暗褐色土、含黄褐色土ブロック多量。
 - ⑩ 暗褐色土、含黒色土ブロック・黄色土ブロック。
 - ⑪ 暗褐色土、含黄褐色土少量。
 - ⑫ 暗黄褐色土、含黒色粒少量。
 - ⑬ 暗黄褐色土、含黒色粒・黄色粒多量。
 - ⑭ 暗褐色土。
- ピット土層注記
- ⑮ 黒褐色土。
 - ⑯ 暗褐色土、含黄褐色土少量。
 - ⑰ 暗黄褐色土、含ロームブロック多量。
 - ⑱ 暗黄褐色土。
 - ⑲ 褐色土、含ローム粒少量。
 - ⑳ 黒褐色土、含ロームブロック多量。
 - ㉑ 黄色土。
 - ㉒ 黒明褐色土、含ローム粒少量。
 - ㉓ 褐色土、含ロームブロック多量。
 - ㉔ 黒褐色土、含炭化物・ローム粒。
 - ㉕ 黒色土、含ロームブロック微量。

0 (S = 1 : 60) 2m

第49図 SI4



第50図 SI4炉



第51図 SI4出土遺物

SI5 (第52~55図)

位置 H-4~5グリッド、調査区中央の南西—北東方向に張り出した支尾根南東側頂部に検出された竪穴建物である。(第52図)。北西側3mにSI9が、北側10mにSI7が存在する。確認面上の標高は32.2mを測る。

形状 上面が後世の削平により、遺存状態は悪い。平面形は六角形が推測される。斜面上方を主軸と考えた場合の主軸方位はS-64°-Wである。規模は長軸長6.5m以上、短軸長6.3m以上、確認面からの深さは最大で45cmを測る。壁面はやや開きながら立ち上がり、床面積は25.3㎡を測る。床面は平坦で、全体に硬化している。

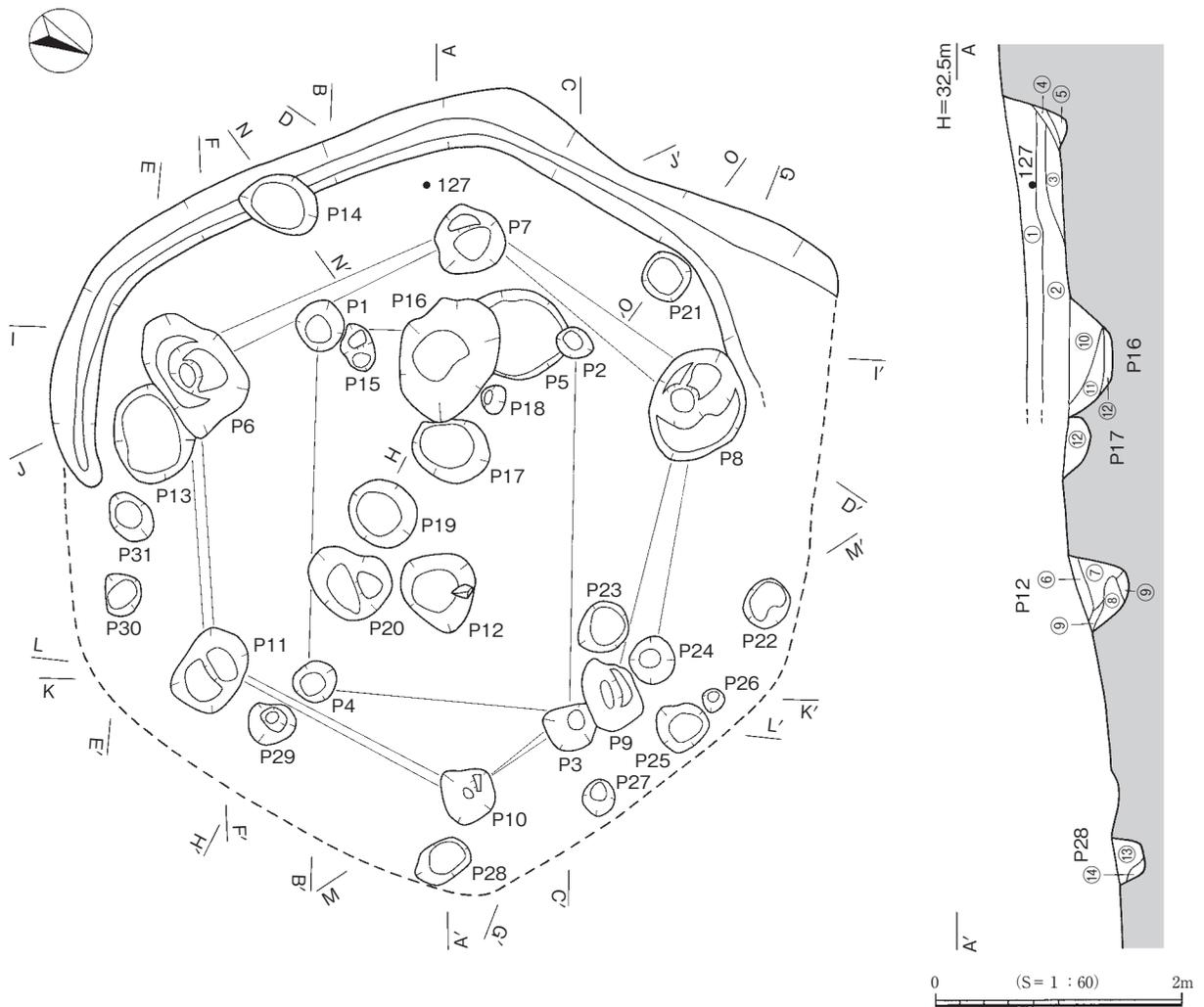
本址に伴うピットは全部で31基検出された。位置や形状から、少なくとも3回程の建て替えが認められる。古段階ではP1~4を主柱穴とする4本柱構造で、その後P6~11を主柱穴とする6本柱構造に拡張される。さらに6本柱構造の段階では、柱の建て替えが認められる。ただし、壁溝などには建て替えの痕跡は認められず、部分的な建て替であったと思われる。4本柱の段階で柱穴間距離は、2.0~3.0m、柱掘方は25~45cm、6本柱の段階で柱穴間距離は1.5~2.5m、柱掘方は35~100cmを測る。なお、P12は6本柱の段階での中央ピットと考えられる。各ピットの詳細については計測表を参照されたい。壁溝は斜面下方をのぞいてU字形に巡る。幅35~50cm、深さ8cmを測り、断面の形状は浅いU字形を呈し、底面は平坦である。

本址は遺存状態が良好ではなかったものの、主柱穴が6本であり、平面形も六角形であることから、SI7と相似形の構造が想定できよう。

埋土 斜面下方は、後世の削平により床面付近まで埋土が失われているが、遺存部分では暗灰褐色土を主体とし、下層より順次正層堆積していることから、自然埋没した状況が考えられる。

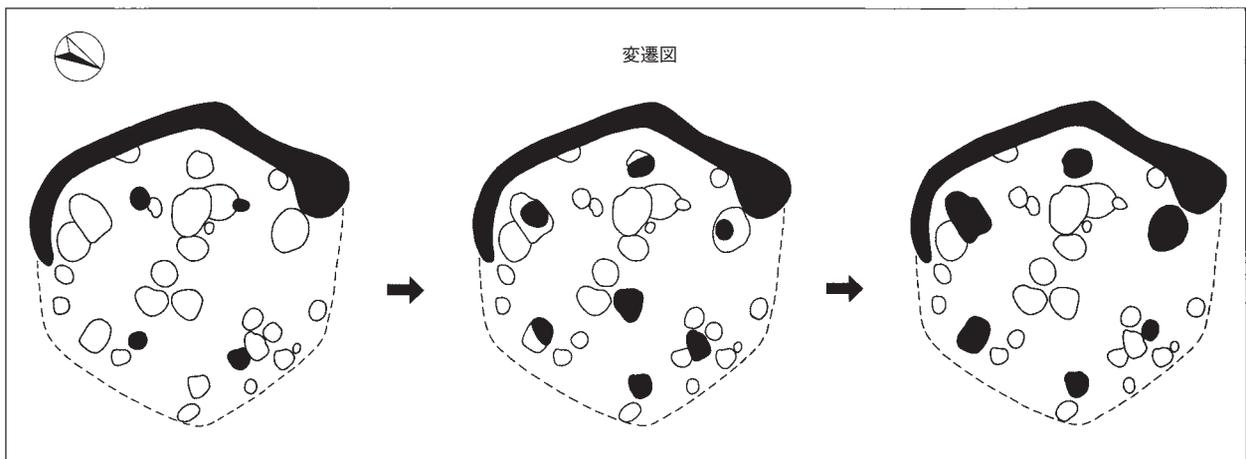
遺物 本址は前述のように後世の削平を受けており、出土遺物は非常に少なく、僅かに1点が図示し得た(第55図)。127は埋土上層出土の甕口縁部破片である。外反する複合口縁を持ち、外面には炊飯時の白吹きこぼれ痕が認められる。

時期 出土遺物が少ないが、形状からSI7と同時期の弥生時代後期後半と考えられる。

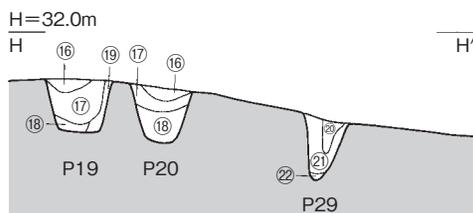
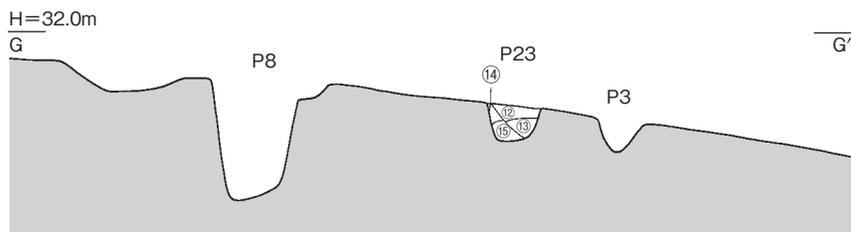
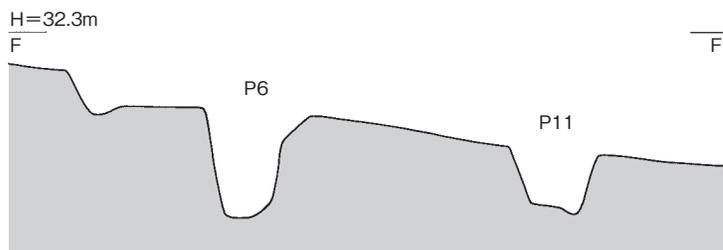
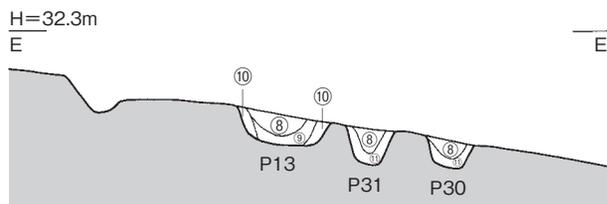
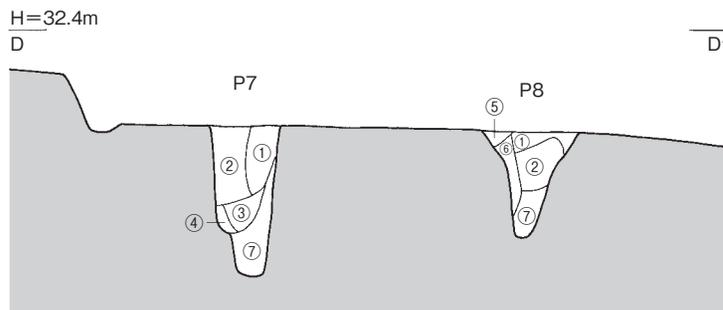
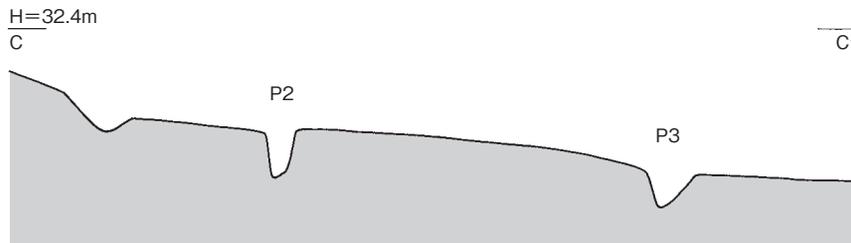
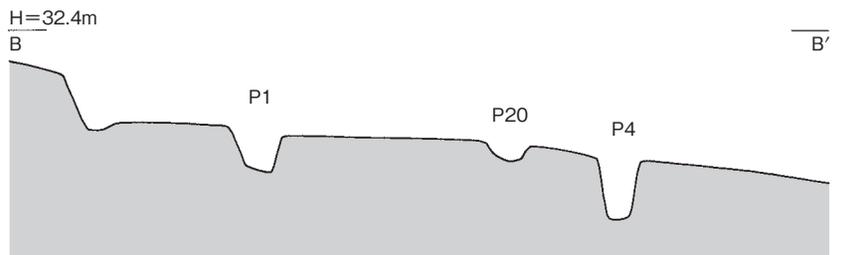


- SI5土層注記
- ① 暗灰褐色土、締まり強。
 - ② 暗灰黄褐色土、含褐色小ブロック、締まり強。
 - ③ 暗灰黄褐色土、含褐色小ブロック多量、締まり強。
 - ④ 暗褐色土、含灰色土。
 - ⑤ 暗灰褐色土、含褐色小ブロック。

- ビット12土層注記
- ⑥ 暗灰褐色土、締まり強。
 - ⑦ 暗灰褐色土、含褐色小ブロック。
 - ⑧ 暗黄白色土。
 - ⑨ 暗灰色土。
- ビット16・17土層注記
- ⑩ 灰褐色土、やや暗め。
 - ⑪ 暗灰褐色土。
 - ⑫ 褐色土。
- ビット28土層注記
- ⑬ 暗褐色土、含黄褐色土・黒褐色土。
 - ⑭ 暗黄褐色土。



第52図 SI5



SI5

ビット計測表(単位:cm)

NO	長径	短径	深さ
1	40	36	28
2	42	23	30
3	44	36	30
4	36	32	50
5	(54)	70	8
6	104	64	96
7	56	48	120
8	96	76	84
9	60	42	60
10	48	40	48
11	68	50	50
12	66	56	50
13	80	66	30
14	66	44	22
15	40	24	37
16	102	74	36
17	64	50	22
18	24	20	13
19	58	50	42
20	70	52	46
21	40	38	12
22	40	34	26
23	44	38	30
24	38	36	22
25	44	34	22
26	20	16	28
27	30	26	53
28	48	30	28
29	40	30	52
30	36	28	28
31	44	32	30

ビット7・8土層注記

- ① やや暗い灰褐色土。
- ② やや暗い褐色土、含炭化物。
- ③ 灰褐色土。
- ④ 暗黄灰色土。
- ⑤ 暗灰褐色土。
- ⑥ 暗灰黄褐色土、含炭化物。
- ⑦ 灰色土。

ビット13・30・31土層注記

- ⑧ 暗灰褐色土、含黄白色ブロック。
- ⑨ 灰黒褐色土、含炭化物。
- ⑩ やや暗い灰褐色土、含黄褐色土。
- ⑪ 暗黄白色土。

ビット23土層注記

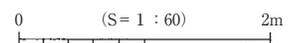
- ⑫ 暗灰褐色土。
- ⑬ 暗灰黄褐色土。
- ⑭ 暗褐色土。
- ⑮ 暗黄白色土。

ビット19・20土層注記

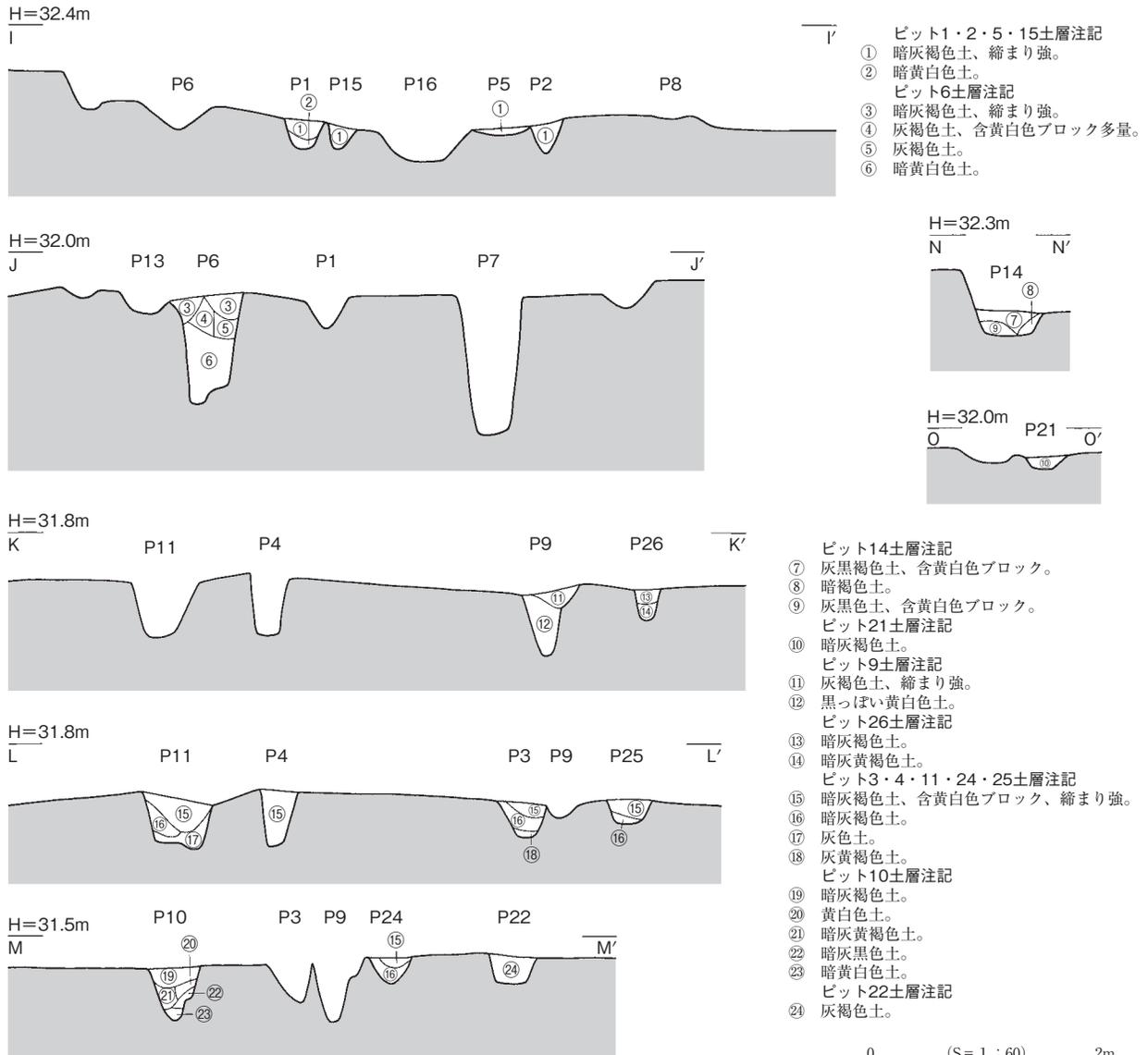
- ⑯ 暗灰褐色土、縮まり強。
- ⑰ 暗灰褐色土、含褐色小ブロック。
- ⑱ 暗黄白色土。

ビット29土層注記

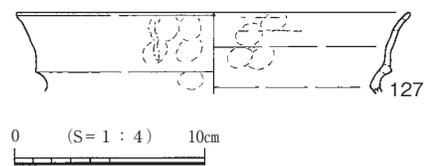
- ⑳ 暗灰褐色土、含褐色小ブロック・炭化物、縮まり強。
- ㉑ 褐色土。
- ㉒ 暗黄白褐色土。



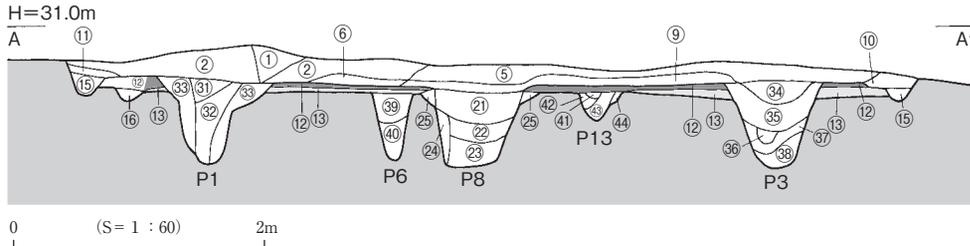
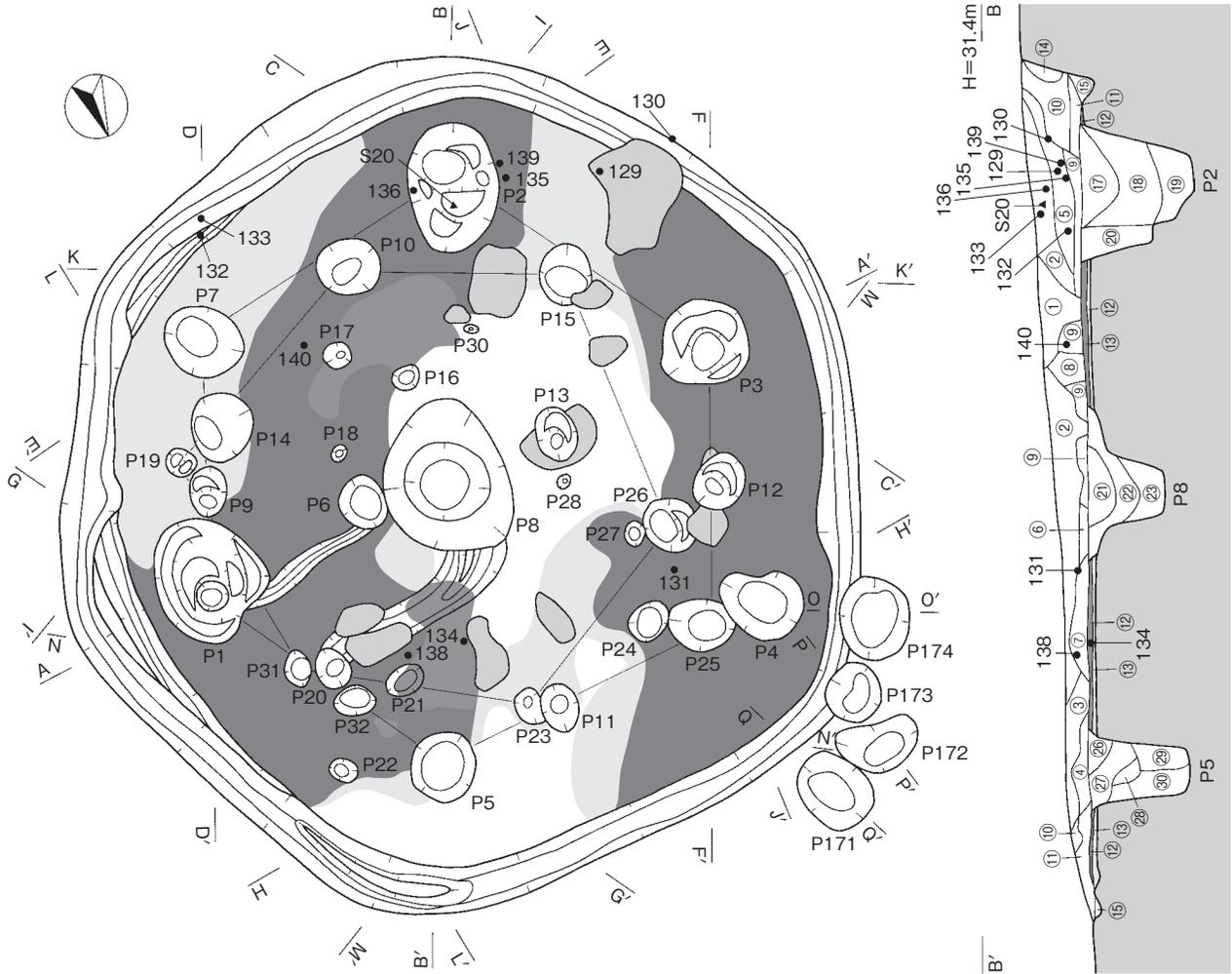
第53図 SI5断面図(1)



第54図 SI5断面図(2)



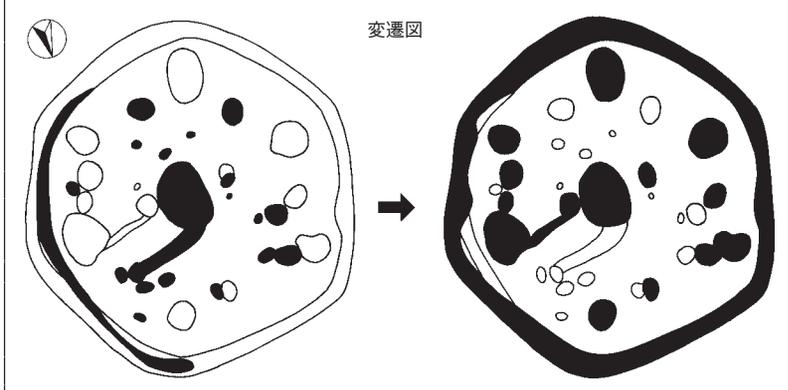
第55図 SI5出土遺物



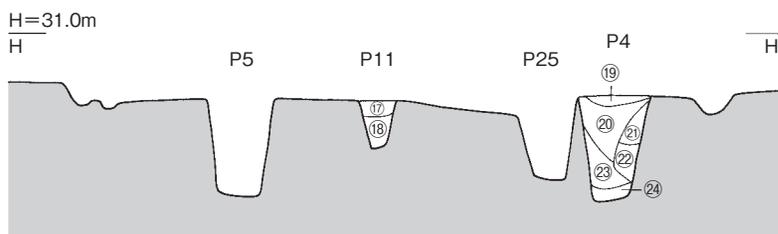
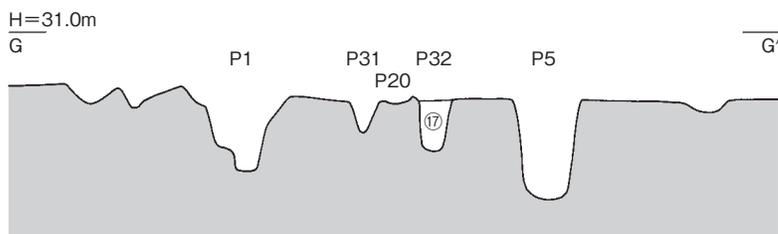
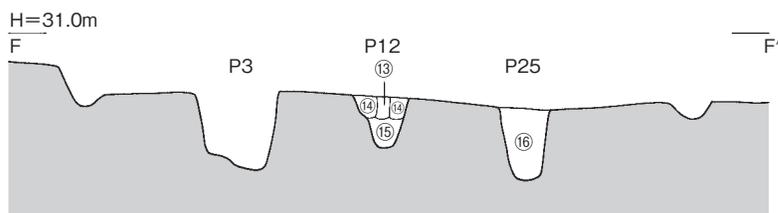
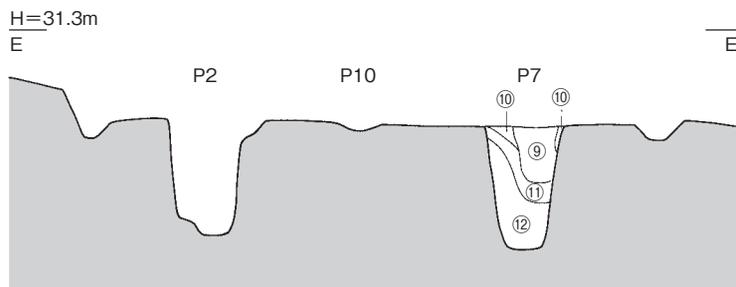
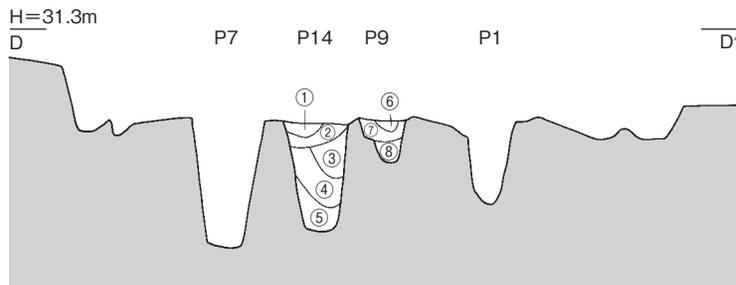
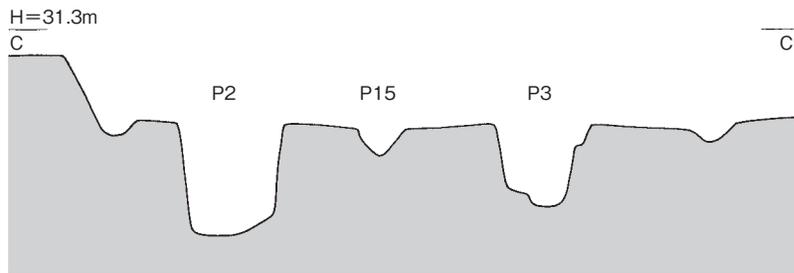
- SI7土層注記**
- ① やや暗い灰褐色土、含明褐色小ブロック。
 - ② やや赤みの強い暗灰褐色土、含褐色土・炭化物、縮まり強。
 - ③ 暗灰褐色土、含褐色ブロック・炭化物少量。
 - ④ 灰褐色土、軟質。
 - ⑤ 暗灰褐色土、含褐色土、縮まり強。
 - ⑥ やや暗い暗灰褐色土、含褐色ブロック。
 - ⑦ やや赤みの強い灰褐色土、軟質。

- ⑧ 灰褐色土、含黄褐色土多量。
- ⑨ 淡黒灰褐色土。
- ⑩ 灰褐色土。
- ⑪ 暗灰褐色土、含炭化物、縮まり強。
- ⑫ 明褐色土、含黒色土・炭化物。貼り床構成土。
- ⑬ 明褐色土、含炭化物、上面に炭層。古い貼り床構成土。
- ⑭ 褐色土、含明黄褐色土。
- ⑮ 暗灰褐色土、含褐色ブロック。
- ⑯ 灰黒褐色土、含褐色小ブロック・炭化物少量。

- ⑰ ビット2土層注記
暗灰褐色土、含褐色土・炭化物。
- ⑱ やや明るい暗灰褐色土。
- ⑲ 暗褐色土。
- ⑳ 暗褐色土、縮まり有り。
- ㉑ ビット8土層注記
暗灰褐色土、褐色小ブロック・炭化物。
- ㉒ 暗灰褐色土、褐色ブロック・炭化物多量。
- ㉓ 灰黒褐色土、含褐色ブロック。
- ㉔ 暗灰褐色土。
- ㉕ 暗灰褐色土、含褐色土。黒灰褐色土。
- ㉖ ビット5土層注記
暗灰褐色土、含炭化物、縮まり強。
- ㉗ やや暗い灰褐色土、含褐色小ブロック。
- ㉘ やや暗い褐色土。
- ㉙ やや暗い灰褐色土。
- ㉚ 暗灰褐色土、含褐色ブロック・炭化物。
- ㉛ ビット1土層注記
黒灰褐色土、含炭化物。
- ㉜ 淡黒灰褐色土。
- ㉝ 暗灰褐色土。
- ㉞ ビット3土層注記
暗灰褐色土。
- ㉟ やや暗い灰褐色土。
- ㊱ 淡黒灰褐色土。
- ㊲ 褐色土。
- ㊳ 暗褐色土。
- ㊴ ビット6土層注記
暗灰褐色土、含炭化物。
- ㊵ 灰褐色土。
- ㊶ ビット13土層注記
暗褐色土、含炭化物。
- ㊷ 暗褐色土。
- ㊸ 暗灰褐色土。
- ㊹ 黒灰褐色土、含炭化物。



第56図 SI7



0 (S = 1 : 60) 2m

SI7
ビット計測表(単位:cm)

NO	長径	短径	深さ
1	104	80	64
2	104	70	92
3	76	68	64
4	70	40	82
5	56	52	82
6	44	36	52
7	68	56	96
8	124	100	60
9	40	28	34
10	52	44	30
11	40	30	36
12	46	40	44
13	44	32	24
14	56	48	88
15	50	42	44
16	23	18	35
17	22	20	27
18	14	10	15
19	24	20	22
20	32	26	34
21	33	22	24
22	24	18	9
23	30	20	26
24	34	28	44
25	56	42	53
26	48	42	42
27	20	15	23
28	12	10	19
30	12	6	9
31	30	20	30
32	36	24	40
171	66	50	30
172	68	36	24
173	48	42	20
174	68	56	28

ビット14土層注記

- ① 褐色土、含灰褐色土、縮まり強。
- ② 暗灰褐色土。
- ③ 暗褐色土。
- ④ 灰褐色土、粘性有。
- ⑤ 灰褐色土、縮まり強。

ビット9土層注記

- ⑥ 暗灰褐色土、縮まり強。
- ⑦ 灰褐色土、含褐色ブロック、炭化物。
- ⑧ やや暗い灰褐色土。

ビット7土層注記

- ⑨ 暗灰褐色土、縮まり強。
- ⑩ 暗褐色土。
- ⑪ 暗灰褐色土、含褐色ブロック。
- ⑫ 褐色土、含灰褐色土少量。

ビット12土層注記

- ⑬ 暗灰褐色土、縮まり強。
- ⑭ 暗褐色土、縮まり強。
- ⑮ 暗灰褐色土、含褐色ブロック・炭化物、縮まり強。

ビット25土層注記

- ⑯ 黒褐色土。

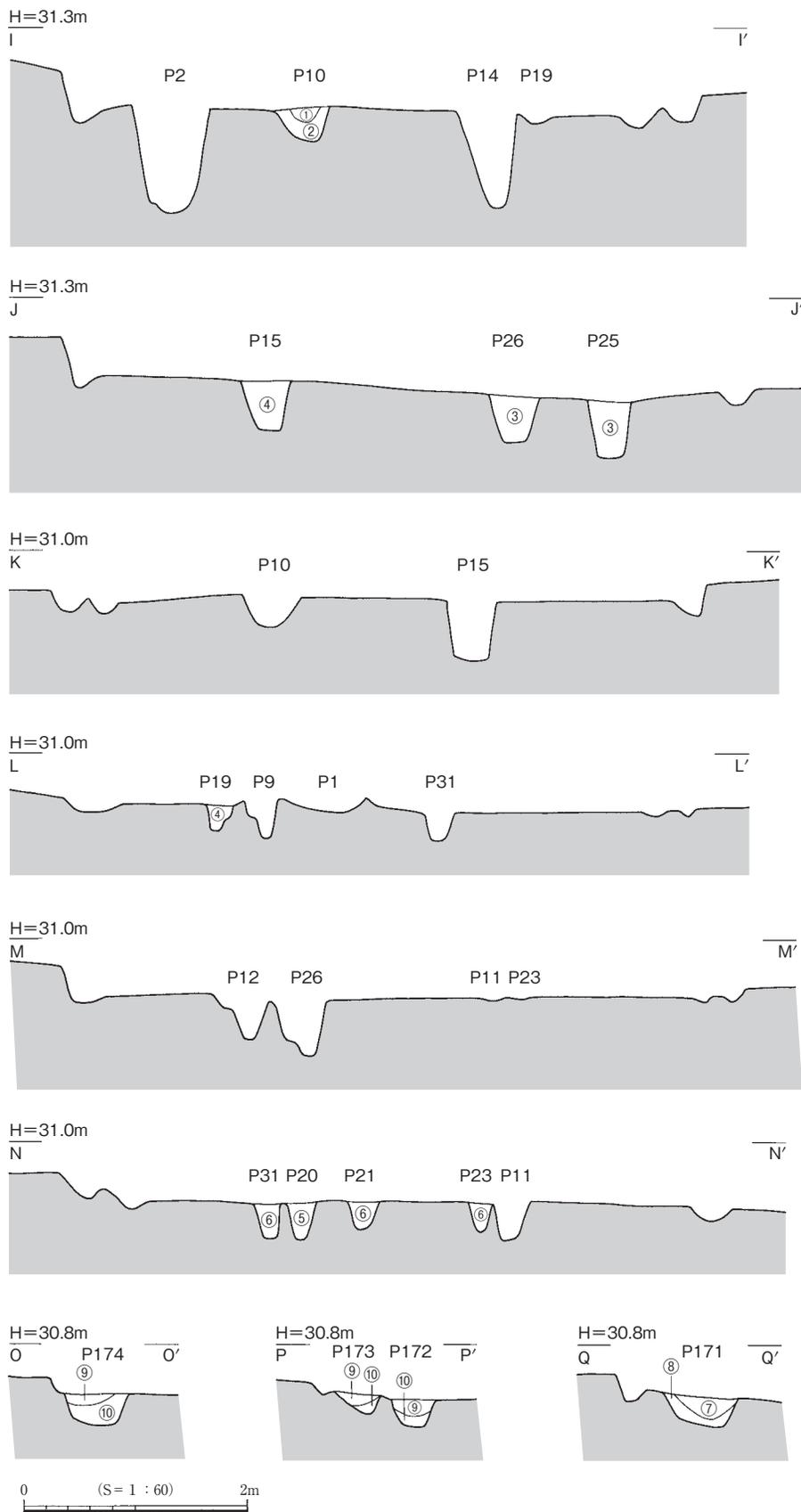
ビット11・32土層注記

- ⑰ 暗灰褐色土、含炭化物。
- ⑱ 暗褐色土。

ビット4土層注記

- ⑲ 暗灰褐色土、含褐色小ブロック・炭化物、縮まり強。
- ⑳ 暗灰褐色土、含褐色小ブロック・炭化物。
- ㉑ 黒灰褐色土、含褐色土。
- ㉒ 褐色土。
- ㉓ 淡黒灰褐色土。
- ㉔ 黄白色土、含黒灰色。

第57図 SI7断面図(1)



- | | |
|-------------------------------|-------------------------------|
| ① 暗灰褐色土、含褐色ブロック、締まり強。 | ⑥ ビット21・23・31土層注記
暗灰褐色土。 |
| ② 暗褐色土。 | ⑦ ビット171土層注記
暗灰褐色土。 |
| ③ ビット25・26土層注記
黒褐色土。 | ⑧ やや暗い褐色土。 |
| ④ ビット15・19土層注記
暗灰褐色土。 | ⑨ ビット172・173・174土層注記
灰褐色土。 |
| ⑤ ビット20土層注記
暗灰褐色土、含褐色ブロック。 | ⑩ やや暗い明褐色土、含黄白色ブロック。 |

第58図 SI7断面図(2)

SI7 (第56~59図)

位置 I~J-4グリッド、調査区中央の南西—北東方向に張り出した支尾根北西側頂部に検出された竪穴建物である。(第56図)。南側10mにSI5が存在する。確認面上の標高は31.1mを測る。

形状 表土直下に検出され、斜面下位は床面付近まで後世の削平が及んでいる。平面形は六角形を呈し、大きく新旧二時期の建て替えが認められる。斜面上方を主軸と考えた場合の主軸方位は古段階がS-62°-E、新段階がS-42°-Eである。規模は長軸長6.9m、短軸長6.3m、確認面からの深さは最大で50cmを測る。壁面はやや開きながら立ち上がり、床面積は27.3㎡を測る。床面は平坦で、上下2枚の貼床が検出された。いずれも厚さ4~8cm程で、下層の貼床には炭化物が層状に認められ、全体に硬化している。

本址に伴うピットは全部で35基検出された。位置や形状から、少なくとも2回以上の建て替えが認められ、古段階ではP19・10・15・26・23・31、その後P1・7・2・3・

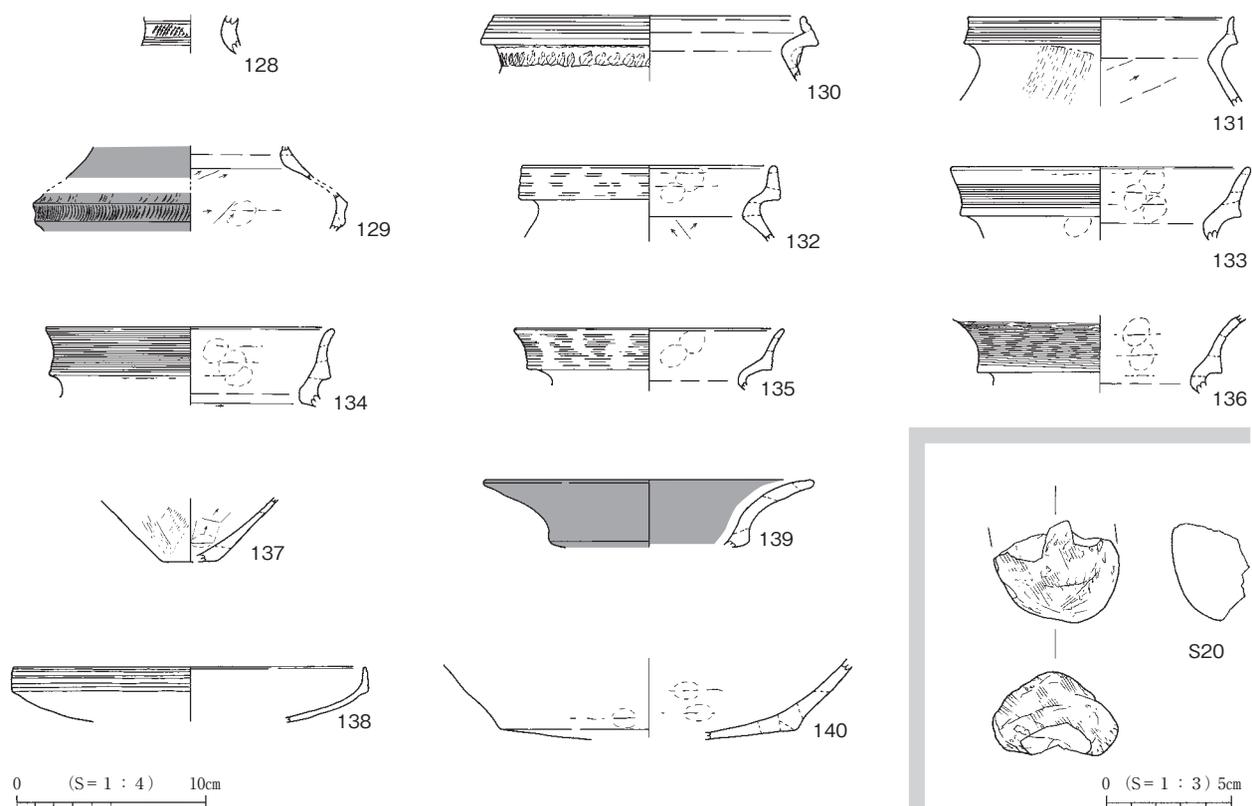
25・5を支柱穴とする6本柱構造の建物と考えられる。柱穴間距離は、古段階が1.8～2.1m、新段階は2.2～2.5m、柱掘方は古段階が25～50cm、新段階が55～110cmを測り、新段階の方が規模が拡張されている。P6・8はそれぞれの段階の中央ピットと考えられる。この中央ピットからはP1・20に向かって幅12～30cm、深さ8cm程の溝が掘り込まれている。この溝はいずれも斜面下方側に延びており、排水の目的であった可能性がある。また、斜面下方側の建物外部に接して、ピット4基（P171～174）が検出された。位置的に見て、入口施設に伴うピットの可能性が考えられる。各ピットの詳細については計測表を参照されたい。壁溝は全周し、一部で掘り直しが認められる。幅20～50cm、深さ8cmを測り、断面の形状は浅いU字形を呈し、底面は平坦である。

本址は、支柱穴が6本あり、平面形も六角形であることから、SI7と相似形の構造が想定できよう。

埋土 暗灰褐色土を主体とし、下層より順次正層堆積していることから、自然埋没した状況が考えられる。また、本址古段階の床面上には、焼土混じりの炭化物が層状に堆積していること、新段階の床面直上にも焼土、炭化物が堆積していることから、建て替え時と廃絶時に火を受けたものと考えられる。

遺物 本址からは、埋土中～上層を中心に遺物が出土している。このうち14点が図示し得た（第59図）。128～129は弥生土器の装飾壺、128は頸部の沈線区画内に、貝殻腹縁により連続施文される。129は算盤状の胴部最大径部位に、2条の突帯に区画された連続爪形文が施される。130～137は甕、複合口縁部が内傾するもの、直立するもの、外反するものがある。138～140は高坏、138は口縁端部が緩く内湾する。139～140は有段のものである。S20は軽石製の砥石、遺存部の全体を使用している。

時期 埋土下層出土の遺物から、本址の時期は弥生時代後期後半～終末期と考えられる。

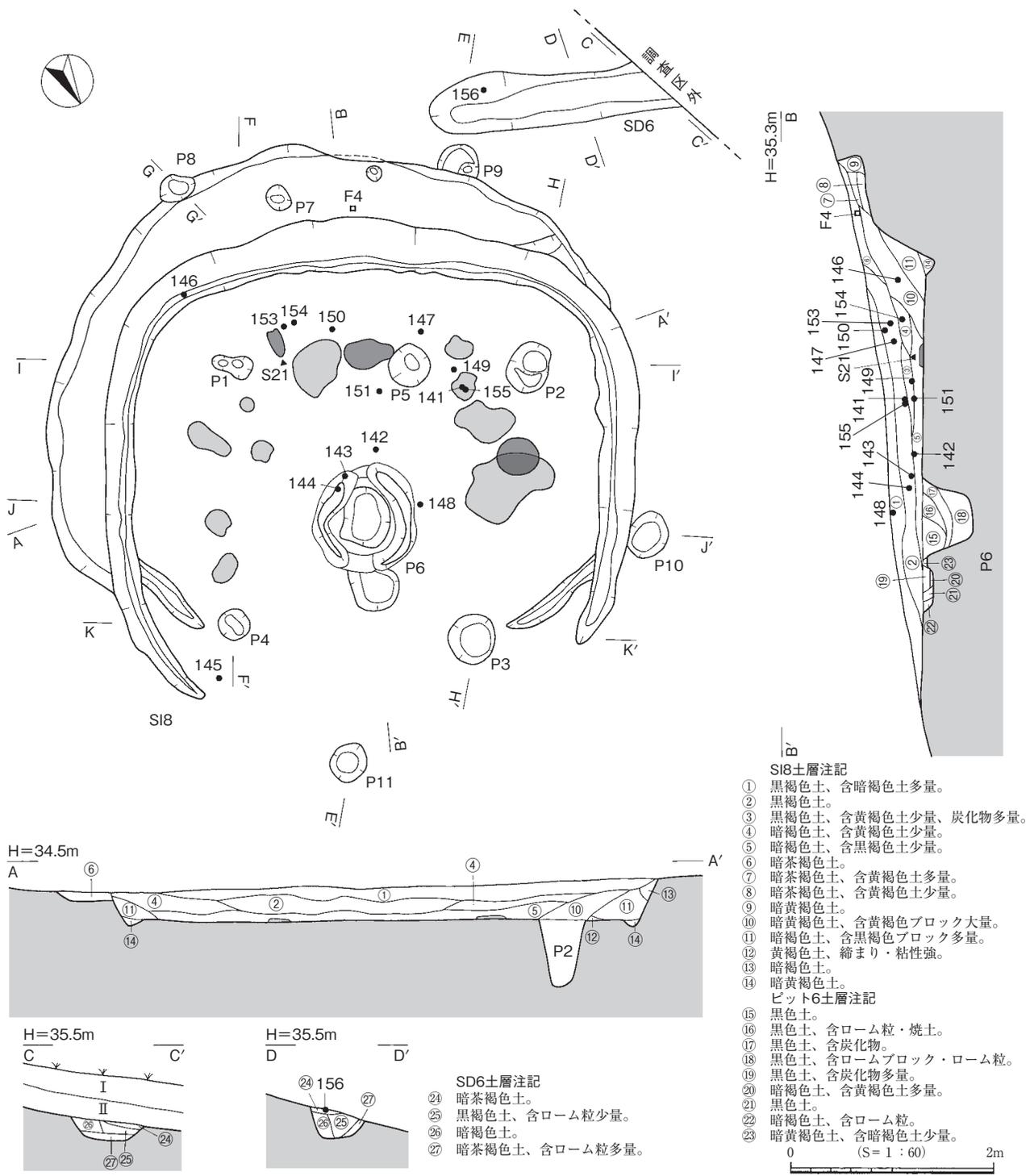


第59図 SI7出土遺物

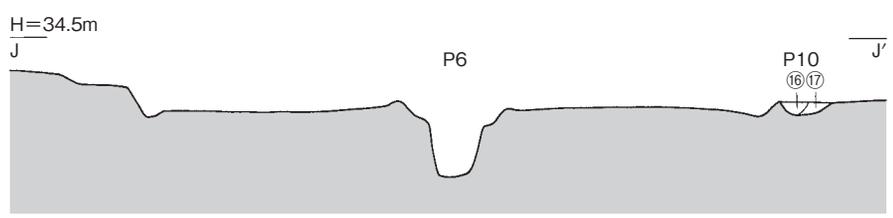
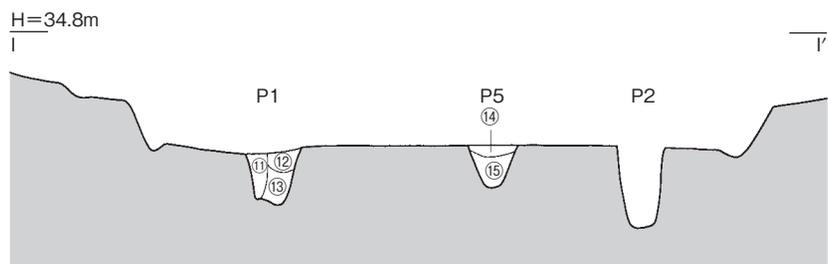
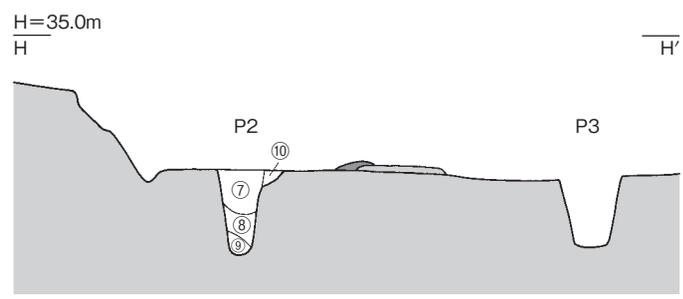
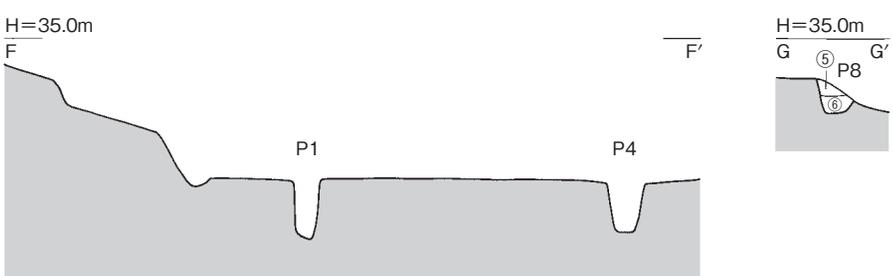
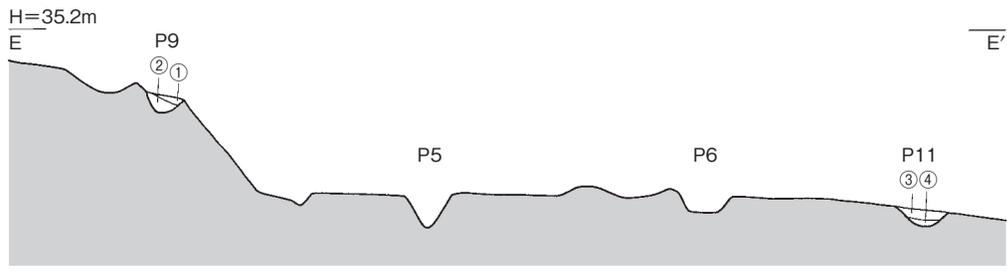
SI8 (第60~62図)

位置 G~H-3グリッド、調査区中央の南西—北東方向に張り出した支尾根頂部に検出された竪穴建物である。(第60図)。東側10mにSI5が、南側1mにSS13・14が存在する。確認面上の標高は34.7mを測る。

形状 遺存状態は良好で、平面形は隅丸方形を呈する。斜面上方を主軸と考えた場合の主軸方位はS-29°-Wである。規模は長軸長5.6m、短軸長5.2m、確認面からの深さは最大で60cmを測る。壁面は開きながら立ち上がり、床面積は15.5㎡を測る。床面は平坦で、全体に硬化している。支柱穴間の床面には直径25~85cm程の不整円形な被熱痕が10か所認められた。いずれも面上はよく焼けて赤褐色に硬化しているが、掘り込みなどは認められない。



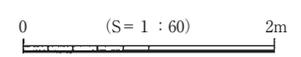
第60図 SI8・SD6



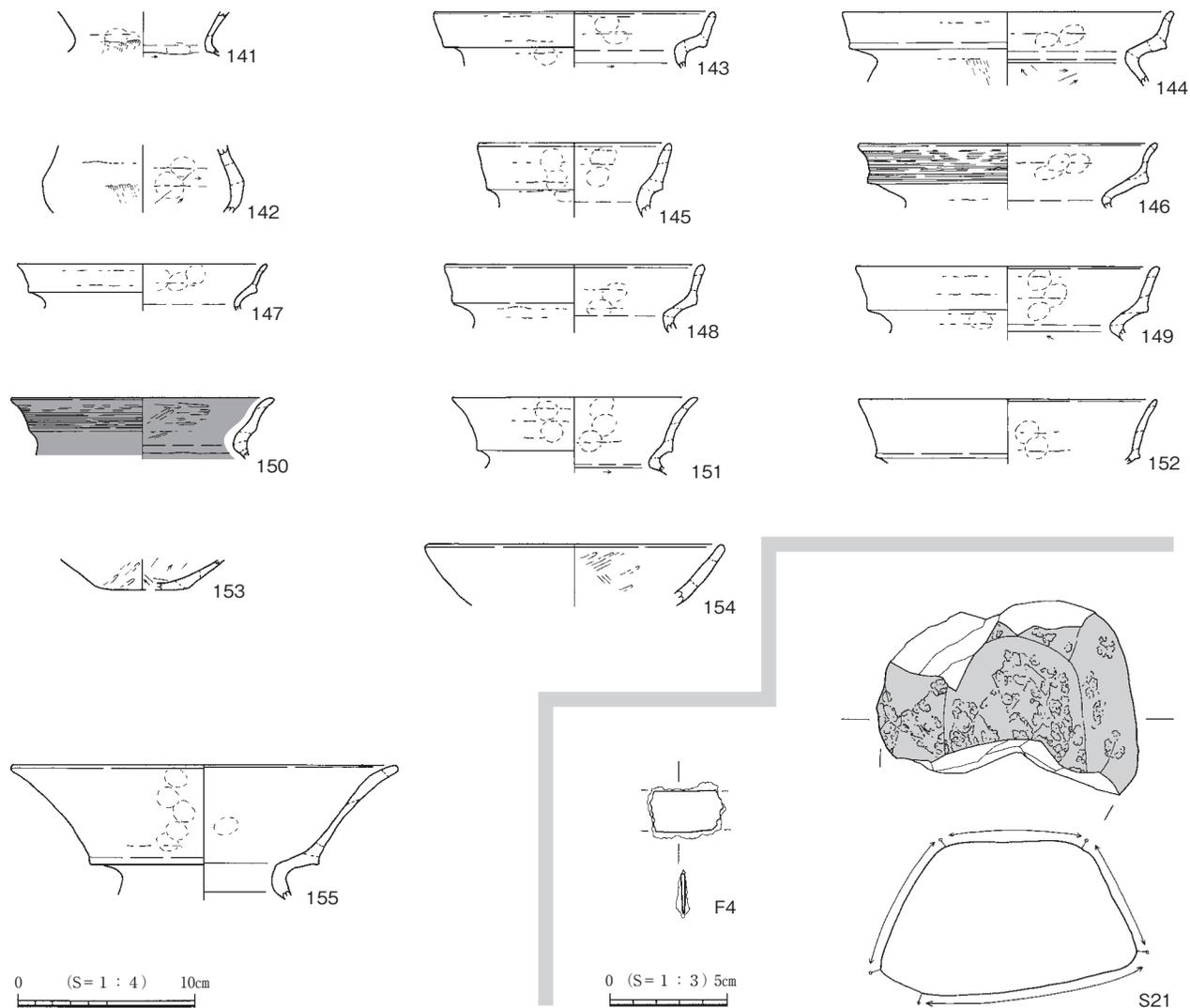
- ビット9土層注記
- ① 黒褐色土。
- ② 暗黄褐色土、含暗褐色土少量。
- ビット11土層注記
- ③ 暗褐色土、含ローム粒少量。
- ④ 暗黄褐色土。
- ビット8土層注記
- ⑤ 暗黄褐色土。
- ⑥ 暗褐色土。
- ビット2土層注記
- ⑦ 黒褐色土、含黄褐色土少量。
- ⑧ 暗褐色土、含黄褐色土多量。
- ⑨ 暗黄褐色土、含ローム粒多量。
- ⑩ 暗褐色土、含ロームブロック多量。
- ビット1土層注記
- ⑪ 暗褐色土、含ローム粒多量。
- ⑫ 暗褐色土、含黒褐色土少量。
- ⑬ 暗褐色土、含ローム粒少量・黒褐色土多量。
- ビット5土層注記
- ⑭ 黒色土、含炭化物多量。
- ⑮ 黒色土、含黄褐色土少量。
- ビット10土層注記
- ⑯ 黒褐色土、含黄褐色土少量。
- ⑰ 暗褐色土、含黄褐色土少量。
- ビット3・4土層注記
- ⑱ 黒色土、含暗黄褐色土少量。
- ⑲ 黒灰色土、含ロームブロック。
- ⑳ 暗黄褐色土、含ローム粒多量。

S18
ビット計測表(単位:cm)

NO	長径	短径	深さ
1	40	13	46
2	50	36	68
3	50	46	52
4	30	28	38
5	40	38	34
6	142	46	50
7	26	20	12
8	38	24	26
9	(30)	40	18
10	48	40	10
11	40	34	18



第61図 S18断面図



第62図 SI8出土遺物

本址に伴うピットは全部で11基検出された。位置や形状から、P1～4を主柱穴とする4本柱構造の建物と考えられる。このうち斜面上方のP1・2に掘り替えが認められる。主柱穴間距離は2.2～2.8m、柱掘方は25～50cmを測る。また、P5・11は竪穴部中央にあり、位置的に棟持柱と考えられる。また、P6は高さ8cmの地山を削り残した周堤と浅いテラス状の掘り込みを持つピットで、位置的に中央ピットと考えられる。各ピットの詳細については計測表を参照されたい。壁溝は斜面下方を除いてU字形に巡る。幅18～30cm、深さ8cmを測り、断面の形状は浅いU字形を呈し、底面は平坦である。斜面下方では、この壁溝から派生する溝が主柱穴P3・4に向かって掘り込まれている。この溝が入口施設に伴うものだとすると、本址は斜面下方を切妻屋根とした上屋構造が想定できよう。

本址斜面上方側では、竪穴部の外周の地山を削り、幅50cm程のテラス状の平坦面が巡っている。このテラス部分の壁面は部分的にオーバーハングしている。垂木を竪穴外周部の壁に配する構造であるとする、伏屋式の構造が考えられる。なお、本址南西側に接してSD6が掘り込まれている。位置的に本址に関連する遺構と考えられる。

埋土 黒褐色土を主体とし、下層より順次正層堆積していることから、自然埋没した状況が考えられる。斜面上方壁際の暗黄褐色土(⑩層)の堆積は屋根土が崩落したものであろうか。

遺物 本址からは中～下層を中心に遺物が出土している。このうち17点が図示し得た。(第62図)。141は小型の直口壺、「く」の字状に屈曲する頸部に、口縁は直線的に外傾する。142は小型壺、胴部

中位に最大径を持つ。143～153は複合口縁の甕、口縁部は外反し、複合部下端は僅かに下垂するものがある。また、複合部に櫛状工具による沈線がナデ消されるものもある。154は高坏、坏部は内湾気味である。155は鼓形器台の受部、口縁端部は外反する。

F4は鉄製の刀子の刃部破片である。S21は角礫凝灰岩製の台石、方形の素材の全体を使用している。

時期 出土遺物と形状から、本址の時期は弥生時代終末期頃と考えられる。

SD6 (第60・63図)

位置 G-3グリッド、調査区中央の南西―北東方向に張り出した支尾根頂部に検出された溝状遺構である。(第60図)。北東側に接してSI8が存在する。確認面上の標高は35.0mを測る。

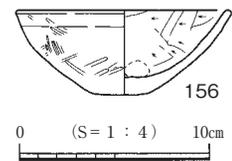
形状 北西―南東方向に直線的に伸び、北西端は調査区外に延びる。長軸方位はN-68°-Wである。規模は最大長2.5m、最大幅0.6m、確認面からの深さは最大で30cmを測る。南東端は緩やかに立ち上がる。断面の形状はU字形を呈し、底面は平坦である。

付近は後世の削平が地山近くまで及んでおり、本址についても斜面下方の南東側については削平された可能性がある。

埋土 遺存部分では自然埋没の様相を呈し、堆積状況からは流水の痕跡は認められない。

遺物 本址からは僅かに1点が図示し得た(第63図)。156は埋土上層出土の鉢、体部はやや内湾気味に外傾し、口縁端部は直線的である。

時期・性格 僅かな出土遺物からの時期比定は困難であるが、遺存部の状況からSI8と関連性が高く、同時期の弥生時代終末期の排水などを目的とした溝状遺構である可能性が考えられる。



第63図 SD6出土遺物

2) 段状遺構

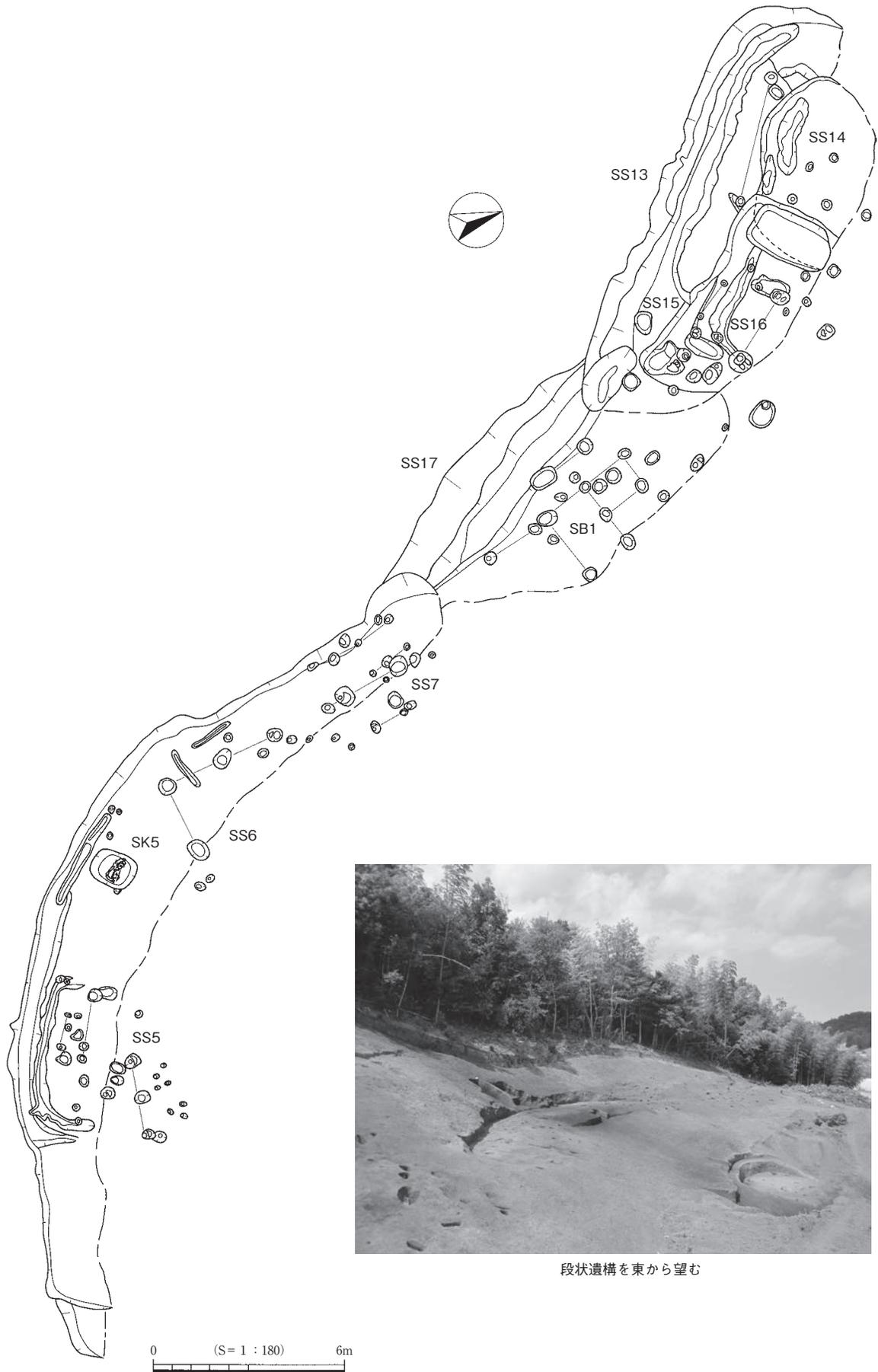
SS5～7

D～E-5～6グリッド、調査区中央の南西―北東方向の谷頭斜面に検出された一連の段状遺構である。(第64図)SS13～17の南側に続き、等高線に沿って細長く伸びる形状を呈する。調査の結果、何段かの段状遺構が切り合っていることが判明した。土層観察による新旧関係では、SS7をSS6が切っているが、SS5・6に関しては新旧二時期のうち、新段階では両址にまたがって貼床が構築されており、その新旧関係の判別は非常に困難であった。また、この段状遺構の廃絶後の埋土にはSK5が掘り込まれており、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけて同一の平場を何時期にも亘って継続して使用していたことが推測できる。以下に遺構ごとに詳細を述べることとする。

SS5 (第64～68図)

位置 D-6グリッドに検出された段状遺構である(第65図)。SS6とほぼ同時期で、上層にSK5が掘り込まれる。南東側4.0mの同一等高線上にSS10が存在する。確認面上の標高は36.9mを測る。

形状 斜面の高位側の地山をL字状に削り、平坦面を形成している。全体的な平面形は等高線に沿って円弧状に長く伸びる形状を呈するが、精査の結果、新旧二段階の使用状況が判明した。まず、古段階では溝などで区画された4基程の長方形の区画が連続する。ただし、各区画に明瞭な壁面は認められなかった。この段階では、地山上の南壁中央部分の壁際に幅18～80cm、深さ25cm程の壁溝が検出さ



第64図 SS5~7・13~17

れた。この壁溝は北側では段差を持ち、幅も狭くなる。この壁溝は南東端で斜面下方に向かって屈曲している。さらにその内側にも幅30cm、深さ10cm程の溝がコの字状に巡る。溝底面はいずれもほぼ平坦である。これらの壁溝は古段階の区画などを目的とした溝と考えられる。

本址に伴うピットは22基である。コの字状の区画溝の内側に集中していることから、この溝の内側に何らかの構造物が存在した可能性が考えられる。このうちP1・2、P3・4、P5～7は壁溝に平行していることから柱穴列の可能性もある。この溝が壁材を据えた溝であれば、小屋掛けの簡易な建物の可能性も考えられよう。この他にも直径15～20cm程の小ピット9基が検出された。溝の内側という位置と、上面に貼床が構築されているピットもあることから、建物を含むこれらのピットは古段階に帰属するものと考えられる。詳細はピット計測表を参照されたい。

新段階では、面全体に貼床が構築される。埋土も同一であることから、この段階では一連の段状遺構として使用されていたものと判断した。傾斜面の等高線に直交する方向を主軸と考えた場合の、主軸方位はS-59～76°-Eである。規模は長軸17.5m、短軸3.7m、確認面からの深さは最深部で150cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、床面積は32.1㎡を測る。

床面は水平で、北側部分では黒褐色土による貼床が検出されたが、この貼床は古段階の壁溝上に貼られていること、SS6部分にも伸びていることから、新段階での構築と考えられよう。

埋土 黒褐色土を主体とし、下層より順次堆積していることから、自然埋没の様相を呈する。黒色土(⑧層)は貼床で、壁際の明褐色土(⑨・⑩層)は掘り方の埋土の可能性が考えられる。

遺物 本址からは弥生土器を中心に多くの遺物が出土した(第68図)。このうち20点が図示し得た。

157は小型壺、頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁は直線的に外反する。158は小型の甕の胴部と考えられる。159～168は甕、いずれも複合口縁を持つ。口縁帯の幅はやや広く、直立するものと外反するものがある。上下端部が直立気味に張り出すタイプと、下端が形骸化しているタイプがあり、櫛描沈線はナデ消されるものが多い。169～171は高坏、169は口縁が内湾気味に立ち上がる。

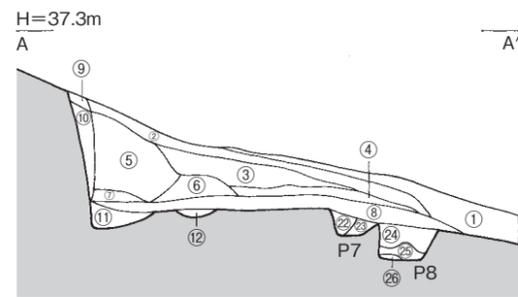
石器は床面直上出土の台石が多い。S22は粘板岩製の砥石、仕上砥で、長方形の素材の表裏面と左側面部を使用している。S23・24・26はデイサイト製の台石、いずれも扁平な河原石の全体を使用している。S23の上面には方形の敲打痕とその周囲に被熱痕が認められる。S25は安山岩製の台石の破片、方形の素材の全体を使用している。このように、台石や砥石の出土量の多さは、この段状遺構の性格を表していると言えよう。

時期・性格 出土遺物と形状から、本址は弥生時代後期後半から終末期にかけて、継続して使用された段状遺構と考えられる。

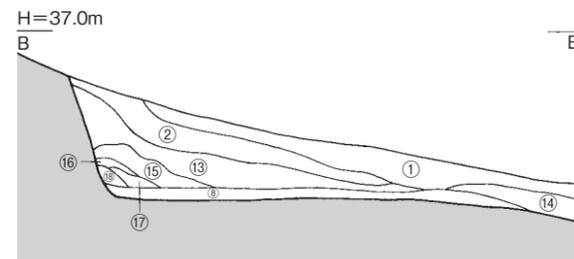
SS6 (第64～70図)

位置 D-5グリッドに検出された段状遺構である(第65図)。SS5とほぼ同時期で、SS7を切り、上層にSK5が掘り込まれる。確認面上の標高は36.5mを測る。

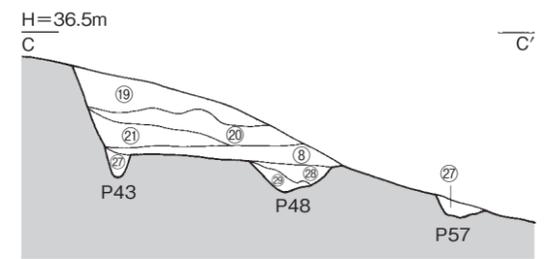
形状 斜面の高位側の地山をL字状に削り、平坦面を形成している。平面形は等高線に沿って円弧状に長く伸びる形状を呈し、精査の結果、新旧二段階の使用状況が判明した。まず、古段階では2基程の長方形の区画の連続である。ただし、この段階での各区画に明瞭な壁面は認められなかった。



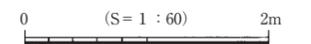
- | | |
|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>SS5土層注記</p> <p>① 灰褐色土。
 ② 暗灰黒褐色土、含褐色土多量。
 ③ 淡黒褐色土、含褐色土多量。
 ④ 明黄褐色土、含黒色土。
 ⑤ 黒褐色土、含褐色土。
 ⑥ 黒灰褐色土。
 ⑦ 暗刻灰褐色土、含褐色土。
 ⑧ 黒色土、締まり強。
 ⑨ 明褐色土、含黒色土。
 ⑩ 明褐色土。
 ⑪ 黒色土、含褐色土。
 ⑫ 黒色土、含褐色小ブロック。</p> | <p>ビット7・8土層注記</p> <p>⑭ 黒灰褐色土。
 ⑮ 暗灰褐色土。
 ⑯ 黒色土。
 ⑰ 暗褐色土。
 ⑱ 淡黒色土。</p> |
|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|



- SS6土層注記**
- ⑬ 黒灰褐色土、含褐色ブロック。
 ⑭ 淡黒色土。
 ⑮ 淡暗灰黒褐色土、含褐色土。
 ⑯ 黒灰褐色土。
 ⑰ 淡暗灰褐色土。
 ⑱ 暗褐色土、含灰黒褐色土。



- | | |
|------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>SS7土層注記</p> <p>⑲ 暗灰褐色土、粘性弱。
 ⑳ 暗灰黒褐色土、粘性弱。
 ㉑ 灰黒褐色土、粘性弱。</p> | <p>ビット43・48・57土層注記</p> <p>⑳ 淡黒灰色土。
 ㉒ 灰褐色土。
 ㉓ 褐色土、含黒色土少量。</p> |
|------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------|



第65図 SS5~7

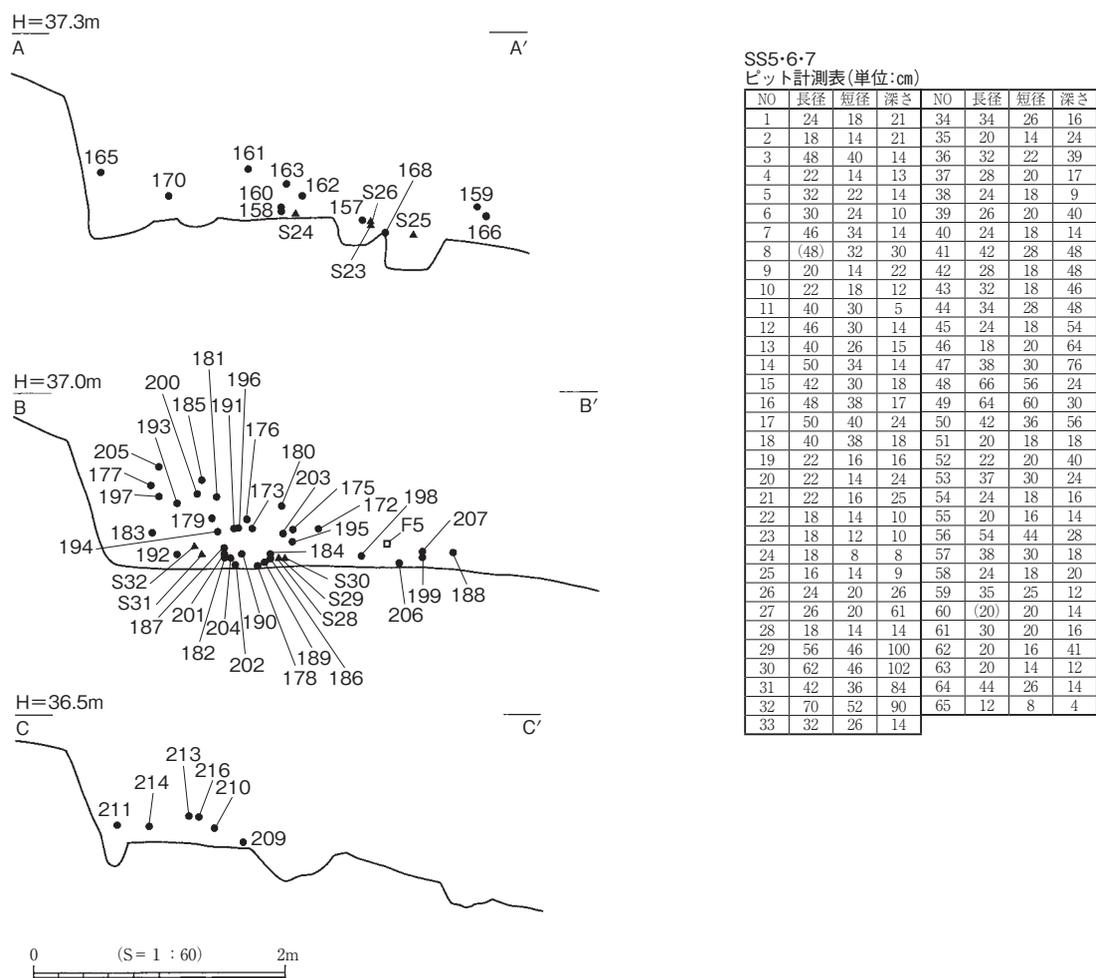
新段階では、面全体にSS5から続く貼床が構築される。埋土も同一であることから、この段階では一連の段状遺構として使用されていたものと判断した。傾斜面の等高線に直交する方向を主軸と考えた場合の主軸方位はS-36~18°-Eである。規模は長軸8.2m、短軸3.5m、確認面からの深さは最深部で140cmを測る。壁は僅かに開きながら立ち上がり、床面積は16.0㎡を測る。

床面は水平で、南側部分では黒褐色土による貼床が検出されたが、この貼床はSS5部分にも伸びていることから、新段階での構築と考えられよう。面上には直径40~50cm程の焼土が検出された。また、斜面上方の壁に直交、及び平行する溝2条が検出された。長さ150cm、幅15~20cm深さ10cm、断面U字形を測る。この溝は掘立柱建物の主軸方位とは異なることから、古段階のものと考えられる。

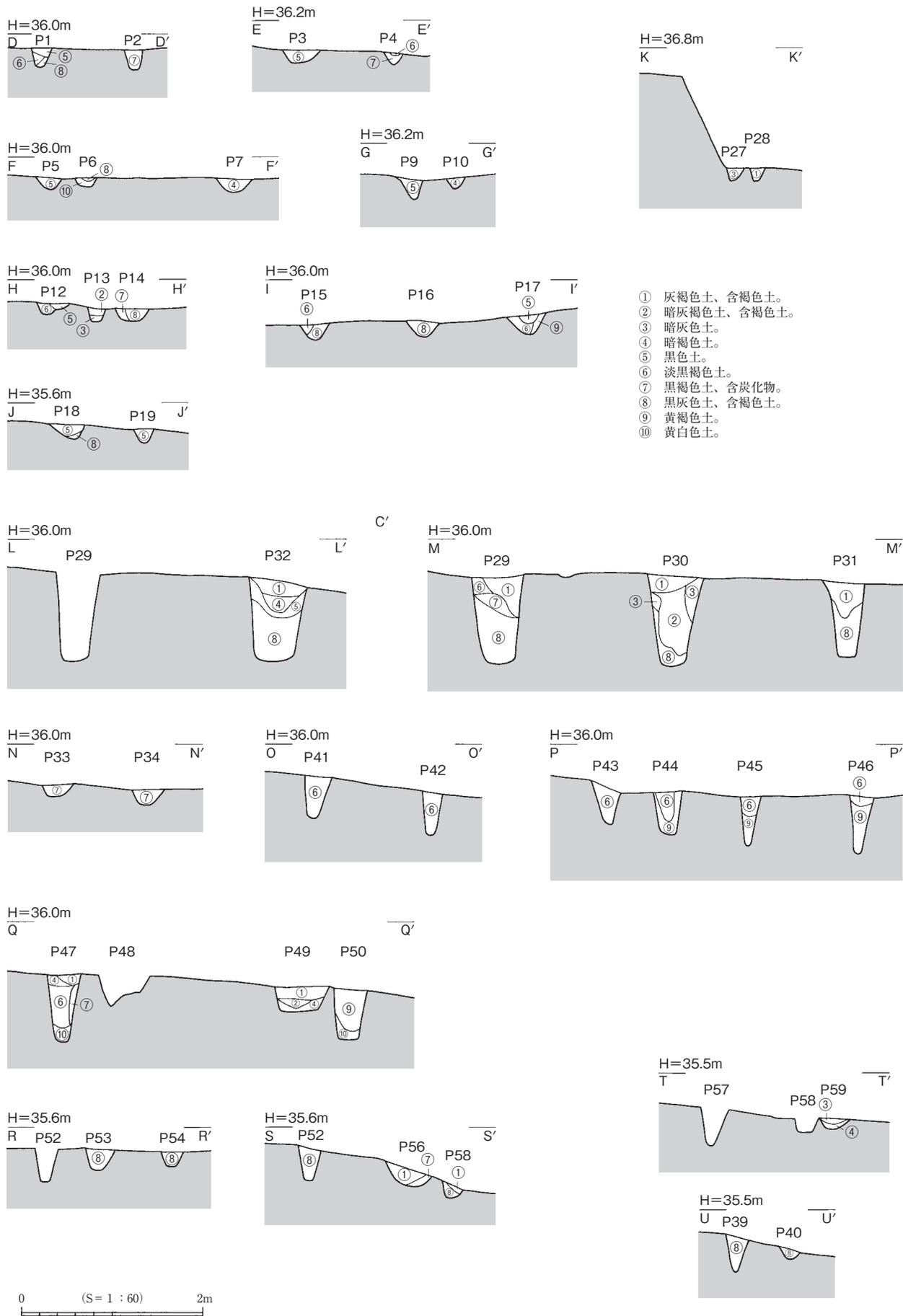
本址に伴うピットは13基である。このうちP29~32は位置や形状から桁行2間、梁行1間の側柱の掘立柱建物の可能性が考えられるが、北東隅の柱穴を欠く。主軸方位はN-8°-Wである。長軸桁行4.0m、短軸梁行2.2m、床面積は8.8㎡を測る。桁行の柱間寸法は2.0m、梁行の柱間寸法は2.2mと梁行の方が広い。桁行柱通りは一直線である。柱掘り方は直径40~70cmの円形を呈する。柱痕跡は確認されなかった。この掘立柱建物は貼床上に掘り込まれていることから、新段階に帰属する建物と考えられる。各ピットの詳細については計測表を参照されたい。

埋土 黒灰褐色土を主体とし、下層より順次堆積していることから、自然埋没の様相を呈する。黒色土(⑧層)は貼床でSS5の貼床と同一の構成土である。

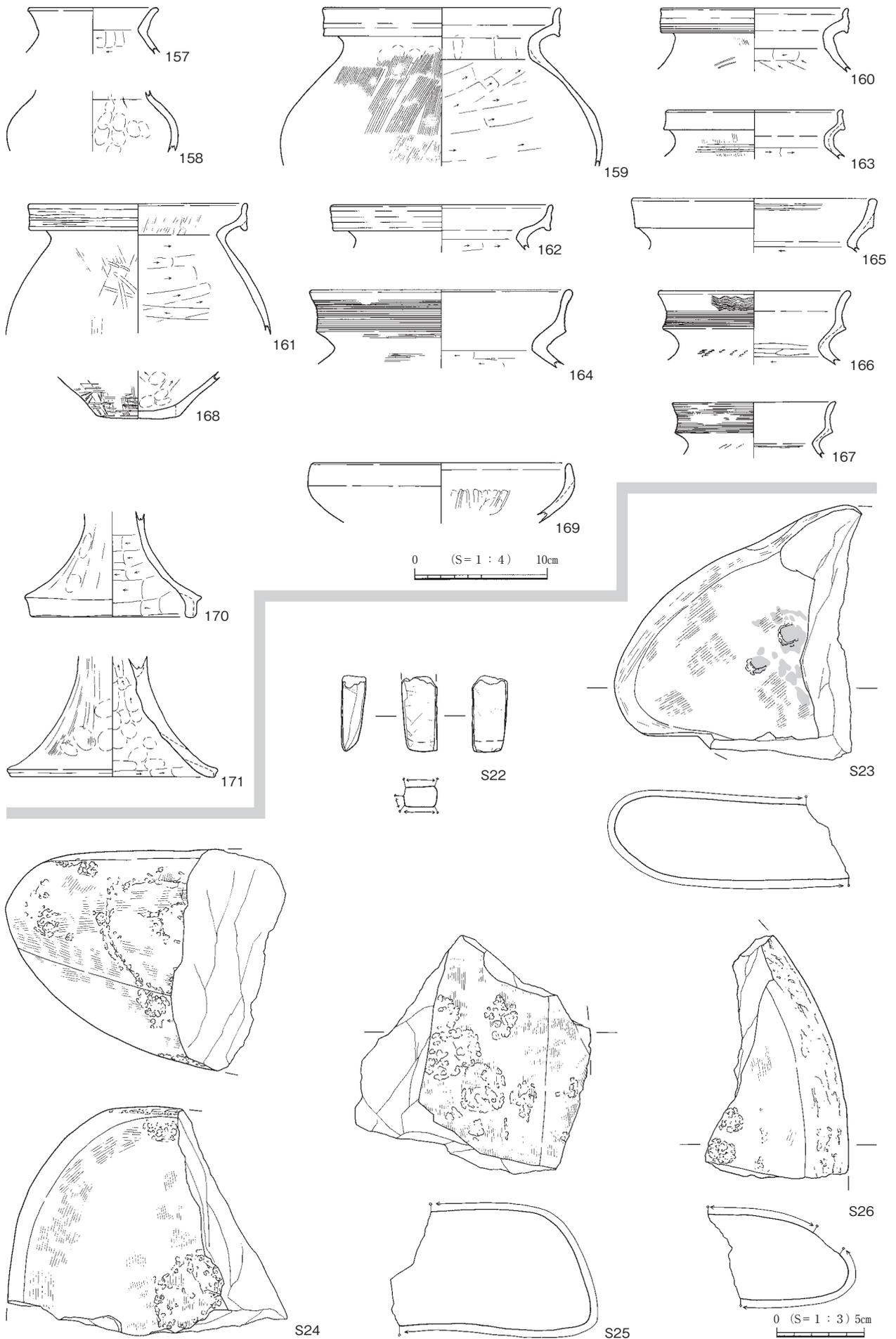
遺物 本址からの出土遺物のうち44点が図示し得た(第69・70図)。172・173は複合口縁の壺、172は口縁端部が外反し、複合部下端は形骸化する。173は複合口縁部が上下に張り出す。174は小型甕、



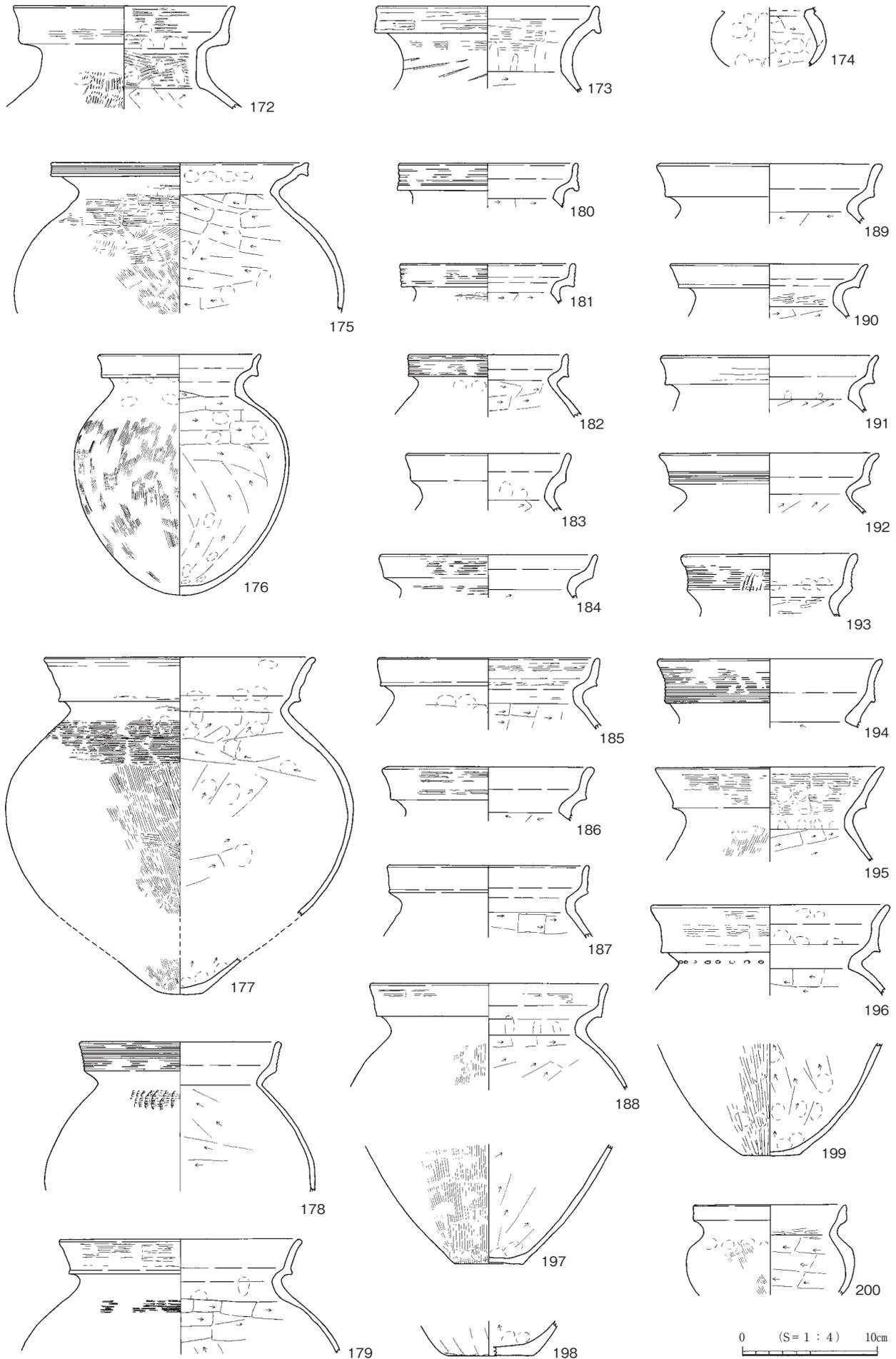
第66図 SS5~7遺物出土状況図



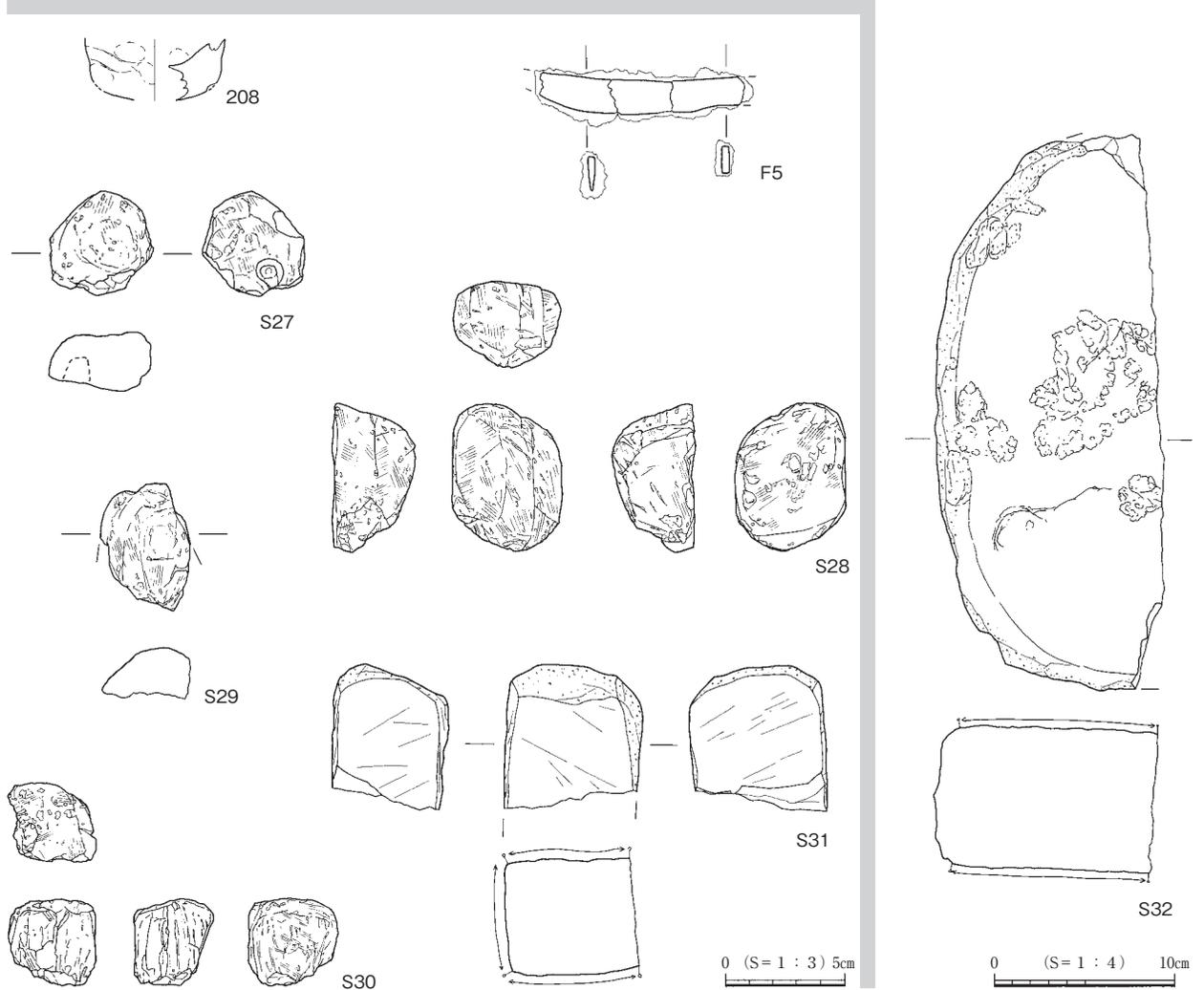
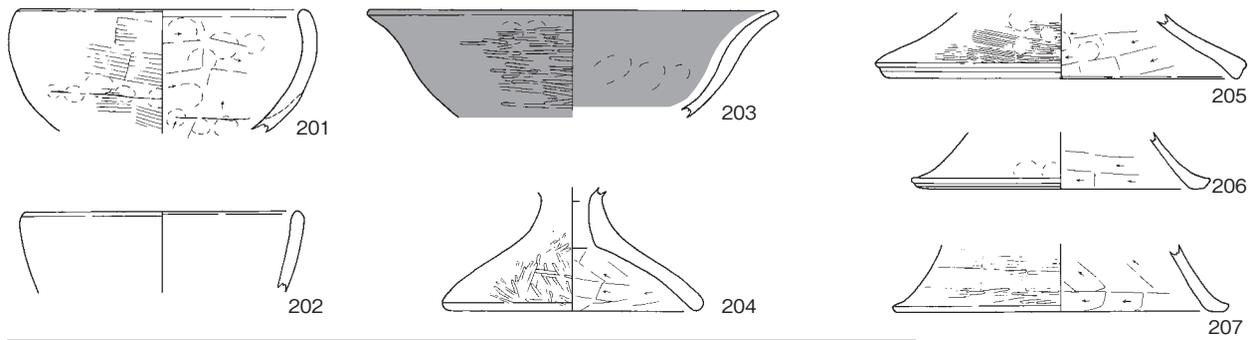
第67图 SS5~7断面图



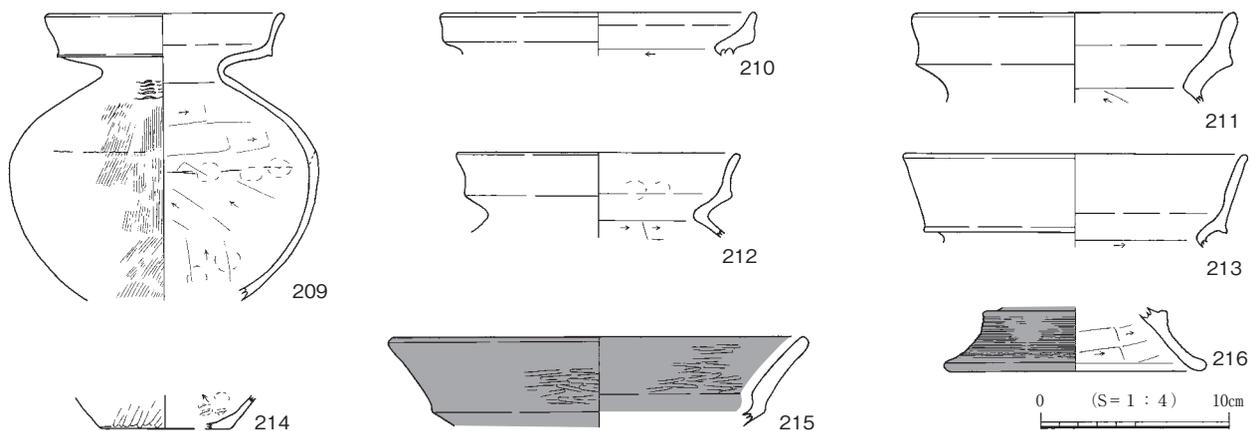
第68図 SS5出土遺物



第69図 SS6出土遺物(1)



第70図 SS6出土遺物(2)



第71図 SS7出土遺物

体部中位に最大径を持つ。175～200は複合口縁の甕、いずれも複合口縁を持つ。口縁帯の幅はやや広く、直立するものと外反するものがある。上下端部が直立気味に張り出すタイプと、下端が形骸化しているタイプがあり、櫛描沈線はナデ消されるものが多い。176は完形の甕、丸底で、胴上部に最大径を持つ。177は径が小さくやや突出する底部を持つ。196は頸部に近い肩部に棒状工具の小口による連続刺突文が施される。200は小型の甕で複合口縁部の断面は三角形状を呈する。201は鉢、口縁はやや肥厚しながら内湾する。202～203は高坏、201の体部は直線的に外形し、203は体部に丸味を持ち、口縁は緩やかに外反する。204～207は器台、204の脚部は内湾し、205・206は脚端部が肥厚し一条の凹線文が施される。208は手捏ね土器、器壁は厚い。F5は床面直上出土の鉄製の刀子である。

本址からも床面直上から埋土下層にかけて石器が多く出土した。S27～30は軽石製の砥石、遺存部の全体を使用している。S27には直径1.1cm、深さ1.2cmの小孔が認められる。S31は角閃石安山岩製の砥石、中砥と考えられる。長方形の素材の表裏面及び左側面を使用している。S32は角礫凝灰岩製の台石、長楕円形の素材の表裏面を使用している。

時期・性格 出土遺物と形状から、本址は弥生時代後期後半から終末期にかけて、継続して使用された段状遺構と考えられる。また台石や砥石の出土の多さはこの段状遺構の性格を表していると言えよう。

SS7 (第64～71図)

位置 E-4～5グリッドにまたがって検出された段状遺構である(第65図)。SS17を切り、SS6に切られる。確認面上の標高は36.5mを測る。

形状 斜面の高位側の地山をL字状に削り、平坦面を形成している。平面形は長方形を呈する。傾斜面の等高線に直交する方向を主軸と考えた場合の主軸方位はS-19°-Eである。規模は長軸6.0m、短軸2.2m、確認面からの深さは最深部で195cmを測る。壁はやや開きながら立ち上がり、床面積は8.1㎡を測る。床面は水平で、面上は硬化している。

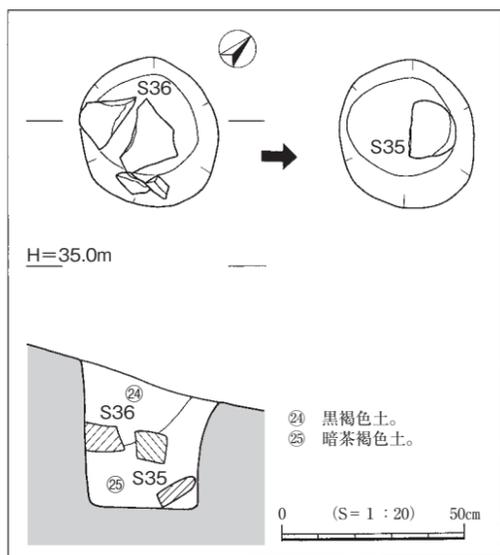
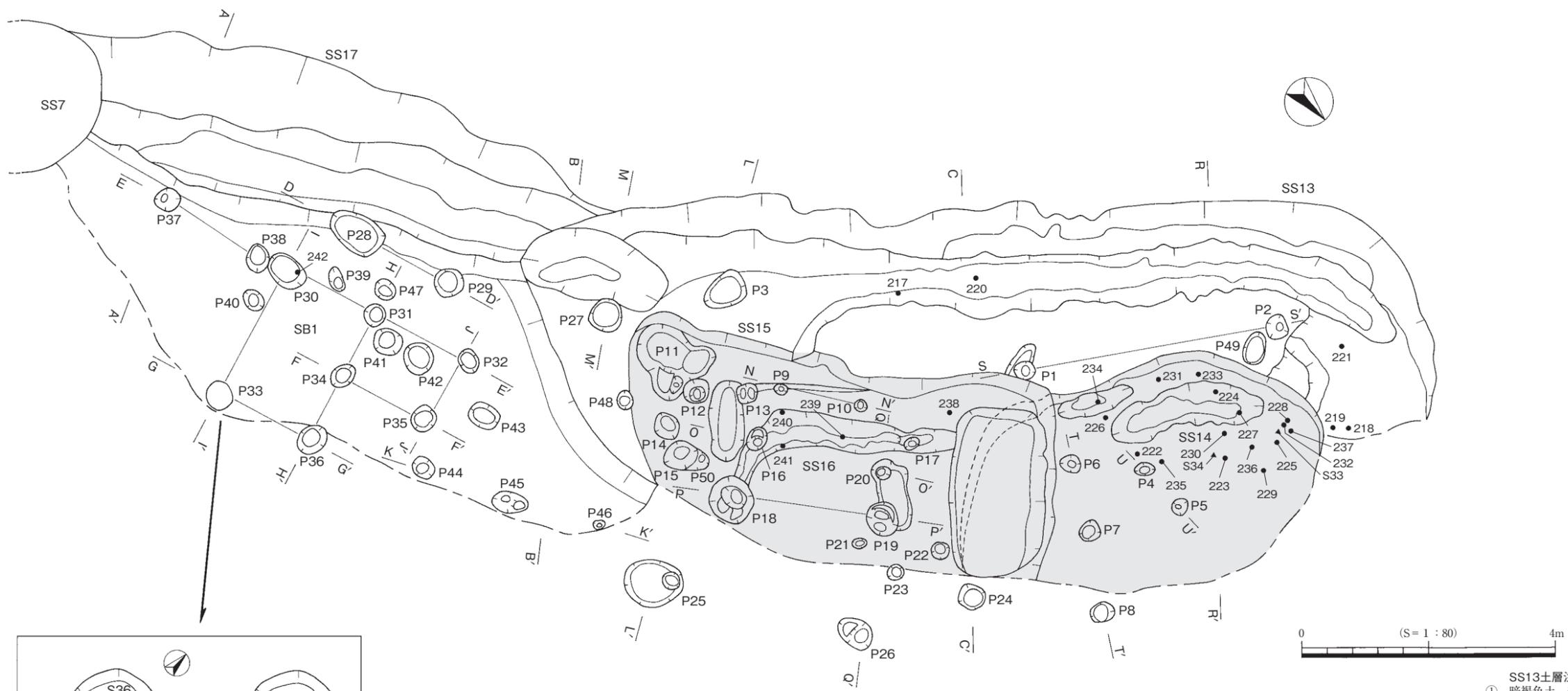
本址に伴うピットは21基である。このうちP43～45は壁直下に壁と平行して並んでおり、位置や形状から柱穴列の可能性が考えられる。この他にも柱穴列の可能性もあるものがあるが、いずれも柱痕跡は確認されなかった。各ピットの詳細については計測表を参照されたい。

埋土 暗灰褐色土を主体とし、下層より順次堆積していることから、自然埋没の様相を呈する。

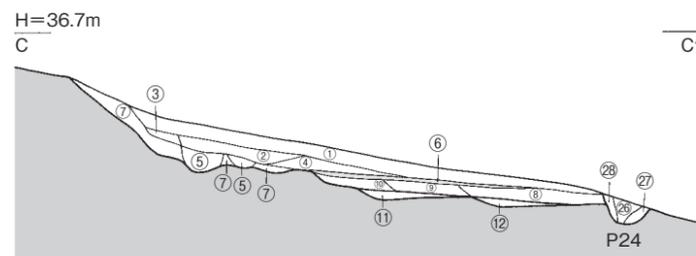
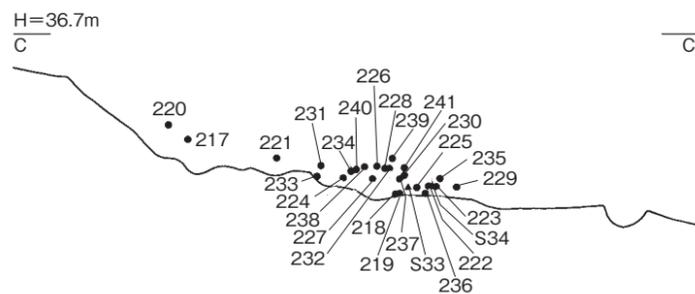
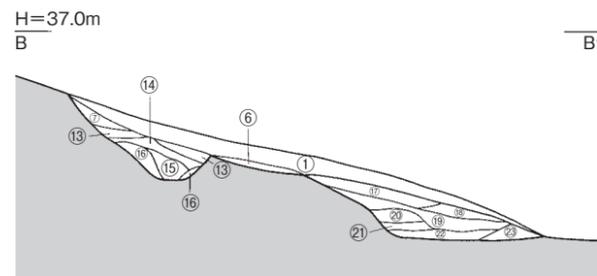
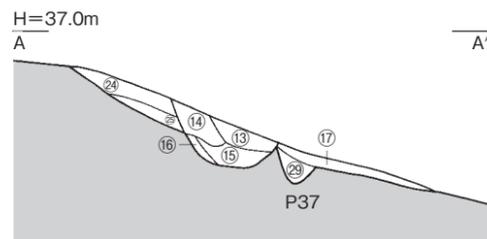
遺物 本址からの出土遺物のうち8点が図示し得た(第71図)。

209は複合口縁の壺、頸部の屈曲は大きく、口縁部は外反する。肩部に櫛状工具による波状文が施される。210～214は甕、いずれも複合口縁を持つ。口縁帯は直立するものと外反するものがあり、下端が形骸化しているタイプがほとんどである。215はP47出土遺物の有段の高坏、口縁は緩やかに外反し、器壁は厚い。216は器台の脚部、複合を呈し、端部は外反する。

時期・性格 出土遺物と形状から、本址は弥生時代後期後半から終末期にかけて、継続して使用された段状遺構と考えられる。

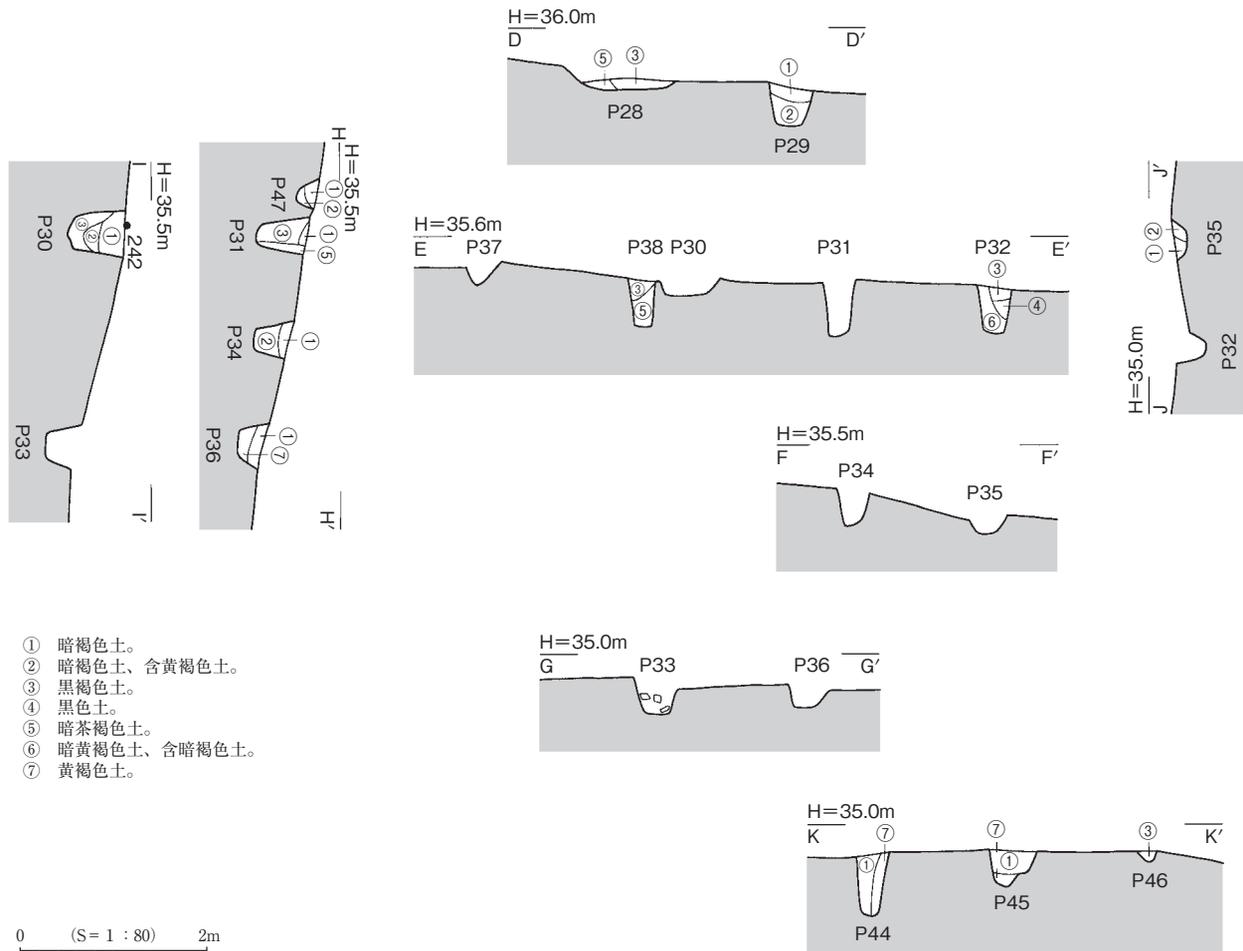


ピット33 平断面図



- SS13土層注記
- ① 暗褐色土、締まり・粘性弱。
 - ② 暗褐色土。
 - ③ 黄褐色土、含暗褐色土ブロック状。
 - ④ 黄褐色土、含茶褐色土少量。
 - ⑤ 黒褐色土、含暗茶褐色土少量。
 - ⑥ 黒褐色土、含ロームブロック多量、締まり強、貼床構成土。
- SS15土層注記
- ⑦ 明黄褐色土、含ロームブロック多量。
 - ⑧ 黒褐色土。
 - ⑨ 暗褐色土、含黄色粒少量。
 - ⑩ 黄褐色土、含暗褐色土少量。
 - ⑪ 黄褐色土。
- SS14土層注記
- ⑫ 暗黄褐色土、含ロームブロック多量。
- SS17土層注記
- ⑬ 暗褐色土、締りやや有り。
 - ⑭ 暗茶褐色土、含茶褐色土。
 - ⑮ 黒褐色土、含暗茶褐色土。
 - ⑯ 黄褐色土、含茶褐色土。
 - ⑰ 暗褐色土、含黄色ブロック少量。
 - ⑱ 暗褐色土、含黄色粒少量。
 - ⑲ 暗褐色土、含黒色粒少量。
 - ⑳ 黄褐色土、含黒褐色土少量。
 - ㉑ 暗黄褐色土、含ロームブロック。
 - ㉒ 暗黄褐色土、含黄色粒。
 - ㉓ 暗黄褐色土。
- ピット24土層注記
- ㉔ 黒褐色土、含黄褐色土少量。
 - ㉕ 暗黄褐色土、含黒褐色土多量。
- ピット37土層注記
- ㉖ 褐色土。

第72図 SS13~17



第73図 SS13~17断面図(1)

SS13~17

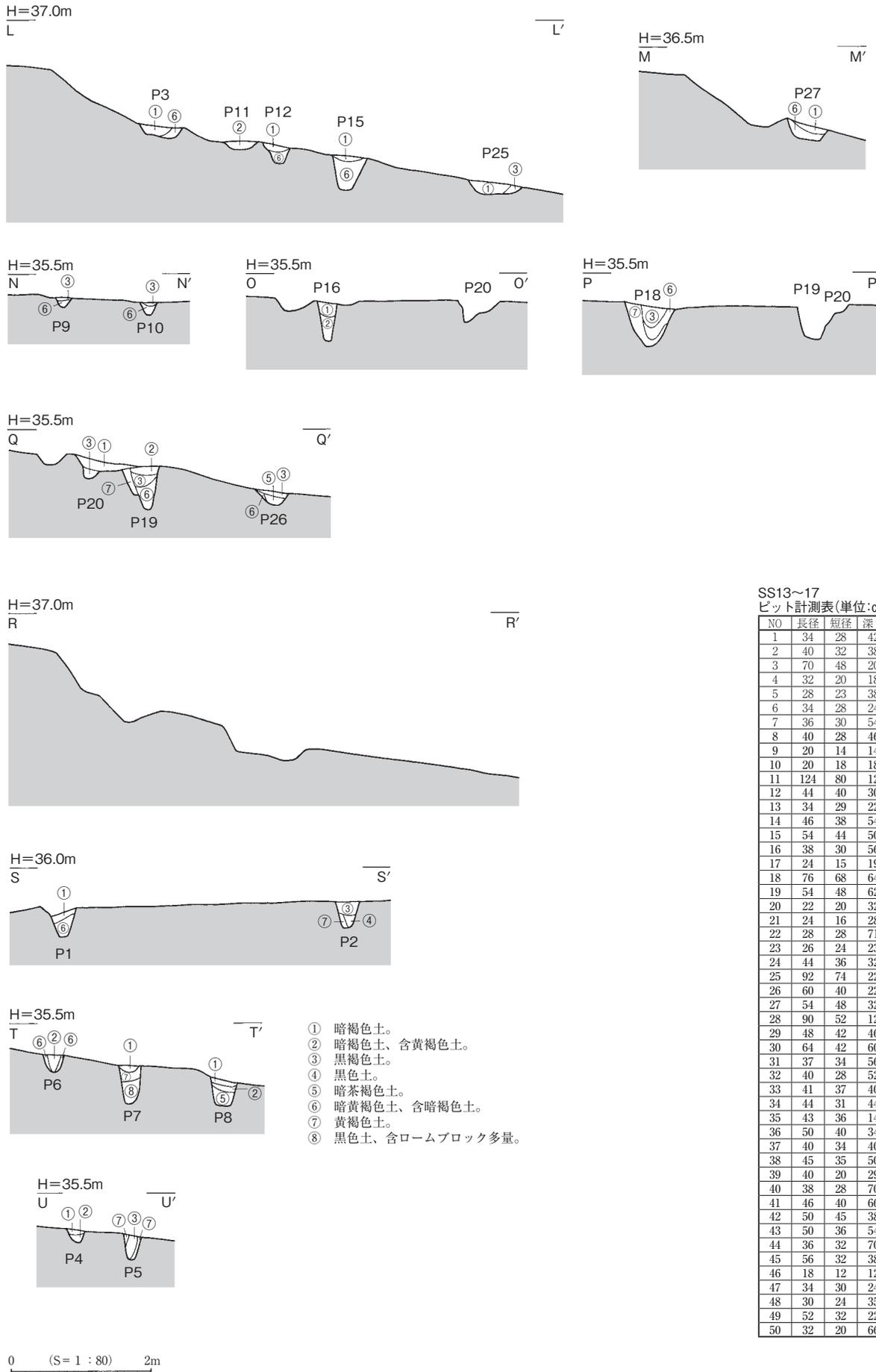
E~G-3~4グリッド、調査区中央の南西—北東方向に張り出した支尾根頂部に検出された一連の段状遺構である。(第10図) SS5~7の北側に続き、等高線にはほぼ沿って細長く延びる形状を呈する。調査の結果、何段かの段状遺構が切り合っており、同一の平場を繰り返し使用していることが判明した。土層観察による新旧関係は、SS16(古)→SS14→SS15→SS13(新)、SS17→SS13である。以下に遺構ごとに詳細を述べることにする。

SS13 (第64・72~75図)

位置 F~G-3~4グリッドにまたがって検出された段状遺構である(第72図)。SS14・15・16・17のすべての段状遺構を切り、下位の遺構の上層に構築されている。確認面上の標高は36.6~36.3mを測る。

形状 斜面上方の地山をL字状に削り、平坦面を形成している。平面形は隅丸長方形を呈する。斜面の等高線に直交する方向を主軸と考えた場合の主軸方位はS-41°-Wである。規模は長軸14.2m以上、短軸6.0m、確認面からの深さは最深部で110cmを測る。壁は開きながら立ち上がり、残存範囲での床面積は51.6㎡を測る。

床面はやや下方に傾斜しながらも水平で、下層にSS14~16が掘り込まれている部分は黒褐色土による貼床が構築され、面上は硬化している。壁際には幅70~200cm、深さ10~15cm程の壁溝が検出された。この壁溝は斜面下方では段差を持ちながら広がる。溝底面は凹凸があるが、壁溝内ピット等は



第74図 SS13~17断面図(2)

認められない。また、南壁の調査区際に高さ5cm程の段差が認められた。埋積土の観察から古い時期の段状遺構と考えられる。

本址に伴うピットはP1・2・3・11・12・15・27・49の8基である。このうちP1・2は柱穴列の可能性があり、柱間距離は4.0mを測る。その他のピットについては南東側に集中しているが、建物としては並んでいない。詳細はピット計測表を参照されたい。

埋土 上層に暗褐色土、下層に黄褐色土を主体とし、下層より順次堆積していることから、自然埋没の様相を呈する。ロームブロックを多く含む黒褐色土（⑥層）は貼床、明黄褐色土（⑦層）は掘り方の埋土の可能性が考えられる。堆積状況から少なくとも2回以上の掘り直しが認められる。

遺物 周辺は遺構の重複が激しいため、本址に伴う遺物は少なく、このうち5点が図示し得た（第75図）。217は単口縁の壺、平底の底部に球胴形の体部、屈曲する頸部に口縁は外傾し、端部はナデにより内側に折れる。218～221は複合口縁の甕、口縁帯の幅はやや広く、直立するものと外反するものがある。上下端部が直立気味に張り出すタイプと、下端が形骸化しているタイプがある。

時期 出土遺物と形状から、本址の時期は弥生時代後期後半以降と考えられる。

SS14（第64・72～74・76図）

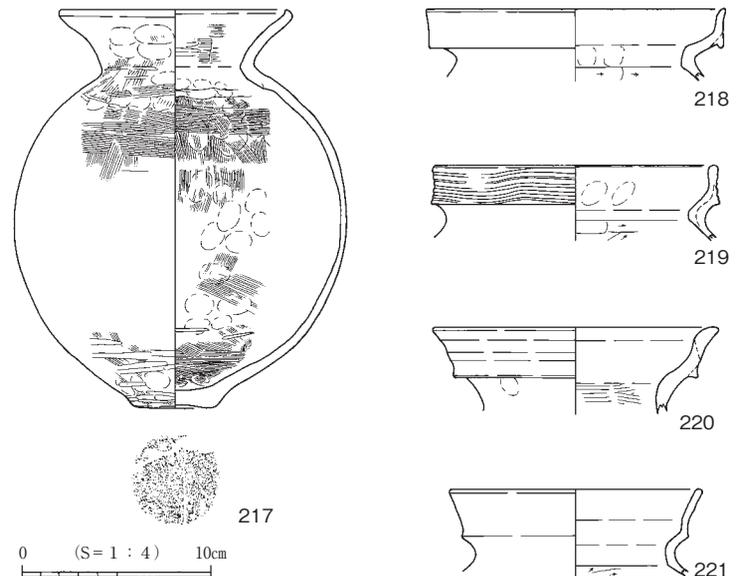
位置 G-3～4グリッドにまたがって検出された段状遺構である（第72図）。SS13が上層に構築され、南東側はSS15に切られる。確認面上の標高は35.5mを測る。

形状 SS13に上面を切られているため全体に残りが悪い。斜面の高位側の地山をL字状に削り、平坦面を形成している。残存部分の平面形は不整半円形を呈する。傾斜面の等高線に直交する方向を主軸と考えた場合の主軸方位はS-25°-Wである。規模は長軸6.1m、短軸3.5m、確認面からの深さは最深部で20cmを測る。残存部分で壁はやや開きながら立ち上がり、残存範囲での床面積は2.3㎡を測る。床面はほぼ水平で、面上は硬化している。南壁際には2条の壁溝が検出された。東側の溝が長さ122cm、幅40cm、深さ12cm、西側は長さ250cm、幅60cm、深さ10cmを測る。溝底面は凹凸があるが、壁溝内ピット等は認められない。

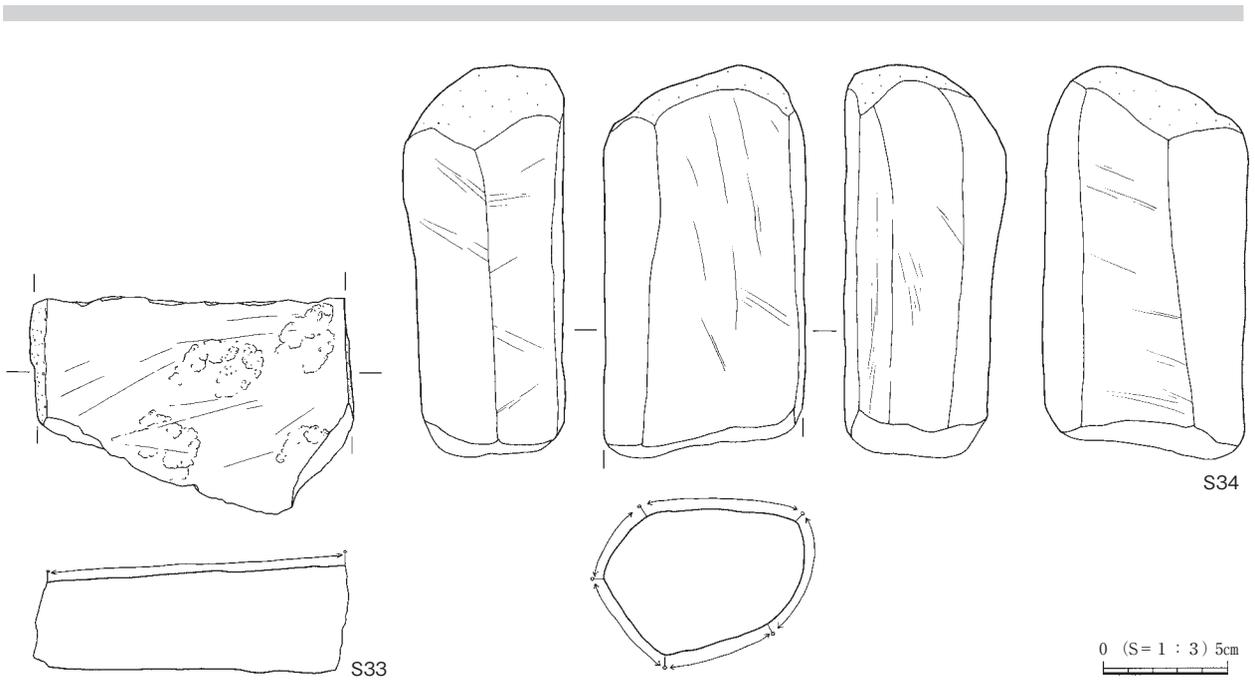
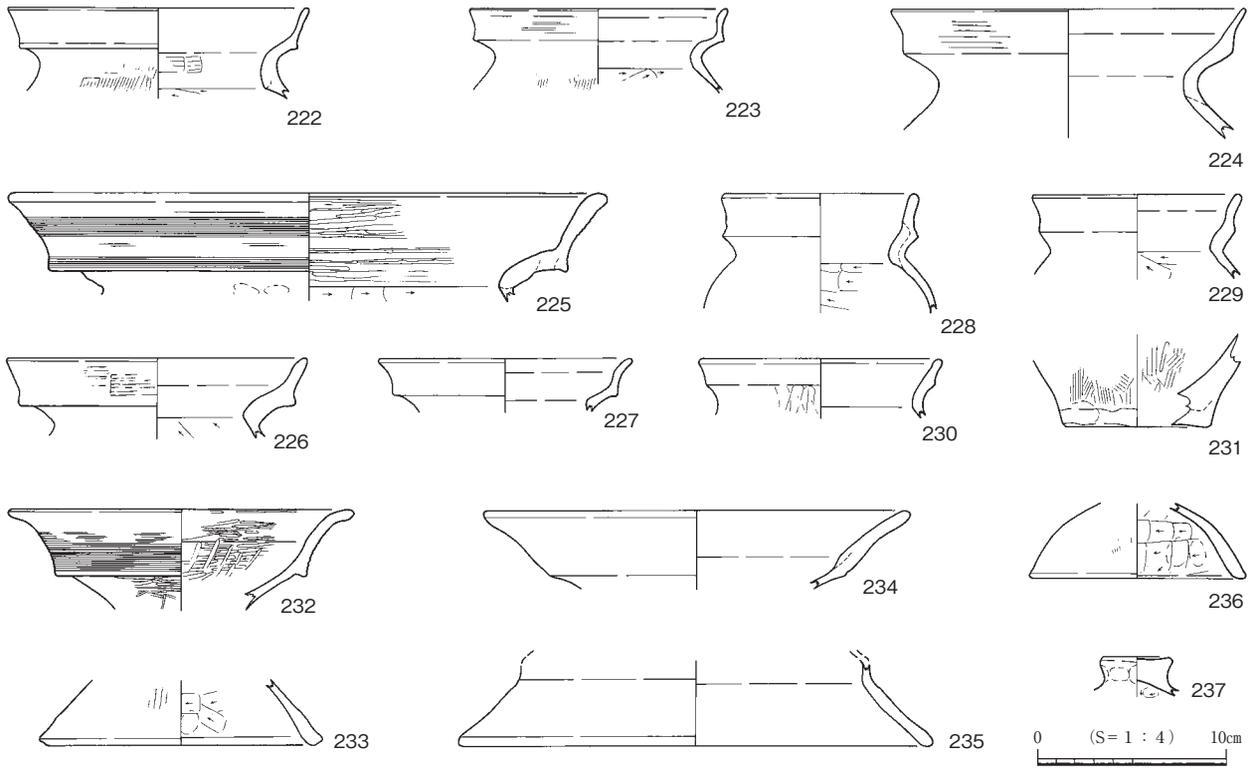
本址に伴うピットはP4～8の5基である。平面形はいずれも円形を呈し、直径は30cmほどである。詳細はピット計測表を参照されたい。

本址は半円形の形状から竪穴建物の可能性も考えたが、不整形であり、内部にその根拠となる施設がないことから、段状遺構とした。

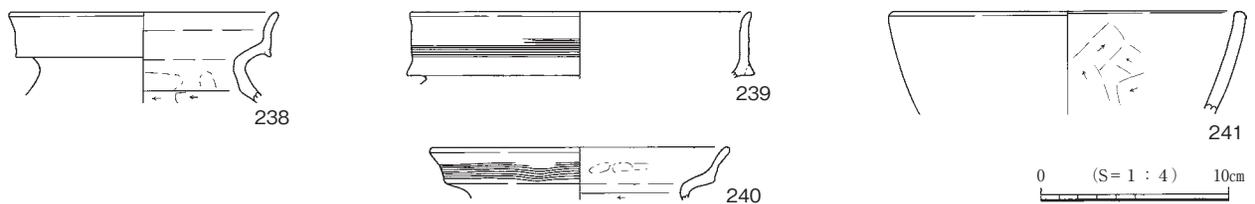
埋土 暗黄褐色土を主体とする。残存部位が少ないが、下層より順次堆積していることから、自然



第75図 SS13出土遺物



第76図 SS14出土遺物



第77図 SS15出土遺物

埋没の様相を呈する。

遺物 本址からの出土遺物は西側に比較的集中していた。このうち18点が図示し得た（第76図）。222～231は複合口縁の甕、口縁帯は幅広く、端部は外反し、下端が形骸化しているタイプがほとんどである。228～230は小型の甕である。232は有段高坏の坏部と考えられる。口縁は緩やかに外反する。233は床面直上出土の高坏の脚部と考えられる。端部は肥厚する。234は器台の受部、有段で口縁は僅かに外反する。235は器台の脚部、有段で端部は直線的に外傾する。236は蓋、内湾し端部はやや肥厚する。237は蓋のつまみ部分で、上面はほぼ平坦である。

石器は埋土下層から2点が図示し得た。S33は角礫凝灰岩製の台石、方形の素材の上面を使用している。S34は凝灰岩製の砥石、中砥で、方柱状の素材の表裏面及び側面全体をよく使用しているため横断面は五角形となっている。

時期 出土遺物と形状から、本址の時期は弥生時代後期後半から終末期と考えられる。

SS15（第64・72～74・77図）

位置 F～G-4グリッドにまたがって検出された段状遺構である（第72図）。SS13が上層に構築され、SS14・17を切り、下層にSS16が掘り込まれる。確認面上の標高は35.7mを測る。

形状 SS13に上面を切られているため全体に残りが悪い。斜面の高位側の地山をL字状に削り、平坦面を形成している。残存部分の平面形は長方形を呈する。傾斜面の等高線に直交する方向を主軸と考えた場合の主軸方位はS-77°-Wである。規模は長軸7.1m、短軸3.1m、確認面からの深さは最深部で20cmを測る。残存部分で壁はやや開きながら立ち上がり、残存範囲での床面積は18.2㎡を測る。床面はほぼ水平で、面上は硬化している。南壁寄りには斜面上方の壁に直交する溝1条が検出された。長さ125cm、幅60cm、深さ15cmを測り、断面U字形を呈する。溝底面は平坦でピット等は認められない。本址北壁に接して、長方形の浅い土坑が掘り込まれている。規模は長軸2.2m、短軸1.5m、床面からの深さは最深部で8cmを測る

本址に伴うピットはP9・10・16～24・26の12基である。このうちP9・10、P18・19はそれぞれ斜面上方の壁に平行しており、位置や形状から柱穴列の可能性があり。柱間距離はそれぞれ1.8m、4.0mを測る。詳細はピット計測表を参照されたい。

埋土 黒褐色土及び黄褐色土を主体とする。残存部位が少ないが、下層より順次堆積していることから、自然埋没の様相を呈する。

遺物 本址からの出土遺物のうち埋土上層の4点が図示し得た（第77図）。238は複合口縁の壺、口縁帯は幅広く、上端は外反し、下端は下垂する。239～240は複合口縁の甕、239の複合口縁帯は幅広く、直立気味で端部は外反、下端は横方向に張り出す。240は口縁部上端が大きく外傾する。241は鉢、体部は僅かに内湾しながら外傾する。

時期 出土遺物と形状から、本址の時期は弥生時代後期後半から終末期頃と考えられる。

SS16（第64・72～74図）

位置 F～G-4グリッドにまたがって検出された段状遺構である（第72図）。上層にSS13・15が構築されている。確認面上の標高は35.5mを測る。

形状 SS15により床面付近まで削平されており、遺存状態は悪い。SS15の床面下に検出されたL

字状に屈曲する溝とそれに平行する段差を、それぞれ段状遺構の壁溝と壁の残存と考え、SS16とした。傾斜面の等高線に直交する方向を主軸と考えた場合の主軸方位はS-45°-Wである。残存部分で壁はやや開きながら立ち上がる。壁溝と考えられる溝は長さ350cm、幅30~60cm、深さ15cmを測り、断面U字形を呈する。埋土は黄褐色土主体で、溝底面に凹凸はあるが、ピット等は認められない。

埋土 僅かに暗褐色土が堆積している。

遺物 本址から遺物は出土していない。

時期 出土遺物がないため時期比定が困難であるが、切合い関係と形状から、本址の時期は弥生時代後期後半以降と考えられる。

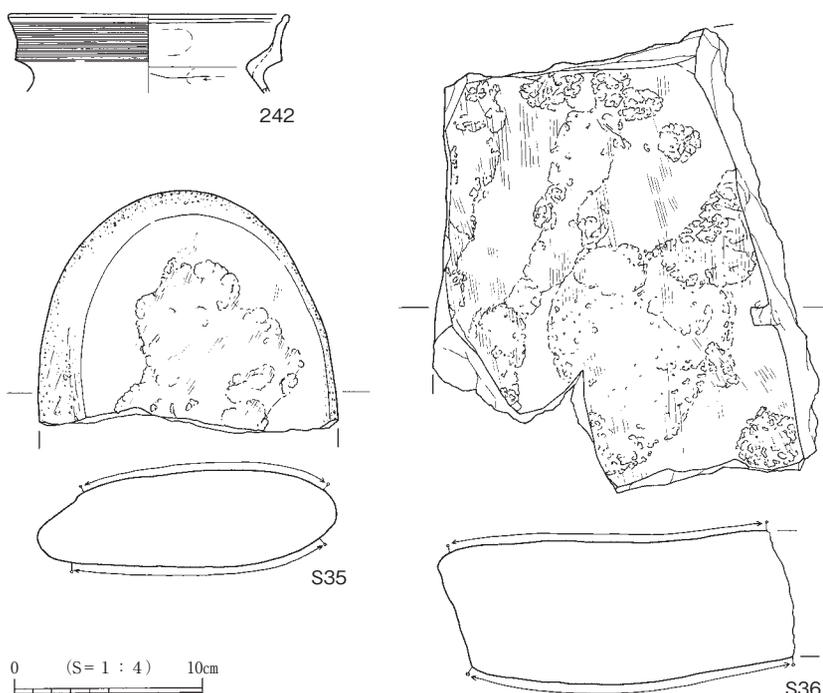
SS17 (第64・72~74・78図)

位置 E~F-4グリッドにまたがって検出された段状遺構である (第72図)。SS13・SS7に切られる。確認面上の標高は36.4~36.7mを測る。

形状 斜面の高位側の地山をL字状に削り、平坦面を形成している。残存部分での平面形は不整形な長方形を呈する。傾斜面の等高線に直交する方向を主軸と考えた場合の主軸方位はN-64°-Eである。規模は長軸10.8m、短軸5.7m、確認面からの深さは最深部で70cmを測る。壁は開きながら立ち上がり、床面から70cmの高さに幅90cmの段差を持つ。この段差部には壁溝が掘り込まれているが、土層観察によれば本址埋没後に掘り込まれたものであり、廃絶後上層に掘り込まれたSS13などに伴う遺構の可能性が考えられる。検出範囲での床面積は17.3㎡を測る。床面はやや傾斜しつつも平坦で、面上は硬化している。

平坦面中央には掘立柱建物1棟 (SB1) が構築されている。SB1は北東隅の柱穴を欠くが、桁行2間、梁行2間の建物と推測される。主軸方位はN-18°-Wで等高線やSS17の壁面に対してやや東にずれる。長軸桁行3.2m、短軸梁行2.3m、床面積は7.4㎡を測る。桁行の柱間寸法は1.6m、梁行の柱間寸法は1.1mと桁行の方が広い。柱掘り方は直径35~70cmの円形を呈する。柱痕跡は確認されなかった。このうちP33内には礎石が検出された。

この礎石は台石 (S36) を転用したもので、埋土中層に上面を平坦に据えられていた。台石は4片に破損していたが、上面が水平であることから、根固め等のために割って据えた可能性も考えられる。この台石を除去した後、最下層にも磨石 (S35) を転用した礎石が検出された。このことから、P33は二回以上の礎石の据え直しが行われたことがわかる。また、この礎石は位置的に、桁行方向のP36との底面の深さをそろえるためのも



第78図 SS17出土遺物

のと考えられる。この他、本址に伴うピットは14基検出された。このうちP28・29、P37・38は壁面に対して平行して並ぶ柱穴列と考えられる。柱穴間距離は1.8mである。いずれも平面形は円形を呈し、段差を持つものもある。詳細はピット計測表を参照されたい。

埋土 暗茶褐色土を主体とする。堆積状況から下位に向かって少なくとも2回以上の掘り直しが認められる。下層より順次堆積していることから、自然埋没の様相を呈する。また、西壁際に焼土の堆積が認められた。埋土中に堆積していることと、遺構外にも焼土の分布が広がることからこの焼土は本址廃絶後のものと考えられる。

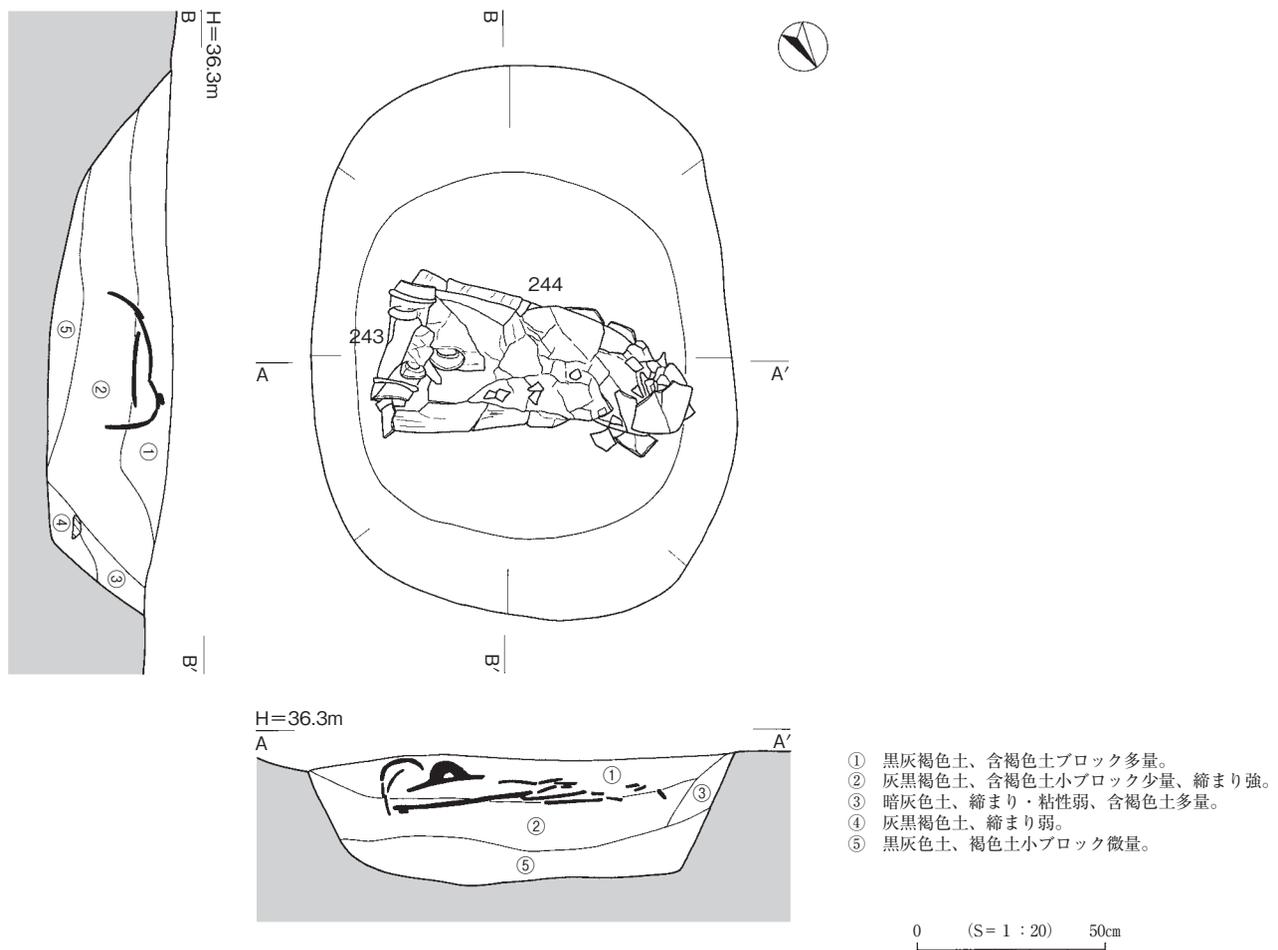
遺物 本址出土遺物のうち3点が図示し得た(第78図)。242は複合口縁の甕、口縁部は外反し外面に櫛描直線文が施される。S35・36はP36の礎石に転用された石器である。S35は安山岩製の磨石、長楕円形の素材の表裏面を使用している。S36は凝灰岩製の台石、方形に切りだした素材の表裏面を使用している。これを大きく二分割したものを礎石に転用している。

時期 出土遺物と形状から、本址の時期は弥生時代後期後半から終末期頃と考えられる。

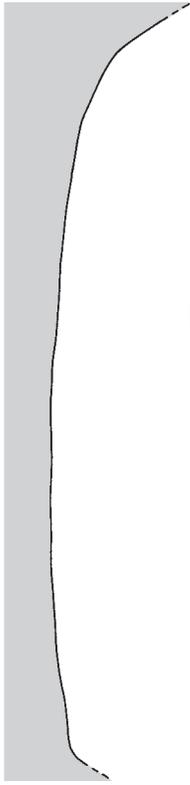
SK5 (第64・65・79~82図)

位置 D-5グリッド、調査区中央の南西—北東方向の谷頭斜面に構築された段状遺構SS5・6の埋土中に検出された土器棺墓である。(第65・79図)。確認面上の標高は36.2mを測る。

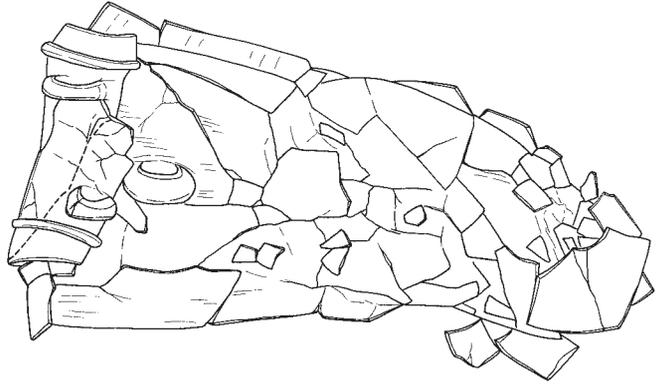
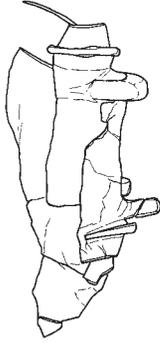
形状 土壇掘り方の平面形は上縁部、底面共に長楕円形を呈し、長軸方位はS-34°-Wを指す。断面形は逆台形を呈し、底面は平坦である。規模は、上面で長径146cm、短径112cm、底面で長径98cm、



第79図 SK5



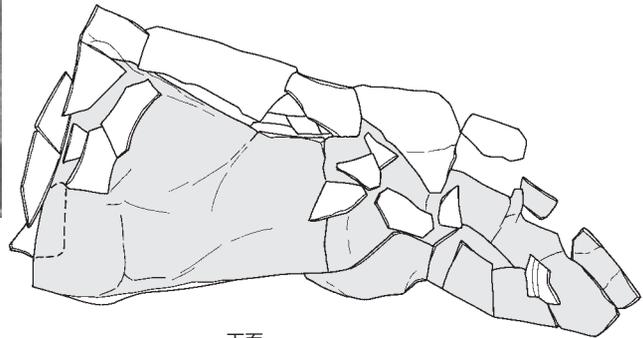
H=36.3m



検出状況

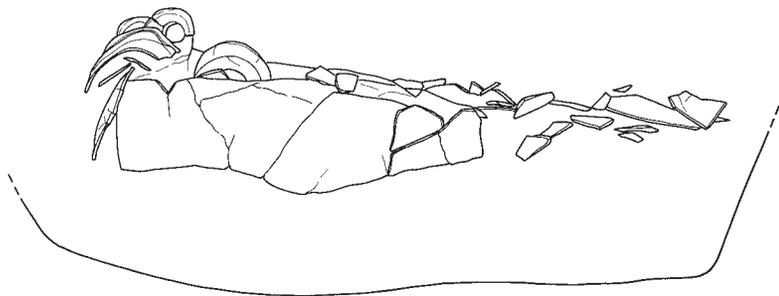


内面



下面

H=36.3m



0 (S=1:10) 20cm

第80図 SK5甕棺出土状況

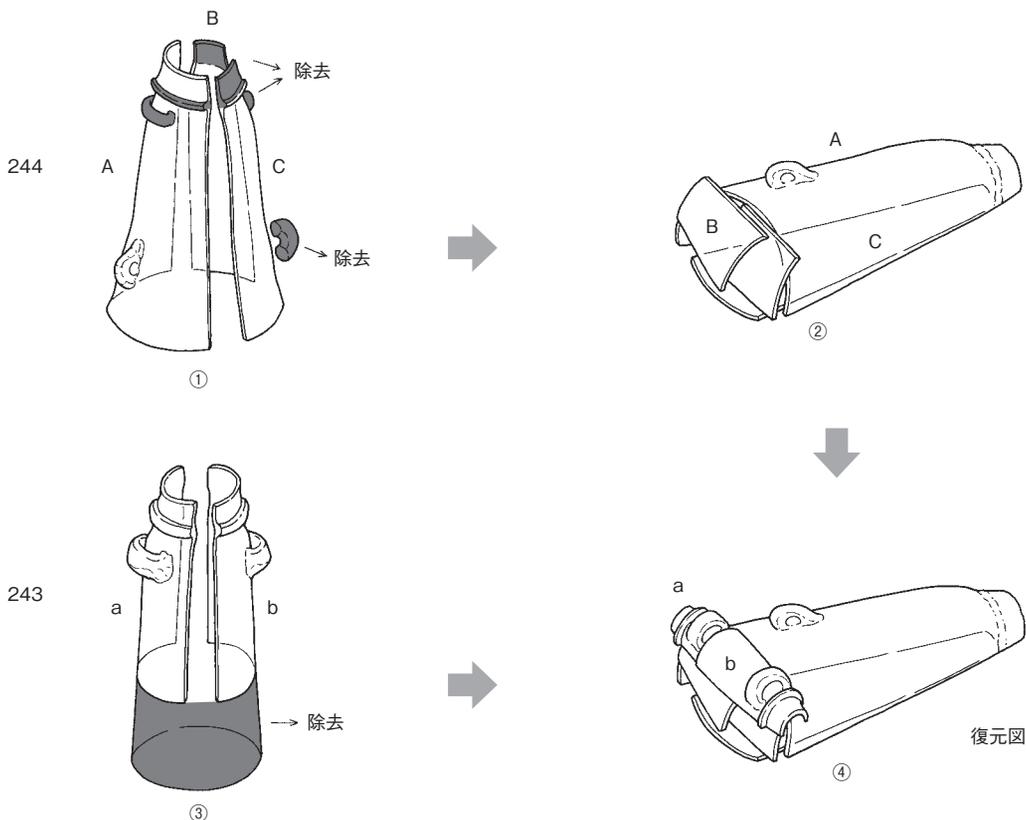
短径87cm、確認面からの深さは32cmを測る。

土壌中央の灰黒褐色土上面から土器が横位で出土した。この土器は大小2点の甑形土器を組み合わせたもので、検出状況では破砕していたが、切断後に整然と組み合わせて土壌内に据えられていることから、土器転用棺と考えられる（第80図）。棺は、土壌墓中央に掘り方の短軸方向に長軸を合わせて置かれていた。主軸方位はN-42°-Wで、等高線やSS5の壁面に対してほぼ平行している。破砕しているため内径は不明であったが、規模は外径で長軸84cm、短軸は広口部で43cm、狭口部で24cmを測り、棺高は潰れており18cm以上は不明である。棺内に埋土はなく、副葬品なども出土していない。

この棺の据え方について、復元すると以下のような据え方が推測できる（第81図）。

- ① 大型の甑形土器（Po244）を1/2片（A）と1/4片（B・C）に縦方向に3分割し、Aの突帯と狭口部側の把手を除去、B・Cの突帯部から狭口部にかけての部分とCの突帯を除去する。
- ② Cを内面を上側にして棺床にし（遺体を据え）、把手部が上面中央にくるようにAを被せ蓋をする。
- ③ Bを横方向に2分割したものを合わせ口にし、広口部の小口上端面を塞ぐ。
- ④ 小型の甑形土器（Po243）の広口部側を除去し、縦方向に2分割する（a・b）。
- ⑤ これを③の広口部の小口上端部に合わせ口に合わせて据え、大小3個の把手がいずれも上面を向くように整える。

以上のように、棺に転用する際に余計な部分は除去していること、切断するにあたっては目釘などを用いて直角に分割していること、広口側の上端部に把手が三角形になるように整然と置かれていることなどから、甑形土器を非常に計画的に分割して棺に転用したことが窺える。また、周辺からは除去した破片は全く出土していないことから、別の場所で切断後、ここに据えたものと考えられる。さらに、大小2点の甑形土器の内外面には煤が付着していることから、ある程度使用後に土器棺に転用

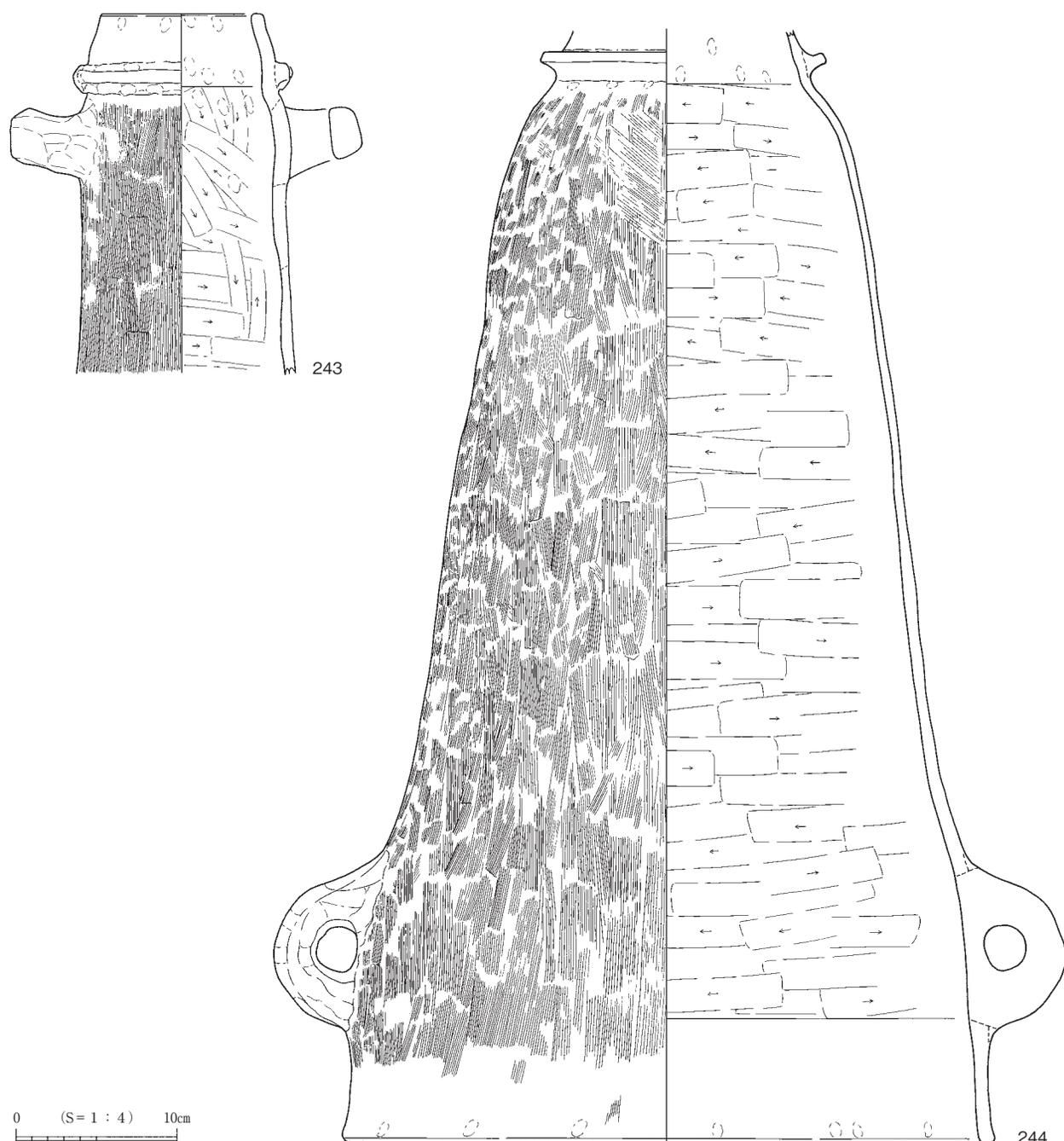


第81図 SK5甑棺復元図

したものと同様と推測できる。

埋土 棺下の灰黒褐色土（②層）は非常に締まっていることから掘り方埋土と考えられる。棺上の黒灰褐色土（①層）は棺埋土であろう。内部には埋土がなく、空隙があったが、骨などはなく分解、消滅してしまったものと考えられる。

遺物 本址からは副葬品は出土しなかったが、土器棺に転用された甑形土器2点が図示し得た。（第82図）。243はいわゆる「山陰型甑形土器」である。縦方向に切断後、棺の小口端部に重ねられていた。広口側が失われているが、形状から小型のタイプと考えられる。器壁は厚く、体部は細身でありあまり広がらない。狭口部側に幅広の突帯が巡り、U字状の大型の把手が横方向に付く。244は大型の「山陰型甑形土器」である。前述のように土器棺の底面及び蓋と小口に使用されていた。狭口部側の把手は本来にはあったと思われるが、除去されている。切断面は非常に直線的であり、目釘などの工具を使用した痕跡が認められる。また、突帯も除去されているが、表面は人為的に整えられている。器壁



第82図 SK5出土遺物

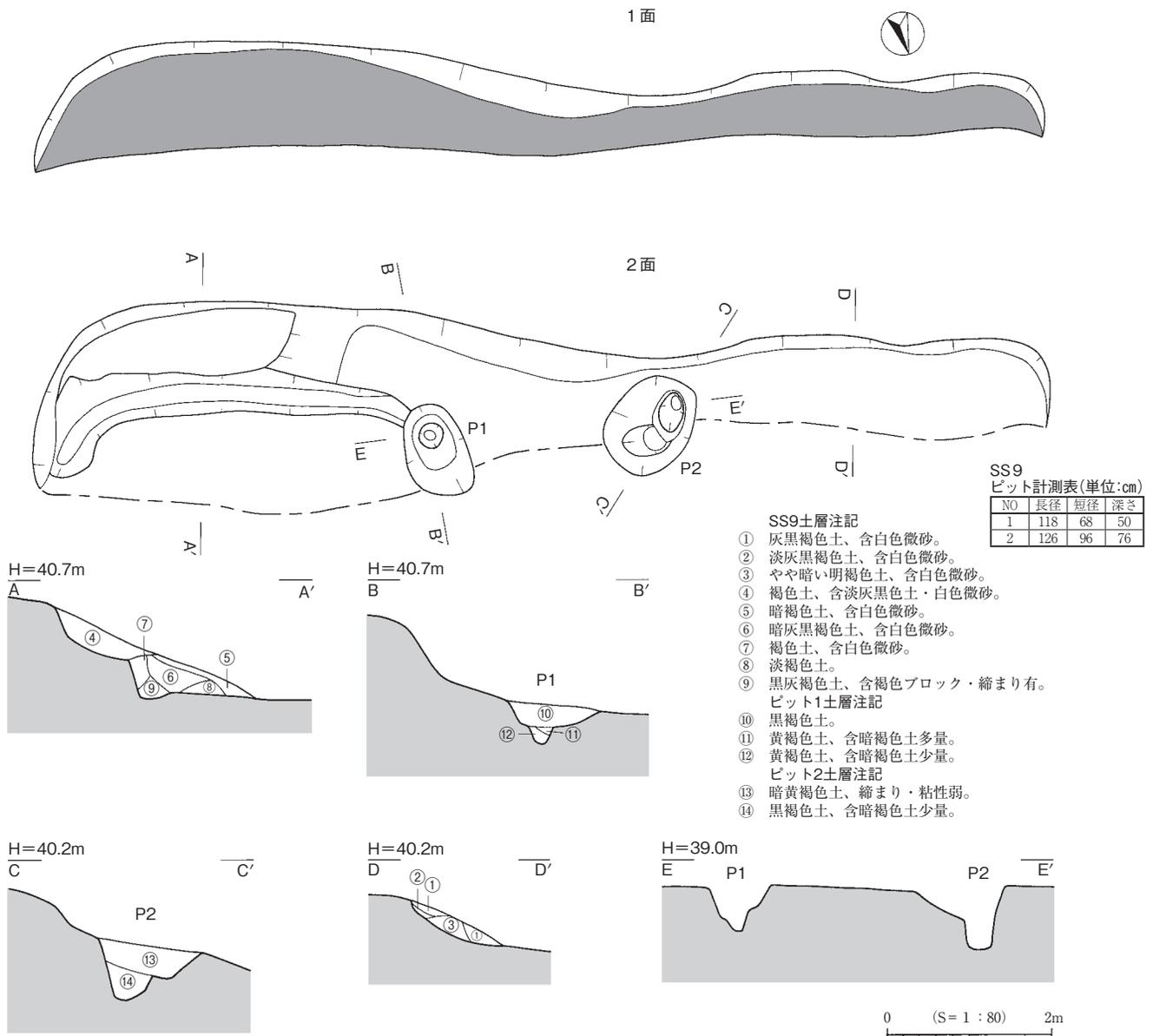
は薄く、体部は広口部に向かって直線的に外傾する。広口部側にU字状の把手が縦方向に付く。

時期 本址はSS5の埋土中に掘り込まれていることから、SS5等の段状遺構廃絶後に掘り込まれた土壙墓と考えられよう。また、副葬品はなかったが棺転用の甑形土器から、本址の時期は庄内併行期新段階から古墳時代前期初頭と考えられる。

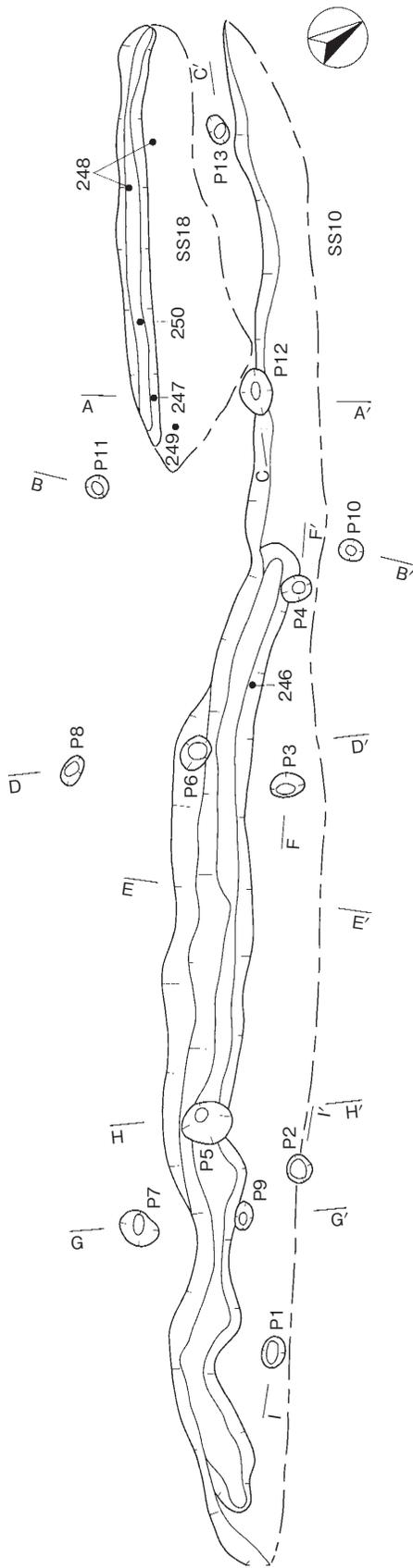
SS9 (第83図)

位置 C-5~6グリッド、南西—北東方向に張り出した支尾根北東側の谷頭急斜面に単独で検出された段状遺構である(第83図)。上面は木の根や後世の削平により攪乱されており、西側では埋土のほとんどが失われている。本址下層にはSK7が掘り込まれる。確認面上の標高は40.5mを測り、調査区内で最も高位の段状遺構である。東側2.0mにSS18が存在する。

形状 斜面の高位側の地山をL字状に削り、平坦面を形成している。平面形は長方形を呈する。斜面の等高線に直交する方向を主軸と考えた場合の主軸方位はN-17°-Eで、長軸はほぼ等高線に沿っている。規模は長軸12.4m、短軸1.3mを測る。壁はやや開きながら立ち上がり、検出範囲での床面積は

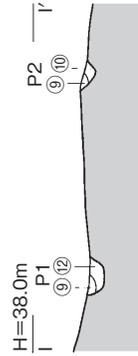
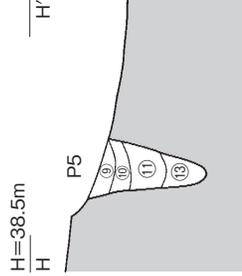
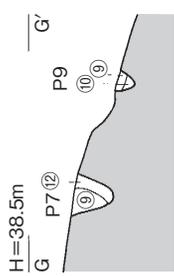
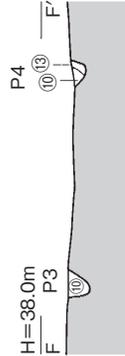
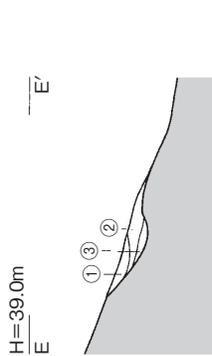
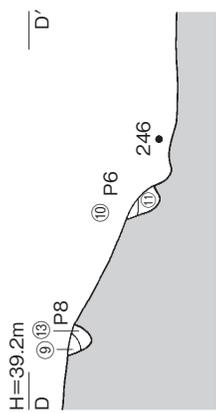
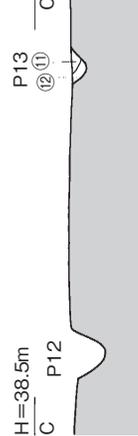
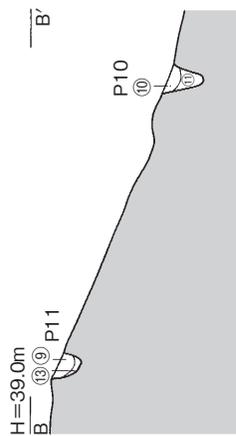
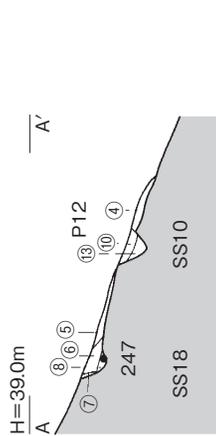


第83図 SS9



SS10-18
ビット計測表(単位:cm)

NO.	底径	短径	深さ
1	36	26	18
2	32	28	16
3	40	28	22
4	36	28	16
5	60	50	124
6	40	30	34
7	46	34	44
8	36	20	26
9	32	20	20
10	30	24	44
11	26	24	32
12	52	36	30
13	34	22	18



SS10土層注記

- ① 黒褐色土、縮まり弱。
- ② 黒褐色土、含茶褐色土少量。
- ③ 暗褐色土、含黄褐色土少量。
- ④ 暗黄褐色土。

SS18土層注記

- ⑤ 黒褐色土、含茶褐色土多量。
- ⑥ 黒褐色土。
- ⑦ 黄褐色土。
- ⑧ 黒褐色土、含黄褐色土、ローンプロック多量。
- ⑨ 黒色土、含黄褐色土。
- ⑩ 黒褐色土、含暗褐色土多量。
- ⑪ 暗褐色土、含黄褐色土多量。
- ⑫ 暗茶褐色土、含ローンプロック多量。
- ⑬ 暗黄褐色土、含暗褐色土。

第84図 SS10・18

16.1㎡を測る。床面には貼床が検出された。この貼床をはがしたところ、50cm下層の地山上にピットと溝が検出された。埋土の観察から、古い時期の段状遺構に伴うものと考えられる。溝は東壁側からP1にかけてコの字状に掘り込まれている。長さ450cm、幅55cm、深さ14cmを測り、断面はU字形を呈する。

本址に伴うピットはP1～2の2基である。位置や形状から考えて、古段階の段状遺構に伴う柱穴列の可能性が考えられる。平面形は円形を呈し、柱穴間距離は3.0mである。この柱穴列と壁溝はほぼ平行している。詳細はピット計測表を参照されたい。

埋土 貼床上の埋土は褐色土の単層であるが、床面付近まで削平が及んでいることを考慮すると、この埋土も後世の堆積の可能性もある。貼床下層の古段階の遺構埋土は灰黒褐色土を主体とする。

遺物 本址から遺物は出土していない。

時期 遺物が出土していないので時期比定が困難であるが、位置や形状からSS5～7等の段状遺構と同時期の弥生時代後期後半から終末期頃が考えられる。

SS10・18 (第84図)

B～C-7～8グリッド、南西―北東方向に張り出した支尾根頂部の標高38.5～38.0mの斜面において斜面の地山をL字状にカットし、平坦面を作成した段状遺構2基が上下二段に検出された(第84図)。遺構間に明瞭な新旧関係は認められず、ほぼ同時期の構築と考えられる。

SS10 (第84・85図)

位置 表土直下に検出された。標高38.0mの等高線にそって細長く伸びる段状遺構である(第84図)。上段に隣接してSS18が、西側2.0mにSS9が存在する。

形状 斜面の高位側の岩盤をL字状にカットして細長い平坦面を造成している。傾斜面の等高線に直交する方向を主軸と考えた場合の主軸方位はN-57°-Wで、ほぼ等高線に直交している。規模は長軸17.8m、短軸1.8m、確認面からの深さは壁際で38cmを測る。壁は開きながら立ち上がり、検出範囲での床面積は10.2㎡を測る。床面は下方にやや傾斜しつつも平坦である。面上は硬化している。

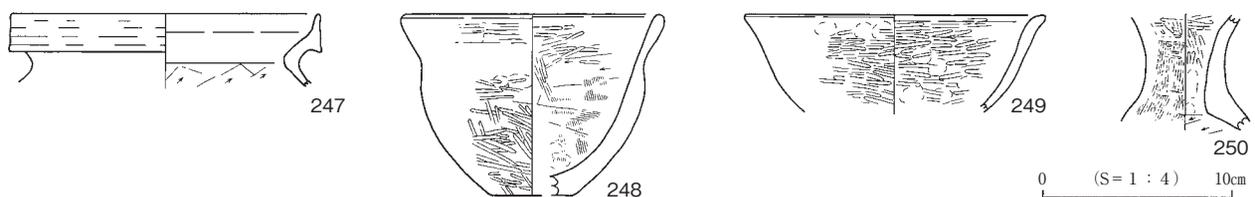
本址に伴うピットは遺構内に検出されたP1～6・9～10及び斜面上方に並ぶP7・8・11の計11基である。いずれも平面形は円形を呈する。このうち東側のP1・2、P3・4がそれぞれ壁面に平行して並ぶ柱穴列と考えられる。柱穴間距離は2.1～2.2mを測る。また、柱穴列の範囲の壁面直下には幅30～50cm、深さ10cmの溝が検出された。溝底は平坦である。この部分が壁材を据えた溝とすれば、小屋掛けの簡易な建物の可能性も考えられよう。詳細はピット計測表を参照されたい。

埋土 急斜面であり、埋土は薄い、黒褐色土を主体とする。下層より順次堆積していることから、自然埋没の様相を呈する。



第85図 SS10出土遺物

遺物 本址出土の遺物は少なく、僅かに2点が図示



第86図 SS18出土遺物

し得た（第85図）。245は高坏の受部、口縁は外反する。246は甕の底部、平底である。

時期 出土遺物と形状から、本址は弥生時代後期中葉頃の段状遺構と考えられる

SS18（第84・86図）

位置 表土直下に検出された段状遺構である（第84図）。下段に隣接してSS10が、西側2.0mにSS9が存在する。確認面上の標高は38.5mを測る。

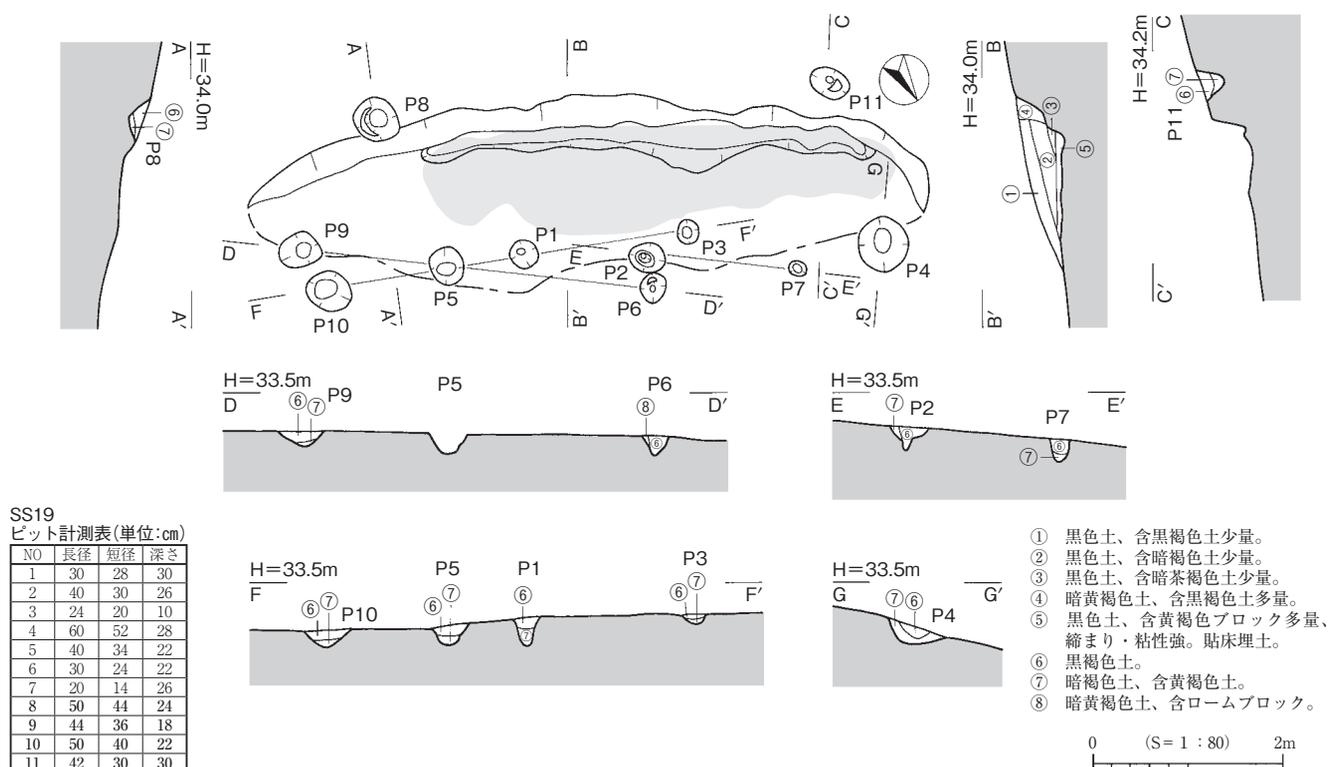
形状 斜面の高位側の岩盤をL字状にカットして平坦面を造成している。平面形は長方形を呈する。傾斜面の等高線に直交する方向を主軸と考えた場合の主軸方位はN-58°-Wで、下段のSS10とほぼ平行する。規模は長軸5.2m、短軸1.3m、確認面からの深さは壁際で20cmを測る。壁はやや開きながら立ち上がり、検出範囲での床面積は3.6㎡を測る。床面はほぼ平坦で、硬化している。

本址に伴うピットはP12～13の2基である。これらのピットの部分では床面は斜面により削平されているが、位置的に考えて本址に付属するものと考えられる。いずれも平面形は円形を呈する。この2基は壁面に対して平行して並ぶ柱穴列と考えられる。柱穴間距離は3.0mである。また、壁面直下には幅18cm、深さ10cmの溝が検出された。この部分が壁材を据えた溝とすれば、SS10と同様に小屋掛けの簡易な建物が存在した可能性も考えられよう。詳細はピット計測表を参照されたい。

埋土 急斜面であり、埋土は薄い。黒褐色土を主体とする。下層より順次堆積していることから、自然埋没の様相を呈する。

遺物 本址からの出土遺物のうち4点が図示し得た（第86図）。247は壁溝中から出土した甕、複合口縁帯は上下に張り出し、口縁は垂直気味に立ち上がり、端部は僅かに外反する。248は小型の鉢、平底で胴部は張り、頸部は緩やかに屈曲し、口縁は外反する。249は高坏、体部は膨らみを持ちながら外傾し、口縁部は肥厚し、ナデにより外反する。250は壁溝中出土の器台の接合部である。

時期 出土遺物と形状から、本址の時期は弥生時代後期中葉頃と考えられる。



第87図 SS19

SS19 (第87図)

位置 C-9グリッド、調査区南側の南西—北東方向に張り出した支尾根頂部斜面の表土直下に検出された(第87図)。SD3を一部切って構築される。東側6.0mにSS21が存在する。確認面上の標高は33.7mを測る。

形状 斜面の高位側の地山をL字状にカットして平坦面を形成している。平面形は長方形を呈する。傾斜面の等高線に直交する方向を主軸と考えた場合の主軸方位はN-59°-Wで、細長く等高線に沿っている。規模は長軸7.2m、短軸1.8mを測る。壁はやや開きながら立ち上がり、検出範囲での床面積は5.4㎡を測る。南西寄りの床面には非常に硬化した貼り床が検出された。この貼り床を剥したところ、壁面直下の地山直上に長さ480cm、幅20~40cm、深さ10cmの溝が検出された。埋土の観察から、古い時期の段状遺構に伴う壁溝と考えられる。

本址に伴うピットはP1~11の11基である。平面的に見ると、P9・5・6、P2・7、P10・1・3が柱穴列として考えられる。このうちP10・1・3は他の2本の柱穴列と主軸方向が異なる。このことから建て替えに伴う軸線の変更が想定できる。平面形は円形を呈し、柱穴間距離は1.8~2.1mである。またP8・11は遺構の上位斜面に検出されたピットであるが、位置的にみて本址の構造材などに伴うものと考えられる。詳細はピット計測表を参照されたい。

以上のことから、この段状遺構は新旧二時期あり、いずれも柱穴列を伴うものと考えられる。

埋土 黒色土を主体とし、貼床構成土は黄褐色土を多く含む黒色土で、上面は非常に硬化している。

遺物 本址から遺物は出土していない。

時期 遺物が出土していないので時期比定が困難であるが、切合い関係や形状から、弥生時代後期以降の段状遺構と考えられる。

SS21 (第88図)

位置 調査区南東際、C-10グリッド、南側の南西—北東方向に張り出した支尾根頂部斜面の表土直下に検出された(第88図)。南東側は調査区外に延びる。確認面上の標高は31.4mを測る。西側6.0mにSS19が存在する。斜面の高位側の地山をL字状に削り、平坦面を形成している。形状から新旧二時期あると考えられ、上位の遺構をSS21-a、下位の遺構をSS21-bとした。上位の遺構は近世以降のものと考えられるが、遺構理解の煩雑さを避けるためここに述べることとする。

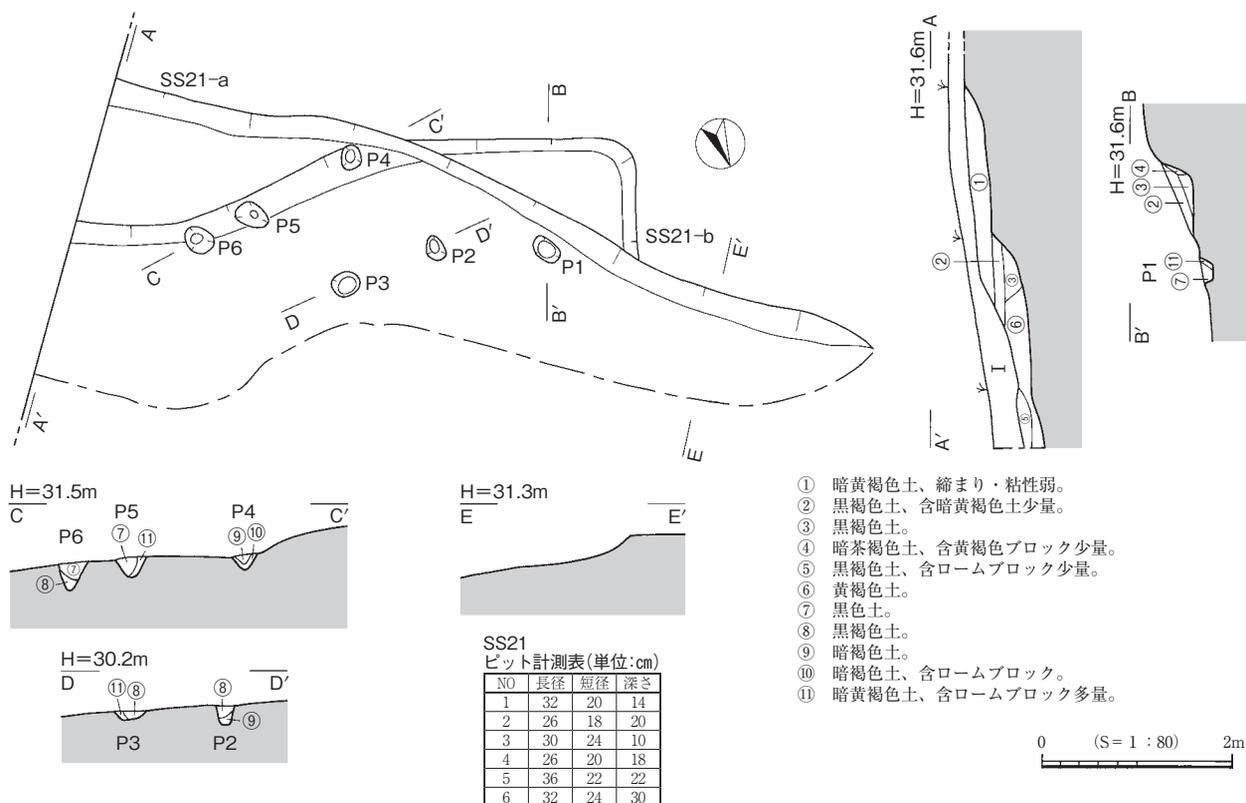
SS21-a

形状 平面形は長方形を呈すると推測されるが、北東側は削平により失われている。傾斜面の等高線に直交する方向を主軸と考えた場合の主軸方位はN-43°-Eで、ほぼ等高線に沿っている。規模は長軸8.6m以上、短軸3.2mを測る。壁は開きながら立ち上がり、検出範囲での床面積は13.7㎡を測る。床面はほぼ平坦である。

埋土 暗黄褐色の単層で締まりがなく、近世以降の堆積土と考えられる

遺物 本址から遺物は出土していない。

時期 埋土の観察から、本址の時期は近世以降の段状遺構と考えられる。



第88図 SS21

SS21-b

形状 南東側が調査区外に広がるが、平面形は長方形を呈すると推測される。傾斜面の等高線に直交する方向を主軸と考えた場合の主軸方位はN-76°-Wである。規模は長軸6.0m以上、短軸1.8mを測る。壁は開きながら立ち上がり、検出範囲での床面積は10.8㎡を測る。床面はほぼ平坦である。

本址に伴うピットはP1～6の6基である。いずれのピットも平面形は円形を呈し、このうちP4～6は南壁際に0.7～1.2mの柱穴間距離で並んでいる。詳細はピット計測表を参照されたい。

埋土 近世以降の削平により、埋土は南西側のみの遺存である。黒褐色土を主体とし、概ね自然埋没の状況を呈する。

遺物 埋土の遺存状態が悪く、本址から遺物は出土していない。

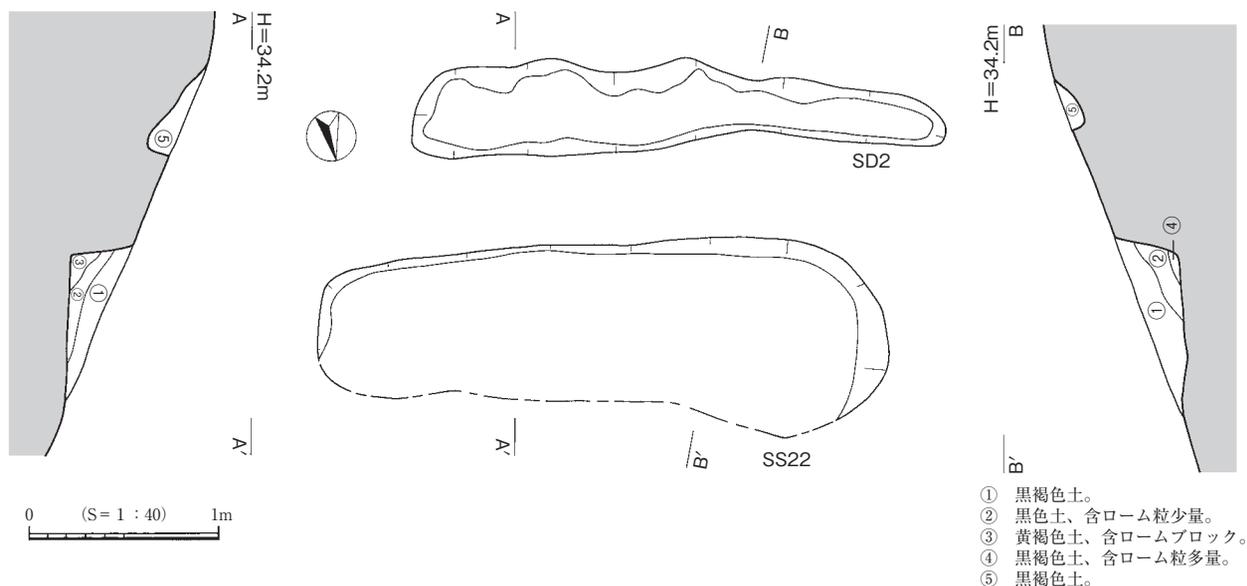
時期 遺物が出土していないので時期比定が困難であるが、切合い関係や形状から本址の時期は弥生時代後期以降の段状遺構と考えられる。

SS22 (第89図)

位置 D-6～7グリッドの上部谷壁の急斜面に単独で位置する。南西7.0mにSS5～7が、北側8.0mにSI3が存在する。南側に平行してSD2が掘り込まれており、両者は一連の遺構と考えられる。確認面上の標高は33.6mを測る。

形状 斜面の高位側の地山を削り、平坦面を形成している。北壁側は削平により失われているが、平面形は長方形を呈すると推測される。斜面下方は削平により失われている。傾斜面の等高線に直交する方向を主軸と考えた場合の主軸方位はN-10°-Eである。規模は南北1.2m、東西3.1m、確認面からの深さは壁際で35cmを測る。壁はやや開きながら立ち上がり、残存範囲での床面積は3.72㎡を測る。床面はほぼ平坦で、面上に溝やピット等の付属物は検出されなかった。

埋土 下層に黒色土、上層に黒褐色土が堆積し、下層より順次堆積していることから、自然埋没の



第89図 SS22・SD2

様相を呈する。

遺物 本址から遺物は出土していない。

時期・性格 遺物が出土していないので時期比定が困難であるが、形状から弥生時代後期以降の段状遺構と考えられよう。また位置的に、SI3と関連性の高い遺構の可能性が高い。

SD2 (第89図)

位置 D-6～7グリッドの上部谷壁の急斜面に位置する。斜面の傾斜に直交して北西—南東方向に延びる溝状遺構である。北側0.5mに平行してSS22が存在する。確認面上の標高は33.9mを測る。

形状 平面形は長楕円形で直線的に伸びる。長軸方位はN-75°-Wである。規模は最大長2.8m、最大幅0.5m、確認面からの深さは最大で18cmを測る。断面の形状はU字形を呈し、斜面高位側は緩やかに、低位側は急激に立ち上がる。底面は平坦である。

本址南側に平行してSS22が掘り込まれていることから、両者は一連の遺構と考えられる。

埋土 黒褐色土の単層で、堆積状況からは流水の痕跡は認められない。

遺物 本址から遺物は出土していない。

時期・性格 遺物が出土していないので時期比定が困難であるが、SS22と一連の施設である可能性が高く、排水などの付帯施設の溝状遺構である可能性が考えられる。

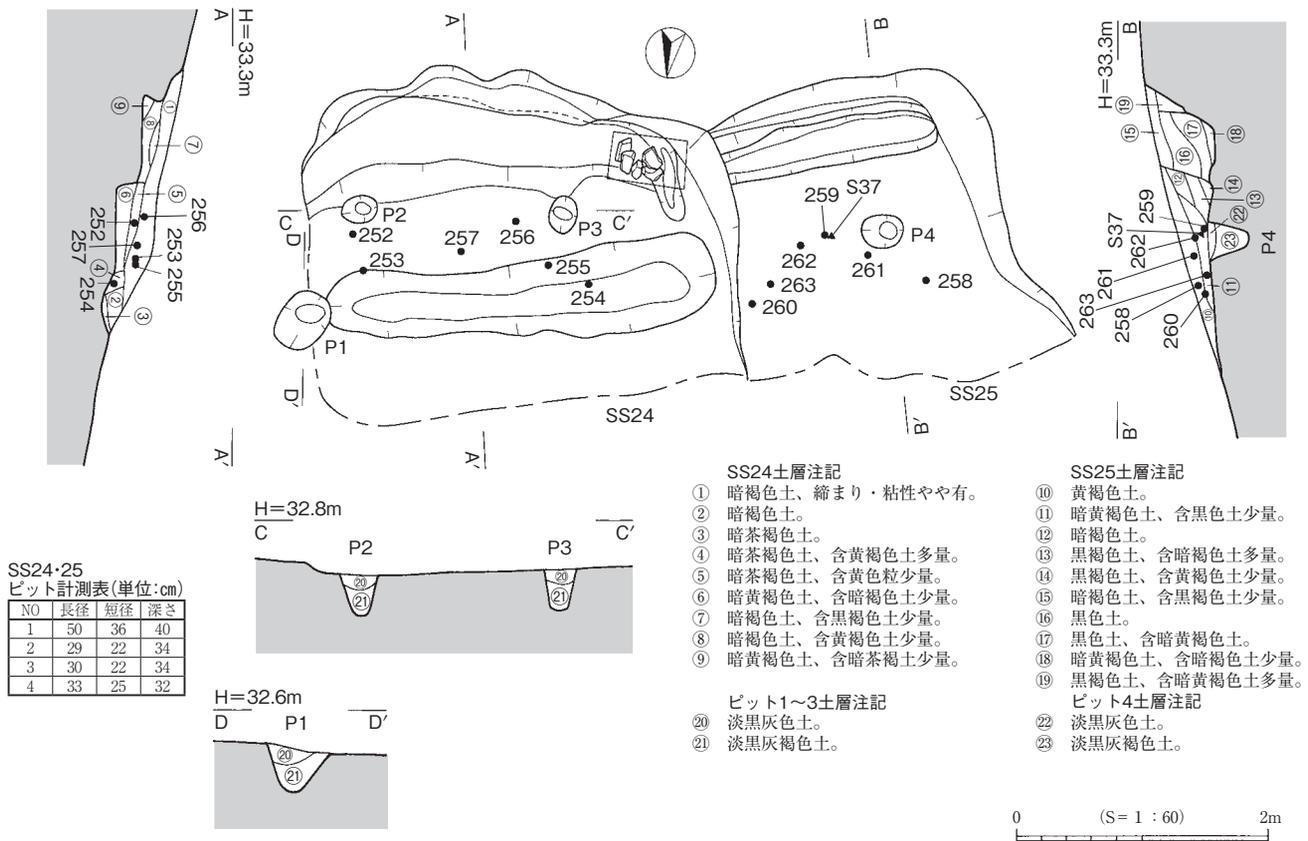
SS24・25

H-3グリッド、南西—北東方向に張り出した支尾根北東側の谷頭の標高33.0mの斜面において、地山をL字状にカットし平坦面を作成した段状遺構2基が検出された(第90図)。新旧関係としてはSS24をSS25が切って構築されている。以下、遺構ごとに個別に述べることとする。

SS24 (第90～92図)

位置 SS25の東側を切って構築された段状遺構である(第90図)。

形状 斜面の高位側の岩盤をL字状にカットして平坦面を造成している。平面形は長方形を呈する。傾斜面の等高線に直交する方向を主軸と考えた場合の主軸方位はN-82°-Eである。規模は長軸3.4m、

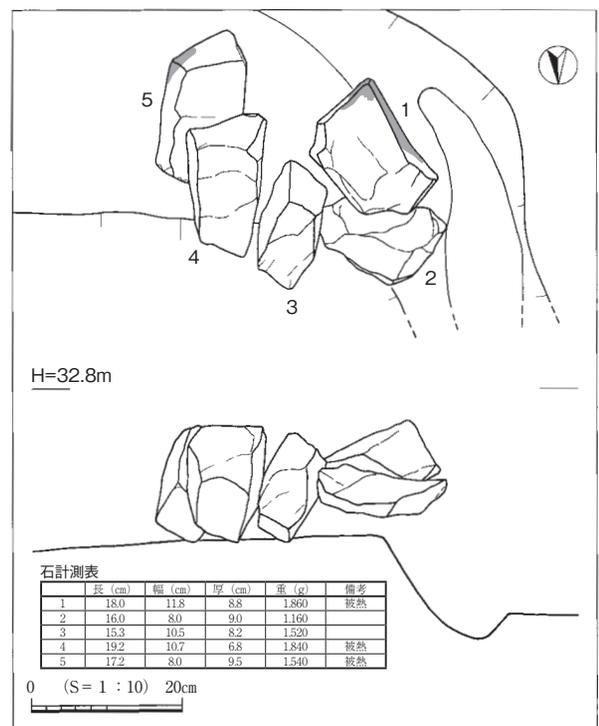


第90図 SS24・25

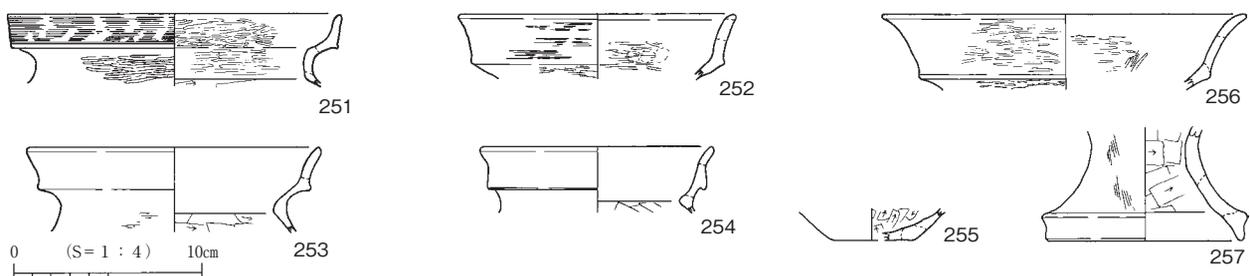
短軸2.6m、確認面からの深さは40cmを測る。壁はやや開きながら立ち上がるが、斜面高位側の壁面はオーバーハングし内側に傾斜して立ち上がる。この形状から、壁材を斜めに据えていた可能性も考えられる。検出範囲での床面積は5.3㎡を測る。床面は平坦である。本址は南壁から幅50cm程の所でさらに深さ18cm程掘り込まれている。埋土の観察から新しい時期の建て替えと考えられる。

本址に伴うピットは3基である。いずれも平面形は円形を呈する。このうち、段差の直下の床面にP2～3の2基のピットが検出された。この2基は壁面に対して平行して並ぶ柱穴列と考えられる。柱穴間距離は1.6mである。詳細はピット計測表を参照されたい。

また、床面中央部に南壁に平行して長さ310cm、



第91図 SS24石組



第92図 SS24出土遺物

幅42～62cm、深さ10cmの溝が検出された。埋土の観察によれば、この溝はSS24の埋土に掘り込まれていることから、新しい時期の遺構と考えられる。以上のことから、本址は階段状に下方に向かって2回以上の建て替えが行われた可能性が高い。

本址南西隅に、凝灰角礫岩製の切石5個からなる石組1基が検出された（第91図）。5個の切石は長さ15～18cm、幅8cm、厚さ5～8cmの方柱状で、このうちの3個に赤褐色や黒色の被熱痕が認められる。個々の石については計測表を参照されたい。この石組については、南西隅に据えられていることから、当初竈等の構造材の可能性を想定した。ただし、被熱面は一様ではなく、また石組み内に焼土や炭化物等の堆積は認められなかった。以上のことから、この場所で竈の構造材などの目的で使用されたとは考えにくい。ただし、一番古い時期の床面南西隅に置かれていたことから、建て替えに伴って本来の位置から移動された可能性も否定できない。

埋土 急斜面であり、埋土は薄い、3回の建て替えの様相を呈する。下層より順次堆積していることから、自然埋没の様相を呈する。

遺物 本址からの出土遺物のうち7点が図示し得た（第92図）。251～254は複合口縁の甕、口縁部はやや外傾し、複合部下端は形骸化する。254は溝埋土中出土で、最も新しい時期のものである。255は甕底部、平底である。256は有段の高坏、口縁は大きく外反する。257は器台の脚部である。

時期 出土遺物と切り合い関係から、本址の時期は弥生時代後期中葉から後期後半と考えられる。

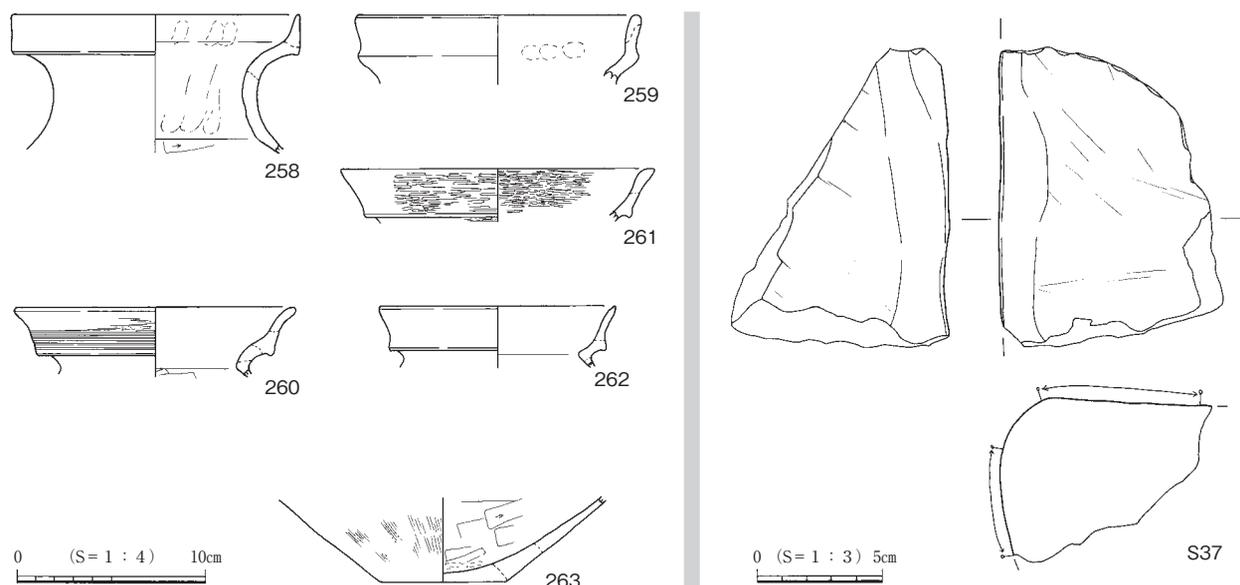
SS25（第90・93図）

位置 SS24の西側に検出された段状遺構である（第90図）。

形状 斜面の高位側の岩盤をL字状にカットして平坦面を造成している。SS24に切られ遺存状態は悪いが、平面形は長方形が推測される。傾斜面の等高線に直交する方向を主軸と考えた場合の、主軸方位はN-20°-Wである。規模は長軸2.6m以上、短軸2.5m、確認面からの深さは壁際で60cmを測る。壁はやや開きながら立ち上がり、残存範囲での床面積は2.9㎡を測る。床面は平坦である。面上は硬化している。また、南壁面直下に長さ180cm、幅25～30cm、深さ10cmの溝が検出された。

本址に伴うピットはP4である。平面形は円形を呈する。詳細はピット計測表を参照されたい。

埋土 SS24と同様に、堆積状況から南側から下位に向かって順次2回の建て替えが行われたよう



第93図 SS25出土遺物

である。下層より順次堆積していることから、自然埋没の様相を呈する。

遺物 本址からの出土遺物のうち7点が図示し得た（第93図）。258は複合口縁の壺、口縁は垂直気味に立ち上がる。259～262は複合口縁の甕、口縁は外反し複合部下端は形骸化する。263は平底の甕である。S37はデイサイト製の砥石である。荒砥の破片で、表面及び左側面に使用痕が認められる。

時期 出土遺物と切合い関係から、本址の時期は弥生時代後期後半頃と考えられる。

SS12 (SB3) (第94～96図)

位置 K-2～3グリッド、調査区北側の下部谷壁緩斜面に検出された段状遺構である（第94図）。北東側は調査区外に広がる。SS33の上層に掘り込まれる。確認面上の標高は26.9mを測る。南東側10mにSS26が存在する。本址は時期的には後世の遺構であるが、遺構理解の煩雑さを避けるためにここに述べることとする。

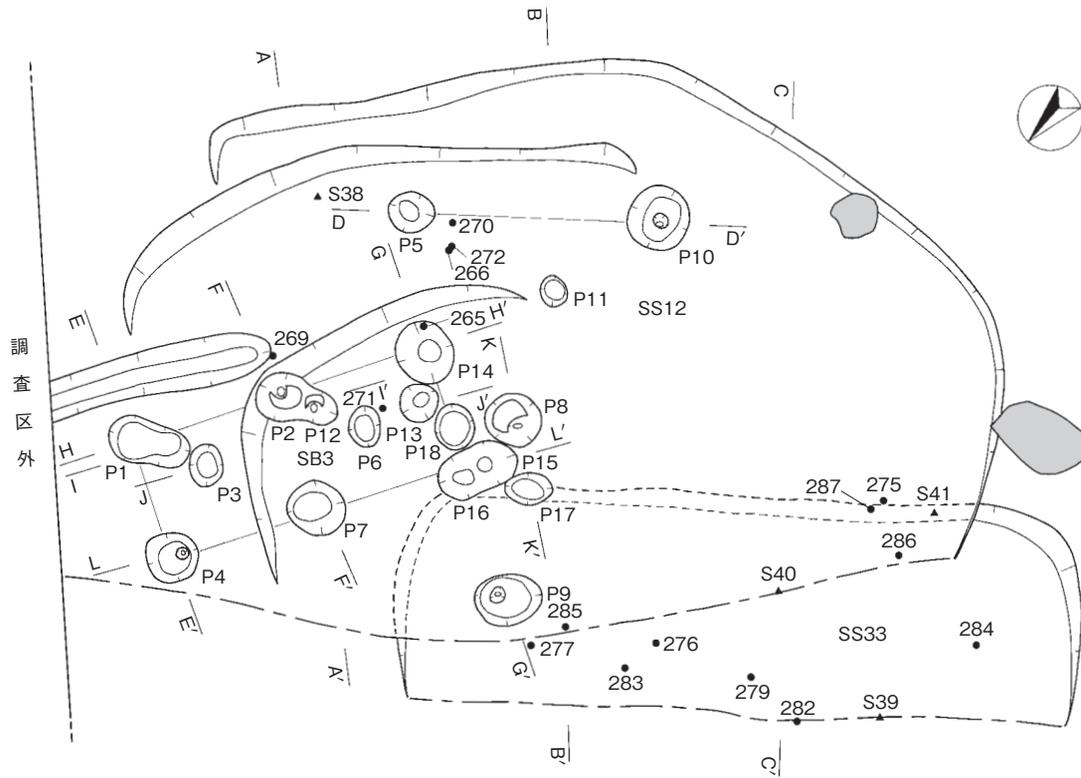
形状 斜面の高位側の地山をL字状に削り、平坦面を形成している。平面形は不整形な半円形を呈する。斜面の等高線に直交する方向を主軸と考えた場合の主軸方位はN-49°-Eである。規模は長軸9.5m以上、短軸5.8m、確認面からの深さは最深部で25cmを測る。壁は開きながら立ち上がり、検出範囲での床面積は47.0㎡を測る。床面はやや傾斜しつつも平坦で、一部SS33の埋土上層を床面としている。面上は硬化している。床面状にはコの字状の段差が2段検出された。この段差はいずれも比高差10cm程であるが、主軸方向はそれぞれずれている。土層堆積状況から下位に向って新しく掘り込まれていることが分かる。

面上の北東寄りには掘立柱建物1棟（SB3）が構築されている。SB3は桁行2間、梁行1間の側柱建物で、主軸方位はN-29°-Eを測り、等高線にほぼ平行する。長軸桁行3.2m、短軸梁行1.3m、床面積は4.2㎡を測る。桁行の柱間寸法は1.6m、梁行の柱間寸法は1.3mと桁行の方が広い。柱穴の形状から少なくとも2回以上の建て替えが認められる。柱掘り方は直径42～70cmの円形を呈する。柱痕跡は確認されなかった。また、SB3の北東側10cmに長さ2.4m以上、幅40～50cm、深さ20cmの溝が検出された。北東側は調査区外に延びるが、位置的に考えて掘立柱建物跡に伴う雨落ちなど、排水の用途を持つ溝と考えられる。溝底面は平坦で、壁溝内ピット等は検出されなかった。

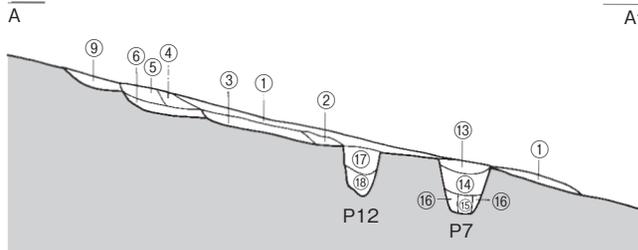
この他、本址に伴うピットは18基検出された。このうちP5とP10は壁面に対して平行して並ぶ柱穴列と考えられる。柱穴間距離は2.7mを測る。またその他のピットは位置的にみてSB3に伴う可能性が考えられよう。いずれも平面形は円形を呈し、段差を持つものもある。詳細はピット計測表を参照されたい。

埋土 暗茶褐色土を主体とする。堆積状況から下位に向って少なくとも2回以上の掘り直しが認められる。下層より順次堆積していることから、自然埋没の様相を呈する。また、西壁際に焼土の堆積が認められた。埋土中に堆積していることと、遺構外にも焼土の分布が広がることから、この焼土は本址廃絶後のものと考えられる。

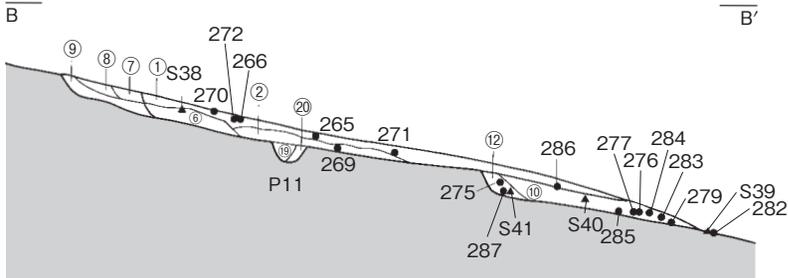
遺物 本址からの出土遺物のうち、12点が図示し得た（第96図）。264～269は土師器類である。264はSB3のP1出土の土師器の甕である。体部は球胴形、頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁は外反する。265・266は上層出土の甕、口縁は緩やかに外反する。267はSB3のP14出土の小型の甕、体部は僅かに胴が張るが直線的で、口縁端部はナデにより外反する。268はSB3のピット1出土の小型の甕、口縁に最大径を持ち、口縁端部は短く外反する。269は高坏の脚部である。



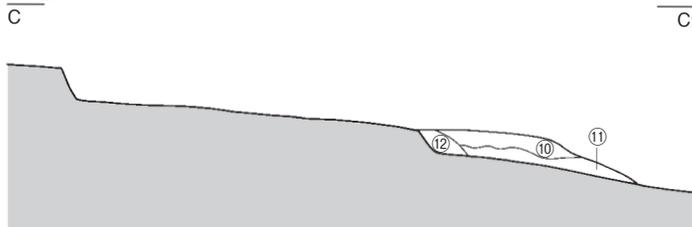
H=27.5m



H=27.5m



H=27.0m



SS12・33
ビット計測表(単位:cm)

NO	長径	短径	深さ
1	88	40	74
2	58	50	26
3	44	34	20
4	58	50	56
5	50	42	38
6	44	32	22
7	63	54	58
8	62	54	42
9	72	52	24
10	68	64	40
11	32	28	20
12	38	32	40
13	42	38	28
14	68	58	86
15	48	46	52
16	48	40	44
17	50	33	28
18	48	42	12

SS12土層注記

- ① 暗茶褐色土、含黄褐色土少量。
- ② 暗茶褐色土、含黄褐色土多量。
- ③ 暗褐色土、含黄褐色土少量。
- ④ 暗茶褐色土、含ロームブロック少量。
- ⑤ 茶褐色土、
- ⑥ 茶褐色土、含暗褐色・黄褐色土多量。
- ⑦ 暗黄褐色土。
- ⑧ 暗褐色土、含黄褐色土・黑色粒・炭化物多量。
- ⑨ 茶褐色土、含黑色粒多量。

SS33土層注記

- ⑩ 黑色土、含茶褐色土ブロック状。
- ⑪ 黑色土。
- ⑫ 黑色土、含暗褐色土少量。

ビット7土層注記

- ⑬ 暗褐色土、含黄褐色土少量。

ビット12土層注記

- ⑭ 黒褐色土。
- ⑮ 黒褐色土、含黄褐色土多量。
- ⑯ 暗褐色土、含ロームブロック多量。

ビット11土層注記

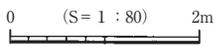
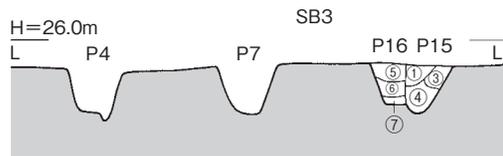
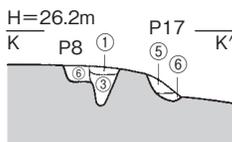
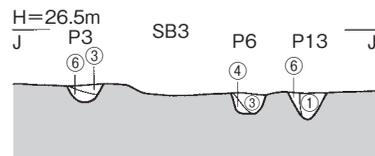
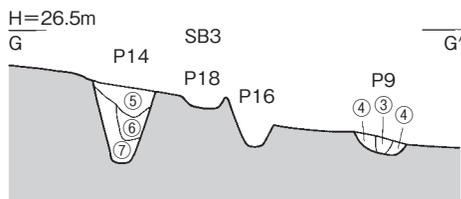
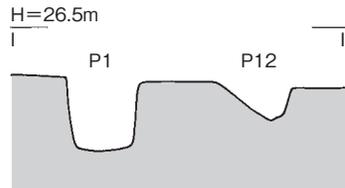
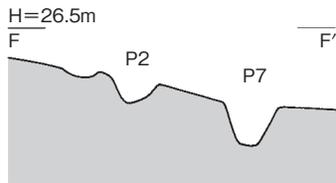
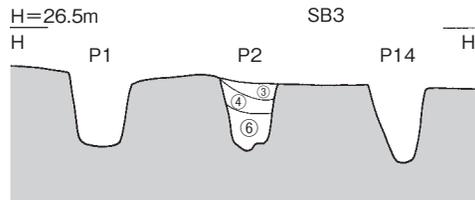
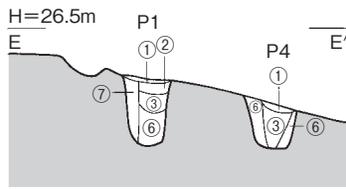
- ⑰ 暗茶褐色土、含ローム粒・炭化物多量。
- ⑱ 黒褐色土、含暗黄褐色土少量。
- ⑳ 黒褐色土、含ローム粒多量。

0 (S=1:80) 2m

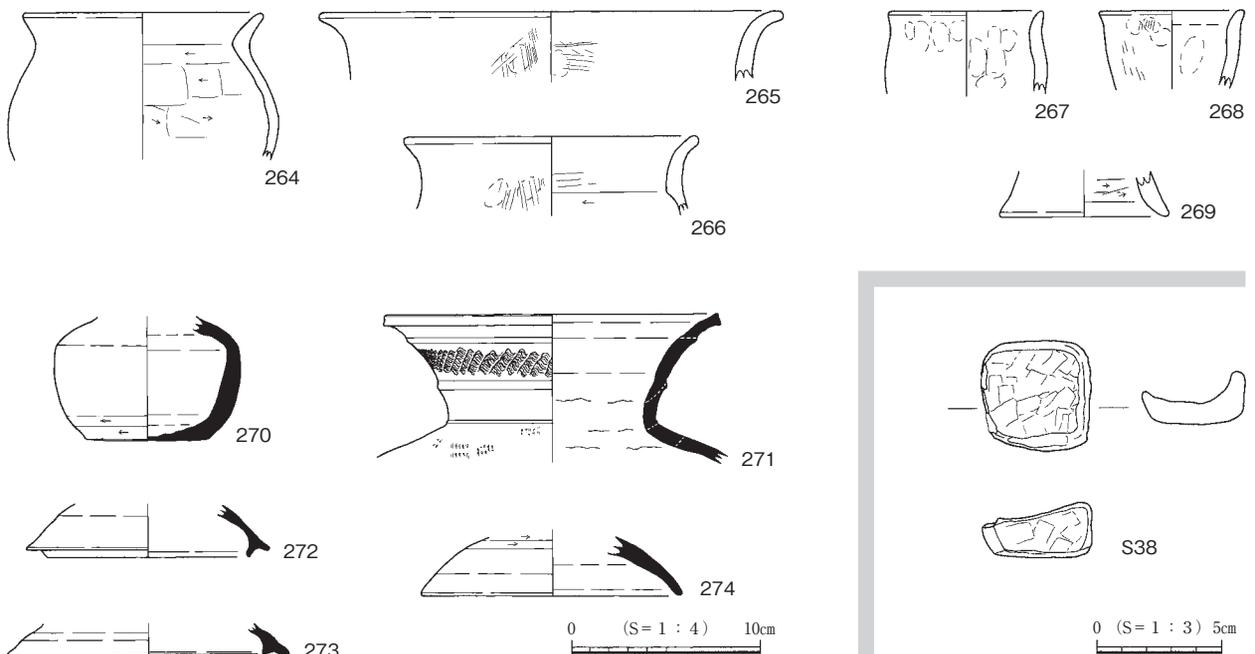
第94図 SS12・33



- ① 暗褐色土、含茶褐色土少量。
- ② ロームブロック。
- ③ 黒褐色土。
- ④ 黒褐色土、含黄褐色土多量。
- ⑤ 暗茶褐色土、含暗褐色土・ロームブロック。
- ⑥ 暗褐色土、含ロームブロック。
- ⑦ 黄褐色土、含暗褐色土。



第95図 SS12・33断面図



第96図 SS12出土遺物

270～274は須恵器類、270は壺、底部は平底で肩が張る。271は甕、緩やかに外反する口縁部には櫛状工具による波状文が施される。272～274は坏蓋、口縁端部にかえりを持つタイプと持たないタイプがある。

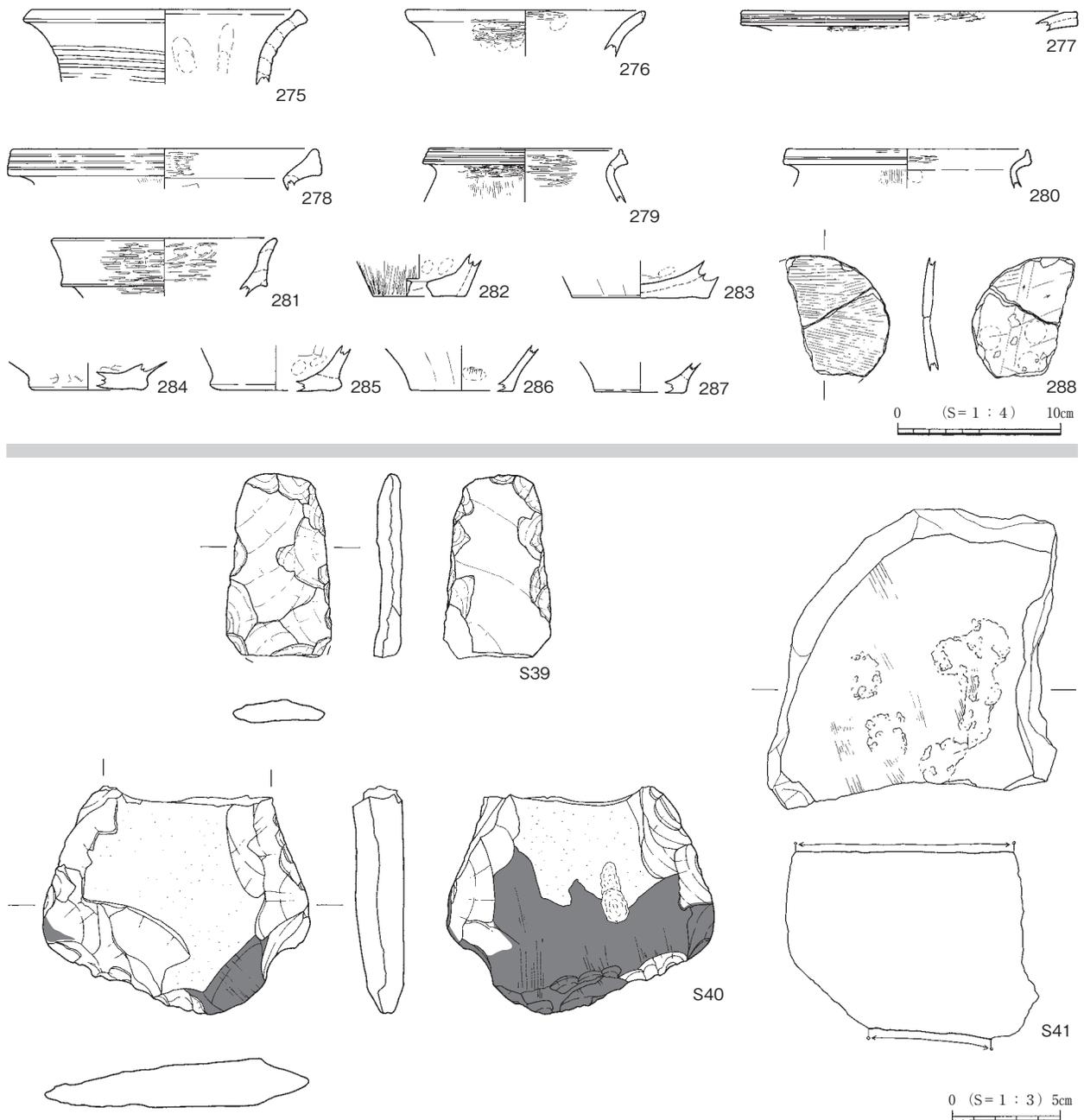
S38は凝灰岩製の石製品、小型の鑿状の工具で方形の坏状に調整している。

時期 出土遺物と形状から、本址の時期は7世紀後半頃と考えられる。

SS33 (第94・95・97図)

位置 K-2～3グリッド、調査区北側の下部谷壁緩斜面に検出された段状遺構である (第94図)。SS12下層に掘り込まれる。確認面上の標高は25.8mを測る。

形状 SS29下層に検出された。斜面の高位側の地山をL字状に掘り込んで、平坦面を形成している。平面形は長方形を呈する。斜面下方は削平により失われている。傾斜面の等高線に直交する方向を主軸と考えた場合の主軸方位は、N-40°-Wである。規模は長軸7.2m、短軸2.4m、確認面からの深さは



第97図 SS33出土遺物

壁際で25cmを測る。壁はやや開きながら立ち上がり、検出範囲での床面積は14.0㎡を測る。床面はほぼ平坦である。

埋土 黒色土を主体とし、下層より順次堆積していることから、自然埋没の様相を呈する。

遺物 本址からの出土遺物のうち17点が図示し得た（第97図）。275～277は弥生土器の壺、直立気味で緩やかに外反するものと、大きく開くものがある。275は頸部に4条以上の凹線文が施される。278～281は甕口縁部、短く屈曲する頸部に口縁端部が内傾するタイプと、幅広い複合口縁が外反するタイプがある。282は壺、平底の中央部に焼成前穿孔が内外面両方向から施される。283～287は平底の壺。288は弥生土器の転用品である。甕の体部を円形に加工している。

S39はデイサイト製の石鋏、刃部の幅はあまり広がらない。S40は安山岩製の石鋏、撥形を呈する。S41は角閃石安山岩製の台石、方形の素材の表裏面を使用している。

時期 出土遺物と形状から、本址は弥生時代後期中葉から後期後半にかけて使用された段状遺構と考えられる。

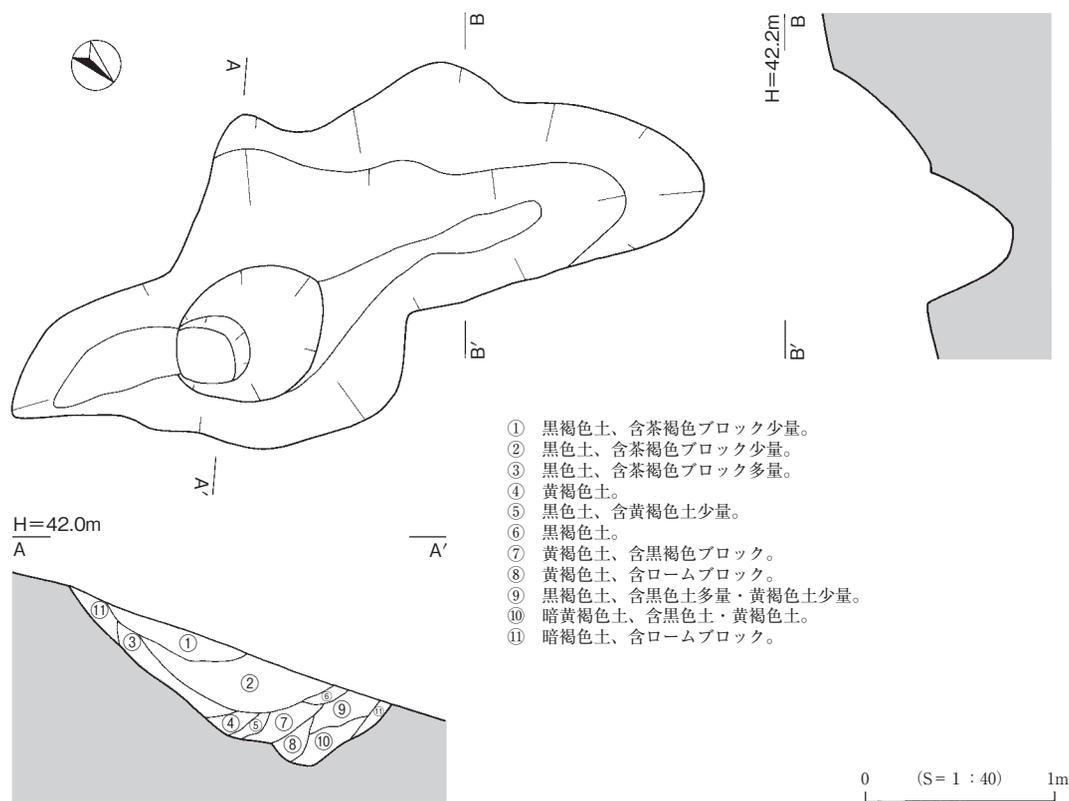
3) 土坑

SK4（第98図）

位置 B-5・6グリッド、南西—北東方向に張り出した支尾根頂部斜面に検出された（第98図）。確認面上の標高は41.5～41.9mを測る。

形状 平面形は上縁部が不整形な長楕円形、底面は方形に近い円形、断面形はV字形を呈する。底面は、土坑に溝状遺構が重複したような形状を呈する。埋土の観察から、当初掘り込まれていたのは土坑で、これが黄褐色土（⑧）層以下まで埋没した段階で溝状の掘り直しが行われたことが分かった。

長軸方位はN-61°-Wを指し等高線に平行する。規模は、上面で長軸390cm、短軸173cm、底面で直



第98図 SK4

径32cm、確認面からの深さは50cmを測る。

埋土 黄褐色土と黒色土を主体とし、1回以上の人為的な掘り直しが認められるが、概ね自然堆積の状況を呈する。

遺物 本址から遺物は出土していない。

時期 遺物が出土していないので時期比定が困難であるが、埋土の状況から本址の時期は弥生時代後期以降と考えられる。

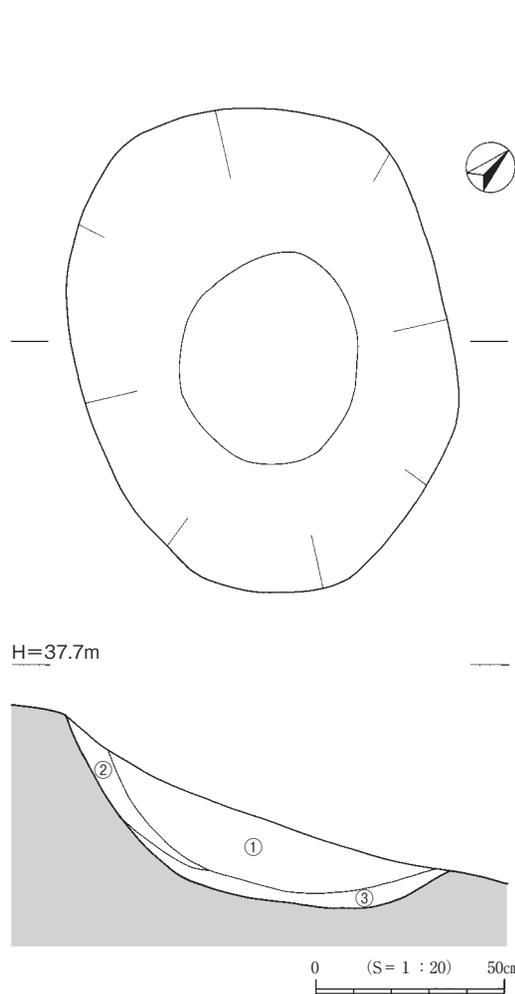
SK6 (第99図)

位置 C-8グリッド、南西—北東方向に張り出した支尾根頂部斜面に検出された(第99図)。SS10の平坦面上に構築されている。確認面上の標高は37.6mを測る。

形状 平面形は上縁部、底面共に楕円形を呈し、長軸方位はN-54°-Wを指す。断面形は緩やかなU字形を呈する。規模は上面で長径128cm、短径98cm、底面で長径57cm、短径47cm、確認面からの深さは47cmを測る。

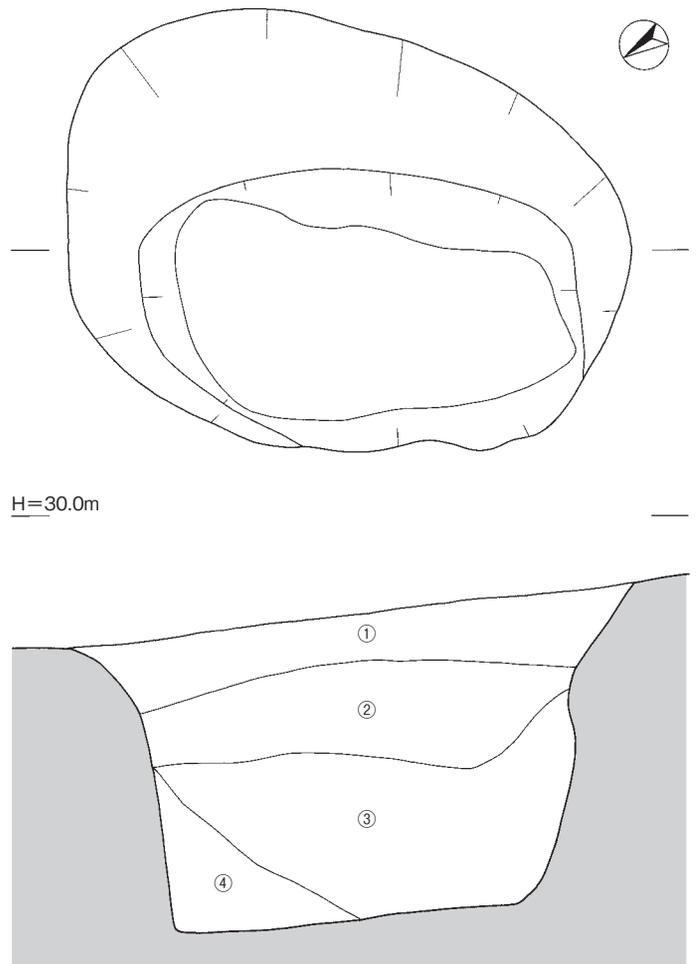
埋土 堆積状況の観察から暗黄褐色土(③層)及び暗褐色土(②層)の堆積後、一期に黒色土(①層)で埋まったようである。

遺物 本址から遺物は出土していない。



- ① 黒色土。
- ② 暗褐色土、含黒褐色土多量・ロームブロック少量。
- ③ 暗黄褐色土、含ロームブロック多量。

第99図 SK6



- ① 暗褐色土。
- ② 暗黄褐色土、含暗褐色土多量。
- ③ 暗黄褐色土、含ローム粒多量。
- ④ 暗黄褐色土、含暗褐色土少量。

第100図 SK23

時期 遺物が出土していないので時期比定が困難であるが、埋土や形状から弥生時代後期以降の土坑と考えられる。

SK23 (第100図)

位置 I-3グリッド、南西—北東方向に張り出した支尾根北側谷頭凹地に検出された(第100図)。南側3.5mにSK24が、東側5.0mにSK25が存在する。確認面上の標高は29.9mを測る。

形状 平面形は上縁部、底面共に長楕円形を呈し、長軸方位はN-36°-Eを指す。断面形は概ね箱型を呈し、上縁部は崩落により広がっている。底面は平坦である。規模は上面で長径154cm、短径126cm、底面で長径104cm、短径48cm、確認面からの深さは88cmを測る。

埋土 暗黄褐色土を主体とし、概ね自然埋没の状況を呈する。

遺物 本址から遺物は出土していない。

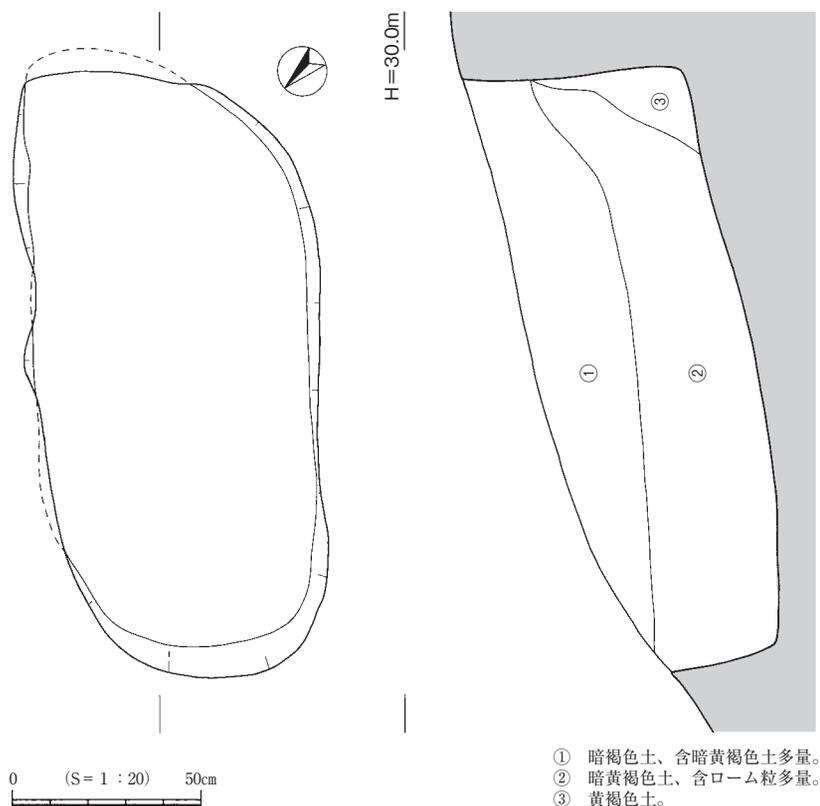
時期 遺物が出土していないので時期比定が困難であるが、埋土や形状から弥生時代後期以降の土坑と考えられる。

SK24 (第101図)

位置 I-3グリッド、南西—北東方向に張り出した支尾根北側谷頭凹地に検出された(第101図)。北側3.5mにSK23が存在する。確認面上の標高は29.7mを測る。

形状 平面形は上縁部、底面共に長楕円形を呈し、長軸方位はN-46°-Wを指す。断面形は箱形で斜面高位の南東壁面と北東壁面は僅かにオーバーハングする。規模は、上面で長径160cm、短径72cm、底面で長径158cm、短径72cm、確認面からの深さは62cmを測る。

埋土 下層に暗黄褐色土(②層)、上層に暗褐色土(①層)が堆積し、埋没状況から概ね自然埋没



第101図 SK24

の状況を呈する。

遺物 本址から遺物は出土していない。

時期 遺物が出土していないので時期比定が困難であるが、位置や形状から弥生時代後期以降の土坑と考えられる。

SK25 (第102図)

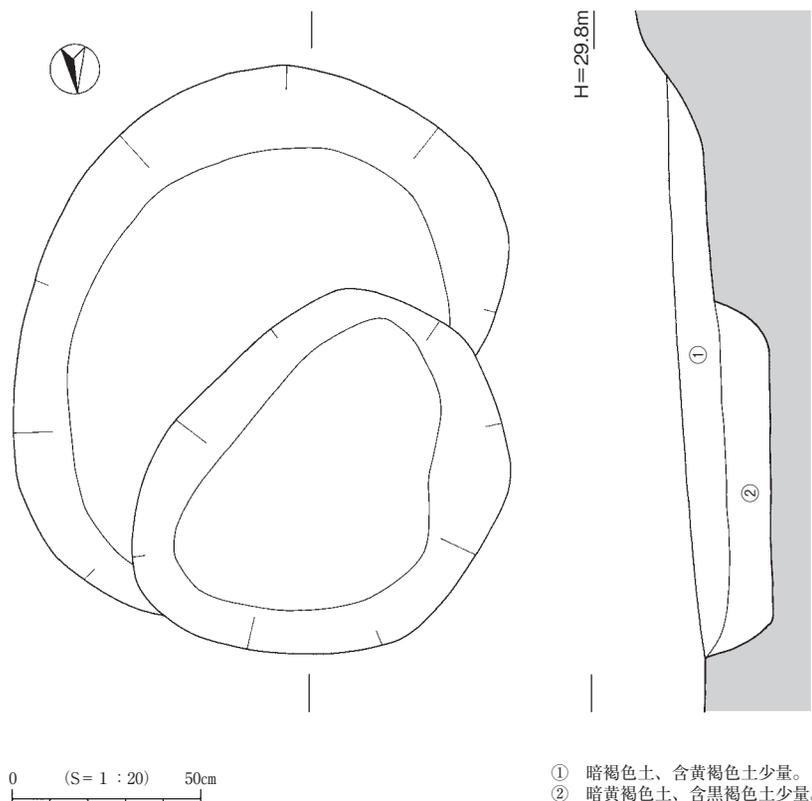
位置 J-4グリッド、南西—北東方向に張り出した支尾根北側谷頭凹地に検出された(第102図)。西側5.0mにSK24が存在する。確認面上の標高は29.6mを測る。

形状 平面形は上縁部、底面共に不整形な楕円形を呈し、底面の形状を見ると大小2基の土坑が重複している。長軸方位はN-38°-Eを指す。断面形は緩やかな逆台形で底面は平坦である。規模は、大土坑が上面で長径152cm、短径113cm、底面で長径123cm、短径96cm、小土坑が遺存部分の上縁が長径108cm、短径86cm、底面で長径87cm、短径57cm、確認面からの深さは24cmを測る。

埋土 小土坑部分に暗黄褐色土、大土坑部分に暗褐色土が堆積し、埋没状況の観察から小土坑埋没後に大土坑が掘り込まれた可能性も考えられる。

遺物 本址から遺物は出土していない。

時期 遺物が出土していないので時期比定が困難であるが、位置や形状から弥生時代後期以降の土坑と考えられる。



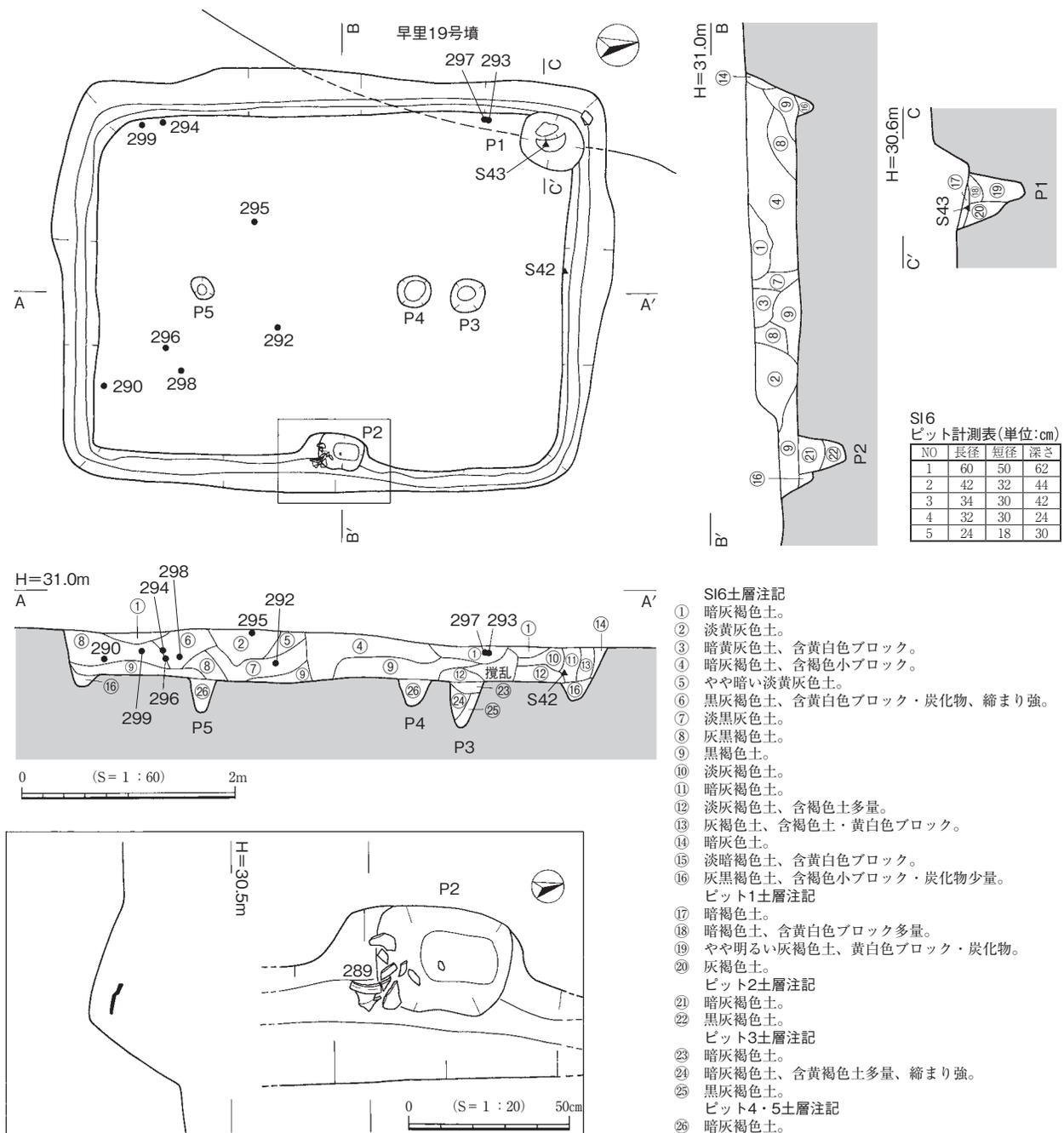
第102図 SK25

第3節 古墳時代前期前葉～古墳時代後期

古墳時代前期前葉から後期の遺構の概要

当該期の遺構は竪穴建物3棟 (SI6・9・10)、段状遺構1基 (SD3)、土壌墓9基 (SX3・7・11・15・16・22・SK1・8・19)、溝状遺構1条 (SD8) が丘陵尾根部と裾部に検出されている (第10図)。尾根斜面部には早里17～20号墳の4基の円墳が構築されている。この4基の円墳の周溝からは、複数の周溝内埋葬墓が検出された。分布傾向を見ると、当該期の竪穴建物は北側の丘陵裾部に構築され、丘陵斜面部には古墳や土壌墓等が展開している。出土遺物については、土師器坏主体で、特に周溝内埋葬墓から脚付埴複数個と長頸壺をセットとする供献土器が良好な状態で出土している。

なお、前述のように、同一地点に重層的に検出された複数の遺構については、遺構解釈の煩雑さを避けるため、帰属時期がそれ以降のものについても同一項に述べている。



第103図 SI6

1) 竪穴建物

SI6 (第103・104図)

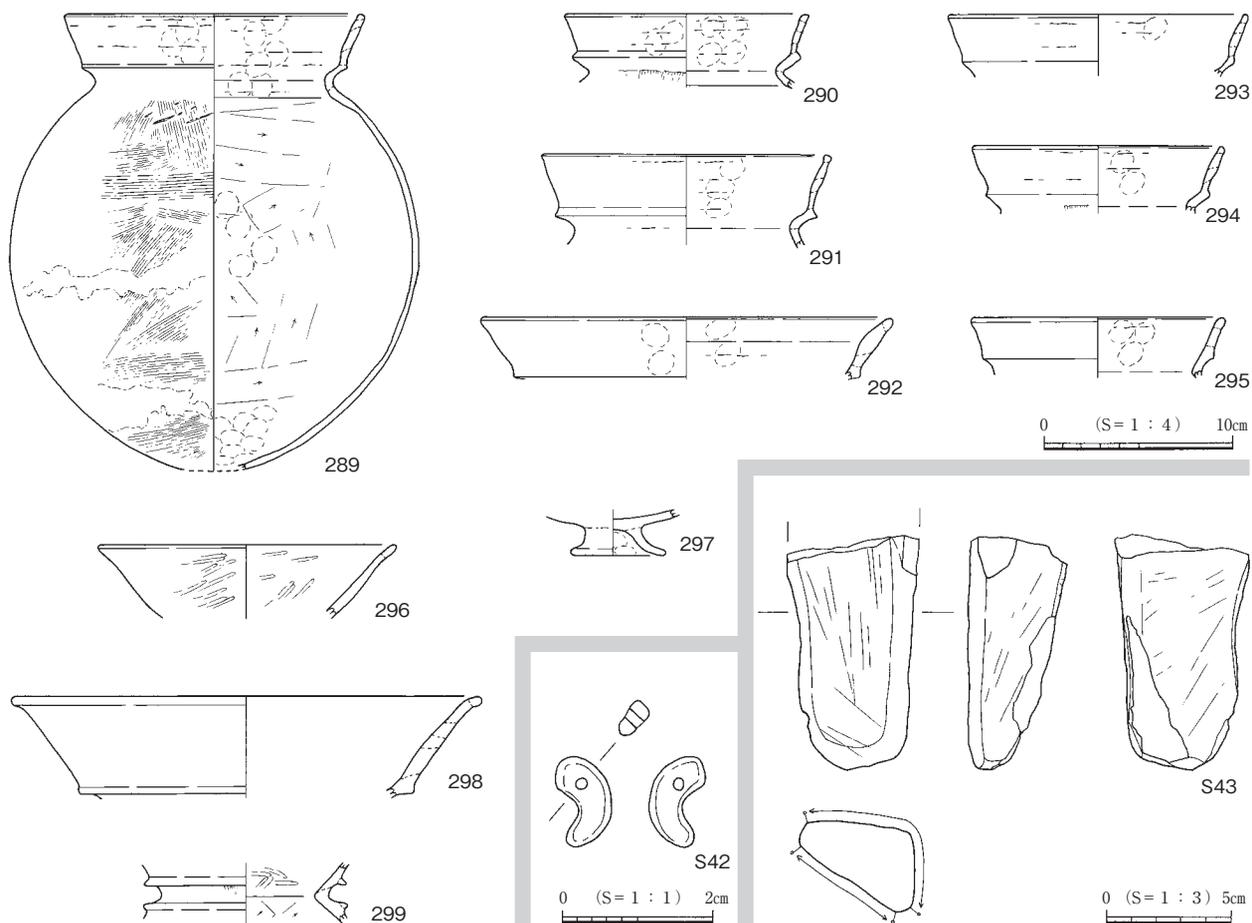
位置 I-5グリッド、調査区中央の南西—北東方向に張り出した支尾根頂部に検出された竪穴建物である。(第103図)。西北側隅が早里19号墳周溝により一部削平されている。西側10mにSI9が存在する。確認面上の標高は30.7mを測る。

形状 平面形は長方形を呈する。長軸方向を主軸と考えた場合の主軸方位はS-8°-Wである。規模は長軸長5.1m、短軸長3.9m、確認面からの深さは最大で45cmを測る。壁面はやや開きながら立ち上がり、床面積は13.3㎡を測る。床面は平坦で、全体に硬化している。周溝は全周している。幅20~30cm、深さ18cmを測り、断面の形状はU字形を呈し、底面は平坦である。

本址に伴うピットは全部で5基検出された。位置や形状から竪穴部中央のP3~5を棟持柱とする2本柱構造の建物と考えられる。北東側のP3・4は建て替えと考えられる。支柱穴間距離は1.8~2.4mを測る。柱痕跡は認められない。平面形は円形で、柱掘方は直径25~60cmを測る。また、北西隅のP1及び東壁中央部のP2は、周溝際に掘り込まれた特殊ピットで、形状や遺物の出土状況から貯蔵穴の可能性がある。P2下層からは甕が良好な状態で出土し、P1からは砥石が出土した。各ピットの詳細については計測表を参照されたい。

埋土 黄白色ブロックを含む客土により、人為的に埋め戻されたような乱れた堆積状況を示す。本址上面には早里19号墳の周溝が掘り込まれていることから、古墳築造時に攪乱を受けた可能性が考えられる。

遺物 本址からは埋土中~上層を中心に遺物が出土している。このうち13点が図示し得た(第104

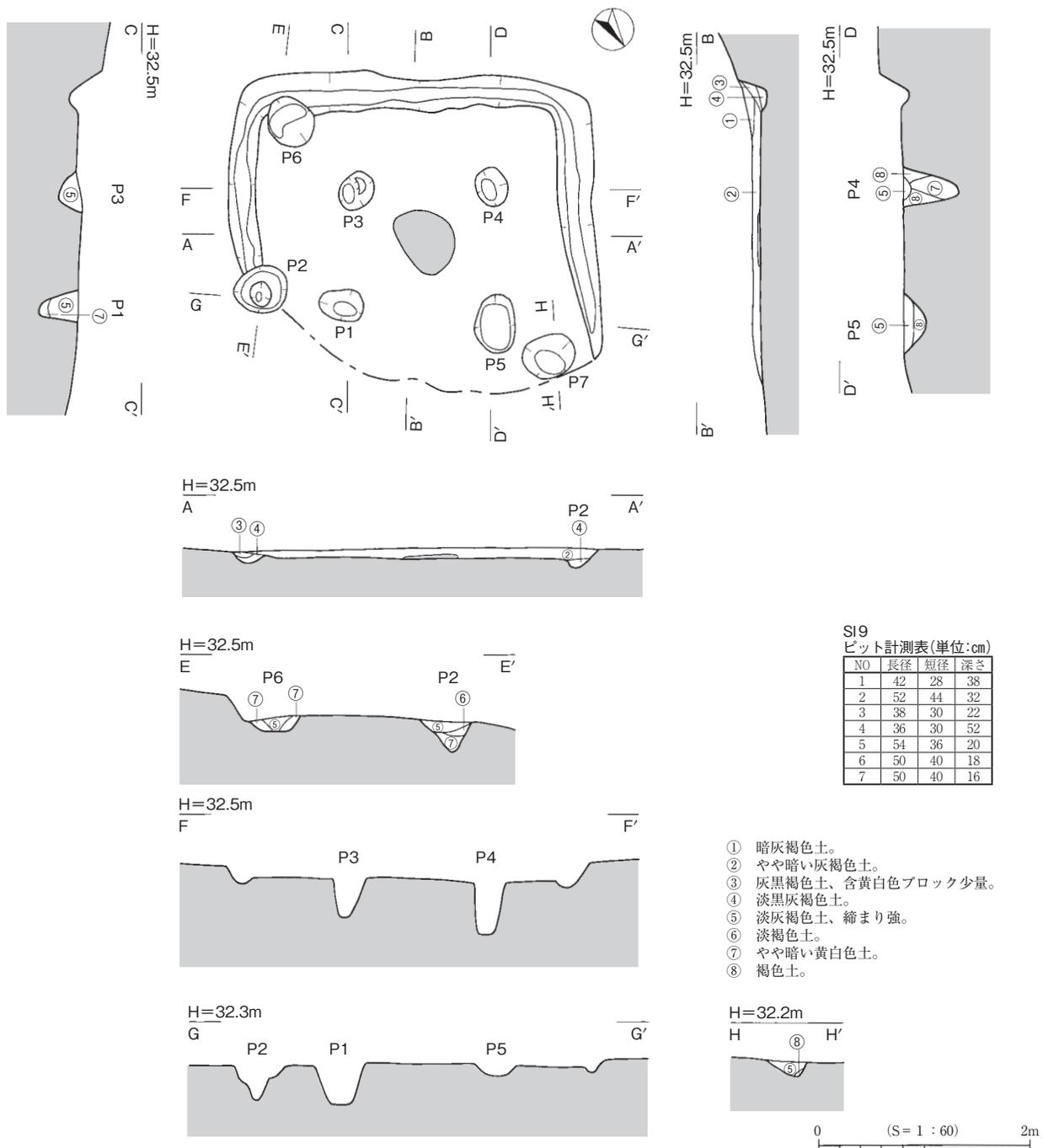


第104図 SI6出土遺物

図)。289～295は複合口縁の甕、いずれも全体的にシャープな作りで、複合部下端は横に張り出す。289はピット2から出土した（第103図）。体部外面下位と最大径部位にオキ火上転がし痕が二段、内面には底部周辺と肩部にコゲが認められる。296は高坏、口縁部は緩やかに外反する。297は低脚坏、脚端部は外反する。298・299は鼓形器台である。

S42は滑石製の勾玉、竪穴建物北壁際の埋土中層から出土した。長さ1.2cm、厚さ0.3cmと小型のものである。S43はピット1内から出土した角礫凝灰岩製の砥石、荒砥で長方形の素材の表裏面と右側面を使用している。

時期 ピット内からの出土遺物から、本址の時期は古墳時代前期前葉～中葉と考えられる。



第105図 SI9

SI9 (第105図)

位置 H-4グリッド、調査区中央の南西—北東方向に張り出した支尾根頂部に検出された竪穴建物である。(第105図)。東側10mにSI5が存在する。確認面上の標高は32.1mを測る。

形状 表土直下に検出され、斜面下位は床面付近まで後世の削平が及んでいる。平面形は長方形を呈する。斜面上方を主軸と考えた場合の主軸方位はS-35°-Wである。規模は長軸長3.5m、短軸長3.0m以上、確認面からの深さは最大で15cmを測る。壁面はやや開きながら立ち上がり、床面積は7.5㎡を測る。床面は平坦で、全体に硬化している。周溝は斜面下方をのぞいてコの字状に巡る。幅25～35cm、深さ8cmを測り、断面の形状はU字形を呈し、底面は平坦で中央部に焼土が堆積している。

本址に伴うピットは全部で7基検出された。位置や形状からP1・3～5を主柱穴とする4本柱構造の建物と考えられる。主柱穴間距離は1.4mを測る。柱痕跡は認められない。柱掘方は30～55cmを測る。また、南東隅のP6は周溝際に掘り込まれた特殊ピットで、貯蔵穴の可能性がある。各ピットの詳細については計測表を参照されたい。

埋土 削平により遺存状態は悪いが、灰褐色土を主体とし下層より順次正層堆積していることから、自然埋没した状況が考えられる。

遺物 本址からの遺物はいずれも甕胴部微細片のみで、図示し得るものはなかった。

時期 遺物が少なく時期比定が困難であるが、微細片遺物や形状から、本址の時期は古墳時代前期前葉～中葉頃と考えられる。

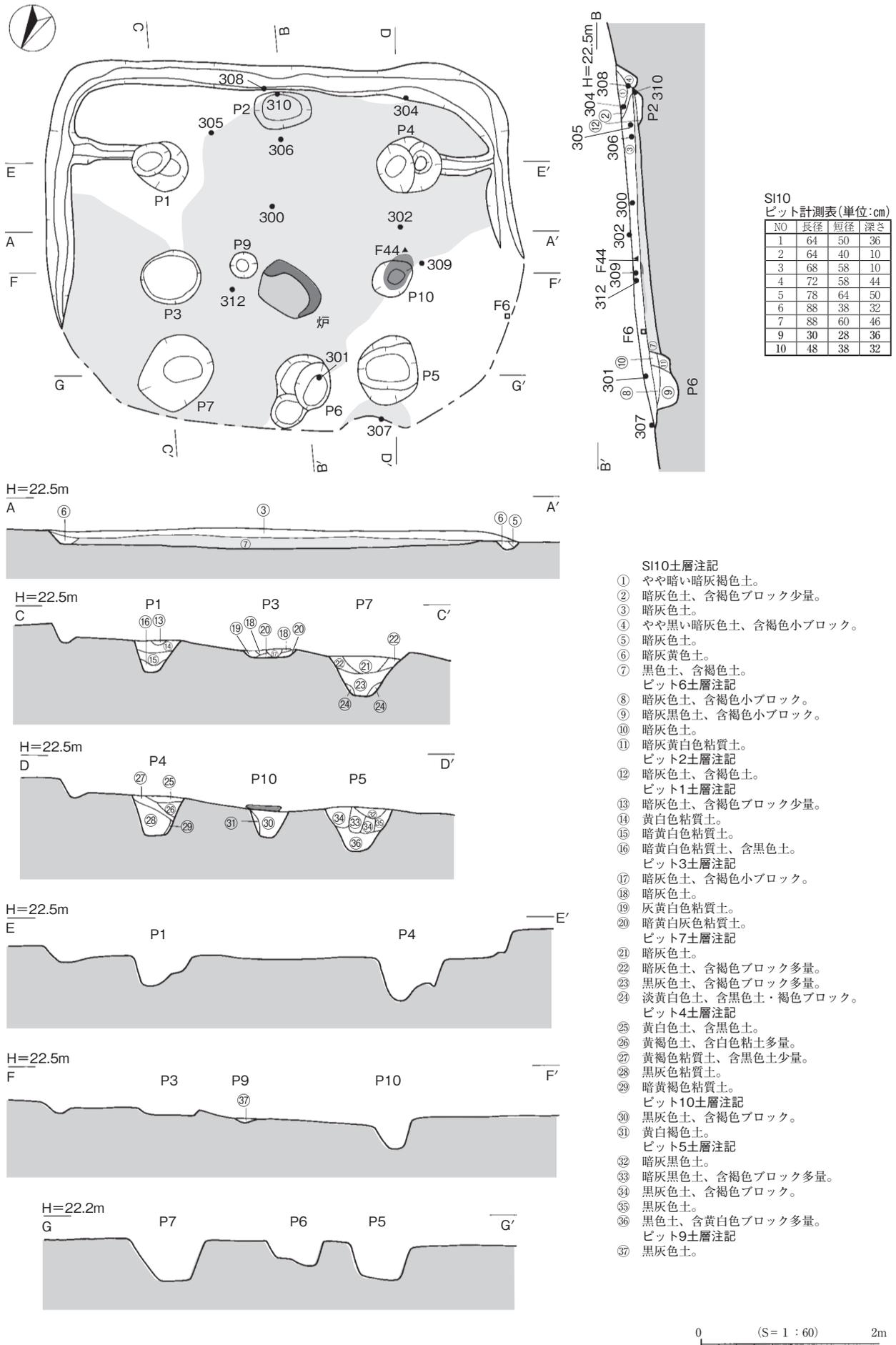
SI10 (第106～108図)

位置 M-1～2グリッド、調査区北端の丘陵麓部緩斜面に検出された竪穴建物である。(第106図)。南西側2.5mにSD8が存在する。本址下層にはSK29が掘り込まれる。確認面上の標高は22.3mを測る。

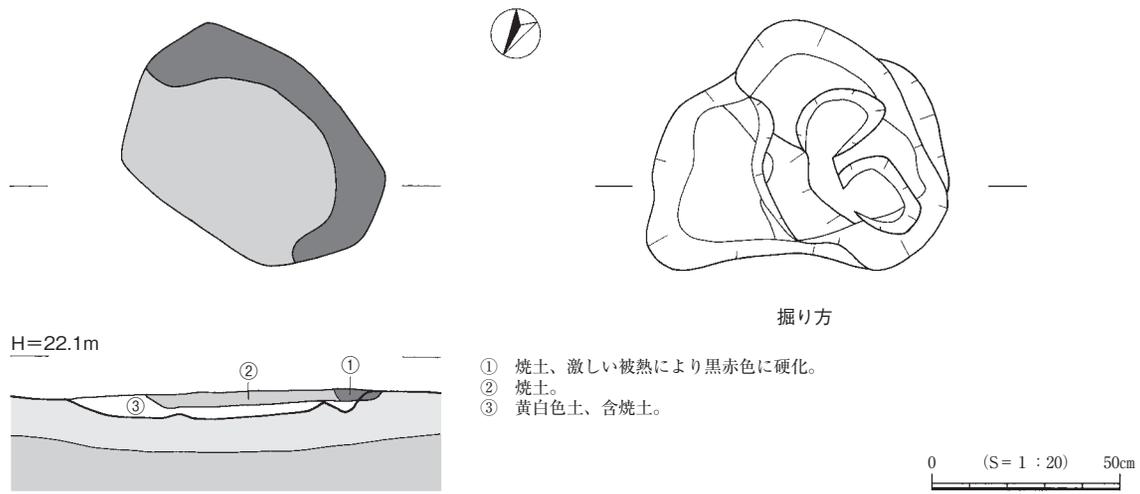
形状 斜面下方は後世の削平により失われるが、平面形は長方形を呈する。斜面上方を主軸と考えた場合の主軸方位はS-31°-Eである。規模は長軸長5.3m、短軸長4.1m、確認面からの深さは最大で15cmを測る。壁面はやや開きながら立ち上がり、床面積は16.6㎡を測る。床面は平坦で、厚さ7cm程の黒色土の貼り床が検出された。面上は全体に硬化している。竪穴部中央付近に炉1基が認められた(第107図)。平面形は不整楕円形を呈し、長軸長73cm、短軸長50cmを測り、深さ8cm程の浅い掘り込みを持つ。燃焼部は周縁部付近において馬蹄形に被熱が激しく、非常に硬化し黒赤色になっている。掘り方は浅い皿状を呈するが底面は凹凸がある。

本址に伴うピットは全部で9基検出された。位置や形状からP1・4・5・7を主柱穴とする4本柱構造の建物と考えられる。このうち南側のP1・4に建て替えの痕跡が認められた。主柱穴間距離は2.2～2.6mを測る。柱痕跡は認められない。柱掘方は60～90cmを測る。P3・10に関しては主柱穴の柱通上にあるため、当初束柱的な用途を考えたが、P3は非常に浅いもので柱穴とは考えにくい。また、P10の埋土上層には厚さ5cm程の炭化物が直径40cmの円形に堆積していることから、両ピットはむしろ中央の炉に関連する施設の可能性がある。この他、北側中央部のP6は位置的に入口施設に関連するピットの可能性がある。さらに貼床を剥したところ南壁中央部にP2が検出された。各ピットの詳細については計測表を参照されたい。

周溝は斜面下方をのぞいてコの字状に巡る。幅30～50cm、深さ6cmを測り、断面の形状はU字形を呈し、底面は平坦である。この周溝からP1・4に向かって、幅15～20cm、深さ6cm程の溝が掘り込ま

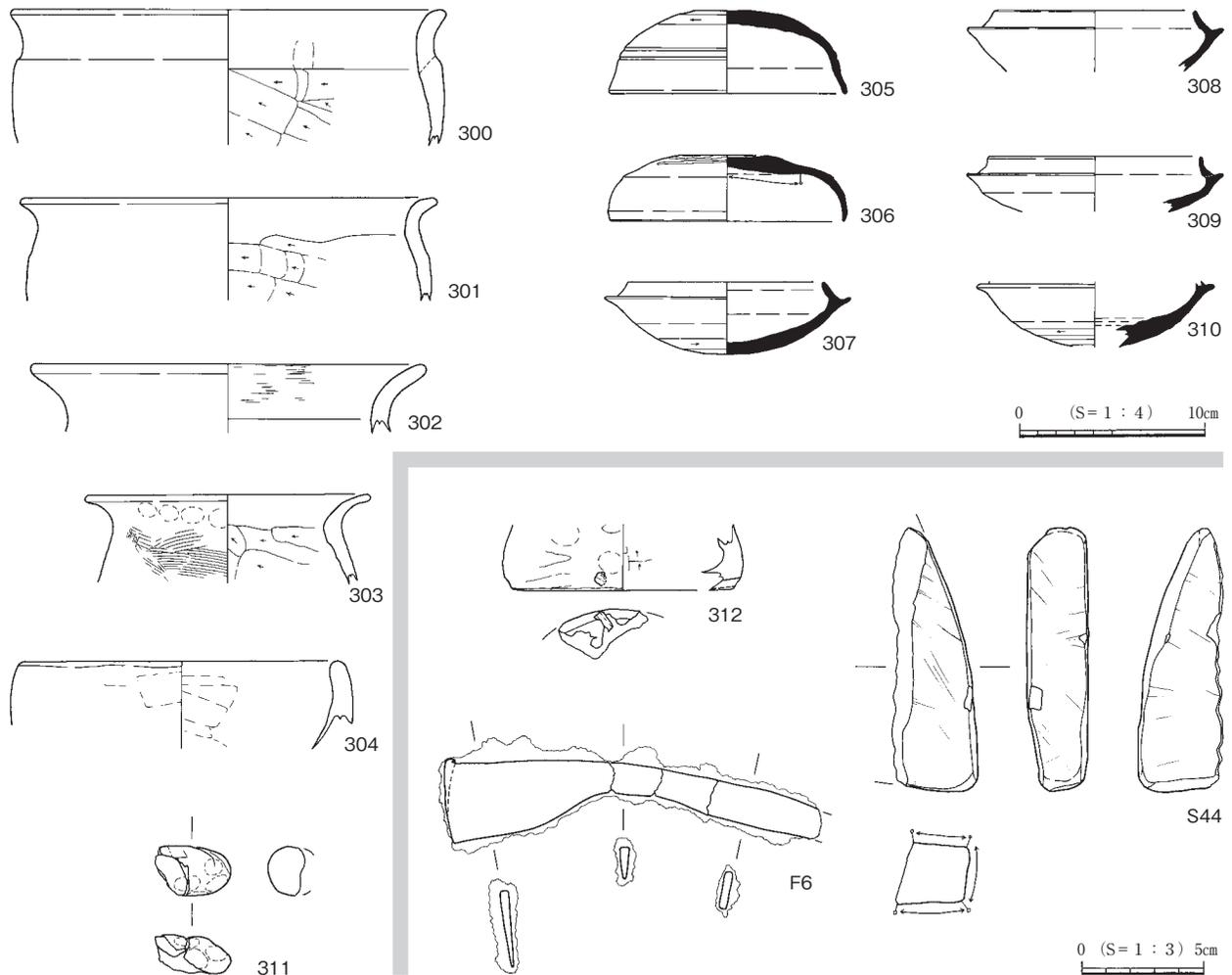


第106図 SI10



- ① 焼土、激しい被熱により黒赤色に硬化。
- ② 焼土。
- ③ 黄白色土、含焼土。

第107図 SI10 炉



第108図 SI10出土遺物

れている。位置的に見て、間仕切りなどの用途を持った溝と考えられる。

埋土 暗灰褐色土を主体とし下層より順次正層堆積していることから、自然埋没した状況が考えられる。貼床は褐色土混じりの黒色土で、中央部付近に厚く構築されている。

遺物 本址からは比較的多くの遺物が出土している。このうち15点が図示し得た。(108図)。300～303は土師器の甕、体部は球胴気味で頸部の屈曲は緩く口縁は短く外反するタイプ(300・301)と、口縁部が大きく外反するタイプ(302・303)がある。304は鉢、口縁は内湾する。

305～310は 須恵器坏、305～306は蓋、305は強い回転ナデにより稜に沈線2条が巡る。306は口縁が内湾し、天井外面には部分的に磨きが施される。307～310は身、立ち上がり部は大きく内傾する。311は土製支脚の把手か？312は手捏ね土器、破片であるが坏の底部から体部の破片と考えられる。

F6は鉄製品、鎌と考えられる。S44はデイスイト製の砥石、中砥で長方形の板状の素材の表裏面と右側面を使用している。

時期 出土遺物から、本址の時期は6世紀後半頃と考えられる。

2) 溝状遺構

SD8 (第109図)

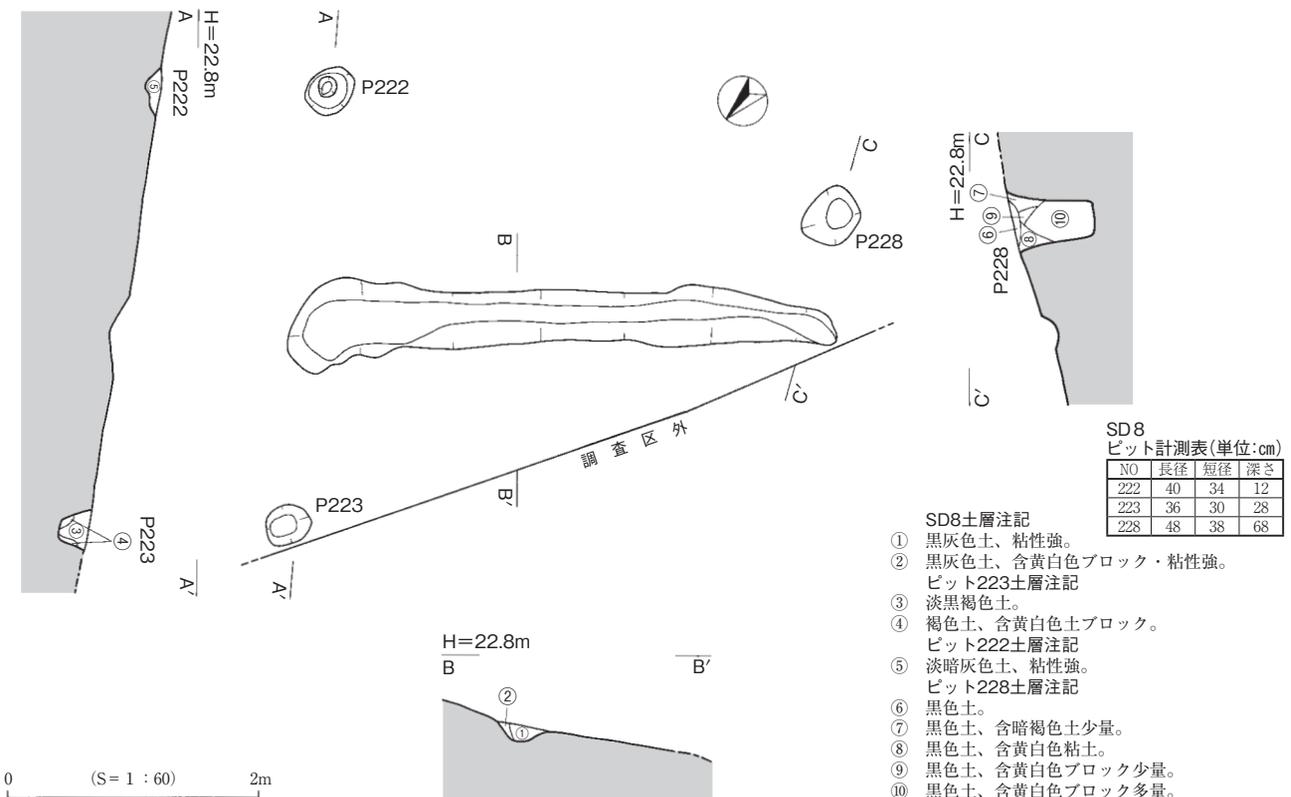
位置 F-1グリッド、丘陵麓部緩斜面の調査区北壁際に検出された溝状遺構である。(第109図)。南東側2mにSI10が存在する。確認面上の標高は22.2mを測る。

形状 北東-南西方向に直線的に伸び、両端は僅かに下位側に屈曲する。長軸方位はN-49°-Eである。規模は最大長4.4m、最大幅0.6m、確認面からの深さは最大で18cmを測る。両端とも緩やかに立ち上がる。断面の形状は浅いU字形を呈し、底面は平坦である。付近は後世の削平が地山まで及んでおり、本址についても削平された遺構の残存である可能性がある。直線的に伸び両端が屈曲する形状を見ると、西側のSI10と同様の竪穴建物跡の周溝の残存である可能性が高い。とするとP223は位置的に見て支柱穴と考えられよう。またP222・228についても位置的にみて、本址と関連性が高いと考えられるのでここに含めた。詳細はピット計測表を参照されたい。

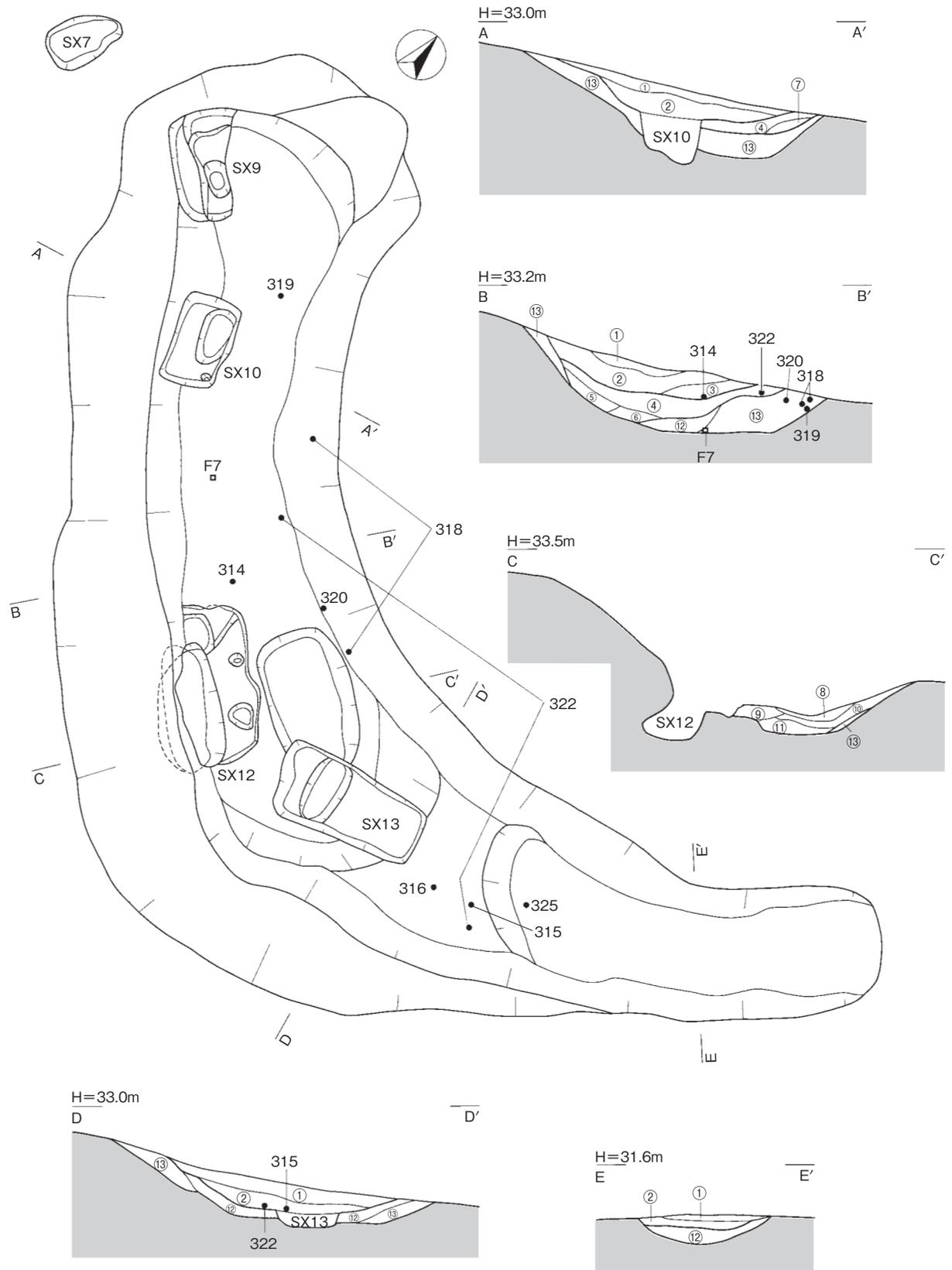
埋土 粘性の強い黒灰色を主体とするが、堆積状況からは流水の痕跡は認められない。

遺物 本址から遺物は出土していない。

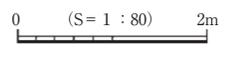
時期・性格 出土遺物からの時期比定は困難であるが、SI10と同様の遺構の残存であるとすれば同時期の古墳時代後期の竪穴建物の周溝など、付帯施設の溝状遺構である可能性が考えられる。



第109図 SD8



- ① 黒色土、含茶褐色土微量。
- ② 黒色土、含茶褐色土多量。
- ③ 黒色土、含暗褐色土。
- ④ 黒褐色土、含黄褐色土ブロック多量。
- ⑤ 黒褐色土、含黒色土・ロームブロック。
- ⑥ 黒色土、含ローム粒。
- ⑦ 暗黄褐色土、含黒褐色土。
- ⑧ 黒褐色土、含ロームブロック。
- ⑨ ロームブロック
- ⑩ 黄褐色ローム、含暗褐色土少量。
- ⑪ 黄褐色土、含暗褐色土多量。
- ⑫ 黒色土、含ローム粒多量。
- ⑬ 暗褐色土、含黒色土少量。



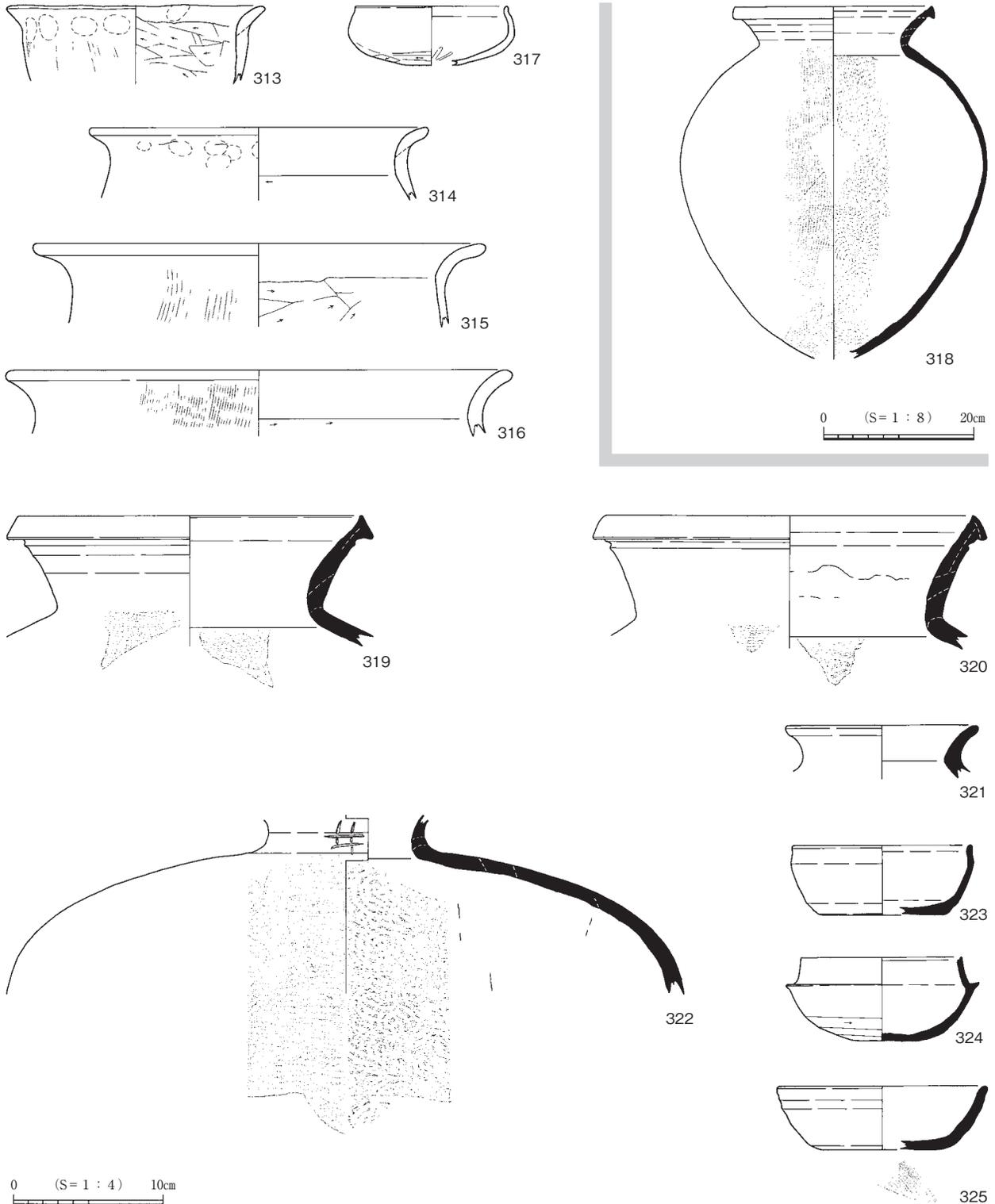
第110図 早里17号墳

3) 古墳

早里17号墳 (第110~119図)

位置 C~D-8~9グリッドにまたがって、調査区南側の南西—北東方向に張り出した支尾根頂部斜面に築かれる(第110図)。この尾根斜面部は法勝寺川に面しており、平野からの眺望は良好である。調査前の状況では墳丘部は削平され、斜面に沿った傾斜であったため、確認できなかった。同一尾根上の南側8.0mに早里18号墳が築かれる。確認面上の標高は最頂部で33.1mを測る。

形状 周辺は古代以降の削平を受けている。従って、埋葬施設や墳丘が失われており、検出できた遺構は周溝のみである。このため墳丘部の詳細は不明であるが、周溝が円形に巡ることから、本址は



第111図 早里17号墳周溝出土遺物(1)

円墳であったと考えられる。

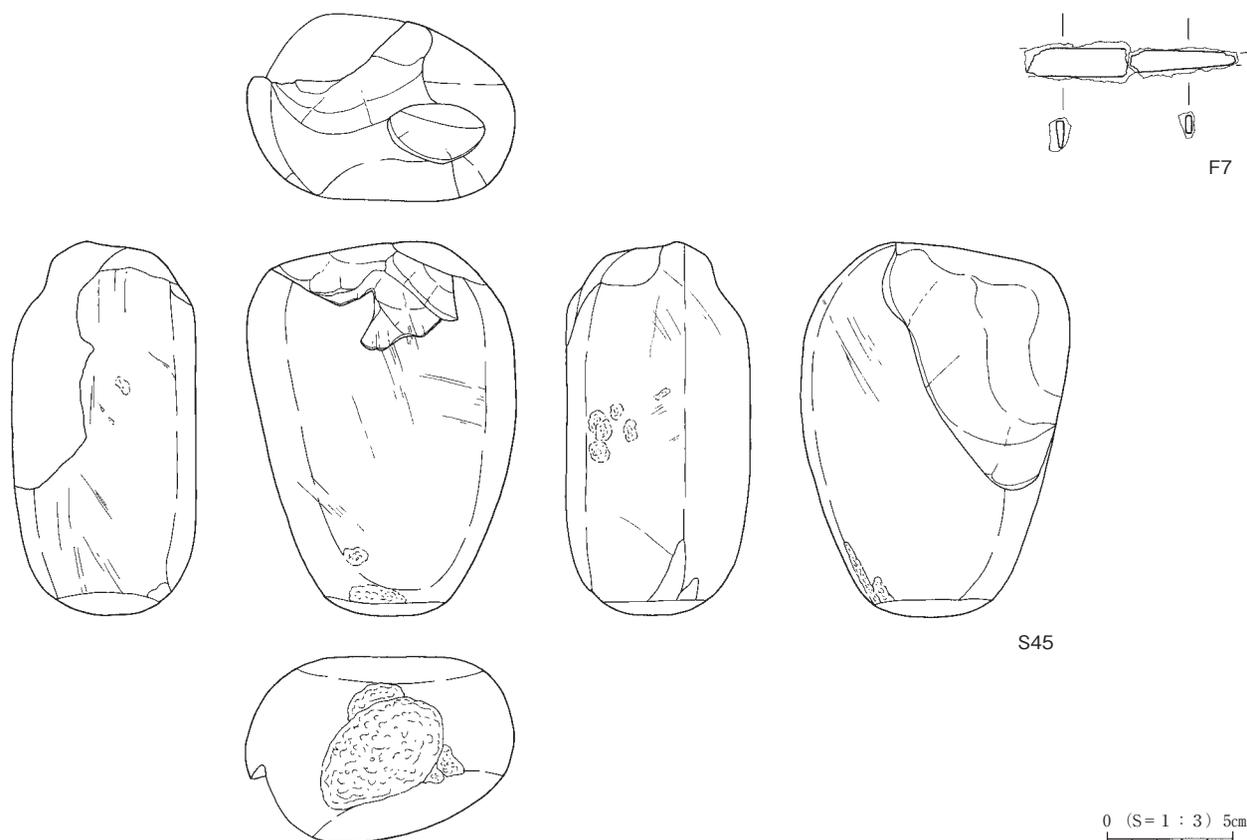
墳丘 前述のとおり、墳丘は古代以降の削平により失われているが、規模は周溝の内面で直径13.0m、周溝を含めると19.0mが推定される。

周溝 尾根と直交する形で斜面上方を三日月状に掘削している。斜面上方がもっとも深く、下方に向かって浅くなり、消滅している。内周側では円弧状であるが、外周側は歪な形状を呈する、これは周溝内埋葬によるものと考えられる。規模は、残存部で最大幅500cm、最大深210cmを測る。断面は逆台形を呈し、南側では一部浅くなっている部分がある。この部分については陸橋状になっていたと考えられる。この周溝内から埋葬施設とみられる土壙墓4基（SX9・10・12・13）が検出された。さらにSX12と13の間の底面にも長径210cm、短径120cmの掘り込みが認められたことから、古い時期の周溝内埋葬墓がもう1基存在した可能性がある。

埋土 大きく3層に大別される。最下層に古墳築造期に堆積したとみられる土（⑫～⑬層）が堆積した後、周溝内埋葬が行われる。さらにその上層に斜面の地形に沿うように黒色土（①～③層）が堆積していった状況が看取される。この③層下面は硬化していることから周溝内埋葬が行われた後、ある程度の期間露出した環境にあったことが推測される。

遺物 本址周溝からは土師器、須恵器などが出土している。このうち15点が図示し得た（第111・112図）。313～317は土師器類である。313～316は土師器の甕、313は小型で口縁部に最大径を持つ。314～316は頸部が緩く屈曲し、口縁は短く外反する。317は坏、脚付碗の可能性もある。体部は内湾し口縁は短く屈曲して外反する。

318～325は須恵器類、318～320は大型の甕、頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部は直線的に外反、口縁端部は断面三角形を呈する。321は小型の甕、口縁は緩やかに外反し、端部は丸味を持つ。322は横瓶、埋土上層から破片の状態出土した。大型のもので外面頸部に刻書が掘り込まれている。「廿」



第112図 早里17号墳周溝出土遺物(2)

もしくは「井」であろうか。323～325は坏身、立ち上がりを持つものと持たないものがある。

F7は鉄製の刀子である。S45はデイサイト製の磨石・敲石、長楕円形の河原石の全体を使用し、上下端部に敲打痕が認められる。

時期 埋土上層の遺物との時期幅を考慮すると、本址は古墳時代中期後半から後期前半、5世紀第4四半期から6世紀頃にかけて築造、埋葬行為が行われていたものと考えられる。なお、周溝内出土の炭化材について放射性炭素年代測定を行ったところAD410～550年の年代観が得られた（第VI章第2節参照）。出土遺物からの年代観とも概ね符合している。

埋葬施設（周溝内埋葬墓）

SX9（第113・114図）

位置 17号墳周溝底の外周北西端肩寄りに検出された土壙墓である（第110図）。本来的には周溝がある程度埋積した後に掘り込まれたものと考えられる。南東側1.0mにSX10が存在する。確認面上の標高は31.5mを測る。

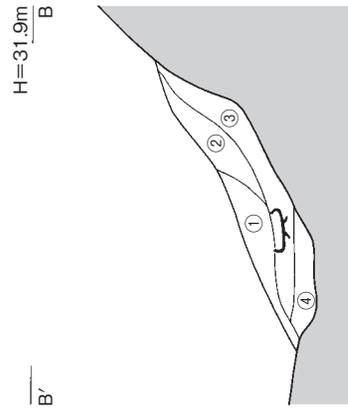
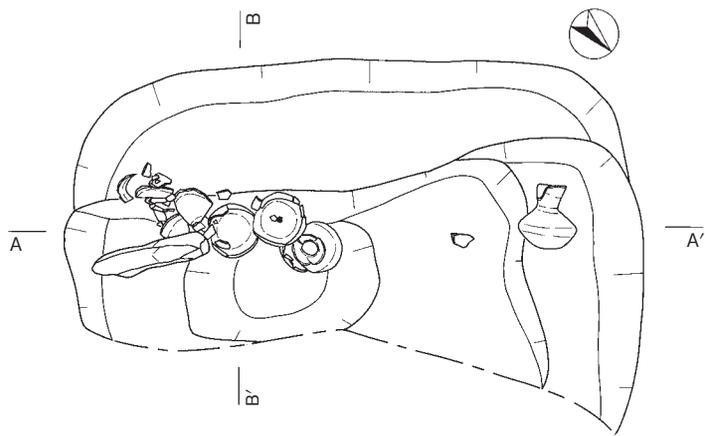
形状 平面形は隅丸長方形、断面形は概ね箱型を呈する（第113図）。斜面下方の南東側は埋土中の掘り込みのため、立ち上がりが不明瞭であった。主軸方位は外周肩部よりやや西に振れるN-47°-Wを指す。規模は長軸154cm、短軸95cm以上、深さ40cmを測る。墓溝は地山を掘り込んであり、床から10cm上位付近に長軸方向に幅20cm程のテラスを設ける二段掘り墓壙である。また北側も床から5cm上位に幅15cm程のテラスを持つ。床面はほぼ平坦であるが、中央部が長軸50cmの楕円形に窪む。木棺痕跡などは検出されなかった。墓壙南端際にデイサイト製の河原石1個が確認された。長楕円形で扁平な形状を呈し、長径33cmを測る。この石は供献土器を押しつぶしたような出土状況であったことから、本来的には墓壙南端の封土上面に置かれた標石と考えられる。上端部に赤彩とみられる痕跡が認められた。

埋土 主体部埋土は暗黄褐色土（③層）で、木質などは確認できなかった。上層の黒色土（①・②層）は供献土器と共に堆積していることから封土と考えられる。最下層の黄褐色土（④層）は墓壙裏込めと考えられるが、本来の周溝埋土の可能性もある。

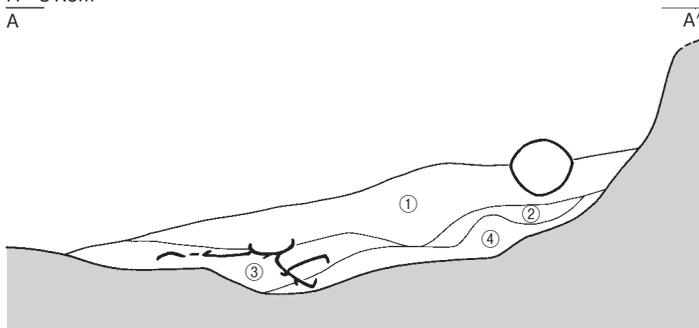
遺物 本址墓溝底面からは供献土器とみられる土師器長頸壺1点、脚付埴6点が出土した（第113・114図）。南西壁の南側寄りに脚付埴が、北側寄りにやや浮いた状態で直口壺が検出されたが、横位の直口壺（326）や口縁部が下向きになった脚付埴（327）などの出土状況から、これらの副葬品は本来南西側のテラス部分に置かれていたものが落ち込んだ可能性も考えられる（第113図）。

326～332は墓溝出土の副葬品である（第114図）。326は土師器の長頸壺、丸底で体部は扁平な球胴形、「く」の字状に屈曲する頸部に直線的に外傾する口縁を持つ。327～332は脚付埴、いずれも形態や製作技法が近似しており、内湾する体部に低く大きく開く脚部が付く。S46はデイサイト製の標石である。細長い三角形を呈し、上端部は整形されている。頂部に赤彩の痕跡が認められる。

時期 副葬品から、本址は古墳時代古墳時代中期後半、5世紀第4四半期に埋葬された土壙墓と考えられる

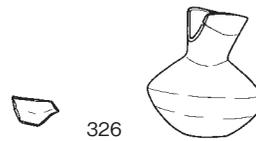
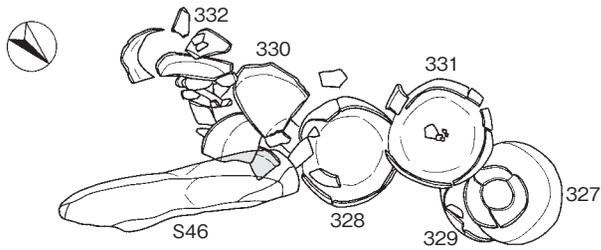


H=31.9m
A

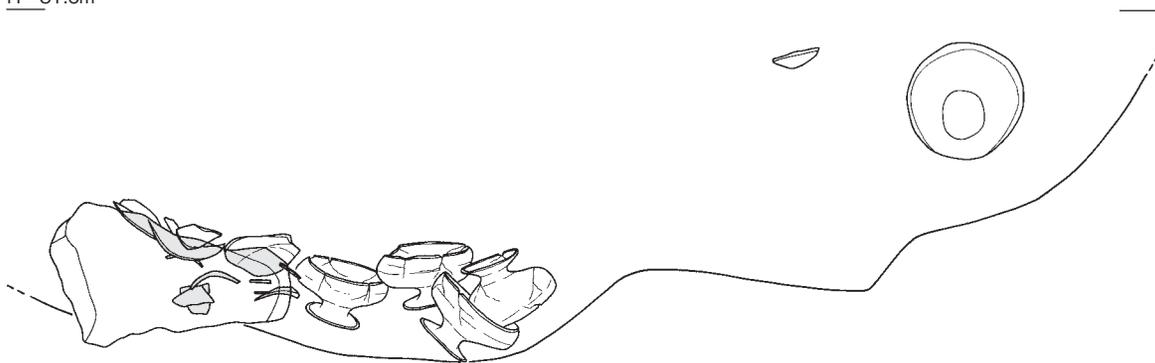


- ① 黒色土。
- ② 黒色土、含ロームブロック少量。
- ③ 暗黄褐色土。
- ④ 黄褐色土。

0 (S=1:20) 50cm

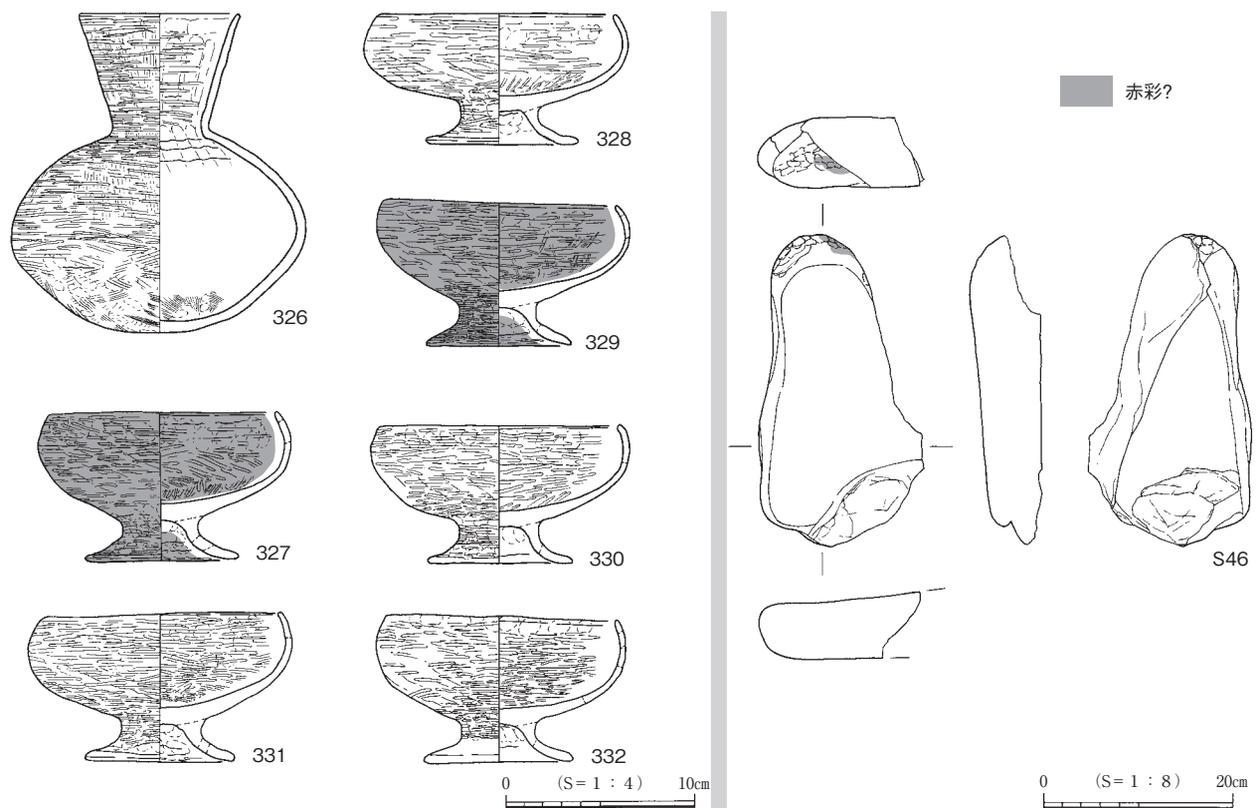


H=31.6m



0 (S=1:10) 20cm

第113図 SX9



第114図 SX9出土遺物

SX10 (第115・116図)

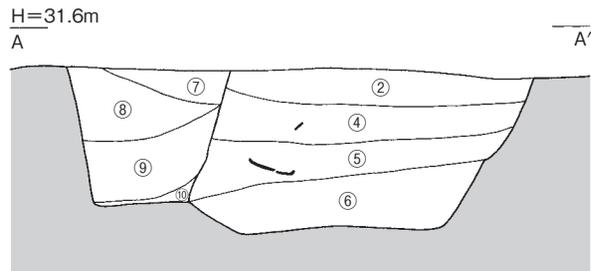
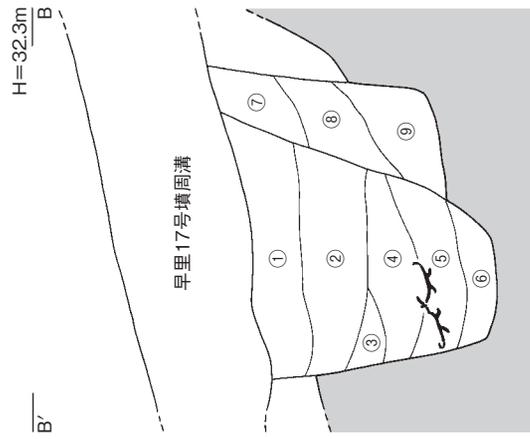
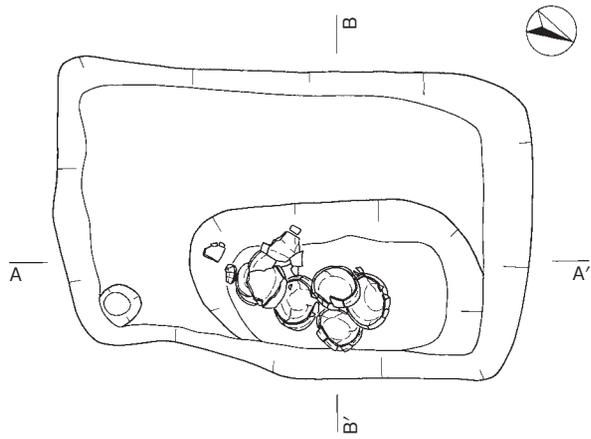
位置 17号墳周溝の外周北西肩寄りに検出された土壇墓である(第110図)。周溝が中位まで埋積した埋土中に検出された。北西側1.0mにSX9が、南東側3.0mにSX12が存在する。確認面上の標高は31.8mを測る。

形状 平面形は長方形、断面形は概ね箱型を呈する(第115図)。主軸方位は外周肩部よりやや東に振れるN-23°-Wを指す。規模は長軸128cm、短軸80cm、深さ65cmを測る。墓壇は周溝底面の地山を掘り込んであり、床面はほぼ平坦で、北東寄りに長軸78cm、短軸35cm、底面からの深さ19cmの掘り込みが認められた。土層埋土の観察から、この部分が主体部であると考えられる。木棺痕跡などは検出されなかった。

埋土 主体部埋土はローム粒の混じる黒色土主体で、供献土器は墓壇底面より10cm浮いた状態で暗黄褐色土(⑤層)中から出土している。木質などは確認できなかった。黒色土(⑦~⑩層)は墓壇裏込めと考えられる。

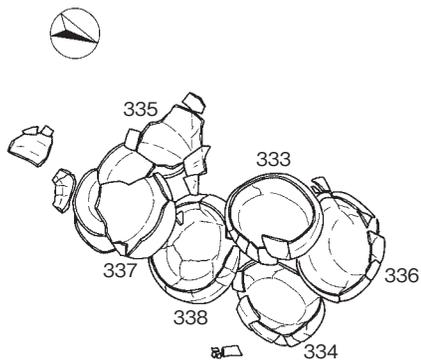
遺物 本址からは供献土器とみられる脚付碗6個が出土した(第115図)。主体部の南西壁に上向きで2列に並べられた状態で出土していることから、ほぼ元位置を保っていると思われる。333~338は墓溝出土の副葬品である(第116図)。333~338は脚付碗、いずれも形態や製作技法が近似しており、内湾する体部に低く大きく開く脚部が付く。SX9から出土した脚付碗とも同形である。

時期 副葬品から、本址は古墳時代中期後半、5世紀第4四半期に埋葬された土壇墓と考えられる。

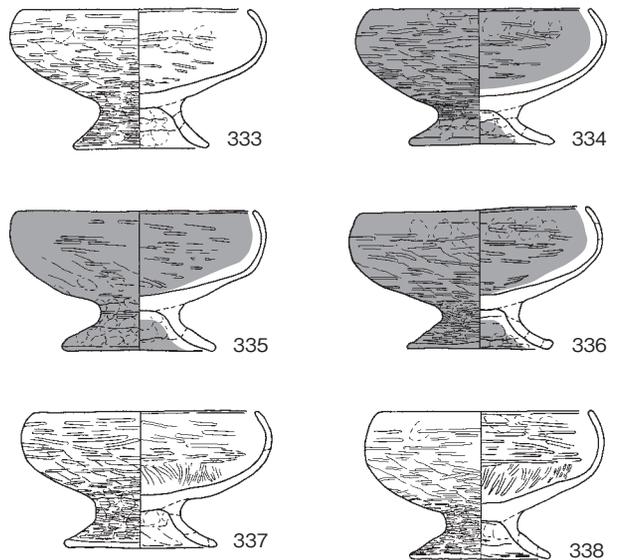
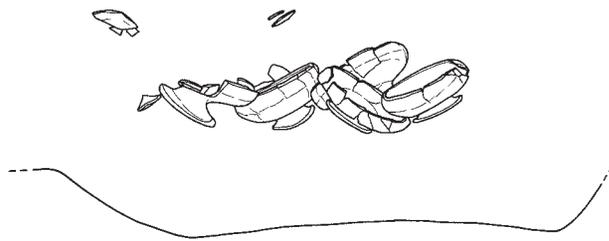


- ① 黒色土、含黄色粒少量。
- ② 黒褐色土、含黄色粒・黒色粒、締まり弱。
- ③ ロームブロック。
- ④ 黒色土、含黄色粒微量。
- ⑤ 暗黄褐色土、含黄色粒少量。
- ⑥ 黒色土、含ローム粒少量。
- ⑦ 黒色土。
- ⑧ 黒色土、含ローム粒少量。
- ⑨ 黒褐色土、含ローム粒少量。
- ⑩ 暗黄褐色土、含黒褐色土微量。

0 (S=1:20) 50cm



H=31.4m



0 (S=1:10) 20cm

0 (S=1:4) 10cm

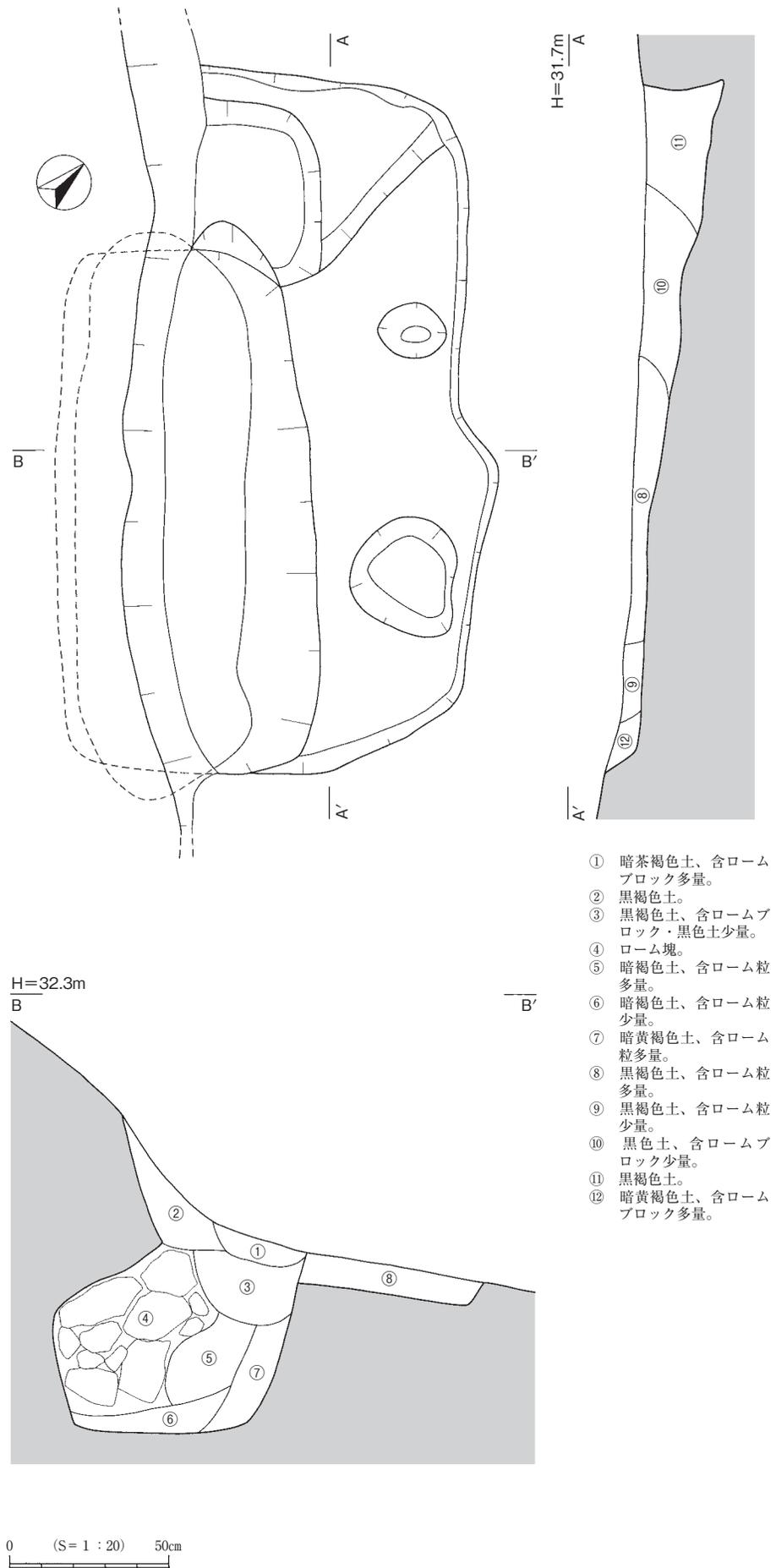
第115図 SX10

第116図 SX10出土遺物

SX12 (第117図)

位置 17号墳周溝の外周南肩寄りに検出された土壙墓である(第110図) 本来的には周溝がある程度埋没した後に掘り込まれたものと考えられる。東側0.4mにSX13が、北西側3.0mにSX10が存在する。確認面上の標高は31.9mを測る。

形状 平面形はやや歪な長方形、断面形は概ね箱型を呈する(第117図)。主軸方位は周溝外周肩部に並行するN-47°-Wを指す。規模は長軸220cm、短軸110cm、深さ50cmを測る。墓壙は周溝底面のローム層の地山を掘り込んでおり、床面は凹凸があり北西側がやや窪む。さらに底面の外周肩部側に、オーバーハングする深さ50cmの掘り込みが認められたことから、本址は二段掘土壙と考えられる。掘り込み部の上面は長径174cm、幅45cmの長楕円形、中段では長軸160cm、短軸60cmの長方形、底面は長径175cm、短軸52cmの長楕円形を呈する。土層埋土の観察から、この部分が主体部であると考えられる。木棺痕跡などは検出されなかった。



第117図 SX12

埋土 主体部埋土は、基盤層であるローム塊（④層）で人為的に埋め戻されたような状況を呈する。木質などは確認できなかった。黒色土（⑧～⑫層）は墓壙裏込めと考えられる。

遺物 本址から遺物は出土していない。

時期 本址は17号墳周溝下層に掘り込まれていることを考慮すると、副葬品の出土したSX9・10よりはあまり時期的にも降らないものと考えられる。以上のことから本址は古墳時代中期後半頃に埋葬された土壙墓と考えられる。

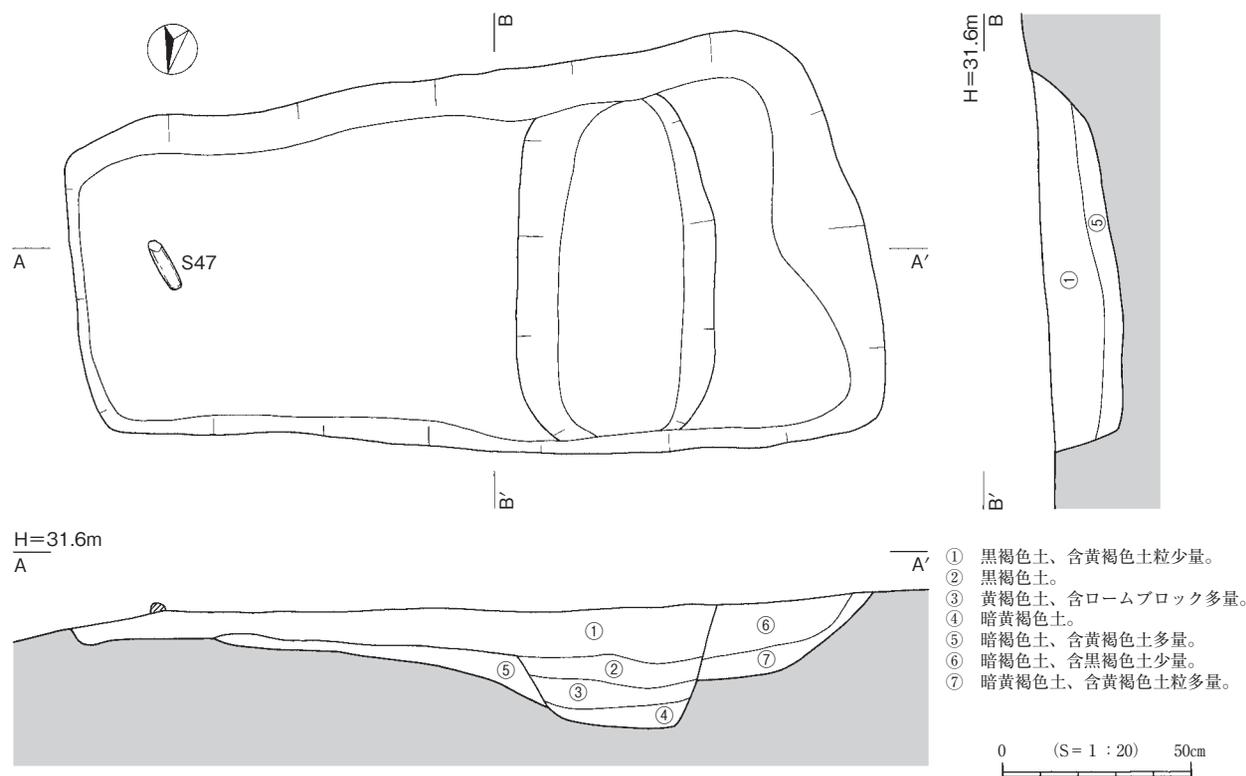
SX13（第118・119図）

位置 17号墳周溝の外周南中央部に検出された土壙墓である（第110図）。周溝底面調査中に検出された遺構であるが、土層断面の観察によれば、本来的には周溝がある程度埋積した後に掘り込まれたものと考えられる。西側0.4mにSX12が存在する。確認面上の標高は31.5mを測る。

形状 平面形は歪な長方形、断面形は概ね箱型を呈する（第118図）。主軸方位は周溝とほぼ平行するN-81°-Eを指す。規模は長軸210cm、短軸110cm、確認面よりの深さは20cmを測る。墓壙は周溝底面のローム層の地山を掘り込んでおり、床面はほぼ平坦で、東寄りに長軸方向に直交する幅53cm、深さ5cmの掘り込みが認められた。長軸78cm、短軸35cm、底面からの深さ13cmの掘り込みが認められた。土層埋土の観察から、この部分より東側が主体部であると考えられる。木棺痕跡などは検出されなかった。

埋土 主体部埋土は黒褐色土主体であり、暗褐色土及び暗黄褐色土（⑥～⑦層）は墓壙裏込めと考えられる。

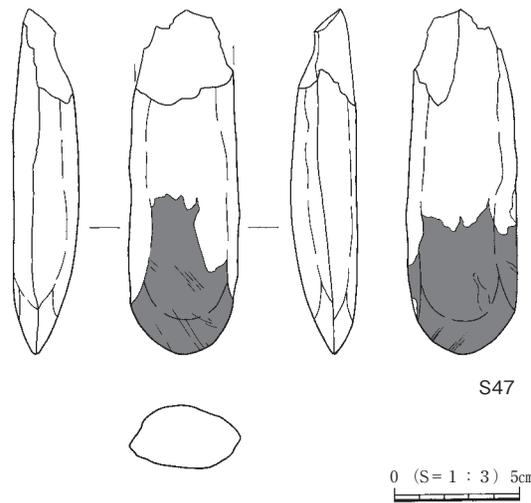
遺物 本址からは磨製石斧1点が出土した（第119図）。位置的に見て副葬品と考えられる。S47は珪化木製の磨製石斧、太型蛤刃磨製石斧である。柄部の一部を欠くが、僅かに刃部が広がる長方形を



第118図 SX13

呈する。刃部の表裏面に良好な研磨痕が残る。

時期 出土遺物からの時期比定は困難であるが、17号墳周溝下層に掘り込まれていることを考慮すると、本址は副葬品の出土したSX9・10よりはあまり時期的にも降らないものと考えられる。以上のことから本址は古墳時代中期後半頃に埋葬された土壙墓と考えられる。



第119図 SX13出土遺物

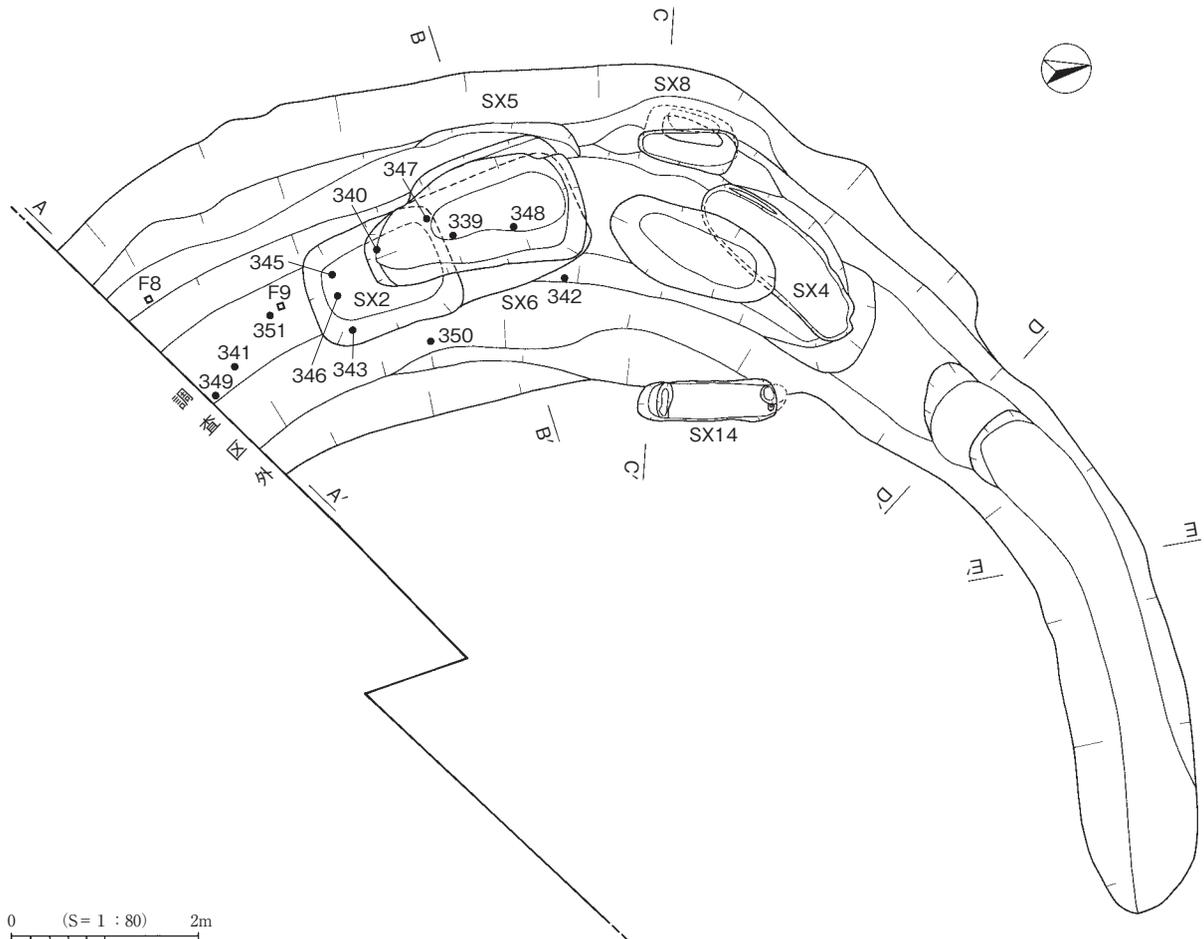
早里18号墳 (第120~133図)

位置 B~C-9~10グリッドにまたがって、調査区南側の南西—北東方向に張り出した支尾根頂部斜面の調査区際に築かれる (第120図)。この尾根斜面部は法勝寺川に面しており、平野からの眺望は良好である。本古墳は、南部町教育委員会による試掘調査において既に周溝の一部が確認されており、その存在は調査前に予想されていた (新井2010)。ただし、周辺は古代以降の削平を受けているため、埋葬施設や墳丘が失われており、調査区内で検出できた遺構は周溝のみであった。

同一尾根上の北側8.0mには早里17号墳が築かれる。確認面上の標高は最頂部で35.4mを測る。

(引用・参考文献) 新井宏則2010 『南部町内遺跡発掘調査報告書』南部町教育委員会。

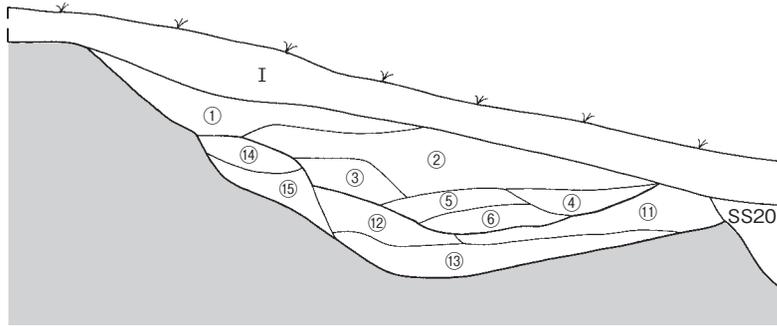
墳丘 前述のとおり、墳丘は上面のSS20により削平されており、周溝のみの残存である。このため墳丘部の詳細は不明であるが、周溝が円形に巡ることから、本址は円墳であったと考えられる。墳



第120図 早里18号墳

H=36.0m
A

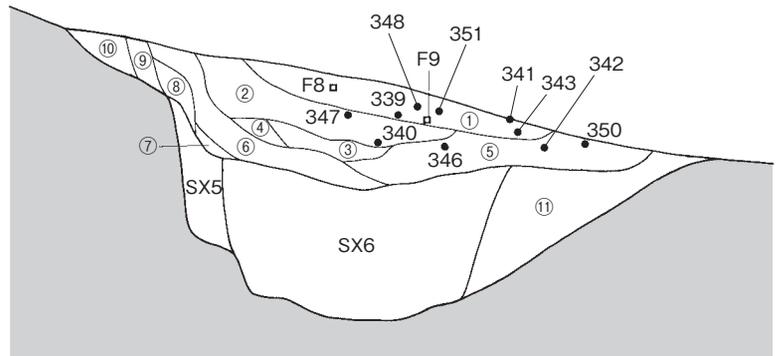
A'



- ① 黒褐色土、含茶褐色土多量。
- ② 暗褐色土、含茶褐色土多量。
- ③ 黒褐色土、含黄褐色土微量。
- ④ 暗褐色土、含黄褐色土多量。
- ⑤ 黒褐色土、含黄褐色土ブロック状。
- ⑥ 黒褐色土、含黄褐色土少量。
- ⑦ 黒褐色土、含黄褐色土多量。
- ⑧ 暗褐色土、含黄褐色土、締め弱。
- ⑨ 暗褐色土、含暗茶褐色土・褐色土多量。
- ⑩ 暗黄褐色土。
- ⑪ 暗褐色土。
- ⑫ 暗黄褐色土、含ロームブロック少量。
- ⑬ 暗黄褐色土、含暗褐色土少量。
- ⑭ 暗褐色土、含黒褐色土多量。
- ⑮ 暗黄褐色土、含ローム粒。
- ⑯ 淡灰褐色土。
- ⑰ 明褐色土。
- ⑱ 淡黒褐色土。
- ⑲ 褐色土。
- ⑳ やや暗い褐色土。
- ㉑ 暗褐色土、含暗黄褐色土少量。
- ㉒ 暗褐色土、含黄褐色土・ローム粒少量。
- ㉓ 暗褐色土、含黄褐色土。

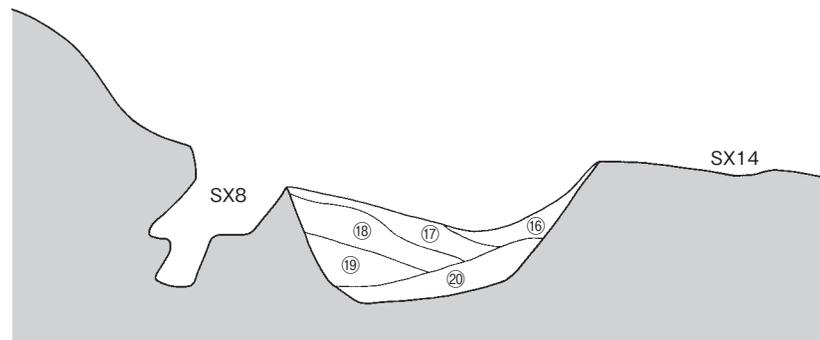
H=35.8m
B

B'



H=35.6m
C

C'



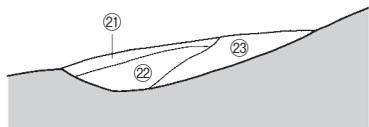
H=34.4m
D

D'



H=34.0m
E

E'



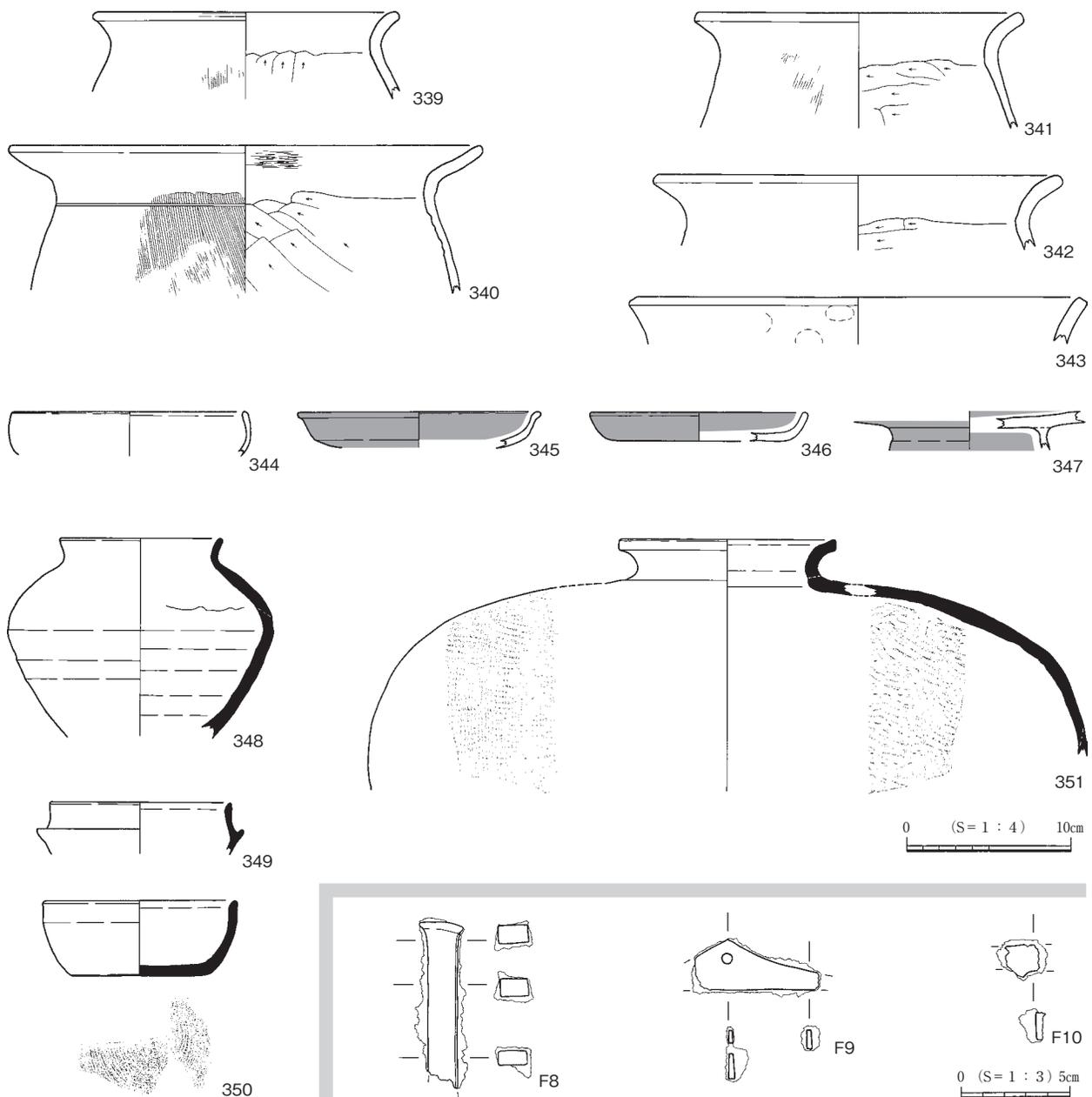
0 (S=1:40) 1m

第121図 早里18号墳断面図

丘の規模は周溝の内面で直径12.0m、周溝を含めると19.0mが推定される。

また、墳丘の地山面検出中に竪穴建物1基（SI4）を検出した。この建物によりこの周辺は丘陵尾根部をカットした平坦面ないし窪地であったと考えられ、このような地形を利用して本址は築造されたと考えられる。

周溝 尾根と直交する形で斜面上方を三日月状に掘削している。東端は調査区外に延びる。斜面上方がもっとも深く、下方に向かって浅くなり、消滅している。内周側では円弧状であるが、外周側は歪な形状を呈する、これは周溝内埋葬墓が掘り込まれたことによるものと考えられる。規模は、残存部で最大幅370cm、最大深155cmを測る。断面は逆台形を呈し、北東側では一部浅くなっている部分があり、この部分については陸橋状になっていたと考えられる。この周溝内から埋葬施設とみられる土壙墓6基（SX2・4～6・8・14）が検出された。またSX4の下層にも長径190cm、短径90cmの掘り込みが認められたことから、古い時期の周溝内埋葬墓がもう1基存在した可能性がある。



第122図 早里18号墳周溝出土遺物

埋土 大きく3層に大別される(第121図)。最下層には、古墳築造期に堆積したとみられる埋土(⑪～⑳層)が堆積した後、周溝内埋葬が行われる。さらにその上層に斜面の地形に沿うよう暗褐色土及び黒褐色土(①～⑩層)が堆積していった状況が看取される。周溝内埋葬墓の埋土上面は非常に硬化していることから、周溝内埋葬が行われた後、ある程度の期間露出した環境で通路的に使用されていたことが推測される。

遺物 本址周溝からは埋土中～上層中心に遺物が出土した(第121図)。これらの遺物は周溝内埋葬行為が終わった後に、古墳周溝が埋没していく過程のものと考えられる(第122図)。339～347は土師器類である。339～343は単口縁の甕、口縁は緩やかに外反する。344は脚付埴、内湾する口縁を呈する。埋土中一括の出土であるが、本来はSX2の副葬品であったものが混じり込んだ可能性もある。345～347は皿、345は口縁が短く外反し、346は体部が丸みを持つ。347はハの字状に開く高台が付く。

348～351は須恵器類、348は須恵器の短頸壺、算盤玉状の体部に短く直線的に外傾する口縁を持つ。349は坏身、立ち上がりはやや内傾するが、口縁端部はナデにより外反する。350は外底面回転糸切りの坏身、体部は丸味を持ち口縁端部は強いナデにより屈曲する。351は横瓶、口縁端部はナデにより垂直気味になる。

F8～10は鉄製品、F8は鏝、F9は三角形の薄板状で上端付近に穿孔が開けられている。F10は刀子の破片と考えられる。

時期 出土遺物には時期幅が見られるが、周溝内埋葬墓の副葬品の時期を考慮すると、本址は古墳時代中期後半から後期前半、5世紀第4四半期から築造、埋葬行為が行われ7世紀頃にかけて埋没していったものと考えられる。

埋葬施設(周溝内埋葬墓)

SX2(第123～125図)

位置 18号墳周溝の西側中央部に検出された土壙墓である(第120図)。周溝が中上位まで埋積した埋土中に検出された。北側のSX6の上層を切って掘り込まれている。確認面上の標高は34.7mを測る。

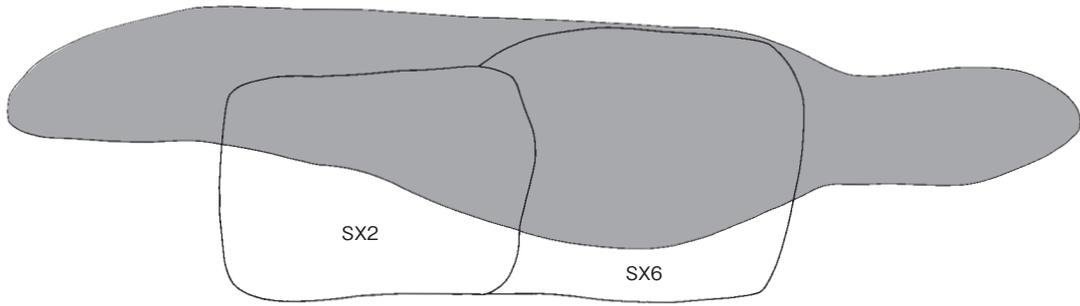
形状 平面形は長方形、断面形は逆台形を呈する(第123図)。主軸方位は外周とほぼ並行するN-11°-Wを指す。規模は長軸160cm、短軸120cm、深さ35cmを測る。墓壙は周溝埋土を掘り込んであり、床面はほぼ平坦である。また、埋土上層には硬化面が検出された。本址埋葬後、上面が使用されていたと考えられる。

埋土 主体部埋土は暗黄褐色土(①層)の単層で、一期に埋め戻したかの様相を呈する。底面近く標高34.2m、墓壙底面から4cm程上位に供献土器が出土した。木質などは確認できなかった。

遺物 本址からは供献土器とみられる直口壺1点、脚付埴5個が出土した(第124・125図)。元位置から乱されてはいるが、本来的には主体部北東隅に上向きで2列に置かれていたものと考えられる。

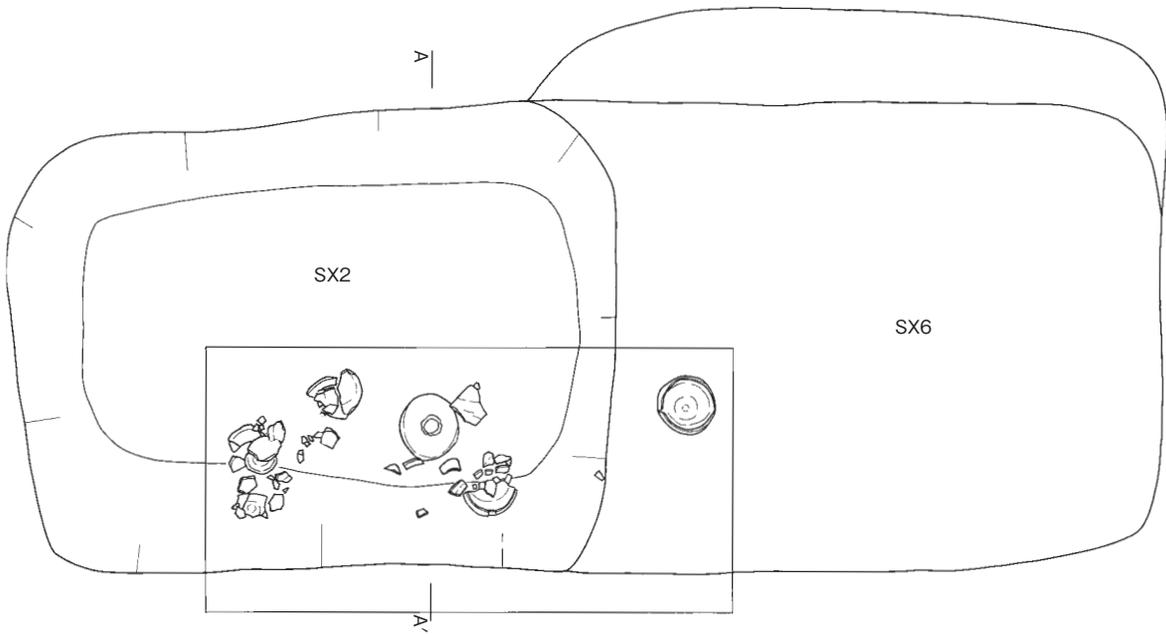
352は土師器の長頸壺、丸底で体部は扁平な球胴形、「く」の字状に屈曲する頸部に長く直線的に外傾する口縁を持つ。353～357は赤彩の脚付埴、いずれも形態や製作技法が近似しており、内湾する体部に低く大きく開く脚部が付く。357の脚部はやや歪で直線的であるが、胎土としては他の脚付埴と変わらない。

時期 副葬品から、本址は古墳時代中期後半、5世紀第4四半期に埋葬された土壙墓と考えられる。



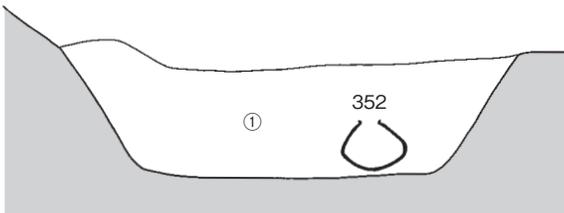
硬化面検出状況

0 (S=1:40) 1m



H=34.7m
A

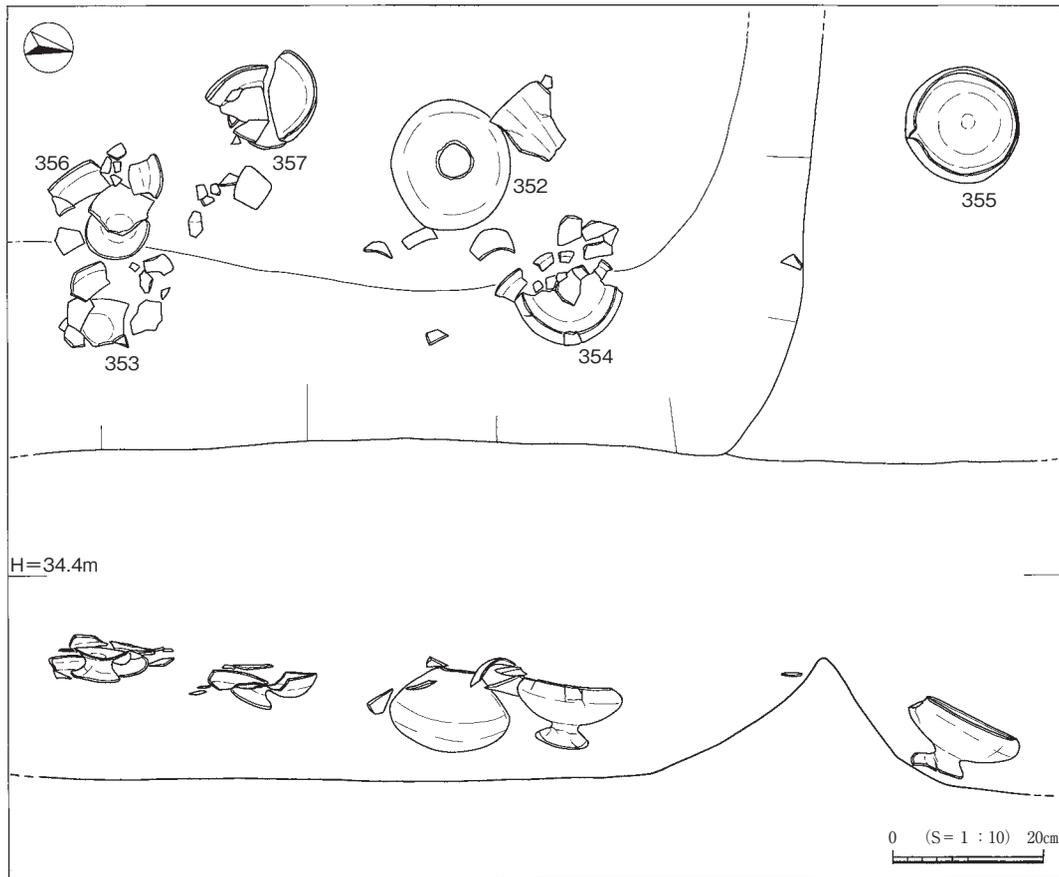
A'



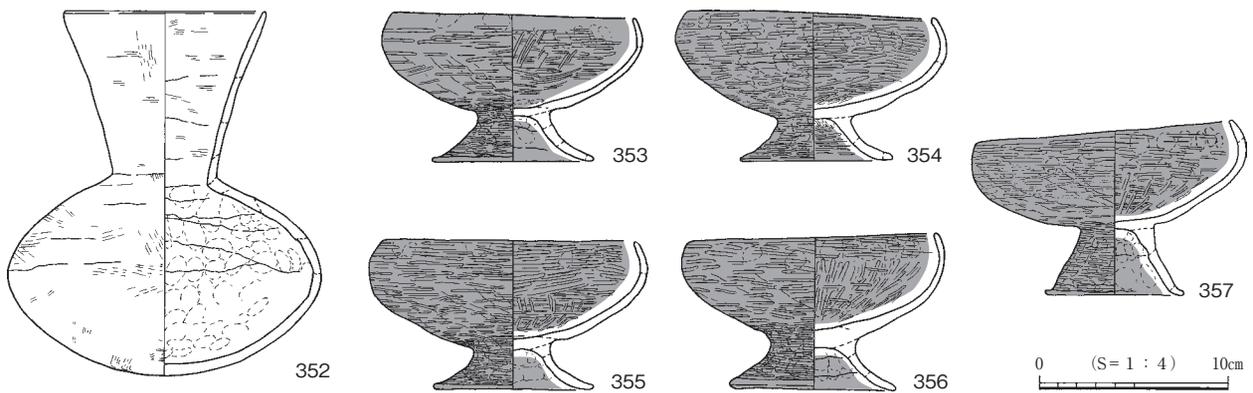
① 暗黄褐色土、含暗褐色土少量。

0 (S=1:20) 50cm

第123図 SX2



第124図 SX2遺物出土状況

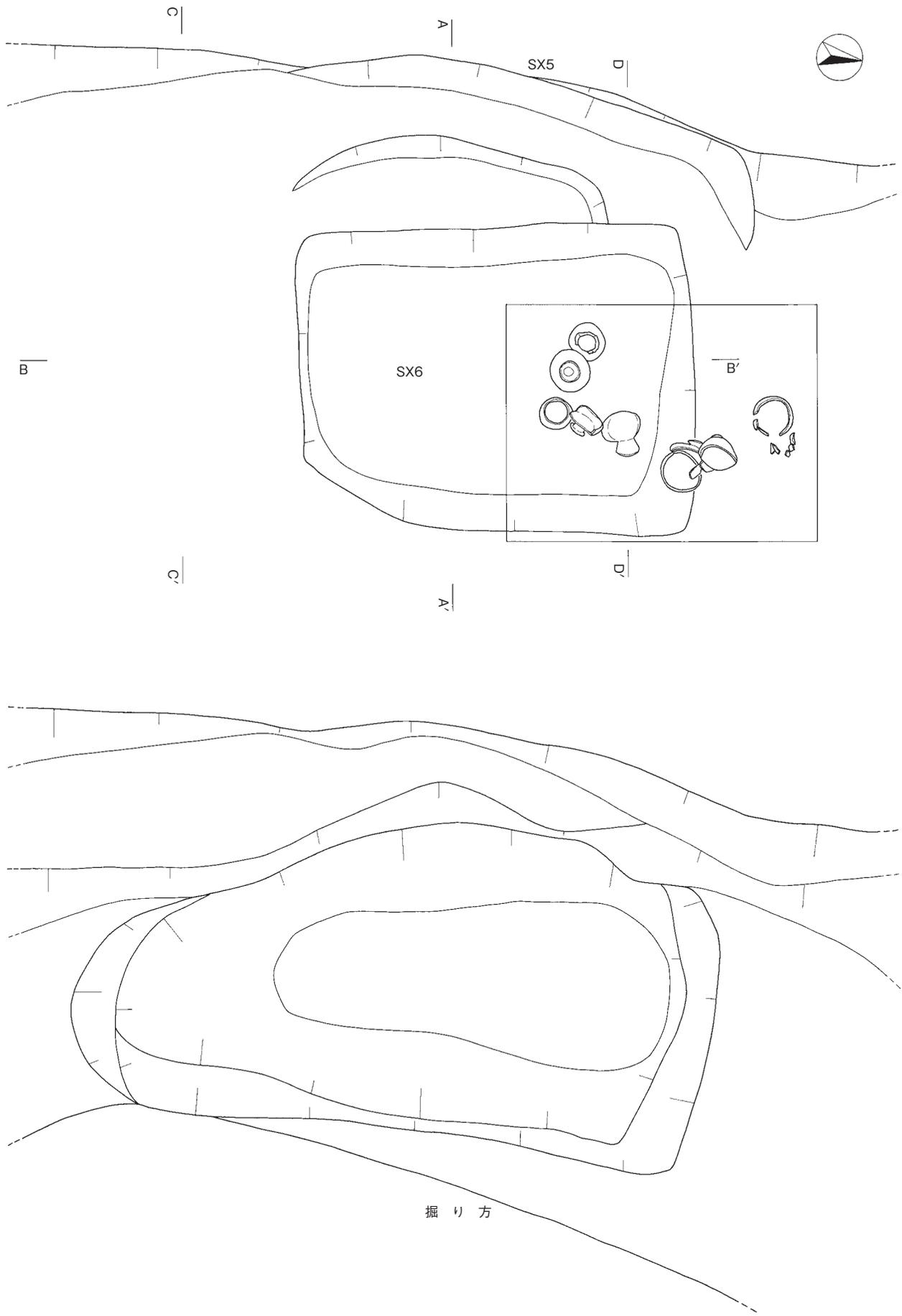


第125図 SX2出土遺物

SX6 (第126~129図)

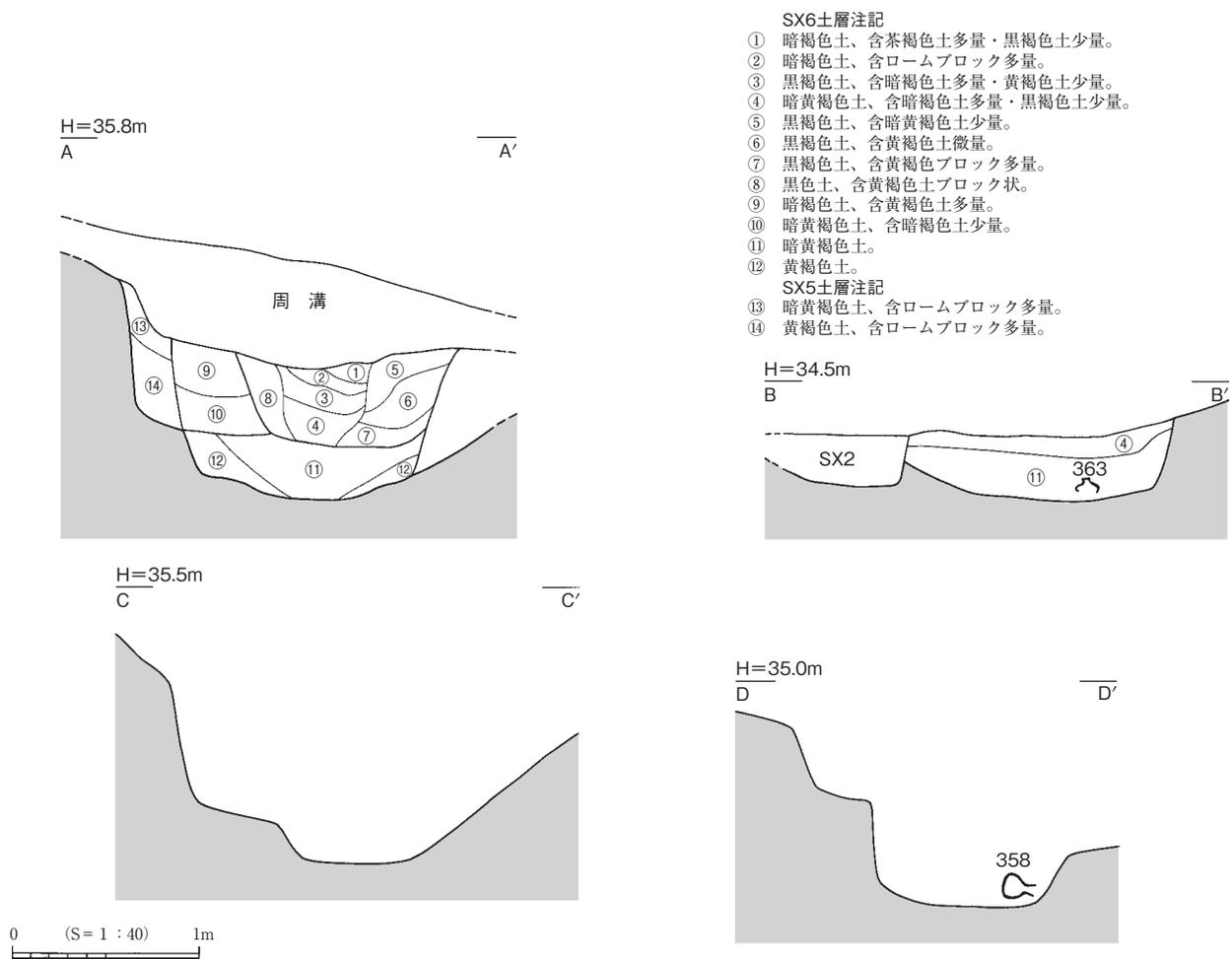
位置 18号墳周溝の西側中央部に検出された土壙墓である (第120図)。周溝が中上位まで埋積した埋土中に検出された。SX5を切り、南壁上層のSX2により切られている。確認面上の標高は34.7mを測る。

形状 平面形は長方形、断面形は逆台形を呈する (第126・127図)。主軸方位は外周とほぼ並行するN-11°-Wを指す。規模は長軸160cm、短軸120cm、深さ90cmを測る。墓壙は周溝埋土を掘り込んで



掘り方

第126図 SX5・6



第127図 SX5・6断面図

おり、床面はほぼ平坦である。

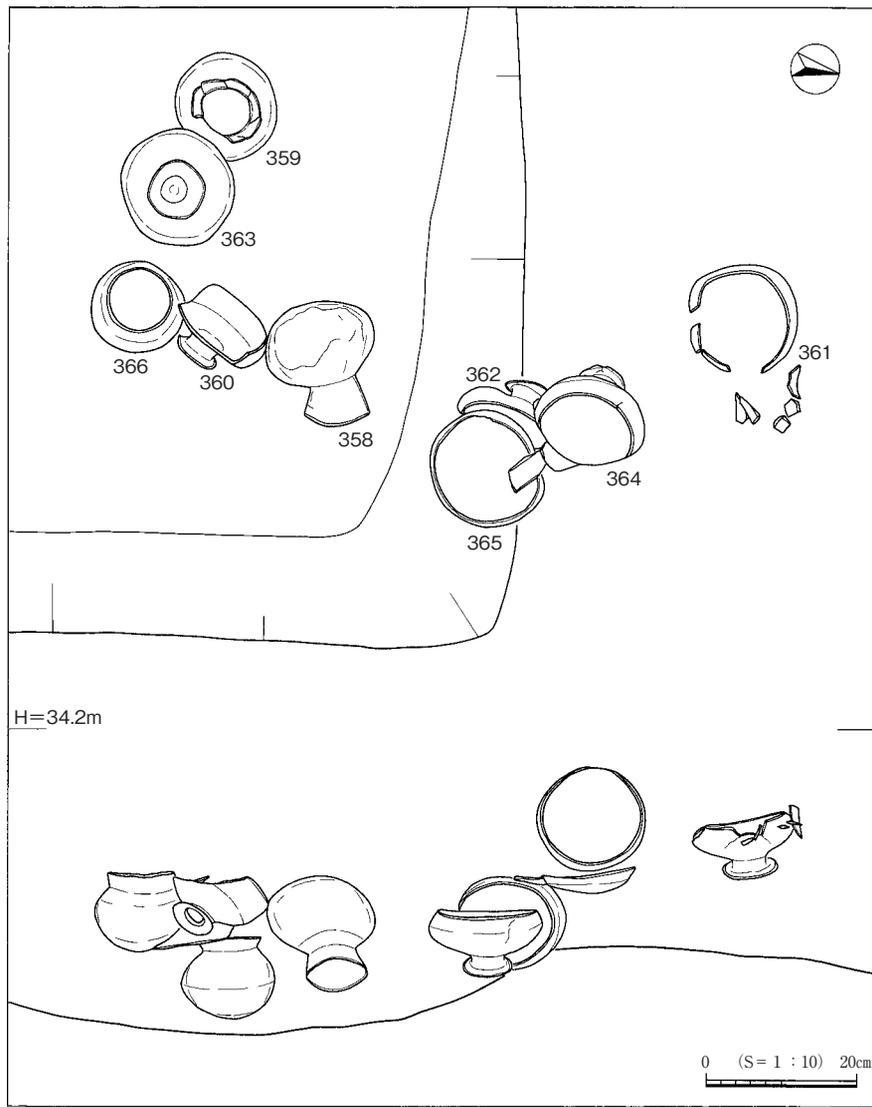
埋土 土層観察によれば暗黄褐色土を主体とする⑨～⑫層が堆積した後に、黒褐色土を主体とする①～⑧層が堆積している。この状況から、この黒褐色土層が主体部であった可能性が高いが、平面プランでの検出は困難であった。木質などは確認できなかった。

遺物 墓壙底面付近、標高33.9mに供献土器とみられる土師器の長頸壺1点、短頸壺1点、脚付埴6点、須恵器短頸壺1点が出土した(第128・129図)。元位置からやや乱れてはいるが、本来的には主体部の北側寄りに正位置で置かれていたものと考えられる。

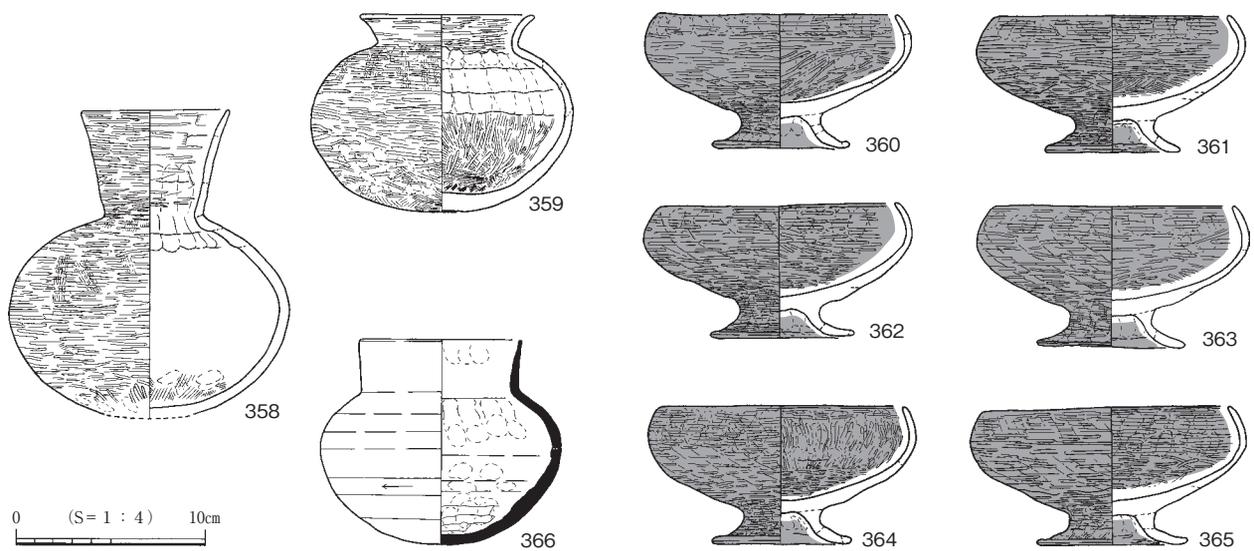
358は土師器の長頸壺、丸底で体部は扁平な球胴形、「く」の字状に屈曲する頸部に長く直線的に外傾する口縁を持つ。359は土師器の短頸壺、丸底で体部は扁平な球胴形に短く外反する口縁を持つ。360～365は赤彩の脚付埴、いずれも形態や製作技法が近似しており、内湾する体部に低く大きく開く脚部が付く。

366は須恵器の短頸壺、丸底で体部は扁平な球胴形に直立気味の口縁部を持つ。口縁端部の器壁は非常に薄い。

時期 副葬品から、本址は古墳時代中期後半、5世紀第4四半期の中でもSX2よりは古い時期に埋葬された土壙墓と考えられる。



第128図 SX6遺物出土状況



第129図 SX6出土遺物

SX5 (第126・127図)

位置 18号墳周溝の西側外周寄りに検出された土壙墓である(第120図)。周溝が中上位まで埋没した埋土中に掘り込まれた土壙墓と考えられるが、SX6により切られており、痕跡のみの残存である(第126図)。確認面上の標高は35.1mを測る。

形状 平面形は長方形、断面形は箱形を呈する。主軸方位は外周と並行するN-3°-Eを指す。規模は長軸185cm、短軸60cm以上、深さ75cmを測る。墓壙は周溝肩を掘り込み、床面は平坦である。

埋土 埋土の殆どが失われており、残存する下層の黄褐色土(⑭層)、上層の暗黄褐色土(⑬層)の埋土は掘り方の可能性もある。

遺物 本址からは遺物は出土していない。

時期 切合い関係から、本址は古墳時代中期後半、5世紀第4四半期の古い時期に埋葬された土壙墓と考えられる。

SX4 (第130図)

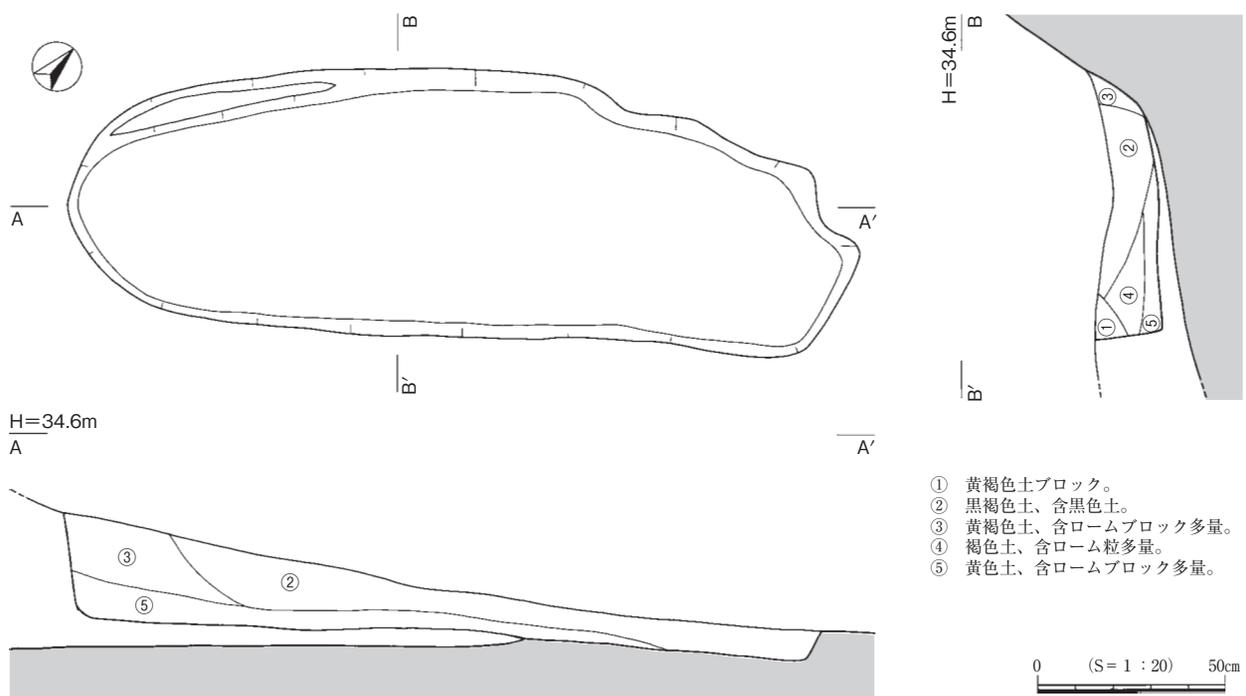
位置 18号墳周溝の北西中央部の底面に検出された土壙墓である(第120図)。周溝が下位まで埋積した埋土中に検出されたが、本来的にはもう少し上位から掘り込まれた土壙と考えられる。南西0.1mにSX8が、南東0.6mにSX14が存在する。確認面上の標高は34.4mを測る。

形状 平面形は長楕円形、断面形は箱形を呈する。主軸方位は外周とほぼ並行するN-52°-Eを指す。規模は長軸210cm、短軸70cm、深さ30cmを測る。墓壙は周溝埋土を掘り込んであり、床面はほぼ平坦である。南西部では周溝底面には達していない。

埋土 残存埋土の観察によれば黒褐色土(②層)が主体部、③層以下は掘り方の埋土の可能性がある。木質などは確認できなかった。

遺物 本址からは遺物は出土していない。

時期 副葬品はないが周溝底面付近に掘り込まれていることから、本址は古墳時代中期後半、5世紀第4四半期の古い時期に埋葬された土壙墓と考えられる。



第130図 SX4

SX8 (第131図)

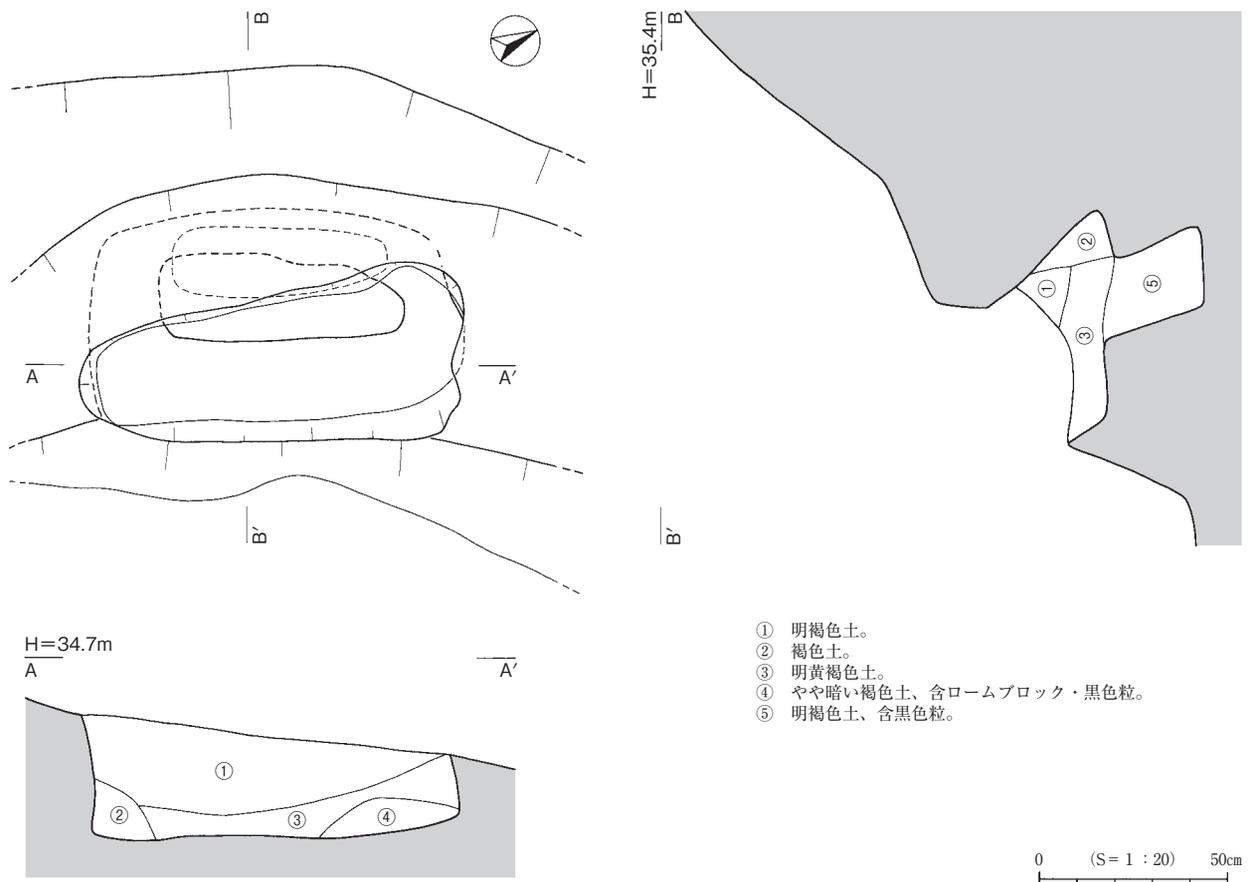
位置 18号墳周溝の西側外周肩部中位に検出された土壇墓である(第120図)周溝地山検出時に発見されたものであるが、形状から本来的には周溝がある程度埋積した後に掘り込まれたものと考えられる。北東0.1mにSX4が、対応する周溝内周肩部にSX14が存在する。確認面上の標高は34.5mを測る。

形状 平面形はやや歪な長方形、断面形は概ね箱型を呈する。主軸方位は外周肩部に並行するN-26°-Eを指す。規模は長軸100cm、短軸35cm、深さ50cmを測る。墓壇は周溝肩部の地山を掘り込んであり、上面の北西隅は広がるが、これは後世の崩落によるものかも知れない。床面は平坦で、さらに外周肩部寄りにオーバーハングする深さ45cmの掘り込みが認められたことから二段掘り土壇と考えられる。掘り込み部の上面は長径65cm、短径25cmの長楕円形、底面は長径57cm、短軸18cmの長楕円形を呈する。土層埋土の観察から、この部分が主体部であると考えられる。木棺痕跡などは検出されなかった。

埋土 主体部埋土は暗褐色土(⑤層)の単層で、人為的に一気に埋め戻されたような状況を呈する。木質などは確認できなかった。

遺物 本址からは遺物は出土していない。

時期 副葬品はないが周溝底面付近に掘り込まれていることから、本址は古墳時代中期後半、5世紀第4四半期の古い時期に埋葬された土壇墓と考えられる。



第131図 SX8

SX14 (第132・133図)

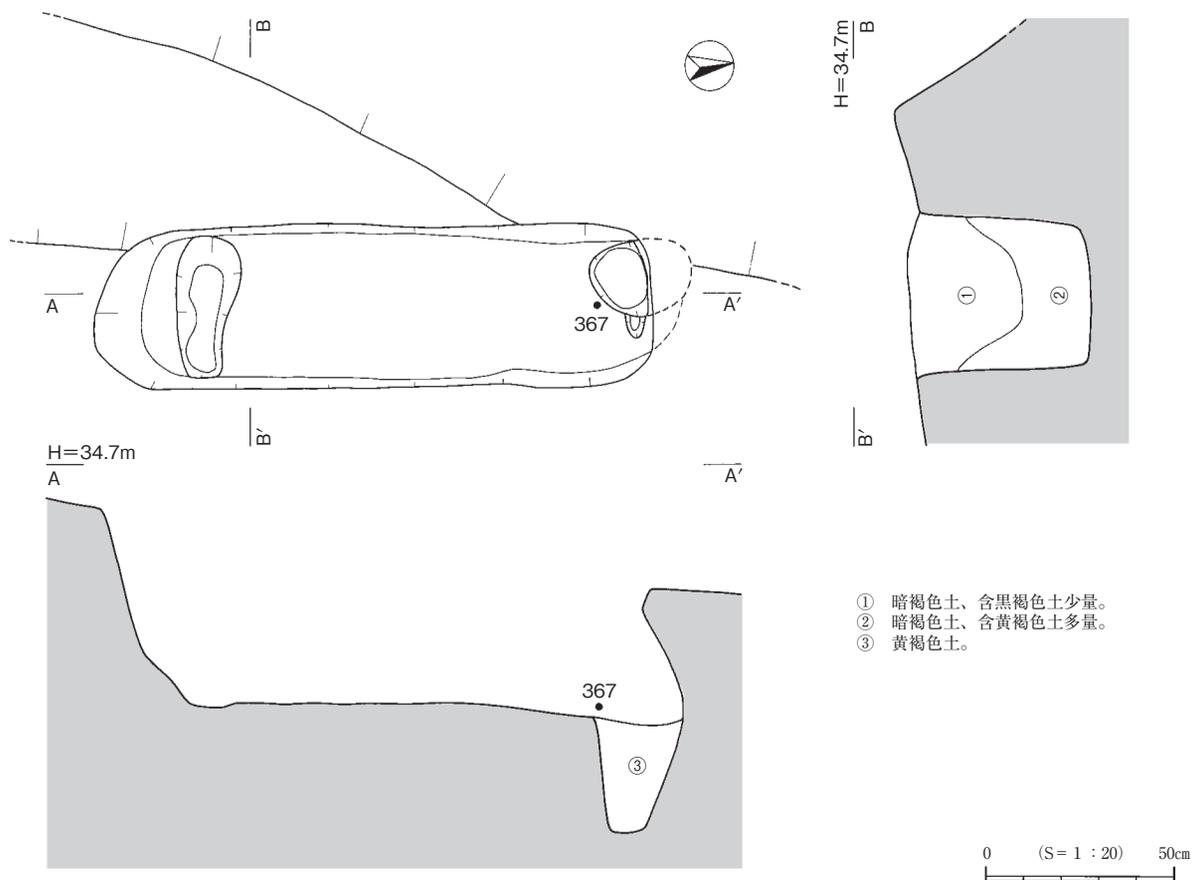
位置 18号墳周溝の西側内周肩部から墳丘部にかけて検出された土壙墓である(第120図)墳丘部地山検出時に確認されたものであるが、後世の削平により墳丘上からの掘り込みかどうかは不明である。北西0.6mにSX4が、対応する周溝外周肩部にSX8が存在する。確認面上の標高は34.6mを測る。

形状 平面形は長方形、断面形は概ね箱型を呈するが、短軸北壁はオーバーハングしている(第132図)。主軸方位は内周肩部に並行するN-8°-Eを指す。規模は長軸150cm、短軸45cm、深さ50cmを測る。床面は平坦で、南壁から10cm内側に幅14cm深さ3cmのの小口溝が掘り込まれている。また、北西隅の壁直直下には長径27cm、短径20cm、墓壙底面からの深さ30cmのピットと深さ3cmの小溝が検出された。小口に伴うものであろうか。木棺痕跡などは検出されなかったが、小口痕から本址は木棺墓の可能性が高い。

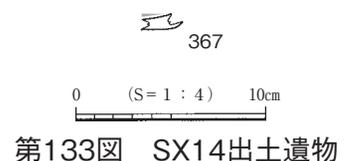
埋土 暗褐色土を主体とする。木質などは確認できなかった。

遺物 本址からはわずかに1点の微細片遺物が出土した(第133図)。367は土師器の皿、底部の破片で、全体に茶系の赤彩が厚く施される。

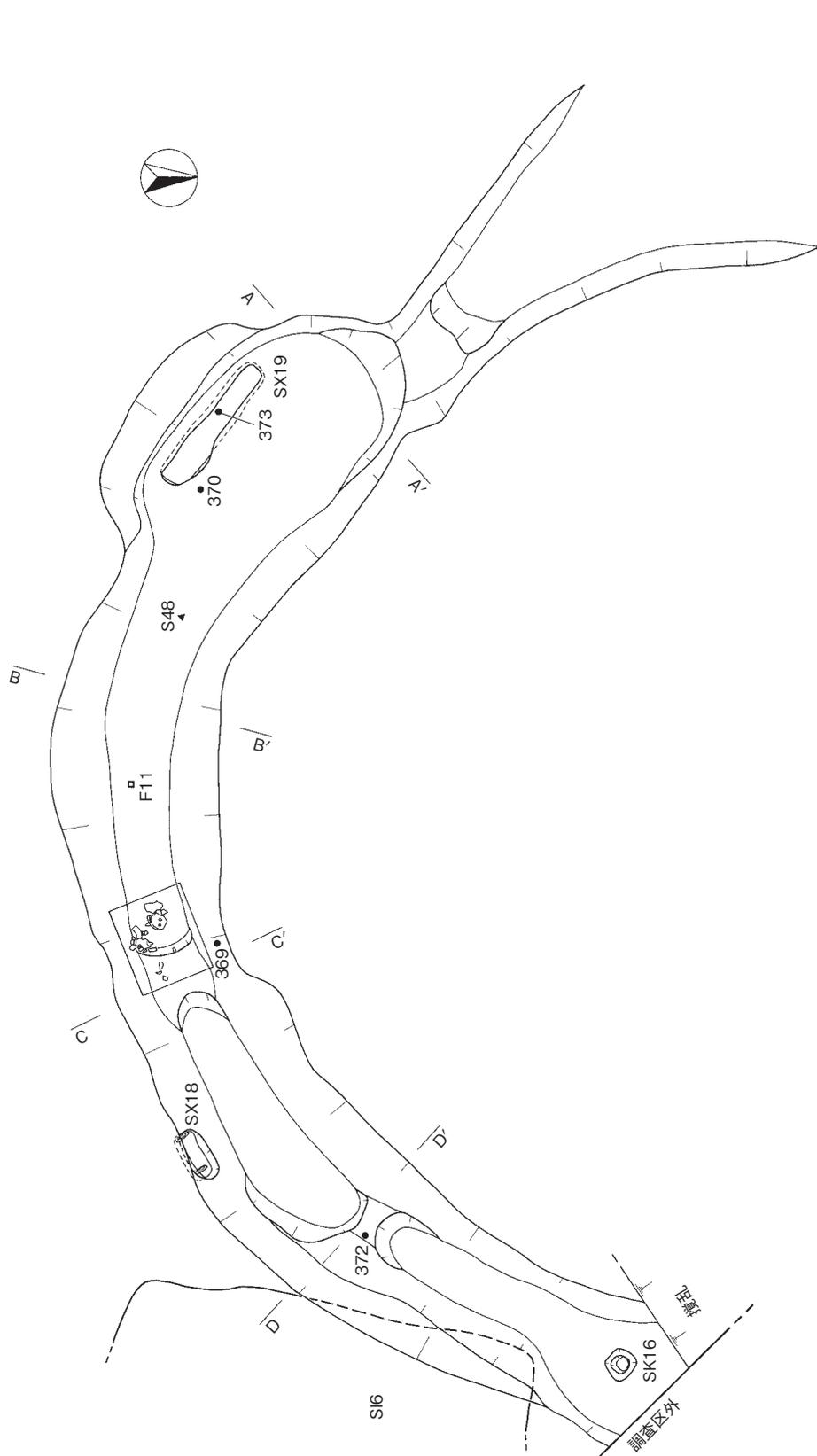
時期 1点の微細片遺物からの時期比定は困難であるが、本址の時期は古墳時代後期以降と考えられる。



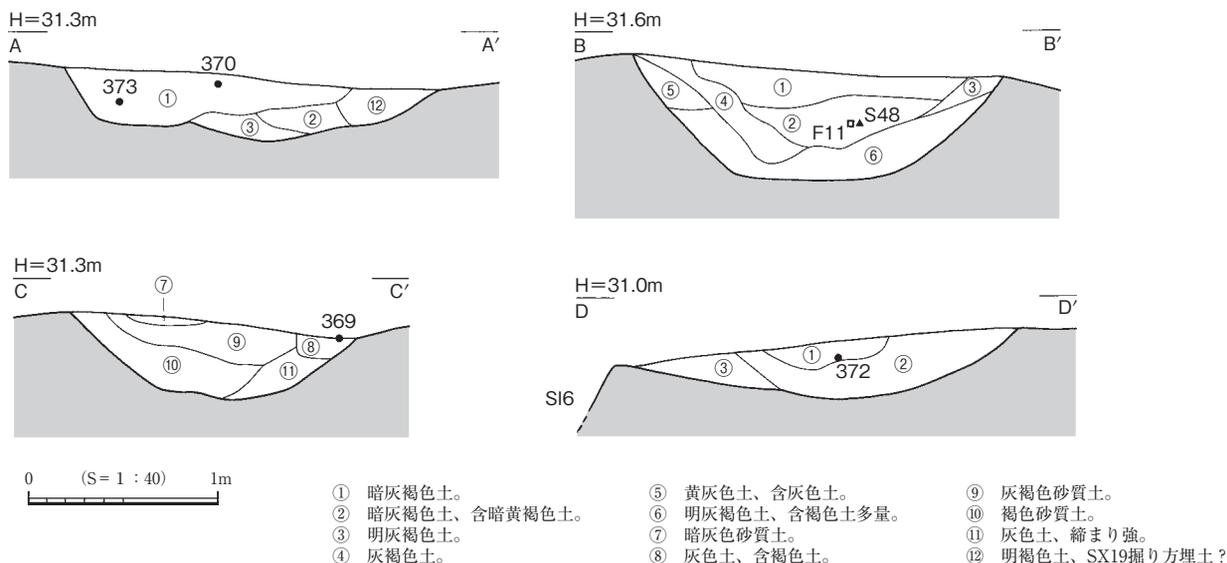
第132図 SX14



第133図 SX14出土遺物



第134図 早里19号墳



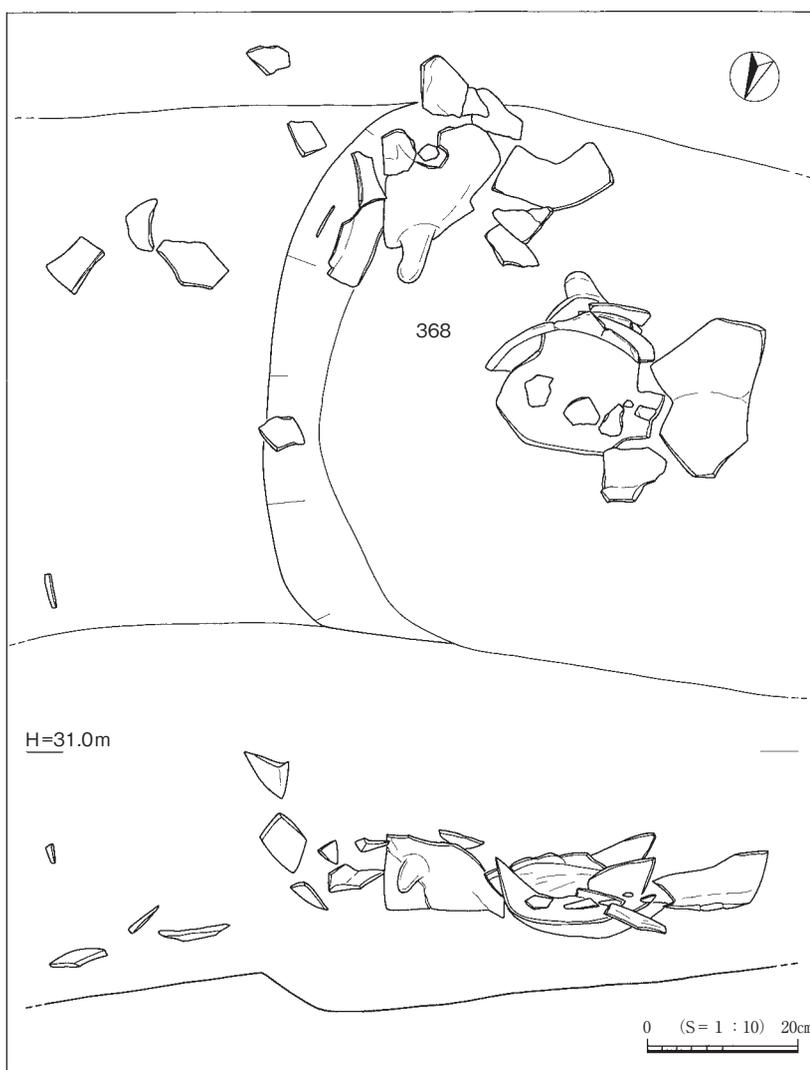
第135図 早里19号墳断面図

早里19号墳(第134～141図)

位置 I-4～5グリッドにまたがって、調査区中央の南西—北東方向に張り出した支尾根北西側頂部に築かれる（第134図）。この尾根は17・18号墳の築かれる尾根とは小支谷を隔てた北側の尾根上にあり、現在の境集落側に入り組んだ谷戸と境矢石遺跡の位置する丘陵が眺望できる。同一尾根上の西側5.0mに早里20号墳が築かれる。確認面上の標高は最頂部で31.4mを測る。周辺は古代以降の削平を受けている。従って、主体部の埋葬施設や墳丘は失われており、調査区内で検出できた遺構は周溝のみである。

墳丘 前述のとおり、墳丘は削平されており、周溝のみの残存である。このため墳丘部の詳細は不明であるが、周溝が円形に巡ることから、本址は円墳であったと考えられる。墳丘の規模は周溝の内面で直径13.0m、周溝を含めると17.0mが推定される。

なお、墳丘及び周溝の地山面検出中に堅穴建物2基（SI6・7）を検出した。この建物によりこの周辺は丘陵尾根部をカットした平坦面ないし窪地であったと考えられ、このような地形を利用して本址は築造されたと考えられる。

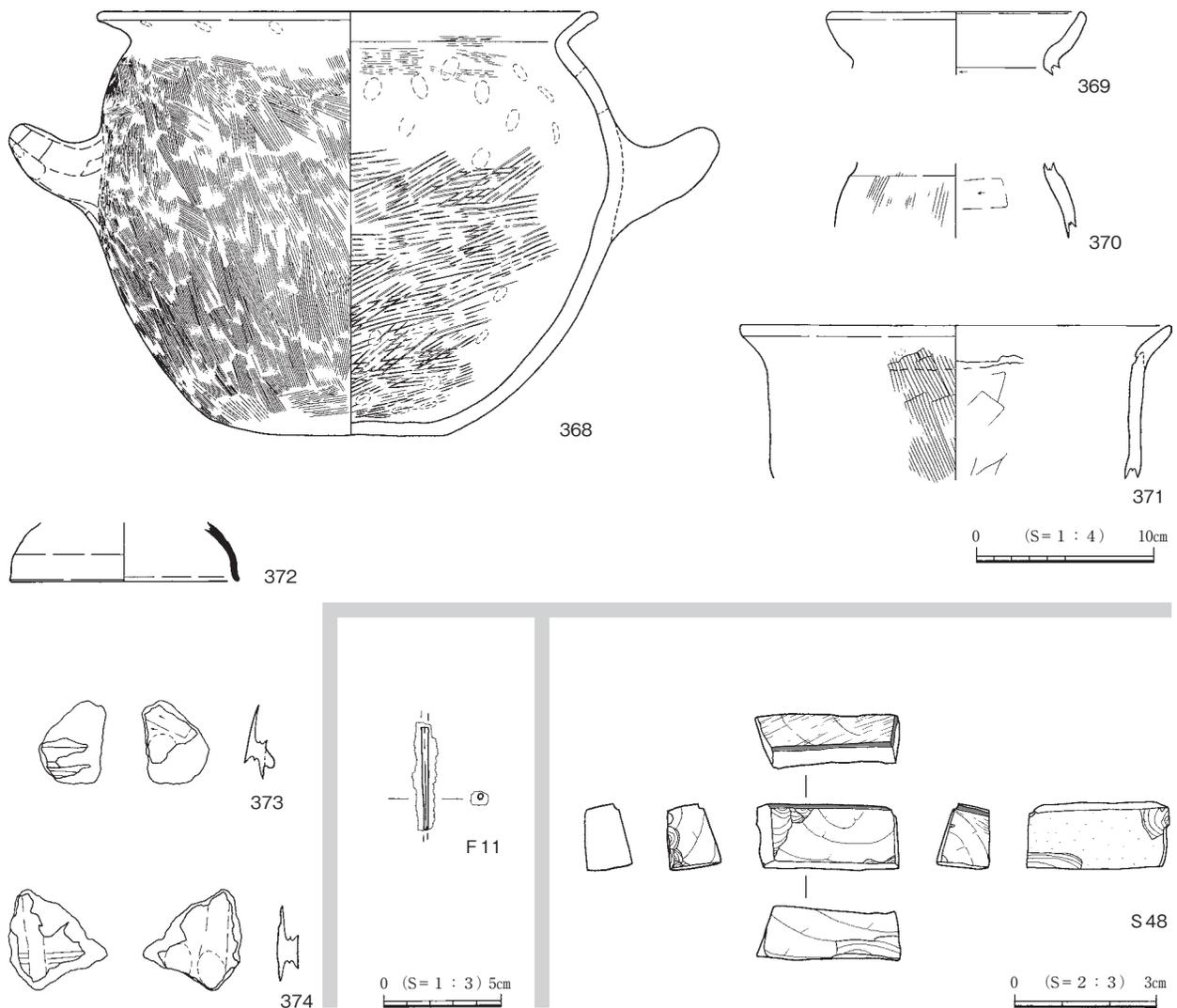


第136図 早里19号墳遺物出土状況

周溝 尾根と直交する形で斜面上方を三日月状に掘削している。斜面上方がもっとも深く、下方に向かって浅くなり、消滅している。平面形は円弧状であるが、周溝内埋葬墓が掘り込まれた部分は幅広になっている。規模は、残存部で最大幅300cm、最大深35cmを測る。断面は逆台形を呈する。周溝底面は北西側、南側、南東側の3か所で一部幅も狭く、地山を浅く掘り残している部分がある。この部分については陸橋状になっていたと考えられる。この周溝内から埋葬施設とみられる土壙墓3基（SX18・19・SK16）が検出された。また南側陸橋付近の、周溝底面から6cm程の埋土下層に土師器把手付甕が出土した（第136図）。出土状況では破碎されていたが、ほぼ完形に復元できることから、追葬儀礼などで供献されたものと考えられる。周辺に墓壙等の掘り込みは確認されなかった。近接する早里20号墳においても陸橋付近の埋土下層から供献土器が出土していることから、同様の儀礼行為が行われたことが推察される。

埋土 大きく3層に大別される。最下層には、古墳築造期に堆積したとみられる灰褐色土主体の埋土（②～⑥層）が堆積した後、周溝内埋葬が行われる。さらにその上層に斜面の地形に沿うよう暗灰褐色土（①層）が堆積していった状況が看取される。また、把手付甕が出土した部分では埋土が異なっていることから（⑦～⑪層）、追葬儀礼行為が行われた後、人為的に埋められた可能性も考えられる。

遺物 出土遺物の内、9点が図示し得た（第137図）。368は土師器の甕、平底で球胴形の体部に短く直線的に外反する口縁が付く。体部最大径部位に把手が付くタイプで、形状や胎土から搬入品の可



第137図 早里19号墳出土遺物

能性が高い。369～371は土師器の単口縁甕、球胴形のタイプと、口縁に最大径を持つタイプがある。

372は須恵器の坏蓋、口縁端部はナデにより僅かに外反する。373・374は埴輪の体部破片、円筒埴輪と考えられる。

F11は棒状の鉄製品である。S48は緑色凝灰岩製の管玉の未製品、施溝分割により四角柱状に分割されている。

時期 出土遺物には時期幅が見られるが、周溝内埋土に掘り込まれたSK16などの出土遺物から勘案して、本址は古墳時代中期後半から後期前半に築造、埋葬行為が行われ7世紀頃にかけて埋没していったものと考えられる。

SX18 (第134・138図)

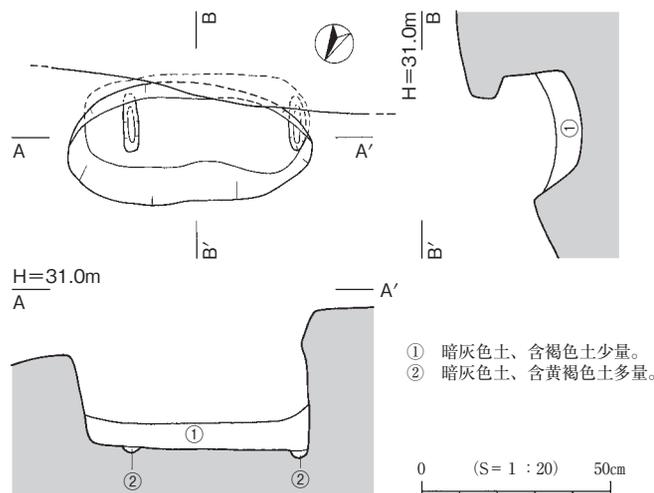
位置 19号墳周溝の南東側外周肩部に検出された土墳墓である(第134図)周溝地山検出時に確認されたものであるが、本来的には埋土中に掘り込まれたものと考えられる。西側7.5mにSX19が、北東5.0mにSK16が存在する。確認面上の標高は30.8mを測る。

形状 平面形は長楕円形、断面形は概ね箱型を呈するが、長軸北外周側はオーバーハングして掘り込まれる。主軸方位は内周肩部に並行するN-59°-Eを指す。規模は長軸64cm、短軸26cm、深さ27cmを測る。床面は平坦で、短軸壁寄りに幅5cm深さ3cmのの小口穴が掘り込まれている。木棺痕跡などは検出されなかった。

埋土 暗灰色土を主体とする。木質などは確認できなかった。

遺物 本址から遺物は出土していない。

時期 出土遺物がなく時期比定が困難であるが、埋土の状況から本址の時期は古墳時代中期後半以降と考えられる



第138図 SX18

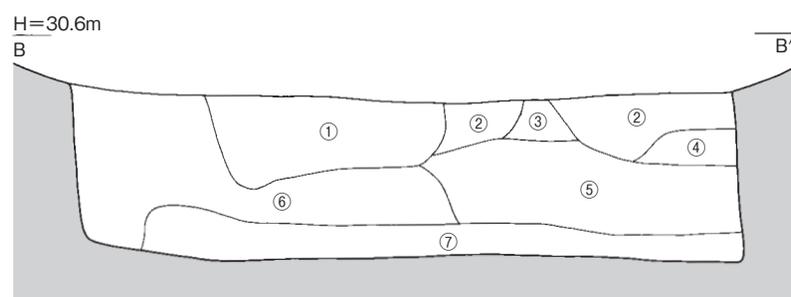
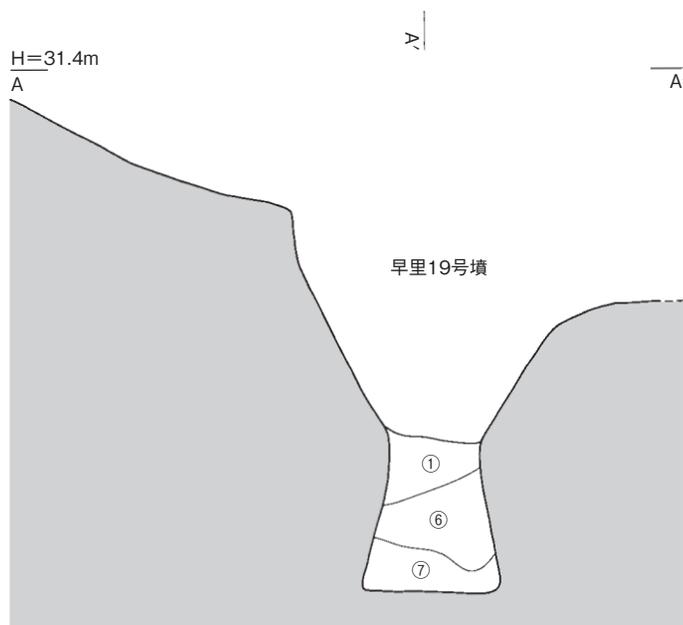
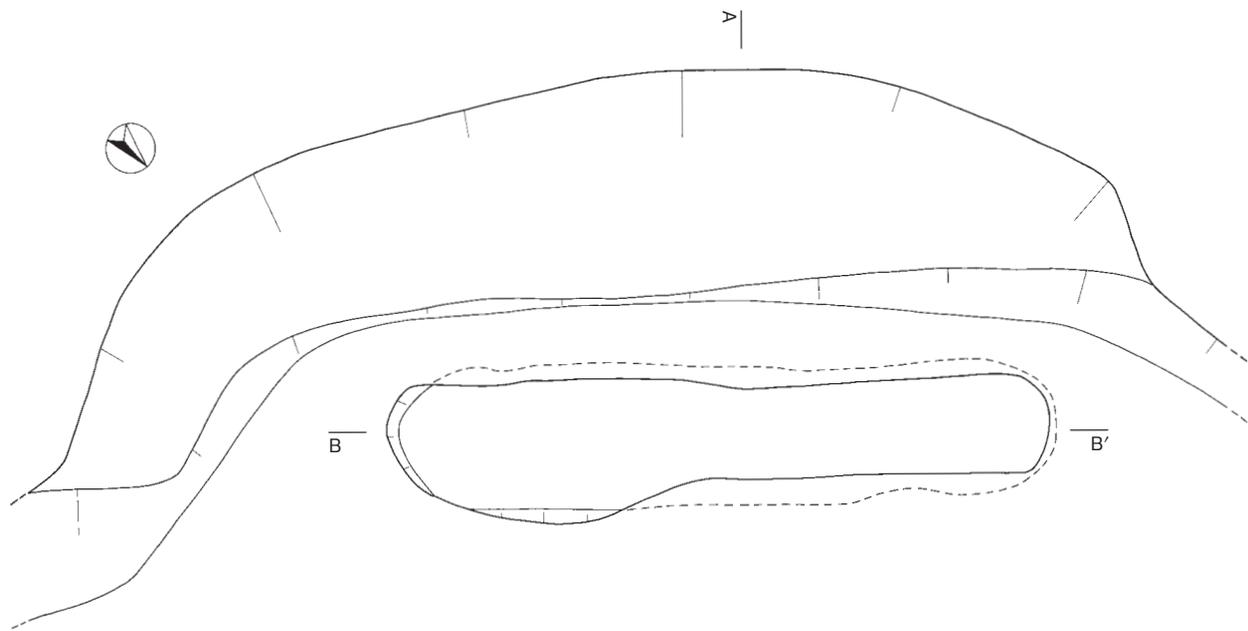
SX19 (第134・139図)

位置 19号墳周溝の南西側外周肩部に検出された土墳墓である(第134図)周溝地山検出時に主体部が確認されたものであるが、本来的には外周肩部から掘り込まれた二段掘墓墳と考えられる。東側7.5mにSX18が存在する。確認面上の標高は31.0mを測る。

形状 平面形は長楕円形、長軸断面形は箱型、短軸断面は底面から中位にかけて台形に窄まった後掘り方部分は斜めに広がる。主軸方位は内周肩部に並行するN-48°-Wを指す。主体部の規模は、長軸173cm、短軸35cm、深さ43cmを測る。床面は平坦で、小口穴、木棺痕跡などは検出されなかった。掘り方の規模は、長軸290cm以上、短軸150cm以上が推定される。

埋土 暗灰色土を主体とする周溝埋土との判別が困難で、埋土中に掘り込まれた部分では掘り分けることが困難であった。また、主体部に木質などは確認できなかった。

遺物 本址から遺物は出土していない。



- ① 明灰褐色土、縮まり強。
- ② 暗灰褐色土、含褐色小ブロック多量、縮まり強。
- ③ 淡灰褐色土、縮まり強。
- ④ 暗褐色土。
- ⑤ 淡黒灰褐色土。
- ⑥ 灰褐色土。
- ⑦ やや暗い褐色土。

0 (S = 1 : 20) 50cm

第139図 SX19

時期・性格 出土遺物がなく時期比定が困難であるが埋土の状況から、古墳時代中期後半以降の周溝内埋葬墓と考えられる。

SK16 (第134・140・141図)

位置 19号墳周溝の東側底面中央部に検出された土壙である(第134図)。周溝地山検出時に検出されたものであるが、本来的には埋土中に掘り込まれたものと考えられる。南西5.0mにSX18が存在する。確認面上の標高は30.3mを測る。

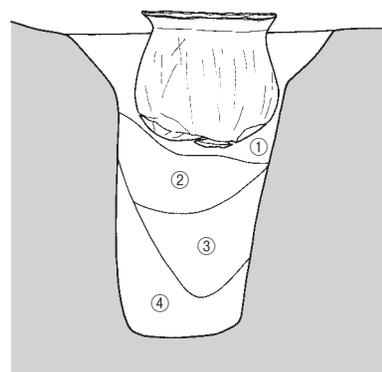
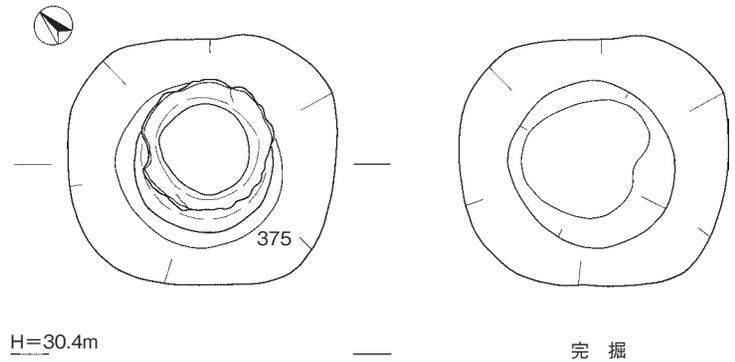
形状 平面形は上縁部が隅丸方形、底面は円形を呈する(第140図)。断面形は漏斗状を呈する。底面は平坦である。規模は上面で長径37cm、短径32cm、底面で直径22cm、確認面からの深さは42cmを測る。壙内に土師器甕が正位で埋納されていた。底面が割れていたが、ほぼ完形である。土器中の埋土を洗浄し精査したが、内容物は確認されなかった。本址は、検出時は土坑と考え

SKとしたが、出土状況から周溝内埋葬の土壙墓と考えられる。

埋土 下層に黄白色土、上層に暗灰褐色土が堆積する。甕底部の②層以下は裏込めの土の可能性が考えられる。

遺物 本址からは土師器甕がほぼ完形の状態で出土した(第141図) 375は単口縁の土師器甕、平底に近い丸底で頸部は緩やかに湾曲し、口縁は外反する。器壁が厚く内面の調整は粗い。

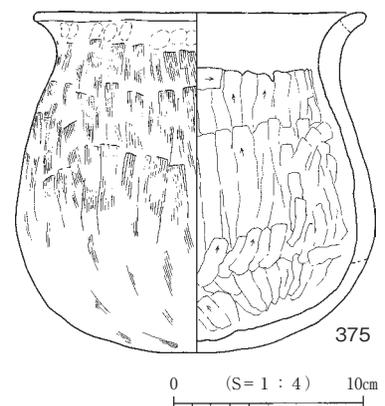
時期・性格 出土遺物から、古墳時代中期後半から後期前半頃の周溝内埋葬墓と考えられる。



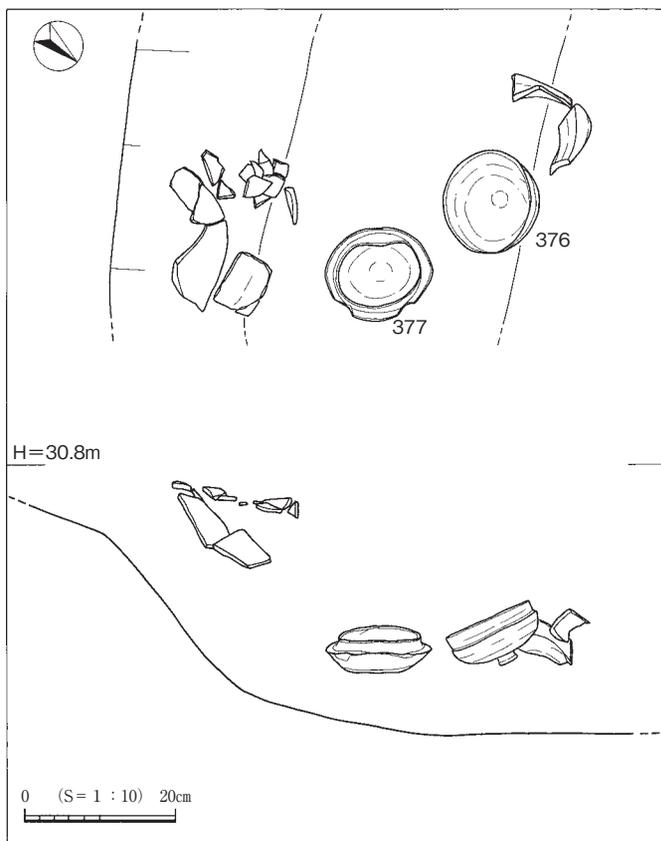
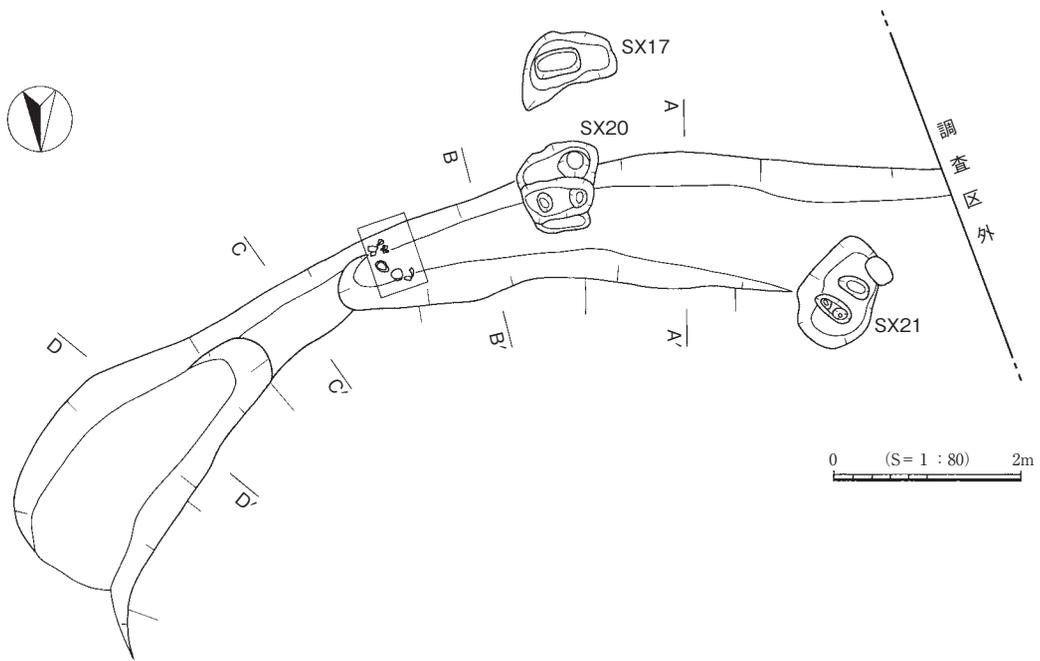
- ① 暗灰褐色土、縮まり強。
- ② やや暗い灰褐色土、粘性強。
- ③ 暗黄白色土。
- ④ 灰褐色土、含黄白色土。

0 (S=1:10) 20cm

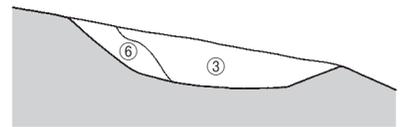
第140図 SK16



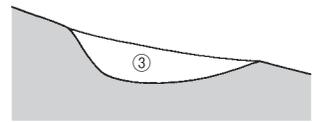
第141図 SK16出土遺物



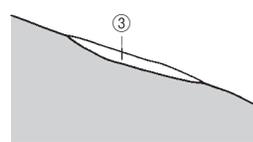
H=31.0m
A — A'



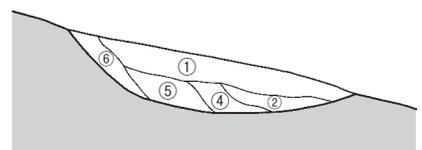
H=31.0m
B — B'



H=31.0m
C — C'



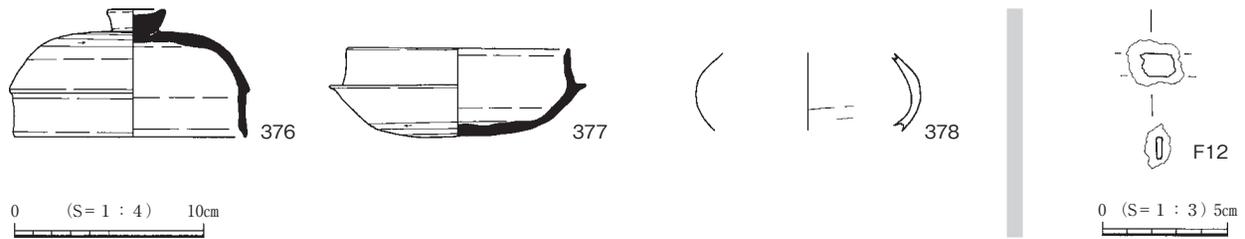
H=31.0m
D — D'



0 (S=1:40) 1m

- ① 黒灰褐色土。
- ② 黒灰褐色土、含褐色小ブロック、炭化物。
- ③ 褐色土、含ロームブロック多量。
- ④ 褐色土、含灰色土。
- ⑤ 淡灰褐色土、含炭化物少量。
- ⑥ 褐色土。

第142図 早里20号墳



第143図 早里20号墳周溝出土遺物

早里20号墳（第142～146図）

位置 I-2～3グリッド、南西―北東方向に張り出した支尾根北側谷頭凹地の調査区西壁際に検出された（第142図）。この尾根は早里17・18号墳の築かれる尾根とは小支谷を隔てた北側の尾根上にあり、境集落側に入り組んだ谷戸と境矢石遺跡の位置する丘陵が眺望できる。同一尾根上の東側5.0mに早里19号墳が築かれる。確認面上の標高は最頂部で30.6mを測る。周辺は古代以降の削平を受けており、調査区内で検出できた遺構は周溝のみである。

墳丘 前述のとおり、墳丘は削平されており、周溝のみの残存である。このため墳丘部の詳細は不明であるが、周溝が円形に巡ることから、本址は円墳であったと考えられる。墳丘の規模は調査区外に広がるが、周溝の内面で直径14.0m、周溝を含めると16.0mが推定される。

周溝 尾根と直交する形で、斜面上方を三日月状に掘削している。斜面上方がもっとも深く、下方に向かって浅くなり、消滅している。平面形は円弧状を呈する。規模は残存部で最大幅170cm、最大深45cmを測る。断面はU字形を呈する。周溝底面は東側で一部幅も狭く、地山を浅く掘り残している部分がある。この部分については陸橋状になっていたと考えられる。この陸橋西側の床面から7cm上に、須恵器の坏2点と甕胴部の破片が出土した。須恵器は身と蓋のセットで、並べて置かれていたようである。追葬儀礼などで供献されたものと考えられる。前述の早里19号墳においても、陸橋付近の埋土下層から供献土器が出土していることから、同様の儀礼行為が行われたことが推察されよう。

この周溝内から埋葬施設とみられる土壇墓2基（SX20・21）が、周溝外側に近接して土壇墓1基（SX17）が検出された。位置的に見て本址に伴うものと考えられる。

埋土 SS30に切られているため遺存状態は悪いが、下層には褐色土、上層には黒灰褐色土の2層に大別される。出土した須恵器が褐色土上面に出土していることから、古墳築造期に堆積したとみられる褐色土（③～⑥層）が堆積した後、追葬儀礼が行われる。さらにその上層に斜面の地形に沿うよう黒灰褐色土（①～②層）が堆積していった状況が看取される。

遺物 出土遺物のうち4点が図示し得た（第143図）。376・377は陸橋西側から出土した須恵器の坏である。376は坏蓋、天井部との境に稜を持ち、口縁内側には段を有する。つまみはボタン状で頂部が僅かに凹む。377は身、立ち上がりは長く直線的で、口縁内側に段を有する。378は土師器小壺の体部破片である。F12は鉄製刀子の破片と思われる。

時期 出土遺物から、本址の時期は古墳時代中期後半頃と考えられる。

埋葬施設（周溝内埋葬）

SX20（第144図）

位置 20号墳周溝の南側外周肩部に検出された土壇墓である（第142図）。周溝地山検出時に確認されたものであるが、本来的には埋土中に掘り込まれたものと考えられる。西側2.4mにSX21が、南側0.4m

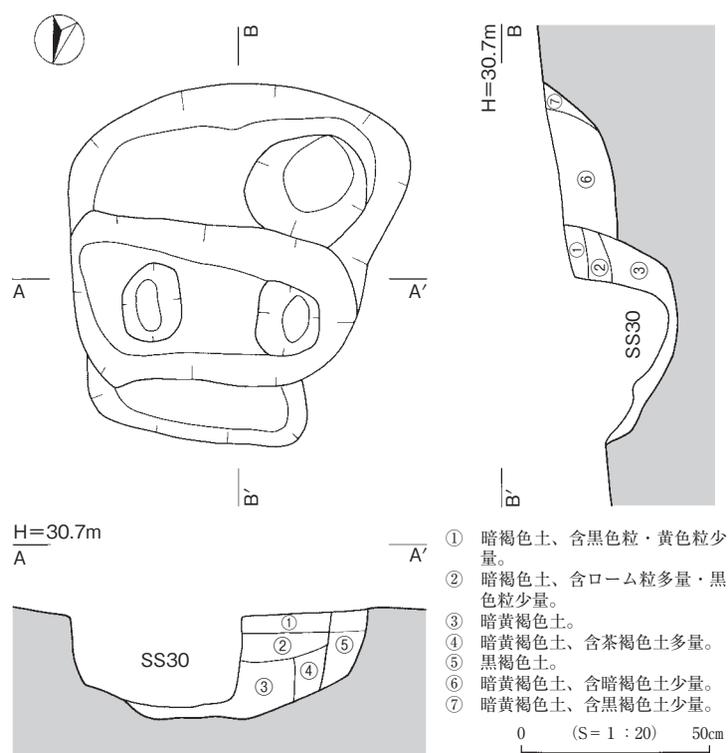
にSX17が存在する。確認面上の標高は30.6mを測る。

形状 SS30により上層を切られているが、平面形は不整形な長楕円形、断面形は概ね箱型を呈する（第144図）。主軸方位は周溝外周肩部に並行するN-84°-Eを指す。規模は長軸74cm、短軸64cm、深さ30cmを測る。床面は平坦で、両短軸壁寄りに幅18cm、深さ6cm程の小口穴が掘り込まれている。断面の観察によれば、幅8cm程の木棺痕跡（④層）が確認された。掘り方は床から20～25cm上位付近に長軸方向に幅14～35cm程のテラスを設ける二段掘墓壙である。斜面上方の掘り方部分には西壁寄りに直径28cm、深さ12cmのピットが掘り込まれる。

埋土 主体部は暗褐色土を主体とし、木棺痕跡部分は茶褐色土を多く含む（④層）。掘り方埋土（⑤～⑦層）は暗黄褐色土を主体とする。

遺物 本址から遺物は出土していない。

時期 出土遺物がなく時期比定が困難であるが埋土の状況から、本址の時期は古墳時代中期後半以降と考えられる。

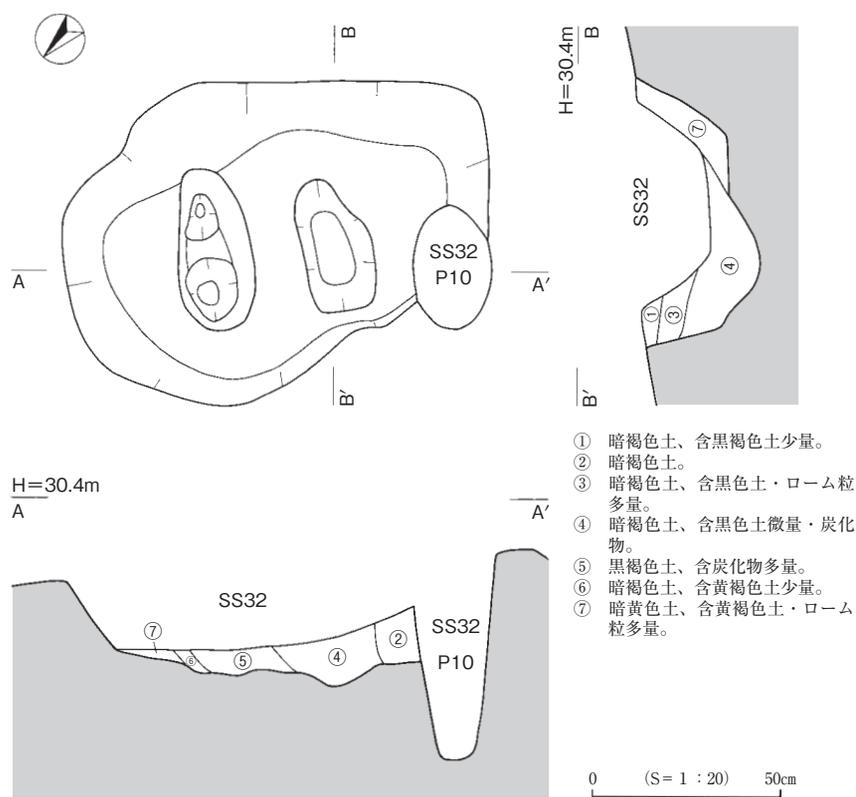


第144図 SX20

SX21 (第145図)

位置 20号墳周溝の南側内周肩部から墳丘地山に検出された土壙墓である（第142図）。周溝地山検出時に確認されたものであるが、本来的には埋土中に掘り込まれたものと考えられる。東側2.4mにSX20が存在する。確認面上の標高は30.3mを測る。

形状 SS32により切られているが、平面形は不整形な長楕円形、断面形は逆台形を呈する。主軸方位は周溝軸線より東に振れるN-32°-Eを指す。規模は長軸115cm、短軸



第145図 SX21

85cm、深さ32cmを測る。床面は平坦で、両短軸壁寄りに幅20cm、深さ6cm程の小口穴が掘り込まれている。

埋土 主体部は暗褐色土を主体とし、掘り方埋土は暗黄褐色土（⑦層）を主体とする。

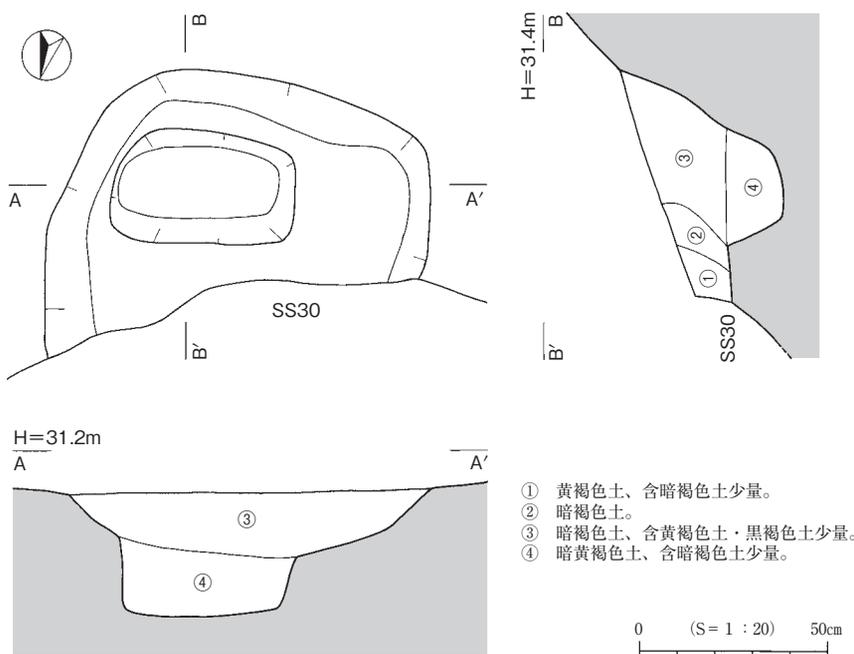
遺物 本址からは炭化材が出土しており、自然化学分析の結果、エノキ属と同定された（第VI章第2節）。

時期 出土遺物がなく時期比定が困難であるが埋土の状況から、本址の時期は古墳時代中期後半以降と考えられる。

SX17（第146図）

位置 20号墳周溝の南側0.8mの表土直下に検出された土壙墓であり、20号墳と関連性の高いものと考えここに含めた（第142図）。北側0.4mにSX20が存在する。確認面上の標高は31.2mを測る。

形状 SS30により切られているが、平面形は隅丸長方形、断面形は二段掘りの逆台形を呈する。主軸方位は周溝軸線より東に振れるN-32°-Eを指す。主体部の規模は長軸50cm、短軸30cm、確認面から



第146図 SX17

の深さ32cmを測る。床面は平坦で、木棺痕跡などは検出されなかった。主体部外周にテラスを持つ掘り方の規模は長軸105cm、短軸58cm以上、確認面からの深さ28cmを測る。

埋土 主体部は暗黄褐色土（④層）の単層で、掘り方は暗褐色土（③層）を主体とする。

遺物 本址から遺物は出土していない。

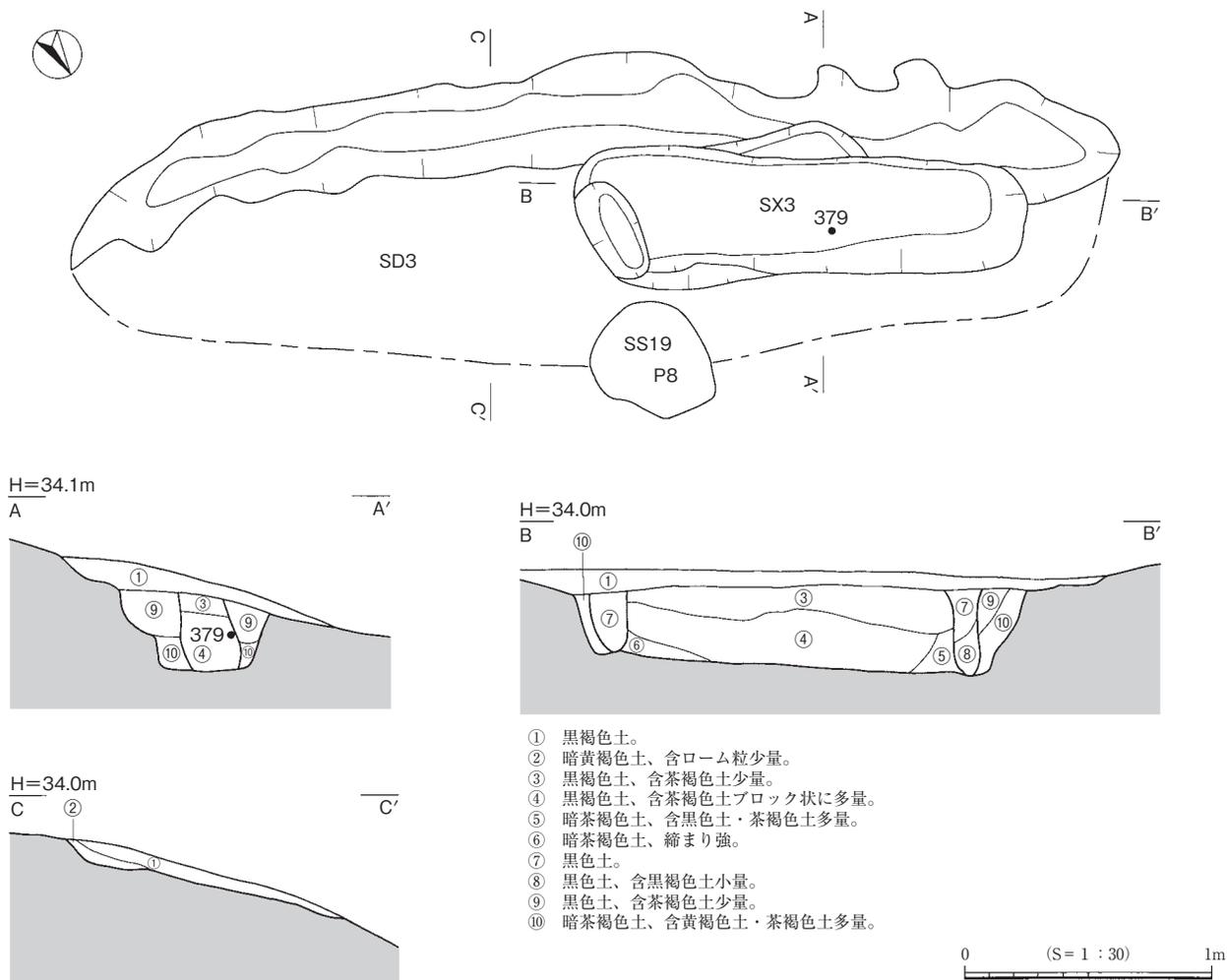
時期 出土遺物がなく時期比定が困難であるが、20号墳に関連する土壙墓と推測すると、本址の時期は古墳時代中期後半以降と考えられる。

4) 土壙墓・土坑

SX3（第147・148図）

位置 C-9グリッド、調査区南側の南西—北東方向に張り出した支尾根頂部斜面に検出された木棺墓である（第147図）。早里17・18号墳間に掘り込まれ、18号墳周溝とは1.0m、17号墳周溝とは4.0m離れる。上面をSD3に切られる。確認面上の標高は33.7mを測る。

形状 上面をSD3に切られるが、遺存状態は良好である。平面形は隅丸長方形を呈する。主軸方位は尾根主稜線と直交方向のN-70°-Wを指す。墓壙規模は長軸182cm、短軸60cm、深さ35cmを測る。墓溝は地山を掘り込んでおり、斜面上方の南西側壁面は一部段差を持つ。床面は平坦で、南東壁際に幅



第147図 SX3・SD3

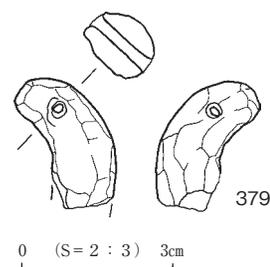
20cm、深さ7cm程の小口穴を掘り込む。このことから埋葬形態は組み合わせ式の木棺直葬と考えられる。木棺の規模は内法で長軸145cm、短軸20cm、高さ35cmと推測される。

埋土 黒褐色土主体で、黒色土(⑦・⑧層)は木棺痕跡、暗茶褐色土(⑨・⑩層)は墓壇裏込め埋土と考えられる。

遺物 墓壇主体部中央北東壁際の中下層より土製勾玉1点が出土した。位置的にみて副葬品と考えられる。

379は土師質の勾玉、屈曲は弱い。

時期 出土遺物からの時期比定が困難であるが、早里17・18号墳に関連する土壇墓と推測すると、本址の時期は古墳時代中期後半以降と考えられる。



第148図 SX3出土遺物

SD3 (第147図)

位置 C-9グリッド、調査区南側の南西—北東方向に張り出した支尾根頂部斜面の表土直下に検出された。SS19の斜面上方に隣接する。確認面上の標高は33.8mを測る。本址はSX3の上層に構築されているため、ここに述べることにする。

形状 斜面の高位側の地山を削り、平坦面を形成している。平面形は長方形を呈すると推測される。斜面下方は削平により失われている。傾斜面の等高線に直交する方向を主軸と考えた場合の主軸方位

はS-67°-Eである。規模は長軸4.2m、短軸1.2m、確認面からの深さは15cmを測る。壁は開きながら立ち上がり、残存範囲での床面積は3.2㎡を測る。床面は斜面に向かって傾斜しつつも、平坦で面上は硬化している。高位側の壁面直下に長さ420cm、幅35cm、深さ5cmの溝が検出された。

本址は検出段階では溝状の形状であったことから、SD3としたが、調査の結果、周溝を持つ段状遺構と考えられる。

埋土 黒褐色土を主体とし、下層より順次堆積していることから、自然埋没の様相を呈する。

遺物 本址から遺跡は出土していない。

時期 出土遺物がないが、切合い関係から本址の時期は古墳時代中期後半以降と考えられる。

SX7 (第149・150図)

位置 H-5グリッド、南西—北東方向に張り出した支尾根北側の下部谷壁斜面に検出された(第149図)。東側1mに17号墳が存在する。確認面上の標高は32.3mを測る。

形状 平面形はやや不整形な隅丸長方形を呈する。長軸方位は等高線に対し直交するN-63°-Eを指す。斜面下方はかなり削平されているが、断面形は概ね箱型を呈する。底面は平坦で、北東側にテラス状の段差を持つ。堀方の規模は上面で長径110cm、短径62cm、確認面からの深さは南壁側で38cmを測る。本址底面の南東壁際に須恵器坏蓋と身が出土した。蓋は壊れてずれていたが、本来的には合わさっていた可能性が高い。

位置的や形状、遺物の出土状況から、本址は早里17号墳に関連性の高い土壙墓と考えられる。

埋土 黒色土を主体とする。

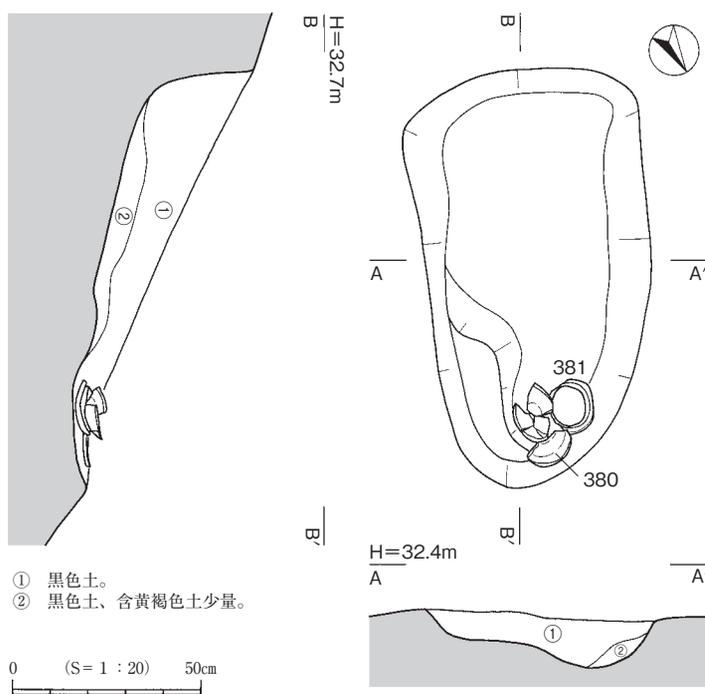
遺物 本址からは完形の須恵器坏の蓋と身が出土した。この2点はセットであったと思われる。(第150図)。380は蓋、天井部との境の稜はやや退化し、口縁内面に段を持つ。381は身、立ち上がりは内傾する。

時期 出土遺物と形状から、本址の時期は古墳時代後期、6世紀後葉頃と考えられる。

SX11 (第151図)

位置 C-11グリッド、南側の南西—北東方向に張り出した支尾根頂部斜面の表土直下に検出された(第151図)。南側0.2mにSD4が掘り込まれる。南西側10mに早里18号墳が、西側10mに早里17号墳が存在する。確認面上の標高は30.1mを測る。

形状 平面形は楕円形を呈する。長軸方位はN-3°-Wを指す。断面形は箱型を呈し、底面は平坦



第149図 SX7



第150図 SX7出土遺物

である。掘り方の規模は上面で長径135cm、短径45cm、確認面からの深さは36cmを測る。形状から、本址は土壌墓の可能性が高い。炭化物や骨片などは検出されなかった。また、南側に掘り込まれたSD4は位置的に見て本址の周溝の可能性はある。

本址は調査区南端際に検出された土壌墓であり、位置的に見て南側に隣接する福成早里14・15号墳との関連性も想定できる。

埋土 暗褐色土を主体とし、締まりは弱く人為的に一気に埋め戻された様相を呈する。

遺物 本址から遺物は出土していない。

時期 出土遺物がなく時期比定が困難であるが、周辺の早里17・18号墳及び隣接域の福成早里14・15号墳とも関連性の高い遺構であると考えられると、本址の時期は古墳時代中期後半から後期以降と考えられる。

SD4 (第151図)

位置 C-11グリッド、南側の南

西—北東方向に張り出した支尾根頂部斜面の表土直下に検出された溝状遺構である。(第151図)。北側0.2mにSX11が掘り込まれる。確認面上の標高は30.5mを測る。

形状 平面形は不整形な長楕円形で、東側は調査区外に延びる。長軸方位はN-63°-Wである。規模は最大長1.2m、最大幅0.5m、確認面からの深さは最大で24cmを測る。西端は表土の削平により緩やかに消滅する。断面の形状はU字形を呈し、底面は平坦である。

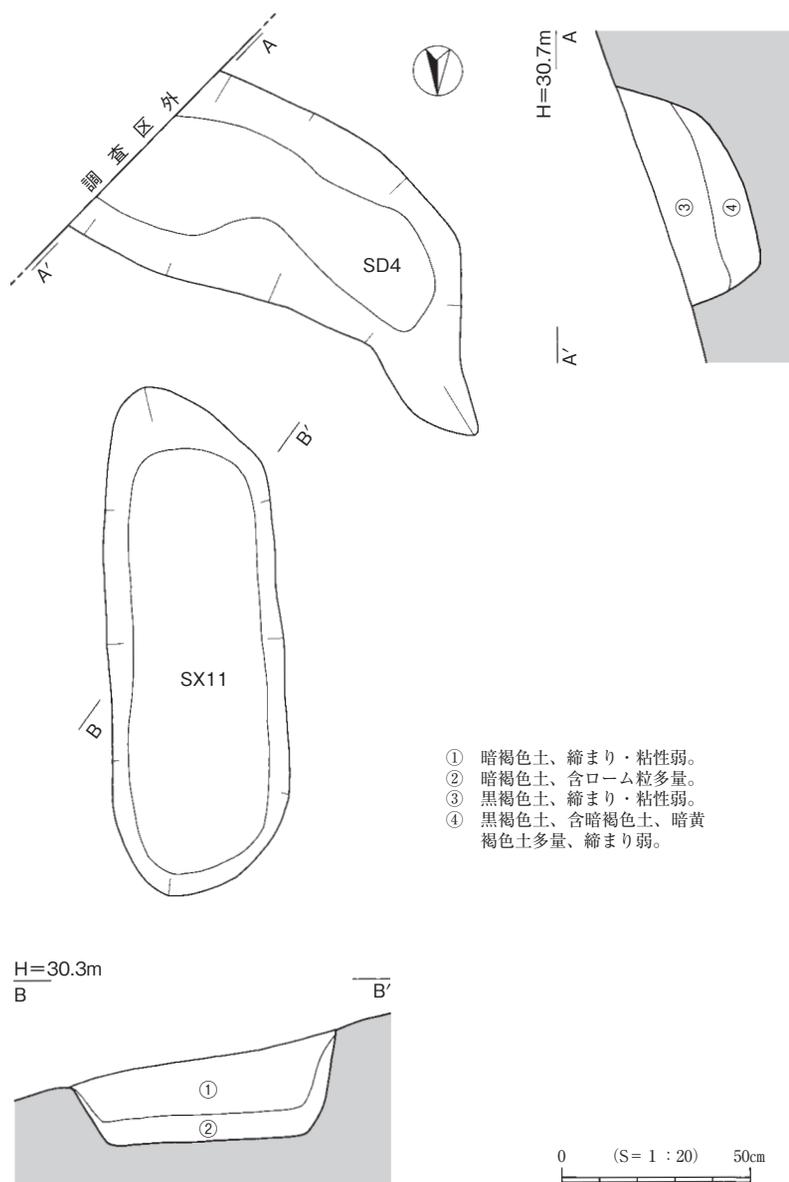
埋土 黒褐色土を主体とし、堆積状況からは流水の痕跡は認められない。

遺物 本址から遺物は出土していない。

時期 出土遺物がなく時期比定が困難であるが、やや円弧状を描く形状と位置から、SX11の周溝の可能性が考えられよう。このことから、本址の時期はSX11と同時期の、古墳時代中期後半から後期以降が考えられる。

SX15 (第152・153図)

位置 F-5グリッド、南西—北東方向に張り出した支尾根南東側の上部谷壁斜面に検出された(第



第151図 SX11・SD4

152図)。北側5mにSK1が存在する。確認面上の標高は32.4mを測る。

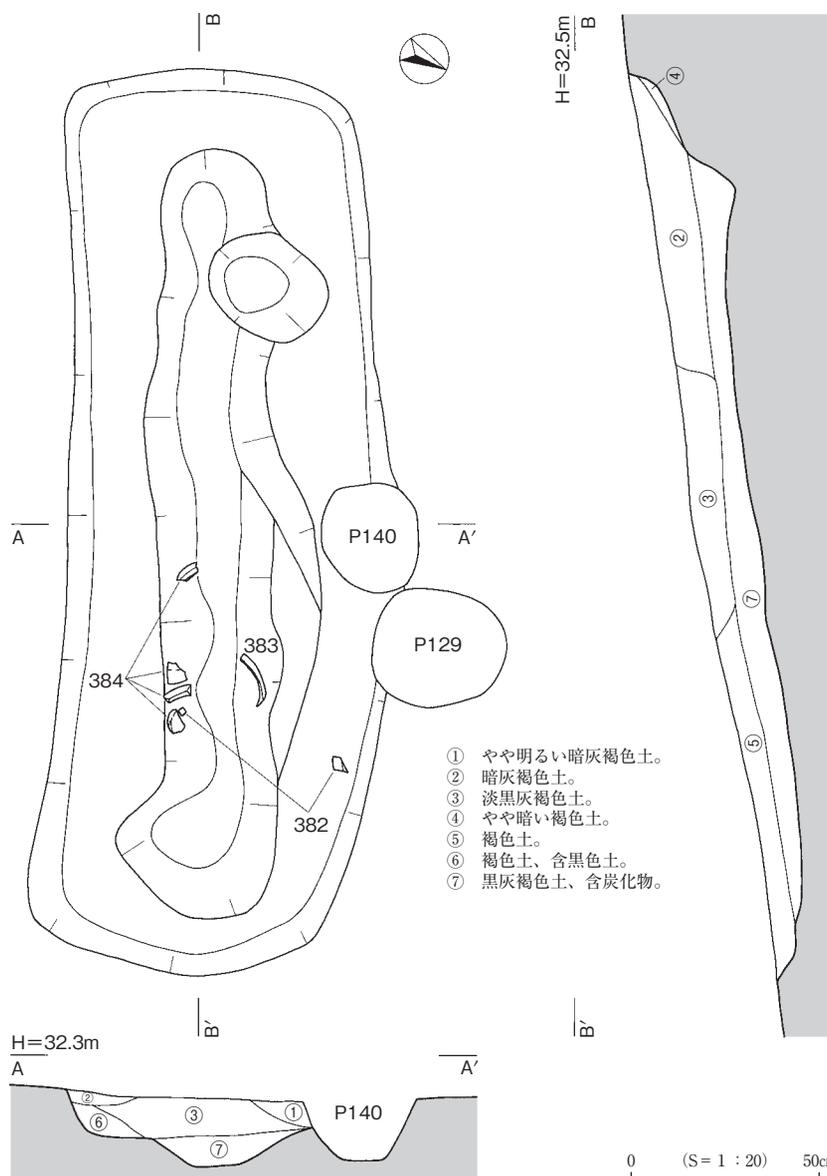
形状 平面形は長方形を呈する。長軸方位は等高線に対し直交するN-66°-Eを指す。断面形は概ね逆台形を呈する。底面は平坦で中央部に長軸方向に沿って幅40cm、深さ18cm、断面U字形の溝が掘り込まれる。この形状から、本址は割竹式木棺墓であると考えられる。掘り方の規模は、上面で長径240cm、短径88cm、確認面からの深さは後世の削平により18cmと非常に浅い。

本址主体部中央南西寄りの底面直上から5cmの所に須恵器坏蓋2点、身1点が割れた状態で出土した。後世の攪乱の影響もあり、元位置は不明である。蓋は壊れてずれていたが、本来的には合わさっていた可能性が高い。

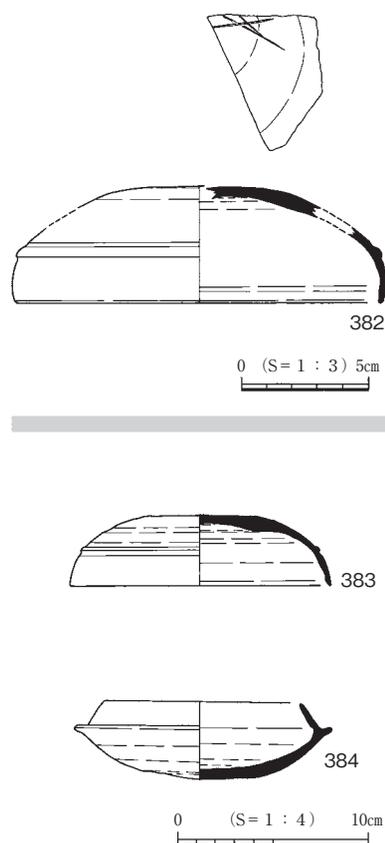
埋土 灰褐色土を主体とし、木質の痕跡などは確認できなかった。

遺物 本址主体部付近から須恵器坏3点が出土している（第153図）。382・383は坏蓋、天井部との境の稜はやや退化、口縁部は内湾する。382は天井部外面に焼成後線刻が施される。384は坏蓋、立ち上がり部は直線的に内傾する。

時期 出土遺物と形状から、本址の時期は古墳時代後期前半頃と考えられる。



第152図 SX15



第153図 SX15出土遺物

SX16 (第154図)

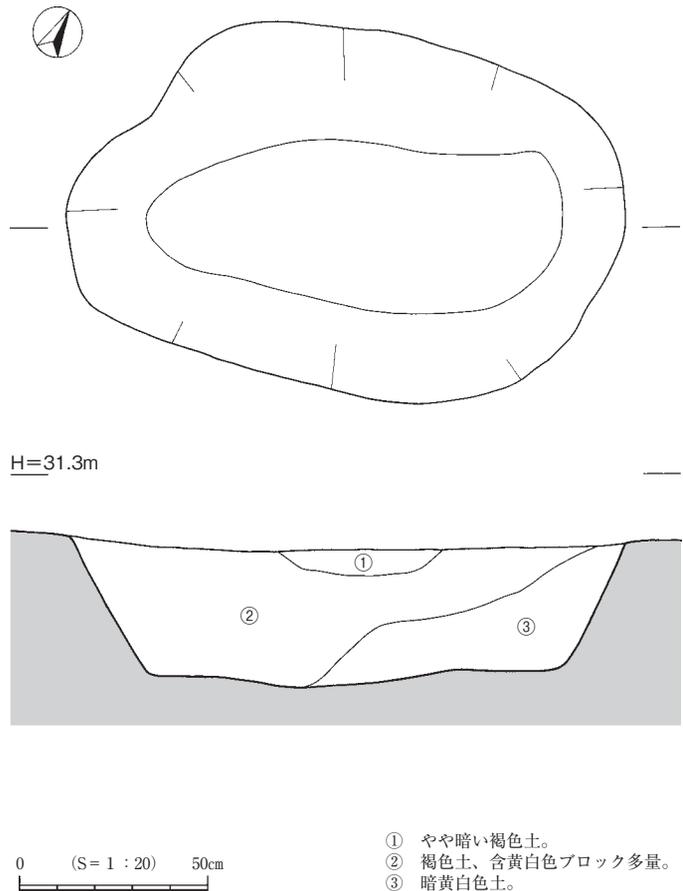
位置 F-5グリッド、南西—北東方向に張り出した支尾根頂部斜面に検出された(第154図)。南東側15mにSK1が存在する。確認面上の標高は31.2mを測る。

形状 平面形は不整形な楕円形を呈する。長軸方位は等高線に対し直交するN-63°-Eを指す。断面形は逆台形を呈し、底面は平坦である。本址は平面精査の段階では土壙墓の可能性が高く、SXとして調査を進めたが、埋土の状況からも土壙墓とする根拠に乏しいことから、土坑と判断した。規模は、上面で長径148cm、短径95cm、底面で長径112cm、短径44cm、確認面からの深さは43cmを測る。

埋土 褐色土を主体とし、概ね自然埋没の様相を呈する。

遺物 本址から遺物は出土していない。

時期 出土遺物がないため、時期比定が困難であるが、埋土と形状から、本址の時期は古墳時代後期以降と考えられる。



第154図 SX16

SX22 (155図)

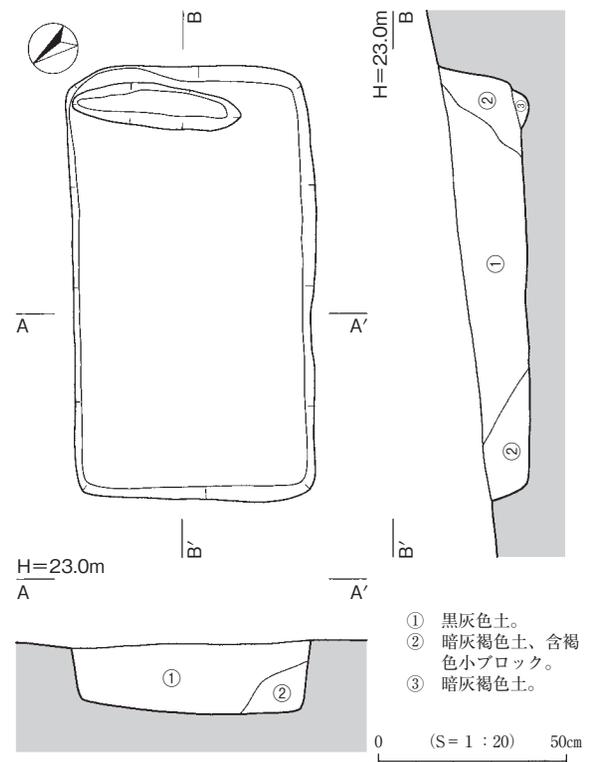
位置 M-2グリッド、調査区北側の丘陵麓部緩斜面に検出された(第155図)。南東側21mにSK8が存在する。確認面上の標高は22.9mを測る。

形状 平面形は長方形を呈する。長軸方位は等高線に対し直交するN-52°-Wを指す。断面形は箱型を呈する。底面は平坦で南東壁際に長さ48cm、幅12cm、深さ4cm、断面U字形の溝が掘り込まれる。位置的にこの溝は小口痕跡とみられることから、本址は土壙墓と考えられる。掘り方の規模は、上面で長径116cm、短径64cm、確認面からの深さは20cmを測る。

埋土 黒灰色土を主体とし、木質の痕跡などは確認できなかった。

遺物 本址から遺物は出土していない。

時期 出土遺物がないため、時期比定が困難であるが、埋土と形状から、本址の時期は古墳時代後期以降と考えられる。



第155図 SX22

SK1 (第156・157図)

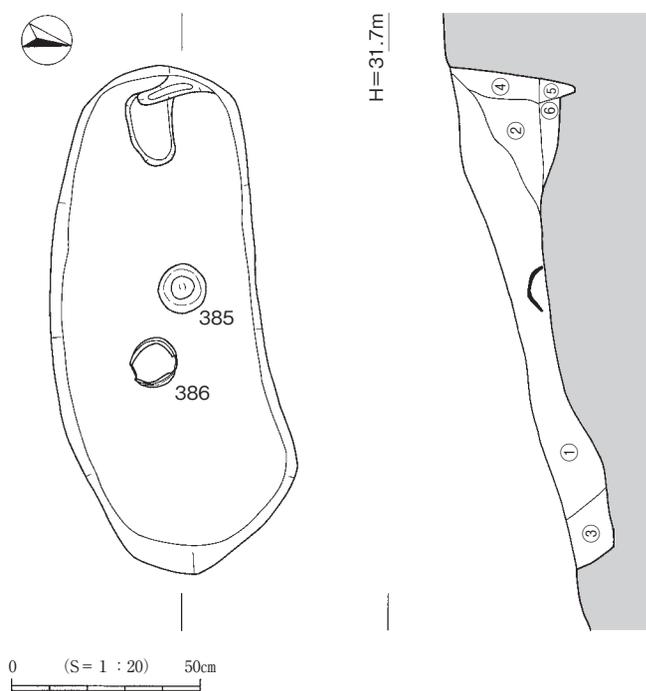
位置 G-5グリッド、南西—北東方向に張り出した支尾根南東側の上部谷壁斜面に検出された(第156図)。SK2の上面を削平して掘り込まれている。南側6.5mにSX15が存在する。確認面上の標高は31.5mを測る。

形状 平面形はやや不整形な隅丸長方形を呈する。長軸方位は等高線に対し直交するN-88°-Eを指す。断面形は概ね箱型を呈し、底面は平坦である。規模は上面で長径135cm、短径58cm、確認面からの深さは東壁側で30cmを測る。また、東側短辺に深さ5cm程の小口板痕跡が検出されたことから、本址は木棺墓と考えられる。

埋土 黒灰褐色土を主体とし、木質などは確認できなかった。

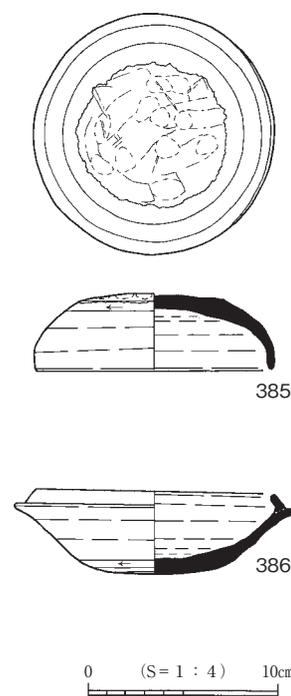
遺物 本址底面中央部に、須恵器坏蓋が伏せられた状態で、身が上向きで並んで出土した(第156図)。本来的にはセットで合わせられていた可能性が高い。385は坏蓋、天井部にヘラ切り後指頭調整の痕跡が残る。386は坏身、立ち上がりは短く内傾する(第157図)。

時期 出土遺物から、本址の時期は古墳時代後期後葉頃と考えられる。



第156図 SK1

- ① 黒灰褐色土、含褐色ブロック。
- ② 黒灰褐色土。
- ③ 淡黒灰褐色土。
- ④ 明褐色土。
- ⑤ 黒灰褐色土、軟質。
- ⑥ 明褐色土、含黒灰色ブロック。



第157図 SK1出土遺物

SK8 (第158・159図)

位置 K-3グリッド、調査区北側の下部谷壁緩斜面の表土直下に検出された(第158図)。北西側22mにSX22が存在する。確認面上の標高は27.6mを測る。

形状 平面形は不整形な長楕円形を呈する。長軸方位は等高線に対し直交する。断面形は逆台形を呈し、底面は平坦である。規模は上面で長径118cm、短径62cm、確認面からの深さは12cmと非常に浅い。南西壁寄りの底面上15cmに須恵器坏蓋と身が伏せられた状態で並んで出土した。位置的にみて、須恵器枕と考えられる。上面が削平を受けているが、形状や遺物の出土状況から、本址は土壙墓と考えられる。須恵器枕の位置から想定される頭方位はS-60°-Wである。

埋土 須恵器枕の出土状況から暗茶褐色土(①層)は掘り方の土と考えられ、主体部埋土は削平により失われている。

遺物 本址からは枕に使用されたとみられる須恵器坏2点が出土している(第159図)。387は坏蓋、天井部との境の稜は退化気味で、口縁内面に段を持つ。388は坏身、立ち上がり部は内傾する。

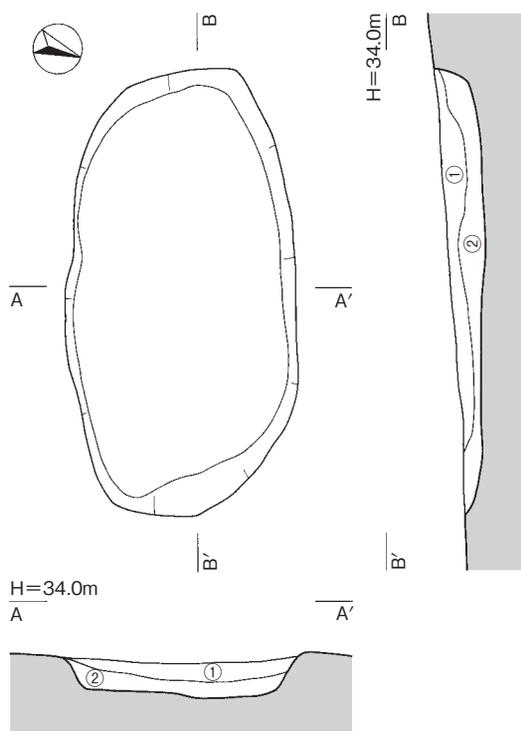
時期 出土遺物から、本址の時期は古墳時代後期中葉頃と考えられる。

SK19 (第160・161図)

位置 H-3グリッド、南西—北東方向に張り出した支尾根頂部斜面に検出された(第160図)。SI8を切って掘り込まれる。確認面上の標高は33.7mを測る。

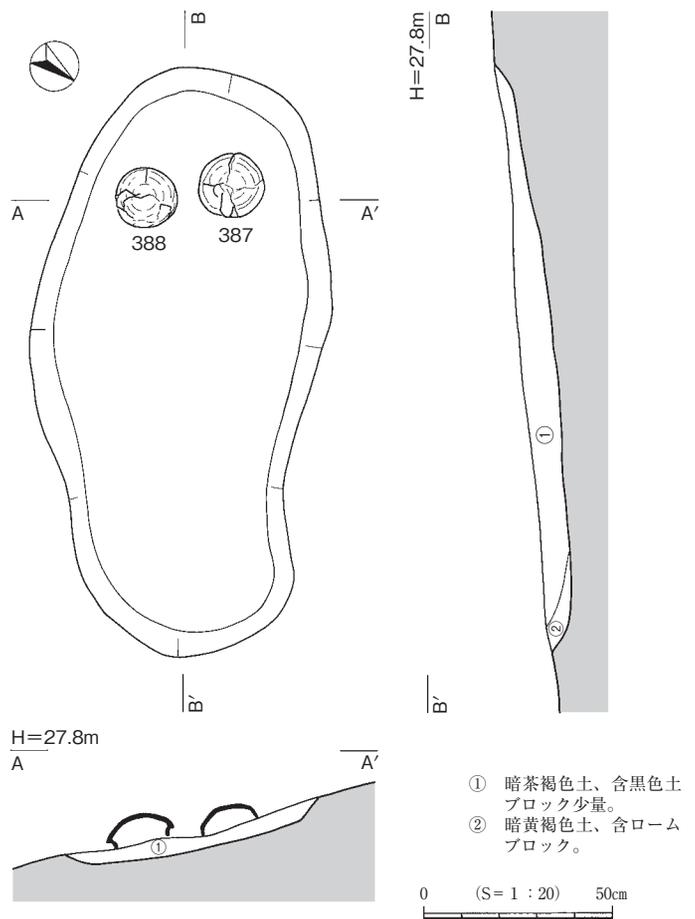
形状 平面形は不整形な長楕円形を呈する。長軸方位はN-68°-Eを指す。断面形は逆台形を呈し、底面は平坦である。規模は上面で長径118cm、短径64cm、確認面からの深さは上面がかなり近現代の削平を受けており、遺存状態の良い所でも12cmと非常に浅い。形状から、本址は土壙墓と考えられる。

埋土 灰褐色土を主体とするが、主体部は削平



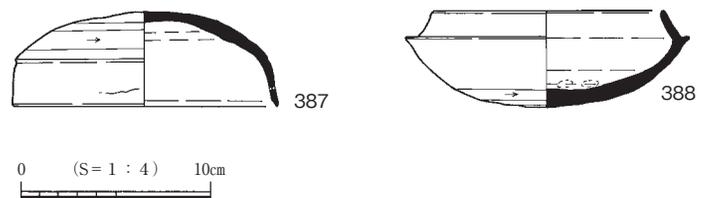
- ① 淡黒灰褐色土。
- ② 暗褐色土、含灰褐色土。

第160図 SK19



- ① 暗茶褐色土、含黒色土ブロック少量。
- ② 暗黄褐色土、含ロームブロック。

第158図 SK8

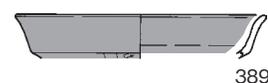


第159図 SK8出土遺物

により失われている。

遺物 本址出土の遺物のうち僅かに1点を図示し得たが、埋土中一括の出土遺物のため混じり込みの可能性も考えられる(第161図)。389は土師器の坏、赤彩が施される。

時期 出土遺物からの時期比定が困難であるが形状や埋土の状況から、本址の時期は古墳時代後期以降と考えられる。



第161図 SK19出土遺物



第162図 古代遺構全体図

第4節 古代

古代の遺構の概要（第162図）

当該期の遺構は掘立柱建物6棟（SB2～4・6・7・10）、段状遺構13基（SS1～4・8・11・12・20・26～28・30・32）、土壙墓2基（SX1・SK18）、溝状遺構2条（SD5・7）が丘陵部に検出されている（第162図）。分布傾向を見ると、当該期の遺構は調査区北側谷頭部と中央の尾根斜面から谷頭凹地にかけて、南側尾根斜面域の三か所に集中している。このうち、南側斜面域の遺構は福成早里遺跡の遺構に続く。なお、古代末になると、祭祀的な色彩の強い溝状遺構1条（SD7）と土坑1基（SK18）が中央尾根部に掘り込まれる。

出土遺物については、須恵器、土師器坏主体で、特に、固定式竈を持つSS26から移動式竈の破片が多量出土している。周辺ではミニチュア土器が多数出土している。以下、個別に詳細を述べることとする。

1) 掘立柱建物

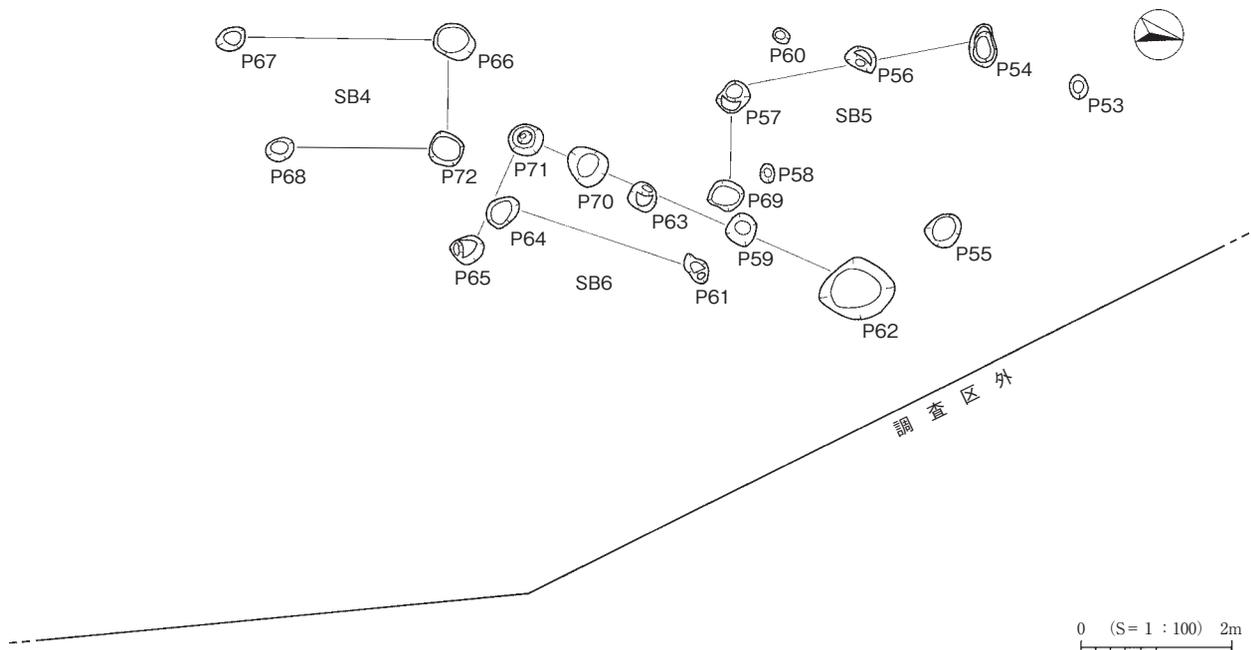
SB4・5・6

GH-6グリッド、中央の南西—北東方向の谷頭凹地の標高29.5m～29.0mの緩斜面において地山上に掘立柱建物跡3棟（SB4・5・6）が検出された（第162図）。主軸方向は一定ではないが、埋土の状況からいずれも同時代の建物と考えられる。以下、遺構ごとに述べることとする。

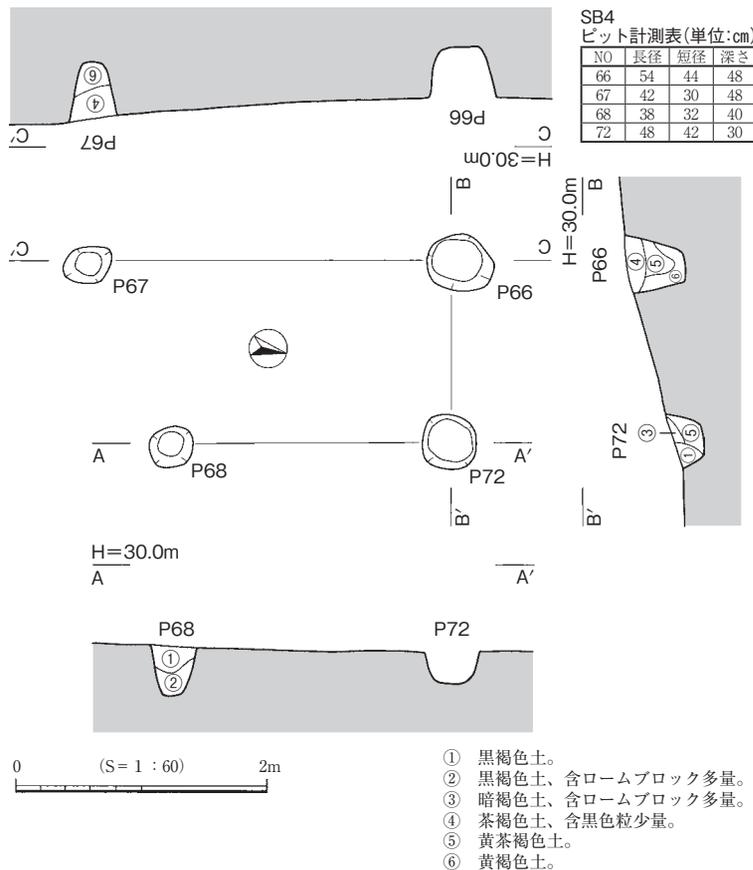
SB4（第163～165図）

位置 G-6グリッドより検出された掘立柱建物である（第163図）。北側にSB5が隣接する。確認面上の標高は29.4mを測る。

形状 桁行1間、梁行1間の側柱の掘立柱建物で、主軸方位はN-14°-Wである（第164図）。長軸桁行2.2～3.0m、短軸梁行1.5m、床面積は3.3㎡を測る。桁行の柱間寸法は南東側が2.2m、北西側が3.0m



第163図 SB4～6

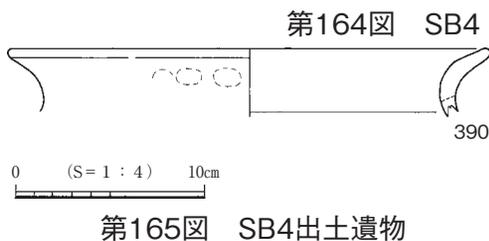


とややばらつきがある。梁行の柱間寸法は最大3.0m、桁行の柱間寸法は1.5mと桁行の方が広い。南側の桁行柱通りは斜めである。柱掘り方は直径38～58cmの円形を呈する。柱痕跡は確認されなかった。各柱穴の詳細については計測表を参照されたい。

埋土 黒褐色土及び暗褐色土を主体とする。

遺物 本址出土の遺物のうち僅かに1点が図示し得た(第165図)。390はピット66埋土中より出土の土師器甕である。頸部は緩やかに湾曲し、口縁部は外反する。

時期 出土遺物が少なく時期比定が困難であるが、埋土や形状から、本址の時期はSB5と同時期位の8世紀末～9世紀前半頃と考えられる。



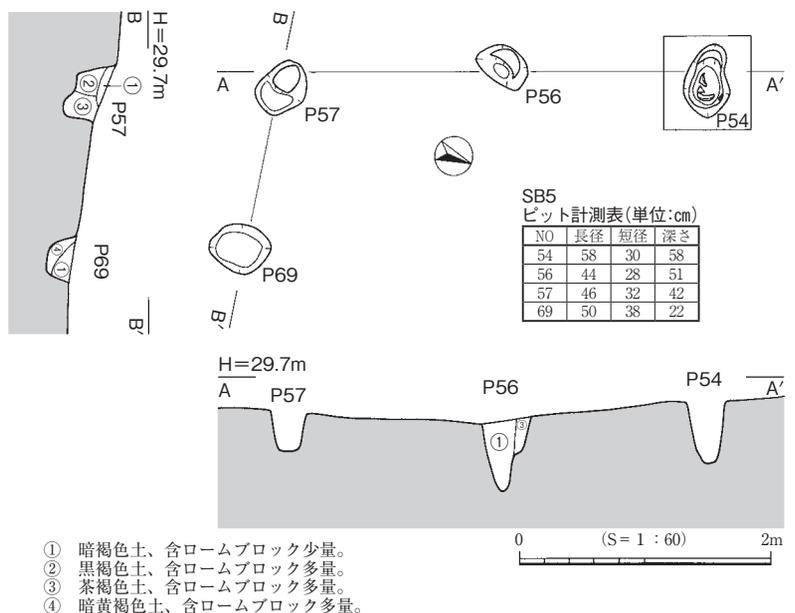
第165図 SB4出土遺物

SB5 (第163・166～168図)

位置 H-6グリッドより検出された掘立柱建物である(第163図)。南側にSB6が隣接する。確認面上の標高は29.5～29.1mを測る。

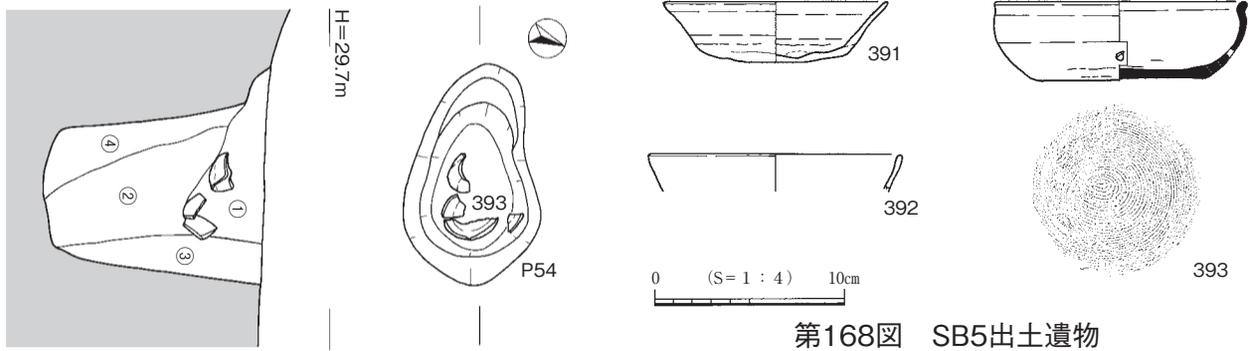
形状 桁行2間、梁行1間の側柱の掘立柱建物で主軸方位はN-23°-Wである(第166図)。

長軸桁行3.4m、短軸梁行1.4m、床面積は4.8㎡を測る。桁行の柱間寸法は1.7m、梁行の柱間寸法は1.5mと桁行の方が広い。桁行柱通りは一直線である。柱掘り方は直径41～60cmの円形を呈する。柱痕跡は確認されなかった。本址北



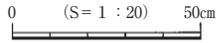
- ① 暗褐色土、含ロームブロック少量。
- ② 黒褐色土、含ロームブロック多量。
- ③ 茶褐色土、含ロームブロック多量。
- ④ 暗黄褐色土、含ロームブロック多量。

第166図 SB5



第168図 SB5出土遺物

- ① 黒褐色土、含ロームブロック少量。
- ② 暗褐色土、含黒褐色土多量。
- ③ 茶褐色土、含ロームブロック多量。
- ④ 茶褐色土。



第167図 SB5 ピット54

東側は後世の削平が地山まで及んでおり、北東側の柱穴については確認することが出来なかった。本址のピット54の覆土中層から須恵器坏1個体(393)と土師器坏が出土した(第167図)。埋土の観察から、柱抜き取り後に埋納されたものようである。各柱穴の詳細については計測表を参照されたい。

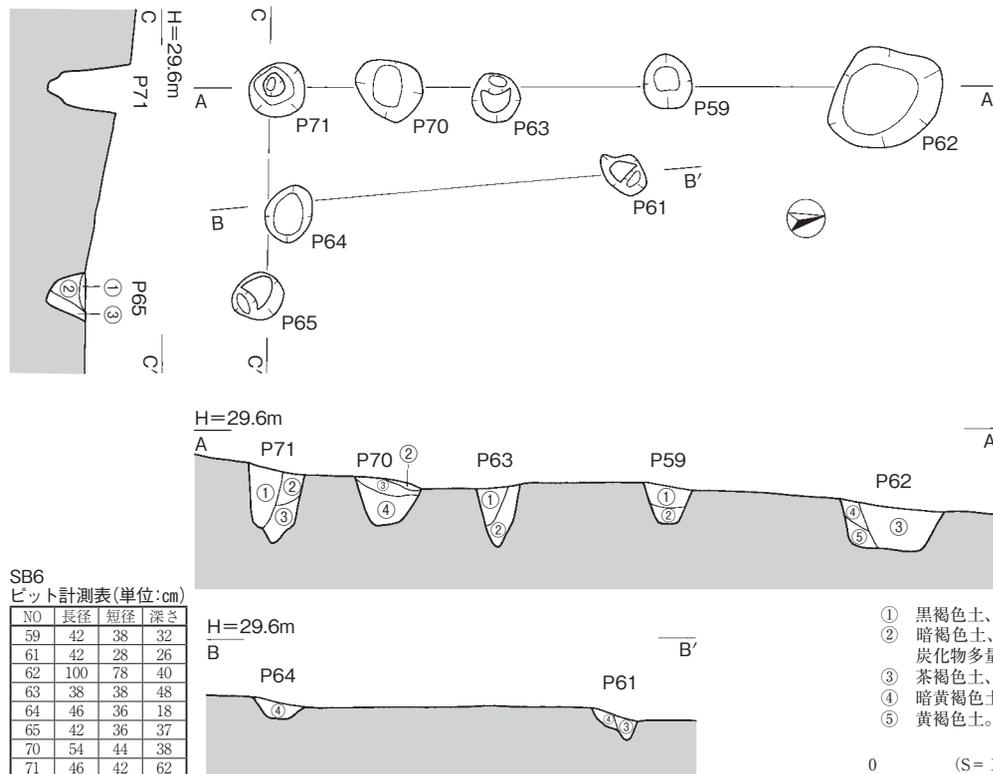
埋土 黒褐色土及び暗褐色土を主体とする。

遺物 出土遺物のうちピット54出土の3点が図示し得た(第168図)。391は土師器坏、体部は直線的に外傾し、底部はヘラ切り後指頭押圧により凹凸がある。392も土師器坏、微細片であるが391と同形と考えられる。393は外底面回転糸切りの須恵器坏、体部は丸味を持ち、口縁端部は強いナデにより外反する。体部下位に焼成前穿孔が施される。

時期 出土遺物から、本址の時期は8世紀末～9世紀前半頃と考えられる。

SB6 (第163・169図)

位置 H-6グリッドより検出された掘立柱建物である(第163図)。南側にSB4が、北側にSB5が隣接する。確認面上の標高は29.4～29.0mを測る。



第169図 SB6

形状 桁行4間、梁行1間の側柱の掘立柱建物で、主軸方位はN-10°-Eである（第169図）。長軸桁行5.0m、短軸梁行1.7m、床面積は8.5㎡を測る。桁行の柱間寸法は1.0～1.8mとややばらつきがある。梁行の柱間寸法は1.7mである。桁行柱通りは一直線である。P62に2回以上の建て替えが認められる。柱掘り方は直径38～80cmの円形を呈する。柱痕跡は確認されなかった。本址北東側は後世の削平が地山まで及んでおり、北東側の柱穴については確認することが出来なかった。各柱穴の詳細については計測表を参照されたい。

埋土 黒褐色土及び暗褐色土を主体とする。

遺物 本址からは遺物は出土していない。

時期 出土遺物からの時期比定が困難であるが、埋土や形状から、本址の時期はSB5と同時期の8世紀末～9世紀前半頃と考えられる。

2) 段状遺構

SS1～4（第162図）

位置 F・G-5～7グリッド中央の、南西―北東方向の谷頭凹地の標高32.3m～28.5mの斜面において斜面をL字状にカットし、平坦面を作成した段状遺構4基が検出された（第162図）。平面形はいずれも長方形を呈し、比高差3.8mの斜面に階段状に構築されている。以下遺構ごとに個別に述べることをする。

SS1（第170～171図）

位置 F・G-5～7グリッドの一群の内、最上段のF-5・6グリッドに位置する（第170図）。北東1.5mにSS2が位置する。確認面上の標高は32.3mを測る。

形状 斜面の高位側の地山を削り、平坦面を形成している。北壁側は削平により失われているが、平面形は長方形を呈すると推測される。斜面下方は削平により失われている。傾斜面の等高線に直交する方向を主軸と考えた場合の主軸方位はN-68°-Eである。規模は南北3.2m、東西8.2m、確認面からの深さは38cmを測る。壁はやや開きながら立ち上がり、残存範囲での床面積は13.2㎡を測る。床面はほぼ平坦で、面上は硬化している。高位側の壁面直下南西寄りに長さ120cm、幅18cm、深さ5cmの溝が検出された。位置的に見て壁溝と考えられる。

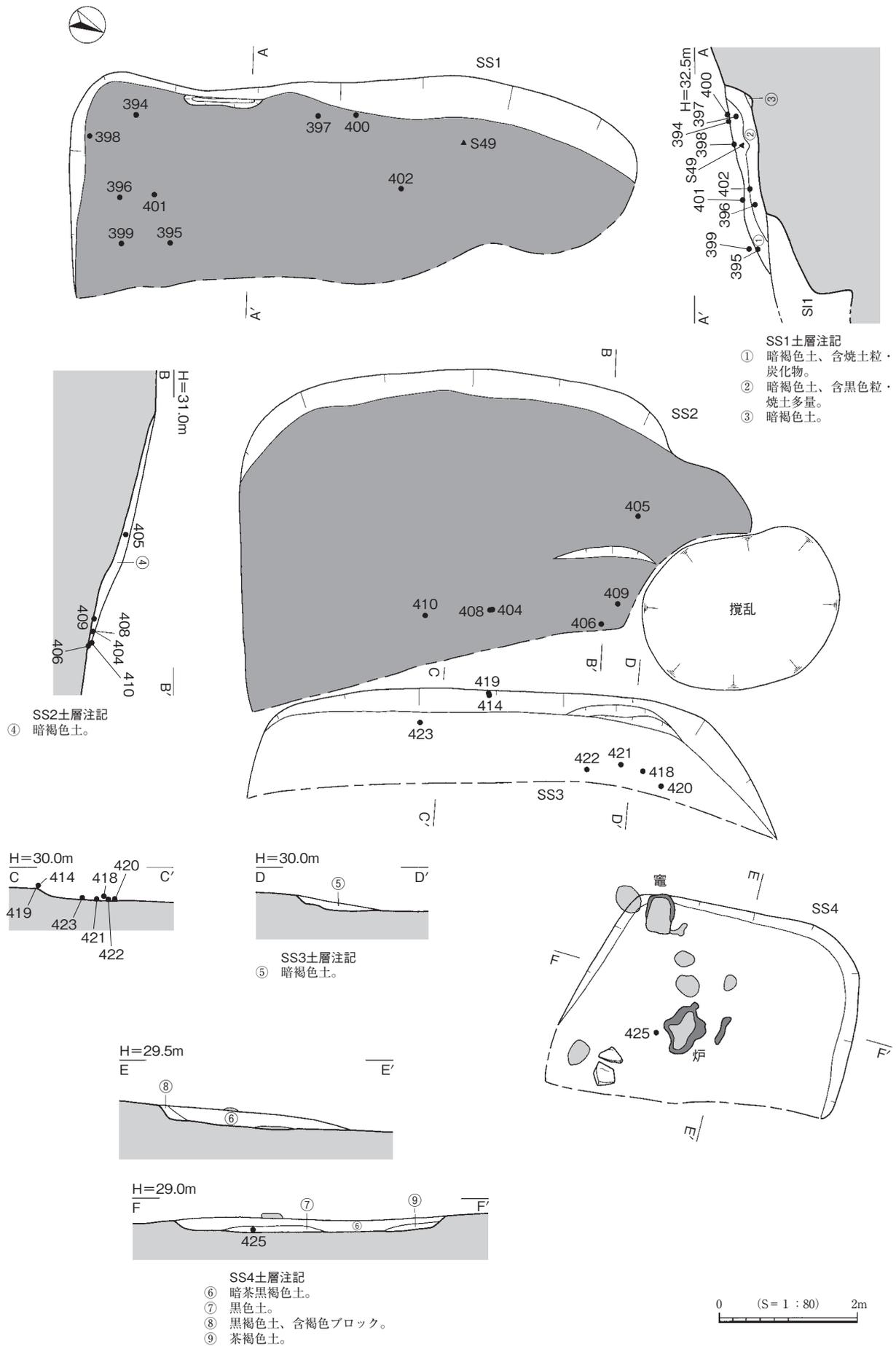
埋土 暗褐色土を主体とし、下層より順次堆積していることから、自然埋没の様相を呈する。また上層に焼土が含まれるが、これは遺構廃絶後の投げ込みによるものと考えられる。

遺物 出土遺物のうち10点が図示し得た（第171図）。394～397は土師器単口縁の甕、頸部の屈曲は緩やかで、口縁は外反する。

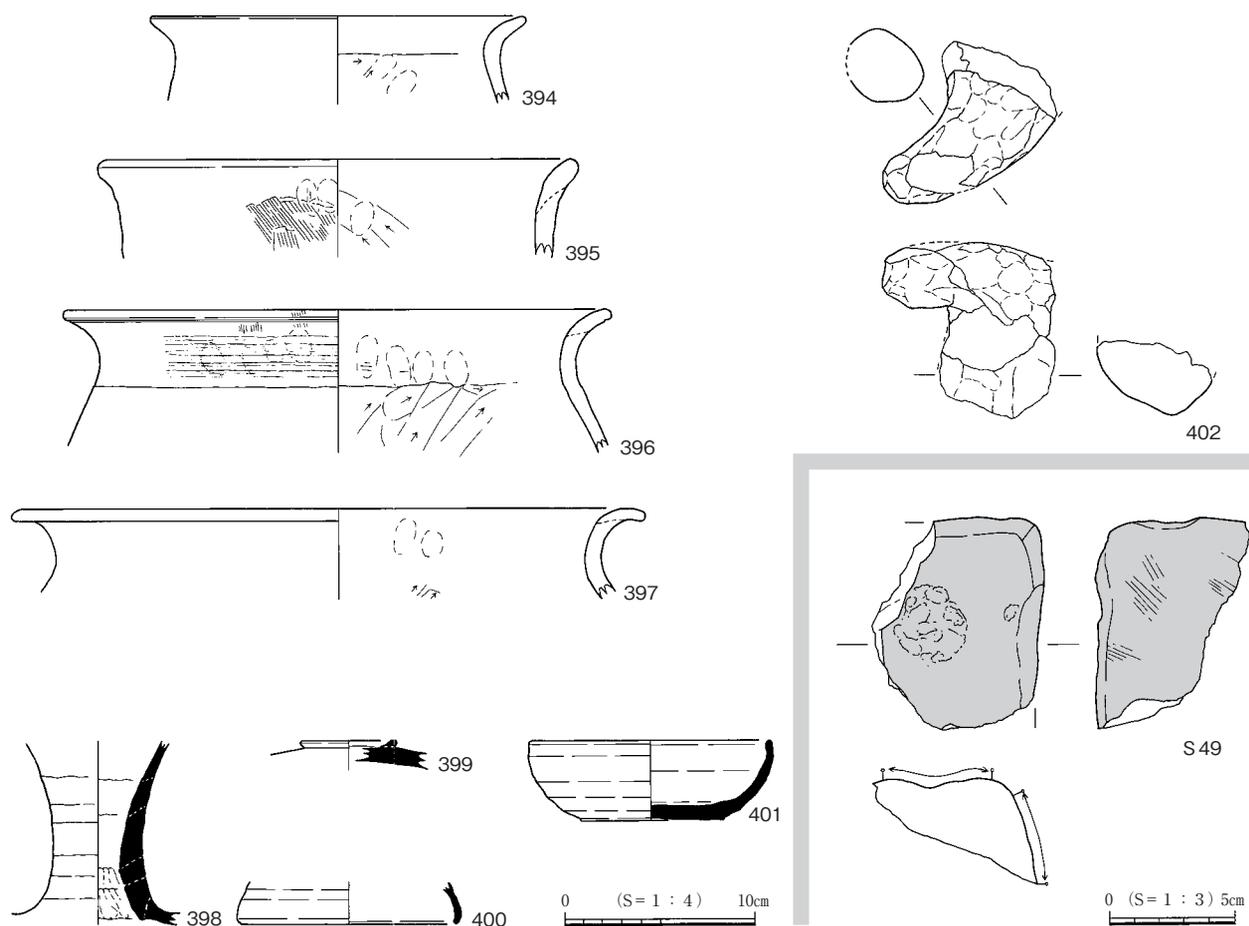
398は須恵器の長頸壺、頸部は緩やかに外反し、体部との接合部付近の内面には粘土積み上げ痕が顕著に残る。399～400は須恵器坏蓋、399は輪状のつまみが付く。401は須恵器坏、底部外面は回転糸切り後雑にナデている。体部は丸味を持ち、口縁部は内湾気味に直立する。

402は土製支脚である。S49は角礫凝灰岩製の砥石、荒砥で上面及び右側面を使用、上面中央には敲打痕も認められる。

時期 出土遺物は本址埋土上層のものが多く時期比定が困難であるが、本址の時期は8世紀末～9世紀前半以降の段状遺構と考えられる。



第170図 SS1~4



第171図 SS1出土遺物

SS2 (第170・172図)

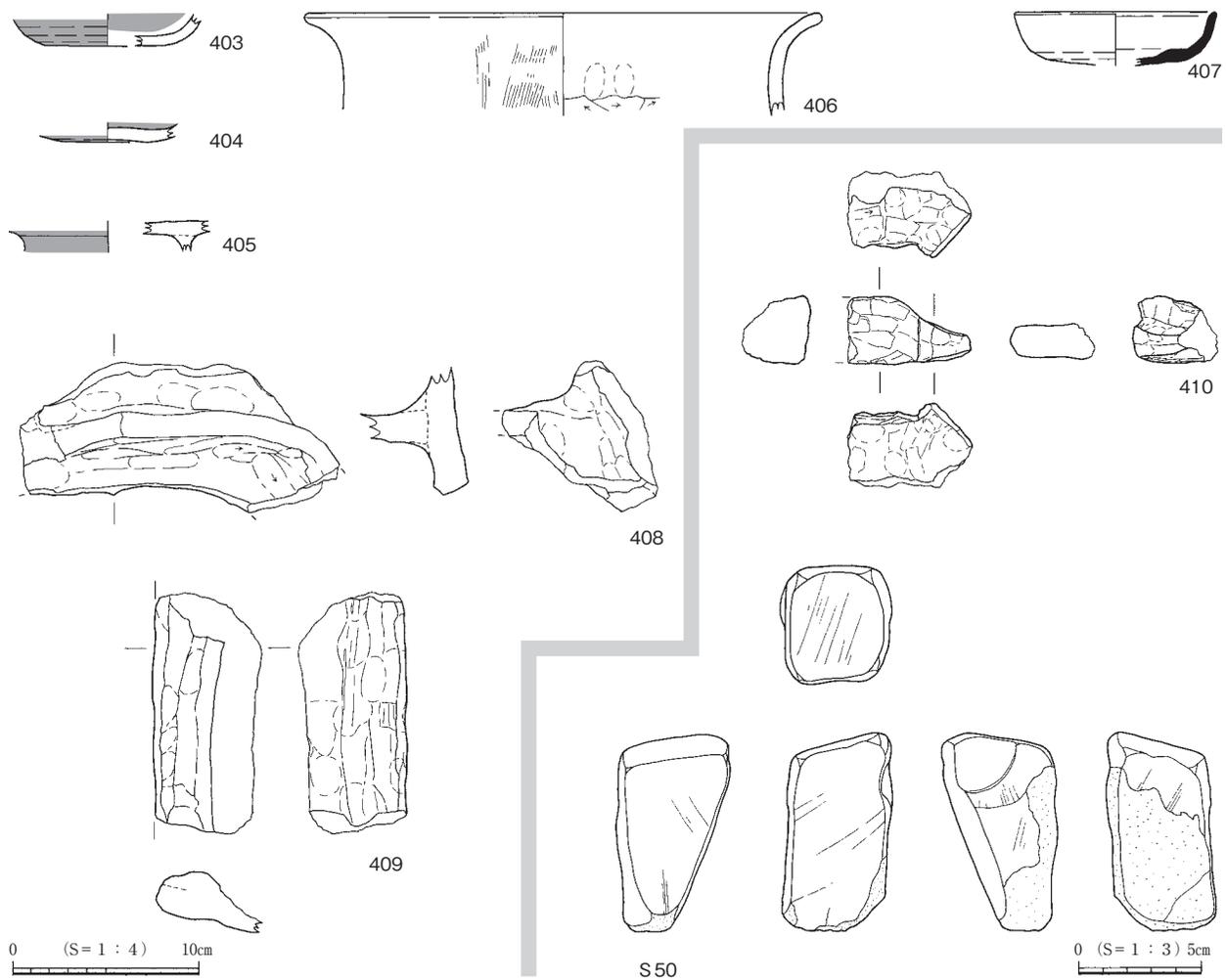
位置 F・G-5~7グリッドの一群の内、中段のF~G-6グリッドに位置する (第170図)。南西1.5mにSS1が、北西に隣接してSS3が構築される。確認面上の標高は30.8mを測る。

形状 斜面の高位側の地山を削り、平坦面を形成している。南北壁は削平により、北側は一部攪乱により失われているが、平面形はやや円弧状の長方形を呈すると推測される。斜面下方は削平により失われている。傾斜面の等高線に直交する方向を主軸と考えた場合の主軸方位はN-64°-Eである。規模は南北4.3m、東西7.4m、確認面からの深さは18cmを測る。壁は開きながら立ち上がり、残存範囲での床面積は15.9㎡を測る。床面はやや傾斜しながらもほぼ平坦で、面上は硬化している。また、北壁寄りの床面上に幅1.6m、比高差8cm程の段差が認められた。

埋土 上面の削平により暗褐色土の単層のみである。

遺物 出土遺物のうち9点が図示し得た (第172図)。403~405は赤彩の土師器坏、405は高台が付く。406は土師器の単口縁甕、外反する口縁に最大径を持つ。407は須恵器の坏、底部外面はヘラ切り、体部は丸味を持ち、口縁端部は僅かに外反する。408~409は移動式竈の破片である。410は土製品、船の舳先の可能性がある。S50は珪岩製の砥石、仕上砥で長方形の素材の全体を使用しているが右側面と裏面には素材面が残る。

時期 出土遺物と形状から、本址の時期は8世紀末~9世紀前半頃と考えられる。



第172図 SS2出土遺物

SS3 (第170・173図)

位置 F・G-5～7グリッドの一群の内、下段のF・G-6グリッドに位置する（第170図）。南西に隣接してSS2が、北東1.2mにSS4が構築される。確認面上の標高は29.6mを測る。

形状 斜面の高位側の地山を削り、平坦面を形成している。近現代の削平が及び遺存状態は悪いが、平面形はやや円弧状の長方形を呈すると推測される。斜面下方は削平により失われている。傾斜面の等高線に直交する方向を主軸と考えた場合の主軸方位はN-68°-Eである。規模は南北1.4m、東西7.8m、確認面からの深さは10cmを測る。壁は開きながら立ち上がり、北壁側で一段の段差を持つ。床面は平坦で、残存範囲での床面積は15.9㎡を測る。

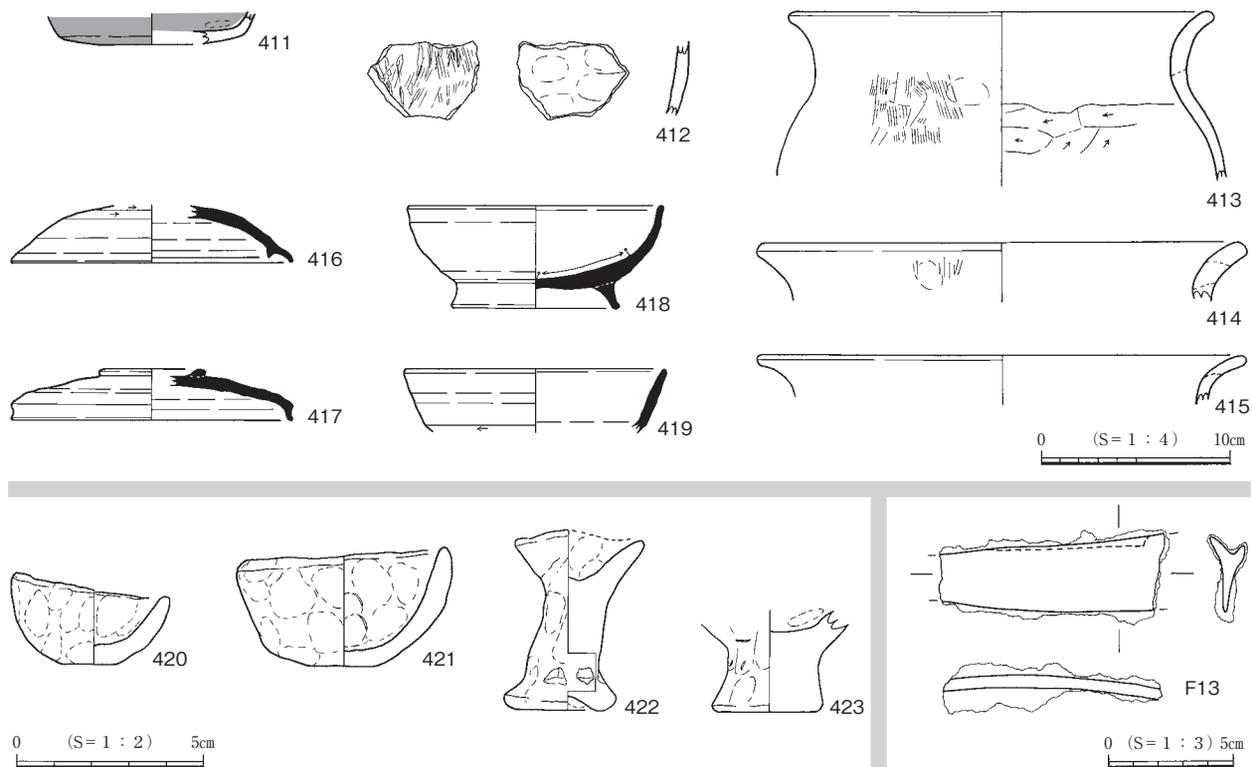
埋土 上面の削平により暗褐色土の単層のみである。

遺物 本址からの出土遺物のうち、14点が図示し得た（第173図）。411は土師器の赤彩の坏、412は土師器の甕、外面にタタキの痕跡が見られる。413～415も土師器の甕、頸部の屈曲は緩やかである。

416・417は須恵器の坏蓋、416はかえりが付くタイプ、417は天井部に輪状のつまみが付く。418・419は須恵器坏、418は丸味をもった体部にハの字状に開く高台が付く。

また、本址の床面直上からはミニチュアの土製品が4点程出土している。420・421は坏、大きさは異なるが、近似した形状を呈する。422は高坏、やや歪であるが柱状の脚部を持つ。423も高坏の脚部である。F13は鉄製品、鋤先と考えられる。

時期 出土遺物と形状から、本址の時期は7世紀末から8世紀初頭頃と考えられる。



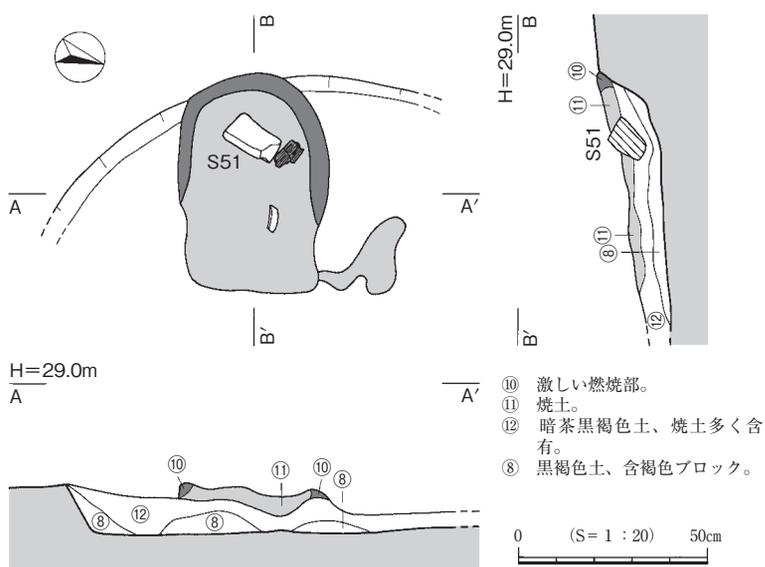
第173図 SS3出土遺物

SS4 (第170・174~176図)

位置 F・G-5~7グリッドの一群の内、最下段のG-6・7グリッドに位置する (第170図)。南西1.2mにSS3が構築される。確認面上の標高は28.5mを測る。

形状 斜面の高位側の地山をコの字状に削り、平坦面を形成している。平面形は長方形を呈する。傾斜面の等高線に直交する方向を主軸と考えた場合の主軸方位はN-78°-Eである。規模は南北3.0m、東西4.2m、確認面からの深さは壁際で20cmを測る。壁はやや開きながら立ち上がる。床面は平坦で、残存範囲での床面積は12.6㎡を測る。本址床面中央部付近には、炉1基と南西壁隅に固定式の竈1基が確認された。また南東寄りの床面直上に花崗岩製の切石2個が上面を水平に据えられていた。2基の花崗岩は直径18cm、厚さ10cm程の大きさで、被熱の痕跡は認められない。ただし、周辺には焼土が分布している。

竈は、南西隅の埋土の上層に構築されていた (第174図)。このことから床面上に黒褐色土 (⑧層) がある程度堆積した段階で、構築されたものと考えられる。規模は長さ58cm、幅40cmを測り、主軸方位はN-76°-Eを指し、段状遺構の主軸方向とはほぼ並行している。燃烧部は、SS4の埋土である暗茶黒褐色土 (⑫層…SS4の埋土の⑥層に相当する) を構造材とし、馬蹄形に幅10cm程の壁体を設けている。この内側が燃烧部で、全体的に良好に被熱し、黒褐色を呈し非常に硬化している。さらに燃烧部の中央付近



第174図 SS4 竈

には、長さ13cm、厚さ7cmの凝灰岩製の砥石（S51）が出土した。砥石に被熱の痕跡は認められないことから、竈廃絶時の儀礼に伴って置かれたものと考えられる。この他土師器の甕胴部破片が出土した。竈に使用されていたものであろうか。

炉跡は、平面形が不整形な楕円形を呈する。（第175図）。燃烧部は浅く凹んでおり、規模は長径78cm、短径62cmを測る。面上は被熱により非常に硬化しており、中心部はかなり長時間にわたり高温を受け、黒赤色に変色している。掘り方の規模は長径152cm、短径114cm、深さ10cmを測り、断面は浅いU字形を呈する。掘り方埋土には炭化物が含まれる。付近に須恵器蓋1点出土している。

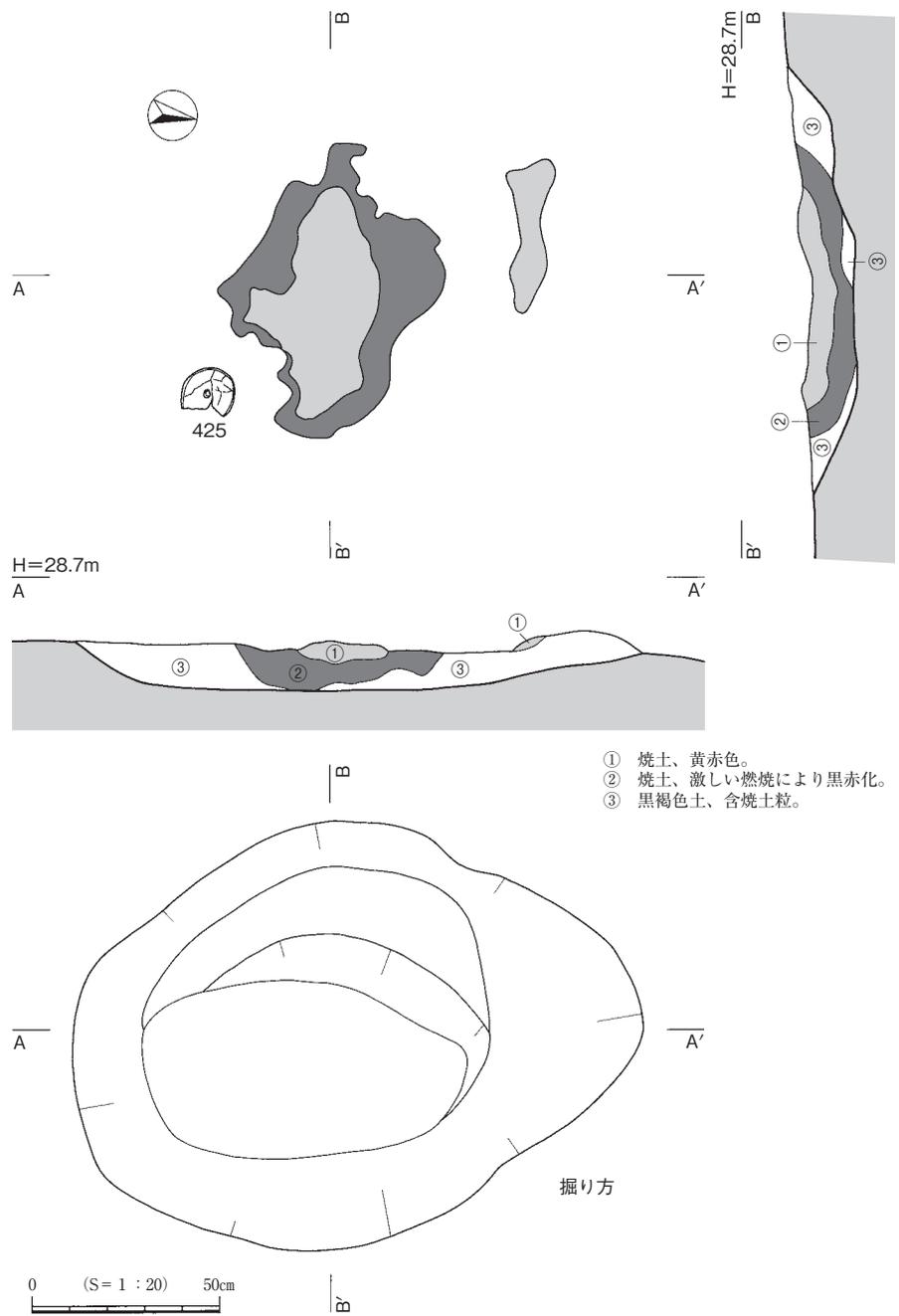
本址は、構築当初は炉、埋没過程では竈を使用している状況が看取できた。

特に炉の燃烧状況や床面直上の切石等の状況から、鍛冶工房等の可能性を考えたが、鍛冶関連の遺物は全く出土していない。以上のことから、埋没過程においても、段階的に燃烧施設を構築する竈屋的な施設の存在が推測できよう。

埋土 暗茶黒褐色土を主体とし、全体的に固く締まっている。また、床面直上から埋土にかけては焼土が集中して堆積している。特に、竈跡と炉跡の周辺では燃烧部が破壊されたような大きな塊が分布している。この焼土は埋土上面においても検出されている。

遺物 出土遺物のうち3点が図示し得た（第176図）。424は土師器の甕胴部破片、外面にタタキ目を持つ。425は炉付近の床面直上から出土した須恵器坏蓋、口縁内面に内傾するかえりと、天井部に宝珠形のつまみを持つ。

S51は花崗岩製の砥石、中砥で長方形の切石の表裏面及び右側面を使用している。



第175図 SS4 炉



第176図 SS4出土遺物

時期・性格 出土遺物から、本址の時期は7世紀後半頃から使用されていた、竈屋的な性格を持つ段状遺構と考えられる

SS8 (SB2) (第177図)

位置 A・B-7・8グリッド、南西―北東方向に張り出した支尾根頂部斜面に検出された段状遺構である(第162図)。南側は調査区外に広がる。北側9.0mにSS10が存在する。確認面上の標高は40.5mを測る。

形状 斜面の高位側の岩盤をL字状に削り、平坦面を形成している(第177図)。検出範囲内での平面形は長方形を呈する。傾斜面の等高線に直交する方向を主軸と考えた場合の主軸方位はN-90°-Eで、尾根主軸線に直交している。規模は長軸9.0m以上、短軸2.5m、確認面からの深さは壁際で50cmを測る。壁はやや開きながら立ち上がり、検出範囲での床面積は8.2㎡を測る。床面はほぼ平坦で、斜面下方側は一部暗褐色土(⑥層)を貼って床面を構築している。面上は硬化している。

本址に伴うピットはP1~11の11基である。いずれも平面形は円形を呈し、段差を持つものもある。位置的にみてP1~5が西側の柱穴列、P6~9が東側の柱穴列と考えられる。東側の柱穴列についてはやや平面的にばらつきがあるが、急斜面という地勢的制約を考慮に入れば、本址は4×1間の横長な掘立柱建物(SB2)であると考えられる。

SB2は桁行4間以上、梁行1間の側柱の掘立柱建物で、主軸方位はN-2°-Wである。長軸桁行6.5m以上、短軸梁行1.5m、床面積は8.5㎡を測る。桁行の柱間寸法は1.3~2.1m、梁行の柱間寸法は1.0~1.5mとややばらつきがある。桁行柱通りは一直線である。東側の桁行柱通はばらつきがあるが、急斜面という地勢的制約もあったのかもしれない。柱掘り方は直径30~50cmの円形を呈する。柱痕跡は確認されなかった。深さについては、東側の桁行柱穴はいずれも深さ80~100cmと非常に深い、西側の桁行柱穴は20~40cmの比較的浅いものである。詳細はピット計測表を参照されたい。

高位側の壁面直下に幅30~50cm、深さ10cmの溝が検出された。位置的に考えて掘立柱建物に伴う雨落ちなど、排水の用途を持つ壁溝であると考えられよう。溝底面は平坦で、壁溝内ピット等は検出さ

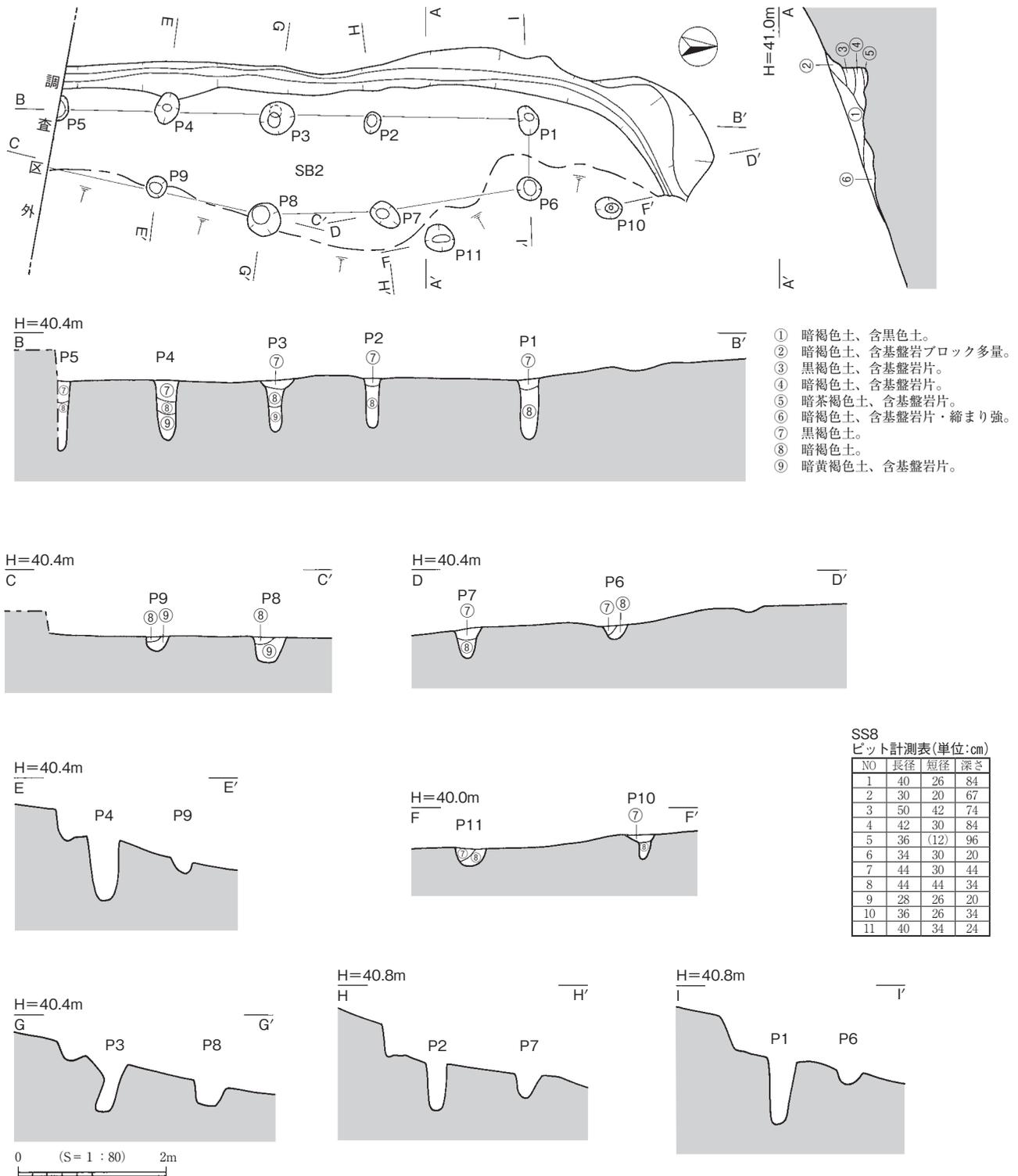
れなかった。

なお、本址については、位置と形状から鑑みて隣接する福成早里遺跡の段状遺構SS1と一連の段状遺構である可能性が高い（第237図）。

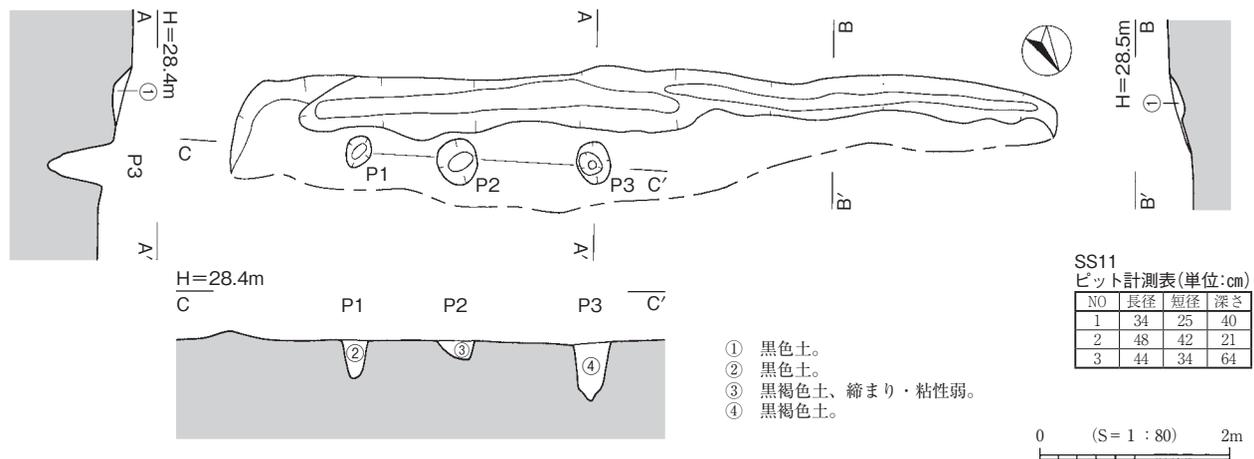
埋土 暗褐色土を主体とする。下層より順次堆積していることから、自然埋没の様相を呈する。また、斜面下方部分には暗褐色土（⑥層）を施し、平坦面を拡張した痕跡が認められる。

遺物 本址から遺物は出土しなかった。

時期 出土遺物からの時期比定が困難であるが、隣接する福成早里遺跡のSS1と関連性の高い遺構であることを勘案すると、本址の時期は奈良時代頃と考えられる。



第177図 SS8



第178図 SS11

SS11 (第178図)

位置 E-8・9グリッド、調査区南東側の下部谷壁斜面に単独で位置する（第162図）。確認面上の標高は28.2mを測り、調査区南東側では最も低位の段状遺構である。

形状 斜面の高位側の地山を削り、平坦面を形成している（第178図）。本址は床面直上まで近現代の削平が及び、平面プランのみの検出であった。平面形は長方形を呈すると推測される。傾斜面の等高線に直交する方向を主軸と考えた場合の主軸方位はN-32°-Eで、長軸方向は等高線にほぼ沿っている。規模は長軸8.8m、短軸1.4mを測る。壁はやや開きながら立ち上がり、検出範囲での床面積は12.3㎡を測る。床面はほぼ平坦でやや硬化している。高位側の壁面直下に長さ810cm、幅40～70cm、深さ10cmの溝が検出された。位置と形状から壁溝と考えられる。この壁溝は中央部付近で底面に鞍状の段を持つ。この部分を境に溝の幅が変わることから、2本の壁溝が重複している可能性もある。

本址に伴うピットはP1～3の3基である。位置や形状から考えて、柱穴列の可能性が考えられる。平面形は円形を呈し、柱穴間距離は1.0～1.4mとばらつきがある。この柱穴列と壁溝はほぼ平行している。詳細はピット計測表を参照されたい。

埋土 床面付近まで削平が及んでおり、埋土は壁溝内の黒色土のみである。

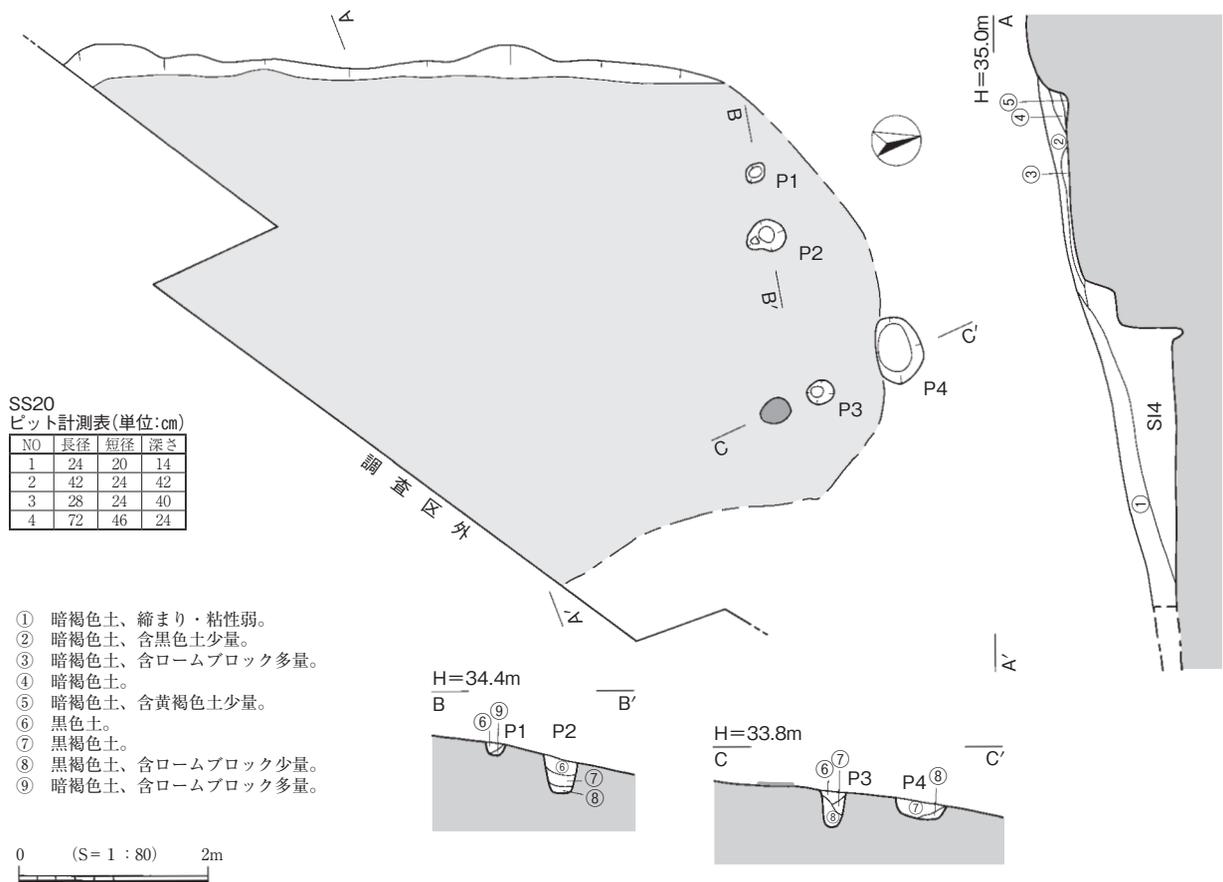
遺物 本址から遺物は出土しなかった。

時期 出土遺物からの時期比定が困難であるが、形状から本址の時期は古代以降と考えられる。

SS20 (第179図)

位置 B-9グリッド、調査区南側の上部谷壁の急斜面に位置する段状遺構である（第162図）。南側は調査区外に広がる。SI4上層に構築され、2号墳の墳丘を削平して掘り込まれている。北側3.0mにSS19が存在する。確認面上の標高は34.6mを測る。

形状 斜面の高位側の地山を削り、下位側はSI4の埋土上層に平坦面を形成している（第179図）。検出範囲内での平面形はやや歪な長方形を呈する。斜面下方は削平により失われている。傾斜面の等高線に直交する方向を主軸と考えた場合の主軸方位はN-76°-Wである。規模は長軸8.0m以上、短軸5.8m、確認面からの深さは壁際で18cmを測る。壁はやや開きながら立ち上がり、検出範囲での床面積は46.4㎡を測る。床面はほぼ平坦で、全体に貼床が検出された。面上は全体的によく使用されており、北東側には硬化面も認められた。



第179図 SS20

本址に伴うピットはP1～4の4基である。平面形は円形を呈し、段差を持つものもある。位置や形状から考えて、P1～3は北側の柱穴列の可能性が考えられる。柱穴間距離は0.8～1.8mとばらつきがある。詳細はピット計測表を参照されたい。

埋土 暗褐色土を主体とする。下層より順次堆積していることから、自然埋没の様相を呈する。また、斜面下方の埋土である①層は締まりも弱く表土に近い土質であり、後世の堆積と考えられる。この部分は床面付近まで削平が及んでいたと考えられる。

遺物 本址から遺物は出土していない。

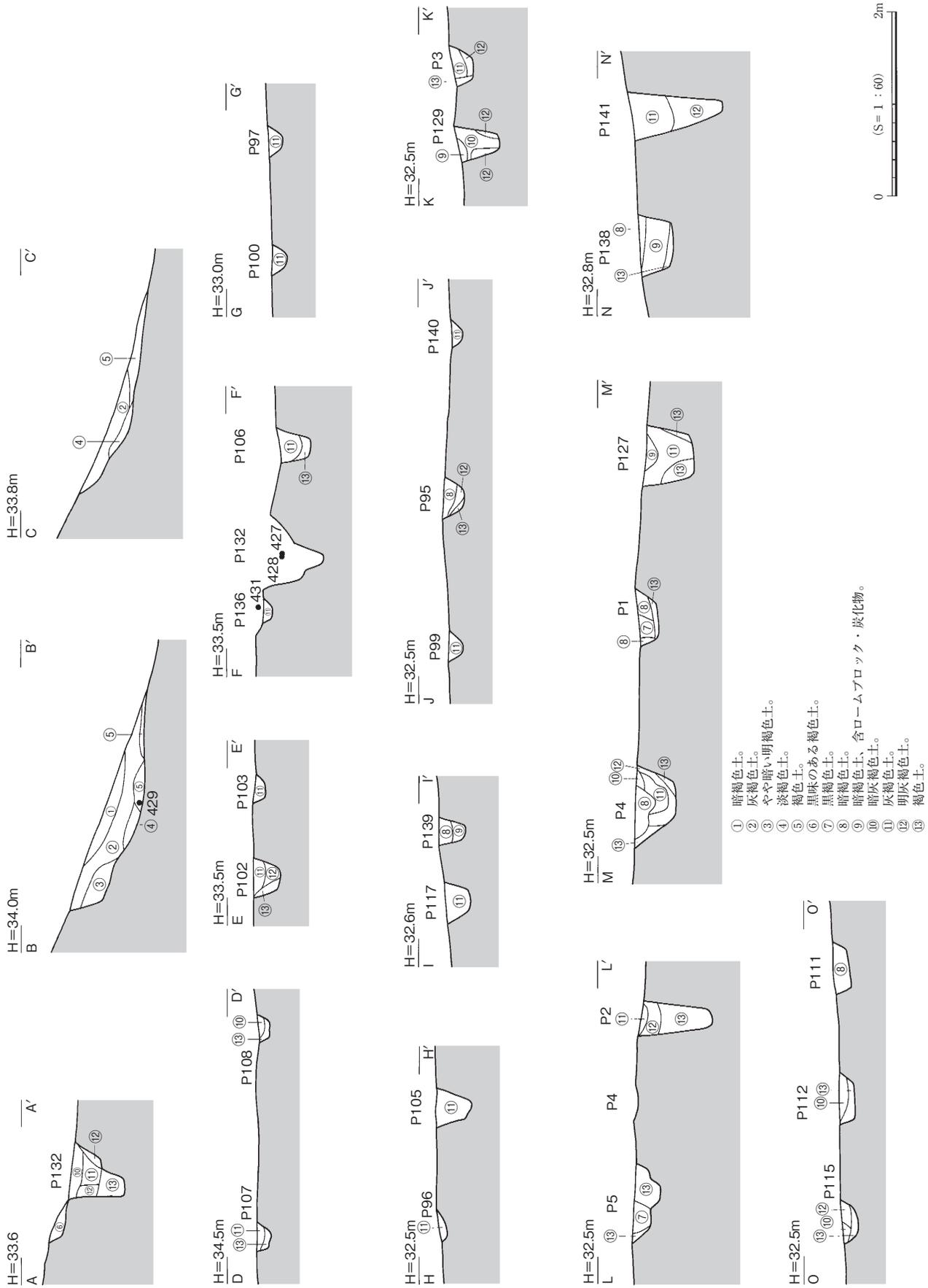
時期 出土遺物からの時期比定が困難であるが、隣接する福成早里遺跡の段状遺構と関連性の高い遺構であることを勘案すると、本址は奈良時代頃の段状遺構と考えられる。

SS23・SB7・SD5

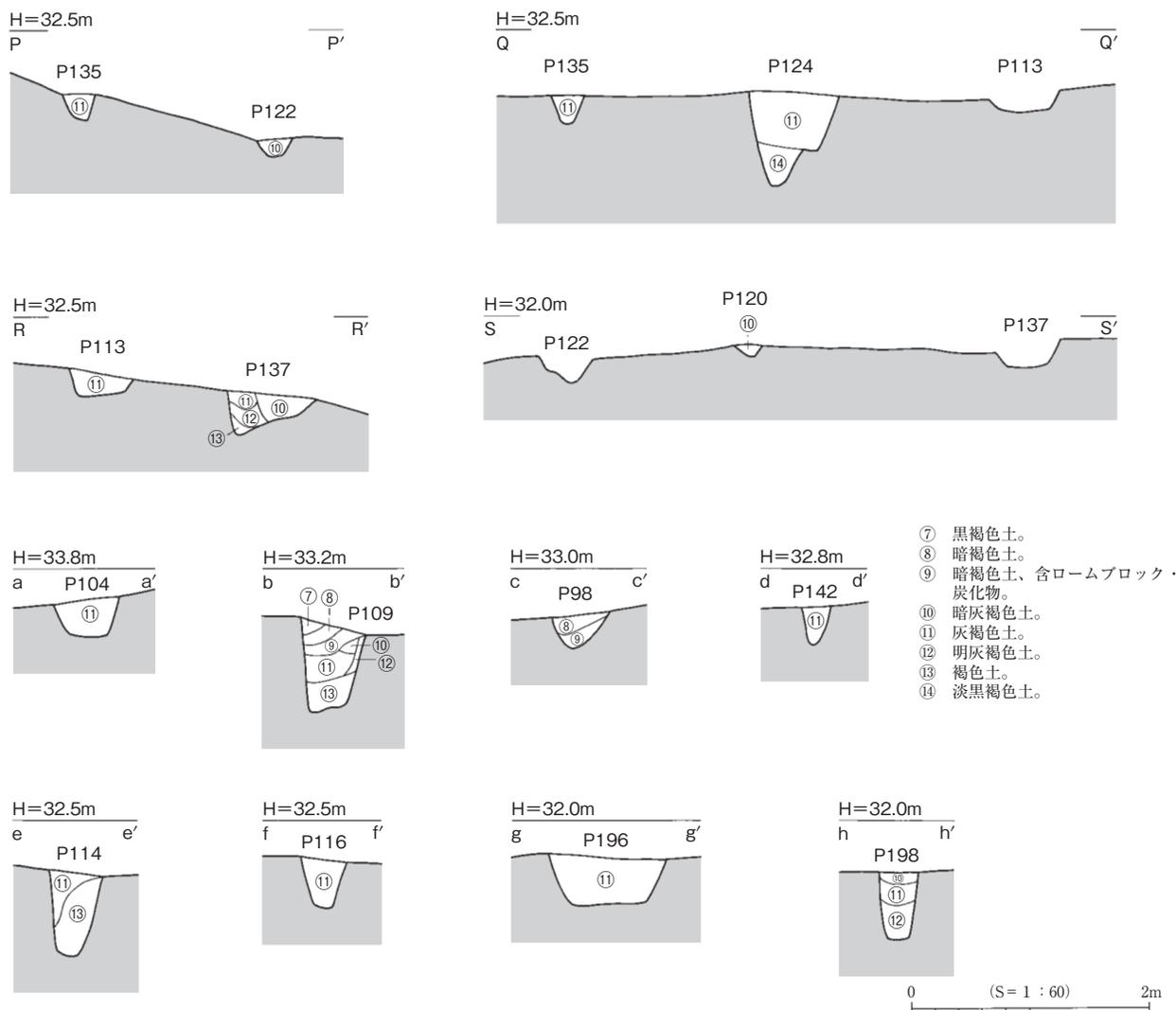
F～G-4～5グリッド、南西―北東方向に張り出した支尾根南東側頂部斜面において、地山をL字状にカットし平坦面を作成した段状遺構が検出された(第162図)。付近はこのSS23により削平された平坦面が作られている。この平坦面上には掘立柱建物(SB7)や柱穴列、溝状遺構(SD5)が存在する。いずれも同時代の遺構と考えられる。以下遺構ごとに個別に述べることとする。

SS23 (第180～183図)

位置 F～G-4～5グリッド、SS13～17の段状遺構の下段に検出された段状遺構である(第180図)。西側5.0mにSS16が、東側4mにSS1が存在する。確認面上の標高は33.5mを測り、下段のSS1とは1.2m



第181図 SS23・SD5・SB7断面図(1)



第182図 SS23・SD5・SB7断面図(2)

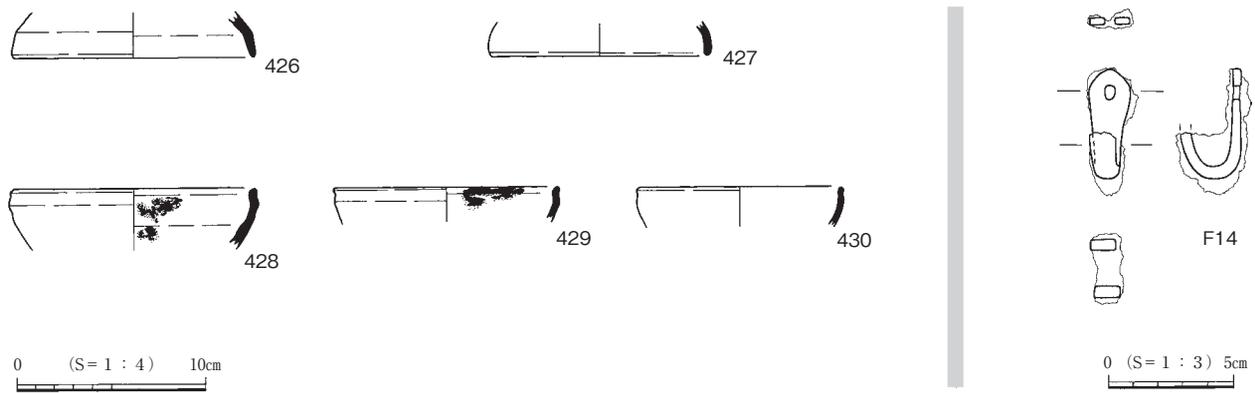
の比高差を測る。

形状 斜面の高位側の岩盤をL字状にカットして平坦面を造成している。平面形は不整形な長方形を呈する。傾斜面の等高線に直交する方向を主軸と考えた場合の主軸方位はN-66°-Eである。規模は長軸15.0m、短軸2.6m、確認面からの深さは最深部で50cmを測る。壁はやや開きながら立ち上がるが、南壁寄りには長さ6.8m、幅40cm、高さ20cmほどの段差を持つ。検出範囲での床面積は18.0㎡を測る。床面はやや下方に傾斜しつつも平坦である。

本址付近は地山付近まで後世の削平が及んでいる。このため本址床面も下方は失われているため、この平坦面上に検出されたピット群のうち、本址に帰属するものを確認することは非常に困難であった。ただし、この平坦面をSS23の造成によるものと考えると、面上のピット群は本来的にはSS23に伴うものである可能性が高い。

面上には54基のピットが検出された。平面形はいずれも円形を呈し、1～2間の柱穴列として並ぶものもある。この平坦面上にはSB7が構築されているため、柱穴列はこのSB7に関連する柵列等の構造物である可能性も考えられる。柱穴列の柱間距離は1.4～2.0mである。詳細はピット計測表を参照されたい。

埋土 後世の削平により埋土は薄いだが、暗褐色土を主体とする。下層より順次堆積していることから、自然埋没の様相を呈する。



第183図 SS23出土遺物

遺物 出土遺物のうち6点が図示し得た(第183図)。426～427は須恵器坏蓋、口縁部は内湾気味である。428～430は須恵器坏、口縁部は短く外反する。428と429は口縁から体部にかけての内面にタールが付着していることから灯明皿として使用されたものと考えられる。

F14はフック状の鉄製品、基部に穴が開けられている。

時期 出土遺物から、本址の時期は7世紀末から8世紀初頭頃と考えられる。

SB7 (第180・182図)

位置 G-5グリッドのSS23の平坦面に検出された掘立柱建物である。北東側10.0mにSB5が存在する。確認面上の標高は32.0mを測る。

形状 桁行2間、梁行1間の側柱の掘立柱建物で、主軸方位はN-43°-Wである。長軸桁行3.0m、短軸梁行1.3m、床面積は3.9㎡を測る。桁行の柱間寸法は1.3～1.8m、梁行の柱間寸法は1.3mと桁行の方が広い。柱通りはほぼ一直線である。柱掘り方は直径18～45cmの円形を呈する。柱痕跡は確認されなかった。各柱穴の詳細については計測表を参照されたい。

埋土 灰褐色土を主体とする。

遺物 本址から遺物は出土していない。

時期 同一平面上のSS23の出土遺物から推測して本址の時期は、7世紀末から8世紀初頭頃と考えられる。

SD5 (第180～181・184図)

位置 F-5グリッド、SS23の南側1.8mに検出された溝状遺構である。確認面上の標高は33.5mを測る。

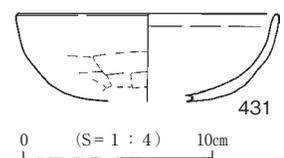
形状 平面形は長楕円形で両端は下位に屈曲する。長軸方位はN-11°-Wである。規模は最大長2.3m、最大幅0.6m、確認面からの深さは最大で22cmを測る。両端とも緩やかに立ち上がり、断面の形状は浅いU字形を呈し、底面は平坦である。

本址はSS23とほぼ同一の標高に位置しており、SS23に関連する遺構と考えられよう。

埋土 褐色土の単層で、堆積状況からは流水の痕跡は認められない。

遺物 出土遺物のうち僅かに1点が図示し得た(第184図)。431は土師器の坏、体部は丸味を持つ。

時期・性格 出土遺物および、SS23と一連の遺構と考えると、同時期の



第184図 SD5出土遺物

排水などの付帯施設の溝状遺構である可能性が考えられる。

SS26・27・28 (第185～191図)

I～J-2～3グリッド、南西―北東方向に張り出した支尾根北側谷頭凹地に検出された遺構である(第162図)。等高線にほぼ沿って細長く延び、西側は調査区外に広がる。調査の結果、何段かの段状遺構が切り合っていることが判明した。以下遺構ごとに詳細を述べることとする。

SS26 (第185～189図)

位置 I～J-3グリッドにまたがって検出された段状遺構である(第185図)。SS27に切られる。確認面上の標高は29.4mを測る。

形状 斜面の高位側の地山をL字状に削り、平坦面を形成している。平面形は隅丸長方形を呈する。傾斜面の等高線に直交する方向を主軸と考えた場合の主軸方位はN-24°-Wである。規模は長軸14.0m以上、短軸5.1m、確認面からの深さは最深部で80cmを測る。壁はやや開きながら立ち上がり、残存範囲での床面積は36.0㎡を測る。床面はほぼ水平で面上は硬化している。壁直下には幅18～30cm、深さ5～15cm程の壁溝が検出された。床面上には幅18～40cm、深さ10cm程の溝が数条掘り込まれている。東側より部分ではこの溝が直径4mの円弧状に掘り込まれており、その内側には部分的に貼床が認められた。溝底は平坦で、壁溝内ピット等は認められない。

本址に伴うピットは26基である。このうちP1・2及びP4・5は、南壁に平行する柱穴列の可能性はある。柱間距離はP1～2間が1.8m、P4～5間が90cmを測る。壁溝が壁材を据えた溝であれば、小屋掛け等の簡易な建物が存在した可能性が高い。詳細はピット計測表を参照されたい。

本址南壁中央部付近に炭化物、焼土の集中が確認された。調査を進めた結果、燃焼部と馬蹄形の壁体、及び壁面に煙道の掘り込みが認められたことから、作り付けの竈と判断した(第187図)。規模は長さ80cm、幅76cmを測り、主軸方位はN-40°-Wである。壁体は痕跡のみの遺存であったが、灰白色の粘土を使用している。燃焼部は粘土壁の内側で、良好に焼けている。燃焼部内には厚さ10cmの灰及び炭化物の堆積が認められた。掘り方底部にも炭化物の堆積が認められたことから、何回も繰り返し使用されたものと考えられる。床面上には、竈周辺を中心に灰・焼土・炭化物の堆積が顕著に見られた。竈から掻き出されたものであろうか。掘り方は長楕円形を呈し、規模は長径180cm、短径60cm、深さ7cmを測る。竈壁面には煙道が検出された。規模は長軸50cm、短軸40cm、U字状の窪みが壁面に斜めに掘り込まれている。また、この竈付近の南壁は中段から立ち上がりの傾斜が広がっている。位置的に見てこの傾斜は、煙道と関連性があると考えられよう。

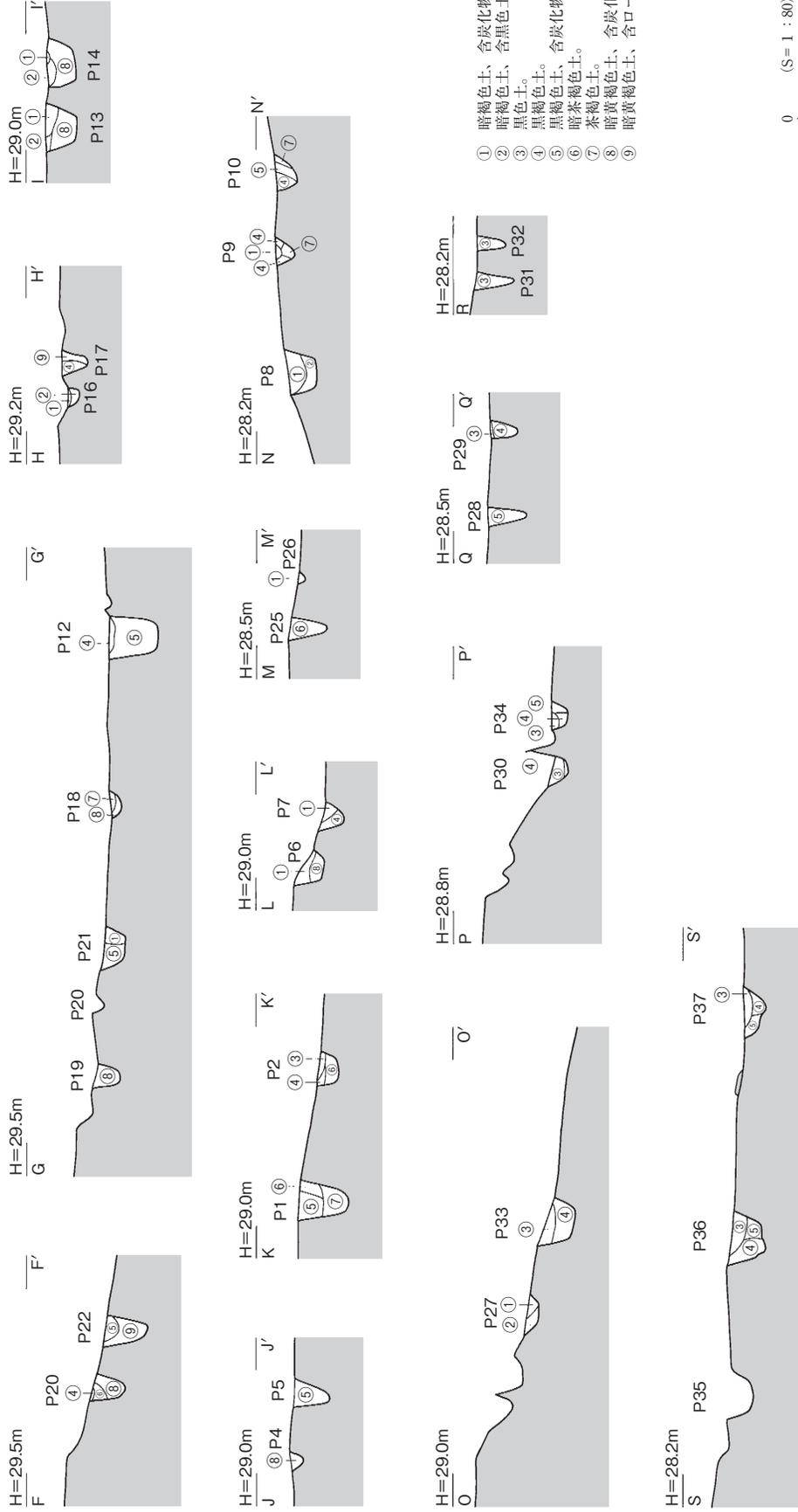
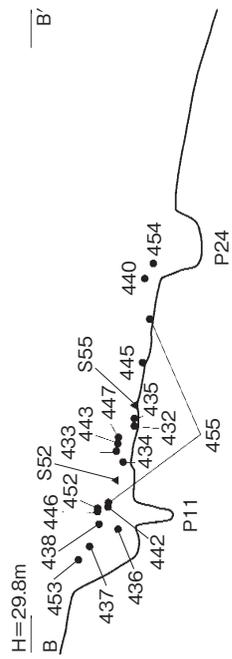
なお、竈西側3.0mの床面直上に直径120cm、厚さ15cm程の焼土の堆積が認められた。この部分を囲堯するように、床面上には直径4m、幅20～30cm、深さ10cm程の円弧状の溝が掘り込まれている。周辺からは移動式竈の破片が多く出土しており、作り付け竈と併用して、この部分で移動式竈を使用した燃焼行為が行われていたことが考えられる。

以上のことから考えて、本址は竈屋的な機能を有する施設を有する段状遺構と考えられる。

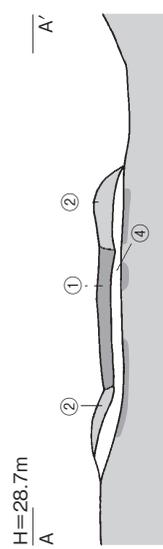
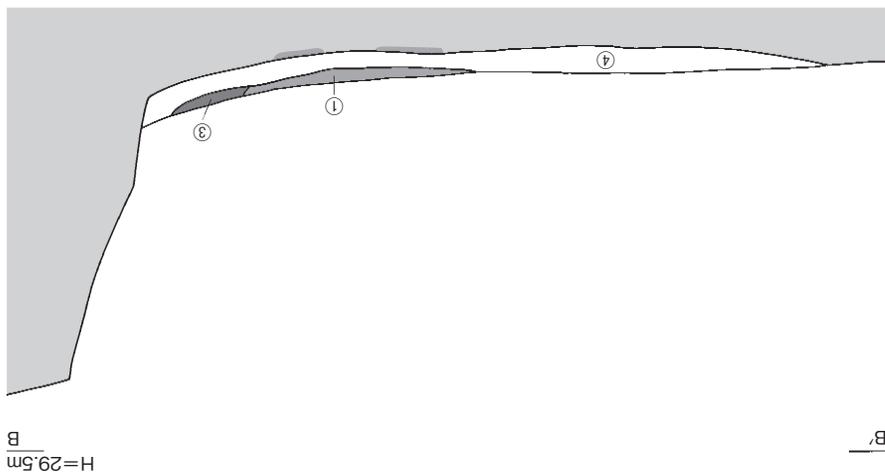
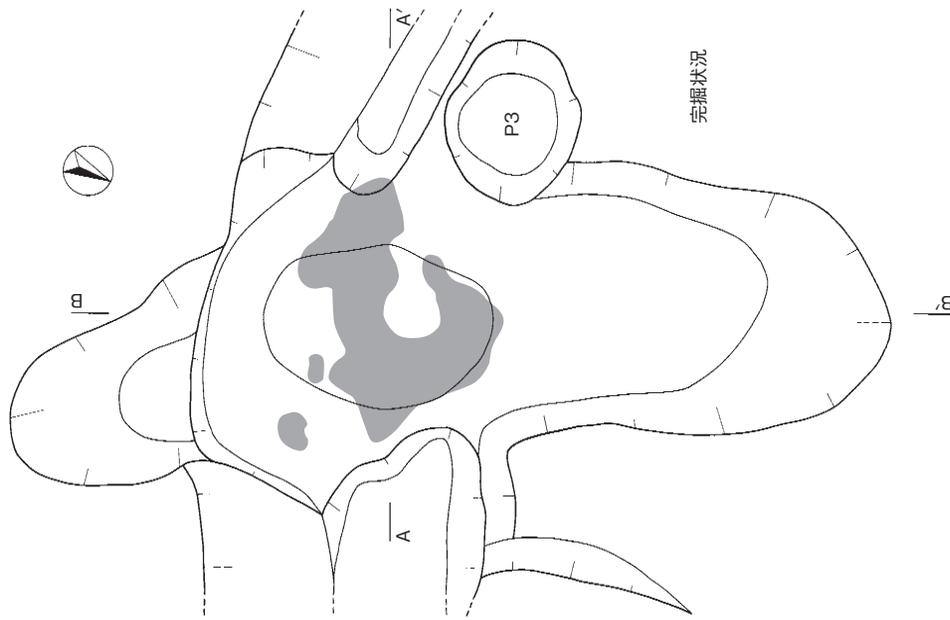
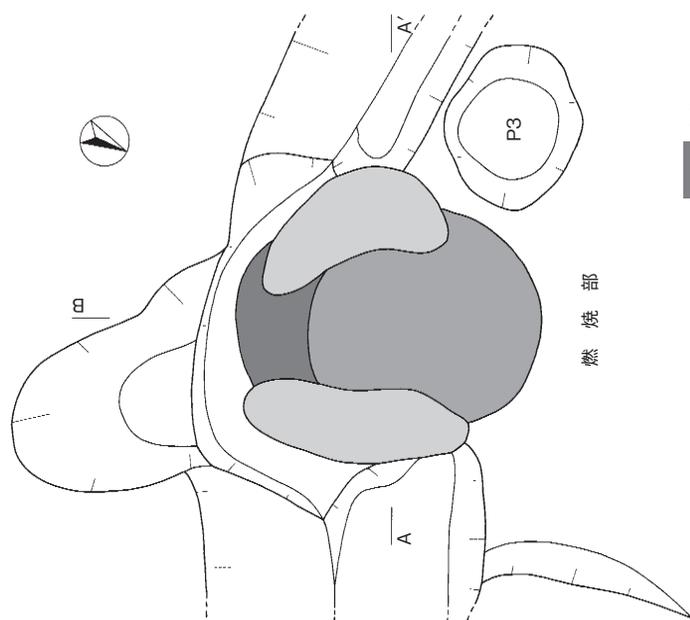
埋土 暗褐色土を主体とする。堆積状況から、斜面下方に向かって少なくとも2回以上の掘り直しが認められ、新しい床を作り変えている。また、竈付近の床面上には移動式竈片を多く含む焼土や炭化物が堆積している。下層より順次堆積していることから、自然埋没の様相を呈する。ピットや壁溝埋

SS26・27・28
ピット計測表(単位:cm)

NO	長径	短径	深さ	NO	長径	短径	深さ	NO	長径	短径	深さ
1	53	38	60	14	56	40	34	26	18	14	8
2	44	40	26	15	32	26	28	27	58	46	18
3	48	34	42	16	42	26	14	28	20	16	48
4	26	18	16	17	36	26	31	29	23	18	32
5	42	30	44	18	48	36	14	30	48	38	24
6	42	38	38	19	36	31	34	31	18	10	48
7	40	32	32	20	30	24	44	32	20	16	34
8	52	42	38	21	56	38	30	33	66	58	46
9	50	40	24	22	42	36	54	34	60	(30)	20
10	42	38	28	23	62	48	20	35	70	56	40
11	26	20	40	24	70	64	42	36	76	60	48
12	54	40	60	25	34	22	46	37	66	50	28
13	56	50	38								



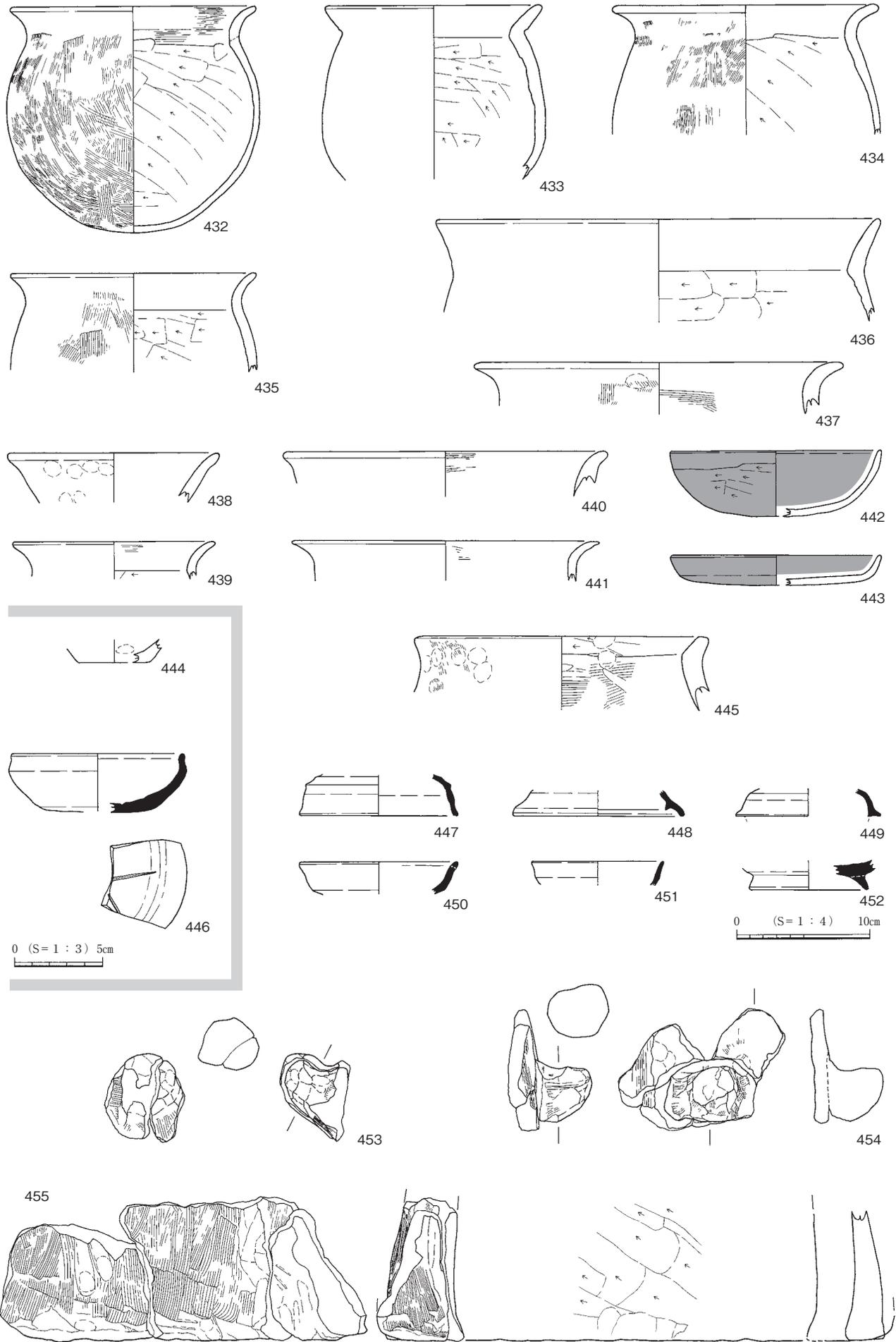
第186図 SS26~28断面図



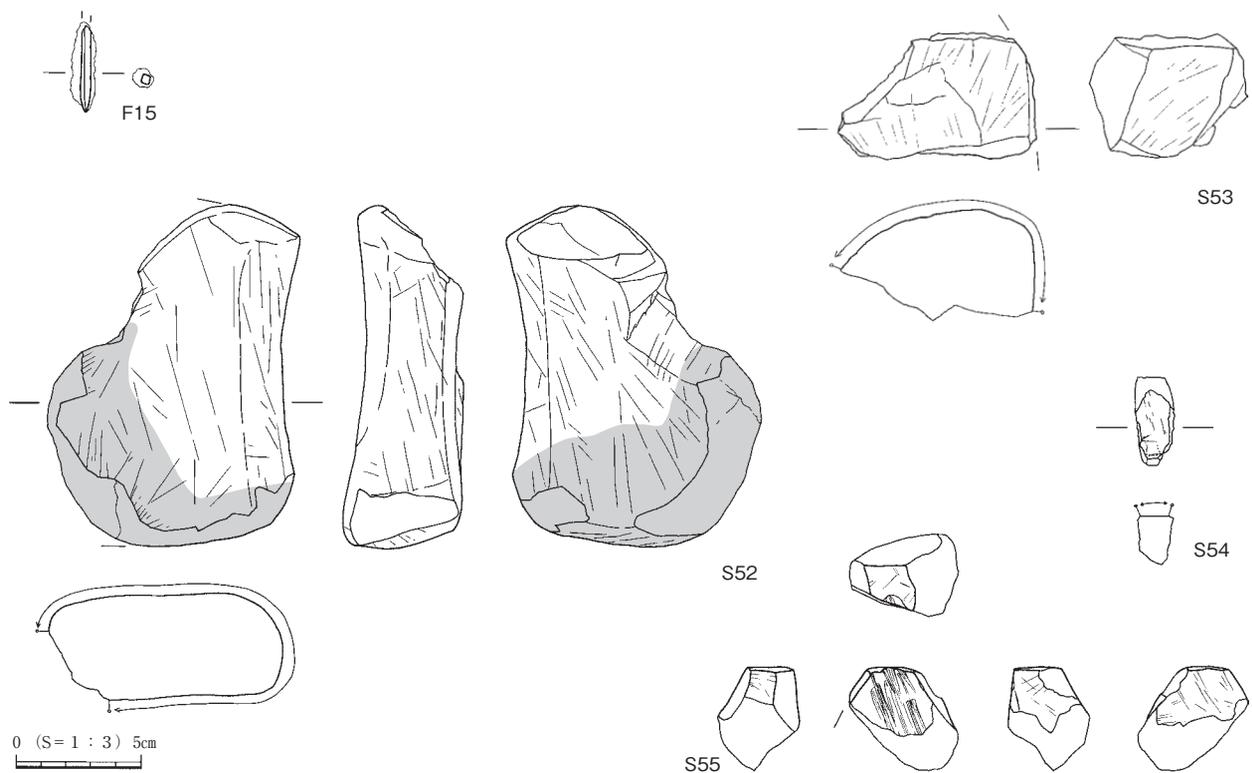
- ① 暗褐色土、含灰・炭化物多量。
- ② 灰、白色粘土。
- ③ 炭化物。
- ④ 暗黄褐色土、含烧土・炭化物多量。



第187図 SS26 竈



第188図 SS26出土遺物(1)



第189図 SS26出土遺物(2)

土中にも、炭化物、焼土塊が含まれるものが多い。この炭化材については、自然化学分析の結果タラノキ属と同定されている（第Ⅵ章第2節参照）。

遺物 本址からは竈周辺を中心に、比較的多量の遺物が出土している。このうち29点が図示し得た（第188・189図）。432～441は土師器の甕、球胴タイプのもの、長胴タイプのものがある。442・443は土師器の坏、いずれも赤彩が施される。444は手捏ね土器、坏の底部と思われる。447～449は須恵器の蓋、天井部との境に稜を持つタイプと、口縁内面にかえりを持つタイプがある。446・450～452は須恵器坏、446は外底面に焼成前の線刻が認められる。452はハの字状に開く高台を持つ。

453～455は移動式竈、453・454は竈側面に付く把手で、横長の形状を呈する。

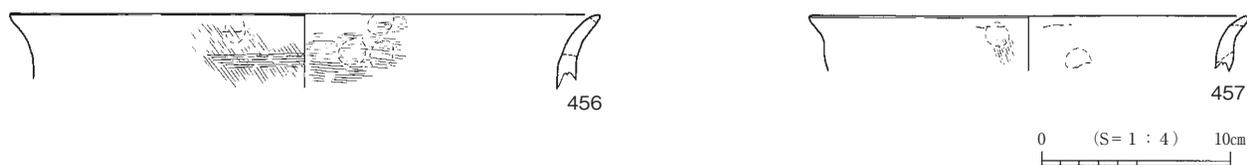
F15は棒状の鉄製品、釘と思われる。S52～S55は砥石、S52は花崗岩製の中砥で、長方形の素材のほぼ全体をよく使用、下半部に被熱痕が認められる。S53は角閃石安山岩製の荒砥、破片であるが遺存部の全体が使用されている。S54は花崗岩製の中砥の破片、S55も花崗岩製だが、上面に溝状の擦痕が何条も認められる。

時期 出土遺物に時期幅があるが、床面直上の出土遺物から、本址は6世紀末から使用され始め、7世紀後半に埋没していったものと考えられる。

SS27 (第185～186・190図)

位置 I～J-2～3グリッドにまたがって検出された段状遺構である（第185図）。SS26を切り、SS28に切られる。確認面上の標高は28.6mを測る。

形状 斜面の高位側の地山をL字状に削り、平坦面を形成している。平面形は隅丸長方形を呈する。傾斜面の等高線に直交する方向を主軸と考えた場合の主軸方位はN-18°-Wである。規模は長軸5.9m、短軸3.8m、確認面からの深さは最深部で30cmを測る。壁はやや開きながら立ち上がり、残存範囲で



第190図 SS27出土遺物

の床面積は9.0㎡を測る。床面はほぼ水平で、面上は貼床により硬化している。壁直下には幅18～60cm、深さ12cm程の壁溝が検出された。西側については形状と埋積土から2回以上の掘り直しが認められる。溝底面は凹凸があるが、壁溝内ピット等は認められない。

本址に伴うピットはP27～34の8基である。P33・34はSS28の床面に検出されたが、SS27の壁溝に切られていることから、本址に伴うものと考えられる。平面形はいずれも円形を呈し、直径20cm程の小型のものと60cm程の大型のものがある。詳細はピット計測表を参照されたい。

埋土 黒褐色土及び暗茶褐色土を主体とする。堆積状況から少なくとも2回以上の掘り直しが認められる。最上層にはロームブロックや焼土がブロック状に堆積するが、これは廃絶後の投げ込みによるものと考えられる。下層より順次堆積していることから、自然埋没の様相を呈する。

遺物 遺構の重複により本址からの出土遺物は少なく、僅かに2点が図示し得た（第190図）。456～457は土師器の甕、頸部の屈曲は緩やかである。

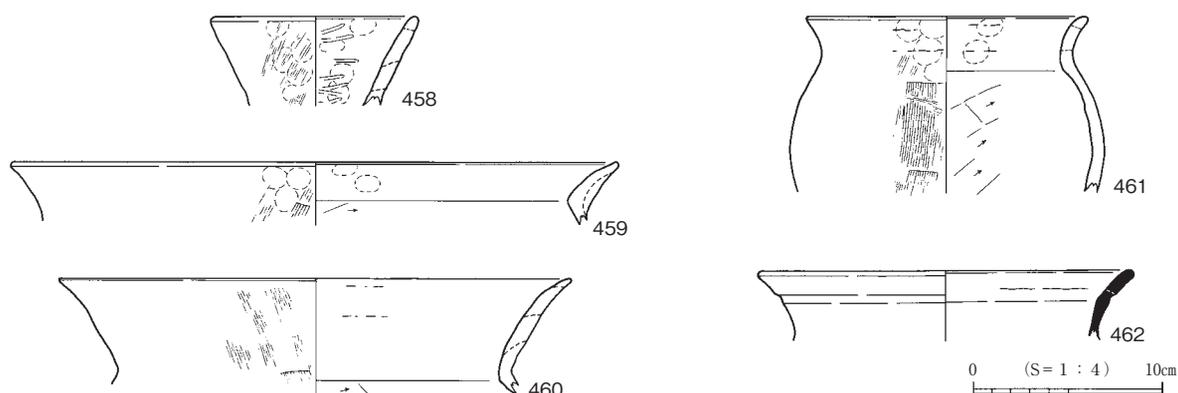
時期 出土遺物と切合い関係から、本址の時期は6世紀末以降と考えられる。

SS28（第185～186・191図）

位置 I～J-2グリッドにまたがって検出された段状遺構である（第185図）。西側は調査区外に広がる。SS27を切って構築される。確認面上の標高は28.0mを測る。

形状 斜面の高位側の地山をL字状に削り、平坦面を形成している。平面形は長方形を呈する。傾斜面の等高線に直交する方向を主軸と考えた場合の主軸方位はN-19°-Wである。規模は長軸6.5m以上、短軸2.8m、確認面からの深さは最深部で40cmを測る。壁はやや開きながら立ち上がり、検出範囲での床面積は14.3㎡を測る。床面はほぼ水平で、面上は貼床により平坦で硬化している。なお、南壁の調査区際に高さ5cm程の段差が認められた。埋積土の観察から古い時期の段状遺構と考えられる。

本址に伴うピットはP35～37の3基である。この3基はそれぞれ壁面に平行して並ぶ柱穴列と考えられる。平面形はいずれも円形を呈し、柱穴間距離は1.9～2.9mを測る。詳細はピット計測表を参照されたい。また、南壁面直下には幅18～22cm、深さ10cmの溝が検出された。この溝と柱穴列との距離

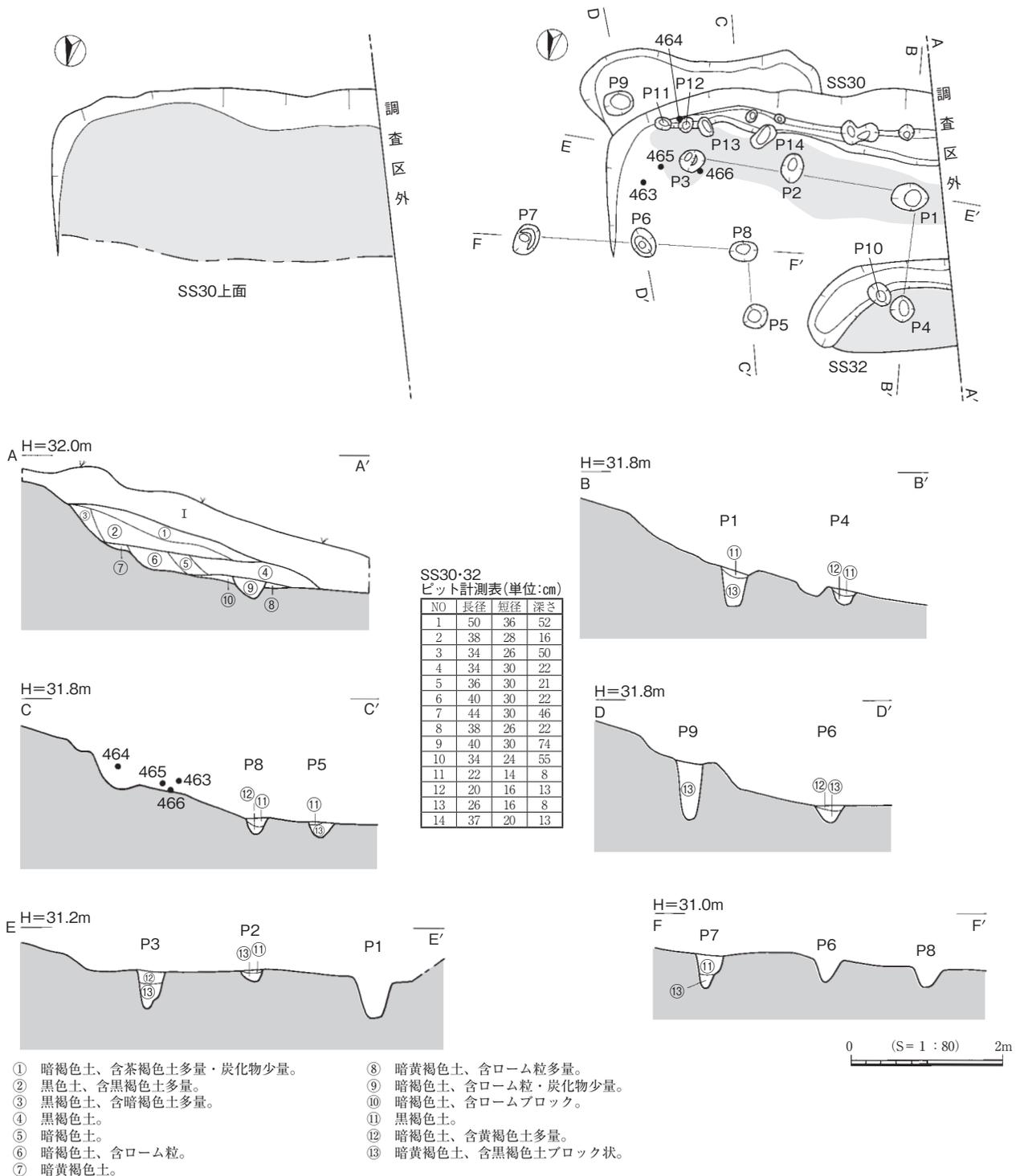


第191図 SS28出土遺物

は80cmほどである。この部分が壁材を据えた溝であれば、小屋掛けの簡易な建物の可能性も考えられよう。溝底面は平坦で、壁溝内ピット等は検出されなかった。

埋土 下層に黒褐色土、上層に暗褐色土が堆積する。堆積状況から下位に向かって少なくとも1回以上の掘り直しが認められる。下層より順次堆積していることから、自然埋没の様相を呈する。なお、貼床上には部分的に焼土の堆積が認められたが、面上に被熱の痕跡は認められないことから、廃絶に伴うものと考えられる、

遺物 出土遺物のうち5点が図示し得た(第191図)。458は土師器の直口壺、口縁は直線的に外傾する。459~461は土師器甕、比較的球胴に近いタイプのものである。462は須恵器の甕、口縁部は緩やかに外反する。



第192図 SS30・32

時期 床直の出土遺物と切合い関係から、本址の時期は6世紀末以降と考えられる。

SS30 (第192・193図)

位置 H~I-2・3グリッド、南西―北東方向に張り出した支尾根北側谷頭凹地の表土直下に検出された(第162図)。20号墳周溝を削平して構築される。下層にSS32が構築される。南東側4.0mにSS25が存在する。確認面上の標高は31.6mを測る。

形状 斜面の高位側の地山をL字状にカットして平坦面を形成している。西側は調査区外に広がるが、平面形は長方形が推測される。傾斜面の等高線に直交する方向を主軸と考えた場合の主軸方位はN-11°-Wで、長軸方向はほぼ等高線に沿っている。規模は長軸4.5m以上、短軸2.2m、確認面からの深さは壁際で50cmを測る。壁は開きながら立ち上がり、検出範囲での床面積は7.9㎡を測る。床面には全体に非常に硬化した貼床が検出された。この貼床を剥したところ、30cm下層からもう1枚の貼床とそれに伴う溝とピットが検出された。埋土の観察から、古い時期の段状遺構と考えられる。この古い段階の段状遺構には南壁の床上25cmに長さ3.1m、幅80cmの段差が検出され、床面上には南壁寄りに貼床が認められた。面上には炭化材が出土しており、自然化学分析の結果、コナラ属クヌギ節と特定されている(第Ⅵ章第2節参照)。

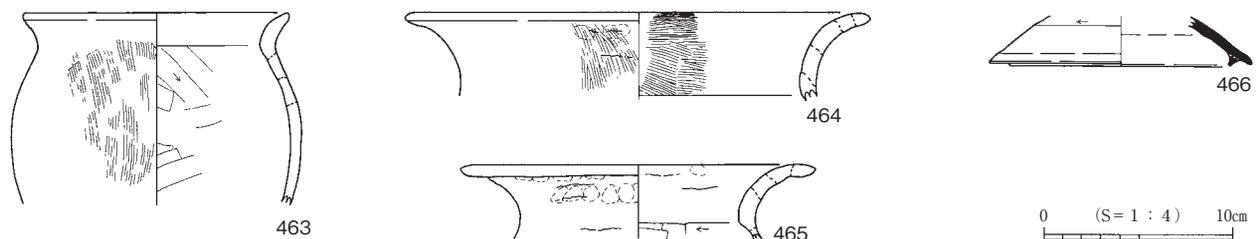
この面に伴うピットはP1~9の9基である。このうちP1-2-3が南壁と並行する柱穴列である。また、P4はこの柱穴列に直交していることから、L字状の柱穴列と考えられる。柱間距離は1.4~1.8mである。同様に、P5-6-7-8についても、L字状の柱穴列が想定できる。平面形は円形を呈し、柱穴間距離は1.0~1.5mである。形状の類似性から、この2つの柱穴列は建て替えに伴うものである可能性が高い。このほか、P9は南壁の段差部分に掘り込まれたピットである。詳細はピット計測表を参照されたい。なお、南壁面直下に長さ380cm以上、幅30~50cm、深さ7cmの溝が検出された。溝底面は凹凸が激しく、直径10~20cm、深さ5cm程の小ピットがランダムに連続している。この溝とP1-2-3の柱穴列はほぼ平行していること、底面の凹凸が激しいことなどから、雨落ち等の溝の可能性が考えられる。

以上のことから、本址は古段階の柱穴列を持つ時期に新旧二時期の建て替えがあり、新段階ではその上面に貼床が構築される、計3時期に亘る段状遺構であると考えられる。

埋土 暗褐色土を主体とし、一番古い遺構埋土は暗茶褐色土を主体とする。

遺物 図示し得た4点の出土遺物のうち、463・464が新段階のもの、465・466が古段階の遺構に伴うものである(第193図)。463~465は土師器の甕、463は球胴タイプのものである。465の口縁部は大きく外反する。466は須恵器の坏蓋、口縁部内面には内傾したかえりが付く。

時期 出土遺物から、本址の時期は6世紀末から7世紀中葉にかけて使用されたものと考えられる。



第193図 SS30出土遺物

SS32 (第192図)

位置 I-2グリッドの調査区際、南西—北東方向に張り出した支尾根北側谷頭凹地の表土直下に検出された(第162図)。20号墳周溝を削平し、SX21上層に構築されている。北側5.0mにSS27が存在する。確認面上の標高は30.8mを測る。

形状 本址は上層のSS30による削平が床面付近まで及んでおり、平面のみの検出である。斜面の高位側の地山をL字状にカットして平坦面を形成している。西側は調査区外に広がるが、平面形は半円形が推測される。傾斜面の等高線に直交する方向を主軸と考えた場合の主軸方位はN-11°-Wで、SS30と平行している。規模は長軸2.0m以上、短軸1.2mを測る。検出範囲での床面積は0.7㎡を測る。床面には全体に非常に硬化した貼床が検出された。この貼床は下層のSX21の埋土の上に構築されている。本址の南壁面直下と推定される部分に、長さ210cm以上、幅40~60cm、深さ18cmの溝が検出された。位置的に見て壁溝と考えられる。溝底面は比較的平坦である。壁溝肩部にはピット1基(P10)が検出された。

埋土 僅かに暗褐色土が遺存する。

遺物 本址から遺物は出土していない。

時期 出土遺物がなく時期比定が困難であるが切合い関係から、本址の時期は6世紀末以前と考えられる。

3) 溝状遺構

SD7 (第194~195図)

位置 I-5グリッド、調査区中央の南西—北東方向に張り出した支尾根頂部に検出された溝状遺構である(第162図)。北側は調査区外に延びる。確認面上の標高は30.4mを測る。

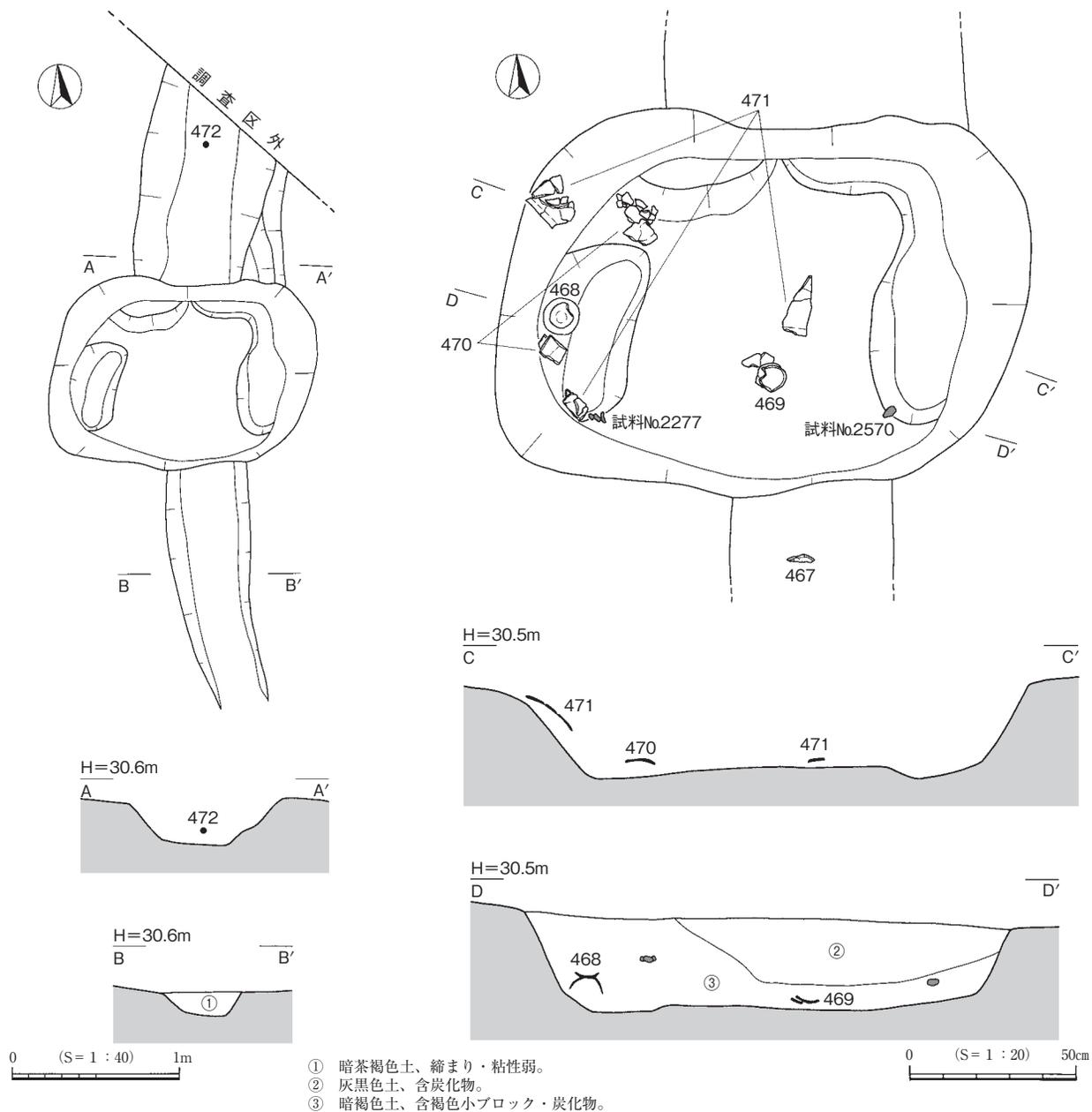
形状 南北方向にやや円弧を描きながら伸び、南端は斜面により削平される(第194図)。本址は調査区際に遺構の一部が検出された段階で、遺物が多量に出土したため、調査区を拡張して調査を行った。長軸方位はN-7°-Eである。規模は最大長3.9m、最大幅0.9m、確認面からの深さは最大で30cmを測る。断面の形状は浅い逆台形を呈し、底面は平坦である。

本址中央部は長軸155cm、短軸115cmの方形土坑状に広がっており、その部分の底面直上から下層にかけて土師器の高台付坏、甕が集中して出土した。この土器に混じり、団子状になった炭化種実が2か所に集中して出土した。科学分析の結果、西側で出土した試料No.2277はイネとアワの集塊であることが判明した。イネは全て熱による発泡がみられ変形しており、強い火を受けたとみられる。アワはイネ集塊に混ざっていたと考えられる。また、東側で出土した、また東側の試料No.2570はイネの集塊で、No.2277と同様に、全てに発泡がみられ変形しており、強い火を受けたとみられる。遺物が出土した下層埋土には炭化物も含有されていることから、この土坑内で火を伴った儀礼行為が行われた可能性が高い。なお、放射性炭素年代測定では 1030 ± 30 年の年代観が得られた(第Ⅶ章第2節参照)。

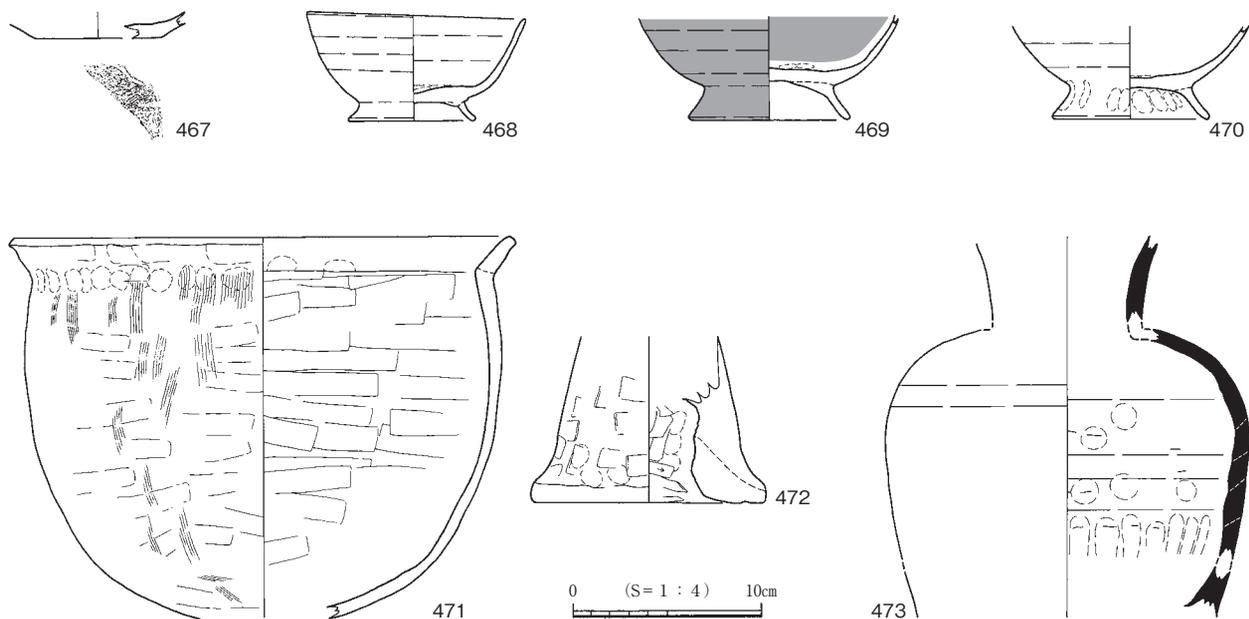
本址の溝と土坑については、別遺構の可能性も考えたが、出土遺物に時期差が認められないこと、堆積土層に相違がないことから、一連の遺構と考えられる。

埋土 褐色土の単層で、堆積状況からは流水の痕跡は認められない。土坑下層埋土には炭化物が多く含まれる。

遺物 出土遺物のうち7点が図示し得た(第195図)。467は土師器坏、外底面は回転糸切である。



第194図 SD7



第195図 SD7出土遺物

468～470は土師器の高台付坏、いずれも形態や製作技法が近似し、丸味を持つ体部に口縁は直線的に外傾し、平底にハの字状に大きく開く高台が貼り付く。このタイプの高台付坏については古市宮ノ谷山遺跡SK15や米子城跡6遺跡SK51、米子城跡21遺跡SK32などで出土しており、中森氏等により検討が行われている（玉木2006・中森2012）。471は土師器の甕、丸底で球胴の体部に「く」の字状に屈曲する頸部に短く直線的に外傾する口縁が付く。472は土製支脚、脚部内面は大きく凹む。

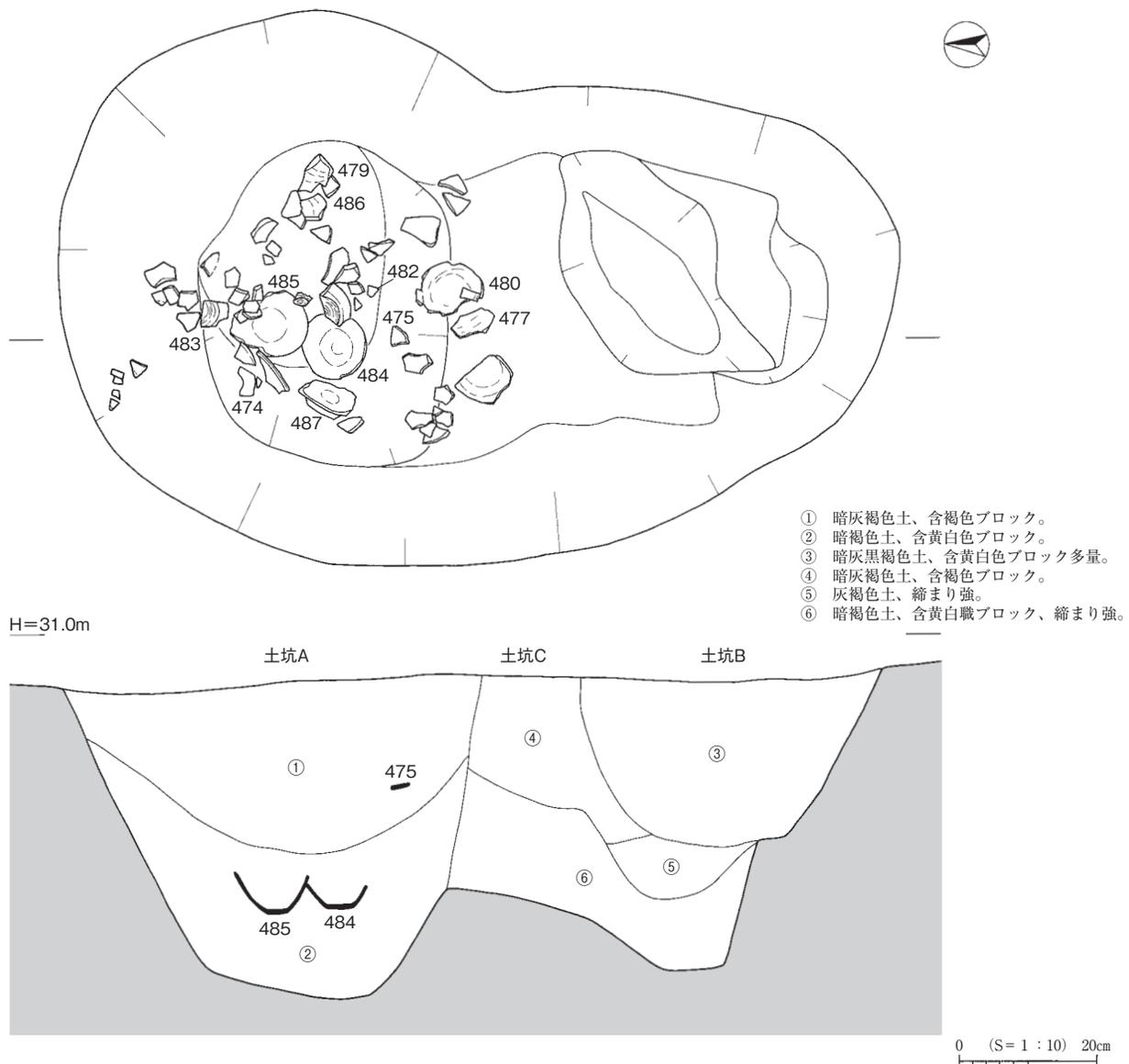
473は須恵器の壺、肩が張る体部に長く緩やかに外反する頸部が付く。

時期・性格 出土遺物のうち、高台付坏の形状は米子城跡6遺跡SK51の形状に似ることから、本址の時期は11世紀前半頃と考えられる。これは放射性炭素年代測定のAD970～1030年の年代観とも符合する。性格については、遺物の出土状況から、祭祀儀礼に伴うものである可能性がある。

4) 土坑

SK18 (第196・197図)

位置 I-5グリッド、南西—北東方向に張り出した支尾根頂部斜面に検出された（第196図）。北東側8mにSD7が存在する。確認面上の標高は30.9mを測る。



第196図 SK18

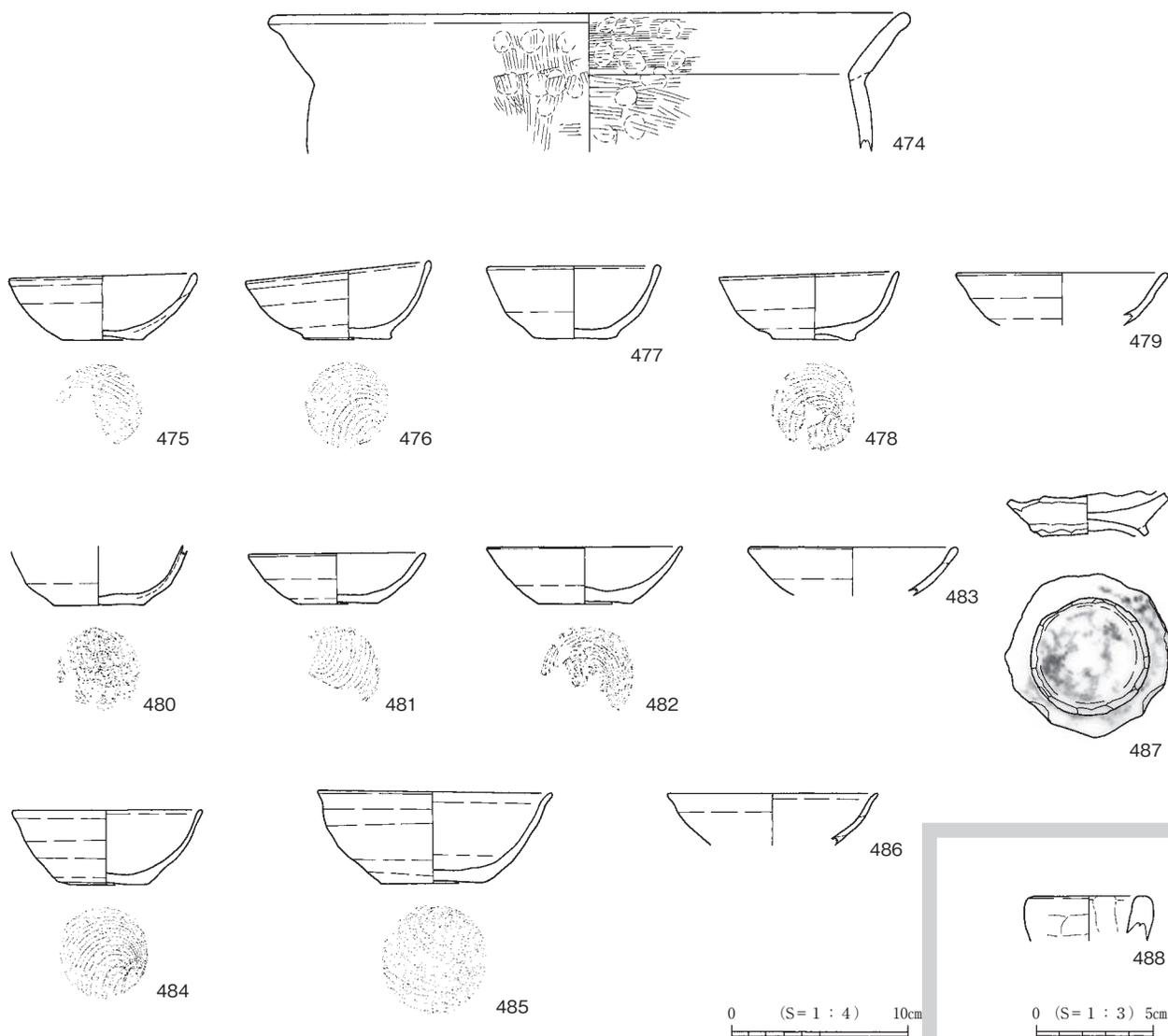
本址は、平面プラン精査の段階では長楕円形の土坑と考えたが、調査を進めていく段階で複数の円形土坑が重複していることが判明した。完掘した結果、土坑内に鞍状の段が存在していることから、3つの土坑A～Cが重複していたと考えるにいたった。この鞍部をなす段は土坑Cが土坑A・Bに切られたことによるもので、埋土の観察から、土坑C→B→A（古→新）と考えられる。以下に各遺構について述べる。

土坑A

形状 土坑Cを切り込んで掘り込まれる。平面形は楕円形を呈する。長軸方位はN-84°-Wを指す。断面形はU字形を呈し、底面は平坦である。規模は上面で長径78cm、短径68cm、確認面からの深さは46cmを測る。本址底面から上面にかけて土師器坏13点が出土した。出土状況を見ると下層、中層、上層と断続的に出土していること、破片の多いこと等から考えて、埋納というよりは土器廃棄土坑であると考えられる。土師器坏は12点が糸切り底のもので、1点のみ高台付坏転用の灯明皿が出土している。いずれも胎土や形状が酷似していること、供伴して手捏ね土器も出土していることなどから何らかの儀礼に伴う断続的な一括廃棄によるものと考えたい。

埋土 下層に暗褐色土、上層に暗灰褐色土を主体とする。

遺物 本址からは下層から上層にかけて遺物が集中して出土している。このうち15点が図示し得た。



第197図 SK18出土遺物

(第197図)。474は土師器の甕、頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁は短く直線的に外傾する。器壁は厚く調整は粗い。475～486は土師器坏、いずれも回転台整形のもので、形態や製作技法が近似し、糸切底に体部は丸味を持ち、口縁端部は直線的なものと外反するものがある。475～484は口径9.6～11.8cm、底径4.7～5.3cm、器高3.8～5.3cmのやや小型、485は口径13.2cm、底径6.1cmとやや大型である。487は土師器の高台付坏を転用した灯明皿である。足高高台の口縁部と高台部を丁寧に打ち欠いている。高台内と体部外面に煤及びタールが付着していることから、天地逆にして使用していたと考えられる。488は手捏ね土器の坏である。口縁は内湾気味である。

時期・性格 出土した坏の形状は、米子城跡6遺跡SK51の同タイプの坏の形状・法量に近似していることから、本址の時期はSD7と同時期の11世紀前半頃の土坑と考えられる。性格については、遺物の出土状況から祭祀儀礼に伴うもの可能性がある。

土坑B

形状 土坑Cを切り込んで掘り込まれる。平面形は楕円形を呈する。長軸方位はN-82°-Eを指す。断面形はU字形を呈し、底面は平坦である。規模は上面で長径48cm、短径44cm以上、確認面からの深さは24cmを測る。

埋土 暗灰黒褐色土の単層である。

遺物 本址から遺物は出土していない。

時期 出土遺物からの時期比定が困難であるが、切合い関係から本址の時期は平安時代後半と考えられる。

土坑C

形状 土坑B・Cに切られて遺存状態は悪い。平面形は楕円形が推測される。長軸方位はN-54°-Eを指す。断面形はU字形を呈し、底面は平坦である。規模は上面で長径65cm以上、短径44cm以上、確認面からの深さは43cmを測る。

埋土 下層は暗褐色土、上層は灰褐色土を主体とする。

遺物 本址から遺物は出土していない。

時期 出土遺物からの時期比定が困難であるが、切合い関係から、本址の時期は平安時代後半と考えられる。

第5節 中世

今回の調査では、中世期に属する遺構としては南西—北東方向に張り出した支尾根頂部の急斜面において土壙墓(SX1)1基が検出された(第162図)。調査区内での当該期の遺構はこの1基のみであったが、隣接する福成早里遺跡においても中世期の土壙や溝状遺構が検出されており、法勝寺川に面する尾根斜面に当該期の遺構が展開する様相が看取できる。

SX1 (第198・199図)

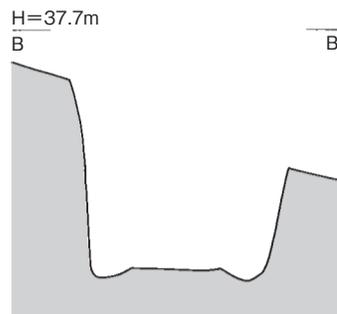
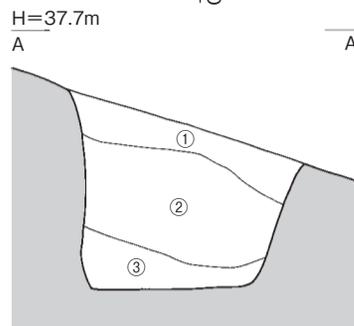
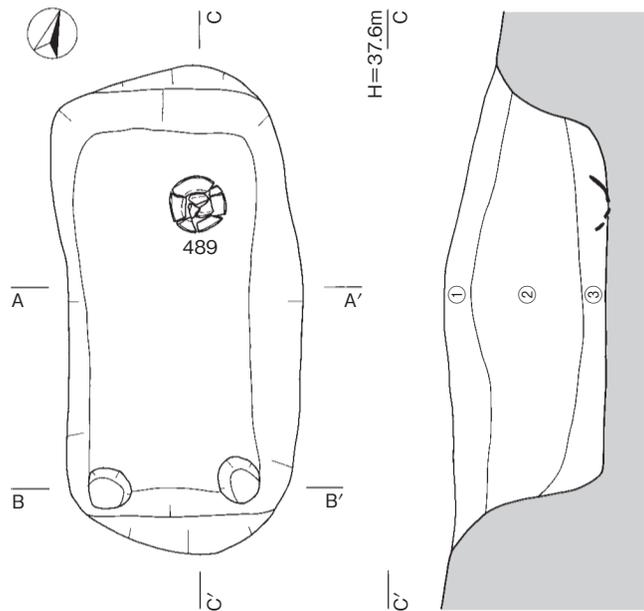
位置 B-8グリッド、南西—北東方向に張り出した支尾根頂部の標高38.5~38.0mの斜面においてSS10を一部切って構築されている(第162図)。確認面上の標高は37.6mを測る。

形状 平面形は長方形を呈する。長軸方位は等高線に対し平行するN-17°-Wである。断面形は箱型を呈し、底面は平坦である(第198図)。掘り方の規模は上面で長径113cm、短径63cm、確認面からの深さは53cmを測る。南東角及び南西角の壁面直下に直径10cm、深さ5cm程の小ピットが掘り込まれている。また、南壁寄り13cmの底面付近の土師質土器の壺1点が正位で出土した。形状や遺物の出土状況から、本址は木棺墓であると考えられる。炭化物や骨片などは検出されなかった。

埋土 褐色土を主体とし、締まりはなく人為的に一気に埋め戻された様相を呈する。

遺物 本址からは副葬品とみられる壺1点が出土している。489は土師質土器の壺、外底面は静止糸切りで、体部はやや丸みを持ち、口縁部は内湾気味である(第199図)。

時期・性格 出土遺物と形状から、本址は中世前期、13世紀前半頃の土壙墓と考えられる。



- ① 褐色土。
- ② 褐色土、含黄褐色土、締まり弱。
- ③ 黄褐色土。

0 (S=1:20) 50cm

第198図 SX1



0 (S=1:4) 10cm

第199図 SX1出土遺物

第V章 遺構外の出土遺物

今回の調査では、第Ⅲ章第2節に述べたように、北側谷部の黒褐色土及び黒色土（Ⅳ～Ⅴ）層を中心に多量の遺物が出土している。これらはいずれも遺構に伴わないものであることから、包含層出土遺物とし、大まかな時代ごとに以下に詳述する。

第1節 突帯文土器（第200～211図）

ここでは弥生時代開始期の土器として、突帯文土器をまとめた。今回の調査では黒褐色土及び黒色土（Ⅳ～Ⅴ層）の包含層中から当該期の土器が非常に多く出土しており、その点数としては、図化できた全126点の遺物中、118点（98%）にのぼる。平面的にみると、北側谷部のJ～M-1～2グリッドに集中しているが、これは黒色土の堆積が本区域に厚いことにも起因している。また平面分布や、層位的に見ても、粗密のある程度のまとまりはあるが、時期差として認識できるほどの形式の違いを出土地点に認めることは出来ない。以上のことから、本稿では当該期の資料を一括して扱うこととした。

突帯文土器については、濱田竜彦氏による突帯文土器の編年案などが提示され、突帯の貼付位置や形状、刻目の形状などから分類が行われている（濱田2000ほか）。今回出土した突帯文土器は小片が殆どであることから、口縁部形態を中心に、濱田2013分類に基づいて、分類、整理を行った。なお、慣例に従い本節では、煮沸用器種を深鉢形土器としている

1) 深鉢形土器

ここで深鉢としたものには、口縁端部に突帯が巡る破片が殆どである。器形、口縁端部の形状、突帯の形状を基に以下のように分類を行った。

〈大別〉

- I類 刻目突帯が巡り、口縁端部に刻目を持つもの。本遺跡では出土していない。
- II類 刻目突帯が巡り、口縁端部に刻目を持たないもの。
- III類 無刻目突帯が巡り、口縁端部に刻目を持たないもの。
- IV類 無刻目突帯が巡り、口縁端部に刻目を持つもの。

〈器形〉

濱田分類では器形については、口縁部が外反し、湾曲する肩部を有するものをA類、砲弾型をB類としている。しかし、本遺跡の出土遺物は口縁部小片が大半であり、体部の傾きから大半がB類とは考えられるが、不明瞭なものが多い。また、この中でも、口縁部が内傾するものと直立気味のもの、外反するものが見られるが、全体の器形については不明である。以上のことから、本稿では細別を行わなかった。

〈突帯の断面形状と位置〉

今回の出土遺物は口縁部に一条の突帯が巡るもの（一条突帯）二条の突帯が巡るもの（二条突帯）がある。さらに、口縁と胴上部に突帯が巡り、その間に山形文が施されるもの（有文深鉢）がある。

以下に、突帯の断面形状を a～d に分類し、さらに貼り付け位置や形状を細別した。なお、二条突帯もこの細別を含めている。

a類 突帯を上下から押さえ、断面形が三角形を呈するもの。

a1類 端部を面取りした口縁端部から下がった位置に突帯が貼り付けられたもの。

a2類 端部の丸い口縁端部から下がった位置に突帯が貼り付けられたもの。

a2-1類 a2類のうち、突帯の低いもの。

a2-2類 a2類のうち、突帯の高いもの。本遺跡では出土していない。

a3類 端部を面取りした口縁端部に接して突帯が貼り付けられたもの。本遺跡では出土していない。

a4類 端部が先細りする口縁部に接して突帯が貼り付けられたもの。

a4-1類 a4類のうち、突帯の低いもの。

a4-2類 a4類のうち、突帯の高いもの。本遺跡では出土していない。

a5類 端部が先細りする口縁端の上部に突帯が被さる様に貼り付けられたもの。

b類 突帯を上から押さえ、断面形が下さがりの三角形を呈するもの。本遺跡では出土していない。

c類 幅広の突帯を上から押さえ、断面形が下垂気味の三角形を呈するもの。

c1類 端部を面取りした口縁端部から下がった位置に突帯が貼り付けられたもの。

c2類 端部の丸い口縁端部から下がった位置に突帯が貼り付けられたもの。

d類 突帯を下から押さえ、断面形が上向きの三角形を呈するもの。

d1類 端部を面取りした口縁端部から口縁端部から下がった位置に突帯が貼り付けられたもの。本遺跡では出土していない。

d2類 端部の丸い口縁端部から下がった位置に突帯が貼り付けられたもの。

〈突帯の刻目〉

突帯に施された刻目については工具の違いにより以下のような分類が可能であった。

H類 ヘラ状工具によるもの。

I類 板状工具によるもの。

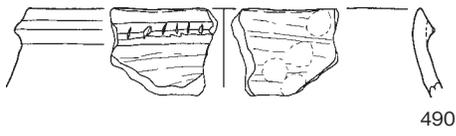
B類 棒状工具によるもの。

Y類 指によるもの。

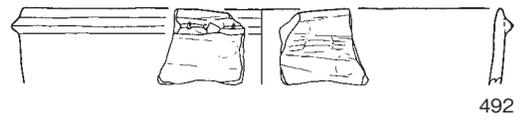
M類 巻貝によるもの。

①深鉢Ⅱ類

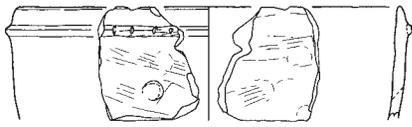
37点が出土している。二条突帯のものも突帯の形態的にはここに含まれる。反転復元できた個体は6点で、口径20～30cm程である。



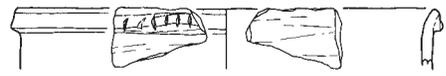
490



492



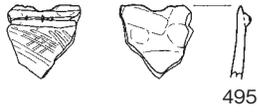
491



493



494



495



501



507



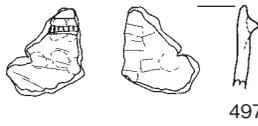
496



502



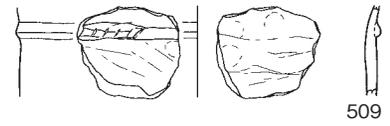
508



497



503



509



498



504



510



499



505



511



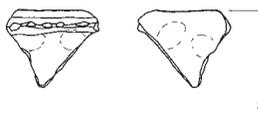
500



506



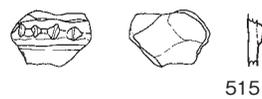
512



513



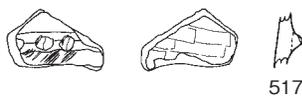
514



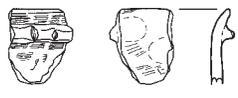
515



516



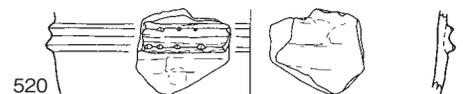
517



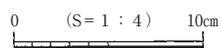
518



519



520



第200図 包含層出土突帶文深鉢(1)

突帯Ⅱ a 2-1類 (第200図)

31点が出土している。口縁端部は内傾するものや直立気味のものから外反気味のものまでである。490~507は突帯にH類によるV字状の刻目が施されるタイプである。刻目は浅く、痕跡が残る程度のものである。508・511は口縁部が波状になるタイプ、突帯は水平方向に貼り付けられる。509は刻目が斜行する。513~516はH類による幅広のD字状の刻目が施されるタイプである。517はY類、刻目部分には押圧時の爪の痕跡が残る。518はM類、縦方向のM字状の刻目が認められる。

519~520は口縁部に二条の突帯が巡る。二条ともH類のV字状の刻目が施される。

器面の調整は、体部に粗い擦痕の残る横ナデ調整が施されるが、貝殻腹縁による調整痕が認められるものもある。497・504・510に内傾接合痕が認められた。

突帯Ⅱ c 2類 (第201図)

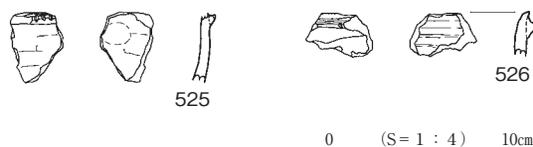
4点が出土している。口縁端部は直立気味のタイプと外反するタイプがある。特に524は突帯部の上からの押さえが強いため、口縁端部は大きく外反している。いずれも突帯にH類によるV字状の刻目が施されるタイプである。521・522・524の刻目は非常に浅く、線刻状を呈する。器面の調整は、体部に粗い擦痕の残る横ナデ調整が施され、貝殻腹縁による調整痕が認められるものもある。523・524は内面にヘラ状工具によるナデが施される。



第201図 包含層出土突帯文深鉢(2)

突帯Ⅱ d 2類 (第202図)

2点が出土している。いずれも突帯にH類によるV字状の刻目が施されるタイプである。器面の調整は、525は内面が丁寧な横ナデ、526は内面に貝殻腹縁による横方向の調整痕が認められる。



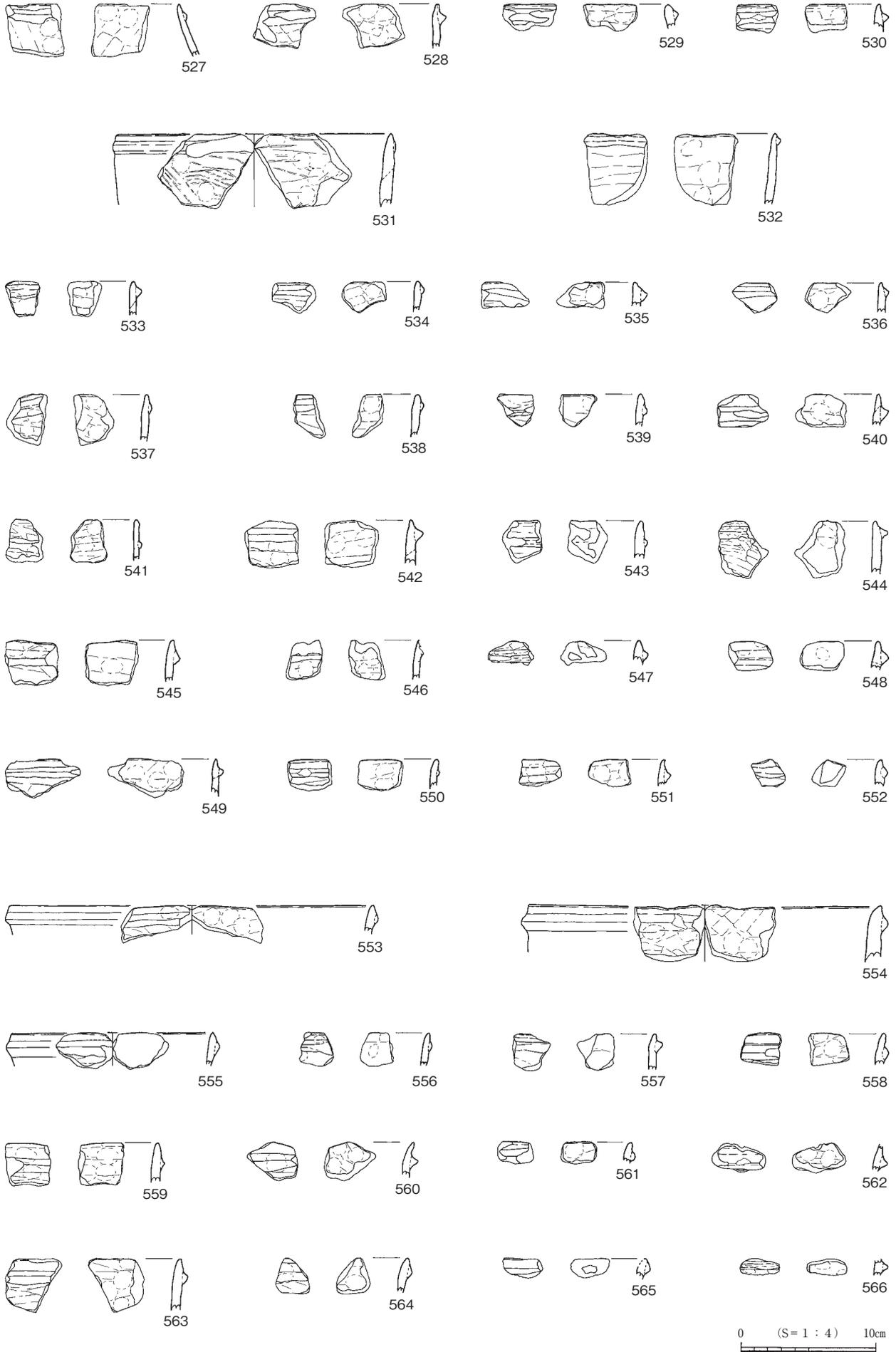
第202図 包含層出土突帯文深鉢(3)

②深鉢Ⅲ類

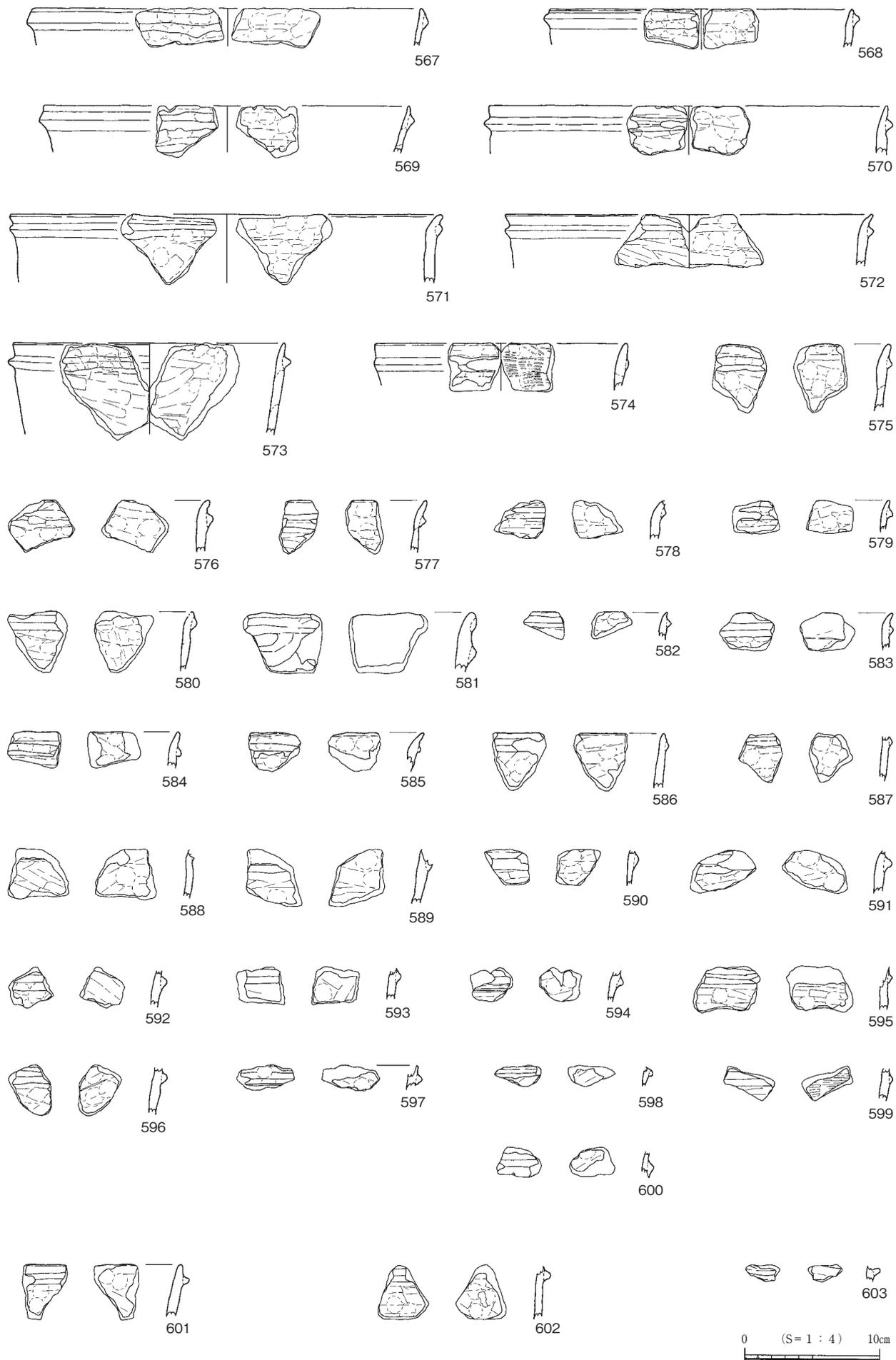
90点が出土している。本類が最も出土量が多く、全体の71%を占める。反転復元できた個体は15点で、口径18~32cm程である。

突帯Ⅲ a 2-1類 (第203図、第204図 527~600)

74点が出土している。口縁端部は527~530が内傾するタイプ、531~566が直立気味のタイプ、567~600は外反するタイプである。比較的大型の破片の観察から、ほとんどがB類の砲弾型の器形を呈すると思われる。いずれも外面の調整に対して、内面は比較的丁寧な斜め方向のナデが施される。531は内外面に二枚貝腹縁による横ナデが施される。537は突帯が右上がりの斜方向に貼り付けられる。555の突帯は幅広で非常に歪である。573の外面には煤が厚く付着している。581は水平方向と右上が



第203図 包含層出土突帯文深鉢(4)



第204図 包含層出土突帯文深鉢(5)

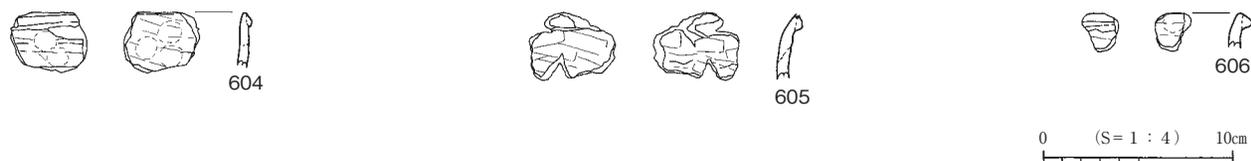
りの斜方向の突帯がJ字状に張り付けられている。目久美遺跡などに出土例があるタイプである。

突帯Ⅲ a 2-2類 (第204図 601~603)

3点が出土している。いずれも外面の調整に対して、内面は比較的丁寧な斜め方向のナデ調整が施される。603の突帯部はやや上向きに突出している。

突帯Ⅲ a 4-1類 (第205図)

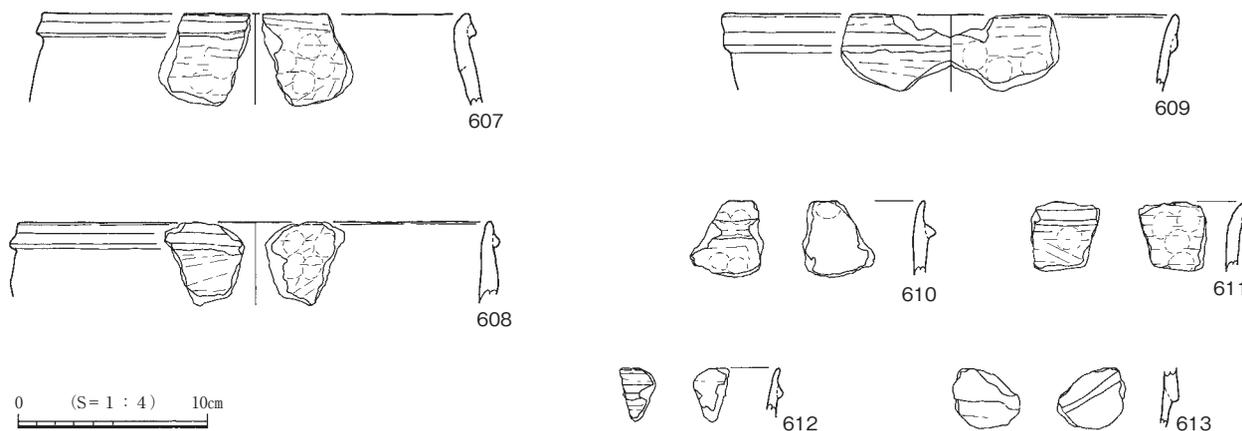
3点が出土している。いずれもB類の砲弾型の器形と考えられる。外面には横もしくは斜め方向の粗いナデ、内面には横方向のナデ調整が施される。605には内傾接合痕が認められた。



第205図 包含層出土突帯文深鉢(6)

突帯Ⅲ c 2類 (第206図)

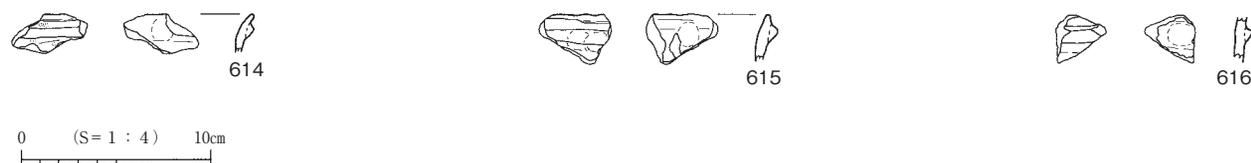
7点が出土している。いずれもB類の砲弾型の器形と考えられる。外面には横もしくは斜め方向の擦痕の残る粗いナデ、内面には横方向の比較的丁寧なナデ調整が施される。上からの押さえにより突帯の下端は乱れている。613は遺存状態が悪く、形状が不明瞭な個体であったが、幅広の突帯上端が欠損したものと判断し、押さえの状態からここに含めた。



第206図 包含層出土突帯文深鉢(7)

突帯Ⅲ d 2類 (第207図)

3点が出土している。いずれも外面には横もしくは斜め方向の擦痕の残る粗いナデ、内面には横方向の比較的丁寧なナデ調整が施される。615は下からの押さえにより突帯の上端は乱れている。



第207図 包含層出土突帯文深鉢(8)

③深鉢Ⅳ類

僅かに小片1点が出土している。

突帯Ⅳa 2-1類 (第208図)

外面には斜め方向の擦痕の残る粗いナデ、内面には横方向の丁寧なナデ調整が施される。突帯は右上がりの斜め方向に貼り付けられる。

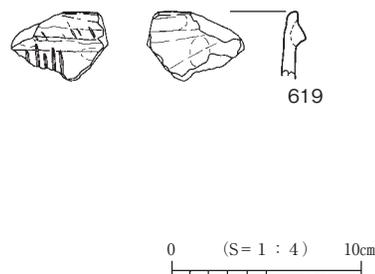


第208図 包含層出土突帯文深鉢(9)

④有文深鉢 (第209図)

深鉢のなかで、口縁から体部外面に文様を有する2点をここにまとめた。搬入品の要素の強いものである。砲弾型の形状の口縁のやや下がったところと体部に突帯文が巡る二条突帯で、その間に山形文が線刻される。このタイプは瀬戸内海沿岸地域の沢田式に特徴的な形態である(註1)。

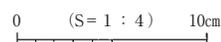
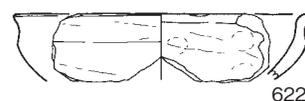
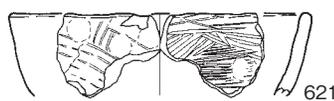
618は口径24.4cm、砲弾型の形状を呈し、先細りする口縁端部は外反する。僅かに残る口縁端部にはH類のV字状刻みが施されるようである。突帯文は口縁端部からやや下がったところと体部に巡り、浅い刻みが施される。この二条の貼付突帯間にヘラ状工具による4本以上単位の沈線による山形文が施される。断面には内傾接合痕が認められた。619は小片であるが、残存部の形状から618と同タイプの深鉢と考えられる。丸みを持つ口縁端部からやや下がったところにH類のV字状刻目突帯が貼り付けられる。突帯下端から体部にかけて、ヘラ状工具による5本以上単位の沈線による山形文が施される。この2点は焼成や胎土、口縁の形状が異なることから別個体と考えられ、搬入品の可能性が高い。砲弾形で、口縁部と胴部の突帯間が幅広であることから、中部瀬戸内地方の沢田式に後出する段階のものとして推測される。ただし、胎土の観察からは在地での製作が窺われることを考慮すると、このプロポジションには、砲弾形に収斂される山陰の嗜好が反映されている可能性も考えられよう(註2)。



第209図 包含層出土突帯文深鉢(10)

2) 浅鉢形土器

浅鉢形土器は3点出土している。いずれも碗形・鉢形を呈する。620は碗形の体部を呈し、先細りの口縁端部は内湾する。内外面に二枚貝腹縁による丁寧なナデ調整が施される。断面に内傾接合の痕跡が認められた。621は碗形の体部に直線的に外傾する口縁を持ち、口縁端部は面取りされる。内外面は二枚貝腹縁による粗いナデが施される。622は鉢形の体部、「く」の字状に屈曲する肩部に外反する口縁が付く。



第210図 包含層出土突帯文浅鉢

3) 壺形土器

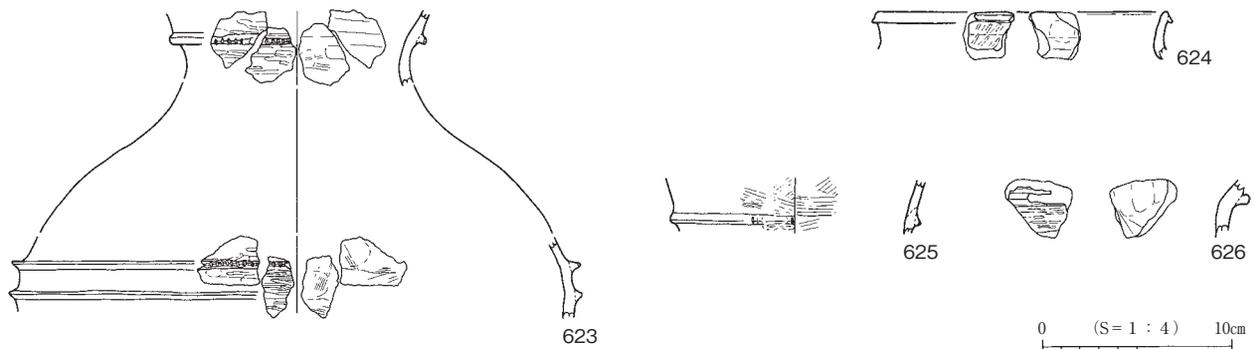
壺形土器は4点出土している。いずれも小片のみで、全体の形状が分かるものは1点のみである。623は球胴形の体部に頸部は緩やかに屈曲し、外傾する口縁が付くタイプである。口縁から下がったところに刻目突帯が付く。体部の最大径部位には二条の貼付突帯が巡る。上位の突帯にはH類のV字状の刻目突帯が付く。下位の突帯の残存部分には刻目は認められなかった。いずれの突帯も上下から押さえている。外面にはミガキが施される。624は口縁部小片、屈曲する頸部に、短くわずかに外傾する口縁が付く。口縁端部に接する部分に無刻目の突帯が貼り付けられる。突帯は上からの押さえで、外面にはミガキ調整が施される。625は長頸壺の頸部である。やや外傾する頸部にH類のV字状の刻目突帯が付く。内外面に二枚貝腹縁による横方向のナデが施される。626は口縁部小片、外反する口縁の端部から下がったところに無刻目突帯が貼り付く。突帯は下からの押さえで、頸部外面には横方向のミガキ調整が施される。

(註)

- (1)平井泰男2000 「中部瀬戸内地方における縄文時代後期末葉から晩期の土器編年試案」『突帯文と遠賀川』土器持寄会論文集刊行会
- (2)濱田竜彦氏の御教示による。

〈引用・参考文献〉

- 濱田竜彦1999「古市河原田遺跡出土の突帯文土器について－古市河原田子規の提唱」『古市遺跡群1』鳥取県教育文化財団調査報告書59 財団法人鳥取県教育文化財団
- 濱田竜彦2000「因幡・伯耆地域の突帯文土器と遠賀川式土器」『突帯文と遠賀川』土器持寄会論文集刊行会
- 濱田竜彦2008「中国地方の凸帯文土器と地域性」『古代文化』第60巻第3号 古代学協会
- 濱田竜彦ほか2013『本高弓ノ木遺跡（5区）I』一般国道9号（鳥取西道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 鳥取県教育委員会
- 米子市教育委員会他編1986『目久美遺跡』米子市



第211図 包含層出土突帯文壺

第2節 弥生時代の遺物（第212～216図）

当該期に帰属する遺物は、北側谷部の黒褐色土及び黒色土（Ⅳ～Ⅴ）層中から多く出土している。特に前期～中期にかけての遺物は完形に近いものなども出土していることから、近接域に当該期の遺構が存在する可能性が高い。

627～643は前期の甕類である。627は遠賀川式土器の小片、やや内傾する口縁に接して突帯が貼り付けられる。突帯下端はヘラ状工具によるV字状の刻目が施される。628は直立気味の口縁部に突帯が貼り付けられる。629～635は逆台形の器形に僅かに「く」の字状に外反する口縁が付くタイプで、頸部直下にはヘラ状工具による数条単位の凹線が施される。口縁に刻みがつくものとなないものがある。629は8条の横位の凹線下端に棒状工具による列点文が、632は4条の横位の凹線下端に波状文が施される。633は口縁部の刻みが幅広の楕円形を呈する。636～642は口縁に最大径を持ち、胴がやや張る長胴型の器形に「く」の字状に外反する口縁が付くタイプである。640は体部にヘラ状工具による連続刺突文が施される。642は頸部の屈曲が大きい。

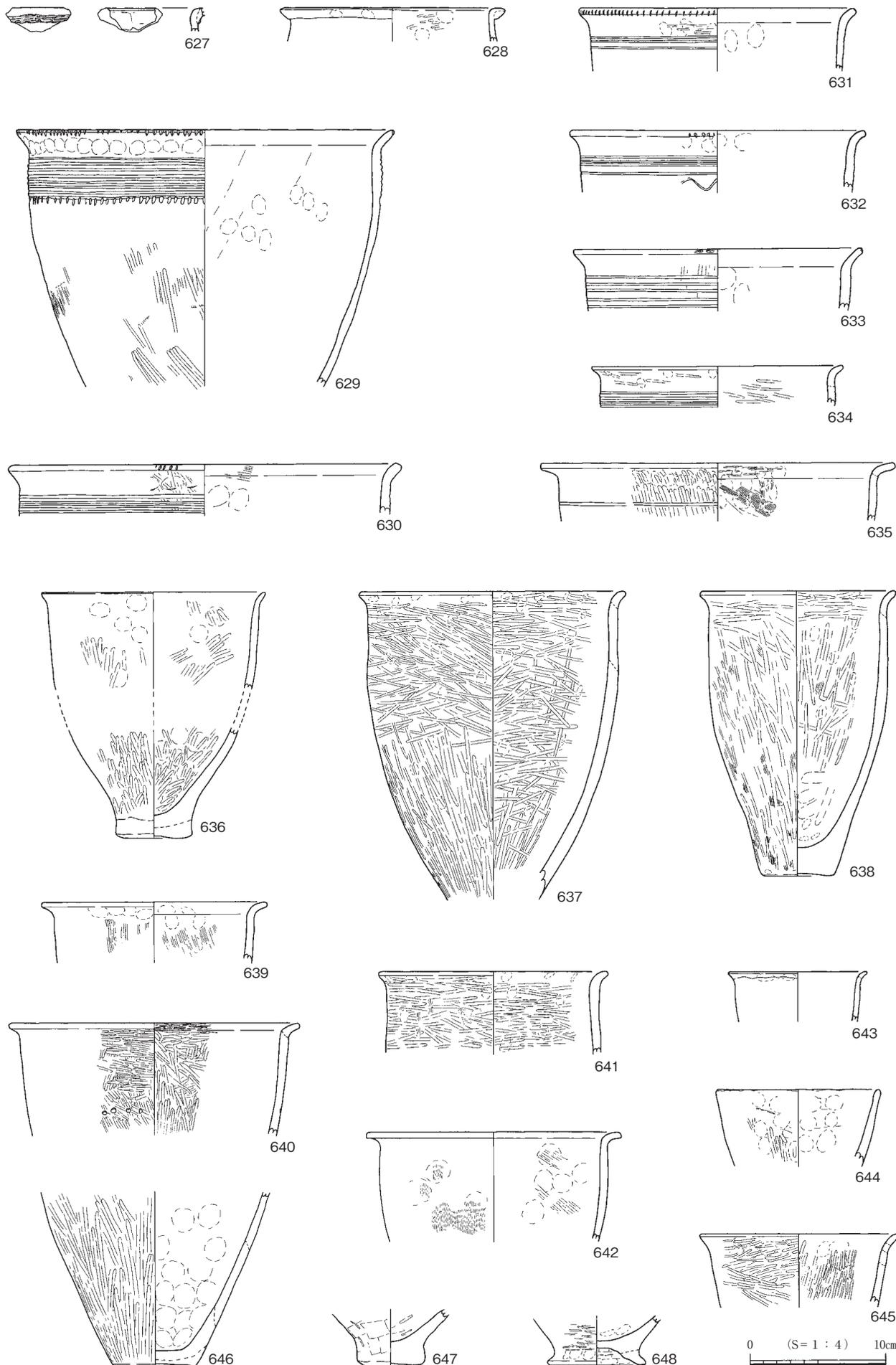
644～645は小型の鉢類である。644は口縁部が直線的に外傾、645は口縁が緩やかに外反する。646～648は甕の底部、647は厚底で柱状、648は上底で高台状を呈する。

649～678は前期～中期の壺類である。649は球胴型の体部に直線的に外傾する単口縁が付く。肩部にハケ状工具による列点文が5条施される。650は面取りされた口縁端部に1条の凹線が施される。651は口縁部が緩やかに外反する。652は広口壺、外反する口縁端部下端にはヘラ状工具による刻みが、口縁外面にはハケ状工具による斜状の刺突文が施される。653～656は外反する口縁端部に斜格子文や羽状文、山形文等の装飾が施される。657は装飾壺の口縁部、大きく開く口縁内面に突帯が装飾的に貼り付けられるが、破片のため文様構成は未詳である。口縁端部には波状文が、口縁内面には2個単位の未貫通の穿孔が施される。658は口縁部外面に二条の貼付突帯が巡る。突帯の形状は断面三角形を呈する。659は頸部に断面三角形の貼付突帯が巡る。660は大きく開く口縁端部に3条の沈線が巡る。661は球胴型の器形の頸部付け根に指頭押さえが施された貼付突帯が巡る。肩部には櫛状工具による連続刺突文が3条巡る。662は球胴型の器形の肩部に櫛状工具による波状文と、下端に横位の凹線文が施される。663は肩部に板状工具の小口による押引文が施される。664・665は頸部に指頭押さえが施された貼付突帯が巡る。666は頸部に線刻が施されるが、全体の意匠は未詳である。667は頸部付け根に断面三角形の刻目突帯が貼り付けられる。668は肩部の破片、5状の櫛描平行沈線区画内に鋸歯文が施される。669は肩部に3条の貼付突帯が巡り、棒状浮文と竹管文?が施される。670・671は肩部に櫛状工具による沈線区画内に山形文や波状文が施される。672は肩部に線刻が施されるが、破片のため意匠は不明である。

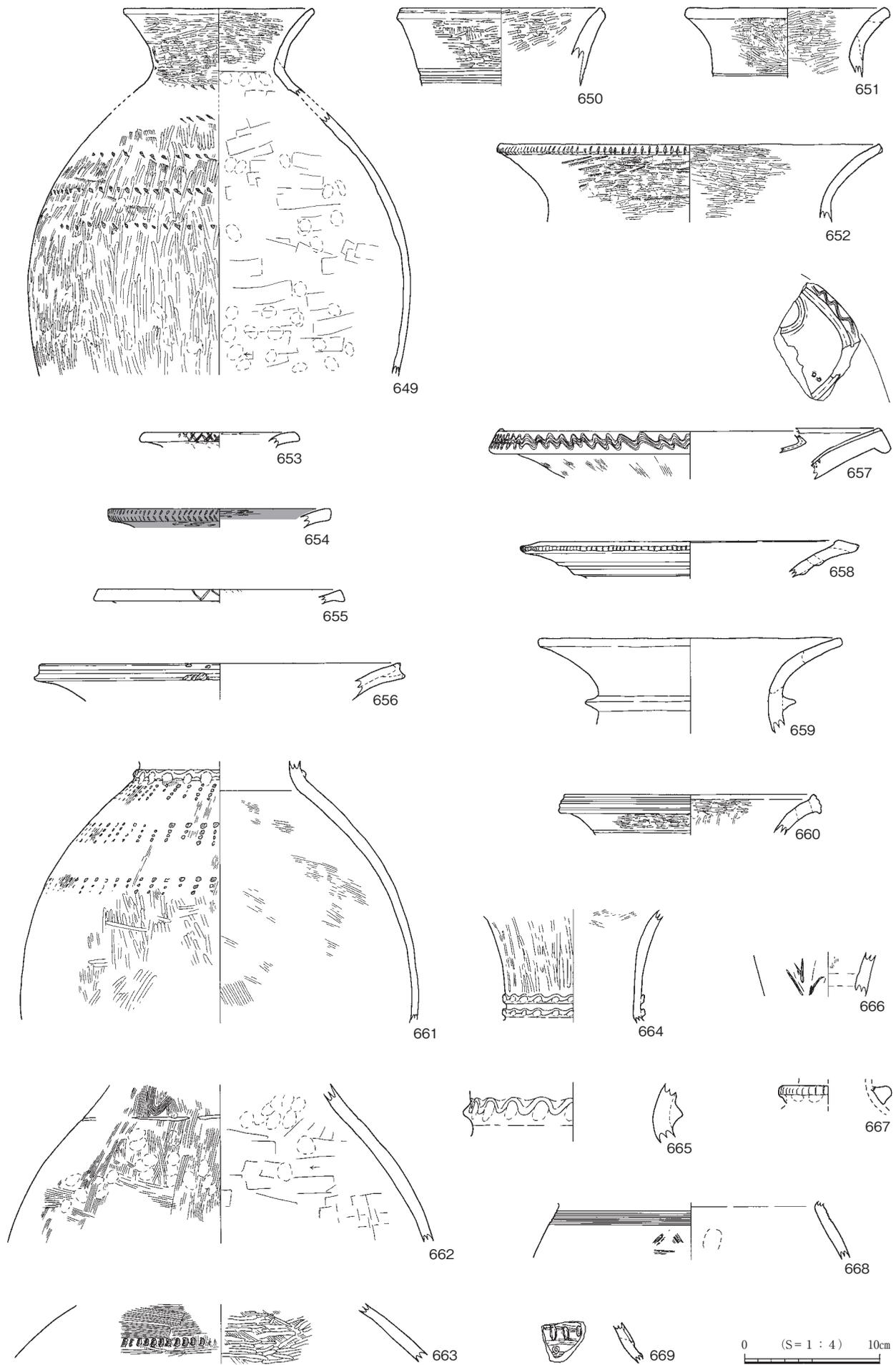
673は短頸壺、直立気味の口縁はやや肥厚し、波状文、沈線文、刺突文が巡る。674～678は無頸壺、口縁は内湾し、2個単位の穿孔が施される。676は円形浮文が貼り付けられる。678の外面には茶系の赤彩が施される。

679～693は中期の甕類である。長胴で胴張りの器形を呈する。679～684は口縁端部が逆L字状に外反するタイプ、685～693は薄手で外面に強く屈曲するタイプである。口縁端部に刻みや、肩部に櫛描直線文や刺突文が施されるものもある。

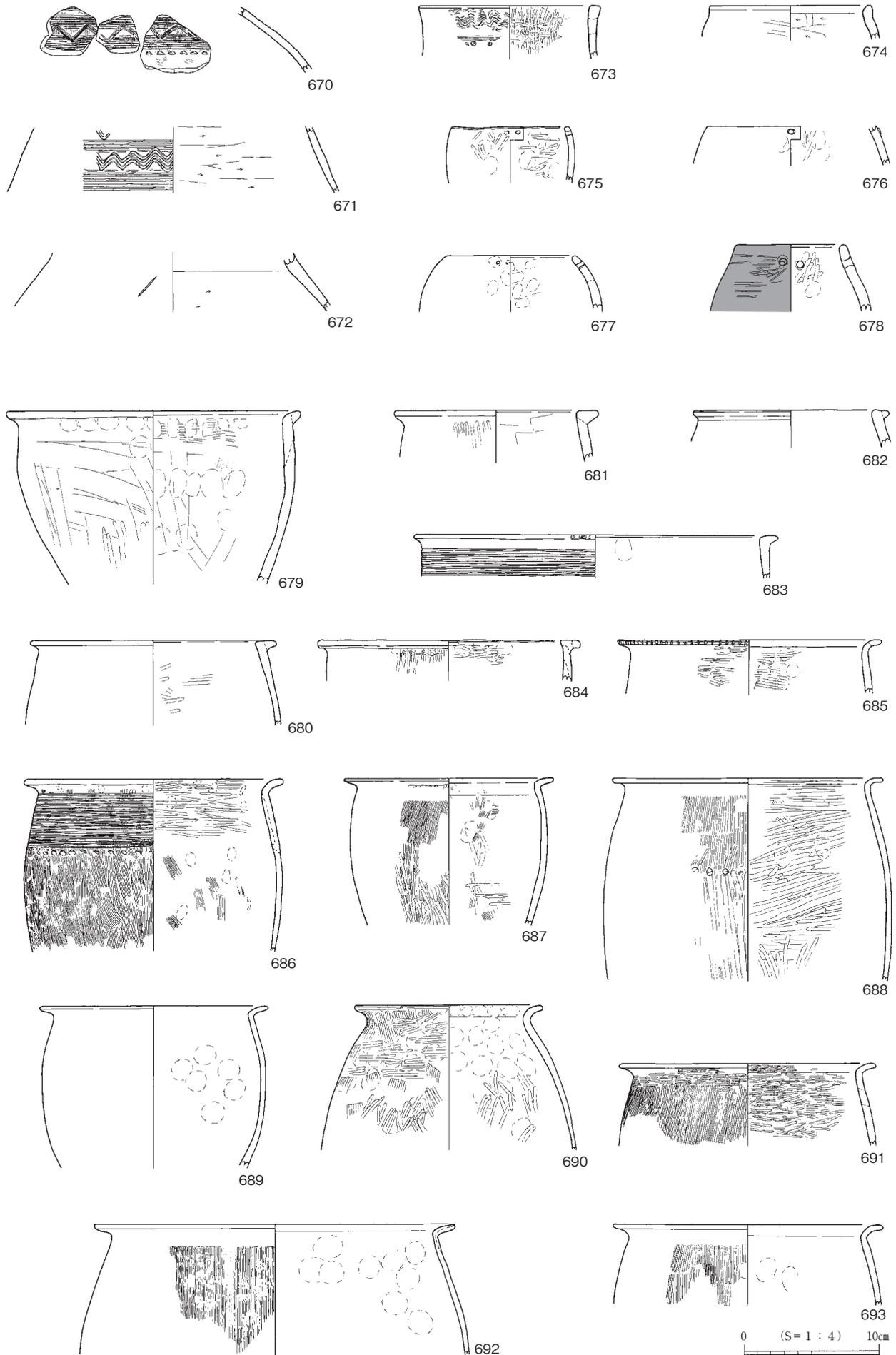
694～702は後期から終末期の甕類である。694～696は「く」の字状に屈曲する頸部に、内傾する複



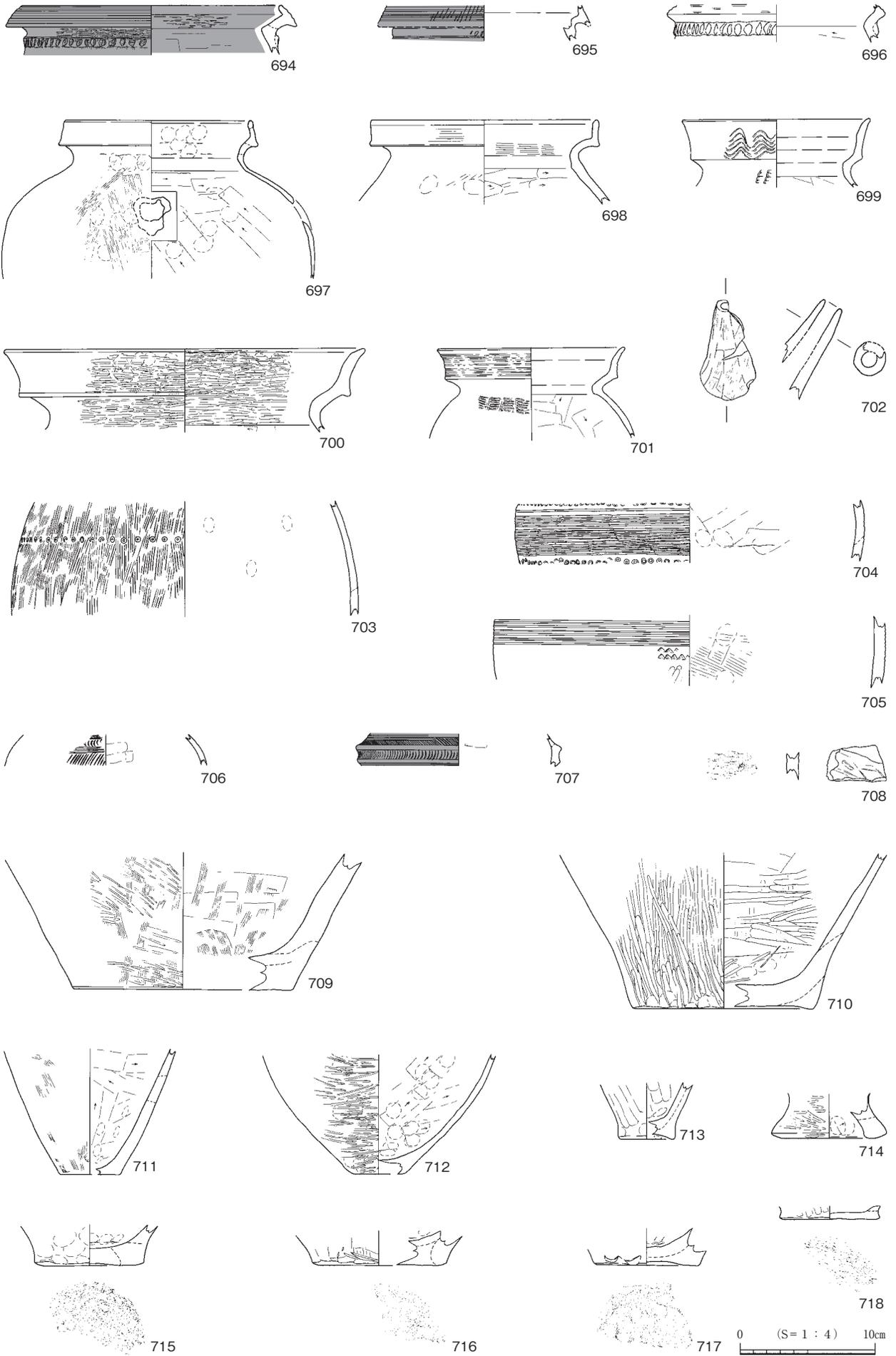
第212图 包含層出土弥生土器(1)



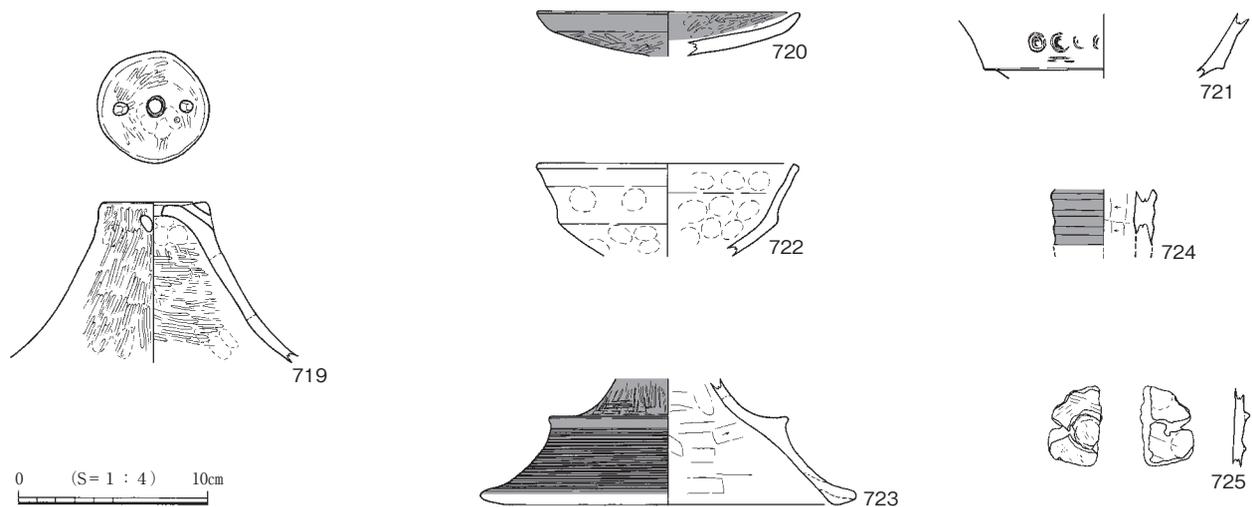
第213图 包含層出土弥生土器(2)



第214图 包含層出土弥生土器(3)



第215図 包含層出土弥生土器(4)



第216図 包含層出土弥生土器(5)

合口縁が付く器形で、口縁の上下端は拡張する。複合口縁部には平行沈線や斜状文が、頸部には刻目突帯が貼り付けられる。697は肩部～胴部上半に最大径を持ち、複合口縁部が内傾する。肩部に焼成後穿孔が施される。698は口縁部が垂直に立ち上がる。699～701は口縁部が外反するタイプ、口縁部に波状文、肩部にハケ状工具による押引文が施される。702は注口土器の注口部である。

703～705は甕の体部、櫛描直線文や刺突文が施される。706は装飾壺の体部で、櫛描沈線区画内に半裁竹管文、斜行文が施される。707は体部最大径部位に断面三角形の貼付突帯が2条巡る。708は粘痕が内面に残る甕胴部破片である。709～718は甕底部、平底のものが主体で、714は上げ底で脚台状を呈する。717は底部から周縁にかけて外面に指頭圧痕が明瞭に残る。718は外面に粘痕が認められる。719は蓋、天井部は平坦で体部は大きく開く。天井部中央に1か所、周縁部に2か所焼成前穿孔が施される。周縁部の孔は体部に斜めに貫通している。

720～722は高坏、体部に丸みを持ち内湾するものと稜を持つものがある。721は体部に同心円状のスタンプ文が施される。723～724は器台、723は脚台部が幅広く複合化し櫛描直線文が施される。724は接合部外面には凹線文が施される。725は壺の体部破片か。外面に歪な輪状の浮文が貼付けられる。

第3節 古墳時代～古代の遺物（第217～222図）

当該期に帰属する遺物は前代に比べ、調査区全体から出土している。これは当該期の遺構が調査区に分布していることにも起因している。出土遺物のうち、特筆すべきはミニチュア土器である。高さ2～4cm程で、いずれも坏等の什器類、煮炊用の竈や甑等の食に関する生活用具である。これらの土器は中央谷部と北側谷部の黒色土の緩斜面域から出土しており、この部分で神饌等の祭祀が行われたことが推測できる。

1) 土師器類（第217～219図）

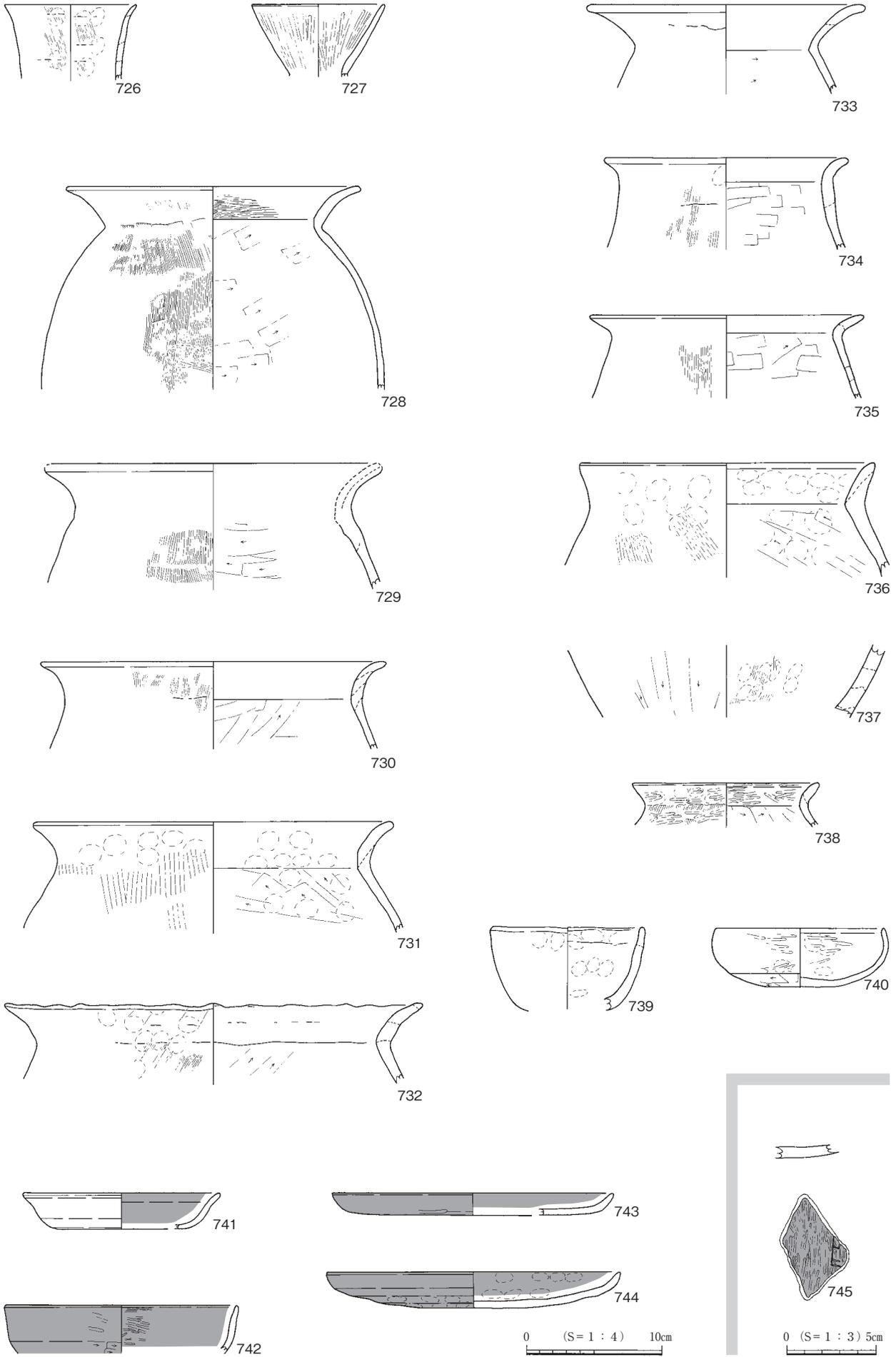
726は直口壺、口縁部は長く直立気味に外傾、端部は外反する。727は小型器台、精製した胎土を持つ。728～738は単口縁の甕類である。728～732は球胴の体部に「く」の字状に屈曲する頸部に、緩やかに外反する口縁を持つ。733は口縁が長く緩やかに外反するタイプ、734は長胴形の体部に口縁は短く外反する。735は口縁部が短く直線的に外傾する。736は甕としたが、器壁が厚く、調整も粗いことから甑の可能性もある。737は甕体部下半、破片資料であるが外面に縦方向のケズリで面取りが施される。角閃石を多く含む胎土や色調も異なることから、搬入品の可能性が考えられる。738は小型の甕、「く」の字状に屈曲する頸部に短く外反する口縁が付く。

739～742は坏類である。739の体部は深めで器壁は厚い。740は丸味を持つ体部に内湾する口縁が付く。741は丸味を持つ体部から口縁は外反するタイプである。742は深めの体部で、口縁は直立気味に外傾する。743～744は赤彩の皿、外面は内湾気味に立ち上がる。745は皿の底部破片と思われる。外面に焼成後の線刻が施される。

746は甑の狭口部、体部との境に段を持ち、口縁部は強いナデが施される。747は棒状で端部が湾曲していることから、把手の可能性が高い。748・749は甕か甑の把手部分、扁平で上方に湾曲している。750～752は甑の把手、短く三角錘状のものと、長く上方に湾曲するものがある。753～756は土製三叉支脚の把手及び突起部分である。757～764は移動式竈、庇部分と袖部分、裾部分がある。

765～775は手捏ねのミニチュア土器である。765～769は坏、丸底で口縁は内湾気味である。766・767はJ-2グリッドの近接域から出土しており、胎土や形態も近似している。770は高坏、脚部は斜めに大きく開く。771は器台もしくは高坏であろうか。772は甑、体部両端に把手が付いている。773は移動式竈、僅か4cm程の大きさだが、掛口や焚口がしっかりと作られている。774は土製三叉支脚、把手まで精巧に作られている。775は縦断面がやや扁平で器形が不明瞭であるが、上部の凹みから坏か高坏のミニチュア品と考えられる。このうち、765の坏はE-6グリッドにおいて、同じくミニチュア土器の器台（771）と竈（773）と3点セットで出土した。また、近接地点から甑（772）と土製支脚（774）も出土しており、これらはいずれも同一の祭祀行為に伴うものと考えられる。

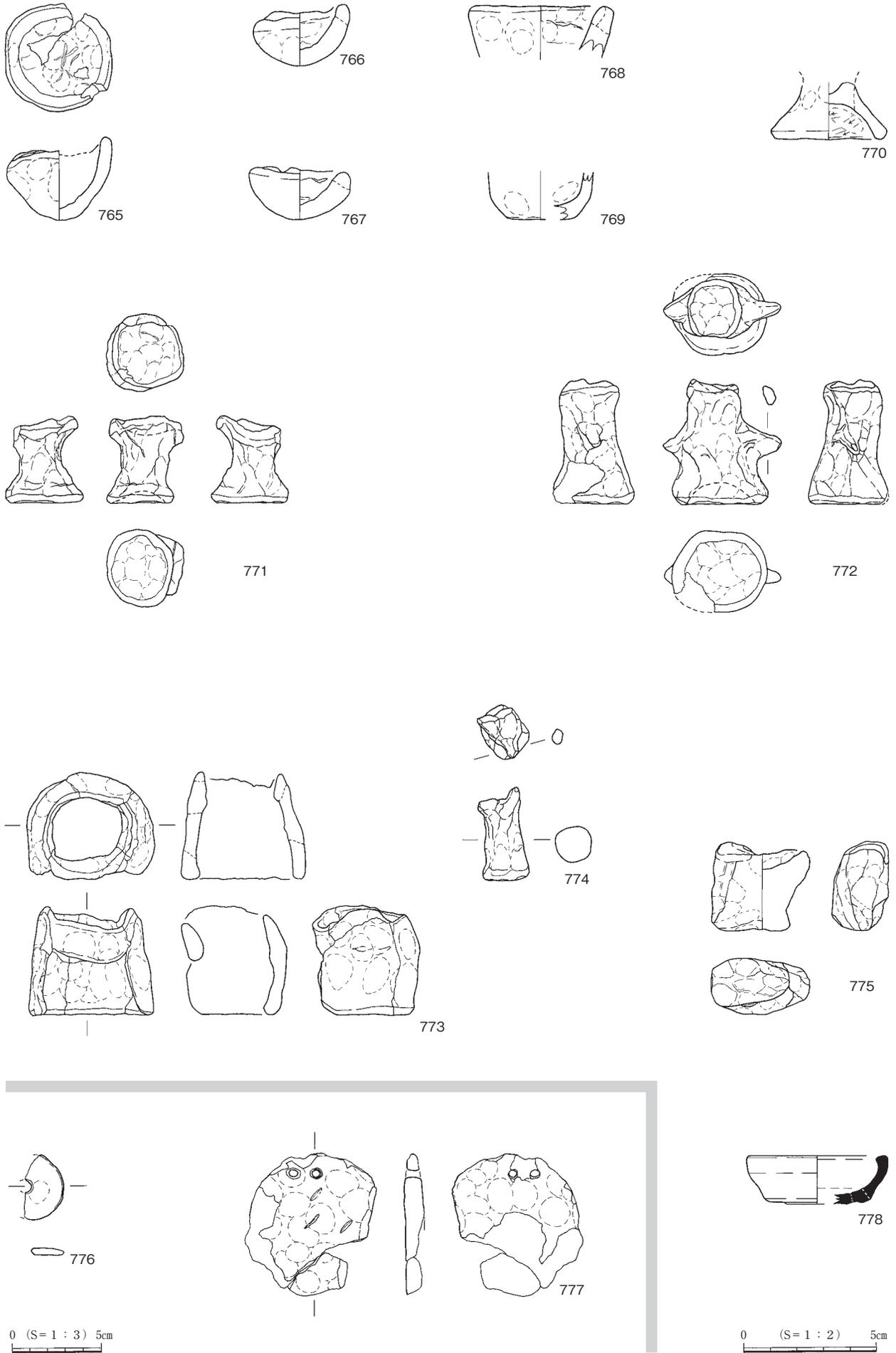
776は土製の紡錘車、中央に焼成前の円孔が開けられている。全体にナデ調整が施された精緻な作りである。777は円盤状の土製品、上端部に2個一対の焼成前穿孔が開けられている。全体に指頭痕や工具痕、爪跡などが残る粗い作りで、ナデ調整は施されていない。蓋の可能性も考えられる。



第217図 包含層出土土師器(1)



第218図 包含層出土土師器(2)



第219図 包含層出土土師器(3)

2) 須恵器類 (第219~221図)

778は須恵器のミニチュア品、坏である。体部は緩やかに内湾気味に立ち上がり口縁は内湾、端部はナデにより面取りが施される。

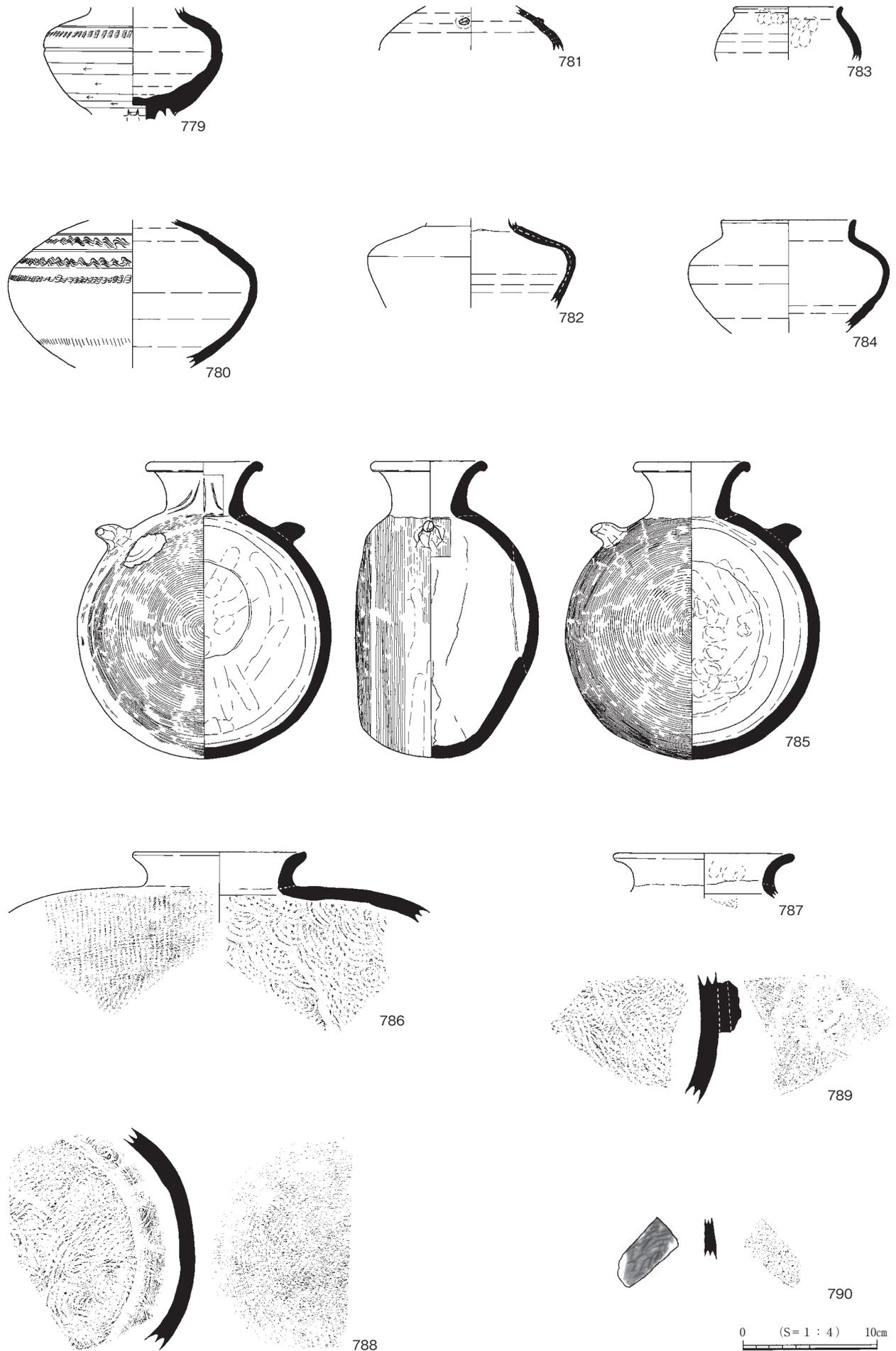
779~784は壺類である。779は脚付壺、肩が張る体部に台形透かしの入った脚台部が付く。肩部には沈線区画の押引文が巡る。6世紀前半頃のものか。780は算盤玉状の体部に沈線区画の波状文や押引文が施される。体部下半には不明瞭であるがハケ目状の工具痕が認められる。781は肩部に円形浮文が貼り付く。782は肩が張る器形で、内面に漆が付着していることから漆貯蔵用の壺と思われる。783・784は短頸壺である。肩が張る体部に短く直立気味に外傾する口縁が付く。

785はほぼ完形の提瓶である。口縁は緩やかに外反し口縁は玉縁状、把手は鍵状を呈する。頸部から口縁にかけての外面に焼成前の線刻が施される。ヘラ記号であろうか。786~788は横瓶、786は横長の体部に短く外反する口縁が付く。789~790は甕の胴部破片、789は焼成時に焼台として置かれた須恵器胴部破片2個が付着している。790の内面には漆が厚く付着している。

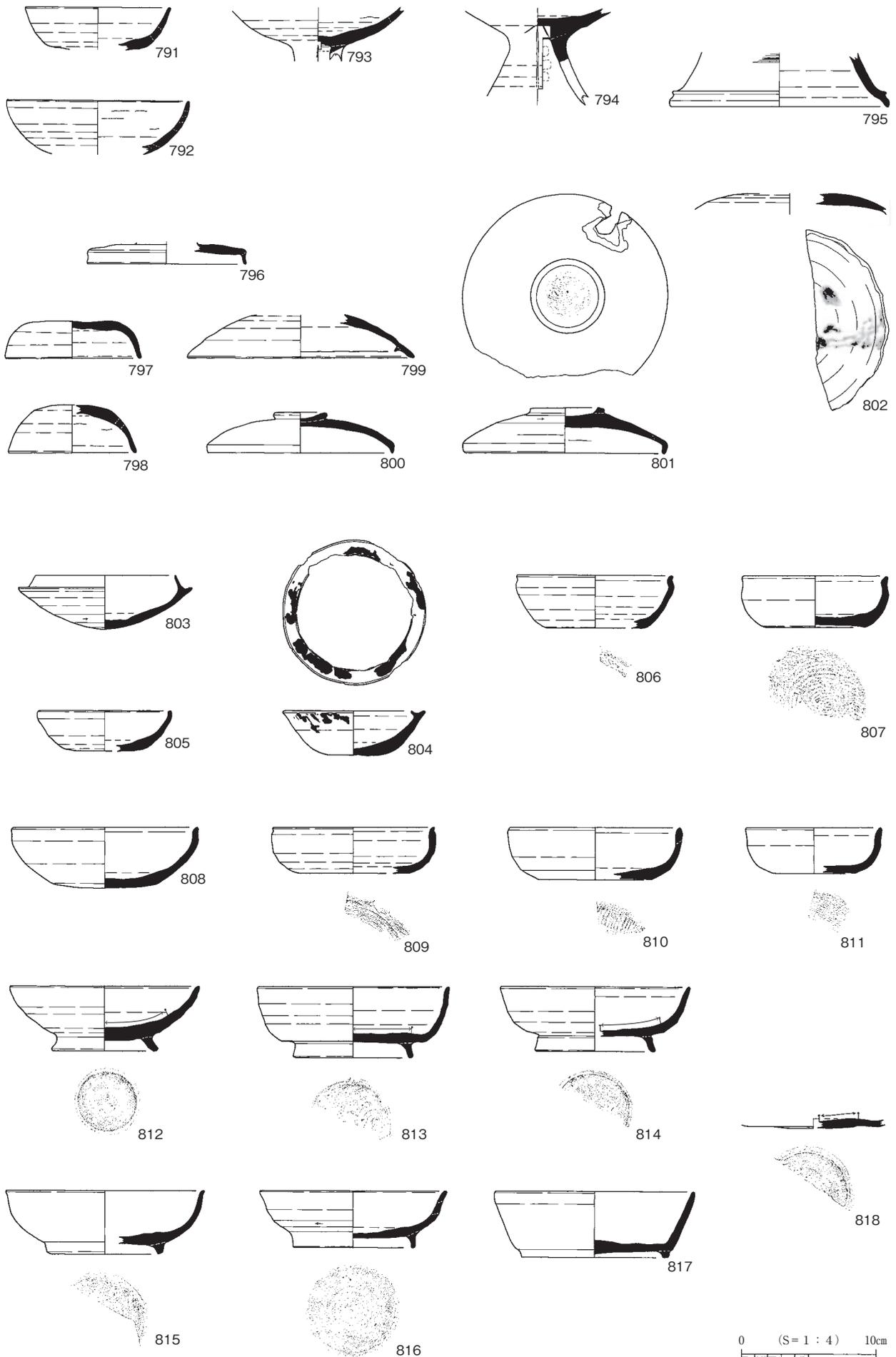
791~795は高坏、791~793は深めの丸みをもった坏部が付く。794の脚部の透かしは線状で一部未貫通である。795は脚端部が屈曲し凹線が施される。

796~802は蓋である。水平気味の天井部に直角に折れる口縁部を持つ。短頸壺等の蓋であろうか。797~798は丸味を持つタイプ、799は扁平な器形に口縁内面に内傾退化したかえりをもつ。800~801は天井部に輪状のつまみが付き口縁は短く垂直に屈曲する。801は口縁付近に焼成後穿孔が認められる。802は蓋転用の硯、口縁部は打ち欠かれ、天井部内面には墨が付着している。

803~818は坏類である。803~804は口縁部に内傾する立ち上がりが付く。804は内面と口縁外面に漆が付着する。805は口縁部が内湾するタイプ、806~807・809は外底面回転糸切りで、体部は内湾しつつ端部は強いナデにより屈曲するタイプ、810~811は口縁が垂直気味のタイプである。808は外底面ヘラ切りの坏である。812~817は高台が付くタイプである。812は丸味を持つ体部にハの字状に開く。813は大型で体部は直線的に外傾し、底部外周より内側にハの字状の高台が付く。814は体部は丸味を持ちながら外傾し、底部外周より内側にハの字状の高台が付く。815は丸味を持つ体部に口縁端部はナデにより外反し、短く逆台形の高台が付く。816は丸味を持ち外反する体部に高く直立した高台が付く。817は直線的に外傾する体部に短く逆台形の高台が付く。818は外底面回転糸切りの坏を転用して硯にしている。



第220图 包含層出土須恵器(1)

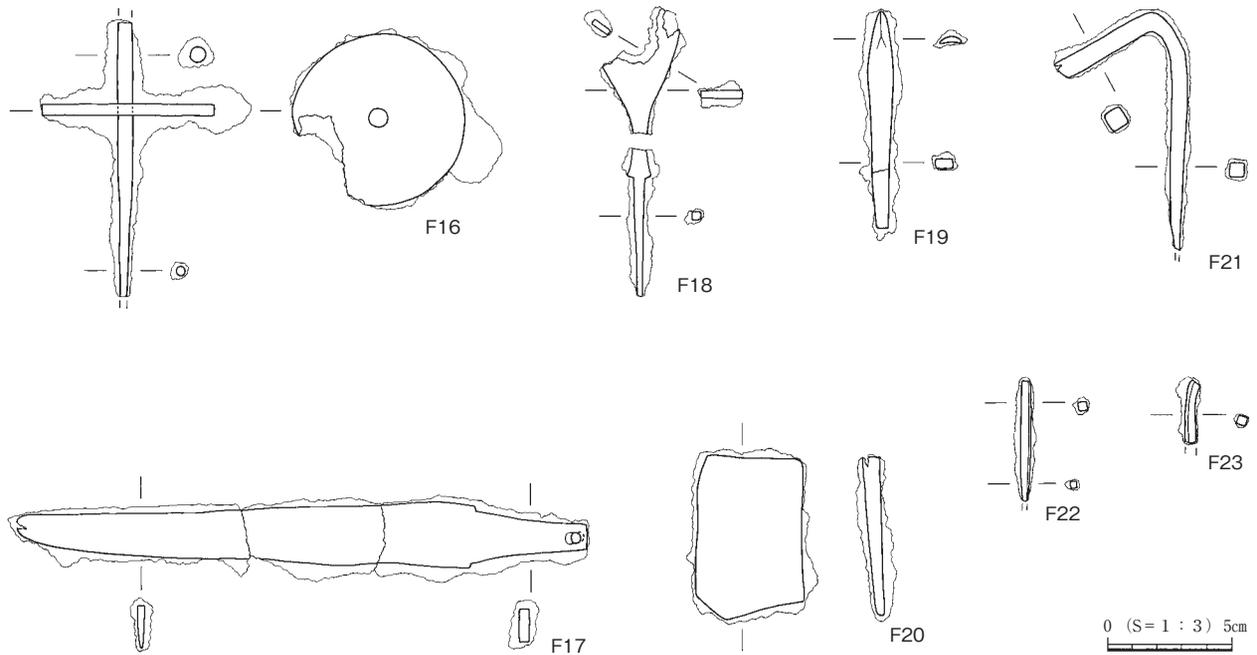


第221図 包含層出土須恵器(2)

3) 鉄製品 (第222図)

鉄製品については帰属時期が不明なものもあったが、出土層位からここに含めた。

F16は紡錘車、両端部は欠損するが、直径6.8cmの円盤に断面円形の軸が付く。F17は大型の刀子、茎部に目釘穴が穿たれている。F18は雁股式の鍬、有茎で鍬被は台形を呈する。F19は鉞、刃部は僅かに鑊状に広がり、鑄が認められる。遺存部分では側面観は身部上方から刃部にかけて直線的に続く。F20は板状の鉄片、F21~23は釘である。



第222図 包含層出土鉄器

第4節 遺構外出土の石器類（第223～232図）

本節では包含層出土の石器類及び石製品をまとめた。出土傾向としては、土器と同様で北側斜面の黒色土中に偏っている。また、出土石器類全体の組成分類も行い、遺跡全体の様相についても本節において述べることにした。

1) 遺構外出土石器

S56は凝灰岩製の石製品、白色の素材を円柱状に加工した後に全体を研磨している。形状と色調から基石等の類であろうか。S57は花崗岩製の石製品、薄板状で台形の素材全体を研磨し、上辺部に孔を開けている。ペンダントなどに使用したものであろうか。

S58はサヌカイト製の有舌尖頭器、小型で表裏面の側縁部を粗く調整している。S59～67は石鏃、黒曜石製とサヌカイト製がある。凹基無茎が主体で、長幅比の平均は1.3と細身である。両側縁は内湾するタイプ、外湾するタイプ、直線的なタイプがある。S62は平基無茎で、全体に風化が激しい。S68は黒曜石製の石鏃未製品、涙形で裏面の基部の抉りが未調整である。S69～74はスクレイパー、S70がサヌカイト製で、それ以外は黒曜石製である。剥片素材の両面を調整し、縁辺部両面に二次加工による押圧剥離痕がみられる。S70は下縁部には細かい平行剥離を加え、上縁部には粗い押圧剥離を加えている。下端は直線形を呈する。S73は横長三角形の剥片素材の下縁部に二次加工を施し、表面は階段状剥離が、裏面は平行剥離が認められる。S74は元礫面の残る円形の剥片の下半部に、両面から鱗状の押圧剥離を加えている。

S75は黒曜石製の石錐、先端部を欠損する。縦長の剥片素材を二次加工している。S76～85は楔形石器、S78は玉髓製、それ以外は黒曜石製である。S76は下端部に、S78は表面の稜線部と右側縁及び下端に、S80は両側縁及び下端部に、S82は右側縁と下端に、S83・84は下端に潰しを加えている。S86～89は黒曜石製の二次加工剥片、S86は三角形の剥片素材の腹面縁辺部に細かい平行剥離を加えている。S89は比較的大型の剥片素材の側縁部に細かい鱗状の押圧剥離を加えている。S90～97は黒曜石製の石核である。S91は細かい押圧剥離痕の状態から楔形石器の可能性も考えられるが、歪な形状や潰しがないことなどから石核とした。S97は上端と下端に打面が認められる。

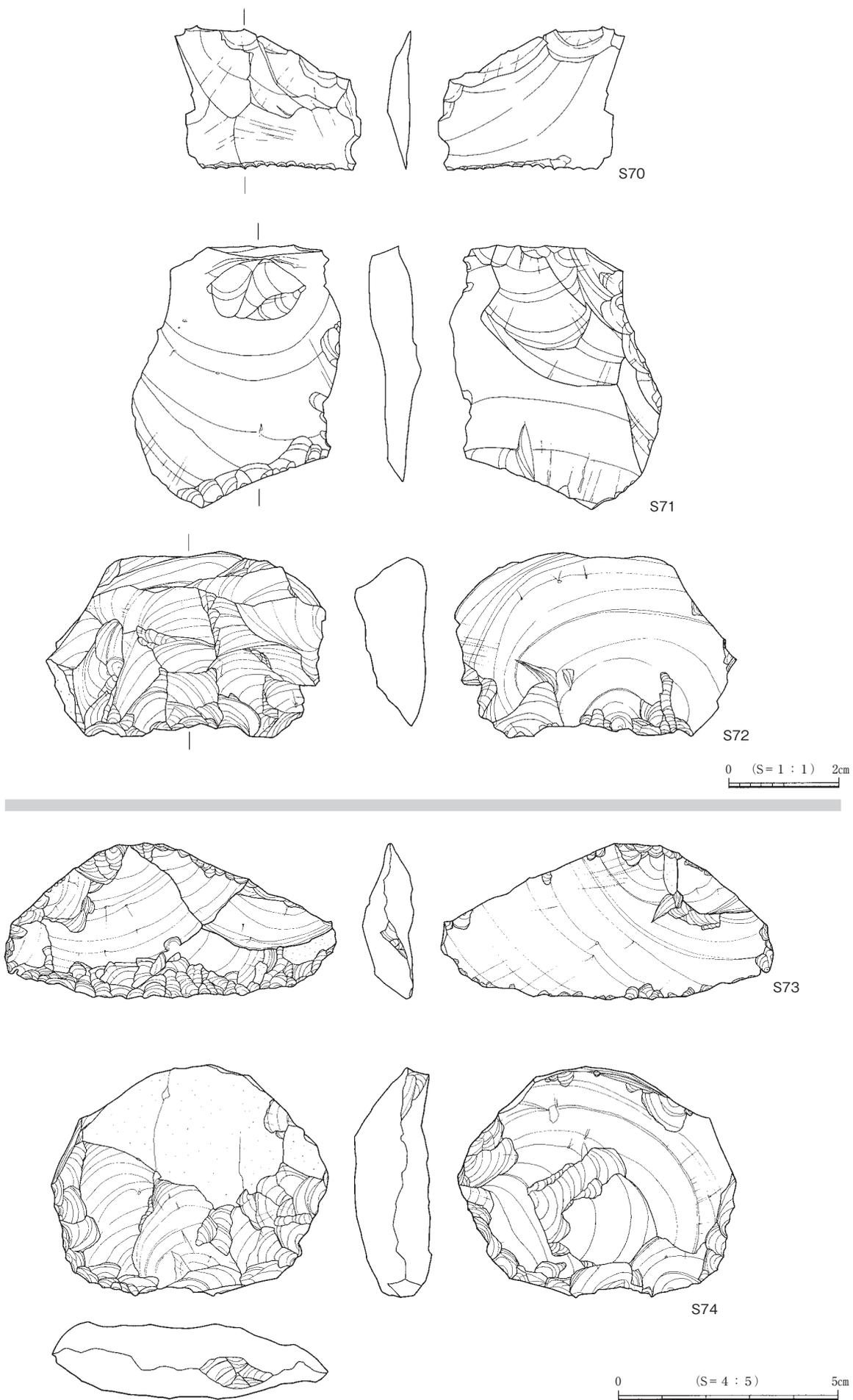
S98・99は石匙、S98は緑色片岩製、つまみが付かない方の側縁部を大きく横に張り出させ、全体の形状は二等辺三角形を呈する。下縁部も両面から細かい押圧剥離を加え、つまみ部分の作出も丁寧な調整により茎状に突出させている。S99は安山岩製の石匙、下縁部を大きく横に張り出させ、側縁部に調整を施している。

S100～112は石鏃で、実測し得たものが13点と比較的多く出土した資料である。すべて同質の板状安山岩製で、大きさや形状に規格性が認められることから、ある程度製品化したものが持ち込まれたようである。S100～104は撥形を呈する。裏面に素材面や節理面を大きく残置したもの（S101～103）が多い。S104は下部の表裏面に磨痕が認められる。S105～107は短冊形を呈する。撥形と同様、裏面に素材面や節理面を大きく残置したものが多い。S107は裏面全体に磨痕が認められ、左側縁部には敲打痕も認められる。S108～109は破片で全体の形状は不明だが、大型のもので表裏面に自然面が残る。S110～112は中小型、S110は風化が激しい。S112は下半部の表裏面に磨痕が認められる。

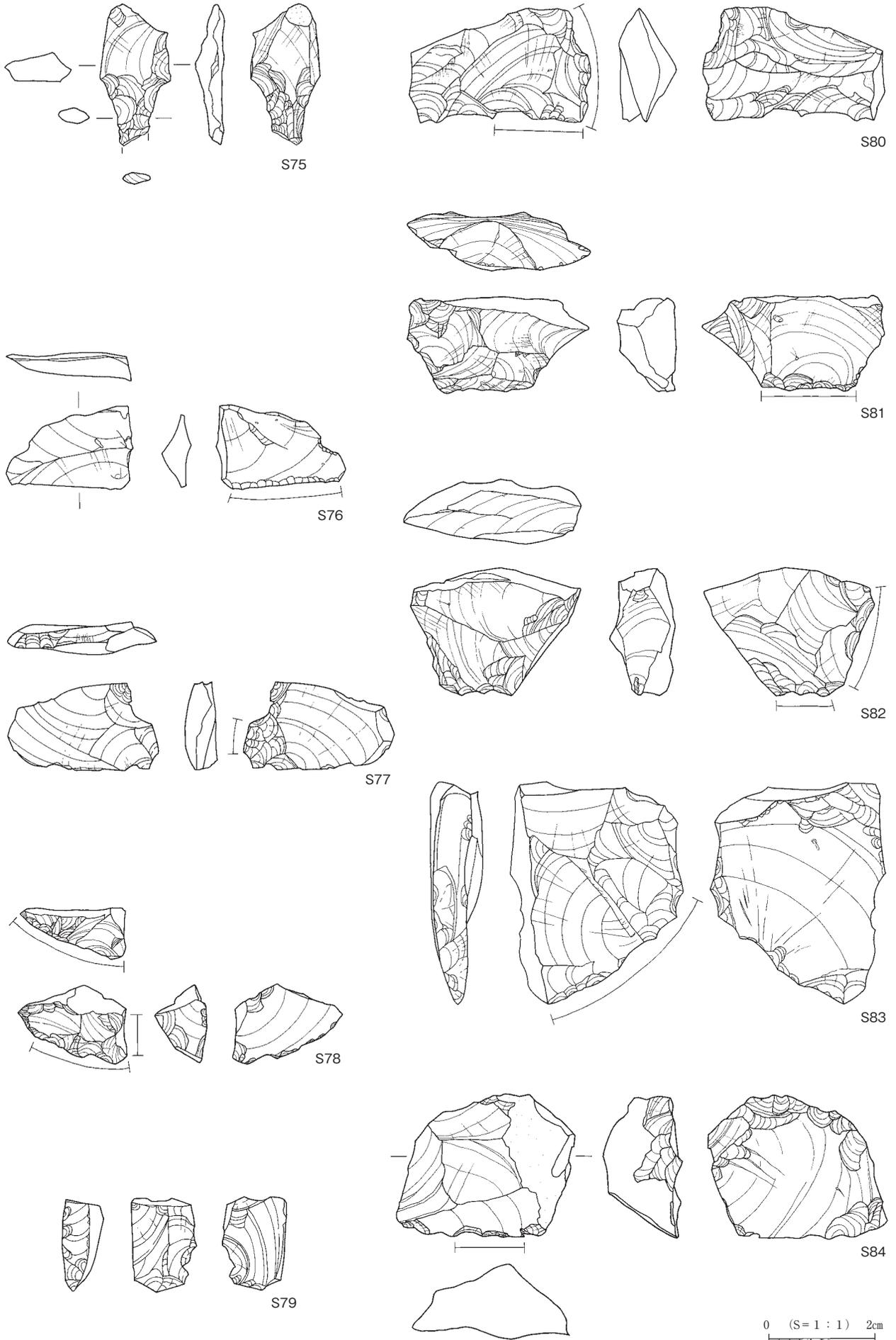
S113は結晶片岩製の磨製石斧、刃部を欠損するが、柱状で基部に抉りが入っている。S114はデイ



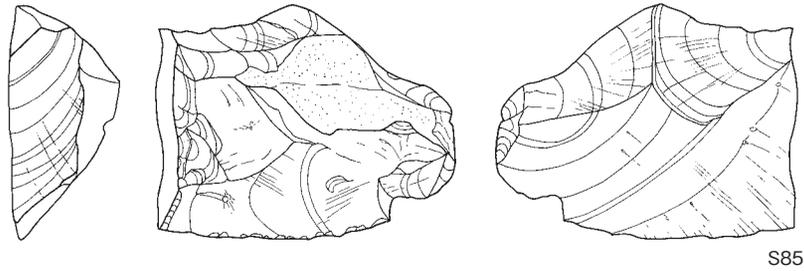
第223图 包含層出土石器(1)



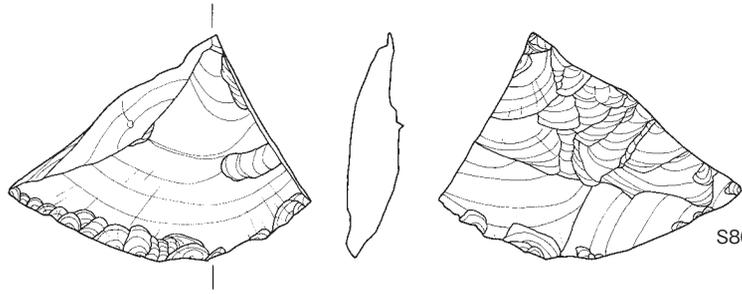
第224图 包含層出土石器(2)



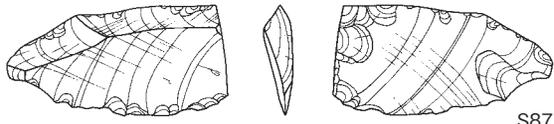
第225图 包含層出土石器(3)



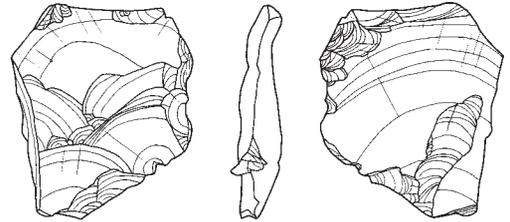
S85



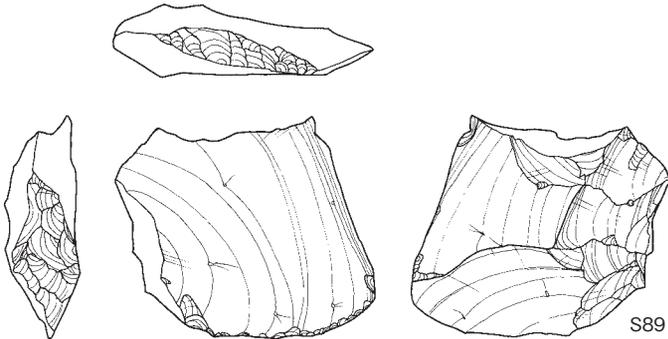
S86



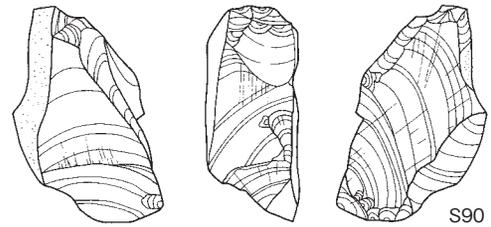
S87



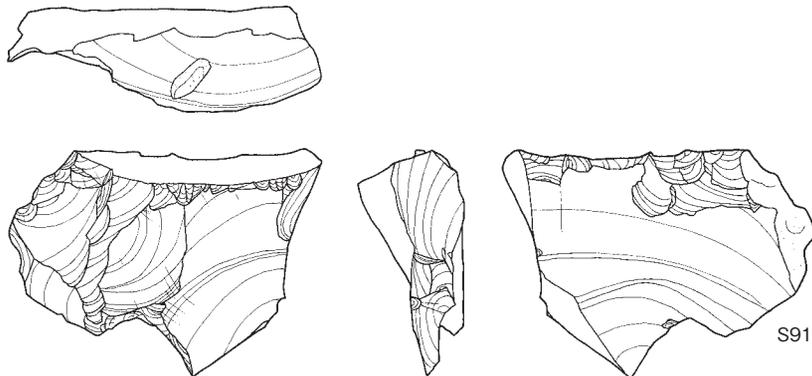
S88



S89



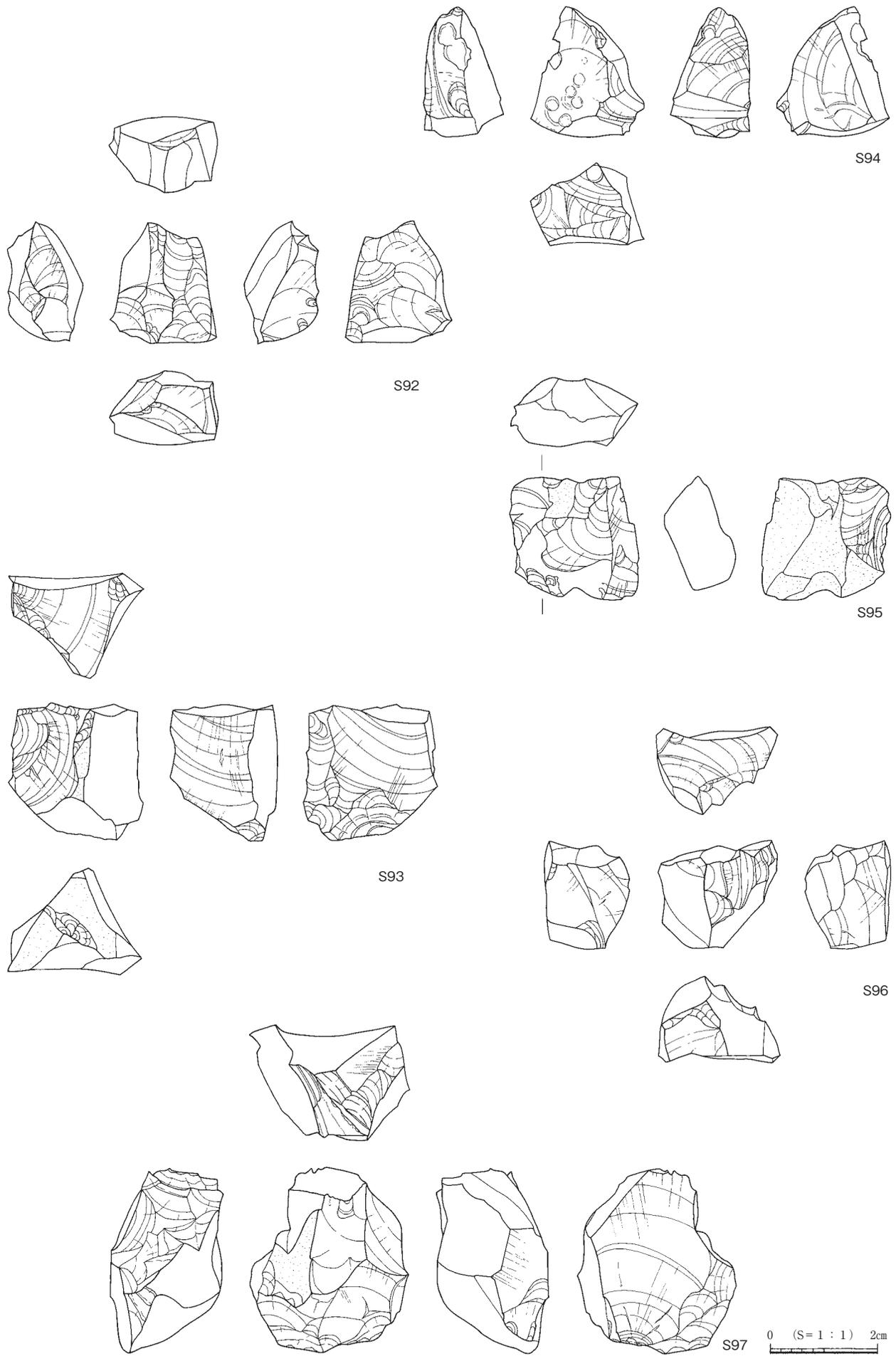
S90



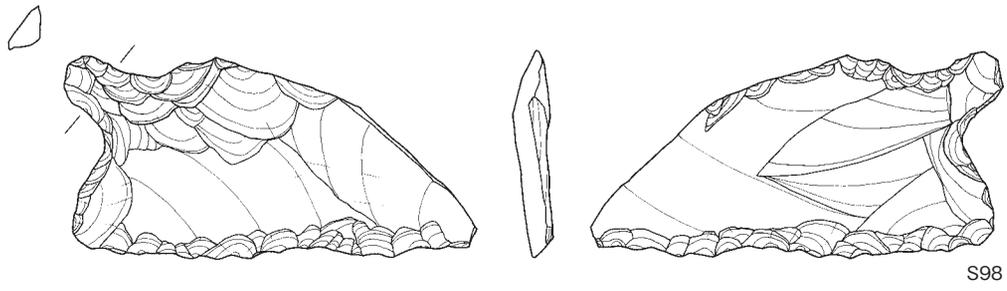
S91

0 (S=1:1) 2cm

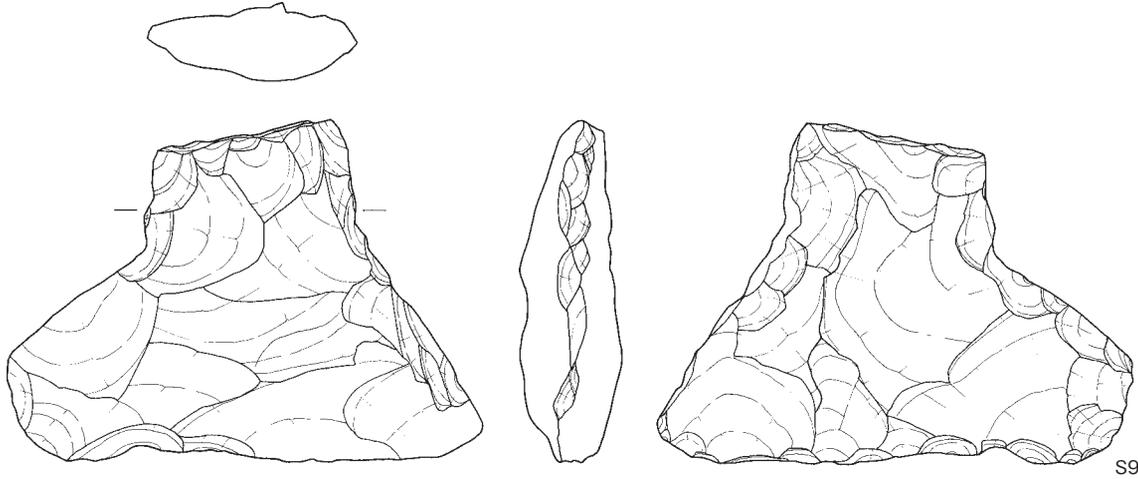
第226图 包含層出土石器(4)



第227图 包含層出土石器(5)

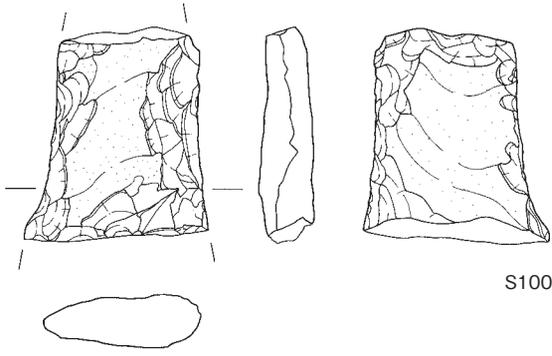


S98

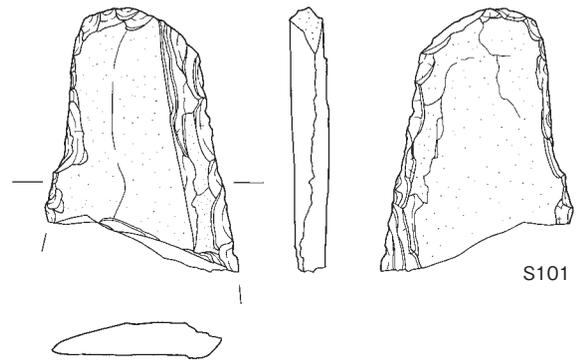


S99

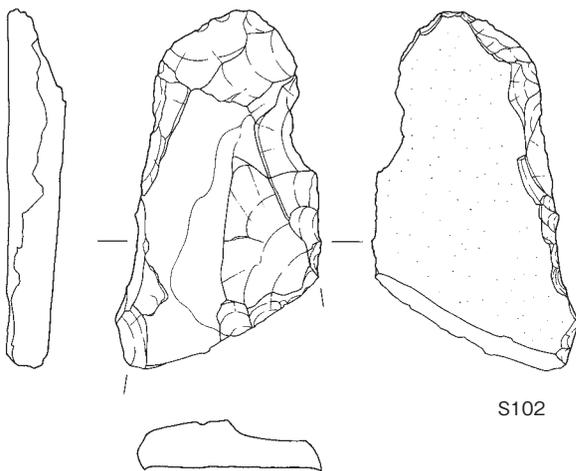
0 (S=2:3) 5cm



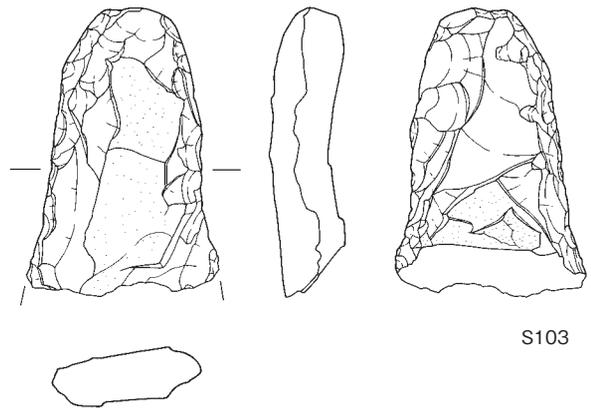
S100



S101



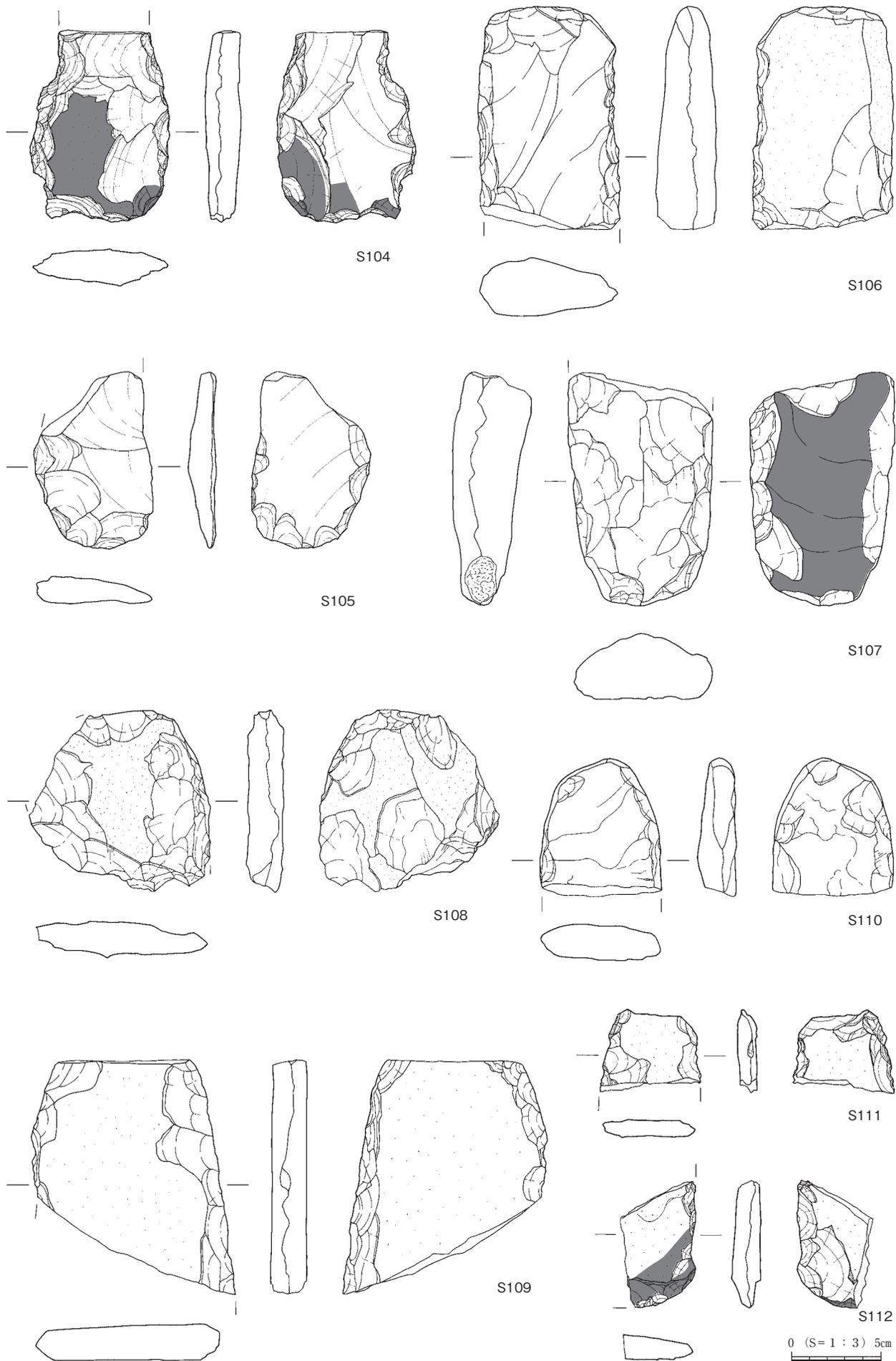
S102



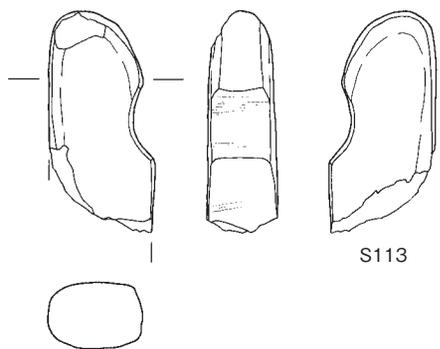
S103

0 (S=1:3) 5cm

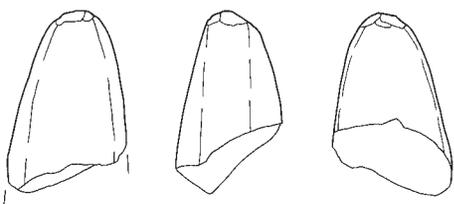
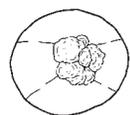
第228図 包含層出土石器(6)



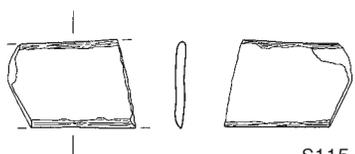
第229図 包含層出土石器(7)



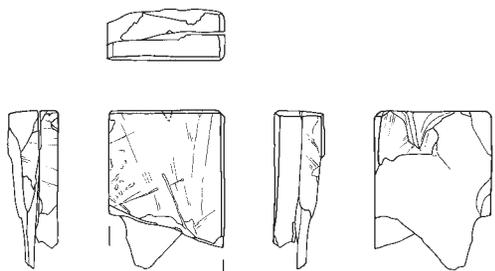
S113



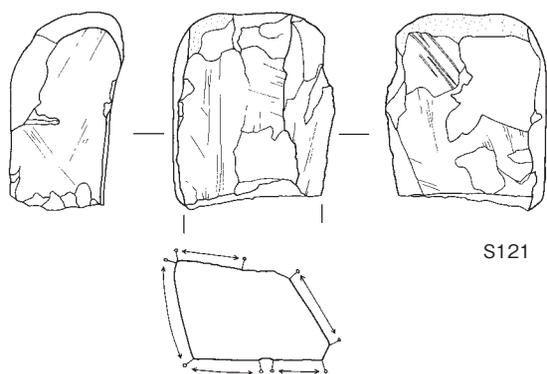
S114



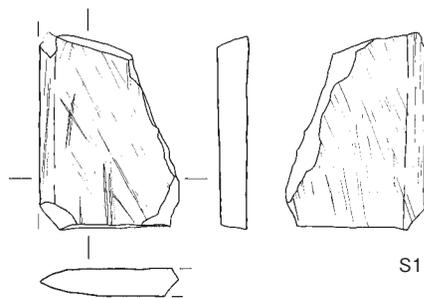
S115



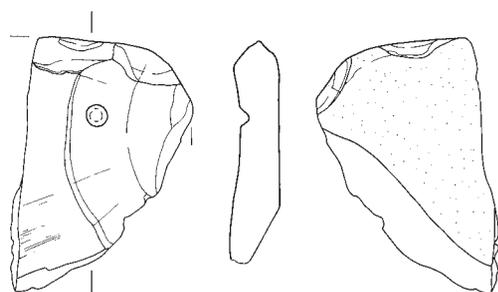
S119



S121

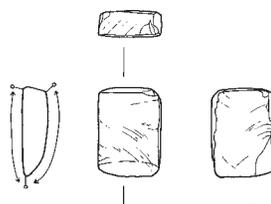


S116

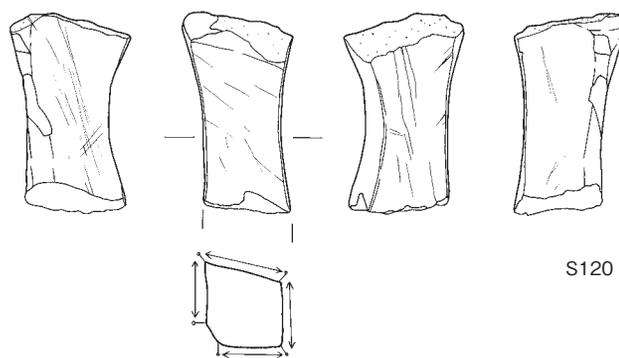


S117

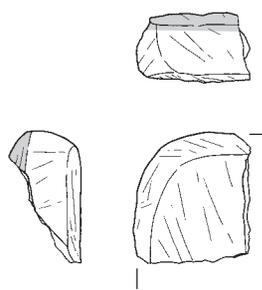
0 (S=2:3) 5cm



S118



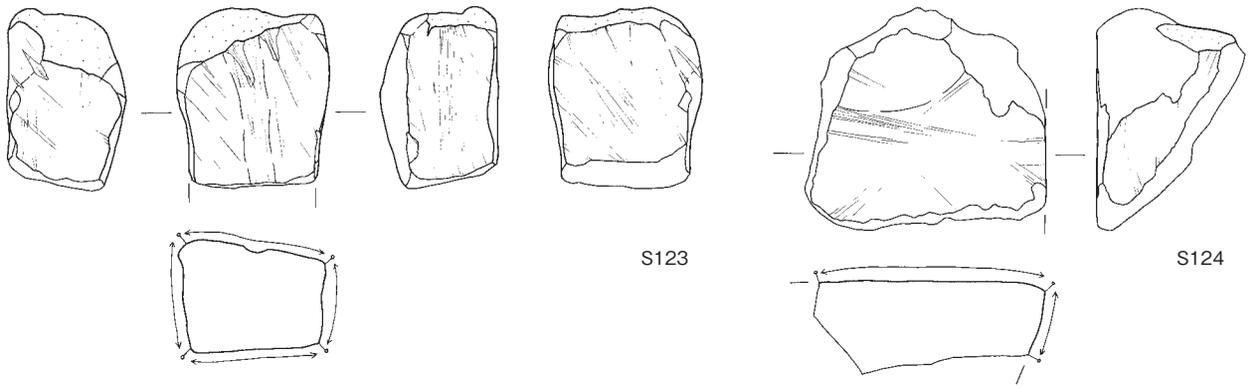
S120



S122

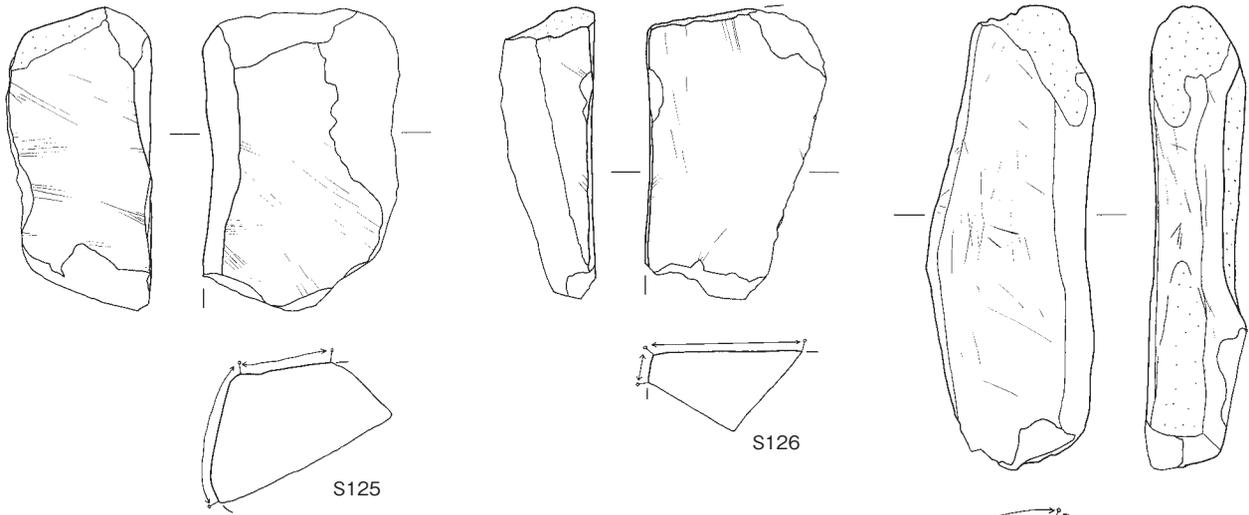
0 (S=1:3) 5cm

第230図 包含層出土石器(8)



S123

S124



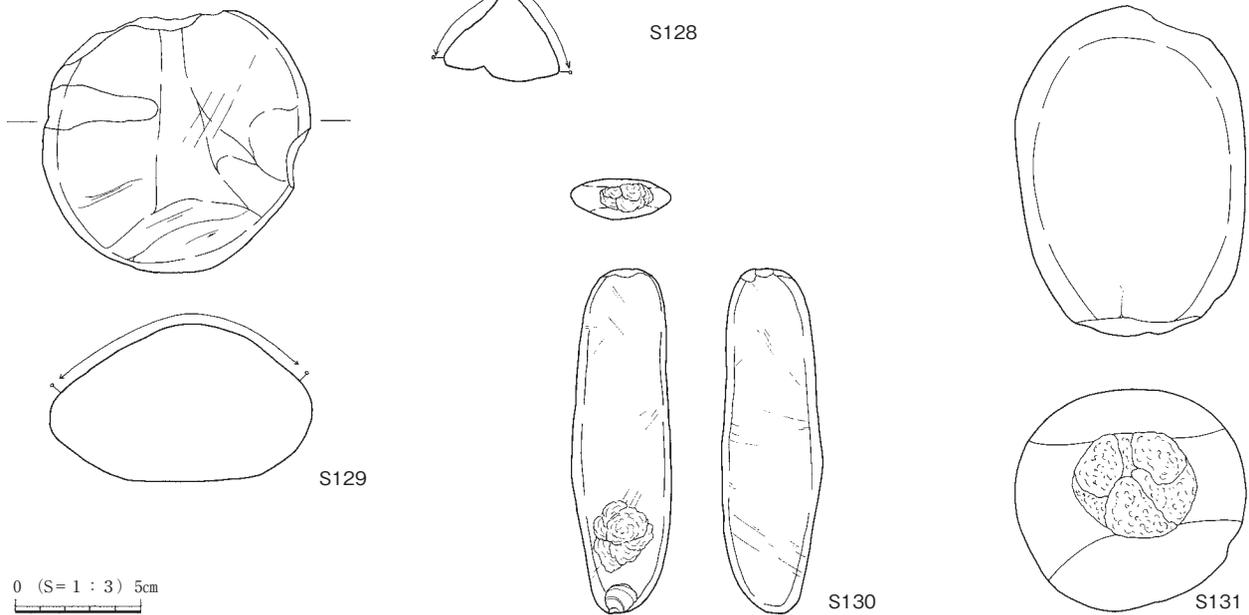
S125

S126



S127

S128



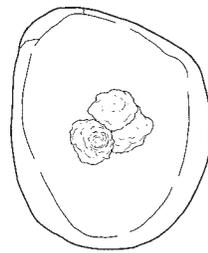
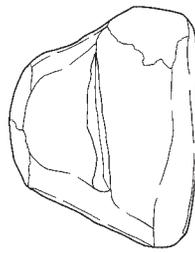
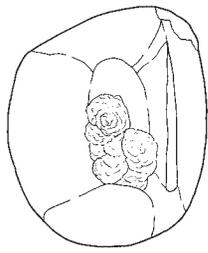
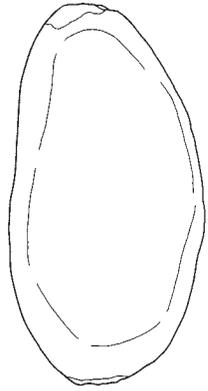
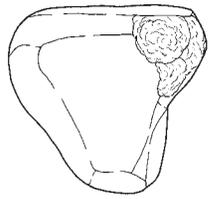
S129

S130

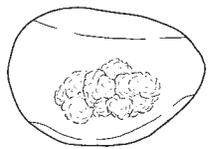
S131

0 (S=1:3) 5cm

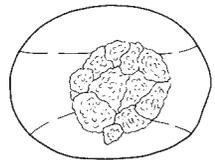
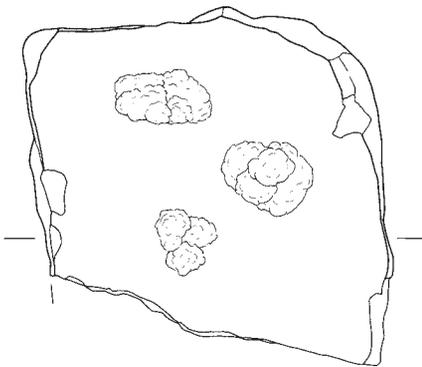
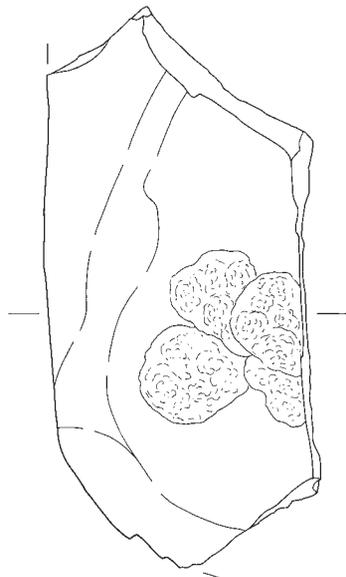
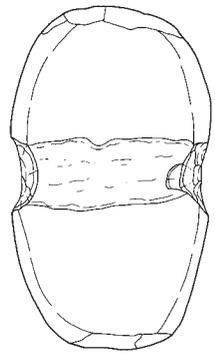
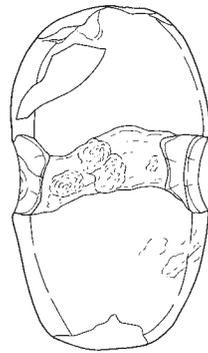
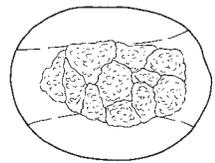
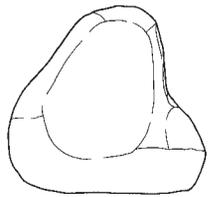
第231图 包含層出土石器(9)



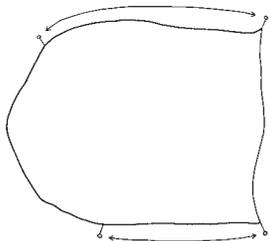
S133



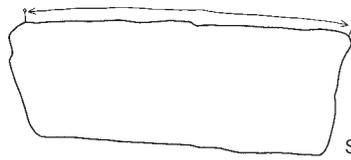
S132



S134



S135



S136

0 (S=1:3) 5cm

第232図 包含層出土石器(10)

サイト製の磨製石斧、太型蛤刃石斧の柄の部分で、上端部に敲打痕が認められる。

S115は結晶片岩製の石鋸、板状の素材の長片の上下二辺に横方向の擦痕が認められる。刃部の断面はU字形、擦痕の幅は上下とも3mm程である。

S116は粘板岩製の磨製石剣の破片、遺存部では鏑は持たない。S117は安山岩製の石包丁、横長の剥片素材を剥離調整しているが、穿孔が未貫通であり、裏面の調整も粗いことから未製品と考えられる。

S118～128は砥石、図示し得たものだけで11点あり、比較的多く出土した資料である。S118は緑色凝灰岩製の仕上砥、全体に風化が激しいがほぼ完形である。上端と両側面に切り出し面が残る。S119は粘板岩製の仕上砥、破片でバラバラに出土したものを接合した資料である。上面に未貫通の穿孔痕があり、この行為により破碎したと思われる。裏面は欠損しているが、その断面にも使用痕が認められることから、破碎後も使用していたものと考えられる。同様の穿孔痕は裏面上端にもあるが摩耗している。以上のことから、当初使用していた砥石が、上端からの穿孔により薄板状に割れるが、その後も使用を継続、さらに上端からの穿孔により破碎し、最終的には破棄されたものと推測できる。S120は花崗岩製の仕上砥、上面に切り出し面が残る方柱状素材の、表裏面と両側縁部を使用している。S121も花崗岩製の仕上砥、上面に素材面が残る長方形素材の表裏面と両側縁部を使用している。S122は角閃石安山岩製の荒砥、板状に切りだした素材の全面を使用し、裏面には使用時の被熱痕が認められる。S123は凝灰岩製の中砥、上面に素材面が残る。方柱状の素材の表裏面と側面全体を使用、上面には幅1.1cm程、断面U字形の溝状研磨痕が認められることから、玉作用の可能性が考えられる。S124は花崗岩製の荒砥、破片であるが上面と右側面に使用痕が認められる。S125は凝灰岩製の荒砥、上面と左側面を使用している。S126はデイサイト製の中砥、上面と左側面を使用している。S127は花崗岩製の中砥、棒状の河原石の上面と両側面を使用している。S128は軽石製の砥石、楕円形の素材の上面に細かい使用痕が認められる。

S129は角閃石安山岩製の磨石、比較的扁平で円形の素材の表面を使用している。S130はデイサイト製の磨石・敲石、全体に磨痕が、上下端部に敲打痕が認められる。S131・132は角閃石安山岩製の磨石・敲石である。楕円形の自然礫の全体を使用し、下端部もしくは上下端部に敲打痕が認められる。S133はデイサイト製の磨石・敲石、歪な円形の自然礫を逆台形に整形し、全体を使用している。右側面はL字状に抉りを入れて握りやすく加工している。

S134は角閃石安山岩製の礫石錘である。扁平で長楕円形の礫の短軸に幅広の溝を施し、さらに短軸両端を打ち欠いている。有溝石錘と打欠石錘の中間的なものであろうか。上下端の敲打痕は使用によるものか。

S135～S136は台石、S135は安山岩製、扁平で大型の礫の表裏面を使用、上面には敲打痕が認められる。S136は角礫凝灰岩製、扁平な切石素材の上面に使用痕が認められる。

2) 石器石材組成について

本遺跡から出土した石器類は総数で309点を数える。その組成について、器種、石器石材別に分類し、カウントを行った(第1表)。出土石器の内訳は尖頭器1点(0.1%以下)、石鏃11点(4%)、スクレイパー6点(2%)、石錐1点(0.1%以下)、楔形石器12点(4%)、二次加工剥片12点(4%)、石核10点(3%)、剥片107点(35%)、石匙2点(0.1%以下)、石鋏21点(7%)、石鋸1点(0.1%以下)、

石剣1点(0.1%以下)、石包丁1点(0.1%以下)、砥石61点(20%)、磨石13点(4%)、磨石・敲石8点(3%)、磨石・凹石1点(0.1%以下)、石錘1点(0.1%以下)、台石22点(7%)、原石12点(4%)である。

原石、剥片・剥離物をのぞく定形器種の中で、組成比率が高いのは、砥石と台石で、出土石器全体の3割を占めている。包含層出土石器については、斜面地の堆積層ということで帰属時期を明らかにすることが困難であったが、台石や砥石の出土量の多さは特徴的である。砥石の形状を見ると、礫の一部を使用したものよりは長方形に切り出した素材が殆どであり、粘板岩製の仕上砥等、製品を研磨することを目的としたものが多い。この出土傾向は、本遺跡の古墳時代から古代にかけての段状遺構における生業とも関連するものであろう。

石器石材については、剥片・剥離物をのぞくと、安山岩、角閃石安山岩、デイサイト等の安山岩類が全体の1/4を占めている。また、台石などの素材である凝灰角礫岩は18点と安山岩類に次ぐ。これらの石材はいずれも近郊で産出されるものであり、特に角礫凝灰岩は法勝寺凝灰岩などとも呼ばれている。このように使用目的に応じた素材を、法勝寺川や周辺の露頭等で採集していたことが推測できよう。

第1表 出土石器組成表

	有舌尖頭器	石鏃	スクレイパー	石錐	楔形石器	二次加工剥片	石核	剥片	石匙	石鋏	磨製石斧	石鋸	石剣	石包丁	砥石	磨石	磨石・敲石	磨石・凹石	石錘	台石	原石	総計
玉髓					1																	1
石英																					12	12
黒曜石		9	5	1	11	8	10	96														140
サヌカイト	1	2	1			4		4														12
珪岩															1							1
珪化木											1											1
緑色片岩								1	1													2
緑色凝灰岩															1							1
凝灰岩								1							9	2	1			1		14
角閃石安山岩															7	1	2		1	1		12
安山岩								5	1	20	2			1	8	4	1			4		46
デイサイト										1	1				7	4	4			4		21
角礫凝灰岩															6					12		18
閃緑岩																2						2
花崗岩															10							10
結晶片岩											1	1										2
粘板岩													1		2							3
溶岩																		1				1
軽石															10							10
総計	1	11	6	1	12	12	10	107	2	21	5	1	1	1	61	13	8	1	1	22	12	309

第5節 中世の遺物（第233図）

今回の調査では、中世期に属する遺構は土壌墓1基であったが、包含層中からも土師質土器を中心に当該期の遺物が出土している。分布傾向を見ると、I-5～6グリッド、南西―北東方向に張り出した支尾根頂部斜面付近において比較的多くの遺物が出土していることから、近接域に当該期の遺構が包蔵されている可能性は高い。以下に包含層出土中世遺物として詳述し、微細片も含めカウントし第2表にまとめた。

819～820は磁器である。819は青磁劃花文碗、破片であるが外面に縦櫛目文、内面に劃花文が施される。山本分類の同安窯系I-1b類である。820は青磁の碗か。821～822は陶器類である。821は古瀬戸中皿期の平碗、緑色の灰釉がかけられる。822は東播系須恵器の鉢、直線的に外傾する口縁端部はやや丸みを持つ。この資料については、白石氏の胎土分析による生産地同定の結果、魚住・神出窯に推定された（第VI章第1節参照）。823～826は中世須恵器の甕体部、外面に格子状の叩き目が施される。焼ムラがあり、在地系のものと考えられる。この甕破片はいずれもC～D-6グリッドから出土した資料であり、同一個体の可能性もある。

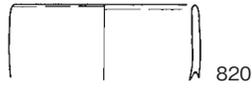
827～828は土師質の鍋、受け口状の口縁を呈し、内外面に粗いハケ目調整痕が施される。829は土師質の鉢、平底で体部は直線的に外傾する。830～842は糸切り底の土師質土器皿、830～832が口径6.9～9.0cm、器高1.7～2.0cmの小皿タイプ、833～834は口径11.8～12.3cm、器高1.7～2.0cmの中皿タイプである。835～842は底部のみの資料で、いずれも底部は回転糸切りで、平底のタイプ（835～840）に客体的に柱状高台タイプ（841～842）が見られる。843～844は糸切り底の碗、底形6.4～6.8cmと大型で、口縁部を欠損するが深めの碗形を呈すると思われる。

第2表 境内海道西遺跡出土中世遺物集計表

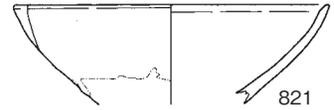
種別	中国製品				国産品								小計	総計
	同安窯系青磁	龍泉窯系青磁		白磁	古瀬戸	備前	東播系	中世須恵器	土師質土器			小計		
		I類	I類						II類	V類	碗			
SK18					0						3	28	31	31
SD7					0						1	1	1	1
SX1					0						1	1	1	1
遺構外	2	2	1	1	6	1	1	1	4	3	4	30	44	50
総計	2	2	1	1	6	1	1	1	4	3	7	60	77	83



819



820



821



822



823



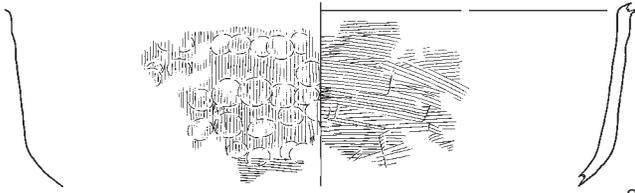
824



825



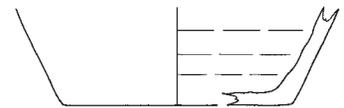
826



827



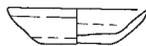
828



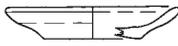
829



830



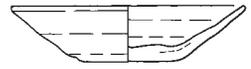
831



832



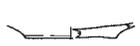
833



834



835



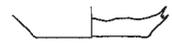
836



837



838



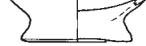
839



840



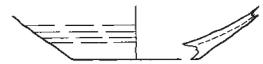
841



842



843



844

0 (S = 1 : 4) 10cm

第233图 包含層出土中世遺物

第6節 近世以降の遺物（第234図）

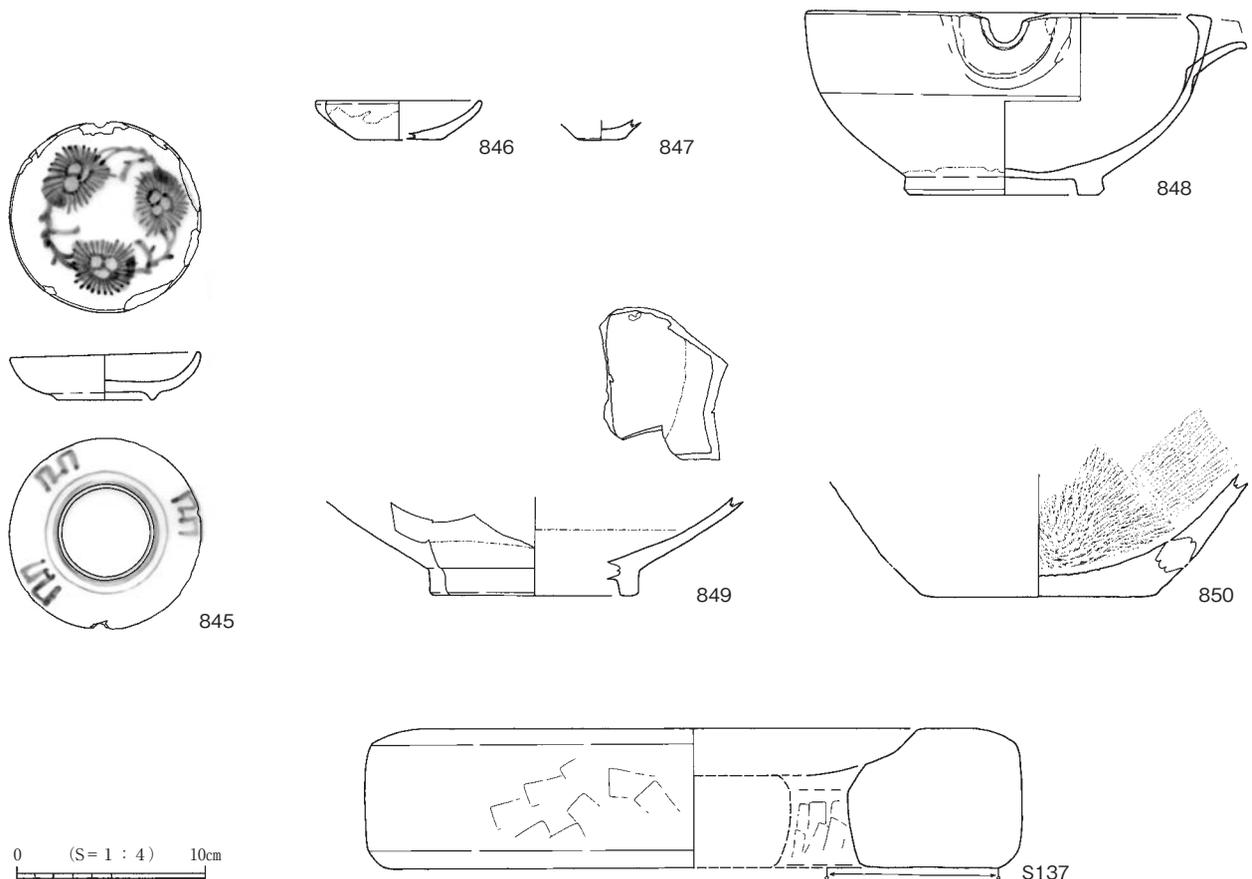
今回の調査では、遺構に伴わない近世期に所属する遺物が出土している。遺物は調査区内でも段状遺構による平坦面上の包含層中に比較的多く出土している。特にI-5～6グリッドに集中した出土傾向がみられる。当該グリッド東側の調査区外には享保年間がもっとも古い墓誌銘を持つ墓地が現存しており、出土資料はこの墓地と関係が深いことが想定できる。これらを近世包含層出土遺物として、以下に詳述することとする。

845は伊万里の染付皿、内面に菊花文が描かれる。846・847は陶器の灯明皿受皿、内面に鉄釉がかかる。848は石見焼の片口鉢、体部は丸味を持ち、口縁部は内側に屈曲、口縁端部は水平である。本資料は口縁の一部が打ち欠かれたのみでほぼ完形であること、正位置で出土したことなどから、地鎮具の可能性も考えられたが（註）、遺構には伴わず、供伴遺物も出土していないことから、包含層出土遺物とした。849は産地不明の陶器大皿、体部内外面に銅緑釉がかかる。850は陶器の播鉢、見込みの播目の摩耗は激しい。

S137は上臼、使用による摩耗は激しく廃棄後被熱の痕跡が見られる。

（註）（公財）北九州市芸術文化振興財団 埋蔵文化財調査室 佐藤浩司氏の御教示によれば、小倉城跡出土の地鎮資料に口縁部が一部打ち欠かれた片口鉢に陶器類を埋納した事例がある。

谷口俊治ほか1997『小倉城跡2』財団法人北九州市教育文化事業団 埋蔵文化財調査室



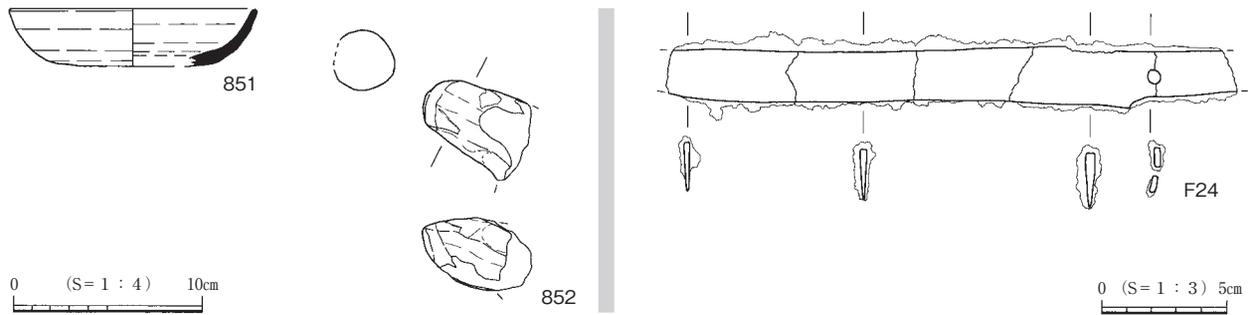
第234図 包含層出土近世遺物

第7節 表採遺物（第235～236図）

本遺跡では、表土及び攪乱中からも遺物が出土している。これらを表採遺物とし、以下に詳述することとする。

1) 古墳時代～古代の遺物（第235図）

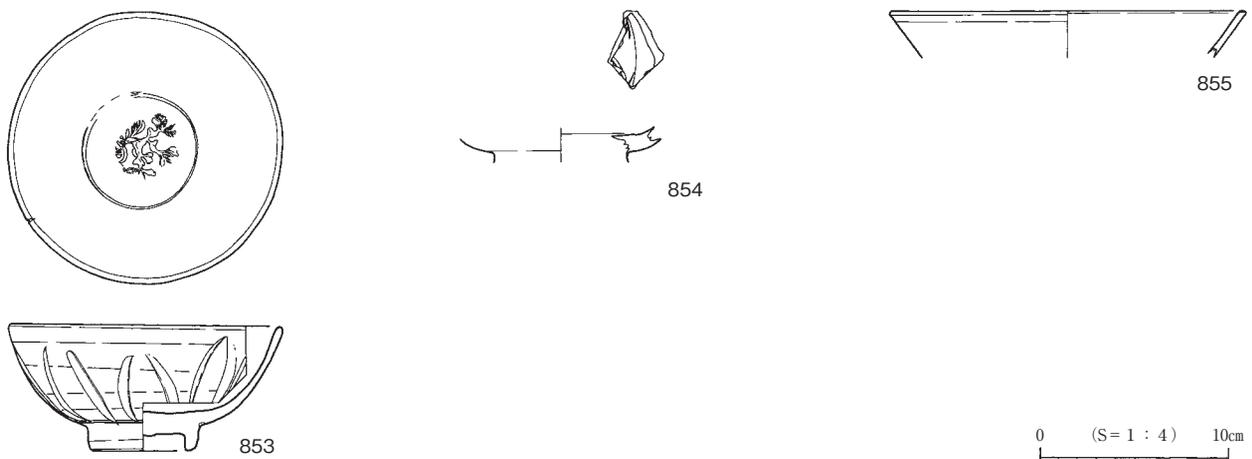
851は須恵器の坏、外底面へラ切り、体部は丸味を持つ。852は土製三叉支脚の把手部である。F24は大型の刀子、茎部に目釘孔が開けられる。



第235図 表土中出土遺物

2) 中世以降の遺物（第236図）

853は完形の青磁蓮弁文碗、外面には片彫りの蓮弁文が、見込みには圏線内に草花文が印刻される。龍泉窯系Ⅱ-c類である。高台内にも施釉されるが、全体に被熱している。854は青磁碗の底部破片、見込みに櫛目文が施される。龍泉窯系Ⅰ-3a類であろうか。855は白磁の碗、口縁端部は僅かに外反し、上端部は水平となる。白磁碗Ⅴ類である。



第236図 表土中出土中世遺物

第Ⅵ章 自然科学分析

第1節 米子市内遺跡出土東播系須恵器の胎土分析

岡山理科大学

白石 純

1. はじめに

この胎土分析では、米子市内の各遺跡から出土した東播系と推定される須恵器を自然科学的な胎土分析を実施することで、東播系なのかあるいはそれ以外の生産地に推定されるのか検討した。

分析は蛍光X線分析法で行い、胎土の成分（元素）量を測定し、その成分量から各分析試料の差異について調べた。測定した成分（元素）は、Si、Ti、Al、Fe、Mn、Mg、Ca、Na、K、P、Rb、Sr、Zrの13成分である。

なお測定装置・条件・試料は以下の通りである。

測定装置：SEA5120A（エスアイアイ・ナノテクノロジー社製）を使用した。

測定条件：X線照射径2.5mm、電流50～200mA、電圧50kV/15kV、測定時間300秒、測定室は真空の条件で測定した。

測定元素：13成分の定量値は地質調査所の標準試料JA-1（安山岩）、JG-1a（花崗岩）、JR-1（流紋岩）、JB-1a（玄武岩）、JF-1（長石）の5個の試料を用いて検量線を作成し、定量値を算出した。

測定試料：分析試料は、須恵器表面の汚れを除去後（研磨機）、乾燥した試料を乳鉢（タングステンカーバイト製）で粉末（100～200メッシュ）にしたものを加圧成形機で約15^トの圧力をかけ、コイン状に成形したものを測定試料とした。したがって、一部破壊分析である。

分析結果の比較（差異）は、有意な差がみられる成分を横軸と縦軸にとり散布図を描き、この散布図から生産地推定を試みた。

分析した試料は、第1表に示した4点の須恵器である。内訳は南部町境矢石遺跡、南部町境内海西遺跡、上淀廃寺跡、博労町遺跡の各遺跡より出土した鉢である。

2. 蛍光X線分析結果

分析では測定した13成分のうち、中世須恵器の分析試料に顕著な差がみられたのは、Ca、K、Tiの3成分であった。したがってK-CaとK-Tiの散布図を作成し、各遺跡出土鉢の生産地推定を行った。

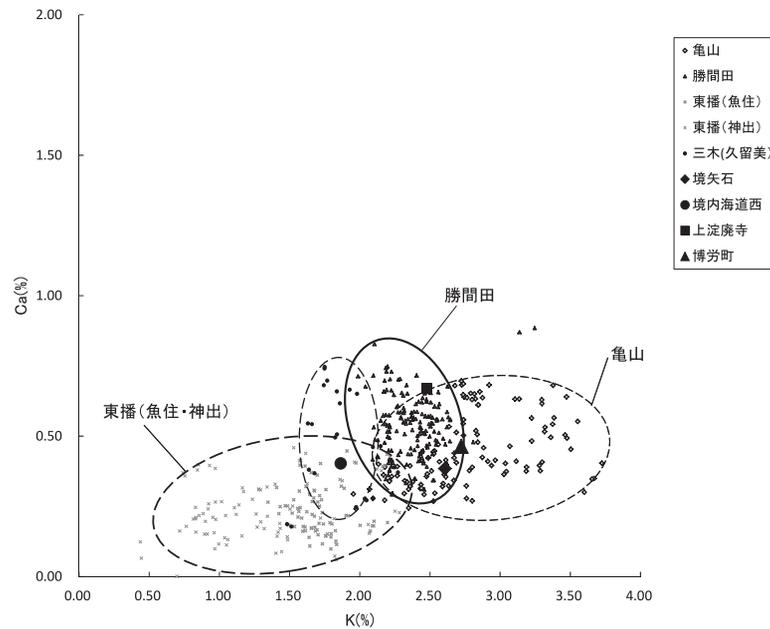
第1図K-Caでは、生産地の東播系（三木市久留美窯跡を含む）と亀山・勝間田が一部重なるが、K量が約2.10%～2.30%の間で識別が可能である。この散布図に米子市内出土の須恵器をプロットすると、境内海道西の鉢が東播系の領域に分布し、他のものは亀山・勝間田の領域に分布した。

第2図K-Ti散布図では、生産地の東播系（三木市久留美窯跡を含む）と亀山と勝間田の3つが一部重なるものの識別が可能である。この散布図に第1図と同様に、米子市内出土須恵器をプロットすると境内海道西の鉢が東播系の領域に分布し、他のもの勝間田の領域に分布した。

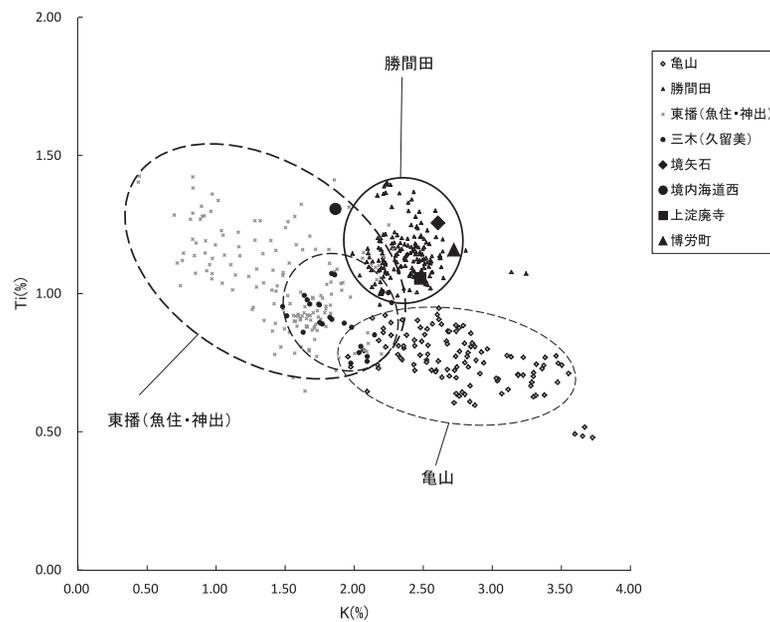
3. まとめ

以上の分析結果より、米子市内遺跡出土の東播系と考えられる須恵器は、境内海道西遺跡出土の鉢が東播系に、それ以外の境矢石遺跡、上淀廃寺跡、博労町遺跡の鉢は、勝間田に推定された。

この胎土分析では、米子市文化財埋蔵文化財調査室の佐伯純也氏、濱野浩美氏にお世話になった。末筆ではありますが、記して感謝いたします。



第1図 米子市内出土東播系須恵器の生産地推定 (K-Ca)



第2図 米子市内出土東播系須恵器の生産地推定 (K-Ti)

第1表 米子市内遺跡出土須恵器の胎土分析結果 (Si~Zr : %)

遺跡名	器種	Si	Ti	Al	Fe	Mn	Mg	Ca	Na	K	P	Rb	Sr	Zr
境内海道西遺跡	鉢	74.21	1.31	16.37	4.78	0.00	0.90	0.40	0.02	1.86	0.05	0.00295	0.00895	0.03845
境矢石遺跡	鉢	73.69	1.26	16.94	3.85	0.00	1.13	0.38	0.00	2.61	0.04	0.00745	0.0117	0.03275
上淀廃寺	鉢	73.44	1.05	16.61	4.84	0.03	0.55	0.67	0.20	2.48	0.03	0.00525	0.01165	0.0293
博労町遺跡	鉢	73.18	1.16	16.69	4.16	0.00	1.50	0.46	0.00	2.72	0.06	0.00415	0.0092	0.02495

第2節 境内海道西遺跡における炭化物科学分析

株式会社古環境研究所

I. 放射性炭素年代測定

1. はじめに

放射性炭素年代測定は、呼吸作用や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素 (^{14}C) の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。過去における大気中の ^{14}C 濃度は変動しており、年代値の算出に影響を及ぼしていることから、年輪年代学などの成果を利用した較正曲線により ^{14}C 年代から暦年代に較正する必要がある。

ここでは、境内海道西遺跡において出土した遺構の年代を検討する目的で、加速器質量分析法による放射性炭素年代測定を行った。測定にあたっては、米国のBeta Analytic Inc.の協力を得た。

2. 試料と方法

測定試料は、境内海道西遺跡より出土した炭化材2点と炭化種子1点である。試料は超音波洗浄、酸-アルカリ-酸洗浄 (AAA処理) で調製後、加速器質量分析計を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。試料の詳細、調整データを表1に示す。

表1 測定試料及び処理

試料名	遺構	対象物	前処理・調整	測定法
No.1621	SD1	炭化材	超音波洗浄, 酸-アルカリ-酸処理	AMS
No.2277	SD7	炭化種子	超音波洗浄, 酸-アルカリ-酸処理	AMS
No.10000		炭化材	超音波洗浄, 酸-アルカリ-酸処理	AMS

※AMS(Accelerator Mass Spectrometry) は加速器質量分析法

3. 結果

年代測定結果を表2に示す。

表2 測定結果

試料名	測定No. (Beta-)	未補正 ^{14}C 年代 ¹⁾ (年BP)	$\delta^{13}\text{C}$ ²⁾ (‰)	補正 ^{14}C 年代 ³⁾ (年BP)	暦年代 (西暦) ⁴⁾
No.1621	343015	1600 ± 30	-26.3	1580 ± 30	交点 : cal AD 440, AD 490, AD 510, : cal AD 520, AD 530 1 σ : cal AD 430~540 2 σ : cal AD 410~550
No.2277	343016	1050 ± 30	-26.0	1030 ± 30	交点 : cal AD 1020 1 σ : cal AD 990~1020 2 σ : cal AD 970~1030
No.10000	343017	2040 ± 30	-26.8	2010 ± 30	交点 : cal BC 30, BC 20, BC 10, AD 0, 1 σ : cal BC 40~AD 20 2 σ : cal BC 90~80, : cal BC 50~AD 60

BP : Before Physics(Present), AD : 紀元, BC : 紀元前

1) 未補正¹⁴C年代値

試料の¹⁴C/¹²C比から、単純に現在（AD1950年）から何年前かを計算した値。¹⁴Cの半減期は国際的慣例によりLibbyの5568年を使用した（実際の半減期は5730年）。

2) δ¹³C測定値

試料の測定¹⁴C/¹²C比を補正するための炭素安定同位体比（¹³C/¹²C）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

$$\delta^{13}\text{C}(\text{‰}) = \frac{(^{13}\text{C}/^{12}\text{C})[\text{試料}] - (^{13}\text{C}/^{12}\text{C})[\text{標準}]}{(^{13}\text{C}/^{12}\text{C})[\text{標準}]} \times 1000$$

3) 補正¹⁴C年代値

試料の炭素安定同位体比（¹³C/¹²C）を測定して試料の炭素の同位体分別を知り、¹⁴C/¹²Cの測定値に補正值を加えた上で算出した年代。試料のδ¹³C値を−25（‰）に標準化することによって得られる年代である。

なお、δ¹³C値は加速器質量分析計システムによって自動的に測定され、それにともない補正¹⁴C年代値も自動計算される。

4) 暦年代 Calendar Age

¹⁴C年代値を実際の年代値（暦年代）に近づけるには、過去の宇宙線強度の変動などによる大気中¹⁴C濃度の変動および¹⁴Cの半減期の違いを較正する必要がある。具体的には、年代既知の樹木年輪の¹⁴Cの詳細な測定値、サンゴのU/Th（ウラン/トリウム）年代と¹⁴C年代の比較、湖の縞状堆積物の年代測定により補正曲線を作成し、暦年代を算出する。¹⁴C年代の暦年較正には、Beta Analytic社オリジナルプログラムであるBETACAL09（較正曲線データ：IntCal09）を使用した。暦年代の交点とは、補正¹⁴C年代値と較正曲線との交点の暦年代値を意味する。1σ（68%確率）と2σ（95%確率）は、補正¹⁴C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点や複数の1σ・2σ値が表記される場合もある。

4. 所見

境内海道西遺跡より出土した炭化物について、加速器質量分析法（AMS）による放射性炭素年代測定を行った。その結果、早里17号墳（SD1）より出土した炭化材は、1580±30年BP（2σの暦年代でAD410～550年）、SD7より出土した炭化種子は、1030±30年BP（同AD970～1030年）、試料No. 10000の炭化材は、2010±30年BP（同BC90～80年、BC50～AD60年）の年代値が得られた。

〈参考文献〉

Bronk Ramsey C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy, The OxCal Program, Radiocarbon, 37(2), 425-430.

Bronk Ramsey C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43 (2A), 355-363.

Heaton TJ, Blackwell PG, Buck CE. (2009) A Bayesian approach to the estimation of radiocarbon calibration curves: the IntCal09 methodology. *Radiocarbon*, 51(4), 1151-1164.

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の14C年代, 3-20.

Reimer PJ, Baillie MGL, Bard E, Bayliss A, Beck JW, Blackwell PG, Bronk Ramsey C, Buck CE, Burr GS, Edwards RL, Friedrich M, Grootes PM, Guilderson TP, Hajdas I, Heaton TJ, Hogg AG, Hughen KA, Kaiser KF, Kromer B, McCormac FG, Manning SW, Reimer RW, Richards DA, Southon JR, Talamo S, Turney CSM, van der Plicht J, Weyhenmeyer CE. (2009) IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP. *Radiocarbon* 51(4): 1111-50.

Stuiver M, Braziunas TF. (1993) IntCal 04 Terrestrial radiocarbon age calibration, 26-0 ka BP. *Radiocarbon*, 35(1), 137-189.

Ⅱ. 遺存体（炭化物・白色物質）同定

1. はじめに

境内海道西遺跡の発掘調査では、段状遺構、貯蔵穴、土壙墓、古墳周溝から炭化物（炭化材、炭化種実）が、また古墳周溝、周溝内埋葬墓からは骨とみられる白色物質が出土した。そこで、炭化物と白色物質について同定および検査を行い、これら遺存体の詳細について検討を行うことになった。

炭化材はセルロースを骨格とする木部細胞の集合体である木材の炭化したものであり、構造から概ね属レベルの同定が可能である。木材や種実、その炭化物は大きなものが多く、花粉などの微遺体と比較して移動性が少なく、比較的近隣の植生の推定が可能である。また、栽培植物や固有の植生環境を調べることができるという長所がある。

2. 試料

試料は、炭化材、炭化種実、白色物質の3者に分かれる。以下に、各試料の詳細を示す。なお、白色物質は骨片の可能性があるので採取されていたものである。

- 1) SS26 (段状遺構、奈良時代) No.2480 : 炭化材
- 2) SS30 (段状遺構、奈良時代) No.2216 : 炭化材
- 3) SK13 (貯蔵穴、弥生時代中期) No.2595 : 炭化材
- 4) SX21 (土壙墓、古墳時代後期) No.2485 : 炭化材
- 5) SD1 (17号墳周溝、古墳時代後期) No.1621 : 炭化材
- 6) SD7 (溝状遺構、平安時代) No.2277、No.2570 : 炭化種実
- 7) SX2-SD (18号墳周溝、古墳時代後期) No.1364 : 白色物質
- 8) SX6 (18号墳周溝内埋葬墓、古墳時代後期) No.1394 : 白色物質
- 9) SX9 (17号墳周溝内埋葬墓、古墳時代後期) No.1582 : 白色物質

3. 炭化材同定

(1) 方法

試料を割り折りして新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柁目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製し、落射顕微鏡によって50～1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

(2) 結果

表1に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

表1 境内海道西遺跡における炭化物同定結果

番号	出土遺構	時期	資料No.	結果（学名／和名）	備考
1	SS26（段状遺構）	奈良時代	No.2480 炭化材	<i>Aralia</i> タラノキ属	表2に 計数表
2	SS30（段状遺構）	奈良時代	No.2216 炭化材	<i>Quercus sect. Aegilops</i> コナラ属クヌギ節	
3	SK13（貯蔵穴）	弥生時代中期	No.1595 炭化材	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc. クリ	
4	SX21（土壙墓）	古墳時代後期	No.2485 炭化材	<i>Celtis</i> エノキ属	
5	SD1（17号墳周溝）	古墳時代中期	No.1621 炭化材	<i>Quercus sect. Prinus</i> コナラ属コナラ節	
6	SD7（貯蔵穴）	平安時代末	No.2277 炭化種実	<i>Oryza sativa</i> L. イネ	
			No.2570	<i>Setaria italica</i> Beauv. アワ	
7	SX2-SD（18号墳周溝）	古墳時代中期	No.1364 白色物質	不明（生物由来ではなく片状上に剥離する粘土鉱物のひる石等の可能性）	
8	SX6（18号墳周溝内埋葬墓）	古墳時代中期	No.1394 白色物質	不明（生物由来ではなく片状上に剥離する粘土鉱物のひる石等の可能性）	
9	SX9（17号墳周溝内埋葬墓）	古墳時代中期	No.1582 白色物質	不明（生物由来ではなく片状上に剥離する粘土鉱物のひる石等の可能性）	

1) クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 写真1

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、1～3列配列する環孔材である。晩材部では小道管が、火炎状に配列する。早材から晩材にかけて、道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりクリに同定される。クリは北海道の西南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20m、径40cmぐらいであるが、大きいものは高さ30m、径2mに達する。耐朽性が強く、水湿によく耐え、保存性の極めて高い材で、現在では建築、家具、器具、土木、船舶、彫刻、薪炭、椎茸ほだ木など広く用いられる。

2) コナラ属コナラ節 *Quercus sect. Prinus* ブナ科 写真2

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、1～3列配列する環孔材である。晩材部では薄壁で角張った小道管が、火炎状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属コナラ節に同定される。コナラ属コナラ節にはカシワ、コナラ、ナラガシワ、ミズナラがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、高さ15m、径60cmぐらいに達する。材は強靱で弾力に富み、建築材などに用いられる。

3) コナラ属クヌギ節 *Quercus sect. Aegilops* ブナ科 写真3

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、1～2列配列する環孔材である。晩材部では厚壁で丸い小道管が、単独でおおよそ放射方向に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属クヌギ節に同定される。コナラ属クヌギ節にはクヌギ、アベマキなどがあり、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、高さ15m、径60cmに達する。材は強靱で弾力に富み、器具、農具などに用いられる。

4) エノキ属 *Celtis* ニレ科 写真4

横断面：年輪のはじめに中型から大型の道管が1～2列配列する環孔材である。孔圏部外的小道管は多数複合して円形、ないし斜線状に配列する。早材から晩材にかけて、道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞であるが、上下の縁辺部に方形細胞が見られる。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で、7～12細胞幅ぐらいで鞘細胞をもつ大型のものからなる。

以上の形質よりエノキ属に同定される。エノキ属にはエゾエノキ、エノキなどがあり、北海道、本州、四国、九州、沖縄に分布する。落葉の高木で、高さ25m、径1.5mに達する。材は、建築、器具、薪炭などに用いられる。

5) タラノキ属 *Aralia* ウコギ科 写真5

横断面：年輪のはじめにやや大型の道管が列配する環孔材である。孔圏部外的小道管は2～3列幅で、接線方向に配列する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で、1～4細胞幅である。

以上の形質よりタラノキ属に同定される。タラノキ属には、タラノキ、メダラなどがあり、落葉の低木～小高木で、北海道、本州、四国、九州に分布する。

4. 炭化種実同定

(1) 方法

試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行った。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示す。

(2) 結果

草本2分類群が同定された。学名、和名、粒数を表2に示す。また、イネ炭化果実の計測値を表3に、イネの粒形とその大きさを表4に示す。主要なものについては写真に示す。以下に形態的特徴を示す。

1) イネ *Oryza sativa* L. 炭化果実 (完形・半形・集塊) イネ科

炭化しているため黒色である。長楕円形を呈し、胚の部分がくぼむ。表面には数本の筋が走る。

2) アワ *Setaria italica* Beauv. 炭化果実 (完形) イネ科

炭化しているため黒色で楕円形を呈す。胚の部分がくぼむ。

表2 境内海道西遺跡における種実同定結果

分類群			SD-7	
学名	和名	部位	No.2277	No.2570
Herb	草本			
<i>Oryza sativa</i> L.	イネ	炭化果実	47	94
		(破片)	25	132
		炭化果実 (集塊)	3	41
<i>Setaria italica</i> Beauv.	アワ	果実	3	
Total	合計		78	267

3) No.2277

草本種実のイネ炭化果実72、イネ炭化果実集塊3、アワ炭化果実3が同定された。イネは全て熱による発泡がみられ変形しており、強い火を受けたとみなされる。アワはイネ集塊に混ざっていたと考えられる。イネ炭化果実の大きさ(表3)は、平均値は長さ5.22mm、幅2.74mm、最大値は長さ6.37mm、幅3.46mm、最小3.60mm、幅1.96mmである。

4) No.2570

草本種実のイネ炭化果実226、イネ炭化果実集塊41が同定された。イネ(果実、集塊)は全て発泡がみられ変形しており、強い火を受けたとみなされる。イネ炭化果実の大きさ(表3)は、平均値は長さ5.17mm、幅2.73mm、最大値は長さ6.32mm、幅3.49mm、最小4.28mm、幅2.01mmである。

5. 白色物質の検討

(1) 方法

試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、塩酸および加熱検査を行った。

表3 境内海道西遺跡イネ炭化果実計測値

・イネ (取上No2277)

試料	長さ (mm)	幅 (mm)
1	5.95	2.81
2	5.95	2.81
3	5.54	2.71
4	5.11	2.36
5	6.13	2.62
6	5.74	2.41
7	5.84	2.68
8	5.25	2.29
9	5.26	2.69
10	5.52	3.06
11	5.60	3.46
12	3.95	2.26
13	6.05	3.07
14	5.67	2.69
15	4.35	2.54
16	4.96	2.70
17	5.04	2.91
18	6.08	2.92
19	4.82	3.06
20	6.31	3.04
21	5.53	2.66
22	3.60	1.96
23	4.30	2.64
24	4.45	2.79
25	4.37	3.07
26	4.68	2.79
27	6.37	3.11
28	6.09	2.81
29	4.99	2.53
30	5.91	2.32
31	4.70	2.27
32	4.88	2.92
33	5.18	2.36
34	5.14	2.85
35	4.60	2.55
36	5.44	2.88
37	5.66	2.72
38	4.19	3.13
39	5.88	3.17
40	5.10	2.61
41	5.19	2.70
42	4.04	2.85
43	5.91	3.31
44	5.22	2.98
45	5.14	2.38
46	4.64	2.35
47	4.93	2.83

・イネ (取上No2277)

	長さ (mm)	幅 (mm)
平均値	5.22	2.74
最大値	6.37	3.46
最小値	3.60	1.96

・イネ (取上No2570)

試料	長さ (mm)	幅 (mm)
1	5.64	2.79
2	5.07	2.97
3	4.49	2.51
4	6.32	3.02
5	5.30	2.85
6	4.71	2.89
7	5.27	2.60
8	5.32	2.91
9	5.23	3.07
10	5.15	2.77
11	4.60	2.34
12	5.12	2.66
13	5.08	3.49
14	5.14	3.40
15	6.08	3.48
16	6.24	3.42
17	5.69	3.40
18	5.04	2.91
19	5.47	3.43
20	4.78	2.04
21	5.13	2.45
22	4.53	2.56
23	4.97	2.85
24	5.94	2.60
25	5.47	2.32
26	4.36	2.17
27	5.24	2.20
28	4.34	2.43
29	6.03	3.10
30	5.37	3.07
31	4.99	3.01
32	5.04	2.92
33	4.48	2.96
34	5.07	2.84
35	5.07	2.94
36	5.62	2.80
37	5.38	2.87
38	4.92	2.63
39	5.91	3.01
40	5.47	2.67
41	5.35	3.18
42	5.47	2.45
43	4.50	2.26
44	5.57	3.09
45	4.56	2.73
46	4.93	2.60
47	5.68	3.04
48	5.36	2.49
49	4.73	2.84
50	5.21	2.61

試料	長さ (mm)	幅 (mm)
51	4.88	3.03
52	5.35	3.03
53	4.91	2.42
54	4.39	2.58
55	5.94	2.29
56	5.06	2.01
57	5.37	2.69
58	4.67	2.79
59	5.15	2.73
60	5.67	3.03
61	4.35	2.72
62	4.80	2.65
63	4.84	2.41
64	5.58	2.58
65	4.73	3.15
66	4.49	2.96
67	5.20	2.81
68	5.52	2.67
69	4.83	2.55
70	5.14	2.63
71	4.98	2.82
72	4.28	2.22
73	4.57	2.37
74	5.23	2.50
75	4.75	2.23
76	5.22	2.63
77	5.82	2.47
78	4.60	2.84
79	4.85	2.58
80	5.45	2.69
81	5.03	2.10
82	4.92	2.54
83	4.73	2.26
84	5.36	2.54
85	5.62	3.14
86	5.45	2.84
87	5.38	2.72
88	6.13	2.65
89	5.56	2.56
90	5.38	2.72
91	5.25	2.71
92	5.63	2.90
93	5.18	2.69
94	5.45	2.93

・イネ (取上No2570)

	長さ (mm)	幅 (mm)
平均値	5.17	2.73
最大値	6.32	3.49
最小値	4.28	2.01

表4 境内海道西遺跡イネの粒形とその大きさ

取上No.2277

粒大 粒形		極々小	極小	小	中	合計 %	
		~ 8	~ 12	~ 16	~		
長粒 L	2.6-3.0 Ll					0	0
	2.3-2.6 Lm			3	1	4	9
	2.0-2.3 Ls		1	8	6	15	32
短粒 S	1.8-2.0 Sl	1	1	6	2	10	21
	1.6-1.8 Sm		4	6	3	13	28
	1.4-1.6 Ss		1	3		4	9
円粒 R	1.2-1.4 Rl			1		1	2
	1.0-1.2 Rm						
合計		1	7	27	12	47	100
%		2	15	57	26		

取上No.2570

粒大 粒形		極々小	極小	小	中	合計 %	
		~ 8	~ 12	~ 16	~		
長粒 L	2.6-3.0 Ll					0	0
	2.3-2.6 Lm		4	4	1	9	10
	2.0-2.3 Ls		4	13	1	18	19
短粒 S	1.8-2.0 Sl		5	23	6	34	36
	1.6-1.8 Sm		5	14	8	27	29
	1.4-1.6 Ss			3	3	6	6
円粒 R	1.2-1.4 Rl					0	0
	1.0-1.2 Rm					0	0
合計		0	18	57	19	94	100
%		0	19	61	20		

* 計測は表3にそって行う。粒長/粒幅で粒形を表し、粒長×粒幅で粒の大きさを表す。

(2) 結果

3 試料とも同じ特徴を示し、長軸面に平面をもち、側面は筋状の陵が多数ある。大きさはやや不揃いである。形状から骨等の生物由来物には類似のものはみられない。塩酸による反応はなく、石灰成分由来ではなかった。加熱すると片状に割れ、扁平な構造をもつ粘土鉱物が考えられ、ひる石などの可能性がある。

6. 考察

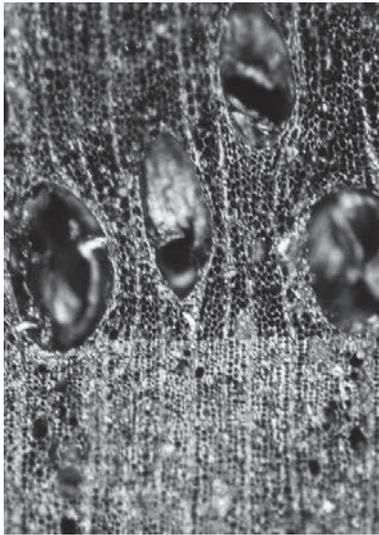
境内海道西遺跡出土炭化物のうち、弥生時代中期の貯蔵穴より出土した炭化材 1 点は、クリであった。古墳時代後期の土壙墓と 17 号墳周溝より出土した炭化材 2 点は、コナラ属コナラ節とエノキ属であった。奈良時代の段状遺構より出土した炭化材 2 点は、コナラ属クヌギ節と、タラノキ属であった。タラノキ属を除くと、いずれも高木ばかりで、二次林の性格をもつ樹種ばかりである。境内海道西遺跡の炭化材は、いずれの時期においても、遺跡周辺に生育可能な樹種ばかりである。

平安時代末の貯蔵穴より出土した炭化種実は、イネ炭化果実が多く、他にアワが同定された。イネ炭化果実は渡部 (1988) にあてはめると (表 4)、短粒から長粒に偏じ、小粒が最も多かった。弥生時代以降の平均的な値を逸脱しない形態のものである。

古墳時代中期の周溝、周溝内埋葬墓より出土した白色物質は、粘土鉱物のひる石などの可能性があり、果樹園等で地中深くに差し込まれる肥料の固化防止に混ぜられる。ひる石の場合、日本には産しない。

〈参考文献〉

- 佐伯浩・原田浩 (1985) 「針葉樹材の細胞」『木材の構造』文永堂出版, p. 20-48.
- 佐伯浩・原田浩 (1985) 「広葉樹材の細胞」『木材の構造』文永堂出版, p. 49-100.
- 島地謙・伊東隆夫 (1988) 『日本の遺跡出土木製品総覧』雄山閣出版株式会社, p. 296.
- 佐藤敏也 (1988) 「弥生のイネ」『弥生文化の研究第 2 巻生業』雄山閣出版株式会社, p. 97-111.
- 南木陸彦 (1991) 「栽培植物」『古墳時代の研究第 4 巻生産と流通 I』雄山閣出版株式会社, p. 165-174.
- 南木陸彦 (1993) 「葉・果実・種子 日本第四紀学会編」『第四紀試料分析法』東京大学出版会, p. 276-283.
- 吉崎昌一 (1992) 「古代雑穀の検出」『月刊考古学ジャーナルNo.355』ニューサイエンス社, p. 2-14.



横断面 ————— : 0.4mm



放射断面 ————— : 0.2mm

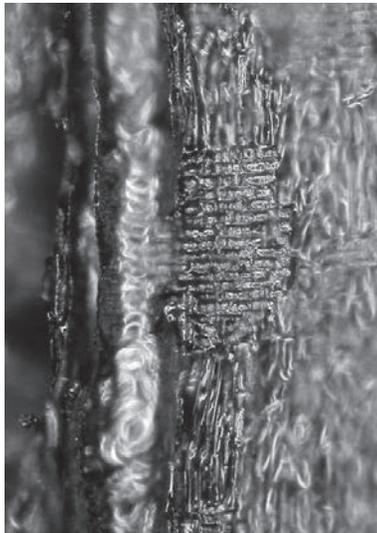


接線断面 ————— : 0.2mm

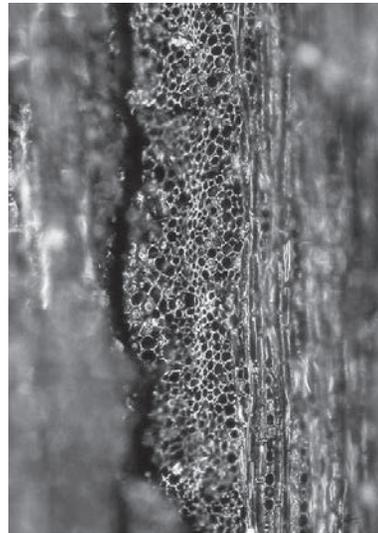
1. 炭化物No.1595 クリ



横断面 ————— : 0.4mm

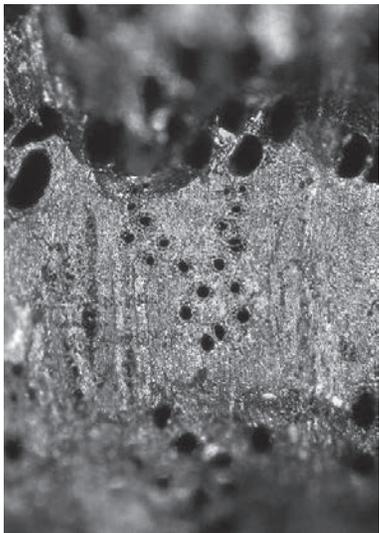


放射断面 ————— : 0.2mm



接線断面 ————— : 0.2mm

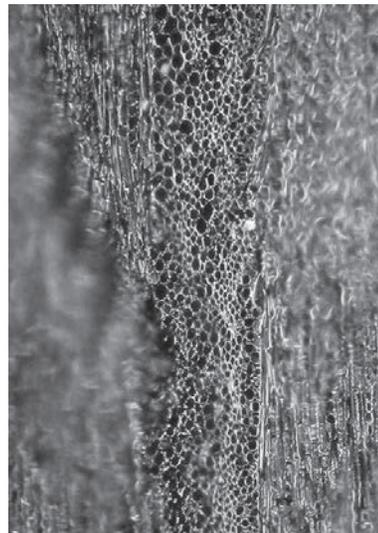
2. 炭化物No.1621 コナラ属コナラ節



横断面 ————— : 0.4mm

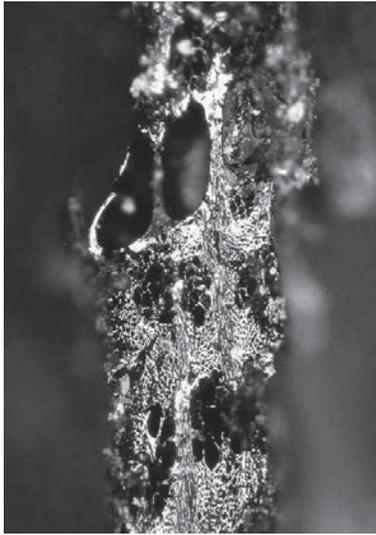


放射断面 ————— : 0.2mm

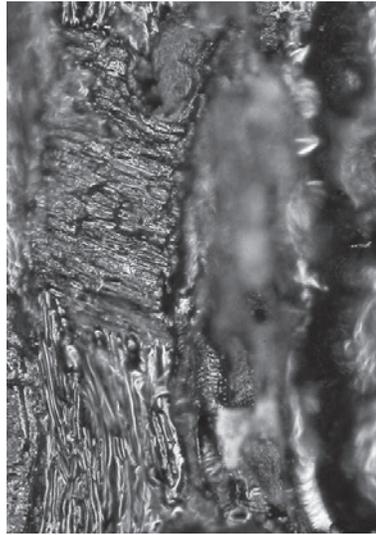


接線断面 ————— : 0.2mm

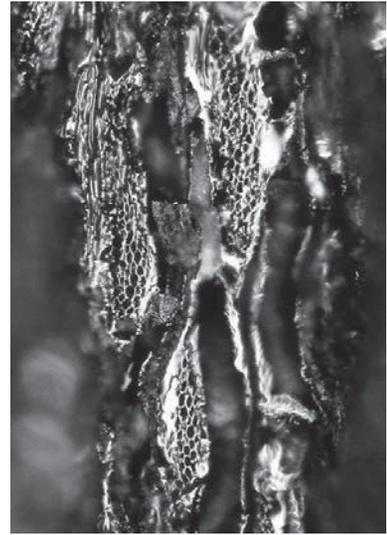
3. 炭化物No.2216 コナラ属クヌギ節



横断面 ————— : 0.4mm
4. 炭化物No.2485 エノキ属



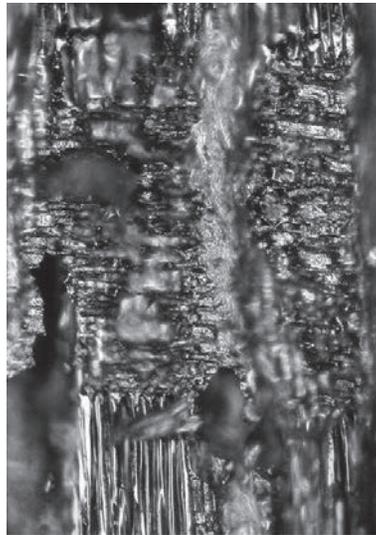
放射断面 ————— : 0.2mm



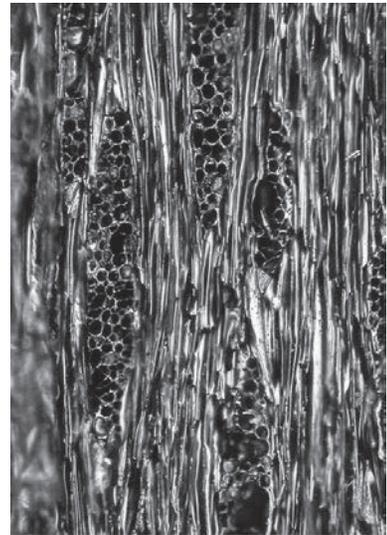
接線断面 ————— : 0.2mm



横断面 ————— : 0.4mm
5. 炭化物No.2480 タラノキ属

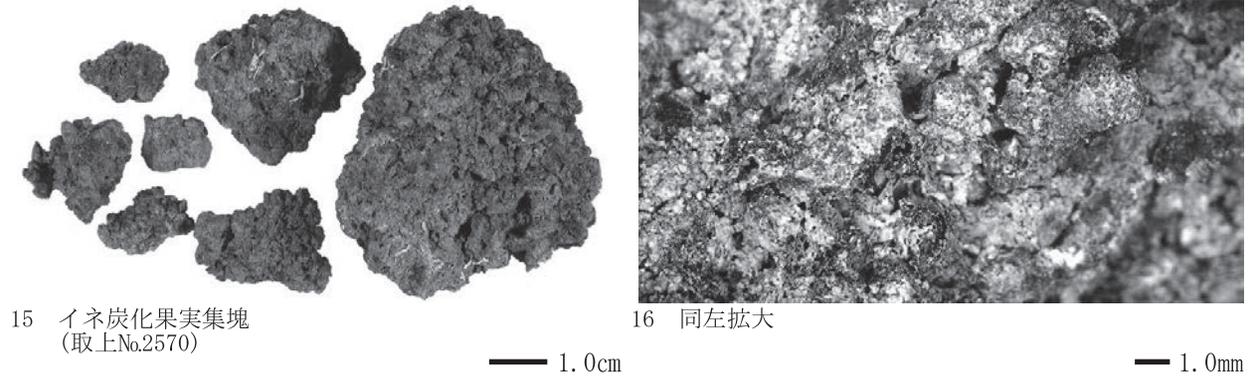
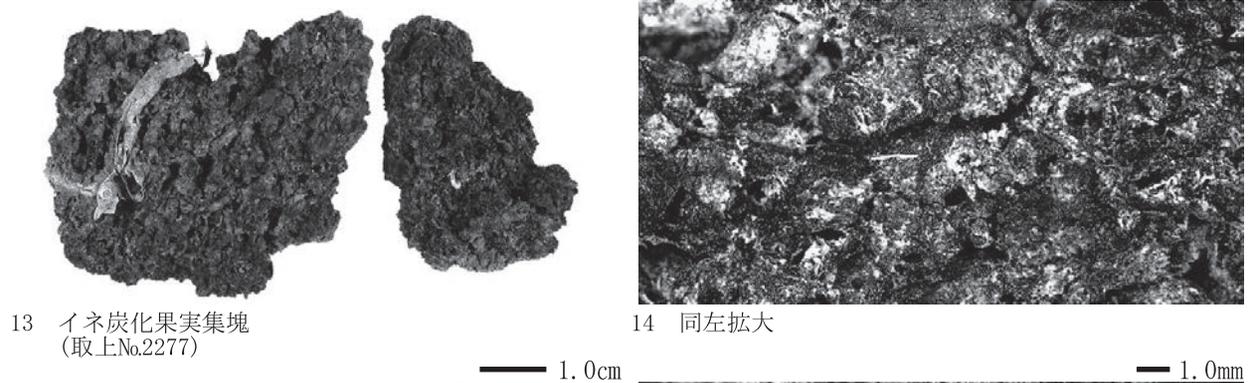
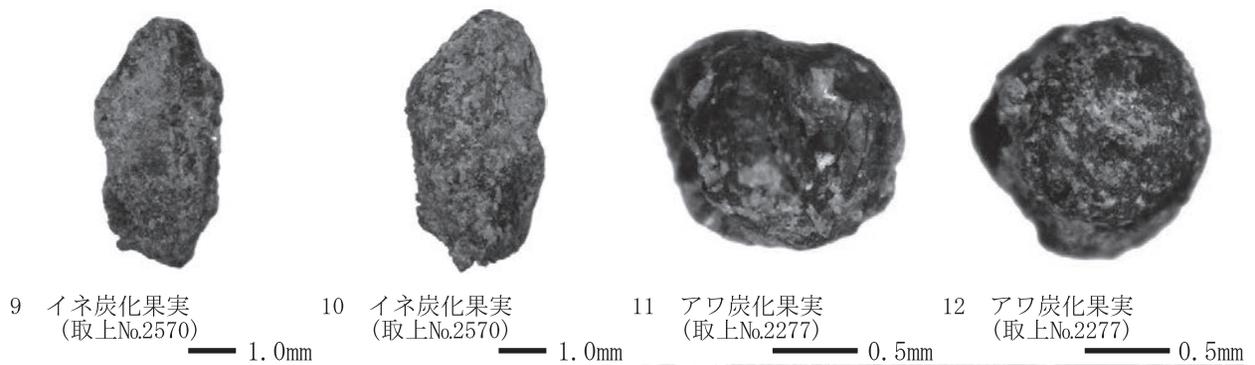
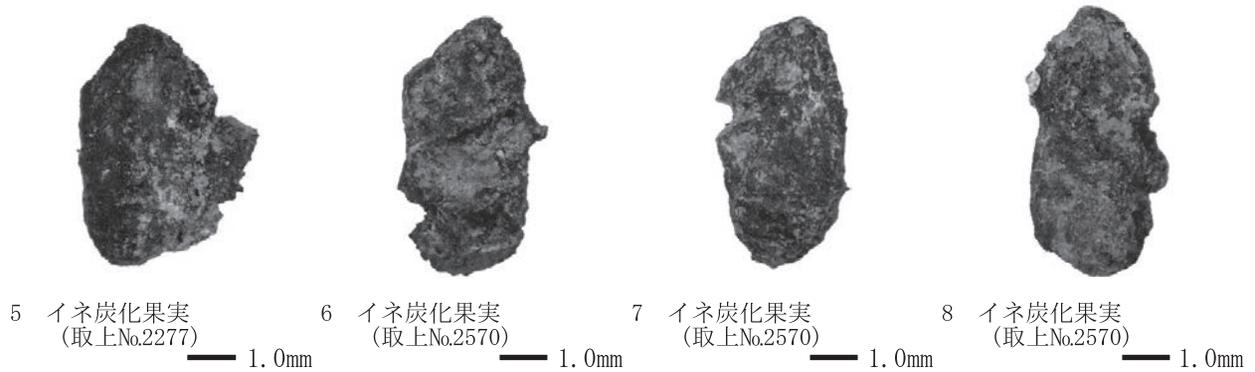
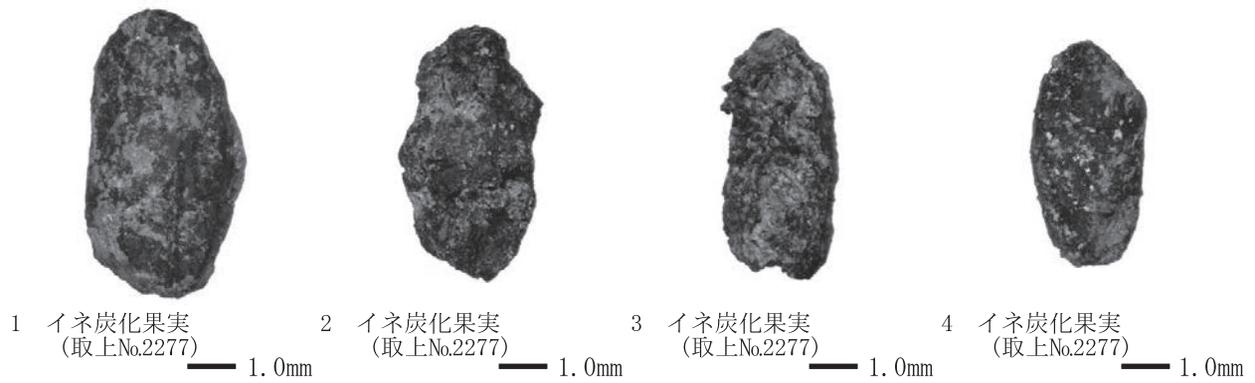


放射断面 ————— : 0.2mm

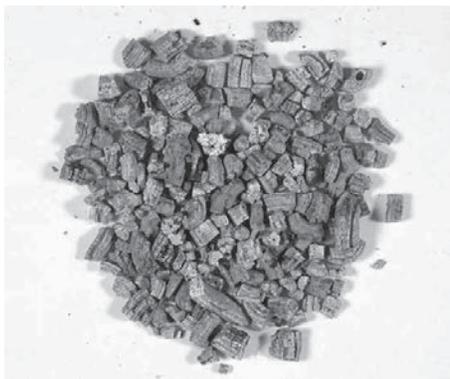


接線断面 ————— : 0.2mm

境内海道西遺跡の種実



境内海道西遺跡の白色物質



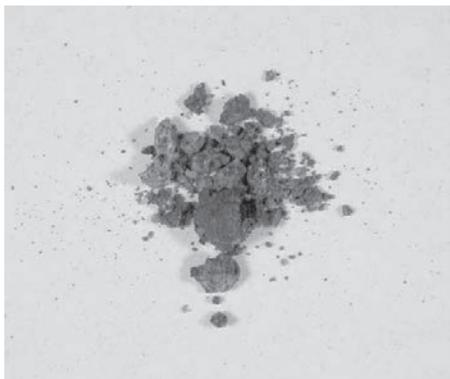
SX2-SD (17号墳周溝)
取上No.10364

1.0cm



SX6 (18号墳周溝内埋葬墓)
取上No.1394

1.0cm



SX9 (17号墳周溝内埋葬墓)
取上No.1582

1.0cm

第3節 境内海道西遺跡における種実同定

株式会社古環境研究所

1. はじめに

植物の種子や果実は比較的強靱なものが多く、堆積物中に残存する。堆積物から種実を検出しその群集の構成や組成を調べ、過去の植生や群落の構成要素を明らかにし古環境の推定を行うことが可能である。また出土した単体試料等を同定し、栽培植物や固有の植生環境を調べることができる。

ここでは、境内海道西遺跡の遺構より出土した炭化種実の同定を行い、当時の植物利用について検討する。

2. 試料

試料は、弥生時代後期の竪穴建物（SI3）の覆土下層より出土した分析No.805、分析No.1013、中央ピットより出土した分析No.1081、古代の段状遺構（SS1）の覆土中より出土した分析No.150の計4点である。試料はいずれも炭化している。

3. 方法

試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態の特徴および現生標本との対比によって同定を行う。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示す。

4. 結果

(1) 分類群

樹木1分類群が同定される。学名、和名および粒数を表1に示し、主要な分類群を写真に示す。以下に同定根拠となる形態的特徴、写真に示したもののサイズを記載する。

表1 境内海道西遺跡における種実同定結果

分類群	部位	SI3 竪穴建物		中央ピット	SS1 段状遺構
		覆土下層	覆土中	中央ピット	覆土中
学名	和名	分析No.805	分析No.1013	分析No.1081	分析No.150
Arbor <i>Prunus persica</i> Batsch	樹木 モモ 核 (破片)	7	9	6	1
Total	合計	7	9	6	1

〔樹木〕

モモ *Prunus persica* Batsch 核 バラ科 長さ×幅×厚さ：18.99mm×16.01mm×13.44mm

黄褐色～黒褐色で楕円形を呈し、側面に縫合線が発達する。表面にはモモ特有の隆起がある。

(2) 種実群集の特徴

- ・竪穴建物（SI3）

1) 覆土下層

分析No.805

樹木種実のモモ核破片 7 が同定された。

分析No.1013

樹木種実のモモ核破片 9 が同定された。

2) 中央ピット

分析No.1081

樹木種実のモモ核破片 6 が同定された。

・段状遺構 (SS1)

3) 覆土中

分析No.150

樹木種実のモモ核完形 1 が同定された。

5. 所見とまとめ

境内海道西遺跡における種実同定の結果、樹木種実のモモ核が同定された。モモは食用となる栽培植物であり、稲作と共に伝来する。西南日本を中心に多くの遺跡から出土し、弥生時代から古墳時代にかけて多くなる。

(参考文献)

笠原安夫 (1985) 日本雑草図説, 養賢堂, 494p.

金原正明 (1996) 古代モモの形態と品種. 月刊考古学ジャーナルNo. 409, ニューサイエンス社, p. 15-19.

南木睦彦 (1991) 栽培植物. 古墳時代の研究第 4 巻生産と流通 I, 雄山閣出版株式会社, p. 165-174.

南木睦彦 (1993) 葉・果実・種子. 日本第四紀学会編, 第四紀試料分析法, 東京大学出版会, p. 276-283.

境内海道西遺跡の種実



1 モモ核 完形
(SS1段状遺構 覆土中 分析No.150)

5.0mm

第4節 境内海道西遺跡出土の突帯文土器を対象とした種実圧痕調査

濱田竜彦・中山恵・松岡藍・濱野浩美

1. はじめに

近年、レプリカ法による種実圧痕の調査で、米子市青木遺跡から出土した突帯文土器の深鉢形土器（以下、深鉢）にアワの圧痕があることが確認された〔濱田2013a〕。この深鉢は、縄文時代晩期後葉の前半にさかのぼるもので、遠賀川式土器が出現する以前に、米子平野の周辺にイネ科植物の栽培に関する情報が伝わっていたことを示唆している。

さて、本書で調査報告がなされた境内海道西遺跡からは突帯文土器の深鉢が多く出土している。小片が多く全形を知ることのできる資料は少ないが、口縁部などの形状は山陰地方東部の編年案による突帯文Ⅳ～Ⅴ期に一般的な特徴をもつものが多い〔濱田2008〕。

青木遺跡で見いだされたアワ圧痕を伴う深鉢は突帯文Ⅱ期に典型的な特徴を有しているもので、境内海道西遺跡から出土した土器は、それよりも二段階ほど新しい土器群と考えることができる。遺構に伴うものではないが、量的にまとまった資料なので、突帯文Ⅳ～Ⅴ期における農耕の問題を検討するのに適していると考え、レプリカ法による種実圧痕の調査を行うこととした。

調査の対象としたのは、境内海道西遺跡から出土した突帯文土器の全てである（未報告の胴部片なども含む）。調査の結果、イネ、アワ、キビなどの圧痕は確認することができなかった。調査前に期待した成果を得られなかったが、このことも、今後、当該地域における農耕社会成立期の問題を考える上での重要な事例となると考え、調査成果の報告を行う。

なお、資料調査は、一般財団法人米子市文化財団埋蔵文化財調査室のご理解とご厚意により、鳥取県立むきばんだ史跡公園とNPO法人夢蔵プロジェクト主催「よどえまると道草日和」の体験プログラムとして濱田竜彦が実施した「ドキドキ昔のタネ探し」で行った。

調査参加者は勝部将之、神谷伊鈴、中村富士子、中山恵、松岡藍、濱野浩美、西尾秀道である。

このうち、境内海道西遺跡の突帯文土器の作業を担当した中山、松岡、濱野と濱田が連名で報告を行うものとし、4名を代表して濱田が執筆を担当した。

2. 調査の方法

レプリカ法とは、圧痕内に印象材（シリコン樹脂）充填して、作製された原体のレプリカを詳細に観察し、原体の同定などを行う調査、分析法である〔丑野・田川1991〕。以下、この度の調査で行った作業の手順を概略する。

- ①米子市埋蔵文化財センターにて、濱野の立ち会いのもとに、濱田が土器片を肉眼観察して、種実圧痕の可能性が見込まれる土器片を抽出。
- ②抽出された土器片の圧痕に溜まった土などの汚れを、小筆やエアースプレーを用いて除去。
- ③印象材として使用するシリコン樹脂の油分が土器の器面に含浸するのを防ぐために、土器片をしっかりと水に浸す。
- ④圧痕にシリコン樹脂を充填する。印象材として使用したのは、株式会社ニッシン製JMシリコン（インジェクションタイプ）である。

- ⑤土器の器面にシリコン樹脂の油分が含浸するのを防ぐため、シリコン樹脂に熱湯をかけ、シリコン樹脂の固化時間を短縮する。
- ⑥固化したシリコン樹脂を抜き取り、レプリカを実体顕微鏡で観察し、作製状態を確認。
- ⑦シリコン樹脂に気泡などが取り込まれ、原体の形状や特徴が正確に復元できていない場合には、再度、②～⑤の作業を繰り返す。
- ⑧実態顕微鏡による一次同定を行い、種実の可能性が高いものを絞り込む。
- ⑨走査型電子顕微鏡（以下、SEMと称）を用いて、レプリカの観察と写真撮影を行う。観察、撮影には、鳥取県産業技術センターが所有する日本電子エンジニアリング株式会社JSM-6490LAを使用した。

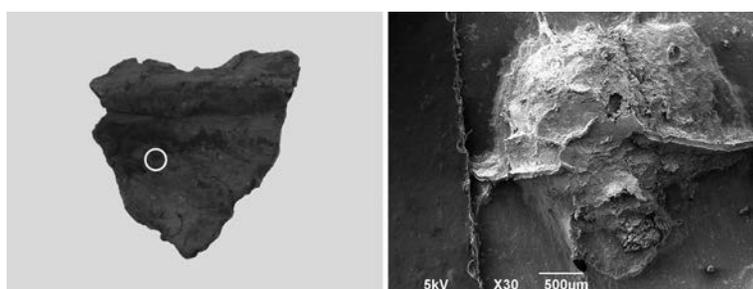
3. 調査の対象とした土器と実態顕微鏡による圧痕の観察結果

悉皆的な肉眼観察を経て、抽出した土器は、本報告書180頁掲載の第200図490・491・495・505・506・510、181頁掲載の第201図524、182頁掲載の第203図533・540・548・560・562、183頁掲載の第204図570・572・587・600、184頁掲載の第206図608、185頁掲載の第208図617、185頁掲載の第210図620である。

「ドキドキ昔のタネ探し」では、これらの土器に認められる圧痕のレプリカを主に中山と松岡が作製した。作製した圧痕のレプリカは、濱田が実態顕微鏡で観察を行い、種実の可能性がうかがわれるものを絞り込んだ。砂粒と考えられる不定型なレプリカが多く、実態顕微鏡の観察段階で、確実に種実の圧痕と考えるものは確認できなかった。ただし、第200図491と495に認められた圧痕から作製したレプリカについては、種実の可能性を否定できなかったため、念のためにSEMによる観察を実施することとした。



第200図 491



第200図 495

第1図 土器と圧痕

4. 走査型電子顕微鏡 (SEM) による圧痕の観察結果

レプリカを作製した圧痕の位置とSEMで撮影した画像を提示し (第1図)、土器の特徴や観察の所見を記す。

①第200図491 (第1図上段)

口縁端部から下がった位置に突帯がめぐる。突帯に施されている刻目はV字状、器形は砲弾形を呈する (第1図上段左)。突帯文IV期以降の深鉢と考えられる。

口縁部内面の破断面に近い場所に認められた圧痕にシリコンを注入し、レプリカを作製した (第1図上段中)。

圧痕のレプリカは長さは約2.7mm、幅は約2.1mmである。不整な楕円形をしている (第1図上段右)。砂粒のように表面は角張っておらず、なめらかな感じだが、緩やかな凹凸がある。形、表面の特徴は、種実の根拠となるものではない。圧痕の原体は特定できない。

②第200図495 (第1図下段)

口縁端部から下がった位置に突帯がめぐる。突帯に施されている刻目はV字状、器形は砲弾形を呈する (第1図下段左)。突帯文IV期以降の深鉢と考えられる。

口縁部の外面、突帯の下部に認められた浅い圧痕にシリコンを注入し、レプリカを作製した (第1図下段右)。

圧痕のレプリカは長さ、幅とも約2.8mmである (第1図下段右)。全体に球形を呈しているが、一方が尖る。形はアワの有ふ果に似るが、一般的なアワに比べ、大きい。砂粒のように表面は角張っていないが、アワの同定根拠となる乳頭突起や内外穎の境は観察できない。他にも、種実の根拠となるものは認められない。圧痕の原体は特定できない。

5. おわりに

境内海道西遺跡出土の突帯文土器は、突帯に施された刻目の形状、また、無刻目突帯文が卓越する状況から、突帯文IV期～V期に製作、使用されたものと考えられる。

現在のところ、山陰地方では、突帯文I期にイネ、突帯文II期にアワ、キビ、突帯文III期以降はイネ、アワ、キビの圧痕が確認できる (表1)。特にイネは、突帯文IV期以降の土器に多く確認できる。このことは、第I-2様式の遠賀川式土器の展開と連動した事象ととらえることができ、遠賀川式土器

表1 山陰地方における種実圧痕

突帯文土器 遠賀川式土器	突帯文I期	突帯文II期	突帯文III期 第I-1様式	突帯文IV期 第II-2様式 (古)	突帯文V期 第I-2様式 (新)
板屋Ⅲ	イネ				
森Ⅲ			アワ、キビ		イネ
三田谷I		キビ			
西川津		アワ、キビ?			
石台				イネ	
北講武氏元					イネ
青木		アワ			
諏訪南山崎					イネ
本高弓ノ木				イネ、アワ、キビ	
智頭枕田				イネ、アワ、キビ	

を製作、使用する集団との接触を契機に、山陰地方の広範囲にイネの栽培が急速に普及すると理解できよう〔濱田2013b〕。

米子平野の周辺では、青木遺跡で突帯文Ⅱ期のアワ、諏訪南山崎遺跡で突帯文Ⅴ期のイネの圧痕が確認されている。境内海道西遺跡出土の突帯文土器は突帯文Ⅳ期、Ⅴ期の特徴をもつことから、イネ科植物の圧痕を確認できる可能性があると考えていたが、この度の調査では、この土器群に確実な種実の圧痕を確認できなかった。

このことは、同一地域の中に、イネ科植物の栽培に積極的な集団と、消極的な集団があったことを意味しているのかもしれない。ただし、土器が製作された環境も圧痕の有無に影響するので、イネ科植物の圧痕が確認できないことが、当時の生業の実態を確実に表しているとはいえない。包含層出土の資料なので、評価が難しいが、この遺跡からは石鍬とされる打製石斧も一定量出土している。打製石斧が耕起に使用されたものかの検討も必要だが、遺跡自体は弥生時代前期に継続しており、どこかのタイミングでイネ科植物の栽培が開始されていることは想像に難くない。縄文・弥生移行期における境内海道西遺跡の評価については、今後、米子平野周辺に点在する遺跡の調査事例を増やすことで、点としての評価ではなく、一定の地域を対象とした面的な様相を踏まえながら、様々な角度から検討を行う必要があるだろう。

〈参考文献〉

丑野毅・田川裕美1991「レプリカ法による土器圧痕の観察」『考古学と自然科学』24

中沢道彦・丑野毅2009「レプリカ法による山陰地方縄文時代晩期の粉状圧痕の観察」『まなぶ』第2号

濱田竜彦2008「中国地方東部の凸帯文土器と地域性」『古代文化』第60巻第3号（助古代学協会）

濱田竜彦2013a「突帯文土器前半期のアワ圧痕－鳥取県青木遺跡におけるレプリカ法調査－」『弥生研究の群像－七田忠昭・森岡秀人・松本岩雄・深澤芳樹さん還暦記念－』大和弥生文化の会

濱田竜彦2013b「山陰地方における初期遠賀川式土器の展開と栽培植物」『農耕社会成立期の山陰地方』第41回山陰考古学研究集会

第Ⅶ章 総括

今回の調査により、境内海道西遺跡は法勝寺川左岸の丘陵における、弥生時代前期から中世に亘る複合遺跡であることが判明した。弥生時代後期から古墳時代前期にかけて集落域であった丘陵には古墳時代中期から後期にかけて古墳群が形成される。そして奈良時代から平安時代にかけては集落ないし作業場などとなり、中世には再び墓域に転換していく。このような変遷は、周辺域の様相とも通有するものであり、今回はその土地利用を明らかにすることができた。

前述のように、境内海道西遺跡は福成早里遺跡に隣接する遺跡であり、当然両遺跡の成果を総合して検討する必要がある。第237図には両遺跡の遺構配置図を公共座標上に並べて示した。なお、平面直角座標について、既往の調査では、日本測地系に準拠した公共座標を使用していたため、ここでは世界測地系に準拠した公共座標値に換算している。既往の調査成果も踏まえ、今回得られた調査成果と課題を以下に述べたい。

1. 突帯文土器について

今回の調査では黒色土（Ⅳ～Ⅴ層）の包含層中から突帯文土器が126点出土した。今回は破片資料が殆どであり、器形については不明なものが大半であったが、その中でも無刻目突帯の深鉢Ⅲ類が最も出土量が多く、全体の71%を占める。また刻目を持つものについても刻みは浅く、痕跡的なものが多い。この様相はバリエーション的には新しい。突帯の位置については、口縁端部より下がった位置に付くものが多い。こうした位置に無刻目突帯が巡る深鉢は、弥生時代前期前半にみられるイキスタタイプの様相で、目久美遺跡第Ⅴ・Ⅵ次調査出土資料が典型例だとされる。これは濱田分類の突帯文Ⅳ～Ⅴ期にあたる。ただし、今回の調査の当該期の遺物出土傾向を見ると、遠賀川系土器は殆ど出土していないことは大きな特徴であり、当然遠賀川と接触している時期ではあるが、前代から続く縄文晩期の系譜が色濃い遺跡であるといえよう。さらに、この傾向は越敷山遺跡群においても同様の様相を持つことから、これが当該遺跡周辺の丘陵地域の遺跡の特色を表すものかも知れない。

いずれにしても今回の出土資料は山陰東部の当該期の土器編年を考える上で、貴重な資料を提示できたものと思われる。さらに近接する境矢石遺跡、標式遺跡としても提唱されている古市河原田遺跡、中海沿岸の低湿地遺跡の目久美遺跡など周辺地域の資料との比較検討により、その様相が明らかになるものと思われる。なお、本資料については第Ⅵ章第4節の種実圧痕調査の項も参照されたい。

2. 弥生時代前期～中期の様相

当該期の遺構は貯蔵穴と段状遺構であった。2基の貯蔵穴（SK13・15）は13mの距離があり、ほぼ同一の標高に掘り込まれている。隣接する福成早里遺跡においても当該期の貯蔵穴（SK11）が検出されており、付随する溝状遺構（SD5）が貯蔵穴へ行き来するための道という所見がなされている（第237図）。この溝状遺構は等高線に沿って掘り込まれており、標高は異なるものの等高線にそって貯蔵穴が掘り込まれるという状況は通有するものであり、当該期の貯蔵穴のあり方を考える上で興味深い。

段状遺構については、調査区北側の斜面域に集中して階段状に構築されている。この区域では包含

層中からも当該期の遺物が多く出土しており、周辺域に遺構が存在する可能性は高いと思われる。

3. 弥生時代後期～古墳時代前期の集落の様相

今回の調査成果の一つとして、弥生時代後期から古墳時代にかけての集落の存在が確認されたことがあげられる。集落構造としては、急峻な丘陵斜面域を階段状に削平し段状遺構を設け、そこに居住域を設けている。このような集落構造は、米子市陰田から境にかけての米子平野西側の、広範囲の台地を持たない丘陵域の特徴と考えられる。これについては、すでに吉谷遺跡群において濱氏により詳細な検討が行われており、遺構分布形態について次の3つの特色が挙げられている（濱2003）。

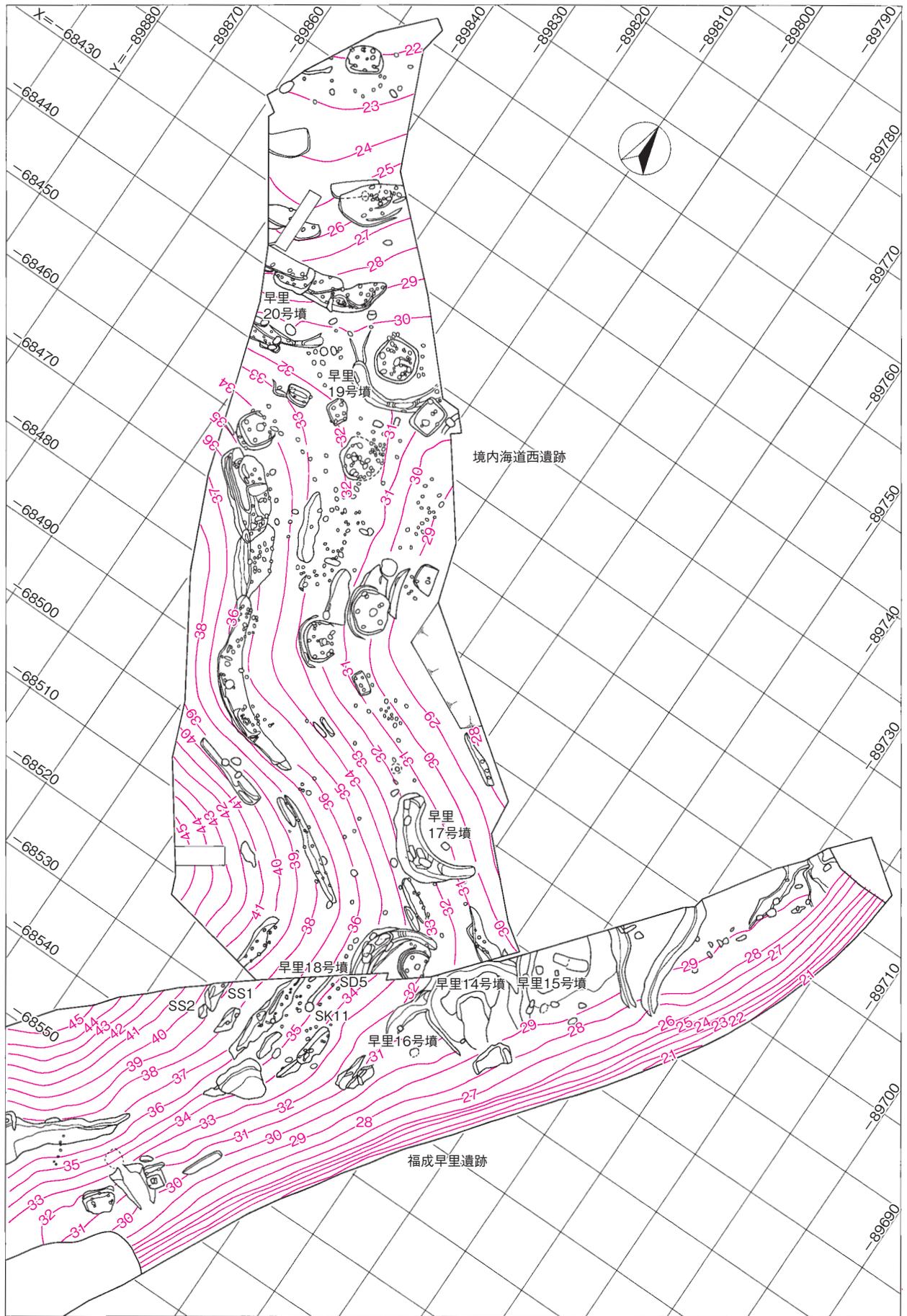
- ① 丘陵頂部や尾根上を避けて竪穴住居跡が分布、斜面地側を大きく掘削してスペースを作り出している。
- ② 段状遺構には柱穴が整って並ばない、もしくは存在せず、上屋構造を持つ建物跡が想定しにくい。
- ③ 段状遺構は、尾根筋稜線を掘削して築かれる比較的規模の大きなもの（凸型）と丘陵頂部や尾根上を避けて竪穴住居跡の近隣に作られるもの（凹型）に分けられる。

そして、段状遺構と建物との在り方から、丘陵上の遺跡は住居と作業スペースからなっており、単位集団の居住域と貯蔵域が分かれて存在していた可能性を示唆している。

これに基づき今回の調査で検出された当該期の遺構配置を見ていくと、竪穴建物については、SI1とSI3、SI5とSI8はそれぞれ相似形を呈しており、建て替えの可能性が高い。また、基本的には個々の住居に対して同時期の段状遺構が7～10mの近接域に設けられている。なお、SI2はSI1に付随する建物と考えると、SS22はSI3に付随する作業空間である可能性が考えられよう。とすると、住居と作業スペースという構造が看取できる。この構造は吉谷遺跡群の③と同様の集落構造であるといえよう。

段状遺構については、先ほどの住居に付随する方形の作業スペース的なもの（SS22・SS24・25・SI2）と等高線に沿って細長く伸びるもの（SS5～7・13～17など）がある。これについては面上は硬化しており、通路的な役割を果たしていたものと考えられる。その中である程度スペースが確保できる部分には、SB1などの住居を設けている。また、この段状遺構は出土遺物から、弥生時代後期後半から古墳時代にかけて継続的に使用されていたようである。特にSS5～7・13～17という一連の段状遺構は、尾根を横断する形で西側の調査区外に延びており、尾根を等高線にそって巡るような形状が想定できる。当該期のこのような遺構は、近接する境矢石遺跡4・6区の斜面域においても検出されており、急峻な斜面域を等高線にそった形で横断する構造で段状遺構を設け、通路としても使用されている。このような通路と住居を一体化させた在り方は、急峻な斜面という立地を生かした集落構造である。これは、従前言及されているように、広い台地上に展開する妻木晩田、越敷山遺跡等の大規模集落構造に対して、小丘陵の連続する地域ではこの段状遺構を介して、斜面域の単独集落が連動し、一つのネットワークを形成していたことをまさに裏付けるものである。急峻な小丘陵が連続する当該地域では、一見小単位に見える丘陵上の集落も、周辺に点在する丘陵上集落を連動した単位でマクロ的にみることにより、台地上の大規模集落と同等の機能を保持していたことが見えてくるであろう。

以上のように、今回発見された遺構は、小丘陵上における当該期の弥生時代から古墳時代にかけての集落構造の様相が看取できる好資料といえよう。



北浦弘人ほか 1998『福成早里遺跡』より一部改変

0 (S=1:800) 20m

第237図 福成早里遺跡と境内海道西遺跡

4. SK5（甗棺墓）について

調査成果の第二として、甗棺の土壙墓が検出されたことがあげられる。山陰型甗形土器のこのような転用例は、従前発見例がなく、土器の使用方法を含めて興味深い事例である。山陰型甗形土器の用途については、今までに甗や燻製器、酒造器、麻蒸器などの煮沸具の他、排煙装置や祭祀具などといった、多様な検討が行われている。また、この土器は他の土器に比較して出土例が少なく、竪穴建物内での出土状況などから、集落で共同使用されていたことも推測されている（下江ほか2003）。近年、広島県北部地域で山陰型甗形土器の出土例が増加しており、中でもトンガ坊城遺跡では丘陵上の集落から13個体以上の出土例が報告されている。この遺跡では、山陰型甗形土器は斜面に設けられた段状遺構と竪穴建物内から出土しており、中央ピットの炉直上からの出土状態から、建物中央に吊るして使用されていた可能性が示唆されている（註1）。

今回出土した山陰型甗形土器をみると、工具を用いて非常に精巧に割断し、棺材に二次転用していることがわかる。この点について興味深いのは、山陰型甗形土器を破砕する行為自体に、祭祀的な性格を見出す事例である。県下では、北栄町中浜遺跡において完形の山陰型甗形土器3個体が出土しており、このうち2点は竪穴建物中央付近において遺構廃絶後に意図的に破砕された状態で確認されている。このことから所見では住居廃絶に伴う儀礼行為を示唆されている（君嶋2004）。今回発見された甗棺墓は、段状遺構の廃絶段階の埋土に掘り込まれていたもので、その意味では、今回の甗棺は山陰型甗形土器を転用するという事自体に祭祀的な意図を持つものであり、同時に段状遺構の廃絶段階での儀礼に伴う埋納行為という意味合いをも持ち合わせていたのではなかろうか。いずれにしても、今後の類例の増加を待ちたい。

5. 古墳について

調査成果の第三として、支尾根上に古墳時代中期後半～後期にかけての早里17～20号墳の4基の円墳が検出されたことがあげられる。当該期、群集墳の傾向としては場所の制約で方墳の形状を呈するものもあるが、基本的には円墳で、主体部は石棺ないし木棺、石蓋土壙墓の場合木棺であることもある。検出された円墳の主体部及び盛土部分は削平により失われているが、4基は墳丘の規模や形状に共通性が高い。また、周溝内埋葬墓から良好な一括資料が出土している。出土した供献土器は脚付埴複数個と長頸壺ないし短頸壺のセットが墓壙内に一括して納められていたもので、5世紀第4四半期頃に比定される。

このセット関係の一括資料の古墳出土事例としては、米子市域では陰田新山山田古墳群、古市15号墳などに類例がある。すなわち、古墳時代中期後半の米子市新山の山田7号墳周溝内からは土師器埴10点と直口壺1点、短頸壺1点が、4号墳からは高坏10点以上と直口壺1点がまとめて供献されている（杉谷1994）。同じく古墳時代中期後半の古市15号墳の周溝からは、土師器高坏7点と直口壺1点、須恵器甗1点、坏蓋2点と身1点がまとめて出土している（中森2002）。さらに、県東部鳥取市の松原25号墳においても、主体部から古墳時代後期前葉に比定される脚付埴6個、高坏1個、短頸壺1点が出土している（北ほか2010）。このようなセット関係を持つ一括資料は、当該期の葬送儀礼行為の一端を示すものと考えられ、さらに、県内の東西で同様の一括資料が出土していることは、古墳時代中期後半から後期前葉にかけての葬送儀礼行為として通有のものだったことを示すものであろう。また、今回発見された一括資料は当時の葬送儀礼の一端を示すものとして興味深く、また土師器と須

恵器のセット関係として編年資料としても注目すべきものであると思われる。

今回出土した周溝内埋葬墓例については、古市古墳群等にも類例があることから、当該期に古墳周溝内に埋葬する行為が一般的に行われていたことが分かる。古墳主体部は基本的には追葬行為が行われ、複数埋葬が行われる。その一環として周溝内埋葬も行われるようになり、6世紀後半の横穴墓の開始まではこの追葬行為が行われる。今回検出された4基の古墳もこれに追随するものと考えられよう。

早里古墳群について

今回検出された4基の円墳は、谷をまたがる支尾根上にまとまって古墳時代中期後半～古墳時代後期にかけて継続して築かれており、早里古墳群に含まれるものである。このうち、南側尾根部の早里17・18号墳は法勝寺川流域に面しており、小谷を隔てた北側尾根部の早里19・20号墳は、北西側の谷戸の沖積低地に面しており、見下ろす沖積低地の方向も違っている（第4図）。早里古墳群全体の分布状況を見ると、法勝寺川流域に面する尾根上には、早里14～16号墳が築かれており、北西側の尾根部には未調査ではあるが、早里12・13号墳が築かれている。分布状況を見ると、早里14～16号墳と今回調査をした17・18号墳、早里12～13号墳と今回調査した19・20号墳が、それぞれ小支群として存在していた可能性が高い。

年代観としては、早里17号墳が5世紀第4四半期から6世紀、18号墳が5世紀第4四半期から築造され、7世紀に埋没、19号墳は5世紀第4四半期から築造され7世紀に埋没、20号墳が5世紀第4四半期に比定される。これを隣接する既往調査の早里古墳群の年代観と比較してみると、最も早い時期に構築された古墳が早里15・16号墳で、6世紀中葉に比定される。16号墳の上層には横穴式石室を持つ14号墳が築かれる。14号墳の年代は6世紀末～7世紀初頭で、7世紀中葉まで使用された古墳である。またSX1は14・15両墳どちらかに伴う周溝内埋葬墓で6世紀中頃～後半に比定されている。形態的には、14号墳が横穴式石室を持つが、基本的には皆円墳である。また、早里15号墳からは6世紀中葉の周溝内埋葬（SX2）が検出されている。この年代観に基づくと、今回検出された古墳は、早里14～16号墳よりはやや古相を表す。以上のことから、早里古墳群北側では、丘陵尾根北側から古墳が造成され始め、法勝寺川流域に面する南側尾根部に展開していくことが看取できる。ただし、追葬が7世紀まで行われていたことを考えると、いずれも同時期性の高い古墳群であると考えられる。

以上、当該古墳群は、古墳時代を通じて殿山古墳などを造営した法勝寺川中・下流域の広域首長権の基、地域支配構造に組み込まれていたものと思われる。従前言及されているように、古墳時代後期になると、淀江町に向山古墳群を造営した勢力が拡大し、法勝寺川中・下流域の首長墓がやや小型化、広域首長権の弱体化が推定される。こうした動きのなかで従来の広域首長権のもとで境地域の支配を続けていた地域首長が、早里古墳群の被葬者像として浮かび上がってくるのではなかろうか。

6. 古墳時代後期～古代の様相

調査成果の第四として、古墳時代後期から古代にかけて断続的に斜面地に段状遺構が設けられる様相が判明したことがあげられる。6世紀末から7世紀後半にかけて、段状遺構は調査区北側谷頭から裾部にかけて展開する。検出された段状遺構の形状を見ると、斜面上位の周溝に並行して平坦面に柱穴列が掘り込まれるものが多い。これについては段上に小屋掛け等の簡易的な建物が存在した可能性が考えられる。この段上の施設について、特筆すべきはSS26である。この段状遺構中央には斜面上

方の壁面に固定式の竈が設けられ、面上から焼土、炭化物、灰と共に移動式竈の破片が多数出土している。近接域には、柱穴列や掘立柱建物を持つ段状遺構（SS30・32・12）が展開していることから、この集落の中で、SS26は共同使用の竈屋的な性格を有する施設であったことが想定できよう。この様相は平安時代にかけても継続し、中央谷部では、複数の掘立柱建物（SB4～6）及び段状遺構（SS1～3）と共同使用の竈屋的な施設（SS4）が構築される。このような複数の居住施設に対して1つの竈屋を持つ集落構造が、当該期の遺跡の特徴を示すと思われる。さらに遺構には伴わないが、周辺域ではセット関係を持つミニチュア土器が出土している。このミニチュア土器は坏形、甕形、甑形、竈形、支脚形といった什器類と煮炊具であり、竈屋との関連を窺わせるものである。当該期、この集落において形式化した神饌を用いた祭祀が執り行われていたことが推測できよう。

7. 古代末～中世の様相

調査成果の第五としては、SD7とSK18の2つの遺構から、11世紀前半頃の良好な一括資料が提示できたことである。平安時代以降の土師器の変遷については、山陰中世土器検討会を中心に検討が行われている(中森2005a・b・2012、玉木2006、濱野2011)。11～13世紀の土器様相の変遷については玉木氏によれば

- I 回転台土師器が主体となり足高高台付坏や小皿が出土する段階。
- II 小皿の定型化が起り柱状高台付の坏・皿が出土する段階。
- III 京都系の皿が特定の地域で出土する段階。

という変化を基に、I～III段階の変遷案を提示している（玉木2006）。検討会ではこの変遷案を妥当なものであるとしたうえで、中森氏は坏の形態変化について、古代以来の須恵器の影響を受けた底部から直線的に外傾するものが、体部下位で丸みを持ち立ち上がるようになり、器高と底径が縮小化傾向にあるとしている（中森2012）。さらに、氏は底部から直線的に外傾するものを坏A、底部から丸みをもって立ち上がるものを坏Bとし、坏Bの出現をIV期とし、口縁が外反する坏B2類の出現を持ってV期とし、米子城跡21遺跡SK32にみられる大型化する段階をV期後半としている。

これら各氏の研究に基づき、今回出土資料を検討すると、まず、SD7出土の高台付坏の形態については、古市宮ノ谷山遺跡SK15や米子城跡6遺跡SK51、米子城跡21遺跡SK32などで出土しているものに近似する。これは玉木氏の述べるI段階にあたり、体部が丸みを持つ形状は古市宮ノ谷山遺跡SK15よりは新相を表す。口径については、口縁まで残存しているものが1点のみであるが、口径11.4cmとやや小型であり、米子城跡6遺跡SK51出土資料と似た様相を示す。

次に、SK18出土の坏の形態については、糸徹底に体部は丸みを持ち、口縁端部は直線的なものと外反するものがある。やや小型で外反する口縁を有するタイプは中森分類のV期前半に相当し、米子城跡6遺跡SK51出土資料と似た様相を示す。また、転用品ではあるが、SD7と同タイプの高台付坏が1点出土していることから、SD7、SK18の2つの遺構は同時期性の高い遺構であると考えられよう。年代観としては、米子城跡6遺跡SK51出土資料は、玉木編年のI-1期、中森編年のV期前半にあたり、11世紀前半に比定されていることから、今回出土資料も当該期に帰属するものと考えられる。

平安時代後期は、陰田遺跡群や坂長遺跡群でも遺跡が終焉する時期にあたり、米子平野の遺跡も減少傾向にある。そのなかで、古市宮ノ谷山遺跡や米子城跡6・21遺跡などでは平安時代後期の良好な一括資料を提示している。今回出土した一括資料はこのような既存の資料と共に、平安末から中世に

繋がる在地土器の編年を構築する上で貴重な一括資料と考えられよう。

中世の遺構は土壙墓1基である。隣接する福成早里遺跡においても、当該期には集落遺構が検出されず、火葬墓や土壙墓等と共に五輪塔などが出土している。以上のことから、当該期、遺跡地は集落域から墓域へ転換していく様相が看過できる。さらに、古代の集落域から中世の墓域に転換していく過渡期の平安時代末において、前述のSD7・SK18という祭祀的な遺構が検出されたことは、土地利用の変遷を考える上でも非常に興味深い事例と考えられよう。

以上、全体を鑑みたとき、境内海道西遺跡の性格を示す大きな特徴は、時代を継続して利用される遺構の存在である。弥生時代後期の段状遺構は古墳時代前期まで継続使用され、古墳時代後期の段状遺構は古代まで継続利用される。さらに、継続使用という意味では、弥生時代後期に作られた段状遺構面から中世の古瀬戸碗が出土しているように、遺構としての役目が終焉した後も、この平場がずっと段として存在し、利用されているのである。実際、調査前の表土面でもこの段状の平場は確認できた。これは、当該遺構が構築当初の役割を終えた後、埋没過程で質的転換を経ながらも断続的に利用されてきたことを示す。また同時に、継続使用された遺構は調査の段階においても、重複関係と出土遺物の厳密な位置的、層位的把握からその時間軸に応じた変遷過程を追わねばならず、結果的には、各遺構を検討する上での時期決定を非常に困難なものとし、調査時には十分に把握しきれなかった部分もあった。ただし、このような空間利用の在り方は、境矢石遺跡などでも見られるものであり、丘陵という限定された生活空間を有効利用する上で、当該地域での通有的な在り方だと思われる。

(註)

1. (財) 広島市未来都市創造財団 文化財課 楳木敬太氏の御教示による。

〈引用・参考文献〉

広島市未来都市創造財団編2011『トンガ坊城遺跡・坊主山遺跡・柳遺跡・琴平遺跡』広島市未来創造財団文化科学部文化財課

北浩明・小口英一郎ほか2010『松原古墳群Ⅰ』鳥取県埋蔵文化財センター・国土交通省 鳥取河川国道事務所。

君嶋俊行2004『中浜遺跡』財団法人 鳥取県教育文化財団

下江健太ほか2003『橋本遺跡群』財団法人 鳥取県教育文化財団

杉谷愛象1994『萱原・奥陰田Ⅰ』鳥取県道路課・財団法人米子市教育文化事業団

田中弘道1996「いわゆる『山陰型甌形土器』について」『平成8年度 埋蔵文化財発掘技術研修会 特別研修』発表資料 鳥取県埋蔵文化財センター

玉木秀幸2006「伯耆の土器様相」『山陰における中世前期の様相－伯耆・出雲を中心として－』第5回山陰中世土器検討会資料集 山陰中世土器検討会

中原 齊編1992『越敷山遺跡群』会見町教育委員会・岸本町教育委員会

中森 祥ほか1999『古市遺跡群1』財団法人 鳥取県教育文化財団

中森 祥ほか2002『古市遺跡群3』財団法人 鳥取県教育文化財団

中森 祥2005a「伯耆における9・10世紀の様相－西伯耆を中心に－」『平安時代前期の土器様相－中国地方を中心に－』第4回山陰中世土器検討会資料集 山陰中世土器検討会

中森 祥2005b「中世前期の遺物について」『門前上屋敷遺跡』財団法人 鳥取県教育文化財団

- 中森 祥2012「古代から中世前期の土師器」『土器・陶磁器から見た中世前半期の山陰－検討会10年のあゆみ－』第
11回山陰中世土器検討会資料集 山陰中世土器検討会
- 濱田竜彦1999「1.古市河原田遺跡出土の突帯文土器について－古市河原田式の提唱－」『古市遺跡群1』第9節考察
財団法人 鳥取県教育文化財団
- 濱野浩美2011「博労町遺跡出土中世遺物の検討－錦町第1遺跡出土中世資料と比較して－」『博労町遺跡』財団法人
米子市教育文化事業団
- 濱 隆造2003「弥生時代後期集落の様相～吉谷・古市遺跡群を中心に」『吉谷遺跡群』第5章 特論2 財団法人 鳥
取県教育文化財団
- 湯村 功・中森 祥ほか編 1998『米子城跡21遺跡』鳥取県教育文化財団
- 平野芳英ほか2013『コシキ形土器談話会』発表資料 荒神谷博物館

遺物觀察表

遺構出土土器・土製品観察表

()は復元

遺物 No	挿図 No	遺構・地区 出土層位	器種	部位 残存率	法量 (cm)	焼成	色調	胎土	調整・文様	備考
1	25	SS29 上層	弥生土器 甕	1/4	口径(19.1)	良好	褐色	密 雲母・石英	外面：口頸部横ナデ、肩部縦ハケメ、体部下縦ヘラミガキ 内面：口頸部指頭調整→横ヘラミガキ、体部縦ヘラミガキ	外面肩部一部層状 煤付着
2	25	SS29 中層	弥生土器 甕	1/8	口径(15.8) 器高(7.6)	良好	外面：黒茶色 内面：褐色	密 雲母・砂粒	外面：口縁部貼付突帯、口頸部横ナデ、肩部指頭調整・ 縦ハケメ→横ヘラミガキ 内面：指頭調整→横ヘラミガキ	
3	25	SS29	弥生土器 甕	口頸部 破片	口径(18.8) 器高(3.0)	良好	褐色	密 石英・砂粒	外面：口縁部貼付突帯、口頸部横ナデ、肩部指頭調整→ 縦ヘラミガキ 内面：指頭調整→横ヘラミガキ	
4	25	SS29 下層	弥生土器 甕	体部 1/8	器高(8.6) 胴径(16.8)	良好	灰褐色	密	外面：ハケメ→ヘラ状工具端部による連続刺突文2段・横 ヘラミガキ 内面：指頭調整→縦・横ヘラミガキ	外面一部層状煤付 着
5	25	SS29 下層	弥生土器 甕	1/3	口径(18.8) 器高：19.5 底径(6.4)	良好	灰褐色	密 雲母・石英・ 砂粒	外面：指頭調整・縦ハケメ→縦・横ヘラミガキ、底面ヘラ ケズリ→ヘラミガキ 内面：指頭調整→縦・横ヘラミガキ	
6	25	SS29 上層	弥生土器 甕	底部 1/2	器高(3.4) 底径(5.7)	良好	灰褐色	密	外面：指頭調整→縦ヘラミガキ、底面ヘラケズリ→ナデ 内面：指頭調整・ヘラケズリ→ナデ	
7	25	SS29	弥生土器 甕	底部 3/4	器高(6.0) 底径(5.2)	良好	褐色	密	外面：指頭調整・ハケメ→縦ヘラミガキ、底面ヘラケズリ →ナデ 内面：指頭調整・ヘラケズリ→ナデ	
8	25	SS29 下層	弥生土器 甕	底部 1/3	器高(7.3) 底径(6.4)	良好	橙褐色	密 雲母・石英	外面：指頭調整→ヘラミガキ、底面ヘラケズリ→ナデ・ヘ ラミガキ 内面：指頭調整→横ヘラミガキ	内面コゲ
9	25	SS29 下層	弥生土器 甕	底部 1/4	器高(4.4) 底径(7.7)	良好	褐色	密 石英・砂粒	外面：縦ハケメ、底面ヘラミガキ 内面：指頭調整→ヘラミガキ	
10	26	SS31-a 下層	弥生土器 甕	口頸部 破片	口径(18.4) 器高(3.8)	良好	外面：褐色 内面：橙褐色	密	外面：指頭調整→ナデ 内面：口縁部横ヘラミガキ、頸部指頭調整→ナデ	
11	26	SS31-b 下層	弥生土器 甕	口縁部 破片	口径(12.8) 器高(2.9)	良好	褐色	密	外面：口縁部櫛状工具による直線文 内面：横ヘラミガキ	
12	26	SS31-b 下層	弥生土器 甕	口頸部 破片	器高(2.2)	良好	褐色	密	外面：口縁部横ナデ、頸部指頭調整→縦ハケメ 内面：口頸部横ナデ、肩部横ヘラケズリ	
13	27	SS34 下層	弥生土器 甕	口頸部 破片	口径(18.6) 器高(2.9)	良好	外面：灰褐色 内面：褐色	密	外面：口縁部刻み、頸部指頭調整→ハケメ→ナデ 内面：指頭調整→横ナデ	
14	27	SS34 中層	弥生土器 甕	底部 1/4	器高(3.4) 底径(7.4)	良好	褐色	密 雲母・石英	外面：縦ハケメ・指頭調整→ナデ、底面ヘラケズリ→ナデ 内面：指頭調整・ヘラケズリ→ナデ	底面穀粒痕
15	29	SS35 上層	弥生土器 甕	口縁～体 部 破片	口径(19.4) 器高(6.2)	良好	橙褐色	密 雲母・石英	外面：口縁部横ナデ、体部指頭調整→横ヘラミガキ・ヘラ 状工具による直線文2条 内面：口縁部横ナデ、体部指頭調整→斜めハケメ	
16	29	SS35	弥生土器 甕	口頸部 破片	口径(16.0) 器高(2.4)	良好	灰褐色	密	外面：口縁部指頭調整→横ナデ、頸部縦ハケメ 内面：指頭調整→横ナデ	
17	29	SS35	弥生土器 甕	口頸部 破片	口径(26.8) 器高(3.8)	良好	褐色	密 雲母・石英	外面：口縁部横ナデ、体部指頭調整→縦ハケメ 内面：口縁部横ナデ、体部縦ハケメ→ナデ	
18	29	SS35 上層	弥生土器 甕	口頸部 破片	口径(32.6) 器高(4.8)	良好	橙褐色	密 雲母・石英	外面：口縁部横ナデ、頸部～体部指頭調整→横ハケメ 内面：指頭調整→横ヘラミガキ	
19	29	SS35 上層	弥生土器 甕	口頸部 破片	口径(29.6) 器高(5.8)	良好	褐色	密 雲母・石英	外面：口縁部横ナデ、頸部指頭調整、体部縦ハケメ 内面：指頭調整→ヘラミガキ	内面コゲ
20	29	SS35 上層	弥生土器 鉢	口縁～体 部 1/5	口径(27.4) 器高(8.9)	良好	褐色	密 角閃石・雲 母・石英	外面：口縁部横ナデ、頸部指頭調整→横ナデ、体部櫛状工 具による直線文・ヘラ状工具端部による連続刺突文・ 縦ハケメ 内面：指頭調整→斜めハケメ	
21	29	SS35 上層	弥生土器 甕	体部～底 部 1/5	器高(18.7) 底径(7.7)	良好	外面：橙褐色 内面：褐色	密 角閃石・雲 母	外面：縦ヘラミガキ、底面ヘラケズリ→ナデ 内面：縦ヘラケズリ	側面加熱痕・オキ 火転がし痕
22	29	SS35 上層	弥生土器 甕	底部 1/3	器高(8.2) 底径(8.6)	良好	褐色	密 雲母・石英	外面：縦ヘラミガキ・指頭調整→ナデ、底面ヘラケズリ→ ナデ 内面：指頭調整→縦ヘラケズリ	
23	29	SS35 上層	弥生土器 甕	底部 1/4	器高(7.2) 底径(5.6)	良好	外面：褐色 内面：黒茶色	密 雲母・石英	外面：縦ヘラミガキ、底面ヘラケズリ→ナデ 内面：指頭調整→横ヘラミガキ	
24	29	SS35 上層	弥生土器 壺	底部 破片	器高(4.6) 底径(7.0)	良好	外面：褐色 内面：灰褐色	密 石英・砂粒	外面：指頭調整・ハケメ→ヘラミガキ 内面：指頭調整→ヘラミガキ	内面コゲ
25	29	SS35 上層	弥生土器 甕	底部 1/4	器高(6.4) 底径(4.4)	良好	外面：橙褐色 内面：褐色	密 雲母・石英	外面：縦ヘラミガキ・指頭調整→ナデ、底面ヘラケズリ→ ナデ 内面：指頭調整→縦ヘラケズリ	
26	29	SS35 上層	弥生土器 甕	底部	器高(6.2) 底径：6.6	良好	外面：橙褐色 内面：灰褐色	密 雲母・石英	外面：指頭調整・ナデ→ヘラミガキ、底面指頭調整・ヘラ ケズリ→ヘラミガキ 内面：指頭調整→ヘラケズリ	
27	29	SS35 上層	弥生土器 甕	底部 3/5	器高(2.9) 底径(5.4)	良好	褐色	密 雲母・石英	外面：指頭調整→縦ハケメ・ナデ、底面ヘラケズリ→ナデ 内面：指頭調整・ヘラケズリ→ナデ	
28	29	SS35 上層	弥生土器 甕	底部 3/4	器高(4.3) 底径(5.4)	良好	褐色	密 雲母・石英	外面：指頭調整→ハケメ、底面指頭調整・ヘラケズリ→ナ デ 内面：調整不明	
29	29	SS35 上層	弥生土器 甕	底部 1/4	器高(3.9) 底径(5.8)	良好	外面：褐色 内面：灰褐色	密 雲母・石英	外面：縦ハケメ、底面ヘラケズリ→ナデ 内面：指頭調整→ヘラケズリ	
30	29	SS35 上層	弥生土器 甕	底部 1/4	器高(2.7) 底径(2.9)	良好	外面：赤褐色 内面：黒茶色	密 雲母・石英	外面：縦ハケメ、底面ヘラケズリ→ナデ 内面：指頭調整・ヘラミガキ	内面コゲ
31	29	SS35 上層	弥生土器 甕	底部 破片	器高(2.6)	良好	褐色	密 雲母・石英	底面：ハケメ→ナデ 内面：指頭調整→ナデ	
32	29	SS35 下層	弥生土器 器台？	頸部 1/8	器高(4.5)	良好	灰褐色	密 雲母・石英	外面：横ヘラミガキ 内面：受部ヘラミガキ、接合部ヘラケズリ	内外面赤彩
33	29	SS35 上層	弥生土器 器台？	脚部 1/8	器高(4.1) 底径(13.8)	良好	褐色	密 石英・砂粒	外面：櫛状工具による直線文、ハケメ 内面：指頭調整、ヘラケズリ	
34	31	SK13	弥生土器 壺	口縁部 破片	口径(16.7) 器高(2.3)	良	橙褐色	密 石英	外面：口縁部凹線2条以上→刻み、頸部ヘラミガキ 内面：調整不明	
35	31	SK13 下層	弥生土器 甕	完形	口径：14.6 器高：22.4 胴径：16.9 底径：4.6	良	橙褐色	密 白色粒	外面：口頸部横ナデ、体部上半ハケメ・櫛状工具による列 点文、体部下縦ヘラミガキ 内面：口頸部横ナデ、体部上半指頭調整→ハケメ、体部下 半指頭調整→ハケメ・ヘラケズリ・ナデ	外面上半層状炭化 物付着 内面コゲ・穀粒痕
36	34	SK20	弥生土器 甕	肩部 破片	器高(2.0)	良	橙褐色	密 石英	外面：凹線4条以上、竹管文 内面：ハケメ→ナデ	
37	40	SI1 上層	弥生土器 壺	口頸部 1/3	口径(15.9) 器高(7.8)	良	橙褐色	密 雲母・石英	外面：口縁部櫛状工具による直線文→ナデ、頸部指頭調整 →ヘラミガキ 内面：口頸部横ヘラミガキ、頸部指頭調整→ナデ、肩部ヘ ラケズリ	外面一部煤付着

38	40	SI1 上層	弥生土器 壺	口頸部 破片	口径(16.1) 器高(4.7)	良	外面:褐色 内面:黒茶色	密 雲母・石英	外面:口縁部凹線2条、頸部ハケメ→横ヘラミガキ 内面:口頸部横ヘラミガキ、肩部横ヘラケズリ	
39	40	SI1 上層	弥生土器 甕	口頸部 破片	口径(9.6) 器高(3.0)	良	褐色	密 雲母・石英	外面:口縁部櫛状工具による直線文→ナデ、頸部横ヘラミガキ 内面:口頸部調整不明、肩部横ヘラケズリ	外面煤付着
40	40	SI1 P1	弥生土器 甕	口縁→肩 部1/4	口径(14.5) 器高(5.2)	良	灰褐色	密 雲母・石英	外面:口縁部櫛状工具による直線文→ナデ、肩部縦ハケメ 内面:口頸部指頭調整→ナデ、肩部横ヘラケズリ	外面一部煤・層状 煤付着
41	40	SI1 上層	弥生土器 甕	口頸部 1/8	口径(16.8) 器高(2.7)	良	灰褐色	密 雲母・石英	外面:口縁部櫛状工具による直線文→ナデ、頸部横ヘラミガキ 内面:口頸部横ヘラミガキ、肩部横ヘラケズリ	外面層状煤付着
42	40	SI1 上層	弥生土器 破片	口頸部 破片	口径(14.3) 器高(4.6)	良	灰褐色	密 石英・砂粒	外面:口縁部櫛状工具による直線文→ナデ、頸部横ヘラミガキ 内面:口頸部横ヘラミガキ、肩部横ヘラケズリ	
43	40	SI1 中層	弥生土器 甕	口頸部 破片	口径(17.1) 器高(4.6)	良	褐色	密 雲母・石英	外面:口縁部櫛状工具による直線文→ナデ、頸部ナデ 内面:口頸部指頭調整→ナデ、肩部横ヘラケズリ	外面煤付着
44	40	SI1 上層	弥生土器 甕	口頸部 1/8	口径(16.3) 器高(4.0)	良	褐色	密 雲母・石英	外面:口縁部櫛状工具による直線文→ナデ、頸部横ヘラミガキ 内面:口頸部横ヘラミガキ、肩部横ヘラケズリ	外面煤付着
45	40	SI1 中層	弥生土器 甕	口頸部 破片	口径(13.8) 器高(3.3)	良	橙褐色	密 雲母・石英	外面:口縁部櫛状工具による直線文→ナデ、頸部ナデ 内面:口頸部指頭調整→ナデ	外面煤付着
46	40	SI1 上層	弥生土器 甕	口頸部 破片	口径(14.2) 器高(4.0)	良	褐色	密 雲母・石英	外面:口縁部櫛状工具による直線文→ナデ、頸部横ヘラミガキ 内面:横ヘラミガキ	
47	40	SI1 中層	弥生土器 甕	口頸部 1/4	口径(17.7) 器高(5.0)	良	橙褐色	密 雲母・石英	外面:口縁部櫛状工具による直線文→ナデ、頸部ナデ 内面:口頸部指頭調整→ナデ、肩部横ヘラケズリ	
48	40	SI1 中層	弥生土器 甕	口頸部 破片	口径(17.1) 器高(3.6)	良	褐色	密 石英・砂粒	外面:口縁部櫛状工具による直線文→ナデ、頸部ナデ 内面:口頸部ナデ、肩部横ヘラケズリ	赤彩?
49	40	SI1 上層	弥生土器 甕	口頸部 破片	口径(16.1) 器高(3.8)	良	橙褐色	密 雲母・石英	外面:口縁部櫛状工具による直線文→ナデ、頸部横ヘラミガキ 内面:口頸部横ヘラミガキ、肩部横ヘラケズリ	外面口縁上部赤彩
50	40	SI1 下層	弥生土器 甕	口頸部 1/2	口径(16.6) 器高(5.2)	良	灰褐色	密 雲母・石英	外面:口縁部櫛状工具による直線文→ナデ、頸部横ヘラミガキ 内面:口頸部横ヘラミガキ、肩部横ヘラケズリ	
51	40	SI1 上層	弥生土器 甕	口縁→肩 部1/4	口径(12.9) 器高(5.1)	良	暗灰褐色	密 雲母・石英	外面:口縁部櫛状工具による直線文→ナデ、肩部櫛状工具 による押引文 内面:口頸部指頭調整→ナデ、肩部横ヘラケズリ	
52	40	SI1 中層	弥生土器 甕	口頸部 破片	口径(15.0) 器高(5.5)	良	褐色	密 石英・砂粒	外面:口縁部櫛状工具による直線文→ナデ、頸部ハケメ 内面:口頸部指頭調整→ナデ、肩部横ヘラケズリ	外面一部煤付着
53	40	SI1 上層	弥生土器 甕	口縁→肩 部 破片	口径(16.3) 器高(4.8)	良	褐色	密 石英・砂粒	外面:口縁部櫛状工具による直線文→ナデ、肩部ハケメ 内面:口頸部指頭調整→ナデ、肩部横ヘラケズリ	
54	40	SI1 上層	弥生土器 甕	口頸部 1/4	口径(14.2) 器高(3.7)	良	橙褐色	密 石英・砂粒	内外面:調整不明	
55	40	SI1 中層	弥生土器 甕	口縁→体 部1/4	器高(10.4)	良	褐色	密 石英・砂粒	外面:口頸部横ナデ、肩部ハケメ→櫛状工具による列点文 内面:口縁部横ナデ、肩部指頭調整・横ヘラケズリ	
56	40	SI1 中層	弥生土器 甕	体部 破片	器高(7.0)	良	外面:橙褐色 内面:黒茶色	密 雲母・石英	外面:ハケメ・櫛状工具による直線文 内面:ヘラケズリ→指頭調整・ナデ	
57	40	SI1 上層	弥生土器 甕	底部 1/6	器高(3.8) 底径(5.2)	良	橙褐色	密 雲母・石英	外面:指頭調整→ハケメ、底面ナデ 内面:指頭調整・ヘラケズリ→ナデ	
58	40	SI1 上層	弥生土器 甕	底部 1/4	器高(4.6) 底径(5.9)	良	灰褐色	密 雲母・石英	外面:ハケメ、底面ナデ 内面:指頭調整・ヘラケズリ→ナデ	
59	40	SI1 中層	弥生土器 甕	底部 1/3	器高(4.7) 底径(6.2)	良	橙褐色	密 雲母・石英	外面:ハケメ→ナデ・指頭調整、底面ヘラケズリ→ナデ 内面:指頭調整・ヘラケズリ→ナデ	
60	40	SI1 上層	弥生土器 甕	底部 1/4	器高(1.5) 底径(6.1)	良	黒茶色～ 暗橙褐色	密 雲母・石英	外面:指頭調整→縦ハケメ、底面ヘラミガキ 内面:指頭調整→ヘラケズリ	
61	40	SI1 中層	弥生土器 甕	底部	器高(5.4) 底径(9.6)	良	淡橙褐色	密 雲母・石英	外面:指頭調整・ハケメ→ヘラミガキ 内面:ヘラケズリ・指頭調整→ナデ、脚部指頭調整・ヘラケズリ	
62	40	SI1 上層	弥生土器 蓋	1/4	口径(9.2) 器高(1.4)	良	褐色	密 石英・砂粒	外面:指頭調整・ヘラミガキ 内面:指頭調整・ヘラケズリ	外面一部煤付着 被熱
63	40	SI1 上層	弥生土器 高坏	坏部→体 部	口径(14.9) 器高(7.7)	良	灰褐色	密 石英・砂粒	外面:口縁部櫛状工具による直線文→ナデ、接合部ヘラミガキ 内面:受部指頭調整・ヘラミガキ、脚部ヘラケズリ	
64	40	SI1 上層	弥生土器 高坏	口縁部 1/8	口径(22.0) 器高(2.9)	良	橙褐色	密 雲母・石英	外面:横ヘラミガキ 内面:横ヘラミガキ	内面赤彩 内面煤付着
65	40	SI1 中層	弥生土器 高坏	坏部 破片	口径(20.9) 器高(3.2)	良	灰褐色	密 石英・砂粒	外面:横ヘラミガキ 内面:横ヘラミガキ	内外面赤彩
66	40	SI1 上層	弥生土器 高坏	坏部 破片	口径(20.4) 器高(5.6)	良	暗橙褐色	密 雲母・石英	外面:横ヘラミガキ 内面:横ヘラミガキ	外面一部煤付着
67	40	SI1 中層	弥生土器 高坏	脚部 1/2	器高(6.3) 底径(16.4)	良	橙褐色	密 石英・砂粒	外面:接合部ナデ、脚部櫛状工具による直線文・波状文 内面:指頭調整・ヘラケズリ→ナデ	
68	40	SI1 P1	弥生土器 高坏	脚部 破片	器高(2.8) 底径(13.3)	良	褐色	密 雲母・石英	外面:指頭調整→横ナデ 内面:ヘラケズリ	
69	40	SI1 上層	弥生土器 高坏	受部→脚 部	口径(22.0) 器高(14.1)	良	橙褐色	密 雲母・石英	外面:受部→接合部ヘラミガキ、脚部櫛状工具による直線 文→ナデ 内面:受部ヘラミガキ、接合部→脚部横ヘラケズリ	
70	40	SI1 下層	手捏ね 土器	底部 1/2	器高(1.3) 底径(3.8)	良	外面:黒茶色 内面:灰褐色	密 雲母・石英	外面:指頭調整→ナデ 内面:指頭調整→ナデ	
71	42	SI2 床面直上	弥生土器 甕	底部	器高(1.5) 底径(6.1)	良	灰褐色	密 石英・砂粒	外面:指頭調整→ナデ、底面ナデ 内面:調整不明	
72	42	SI2 上層	弥生土器 高坏	接合部 破片	器高(1.2)	良	暗橙褐色	密 石英・砂粒	外面:ナデ 内面:坏部ナデ、脚部指頭調整→ナデ	
73	46	SI3 下層	弥生土器 無頸壺	口縁→肩 部 破片	口径(7.3) 器高(3.0)	良	暗褐色	密 雲母・砂粒	外面:口縁部横ナデ、口縁→肩部横ヘラミガキ 内面:口縁部横ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	口縁部下端穿孔
74	46	SI3 上層	弥生土器 壺	底部	器高(1.7) 底径(4.9)	良	褐色	密 雲母・石英	外面:指頭調整→縦ハケメ、底面ナデ 内面:指頭調整・ヘラケズリ→ナデ	底部穿孔
75	46	SI3 中層	弥生土器 甕	3/4	口径:13.2 器高:17.7 胴径:16.8 底径(1.7)	良	灰褐色	密 石英・砂粒	外面:口縁部櫛状工具による直線文、頸部指頭調整→ナデ、 体部縦ハケメ 内面:口頸部指頭調整→ナデ、体部指頭調整→ヘラケズリ・ ナデ	外面煤付着・一部 層状煤付着
76	46	SI3 上層	弥生土器 甕	口縁→体 部上半	口径:15.3 器高(10.1) 胴径(22.3)	良	橙褐色	密 雲母・石英	外面:口縁部櫛状工具による直線文、頸部指頭調整→ナデ、 体部縦ハケメ 内面:口頸部指頭調整→ナデ、体部横ヘラケズリ	外面煤付着・一部 層状煤付着
77	46	SI3 床面直上	弥生土器 甕	口縁→体 部	口径:13.8 器高(16.4) 胴径(21.4)	良	橙褐色	密 雲母・石英	外面:口縁部櫛状工具による直線文、頸部指頭調整→ナデ、 体部縦・横ハケメ 内面:口頸部指頭調整→ナデ、体部指頭調整→ヘラケズリ	外面煤付着・一部 層状煤付着

78	46	SI3 中層	弥生土器 甕	口頸部 1/8	口径(22.3) 器高(3.5)	良	橙褐色	密 石英・砂粒	外面：口縁部飾状工具による直線文→ナデ、頸部横ヘラミ ガキ 内面：口頸部指頭調整→横ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	外面煤付着
79	46	SI3 中層	弥生土器 甕	口頸部 1/8	口径(15.2) 器高(3.7)	良	外面：褐色 内面：淡橙褐 色	密 雲母・石英	外面：口縁部飾状工具による直線文→ナデ、頸部横ヘラミ ガキ、肩部ハケメ 内面：口頸部横ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	外面煤付着・一部 層状煤付着
80	46	SI3 上層	弥生土器 甕	口頸部 1/4	口径(14.0) 器高(3.2)	良	橙褐色	密 雲母・石英	外面：口縁部飾状工具による直線文→ナデ、頸部横ヘラミ ガキ、肩部ハケメ 内面：口頸部横ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	
81	46	SI3	弥生土器 甕	口頸部 1/6	口径(11.8) 器高(3.8)	良	灰褐色	密 雲母・石英	外面：口縁部飾状工具による直線文→ナデ、頸部横ヘラミ ガキ、肩部ハケメ 内面：口頸部指頭調整→横ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	外面煤・層状煤付 着
82	46	SI3 床面直上	弥生土器 甕	口頸部 1/4	口径(13.0) 器高(4.1)	良	橙褐色	密 雲母・石英	外面：口縁部飾状工具による直線文→ナデ、頸部横ヘラミ ガキ 内面：口頸部横ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	外面口縁部煤付着
83	46	SI3 炉	弥生土器 甕	口縁部～ 体部	口径:16.3 器高(17.2) 胴径(20.2)	良	橙灰褐色	密 雲母・石英	外面：口縁部飾状工具による直線文、頸部ヘラミガキ→飾 状工具による押引文(一部)・波状文、体部ハケメ →ヘラミガキ 内面：口頸部ヘラミガキ、体部ヘラケズリ→ヘラミガキ	外面煤付着・一部 層状煤付着
84	46	SI3 床面直上	弥生土器 甕	口縁部～ 体部	口径:16.0 器高(12.4) 胴径(18.1)	良	灰褐色	密 雲母・石英	外面：口縁部飾状工具による直線文、頸部ヘラミガキ、肩 部飾状工具による波状文、体部ハケメ→ヘラミガキ 内面：口頸部ヘラミガキ、体部指頭調整→ヘラケズリ	内面口頸部～外面 肩部赤彩 外面煤付着・一部 層状煤付着
85	46	SI3 床面直上	弥生土器 甕	3/4	口径:20.9 器高:30.2 胴径(25.7) 底径: 4.5	良	橙褐色	密 雲母・石英	外面：口縁部飾状工具による直線文→ナデ(口縁部上半)、 頸部飾状工具による押引文、体部ハケメ→飾状工具 による直線文(肩部) 内面：口頸部指頭調整→ナデ、体部指頭調整(肩部・底部) →ヘラケズリ	内面コケ
86	46	SI3 床面直上	弥生土器 甕	口頸部 1/8	口径(16.7) 器高(4.3)	良	淡橙褐色	密 石英・砂粒	外面：口縁部飾状工具による直線文→ナデ、頸部ナデ、肩 部縦ハケメ 内面：口頸部指頭調整→ナデ、肩部ヘラケズリ	
87	46	SI3 上層	弥生土器 甕	口頸部 破片	口径(15.7) 器高(3.9)	良	橙褐色	密 雲母・石英	外面：口縁部飾状工具による直線文→ナデ、頸部横ヘラミ ガキ、肩部縦ハケメ 内面：口頸部横ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	外面口縁部煤付着
88	46	SI3	弥生土器 甕	口頸部 1/3	口径(15.6) 器高(5.7)	良	灰褐色	密 雲母・石英	外面：口縁部飾状工具による直線文、頸部横ヘラミガキ、 肩部ハケメ 内面：口頸部横ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	外面口縁部煤付着
89	46	SI3 中層	弥生土器 甕	口頸部 破片	口径(13.8) 器高(3.7)	良	橙褐色	密 石英・砂粒	外面：口縁部飾状工具による直線文、頸部横ヘラミガキ、 肩部貝殻腹縁による連続刺突文 内面：口頸部横ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	外面口縁部煤付着
90	46	SI3 P6	弥生土器 甕	口頸部 1/5	口径(17.1) 器高(6.4)	良	橙褐色	密 雲母・石英	外面：口縁部貝殻腹縁による直線文→波状文、肩部連続刺 突文→直線文 内面：口頸部指頭調整→ナデ、肩部ヘラケズリ	外面煤付着 内面コケ
91	46	SI3 中層	弥生土器 甕	口縁～体 部	口径:15.3 器高(10.1)	良	灰褐色	密 石英・砂粒	外面：口縁部・肩部飾状工具による直線文、頸部横ヘラミ ガキ、体部縦ハケメ 内面：口頸部横ヘラミガキ、体部ヘラケズリ	外面煤付着・一部 層状煤付着
92	46	SI3 中層	弥生土器 甕	口頸部 1/4	口径(14.6) 器高(4.5)	良	灰褐色	密 石英・砂粒	外面：口縁部飾状工具による直線文、頸部横ヘラミガキ、 肩部ハケメ 内面：口頸部横ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	
93	46	SI3 上層	弥生土器 甕	口頸部 1/4	口径(13.6) 器高(4.3)	良	橙褐色	密 雲母・石英	外面：口縁部飾状工具による直線文→ナデ、頸部横ヘラミ ガキ、肩部ハケメ 内面：口頸部横ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	外面口縁部層状煤 付着・頸部煤付着
94	46	SI3 中層	弥生土器 甕	口頸部 1/4	口径(14.2) 器高(4.4)	良	褐色	密 雲母・石英	外面：口縁部飾状工具による直線文→ナデ、頸部横ヘラミ ガキ 内面：口頸部横ヘラミガキ、頸部指頭調整、肩部ヘラケズ リ	内面口縁部白吹き こぼれ痕 外面層状煤付着
95	46	SI3	弥生土器 甕	口頸部 1/4	口径(15.5) 器高(4.8)	良	褐色	密 雲母・石英	外面：口縁部飾状工具による直線文、頸部横ヘラミガキ 内面：口頸部横ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	外面煤付着・一部 層状煤付着
96	46	SI3	弥生土器 甕	口頸部 1/8	口径(13.7) 器高(4.7)	良	橙褐色	密 雲母・石英	外面：口縁部飾状工具による直線文→ナデ、頸部ナデ 内面：口頸部指頭調整→ナデ、肩部ヘラケズリ	
97	46	SI3 中層	弥生土器 甕	口頸部 1/3	口径(14.8) 器高(4.5)	良	灰褐色	密 雲母・石英	外面：口縁部飾状工具による直線文→一部ナデ、頸部ヘラ ミガキ 内面：口頸部ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	
98	46	SI3 中層	弥生土器 甕	口頸部 破片	口径(14.3) 器高(4.6)	良	灰褐色	密 雲母・石英	外面：口縁部飾状工具による直線文→ナデ、頸部ヘラミガ キ 内面：口縁部ヘラミガキ、頸部指頭調整→ナデ、肩部ヘラ ケズリ	
99	46	SI3 中層	弥生土器 甕	口頸部 1/4	口径(14.8) 器高(4.1)	良	褐色	密 石英・砂粒	外面：口縁部飾状工具による直線文、頸部ヘラミガキ 内面：口縁部ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	外面・内面口縁部 赤彩
100	46	SI3 中層	弥生土器 甕	口頸部 1/4	口径(17.0) 器高(4.7)	良	褐色	密 雲母・石英	外面：口縁部飾状工具による直線文→ナデ、頸部横ヘラミ ガキ、肩部貝殻腹縁による連続刺突文 内面：口頸部横ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	外面煤付着
101	46	SI3 上層	弥生土器 甕	口頸部 破片	口径(15.6) 器高(4.1)	良	褐色	密 石英・砂粒	外面：口縁部飾状工具による直線文→ナデ、頸部横ヘラミ ガキ 内面：口頸部指頭調整→横ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	内外面赤彩
102	47	SI3 床面直上	弥生土器 甕	口縁～肩 部1/4	口径(16.2) 器高(5.7)	良	橙褐色	密 雲母・石英	外面：口縁部飾状工具による直線文→一部ナデ、肩部飾状 工具による押引き文・直線文 内面：口頸部指頭調整→ナデ、肩部ヘラケズリ	
103	47	SI3 中層	弥生土器 甕	口頸部 1/3	口径(19.9) 器高(4.1)	良	灰褐色	密 雲母・石英	外面：口縁部飾状工具による直線文、頸部飾状工具による 連続刺突文 内面：口頸部横ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	
104	47	SI3 床面直上	弥生土器 甕	口頸部 1/5	口径(18.7) 器高(4.7)	良	褐色	密 雲母・石英	外面：口縁部飾状工具による直線文→ナデ、頸部横ヘラミ ガキ、肩部ハケメ 内面：口頸部調整不明、肩部ヘラケズリ	外面口縁部層状煤 付着・頸部煤付着
105	47	SI3 中層	弥生土器 甕	口頸部 1/4	口径(14.0) 器高(3.7)	良	灰褐色	密 雲母・石英	外面：口縁部飾状工具による直線文→ナデ、頸部横ヘラミ ガキ、肩部ハケメ 内面：口縁部横ヘラミガキ、頸部ナデ、肩部ヘラケズリ	外面口縁部煤付着
106	47	SI3	弥生土器 甕	口頸部 1/8	口径(16.7) 器高(3.6)	良	灰褐色	密 雲母・石英	外面：口縁部飾状工具による直線文→ナデ、頸部横ヘラミ ガキ 内面：口頸部横ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	
107	47	SI3 上層	弥生土器 甕	口頸部 1/3	口径(15.0) 器高(3.9)	良	褐色	密	外面：口縁部飾状工具による直線文、頸部連続刺突文 内面：口頸部指頭調整→ナデ、肩部ヘラケズリ	外面煤付着
108	47	SI3 上層	弥生土器 甕	口頸部 1/5	口径(18.9) 器高(3.4)	良	灰褐色	密 石英・砂粒	外面：口縁部飾状工具による直線文→ナデ、頸部横ヘラミ ガキ 内面：口頸部横ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	外面煤付着
109	47	SI3	弥生土器 甕	口頸部 破片	口径(15.9) 器高(4.7)	良	褐色	密 雲母・石英	外面：口縁部飾状工具による直線文→一部ナデ 内面：口縁部横ハケメ、肩部ヘラケズリ	内面口縁部一部赤 彩

110	47	SI3 上段	弥生土器 甕	口頸部 1/4	口径(16.8) 器高(4.9)	良	灰褐色	密 石英・砂粒	外面：調整不明 内面：口頸部指頭調整→ナデ、肩部ヘラケズリ	外面一部煤付着
111	47	SI3 中層	弥生土器 甕	頸部～体 部3/4	口径(9.4) 器高(6.7) 胴径(12.6)	良	灰褐色	密 石英・砂粒	外面：口縁部指頭調整→ナデ、肩部貝殻腹縁による連続刺 突文、体部ハケメ 内面：口頸部指頭調整→ナデ、体部ヘラケズリ	内面口頸部・外面 赤彩 外面煤付着
112	47	SI3	弥生土器 甕	底部	器高(5.2) 底径(9.5)	良	淡橙褐色	密 雲母・石英	外面：縦ヘラミガキ、底部ヘラミガキ 内面：指頭調整・ヘラケズリ→ナデ	
113	47	SI3 下層	弥生土器 甕	体部～底 部	器高(11.6) 底径(3.1)	良	褐色	密 雲母・石英	外面：ハケメ、底部ナデ 内面：指頭調整・ヘラケズリ→ナデ	外面煤付着
114	47	SI3 床面直上	弥生土器 甕	底部	器高(4.4) 底径(4.7)	良	褐色	密 雲母・石英	外面：ハケメ、底部ナデ 内面：指頭調整・ヘラケズリ→ナデ	外面煤付着 内面コケ
115	47	SI3	弥生土器 甕	底部	器高(7.0) 底径(3.2)	良	褐色	密 雲母・石英	外面：ハケメ、底部ナデ 内面：指頭調整・ヘラケズリ→ナデ	外面煤付着 内面オキ火接触コ ケ
116	47	SI3 床面直上	弥生土器 高坏	坏部～ 脚柱部	口径:23.8 器高(10.8)	良	橙褐色	密 雲母・石英	外面：ヘラミガキ 内面：坏部ヘラミガキ、脚柱部ヘラケズリ	外面・坏部内面赤 彩
117	47	SI3 中層	弥生土器 高坏	脚部	器高(10.4) 底径(13.5)	良	淡灰褐色	密 石英・砂粒	外面：調整不明、裾部凹線2条 内面：ヘラケズリ	内外面赤彩
118	47	SI3 中層	弥生土器 器台	4/5	口径:18.6 器高:14.0 底径(14.6)	良好	褐色	密 石英・白色 粒	外面：ハケメ→ヘラミガキ 内面：受部指頭調整・ハケメ→ヘラミガキ、接合部指頭調 整、脚部ヘラケズリ	外面・内面受部～ 接合部赤彩
119	47	SI3 下層	弥生土器 器台	脚部 1/8	器高(6.0) 底径(17.2)	良	橙褐色	密 雲母・石英	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ	外面赤彩
120	47	SI3 上層	弥生土器 鉢	1/6	口径(15.7) 器高(3.8)	良	灰褐色	密 石英・砂粒	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	外面赤彩
121	47	SI3 中層	弥生土器 高坏	坏部 1/8	口径(19.4) 器高(4.7)	良	灰褐色	密 雲母・石英	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	
122	47	SI3 中層	弥生土器 高坏	口縁部 破片	口径(16.4) 器高(2.9)	良	灰褐色	密 雲母・石英	外面：ヘラミガキ 内面：指頭調整・ヘラケズリ→ナデ	外面赤彩
123	47	SI3 中層	弥生土器 高坏	坏部 1/4	口径(17.8) 器高(3.4)	良	灰褐色	密 雲母・石英	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	内外面赤彩
124	47	SI3 床面直上	弥生土器 高坏	脚部 1/4	器高(3.1) 底径(12.8)	良	灰褐色	密 雲母・石英	外面：ナデ 内面：ヘラケズリ→ナデ	内外面赤彩 外面煤付着
125	47	SI3 下層	弥生土器 低脚坏	脚部	器高(3.3) 底径(4.9)	良	橙褐色	密 雲母・石英	外面：指頭調整→ヘラミガキ 内面：坏部ヘラミガキ、脚部ヘラケズリ→ナデ	
126	51	SI4 下層	弥生土器 甕	口縁～体 部1/3	口径(16.2) 器高(7.1)	良好	淡橙褐色	密 角閃石・雲 母・石英	外面：口縁部櫛状工具による直線文、肩部櫛状工具による 連続刺突文、体部ハケメ 内面：口頸部ヘラミガキ、体部ヘラケズリ→ナデ	外面層状煤付着
127	55	SI5 上層	弥生土器 甕	口頸部 1/8	口径(20.8) 器高(4.4)	良好	外面:褐色 内面:灰褐色	密 雲母・白色 粒	外面：指頭調整→ナデ 内面：指頭調整→ナデ	外面口縁部白吹き こぼれ痕
128	59	SI7	弥生土器 裝飾壺	頸部 破片	器高(2.1)	良好	灰褐色	密	外面：沈線区画内の貝殻腹縁による連続刺突文 内面：ナデ	
129	59	SI7 中層	弥生土器 裝飾壺	頸部～体 部1/8	器高(4.5) 胴径(16.8)	良好	褐色	密 石英・白色 粒	外面：胴部最大径部二条突帯→爪形文2条 内面：指頭調整→ヘラケズリ	外面赤彩
130	59	SI7 上層	弥生土器 甕	口頸部 破片	口径(16.4) 器高(3.5)	良好	灰褐色	密 砂粒	外面：口縁部櫛状工具による直線文、頸部突帯貼付・刻み 内面：横ナデ	
131	59	SI7 上層	弥生土器 甕	口頸部 1/8	口径(14.0) 器高(4.8)	良好	褐色	密 雲母・石英	外面：口縁部櫛状工具による直線文、頸部ハケメ 内面：口頸部ナデ、肩部ヘラケズリ	外面層状煤付着
132	59	SI7 下層	弥生土器 甕	口頸部 1/8	口径(13.2) 器高(4.1)	良好	灰褐色	密 雲母・石英	外面：口縁部櫛状工具による直線文、頸部ナデ 内面：口頸部指頭調整→ナデ、肩部ヘラケズリ	外面一部煤付着
133	59	SI7 上層	弥生土器 甕	口頸部 破片	口径(15.8) 器高(3.9)	良好	褐色	密 石英・白色 粒	外面：口縁部櫛状工具による直線文、頸部指頭調整→ナデ 内面：指頭調整→ナデ	外面煤付着・一部 層状煤付着
134	59	SI7 中層	弥生土器 甕	口頸部 1/8	口径(15.1) 器高(4.2)	良好	褐色	密 石英・白色 粒	外面：口縁部櫛状工具による直線文、頸部ナデ 内面：口頸部指頭調整→ナデ、肩部ヘラケズリ	外面煤付着・一部 層状煤付着
135	59	SI7 下層	弥生土器 甕	口頸部 破片	口径(14.2) 器高(3.2)	良好	褐色	密 雲母・石英	外面：口縁部櫛状工具による直線文、頸部ナデ 内面：指頭調整→ナデ	外面一部煤付着
136	59	SI7 上層	弥生土器 甕	口頸部 1/8	器高(4.1)	良好	外面:褐色 内面:灰褐色	密	外面：口縁部櫛状工具による直線文、頸部ナデ 内面：指頭調整→ナデ	外面頸部煤付着
137	59	SI7	弥生土器 甕	底部 1/5	器高(3.5) 底径(3.2)	良好	黒茶色	密 雲母・砂粒	外面：ハケメ、底面ヘラケズリ→ナデ 内面：指頭調整・ヘラケズリ	外面煤付着
138	59	SI7 中層	弥生土器 高坏	口縁部 1/8	口径(18.6) 器高(3.0)	良好	赤褐色	密	外面：口縁部凹線3条 内面：調整不明	
139	59	SI7 下層	弥生土器 高坏	口縁部 1/6	口径(17.4) 器高(3.6)	良好	褐色	密 石英・砂粒	外面：調整不明 内面：横ナデ	内外面赤彩
140	59	SI7 中層	弥生土器 高坏	坏部 1/6	器高(4.3)	良好	外面:灰褐色 内面:褐色	密 雲母・白色 粒	外面：ナデ 内面：指頭調整→ナデ	
141	62	SI8 中層	弥生土器 直口壺	頸部 破片	器高(2.5)	良好	褐色	密 雲母・石英	外面：指頭調整→ハケメ・ナデ 内面：頸部指頭調整→ナデ、肩部ヘラケズリ	
142	62	SI8 下層	弥生土器 小型壺	体部 破片	器高(3.4)	良好	橙褐色	密 石英・白色 粒	外面：ナデ・ハケメ 内面：指頭調整→ヘラケズリ	外面煤付着・一部 層状煤付着
143	62	SI8 下層	弥生土器 甕	口頸部 1/10	口径(15.6) 器高(3.2)	良好	灰褐色	密 雲母・白色 粒	外面：横ナデ 内面：口頸部指頭調整→ナデ、肩部ヘラケズリ	外面煤付着
144	62	SI8 中層	弥生土器 甕	口頸部 1/8	口径(18.5) 器高(4.2)	良好	赤褐色	密 石英・白色 粒	外面：口頸部横ナデ、肩部ハケメ 内面：口頸部指頭調整→横ナデ、肩部ヘラケズリ	
145	62	SI8 下層	弥生土器 甕	口頸部 1/8	口径(10.8) 器高(4.2)	良好	橙褐色	密	外面：指頭調整・横ナデ 内面：指頭調整・横ナデ	外面煤付着・一部 層状煤付着
146	62	SI8 中層	弥生土器 甕	口頸部 1/8	口径(16.8) 器高(3.7)	良好	灰褐色	密 石英・白色 粒	外面：口頸部櫛状工具による直線文→一部ナデ、頸部横ナ デ 内面：指頭調整→横ナデ	外面層状煤付着
147	62	SI8 中層	弥生土器 甕	口頸部 破片	口径(14.0) 内面(2.7)	良好	褐色	密 石英・白色 粒	外面：横ナデ 内面：指頭調整→横ナデ	
148	62	SI8 上層	弥生土器 甕	口頸部 破片	口径(14.5) 器高(3.9)	良好	褐色	密 石英・白色 粒	外面：横ナデ 内面：指頭調整→横ナデ	
149	62	SI8 下層	弥生土器 甕	口頸部 1/10	口径(16.8) 器高(4.2)	良好	褐色	密 石英・白色 粒	外面：横ナデ 内面：指頭調整→横ナデ	外面煤付着・一部 層状煤付着

150	62	SI8 中層	弥生土器 甕	口頸部 破片	口径(14.8) 器高(3.5)	良好	外面:灰褐色 内面:褐色	密 雲母・石英	外面:口頸部飾状工具による直線文→一部ナデ、頸部ナデ 内面:口頸部ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	内外面赤彩 外面一部煤付着
151	62	SI8 下層	弥生土器 甕	口頸部 1/8	口径(13.9) 器高(4.4)	良好	褐色	密 雲母・石英	外面:指頭調整→横ナデ 内面:口頸部指頭調整→横ナデ、肩部ヘラケズリ	外面煤付着・一部 層状煤付着
152	62	SI8 P6	弥生土器 甕	口縁部 1/8	口径(16.8) 器高(3.6)	良好	橙褐色	密	外面:横ナデ 内面:指頭調整→横ナデ	外面層状煤付着
153	62	SI8 中層	弥生土器 甕	底部 1/4	器高(1.7) 底径(5.0)	良好	外面:黒茶色 内面:灰褐色	密 雲母・石英	外面:ヘラミガキ 内面:ヘラケズリ→ナデ	
154	62	SI8 中層	弥生土器 高坏	坏部 1/10	口径(16.6) 器高(3.5)	良好	黒茶色	密 雲母・石英	外面:横ナデ 内面:ヘラミガキ	
155	62	SI8 中層	弥生土器 器台	受部~接 合部1/6	口径(21.6) 器高(7.6)	良好	褐色	密 石英・白色 粒	外面:指頭調整→横ナデ 内面:指頭調整→横ナデ	
156	63	SD6 上層	弥生土器 鉢	3/5	口径:11.1 器高: 4.6 底径: 2.9	良好	灰褐色	密 雲母・石英	外面:ヘラミガキ 内面:ヘラケズリ・底部指頭調整	
157	68	SS5 床面直上	弥生土器 小型壺	口縁~肩 部 1/6	口径(9.6) 器高(3.5)	良	橙色	密 雲母・石英	外面:横ナデ 内面:口縁部横ナデ、肩部ヘラケズリ	外面赤彩?
158	68	SS5 床面直上	弥生土器 甕	体部 1/4	器高(4.6) 胴径(13.0)	良	黄褐色	密 石英	外面:調整不明 内面:指頭調整・ナデ	外面煤付着
159	68	SS5 上面	弥生土器 甕	口縁~体 部 1/4	口径(17.6) 器高(11.9) 胴径(24.4)	良好	赤茶褐色	密 石英・白色 粒	外面:口頸部横ナデ、肩部指頭調整、体部縦ハケメ 内面:口縁部横ナデ、頸部指頭調整、体部ヘラケズリ	外面層状煤付着
160	68	SS5 下層	弥生土器 甕	口縁~肩 部 2/3	口径(14.0) 器高(4.8)	良	黄灰白色	密 雲母・石英	外面:口縁部飾状工具による直線文→上端部ナデ、頸部ハ ケメ 内面:口頸部横ナデ、肩部ヘラケズリ	肩部工具痕
161	68	SS5 上層	弥生土器 甕	口縁~体 部 1/4	口径(16.3) 器高(9.8)	良	橙色	密 雲母	外面:口縁部凹線2条→ナデ、体部ハケメ→ヘラミガキ 内面:口頸部ハケメ→ナデ、頸部以下ヘラケズリ	外面層状煤付着
162	68	SS5 中層	弥生土器 甕	口頸部 1/4	口径(16.5) 器高(3.5)	良好	赤茶褐色	密 石英	外面:口縁部凹線2条→ナデ、頸部ナデ 内面:口頸部横ナデ、肩部ヘラケズリ	外面炭化物・層状 煤付着
163	68	SS5 上層	弥生土器 甕	口頸部 1/3	口径(13.0) 器高(3.7)	良	橙色	密 雲母・石英	外面:口縁部横ナデ、肩部工具によるナデ 内面:口頸部工具によるナデ、肩部横ヘラケズリ	外面煤付着
164	68	SS5 壁溝中	弥生土器 甕	口頸部 1/5	口径(19.5) 器高(5.9)	良	褐色	密 石英・白色 粒	外面:口縁部飾状工具による直線文→上端部ナデ、頸部ハ ケメ 内面:口頸部横ナデ、肩部横ヘラケズリ→ナデ	外面層状煤付着
165	68	SS5 上層	弥生土器 甕	口頸部 1/3	口径(18.2) 器高(4.1)	良	黄褐色	密 雲母・石英	外面:ナデ 内面:口縁部ナデ、肩部ヘラケズリ	層状煤付着
166	68	SS5 上層	弥生土器 甕	口頸部 1/6	口径(13.8) 器高(5.6)	良	橙色	密 雲母・石英	外面:口縁部貝殻腹縁による波状文→直線文、肩部押引文 内面:口縁部横ナデ、頸部ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	
167	68	SS5	弥生土器 甕	口頸部 1/6	口径(12.3) 器高(4.2)	良	橙色	密 雲母・白色 粒	外面:口縁部飾状工具による直線文→一部ナデ、頸部連続 刺突文 内面:横ナデ	
168	68	SS5 床面直上	弥生土器 甕	底部 1/4	器高(3.6) 底径(6.3)	良	外面:黒色 内面:橙色	密	外面:縦→横ヘラミガキ、底面ヘラミガキ 内面:指頭調整・ヘラケズリ→ナデ	
169	68	SS5	弥生土器 高坏?	口縁~体 部 1/8	口径(19.2) 器高(4.5)	良	黄灰白色	密 雲母	外面:横ナデ 内面:口縁部横ナデ、体部指頭調整→縦ヘラミガキ	外面煤付着
170	68	SS5 中層	弥生土器 高坏	脚部 2/3	器高(8.0) 底径(12.0)	良	橙色	密 石英	外面:脚柱部指頭調整・ナデ、裾部横ナデ 内面:横ヘラケズリ	
171	68	SS5	弥生土器 高坏	脚部 1/4	器高(9.1) 底径(15.4)	良	淡黄褐色	密 石英	外面:指頭調整・ハケメ→ヘラミガキ、裾部横ナデ 内面:指頭調整・ヘラケズリ	
172	69	SS6 中層	弥生土器 壺	口縁~肩 部 1/10	口径(16.4) 器高(7.6)	良好	茶褐色	密 砂粒	外面:口縁部ハケメ→ナデ、頸部ナデ、肩部指頭調整→ハ ケメ 内面:口頸部ハケメ→指頭調整・ナデ、肩部ヘラケズリ	
173	69	SS6 中層	弥生土器 壺	口頸部 1/6	口径(16.3) 器高(6.1)	良好	橙褐色	密 石英・白色 粒	外面:口頸部横ナデ 内面:口頸部指頭調整・横ナデ、肩部ヘラケズリ	肩部工具痕
174	69	SS6	弥生土器 小型甕	体部 1/6	器高(4.4) 胴径(8.4)	良好	外面:橙褐色 内面:灰色	密 石英	外面:指頭調整→ナデ 内面:指頭調整→ヘラケズリ	
175	69	SS6	弥生土器 甕	口縁~体 部 1/5	口径(19.2) 器高(11.1) 胴径(25.2)	良好	灰茶色	密 石英・白色 粒	外面:口縁部飾状工具による直線文、頸部以下指頭調整→ 縦・横・斜めハケメ 内面:口頸部指頭調整→ナデ、肩部以下指頭調整→ヘラケ ズリ	外面体部一部煤付 着
176	69	SS6 中層	弥生土器 甕	ほぼ完形	口径:12.2 器高:17.8 胴径:16.0	良	橙褐色	密 雲母・石英	外面:口縁部横ナデ、頸部指頭調整→ナデ、体部縦ハケメ 内面:口頸部横ナデ、体部指頭調整・ヘラケズリ→ナデ	内外面赤彩? 外面煤付着・一部 層状煤付着
177	69	SS6 上層	弥生土器 甕	1/7	口径(19.9) 器高(24.8) 胴径(25.8) 底径(3.3)	良好	茶褐色	密 石英・白色 粒	外面:口頸部横ナデ、体部指頭調整→横・縦ハケメ、底部 ナデ 内面:口頸部指頭調整→横ナデ、体部指頭調整→ヘラケズ リ	外面一部煤付着・ 口縁部層状煤付着 内面底部コケ
178	69	SS6 床面直上	弥生土器 甕	口縁~体 部 1/6	口径(14.7) 器高(11.0) 胴径(20.1)	良好	赤茶色	密 石英・白色 粒	外面:口縁部貝殻腹縁による直線文→ナデ、肩部貝殻腹縁 による押引文、体部ナデ 内面:口頸部横ナデ、体部横ヘラケズリ	
179	69	SS6 中層	弥生土器 甕	口縁~肩 部 1/6	口径(17.7) 器高(8.5)	良好	淡褐色	密 石英・白色 粒	外面:口縁部ナデ、肩部飾状工具による直線文 内面:口縁部横ナデ、頸部指頭調整→ナデ、肩部横ヘラケ ズリ	
180	69	SS6 上層	弥生土器 甕	口頸部 1/4	口径(13.1) 器高(3.3)	良好	褐色	密 石英・白色 粒	外面:口縁部貝殻腹縁による直線文→ナデ、肩部ナデ 内面:口縁部ナデ、肩部横ヘラケズリ	外面煤付着
181	69	SS6 上層	弥生土器 甕	口頸部 1/6	口径(12.8) 器高(2.8)	良好	灰茶褐色	密 石英・白色 粒	外面:口縁部貝殻腹縁による直線文→ナデ、肩部指頭調整 →ナデ 内面:口縁部ナデ、肩部横ヘラケズリ	外面煤付着
182	69	SS6 下層	弥生土器 甕	口縁~肩 部 1/3	口径(11.7) 器高(4.6)	良好	茶褐色	密 石英・砂粒	外面:口縁部飾状工具による直線文→ナデ、肩部ナデ 内面:口縁部横ナデ、肩部横ヘラケズリ	外面口縁部煤付着
183	69	SS6 中層	弥生土器 甕	口頸部 1/3	口径(12.0) 器高(4.2)	良好	茶褐色	密 砂粒	外面:横ナデ 内面:口縁部横ナデ、頸部指頭調整→ナデ、肩部ヘラケズ リ	外面層状煤付着
184	69	SS6 下層	弥生土器 甕	口頸部 1/3	口径(15.9) 器高(3.2)	良好	橙褐色	密 石英・白色 粒	外面:横ナデ 内面:口頸部横ナデ、肩部横ヘラケズリ	
185	69	SS6 上層	弥生土器 甕	口縁~肩 部 1/8	口径(16.4) 器高(5.3)	良好	灰茶色	密 砂粒	外面:口縁部横ナデ、肩部指頭調整・ナデ 内面:口頸部横ナデ、肩部横ヘラケズリ	外面口縁部煤付着
186	69	SS6 下層	弥生土器 甕	口頸部 1/6	口径(15.3) 器高(4.0)	良好	橙色	密 石英・白色 粒	外面:横ナデ 内面:口頸部横ナデ、肩部横ヘラケズリ	
187	69	SS6	弥生土器 甕	口縁~肩 部 1/6	口径(14.9) 器高(5.3)	良好	橙色	密 砂粒	外面:横ナデ 内面:口頸部横ナデ、肩部横ヘラケズリ	外面口頸部煤付着

188	69	SS6 中層	弥生土器 甕	口縁～肩 部1/4	口径(17.6) 器高(7.9)	良	赤橙色	密 白色粒・砂 粒	外面：口頸部横ナデ、肩部縦ハケメ 内面：口縁部横ナデ、頸部指頭調整、肩部ヘラケズリ	外面被熱 内面肩部コゲ
189	69	SS6 床面直上	弥生土器 甕	口頸部 1/4	口径(16.2) 器高(4.4)	良好	橙色	密 石英・白色 粒	外面：横ナデ 内面：口頸部横ナデ、肩部横ヘラケズリ	外面少量煤付着
190	69	SS6 中層	弥生土器 甕	口頸部 破片	口径(14.5) 器高(4.0)	良好	橙色	密 石英・白色 粒	外面：横ナデ 内面：口縁部横ナデ、頸部横ヘラミガキ、肩部横ヘラケズリ	外面煤付着
191	69	SS6	弥生土器 甕	口頸部 1/10	口径(16.1) 器高(4.2)	良好	橙色	密 砂粒	外面：横ナデ 内面：口縁部横ナデ、頸部指頭調整・ナデ、肩部横ヘラケズリ	
192	69	SS6 下層	弥生土器 甕	口頸部 5/6	口径(16.1) 器高(4.5)	良好	灰褐色	密 石英・砂粒	外面：口縁部貝殻腹縁による直線文、頸部横ナデ 内面：口頸部横ナデ、肩部ヘラケズリ	外面層状煤付着
193	69	SS6 上層	弥生土器 甕	口頸部 1/8	口径(12.7) 器高(4.6)	良好	灰褐色	密 石英・白色 粒	外面：口縁部貝殻腹縁による直線文→ナデ、頸部横ナデ 内面：口縁部指頭調整・横ナデ、頸部横ヘラミガキ→ナデ	外面口縁部工具痕
194	69	SS6 中層	弥生土器 甕	口頸部 破片	口径(16.5) 器高(5.1)	良好	橙茶色	密 石英・白色 粒	外面：口縁部貝殻腹縁による直線文→ナデ、頸部横ナデ 内面：口頸部横ナデ、肩部横ヘラケズリ	
195	69	SS6 中層	弥生土器 甕	口縁～肩 部1/3	口径(16.8) 器高(7.0)	良好	橙茶色	密 石英・白色 粒	外面：口縁部横ナデ、肩部縦ハケメ 内面：口頸部指頭調整・横ナデ、肩部横ヘラケズリ	外面層状煤付着
196	69	SS6 中層	弥生土器 甕	口縁～肩 部6/7	口径(17.4) 器高(6.7)	良好	橙褐色	密 雲母・石英	外面：口縁部横ナデ、頸部棒状工具端部による連続刺突文 内面：口頸部指頭調整・横ナデ、肩部横ヘラケズリ	外面一部煤付着
197	69	SS6 上層	弥生土器 甕	底部 1/5	器高(8.9) 底径(5.0)	良好	橙色	密 石英・白色 粒	外面：指頭調整・縦ハケメ 内面：ヘラケズリ、底面指頭調整・ヘラケズリ	
198	69	SS6 下層	弥生土器 甕	底部 1/3	器高(2.6) 底径(6.2)	良好	褐色	密 石英・砂粒	外面：ヘラケズリ→ナデ 内面：指頭調整・ヘラケズリ→ナデ	外面一部煤付着
199	69	SS6 下層	弥生土器 甕	底部 1/2	器高(8.3) 底径(4.2)	良好	橙灰色	密 石英・白色 粒	外面：指頭調整・縦ヘラミガキ、底面ナデ 内面：指頭調整・ヘラケズリ	外面一部煤付着
200	69	SS6 上層	弥生土器 甕	口縁～体 部1/5	口径(11.2) 器高(6.6) 胴径(12.5)	良好	灰褐色	密 石英・白色 粒	外面：口頸部横ナデ、肩部指頭調整、体部縦ハケメ 内面：口縁部横ナデ、頸部横ヘラミガキ、体部横ヘラケズリ	外面一部煤付着
201	70	SS6 下層	弥生土器 鉢	1/2	口径(15.0) 器高(6.5)	良好	茶褐色	密	外面：横ハケメ→指頭調整・ナデ 内面：ヘラケズリ・指頭調整→ナデ	
202	70	SS6 床面直上	弥生土器 高坏	坏部 1/6	口径(14.4) 器高(4.3)	良	淡褐色	密	外面：調整不明 内面：横ナデ	
203	70	SS6 中層	弥生土器 高坏	坏部 1/6	口径(21.5) 器高(5.3)	良	赤茶褐色	密 石英・白色 粒	外面：指頭調整→横ヘラミガキ 内面：指頭調整・横ナデ	内外面赤彩
204	70	SS6 下層	弥生土器 器台	脚部 1/2	器高(6.5) 底径(13.0)	良好	灰褐色	密 砂粒	外面：接合部ナデ、脚部ヘラミガキ 内面：接合部ナデ、脚部ヘラケズリ→ナデ	
205	70	SS6 上層	弥生土器 器台	脚部 破片	器高(3.5) 底径(18.7)	良好	橙色	密 石英・砂粒	外面：脚部横ヘラミガキ→指頭調整、脚部凹線1条 内面：指頭調整・ヘラケズリ	
206	70	SS6 床面直上	弥生土器 器台	脚部 1/6	器高(3.0) 底径(15.2)	良好	赤茶色	密 白色粒	外面：脚部指頭調整・横ナデ、脚部凹線1条 内面：横ヘラケズリ	
207	70	SS6 中層	弥生土器 器台	脚部 1/5	器高(3.6) 底径(17.5)	良好	橙褐色	密 石英・白色 粒	外面：脚部横ナデ→ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ	
208	70	SS6	手握ね 土器	破片	器高(2.5)	良好	灰茶色	密 砂粒	内外面：指頭調整・ナデ	
209	71	SS7 床面直上	弥生土器 壺	口縁～体 部1/6	口径(12.5) 器高(15.1) 胴径(16.5)	良好	灰茶褐色	密 石英・白色 粒	外面：口頸部横ナデ、肩部櫛状工具による波状文?、体部 縦ハケメ 内面：口頸部横ナデ、体部指頭調整→ヘラケズリ	外面体部下煤付着
210	71	SS7 中層	弥生土器 甕	口頸部 破片	口径(16.4) 器高(2.3)	良好	灰褐色	密 白色粒・砂 粒	外面：横ナデ 内面：口縁部横ナデ、肩部横ヘラケズリ	外面一部煤付着
211	71	SS7 中層	弥生土器 甕	口頸部 1/8	口径(16.8) 器高(4.8)	良好	褐色	密	外面：調整不明 内面：口縁部横ナデ、肩部ヘラケズリ	
212	71	SS7	弥生土器 甕	口頸部 1/10	口径(14.7) 器高(4.5)	良好	赤橙色	密 石英・白色 粒	外面：横ナデ 内面：口頸部指頭調整→横ナデ、肩部横ヘラケズリ	外面一部煤付着
213	71	SS7 中層	弥生土器 甕	口頸部 1/6	口径(18.0) 器高(4.9)	良好	橙色	密 石英・白色 粒	外面：横ナデ 内面：口頸部横ナデ、肩部横ヘラケズリ	
214	71	SS7 中層	弥生土器 甕	底部 1/5	器高(1.7) 底径(7.0)	良好	灰茶色	密 白色粒・砂 粒	外面：縦ヘラミガキ、底面ナデ 内面：指頭調整→ヘラケズリ	内面底部工具痕
215	71	SS7 P47	弥生土器 高坏	坏部 破片	口径(21.7) 器高(4.8)	良好	橙色	密 白色粒・砂 粒	外面：口縁部横ヘラミガキ、頸部横ナデ 内面：口縁部横ヘラミガキ、頸部横ナデ	内外面赤彩 内外面一部煤付着
216	71	SS7 中層	弥生土器 器台	脚部 1/2	器高(3.4) 底径(13.3)	良好	橙茶色	密 石英・白色 粒	外面：櫛状工具による直線文→ナデ 内面：横ヘラケズリ	外面赤彩
217	75	SS13 中層	弥生土器 壺	ほぼ完形	口径:12.0 器高:21.0 胴径(17.7) 底径: 4.4	良	橙色	密 雲母・白色 粒	外面：口縁部指頭調整・ハケメ→ナデ、体部指頭調整→縦・ 横ハケメ、体部下指頭調整・ハケメ→横ヘラミガ キ、底面木葉痕 内面：口縁部横ナデ、頸部横ヘラミガキ、体部指頭調整→ 縦・横ハケメ	外面一部層状煤付着
218	75	SS13 床面直上	弥生土器 甕	口頸部 1/3	口径(15.9) 器高(3.8)	良	橙色	密 雲母・石英	外面：横ナデ 内面：口縁部横ナデ、頸部指頭調整、肩部横ヘラケズリ	外面一部層状煤付着
219	75	SS13 床面直上	弥生土器 甕	口頸部 1/6	口径(14.7) 器高(4.0)	良	黄褐色	密	外面：口縁部貝殻腹縁による直線文、頸部横ナデ 内面：口頸部指頭調整・横ナデ、肩部ヘラケズリ	外面層状煤付着
220	75	SS13 中層	弥生土器 甕	口頸部 1/7	口径(14.5) 器高(4.6)	良	橙色	密	外面：口縁部横ナデ、頸部指頭調整→横ナデ 内面：口縁部横ナデ、頸部横ハケメ	
221	75	SS13 中層	弥生土器 甕	口頸部 1/6	口径(13.3) 器高(4.6)	良	黄褐色	密 石英・白色 粒	外面：横ナデ 内面：口頸部横ナデ、肩部横ヘラケズリ	
222	76	SS14 下層	弥生土器 甕	口縁～肩 部 1/7	口径(15.8) 器高(4.8)	良	橙色	密 白色粒	外面：口縁部横ナデ、肩部縦ハケメ 内面：口頸部横ナデ、肩部横ヘラケズリ	
223	76	SS14 下層	弥生土器 甕	口縁～肩 部 1/10	口径(13.6) 器高(4.0)	良	橙色	密 石英・白色 粒	外面：口縁部櫛状工具による直線文→ナデ、肩部縦ハケメ 内面：口頸部横ナデ、肩部横ヘラケズリ	外面口縁部下端煤付着

224	76	SS14 床面直上	弥生土器 甕	口縁~肩 部 1/5	口径(18.6) 器高(6.8)	やや良	黄橙色	密 石英	外面：外面口縁部櫛状工具による直線文？ 内面：調整不明	
225	76	SS14 中層	弥生土器 甕	口頸部 1/6	口径(31.0) 器高(5.7)	良	橙色	密 石英・白色 粒	外面：口縁部櫛状工具による直線文→ナデ、頸部指頭調整・ ナデ 内面：口頸部横ヘラミガキ、肩部横ヘラケズリ	
226	76	SS14 中層	弥生土器 甕	口頸部 1/6	口径(15.7) 器高(4.3)	良	褐色	密 石英・砂粒	外面：横ナデ 内面：口頸部横ナデ、肩部ヘラケズリ	外面口縁部下端煤 付着
227	76	SS14 中層	弥生土器 甕	口頸部 1/5	口径(13.2) 器高(2.9)	良	橙色	密 石英・砂粒	外面：横ナデ 内面：横ナデ？	外面層状煤付着
228	76	SS14 中層	弥生土器 甕	口縁~体 部 1/10	口径(10.0) 器高(6.3)	良	黄橙色	密 雲母・白色 粒	外面：口頸部横ナデ、体部ナデ 内面：口頸部横ナデ、肩部横ヘラケズリ	外面体部一部煤付 着
229	76	SS14 下層	弥生土器 甕	口縁~肩 部 1/4	口径(11.0) 器高(4.5)	良	橙色	密	外面：口頸部横ナデ、体部ナデ 内面：口頸部横ナデ、肩部横ヘラケズリ	
230	76	SS14 中層	弥生土器 甕	口頸部 破片	口径(12.4) 器高(3.1)	良	橙褐色	密 砂粒	外面：口頸部横ナデ、肩部ナデ？ 内面：口頸部横ナデ、肩部ヘラケズリ？	
231	76	SS14 中層	弥生土器 甕	底部 1/5	器高(4.9) 底径(7.6)	良	黄橙色	密 雲母・石英	外面：指頭調整・ハケメ、底部横ナデ、底面ナデ 内面：ハケメ→ナデ	
232	76	SS14 中層	弥生土器 高坏？	坏部 1/3	口径(18.0) 器高(5.3)	良	橙色	密 雲母・石英	外面：口縁部貝殻腹縁による直線文→上半ナデ、頸部ヘラ ミガキ 内面：ヘラケズリ→ナデ・ヘラミガキ	
233	76	SS14 床面直上	弥生土器 高坏	脚部 破片	器高(3.5) 底径(14.0)	良	黄橙色	密 雲母・白色 粒	外面：ハケメ→ナデ 内面：指頭調整・ヘラケズリ→ナデ	
234	76	SS14 中層	弥生土器 器台	受部	口径:22.4 器高(4.2)	やや良	橙色	密 石英・砂粒	外面：横ナデ 内面：口縁部横ナデ	
235	76	SS14 中層	弥生土器 器台	脚部 1/9	器高(4.5) 底径(24.8)	やや良	橙色	密 石英	内外面：調整不明	
236	76	SS14 床面直上	弥生土器 蓋	体部 1/2	口径(11.2) 器高(4.0)	良	橙色	密 白色粒	外面：ハケメ→ナデ 内面：ヘラケズリ・指頭調整	
237	76	SS14 中層	弥生土器 蓋	つまみ部	直径(3.9) 器高(2.1)	良	黄褐色	密	外面：つまみ部上部ハケメ、つまみ部指頭調整 内面：ヘラケズリ・指頭調整	
238	77	SS15 上層	弥生土器 壺	口頸部 1/8	口径(13.8) 器高(4.8)	良	橙色	密 雲母・白色 粒	外面：横ナデ 内面：口縁部横ナデ、頸部指頭調整・ナデ、肩部横ヘラケ ズリ	外面口縁部下端煤 付着
239	77	SS15 上層	弥生土器 破片	口縁部 破片	口径(18.0) 器高(3.5)	良	黄褐色	密 石英	外面：口縁部櫛状工具による直線文→ナデ 内面：調整不明	外面口縁部下端煤 付着
240	77	SS15 上層	弥生土器 甕	口頸部 1/10	口径(15.2) 器高(2.8)	良	黄褐色	密 白色粒	外面：口縁部貝殻腹縁による直線文→ナデ、頸部横ナデ 内面：口頸部指頭調整→横ナデ、肩部横ヘラケズリ	外面煤付着
241	77	SS15 上層	弥生土器 鉢	口縁~体 部1/10	口径(18.5) 器高(5.4)	良	黄褐色	密 石英	外面：ナデ？ 内面：ヘラケズリ→ナデ	
242	78	SS17 下層	弥生土器 甕	口頸部 1/2	口径(14.8) 器高(4.2)	良	橙色	密 石英・白色 粒	外面：口縁部櫛状工具による直線文・頸部横ナデ 内面：口頸部指頭調整・横ナデ、肩部横ヘラケズリ	外面煤付着・オキ 火接触痕？
243	82	SK5	土師器 瓶形土器	狭口部 ~体部	狭口径:10.0 器高(22.3)	良	灰褐色~ 淡黒灰色	密 雲母・砂粒	外面：狭口部~突帯部指頭調整→ナデ、把手部ヘラケズリ →ナデ、体部縦ハケメ 内面：狭口部指頭調整→ナデ、体部指頭調整・ヘラケズリ	外面一部・内面全 体煤付着
244	82	SK5	土師器 瓶形土器	ほぼ完形	器高:68.7 広口径(43.0)	良	灰褐色~ 橙灰褐色	密 雲母・砂粒	外面：突帯部指頭調整・ナデ、体部縦ハケメ、把手部ヘラ ケズリ→ナデ、広口部指頭調整・ハケメ→ナデ 内面：狭口部・広口部指頭調整→ナデ、体部横ヘラケズリ	外面体部一部煤付 着
245	85	SS10	弥生土器 高坏	坏部 破片	口径(11.9) 器高(3.1)	良好	淡褐色	密 石英・砂粒	外面：横ナデ 内面：指頭調整・横ナデ	内外面赤彩
246	85	SS10 中層	弥生土器 甕	底部 1/4	器高(2.9) 底径(6.5)	良好	灰褐色	密 雲母・石英	外面：縦ヘラミガキ、底面ナデ 内面：指頭調整・ヘラケズリ	
247	86	SS18 壁溝中	弥生土器 甕	口頸部 1/6	口径(16.1) 器高(3.9)	良好	褐色	密 石英・白色 粒	外面：口縁部煤により調整不明、頸部横ナデ 内面：口頸部横ナデ、肩部ヘラケズリ	外面口縁部層状煤 付着
248	86	SS18 下層	弥生土器 鉢	1/6	口径(13.5) 器高(9.5) 底径(4.2)	良好	茶褐色	密 砂粒	外面：口縁部横ナデ、体部指頭調整→ヘラミガキ 内面：口縁部ヘラミガキ、体部指頭調整・ヘラケズリ→ハ ケメ	外面体部一部煤付 着
249	86	SS18 下層	弥生土器 高坏	坏部 破片	口径(15.6) 器高(5.2)	良好	橙色	密 白色粒	外面：口縁部指頭調整・ナデ、坏部横ヘラミガキ 内面：指頭調整・横ヘラミガキ	
250	86	SS18 壁溝中	弥生土器 器台	接合部 1/2	器高(6.0)	良好	茶褐色	密 雲母・白色 粒	外面：ヘラミガキ・縦ハケメ 内面：指頭調整・ヘラミガキ・ヘラケズリ	
251	92	SS24 P2	弥生土器 甕	口頸部 破片	口径(17.6) 器高(3.8)	良好	橙褐色	密 石英・白色 粒	外面：口縁部櫛状工具による直線文、頸部横ヘラミガキ 内面：口頸部横ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	外面口縁部・頸 部煤付着
252	92	SS24 下層	弥生土器 甕	口頸部 1/7	口径(14.5) 器高(3.4)	良	褐色	密 白色粒	外面：口縁部櫛状工具による直線文→ナデ、頸部横ヘラミ ガキ 内面：口頸部指頭調整・横ヘラミガキ	外面一部炭化物付 着
253	92	SS24 下層	弥生土器 破片	口頸部 破片	口径(15.7) 器高(4.5)	良	淡褐色	密 石英・白色 粒	外面：口縁部横ナデ、頸部ナデ・横ハケメ 内面：口頸部横ナデ、肩部横ヘラケズリ	外面口縁部下端煤 付着
254	92	SS24 溝中	弥生土器 甕	口頸部 破片	口径(12.2) 器高(3.5)	良	褐色	密 石英・白色 粒	外面：調整不明 内面：口頸部調整不明、肩部ヘラケズリ	外面口縁部炭化物 付着
255	92	SS24 下層	弥生土器 甕	底部 破片	器高(1.7) 底径(4.1)	良	褐色	密 石英・白色 粒	外面：調整不明 内面：ヘラケズリ	
256	92	SS24 下層	弥生土器 高坏	坏部 破片	口径(19.2) 器高(4.0)	良	橙褐色	密 白色粒	外面：横ヘラミガキ 内面：横・縦ヘラミガキ	
257	92	SS24 下層	弥生土器 器台	脚部 1/2	器高(6.0) 底径(12.0)	良	淡橙褐色	密 石英・白色 粒	外面：調整不明・ハケメわずかに残る 内面：ヘラケズリ	
258	93	SS25 中層	弥生土器 壺	口頸部 1/8	口径(15.2) 器高(7.3)	良	褐色	密 石英・白色 粒	外面：調整不明 内面：口径部指頭調整・ナデ、肩部ヘラケズリ	
259	93	SS25 下層	弥生土器 甕	口頸部 破片	口径(14.7) 器高(3.7)	良	橙褐色	密 石英・白色 粒	外面：横ナデ 内面：指頭調整→ナデ	外面一部煤付着
260	93	SS25 下層	弥生土器 甕	口頸部 1/2	口径(14.7) 器高(3.6)	良	褐色	密 石英・白色 粒	外面：口縁部櫛状工具による直線文→一部ナデ、頸部ナデ 内面：口頸部横ナデ、肩部横ヘラケズリ	外面口縁部煤付着

261	93	SS25 中層	弥生土器 甕	口頸部 破片	口径(16.3) 器高(2.8)	良	褐色	密 角閃石・石 英	外面：横ヘラミガキ 内面：横ヘラミガキ	
262	93	SS25 中層	弥生土器 甕	口頸部 1/2	口径(12.4) 器高(3.3)	良	褐色	密 石英・白色 粒	外面：調整不明 内面：口縁部調整不明、肩部ヘラケズリ	
263	93	SS25 床面直上	弥生土器 甕	底部2/3	器高(4.6) 底径(6.6)	良	褐色～ 橙褐色	密 石英・白色 粒	外面：縦ハケメ 内面：ヘラケズリ・指頭調整	外面煤付着
264	96	SS12 SB3-P1	土師器 甕	口縁～体 部1/4	口径(12.5) 器高(7.7) 胴径(14.4)	良	橙褐色	密	外面：ナデ 内面：口縁部調整不明、体部横ヘラケズリ	
265	96	SS12 上層	土師器 甕	口頸部 破片	口径(24.3) 器高(3.7)	良	褐色	密 雲母・砂粒	外面：口縁部横ナデ、頸部指頭調整・縦ハケメ 内面：口縁部横ナデ、頸部指頭調整→ハケメ？	
266	96	SS12 上層	土師器 甕	口頸部 破片	口径(15.3) 器高(4.2)	良	橙色	密 白色粒	外面：口縁部横ナデ、頸部指頭調整・縦ハケメ 内面：口縁部横ナデ、頸部ハケメ、肩部横ヘラケズリ	
267	96	SS12 SB3-P14	土師器 小型甕	口縁～体 部1/4	口径(8.0) 器高(4.4)	良	橙色	密 砂粒	指頭調整→ナデ	
268	96	SS12 SB3-P1	土師器 小型甕	口縁～体 部1/5	口径(7.4) 器高(4.1)	良	橙色	密 白色粒	外面：指頭調整→ハケメ・ナデ 内面：指頭調整・ナデ	
269	96	SS12 床面直上	土師器 高坏	脚部 1/6	器高(2.4) 底径(8.8)	良	橙色	密 雲母・白色 粒	外面：ナデ？ 内面：裾部横ヘラケズリ、脚部横ナデ	
270	96	SS12 上層	須恵器 甕	体部 1/2	器高(6.5) 底径(6.6)	良	青灰色	密 黒色粒	外面：体部回転ナデ、底部ヘラケズリ、底面ヘラ切り→ヘ ラケズリ→ナデ 内面：体部回転ナデ、底部ナデ	内面火ぶくれ 内面底部自然降灰
271	96	SS12 中層	須恵器 甕	口縁～肩 部1/8	口径(17.6) 器高(7.9)	良好	青灰色	密 白色粒	外面：口頸部回転ナデ→櫛状工具による波状文、肩部叩き →ナデ 内面：回転ナデ	
272	96	SS12 上層	須恵器 甕	破片	口径(10.8) 器高(2.8)	良好	青灰色	密	内外面：回転ナデ	外面自然降灰
273	96	SS12	須恵器 甕	口縁部 1/5	口径(14.6) 器高(1.8)	良好	青灰色	密	内外面：回転ナデ	外面自然降灰
274	96	SS12	須恵器 甕	破片	口径(13.6) 器高(3.1)	良好	青灰色	密 白色粒	外面：天井部回転ヘラケズリ、口縁部回転ナデ 内面：天井部ナデ、口縁部回転ナデ	
275	97	SS33 中層	弥生土器 壺	口頸部 1/4	口径(16.4) 器高(4.6)	良	褐色	密 白色粒	外面：凹線4条以上 内面：指頭調整→ナデ	
276	97	SS33 下層	弥生土器 壺	口縁部 破片	口径(14.6) 器高(2.9)	良	褐色	密 石英・白色 粒	内外面：指頭調整→横ヘラミガキ	
277	97	SS33 下層	弥生土器 壺	口縁部 破片	口径(20.6) 器高(1.3)	良	橙褐色	密 角閃石・石 英	外面：口縁部櫛状工具による直線文、頸部指頭調整→ヘラ ミガキ 内面：指頭調整→横ヘラミガキ	
278	97	SS33	弥生土器 甕	口縁部 破片	口径(18.4) 器高(2.5)	良	褐色	密 石英・白色 粒	外面：口縁部凹線3条→ナデ、頸部ハケメ 内面：口頸部ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	外面頸部一部煤付 着
279	97	SS33 床面直上	弥生土器 甕	口頸部 破片	口径(11.8) 器高(3.3)	良	褐色	密	外面：口縁部櫛状工具による直線文、頸部ハケメ→ヘラミ ガキ 内面：横ヘラミガキ	
280	97	SS33	弥生土器 甕	口縁部 破片	口径(14.8) 器高(2.4)	良	褐色	密 雲母・石英	外面：櫛状工具による直線文→ナデ、頸部縦ハケメ 内面：口縁部横ヘラミガキ、頸部指頭調整→ナデ	
281	97	SS33	弥生土器 甕	口縁部 破片	口径(13.6) 器高(3.6)	良	褐色	密 石英・白色 粒	内外面：指頭調整→ヘラミガキ	
282	97	SS33 床面直上	弥生土器 壺	底部 1/4	器高(2.6) 底径(5.5)	良	外面：橙褐色 内面：褐色	密 石英・白色 粒	外面：ナデ→ヘラミガキ 内面：指頭調整	焼成前穿孔
283	97	SS33 下層	弥生土器 甕	底部 1/4	器高(2.3) 底径(4.4)	良	橙褐色	密 石英・白色 粒	外面：ナデ、底面ヘラケズリ→ナデ 内面：ヘラケズリ→指頭調整	
284	97	SS33 下層	弥生土器 甕	底部 1/2	器高(1.7) 底径(6.4)	良	褐色	密 石英・白色 粒	外面：ハケメ、底面ナデ 内面：ヘラケズリ	
285	97	SS33 床面直上	弥生土器 甕	底部 1/4	器高(2.8) 底径(6.8)	良	外面：橙褐色 内面：褐色	密	外面：調整不明 内面：ヘラケズリ・指頭調整	
286	97	SS33 中層	弥生土器 甕	底部 1/6	器高(2.8) 底径(6.2)	良	橙褐色	密 白色粒	外面：調整不明 内面：指頭調整→ハケメ	
287	97	SS33 下層	弥生土器 甕	底部 1/4	器高(1.8) 底径(5.4)	良	暗褐色	密 白色粒	内外面：調整不明	
288	97	SS33	弥生土器 転用土器	ほぼ完形	長さ：7.4 幅：6.4 厚さ：0.9	良好	灰褐色	密 雲母・白色 粒	甕体部転用	重量：28.5 g
289	104	SI6 P2	土師器 甕	1/2	口径(15.8) 器高(24.0) 胴径(21.7)	良好	褐色	密 雲母・石英	外面：口頸部指頭調整→ナデ、肩部ヘラ状工具による列点 文、体部縦・横ハケメ 内面：口頸部指頭調整→ナデ、体部指頭調整→ヘラケズリ	外面煤・層状煤付 着・オキ火上転が し痕2段 内面コケ
290	104	SI6 中層	土師器 甕	口頸部 1/8	口径(12.8) 器高(3.9)	良好	褐色	密 雲母・白色 粒	外面：口縁部指頭調整→横ナデ、頸部縦ハケメ 内面：指頭調整→横ナデ	外面煤付着・口縁 部層状煤付着
291	104	SI6 上層	土師器 甕	口頸部 破片	口径(15.0) 器高(4.9)	良好	褐色	密 石英・砂粒	外面：横ナデ 内面：指頭調整→横ナデ	
292	104	SI6 中層	土師器 甕	口縁部 1/10	口径(21.8) 器高(3.3)	良好	灰褐色	密	内外面：指頭調整→横ナデ	
293	104	SI6 上層	土師器 甕	口縁部 破片	口径(15.8) 器高(3.3)	良好	褐色	密 雲母・白色 粒	外面：横ナデ 内面：指頭調整→横ナデ	
294	104	SI6 中層	土師器 甕	口縁部 破片	口径(13.2) 器高(3.6)	良好	灰褐色	密 雲母・白色 粒	外面：口頸部横ナデ、肩部ハケメ 内面：指頭調整→横ナデ	外面一部煤付着
295	104	SI6 上層	土師器 甕	口縁部 破片	口径(13.2) 器高(3.2)	良好	外面：黒茶色 内面：褐色	密 雲母・石英	外面：横ナデ 内面：指頭調整→横ナデ	
296	104	SI6 中層	土師器 高坏	坏部 1/6	口径(15.7) 器高(3.9)	良好	褐色	密 雲母・石英	内外面：ヘラミガキ	
297	104	SI6 上層	土師器 低脚坏	脚部 2/3	器高(2.5) 底径(5.2)	良好	褐色	密 雲母・石英	外面：横ナデ 内面：坏部ナデ、脚部指頭調整→ナデ	
298	104	SI6 中層	土師器 甕台	受部 1/8	口径(24.8) 器高(5.4)	良好	橙褐色	密 白色粒	内外面：調整不明	

299	104	SI6 中層	土師器 器台	接合部 1/6	器高(3.3)	良好	灰褐色	密 雲母	外面:調整不明 内面:受部ヘラミガキ、脚部ヘラケズリ	
300	108	SI10 中層	土師器 甕	口縁~体 部1/8	口径(23.0) 器高(7.3)	やや良	淡黄褐色	やや密 石英・白色 粒	外面:口縁部横ナデ、体部ナデ 内面:口縁部横ナデ、体部ヘラケズリ	外面口縁部一部煤 附着
301	108	SI10 上層	土師器 甕	口縁~体 部1/8	口径(22.2) 器高(5.6)	やや良	淡橙褐色~ 淡褐色	密 石英・白色 粒	外面:調整不明 内面:口縁部横ナデ、体部横ヘラケズリ	
302	108	SI10 上層	土師器 甕	口頸部 破片	口径(21.0) 器高(3.7)	良好	淡橙褐色	密 雲母・石英	外面:横ナデ 内面:口縁部横ハケメ→ナデ、頸部ヘラケズリ	
303	108	SI10 P2	土師器 甕	口縁~肩 1/6	口径(15.2) 器高(4.8)	良好	淡灰褐色	密 石英・白色 粒	外面:口頸部指頭調整→横ナデ、肩部ハケメ 内面:口頸部横ナデ、肩部ヘラケズリ	
304	108	SI10 上層	土師器 鉢	口縁~体 部 破片	口径(16.9) 器高(4.7)	良	淡灰褐色	密 角閃石・雲 母	内外面:ヘラケズリ→ナデ	
305	108	SI10 下層	須恵器 蓋	2/3	口径(12.8) 器高(4.5)	良好	青灰色	密 白色粒	外面:口縁部回転ナデ、天井部ヘラケズリ・ヘラ切り 内面:口縁部回転ナデ、天井部ナデ	
306	108	SI10 床面直上	須恵器 蓋	1/4	口径(12.6) 器高(3.6)	良好	青灰色	密	外面:口縁部回転ナデ、天井部ヘラケズリ→ナデ→ヘラミ ガキ 内面:口縁部回転ナデ、天井部ナデ	転用碗?
307	108	SI10 上層	須恵器 坏	ほぼ完形	口径(10.7) 器高(3.9)	良好	青灰色	密	外面:口縁部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ 内面:口縁部回転ナデ、底部ナデ	外面自然降灰
308	108	SI10 下層	須恵器 坏	1/3	口径(10.8) 器高(3.3)	良好	灰色	密	内外面:回転ナデ	外面口縁部自然降 灰
309	108	SI10 中層	須恵器 坏	1/4	口径(11.6) 器高(3.0)	良好	青灰色	密	内外面:回転ナデ	外面自然降灰
310	108	SI10 P2	須恵器 坏	体部 1/2	口径(13.0) 器高(3.5)	良好	淡灰色	密	外面:口縁部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ 内面:口縁~体部回転ナデ、底部ナデ	外面口縁部自然降 灰
311	108	SI10	土製品 支脚	把手? 破片	長さ(4.1) 幅(2.8) 厚さ(2.0)	良好	灰茶色	密 雲母・石英	外面:指頭調整・ハケメ→ナデ	一部煤附着
312	108	SI10 中層	手捏ね 土器	底部 破片	器高(2.7) 底径(9.0)	良好	灰褐色	密 角閃石・雲 母	外面:指頭調整・ナデ 内面:ヘラケズリ	焼成前穿孔
313	111	早里17号墳 周溝	土師器 甕	口縁~体 部1/4	口径(16.9) 器高(5.2)	良好	灰褐色	密	外面:口頸部指頭調整→ナデ、体部ハケメ→ナデ 内面:口縁部指頭調整→ナデ、体部ヘラケズリ	外面口頸部層状煤 附着
314	111	早里17号墳 周溝中層	土師器 甕	口縁~頸 部1/5	口径(22.3) 器高(4.9)	良好	淡橙褐色	密 石英・白色 粒	外面:指頭調整→ナデ 内面:口頸部ナデ、肩部ヘラケズリ	
315	111	早里17号墳 周溝中層	土師器 甕	口縁~体 部 破片	口径(29.7) 器高(5.6)	良好	灰褐色	密 雲母・石英	外面:口縁部横ナデ、体部縦ハケメ→ナデ 内面:口縁部横ナデ、体部ヘラケズリ	
316	111	早里17号墳 周溝中層	土師器 甕	口頸部 1/8	口径(33.0) 器高(4.5)	良好	淡褐色	密 石英・白色 粒	外面:口縁部横ナデ、頸部縦ハケメ→ナデ 内面:口頸部横ナデ、肩部横ヘラケズリ	
317	111	早里17号墳 周溝	土師器 脚付塊?	体部 1/2	口径(10.1) 器高(4.0)	良	橙褐色	密 白色粒	外面:口縁~体部横ナデ、体部下半ヘラケズリ→ナデ 内面:口縁~体部横ナデ、体部下半ナデ→ヘラミガキ	
318	111	早里17号墳 周溝上層	須恵器 甕	1/8	口径(26.4) 器高(46.9) 胴径(41.2)	良好	黒灰色~灰 色	密	外面:口頸部回転ナデ、体部平行叩き目・カキ目 内面:口頸部回転ナデ、当具による同心円文	内面口縁部~外面 肩部自然降灰
319	111	早里17号墳 周溝上層	須恵器 甕	口頸部 1/5	口径(23.0) 器高(8.7)	良好	灰色~灰褐 色	密	外面:口縁部回転ナデ、頸部カキ目→ナデ、肩部平行叩き 目→カキ目 内面:口頸部回転ナデ、肩部当具による青海波文	内面口頸部自然降 灰
320	111	早里17号墳 周溝上層	須恵器 甕	口頸部 1/3	口径(24.5) 器高(8.9)	良好	暗赤灰色~ 青灰色	密	外面:口縁部回転ナデ、頸部平行叩き目→ナデ、肩部平行 叩き目 内面:口頸部回転ナデ、肩部当具による青海波文	内面口頸部自然降 灰
321	111	早里17号墳 周溝	須恵器 破片	口頸部 破片	口径(12.6) 器高(3.6)	良好	灰褐色	密	内外面:回転ナデ	
322	111	早里17号墳 周溝上層	須恵器 横瓶	頸部~肩 部1/6	器高(11.9)	良好	灰色	密	外面:頸部ナデ、肩部平行叩き目・カキ目 内面:頸部ナデ、肩部当具による同心円文	外面頸部ヘラによ る刻書「井」?
323	111	早里17号墳 周溝	須恵器 坏	1/3	口径(11.8) 器高: 4.8 底径(8.6)	やや良	橙褐色	密	外面:口縁~体部回転ナデ、底部静止糸切り 内面:口縁~体部回転ナデ、底部ナデ	
324	111	早里17号墳 周溝	須恵器 坏	ほぼ完形	口径:10.7 器高: 5.7 底径: 4.6	良	暗灰白色	密	外面:口縁~体部回転ナデ、体部下回転ヘラケズリ 内面:口縁~体部回転ナデ	
325	111	早里17号墳 周溝下層	須恵器 坏	1/6	口径(13.8) 器高: 4.3 底径(8.0)	良好	青灰色	密 白色粒	外面:口縁~体部回転ナデ、体部下回転糸切り 内面:口縁~体部回転ナデ、底部ナデ	
326	114	早里17号墳 SX9	土師器 長頸壺	ほぼ完形	口径: 8.4 器高:16.9 胴径:15.6 底径: 1.3	良	橙褐色	密 角閃石・白 色粒	外面:口縁~体部縦ハケメ→ナデ→ヘラミガキ、体部下 指頭調整・ハケメ 内面:口縁部ナデ→横ヘラミガキ、肩部ナデ、底部指頭調 整・ハケメ	
327	114	早里17号墳 SX9	土師器 脚付塊	ほぼ完形	口径:12.0 器高: 7.8 胴径:13.5 底径: 7.9	良	橙褐色	密 白色粒	外面:口縁~脚部指頭調整・ナデ→横ヘラミガキ 内面:坏部・脚部指頭調整・ナデ→ヘラミガキ、脚部指 頭調整・ナデ	全面赤彩
328	114	早里17号墳 SX9	土師器 脚付塊	ほぼ完形	口径:12.6 器高: 6.9 胴径:14.1 底径: 7.8	良	橙褐色	密 角閃石・白 色粒	外面:坏部ナデ→ヘラミガキ、脚部指頭調整・ナデ→ヘラ ミガキ 内面:坏部指頭調整・ナデ→ヘラミガキ、脚部指頭調整→ ナデ	
329	114	早里17号墳 SX9	土師器 脚付塊	ほぼ完形	口径:12.4 器高: 7.7 胴径:13.5 底径: 7.5	良	橙褐色	密 角閃石・白 色粒	外面:口縁~脚部指頭調整・ナデ→横ヘラミガキ 内面:坏部・脚部指頭調整・ナデ→ヘラミガキ、脚部指 頭調整・ナデ	全面赤彩
330	114	早里17号墳 SX9	土師器 脚付塊	ほぼ完形	口径:12.6 器高: 7.3 胴径:13.7 底径: 7.3	良	橙褐色	密 石英・白色 粒	外面:口縁~脚部指頭調整・ナデ→横ヘラミガキ 内面:坏部・指頭調整・ナデ→ヘラミガキ、脚部指頭調整、 脚部横ナデ	
331	114	早里17号墳 SX9	土師器 脚付塊	ほぼ完形	口径:12.6 器高: 7.9 胴径:14.0 底径: 7.6	良	橙褐色	密 白色粒	外面:口縁~脚部指頭調整・ナデ→横ヘラミガキ 内面:坏部・脚部指頭調整・ナデ→ヘラミガキ、脚部指 頭調整・ナデ	
332	114	早里17号墳 SX9	土師器 脚付塊	ほぼ完形	口径:12.2 器高: 7.8 胴径:13.2 底径(8.4)	良	橙褐色	密 石英・白色 粒	外面:坏部指頭調整・ナデ→ヘラミガキ、脚部横ナデ 内面:坏部指頭調整・ナデ→ヘラミガキ、脚部指頭調整、 脚部横ナデ	

333	116	早里17号墳 SX10	土師器 脚付埴	ほぼ完形	口径:120 器高: 7.4 胴径:13.6 底径: 6.9	良	淡褐色～ 橙褐色	密 石英・白色 粒	外面:口縁～脚部指頭調整・ナデ→横ヘラミガキ 内面:坏部・指頭調整・ナデ→ヘラミガキ、脚部指頭調整・ ナデ	
334	116	早里17号墳 SX10	土師器 脚付埴	ほぼ完形	口径:11.7 器高: 7.2 胴径:13.3 底径: 7.4	良	淡褐色～ 橙褐色	密 石英・白色 粒	外面:坏部指頭調整・ナデ→横ヘラミガキ、脚部指頭調整 →横ナデ 内面:坏部指頭調整・ナデ→ヘラミガキ、脚部指頭調整・ ナデ	全面赤彩
335	116	早里17号墳 SX10	土師器 脚付埴	ほぼ完形	口径:12.6 器高: 7.4 胴径:13.6 底径: 7.8	良	橙褐色	密 白色粒	外面:坏部指頭調整・ナデ→横ヘラミガキ、脚部指頭調整 →横ナデ 内面:坏部ナデ→ヘラミガキ、脚部指頭調整・ナデ	全面赤彩
336	116	早里17号墳 SX10	土師器 脚付埴	ほぼ完形	口径:12.1 器高: 7.5 胴径:13.5 底径: 7.4	良	淡褐色～ 橙褐色	密 白色粒	外面:口縁～脚部指頭調整・ナデ→横ヘラミガキ 内面:坏部指頭調整・ナデ→ヘラミガキ、脚部指頭調整・ ナデ	全面赤彩
337	116	早里17号墳 SX10	土師器 脚付埴	3/4	口径(11.7) 器高: 7.2 胴径(13.3) 底径: 7.8	良	橙褐色	密 角閃石・白 色粒	外面:坏部ナデ→ヘラミガキ、脚部指頭調整・ナデ→ヘラ ミガキ 内面:坏部ナデ→ヘラミガキ、脚部指頭調整→ナデ	
338	116	早里17号墳 SX10	土師器 脚付埴	ほぼ完形	口径:11.2 器高: 7.8 胴径:12.7 底径: 7.1	良	淡褐色	密 角閃石・白 色粒	外面:口縁～脚部指頭調整・ナデ→横ヘラミガキ 内面:坏部指頭調整・ナデ→ヘラミガキ、脚部ナデ・ヘラ ミガキ	
339	122	早里18号墳 周溝上層	土師器 甕	口縁～肩 部 破片	口径(18.0) 器高(5.3)	良好	淡褐色～ 灰褐色	密 石英・白色 粒	外面:口頸部横ナデ、肩部縦ハケメ 内面:口頸部横ナデ、肩部ヘラケズリ	
340	122	早里18号墳 周溝中層	土師器 甕	口縁～肩 部 破片	口径(28.5) 器高(9.0)	良好	灰褐色	密 雲母・石英	外面:口縁部横ナデ、肩部縦ハケメ・ヘラ状工具による直 線文1条 内面:口縁部横ハケメ→ナデ、肩部斜めヘラケズリ	外面煤付着・一部 層状煤付着
341	122	早里18号墳 周溝上層	土師器 甕	口縁～肩 部1/8	口径(19.6) 器高(7.0)	良好	淡橙褐色	密 石英・白色 粒	外面:口頸部横ナデ、肩部縦ハケメ 内面:口頸部横ナデ、肩部横ヘラケズリ	
342	122	早里18号墳 周溝中層	土師器 甕	口頸部 破片	口径(24.1) 器高(4.6)	良好	灰褐色	密 石英・白色 粒	外面:横ナデ 内面:口頸部横ナデ、肩部横ヘラケズリ	外面煤付着・一部 層状煤付着
343	122	早里18号墳 周溝上層	土師器 甕	口縁部 破片	口径(27.0) 器高(2.9)	良好	淡橙褐色～ 淡黄灰白色	密 石英・白色 粒	外面:指頭調整→横ナデ 内面:横ナデ	
344	122	早里18号墳 周溝中層	土師器 脚付埴	口縁部 破片	口径(14.0) 器高(2.7)	良好	淡橙色	密	内外面:横ナデ	
345	122	早里18号墳 周溝中層	土師器 皿	口縁～体 部 破片	口径(14.6) 器高(2.2)	良好	橙褐色	密	内外面:横ナデ	内外面茶系赤彩
346	122	早里18号墳 周溝中層	土師器 皿	1/8	口径(13.0) 器高: 1.8 底径(11.0)	良好	赤褐色	密 石英・白色 粒	外面:口縁～体部横ナデ、底部ヘラ切り→ナデ 内面:ナデ	内外面茶系赤彩
347	122	早里18号墳 周溝中層	土師器 皿	底部 破片	器高(2.3)	良好	橙褐色	密 雲母・石英	外面:ナデ、貼付高台 内面:ナデ	内外面茶系赤彩
348	122	早里18号墳 周溝上層	須恵器 短頸壺	1/4	口径(9.8) 器高(12.0) 胴径(16.2)	良好	暗赤灰色	密	内外面:回転ナデ	外面肩部自然降 灰?
349	122	早里18号墳 周溝上層	須恵器 短頸壺	破片	口径(11.0) 器高(3.2)	良好	灰褐色	密	内外面:回転ナデ	
350	122	早里18号墳 周溝上層	須恵器 短頸壺	1/3	口径(11.6) 器高(4.6)	良好	赤褐色	密	外面:口縁～体部回転ナデ、底部回転糸切り 内面:口縁～体部回転ナデ、底部ナデ	
351	122	早里18号墳 周溝上層	須恵器 短頸壺	口縁～体 部1/8	口径(12.8) 器高(15.2) 胴径(44.0)	良	灰褐色～灰 色	密	外面:口頸部回転ナデ、肩部～体部平行叩き目→カキ目 内面:口頸部回転ナデ、肩部～体部当具による青海波文	外面肩部自然降 灰
352	125	早里18号墳 SX2	土師器 長頸壺	完形	口径:10.6 器高:19.1 胴径:16.7	良好	橙褐色	密 白色粒	外面:口縁～体部ハケメ→横ナデ 内面:口縁部ハケメ→ナデ、体部指頭調整	
353	125	早里18号墳 SX2	土師器 脚付埴	3/4	口径:12.7 器高: 7.9 胴径:13.9 底径: 8.4	良	橙褐色	密	外面:口縁～脚部指頭調整・ナデ→横ヘラミガキ 内面:坏部・脚部指頭調整・ナデ→ヘラミガキ、脚部指 頭調整	全面赤彩
354	125	早里18号墳 SX2	土師器 脚付埴	ほぼ完形	口径:12.9 器高: 7.9 胴径:14.3 底径: 7.8	良	橙褐色	密	外面:口縁～脚部指頭調整・ナデ→横ヘラミガキ 内面:坏部・脚部指頭調整・ナデ→ヘラミガキ	全面赤彩
355	125	早里18号墳 SX2	土師器 脚付埴	ほぼ完形	口径:13.2 器高: 7.9 胴径:14.9 底径(8.2)	良	橙褐色	密	外面:口縁～脚部指頭調整・ナデ→横ヘラミガキ 内面:坏部指頭調整・ナデ→ヘラミガキ、脚部指頭調整→ ナデ	全面赤彩
356	125	早里18号墳 SX2	土師器 脚付埴	ほぼ完形	口径:13.1 器高: 8.3 胴径:14.0 底径: 8.4	良	橙褐色	密 角閃石・白 色粒	外面:口縁～脚部指頭調整・ナデ→横ヘラミガキ 内面:坏部指頭調整・ナデ→ヘラミガキ、脚部指頭調整→ ナデ	全面赤彩
357	125	早里18号墳 SX2	土師器 脚付埴	ほぼ完形	口径:13.5 器高: 9.2 胴径:14.1 底径: 7.0	良	橙褐色	密 角閃石・白 色粒	外面:口縁～脚部指頭調整・ナデ→横ヘラミガキ 内面:坏部指頭調整・ナデ→ヘラミガキ、脚部指頭調整→ ナデ	全面赤彩
358	129	早里18号墳 SX6	土師器 長頸壺	ほぼ完形	口径: 7.8 器高:16.3 胴径:15.0	良	橙褐色	密 角閃石・白 色粒	外面:口縁～体部ハケメ・ナデ→ヘラミガキ 内面:口縁部指頭調整・ナデ→ヘラミガキ、肩部ナデ、底 部指頭調整・ハケメ	
359	129	早里18号墳 SX6	土師器 短頸壺	ほぼ完形	口径: 9.1 器高:10.4 胴径:13.9 底径: 2.8	良	橙褐色	密 雲母・白色 粒	外面:口頸部横ナデ→横ヘラミガキ、体部指頭調整・ハケ メ→ヘラミガキ 内面:口縁部横ナデ→横ヘラミガキ、体部上半ナデ、体部 下半指頭調整・ハケメ→ヘラミガキ	
360	129	早里18号墳 SX6	土師器 脚付埴	ほぼ完形	口径:12.7 器高: 7.0 胴径:14.2 底径: 6.7	良	橙褐色	密 角閃石・白 色粒	外面:口縁～脚部指頭調整・ナデ→横ヘラミガキ 内面:坏部指頭調整・ナデ→ヘラミガキ、脚部指頭調整→ ナデ	全面赤彩
361	129	早里18号墳 SX6	土師器 脚付埴	ほぼ完形	口径:12.4 器高: 7.2 胴径:14.3 底径: 6.8	良	橙褐色	密 角閃石・白 色粒	外面:口縁～脚部指頭調整・ナデ→横ヘラミガキ 内面:坏部・脚部指頭調整・ナデ→ヘラミガキ、脚部指 頭調整	全面赤彩

362	129	早里18号墳 SX6	土師器 脚付塊	ほぼ完形	口径:126 器高:7.2 胴径:14.3 底径:6.7	良	橙褐色	密 角閃石・白色粒	外面:口縁~脚部指頭調整・ナデ→横ヘラミガキ 内面:坏部指頭調整・ナデ→ヘラミガキ、脚部指頭調整→ナデ	全面赤彩
363	129	早里18号墳 SX6	土師器 脚付塊	ほぼ完形	口径:127 器高:7.5 胴径:14.5 底径:7.4	良	橙褐色	密 角閃石・白色粒	外面:口縁~脚部指頭調整・ナデ→横ヘラミガキ 内面:坏部指頭調整・ナデ→ヘラミガキ、脚部指頭調整→ナデ	全面赤彩
364	129	早里18号墳 SX6	土師器 脚付塊	完形	口径:129 器高:7.4 胴径:14.3 底径:7.0	良	橙褐色~ 黄褐色	密 角閃石・白色粒	外面:口縁~脚部指頭調整・ナデ→横ヘラミガキ 内面:坏部指頭調整・ナデ→ヘラミガキ、脚部指頭調整→ナデ	全面赤彩
365	129	早里18号墳 SX6	土師器 脚付塊	ほぼ完形	口径:130 器高:7.3 胴径:14.7 底径:7.2	良	橙褐色	密	外面:口縁~脚部指頭調整・ナデ→横ヘラミガキ 内面:坏部・脚端部指頭調整・ナデ→ヘラミガキ、脚部指頭調整	全面赤彩
366	129	早里18号墳 SX6	須恵器 短頸壺	ほぼ完形	口径:8.5 器高:10.9 胴径:12.8	良	灰色	密 白色粒	外面:口縁~体部回転ナデ、底部ヘラ切り→ナデ 内面:口縁部回転ナデ・指頭調整、体部指頭調整・ヘラケズリ	
367	133	早里18号墳 SX14	土師器 皿	底部 破片	器高(0.9)	良好	赤褐色	密 石英	内外面:ナデ	内外面赤彩
368	137	早里19号墳 周溝下層	土師器 把手付甕	ほぼ完形	口径(27.8) 器高:23.8	良	灰褐色	密 石英・砂粒	外面:口頸部指頭調整・横ナデ、体部ハケメ・一部粗いハケメ、把手部ヘラケズリ→ナデ 内面:口頸部横ハケメ、肩部指頭調整、体部指頭調整・粗いハケメ	外面体部煤付着
369	137	早里19号墳 周溝上層	土師器 甕	口頸部 1/8	口径(14.0) 器高(3.5)	良好	黄灰白色	密 白色粒	外面:横ナデ 内面:口頸部横ナデ、肩部横ヘラケズリ	
370	137	早里19号墳 周溝上層	土師器 甕	肩部 1/4	器高(4.2)	不良	淡黄灰白色	密 石英	外面:縦ハケメ・ナデ 内面:頸部横ナデ、体部横ヘラケズリ→ナデ	
371	137	早里19号墳 周溝	土師器 甕	口縁~体 部 破片	口径(24.2) 器高(8.6)	やや良	淡橙褐色	密 石英・白色粒	外面:口縁部横ナデ、体部縦ハケメ 内面:口縁部横ナデ、体部ヘラケズリ→ナデ	
372	137	早里19号墳 周溝上層	須恵器 蓋	破片	口径(12.8) 器高(3.3)	良	青灰色	密	内外面:回転ナデ	
373	137	早里19号墳 周溝下層	埴輪	体部 破片	器高(4.1)	良好	淡橙褐色	密 石英・白色粒	外面:ハケメ、突部ナデ 内面:指頭調整・ヘラケズリ	
374	137	早里19号墳 周溝	埴輪	体部 破片	器高(4.2)	良好	淡橙褐色	密 石英・白色粒	外面:ハケメ・ナデ 内面:指頭調整・ヘラケズリ→ナデ	
375	141	早里19号墳 SK16	土師器 甕	ほぼ完形	口径:17.0 器高:17.9 胴径:19.0	良	褐色~ 橙褐色	密 石英・白色粒	外面:口縁部横ナデ、頸部指頭調整→ナデ、体部縦ハケメ→ナデ 内面:口頸部横ナデ、体部粗いケズリ	外面一部煤付着
376	143	早里20号墳 下層	須恵器 蓋	完形	口径:123 器高:6.8	良好	灰色	密	外面:口縁~体部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ、つまみ部ナデ 内面:回転ナデ	外面体部自然降灰
377	143	早里20号墳 下層	須恵器 坏	ほぼ完形	口径:11.8 器高:4.7	良	灰色	密	外面:口縁~体部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ→ナデ 内面:回転ナデ	内外面自然降灰 火ぶくれ
378	143	早里20号墳 下層	土師器 壺	体部 1/8	器高(4.1) 胴径(12.0)	やや良	淡黄褐色	密 石英・白色粒	外面:ナデ 内面:ヘラケズリ→ナデ	
379	148	SX3 主体部	土製品 勾玉	ほぼ完形	長さ(2.5) 幅:1.3 厚さ:1.4	良	灰茶色	密 雲母・白色粒	手捏ね成形→ナデ	孔径2mm 重量:5.2g
380	150	SX7	須恵器 蓋	ほぼ完形	口径:12.6 器高:4.6	良	灰色	密 白色粒	外面:口縁~体部回転ナデ、天井部ヘラ切り→ヘラケズリ 内面:口縁~体部回転ナデ、天井部指頭調整→ナデ	
381	150	SX7	須恵器 坏	ほぼ完形	口径:11.6 器高:3.4 底径:2.8	良	灰色	密 白色粒	外面:口縁~体部回転ナデ、底部ヘラ切り→ヘラケズリ 内面:口縁~体部回転ナデ、底部ナデ	
382	153	SX15	須恵器 蓋	破片	口径(14.4) 器高(4.6)	良	外面:暗褐色 内面:灰色	密	外面:口縁~体部回転ナデ、天井部ヘラケズリ→ナデ 内面:口縁~体部回転ナデ、天井部ナデ	外面天井部焼成後 線刻 外面自然降灰
383	153	SX15	須恵器 蓋	1/3	口径:13.7 器高:3.8	やや良	灰色	密	外面:口縁~体部回転ナデ、天井部ヘラケズリ→ナデ 内面:口縁~体部回転ナデ、天井部ナデ	
384	153	SX15	須恵器 坏	4/5	口径(10.3) 器高:4.2	良	灰色~暗灰 色	密 白色粒	外面:口縁~体部回転ナデ、底部ヘラケズリ→ナデ 内面:口縁~体部回転ナデ、底部ナデ	
385	157	SK1	須恵器 蓋	完形	口径:12.4 器高:4.1	良	灰色	密 白色粒	外面:口縁~体部回転ナデ、天井部ヘラ切り→指頭調整・ヘラケズリ 内面:口縁~体部回転ナデ、天井部ナデ	
386	157	SK1	須恵器 坏	4/5	口径:12.4 器高:4.5	やや良	灰色	密 白色粒	外面:口縁~体部回転ナデ、底部ヘラ切り→ヘラケズリ 内面:口縁~体部回転ナデ、底部ナデ	
387	159	SK8	須恵器 蓋	ほぼ完形	口径:14.0 器高:5.0	良	灰色~ 淡褐色	密	外面:口縁~体部回転ナデ、天井部ヘラ切り→ヘラケズリ 内面:口縁~体部回転ナデ、天井部ナデ	内外面一部自然降灰
388	159	SK8	須恵器 坏	ほぼ完形	口径:12.2 器高:5.2 底径:4.0	良	灰色	密 白色粒	外面:口縁~体部回転ナデ、底部ヘラ切り→ヘラケズリ 内面:口縁~体部回転ナデ、底部指頭調整→ナデ	
389	161	SK19	土師器 坏	破片	口径(13.2) 器高(2.3)	良	橙褐色	密 白色粒	外面:口縁~体部調整不明、底部ヘラケズリ 内面:調整不明	内外面赤彩
390	165	SB4 P66	土師器 甕	口頸部 破片	口径(25.1) 器高(3.6)	良	淡黄褐色~ 淡橙褐色	やや密 石英・白色粒	外面:口頸部指頭調整→ナデ 内面:口頸部ナデ、肩部ヘラケズリ	外面煤付着
391	168	SB5 P54	土師器 坏	ほぼ完形	口径:11.8 器高:3.3 底径:7.4	良	橙褐色	密 角閃石・白色粒	外面:口縁~体部回転ナデ、底部ヘラ切り・指頭押圧 内面:口縁~体部回転ナデ、底部指頭押圧→ナデ	
392	168	SB5 P54	土師器 坏	口縁部 破片	口径(13.3) 器高(2.0)	良好	淡橙褐色	密	内外面:回転ナデ	
393	168	SB5 P54	須恵器 坏	ほぼ完形	口径:13.2 器高:4.2 底径:8.8	良	灰色	密 白色粒	外面:口縁部回転ナデ、体部ヘラケズリ→回転ナデ、底部回転糸切り 内面:回転ナデ	体部焼成前穿孔 外面口縁部・内面 自然降灰
394	171	SS1 上層	土師器 甕	口縁~肩 部1/4	口径(19.4) 器高(4.6)	良	橙色	密 石英	外面:横ナデ 内面:口頸部横ナデ、肩部指頭調整・ヘラケズリ→ナデ	
395	171	SS1 上層	土師器 甕	口縁~肩 部1/6	口径(24.6) 器高(5.2)	良	橙色	密 雲母・石英	外面:口縁部横ナデ、肩部指頭調整→縦ハケメ 内面:口縁部横ナデ、頸部以下指頭調整・ヘラケズリ→ナデ	内面コゲ
396	171	SS1 中層	土師器 甕	口縁~肩 部1/8	口径(28.2) 器高(7.6)	良	橙色	密 雲母・石英	外面:口縁部横ナデ、頸部縦ハケメ→工具による横ナデ、肩部ナデ 内面:口縁部横ナデ、頸部指頭調整→ナデ、肩部ヘラケズリ	外面口縁部工具痕

397	171	SS1 上層	土師器 甕	口縁～肩 部 破片	口径(32.6) 器高(4.8)	良	外面:黒茶色 内面:灰茶色	密 石英	外面:ナデ 内面:口頭部ナデ、肩部ヘラケズリ	外面頭部一部煤付 着
398	171	SS1 上層	須恵器 長頸壺	頸部 4/5	器高(9.8)	良好	暗灰黄色～ 黒褐色	密	外面:回転ナデ 内面:頸部上半回転ナデ、下半指頭調整、肩部回転ナデ	内外面自然降灰
399	171	SS1 上層	須恵器 蓋 転用硯	天井部 1/2	器高(1.6)	良好	灰褐色	密	外面:回転ナデ 内面:磨耗	
400	171	SS1 上層	須恵器 蓋	口縁部 1/8	口径(11.4) 器高(2.2)	良好	青灰色	密	内外面:回転ナデ	外面自然降灰?
401	171	SS1 上層	須恵器 坏	1/3	口径(12.6) 器高(4.2) 底径(7.8)	良好	青灰色	密	外面:口縁～体部回転ナデ、底部回転糸切り→ナデ 内面:口縁～体部回転ナデ、底部ナデ	
402	171	SS1 中層	土製品 支脚	1/3	器高(9.3)	良	橙色	密 石英・白色 粒	全体に指頭調整	突起部長8.0cm 突起部幅5.5cm
403	172	SS2	土師器 坏	底部 1/6	器高(1.8) 底径(6.8)	良	橙色	密 雲母・砂粒	内外面ナデ	内外面茶系赤彩
404	172	SS2	土師器 坏	底部 1/3	器高(1.0) 底径(6.0)	良	橙色	密 雲母・石英	外面:ヘラケズリ→ナデ・ヘラミガキ 内面:ナデ→ヘラミガキ	内外面赤彩
405	172	SS2 下層	土師器 坏	底部 1/4	器高(1.7) 底径(9.0)	良	橙色	密 雲母・白色 粒	外面:ナデ、貼付高台 内面:ハケメ・ヘラミガキ	高台内面以外茶系 赤彩
406	172	SS2 床面直上	土師器 甕	口縁～頸 部 破片	口径(27.6) 器高(5.5)	良	灰褐色	密 雲母・石英	外面:口縁部横ナデ、頸部縦ハケメ→ナデ 内面:口縁部横ナデ、頸部指頭調整、肩部ヘラケズリ	外面頭部煤付着
407	172	SS2	須恵器 高坏	坏部 1/5	口径(10.8) 器高(2.9)	不良	黄灰白色	やや粗	外面:口縁～体部回転ナデ、底部ヘラ切り→ナデ 内面:回転ナデ	
408	172	SS2 床面直上	土師器 移動式甕	庇部	器高(8.1) 幅(17.2) 厚さ(8.4)	良	橙色	密 雲母・石英	外面:指頭調整・ナデ 内面:ナデ・	
409	172	SS2 床面直上	土師器 移動式甕	袖部	器高(13.0) 幅(5.5) 厚さ(3.3)	良	黄橙色	密	外面:ナデ・指頭調整 内面:指頭調整・ハケメ	
410	172	SS2 下層	土製品 舟?	舳	長さ(4.0) 高さ(3.4) 幅(2.3)	良	褐色	密 石英・白色 粒	両側面ヘラケズリ→指頭調整、上面ヘラケズリ、舳指頭調 整	赤彩?
411	173	SS3	土師器 坏	底部 1/5	器高(1.7) 底径(10.0)	良	橙色	密 雲母・白色 粒	外面:調整不明 内面:指頭調整・ナデ	内外面赤彩
412	173	SS3	土師器 甕	体部 破片	器高(4.1)	良	橙色	密 砂粒	外面:叩き目→ハケメ 内面:指頭調整・ナデ	
413	173	SS3 床面直上	土師器 甕	口縁～肩 部 1/4	口径(21.8) 器高(8.9)	良	黄橙色	密 砂粒多量	外面:口頭部横ナデ、肩部指頭調整→縦ハケメ 内面:口頭部横ナデ、肩部ヘラケズリ	
414	173	SS3 上層	土師器 甕	口頭部 1/8	口径(25.2) 器高(3.0)	良	浅黄橙色	密 雲母・砂粒	外面:口縁部横ナデ、頸部指頭調整・ハケメ 内面:横ナデ	
415	173	SS3	土師器 甕	口頭部 1/10	口径(25.6) 器高(2.6)	良	橙色	密 雲母・砂粒	内外面:横ナデ	
416	173	SS3	須恵器 蓋	1/4	口径(15.0) 器高(3.0)	良好	青灰色	密	外面:口縁～体部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ 内面:口縁～体部回転ナデ、天井部ナデ	
417	173	SS3	須恵器 蓋	1/4	口径(14.8) 器高: 2.7	良好	灰褐色	密	外面:回転ナデ 内面:口縁～体部回転ナデ、天井部ナデ	外面自然降灰
418	173	SS3 下層	須恵器 坏 転用硯	2/3	口径(14.2) 器高: 5.4 底径(8.6)	良好	青灰色	密	外面:口縁～体部回転ナデ、底部ヘラ切り→指頭調整、貼 付高台 内面:口縁～体部回転ナデ、底部ナデ	
419	173	SS3 上層	須恵器 坏	破片	口径(13.8) 器高(3.3)	良好	青灰色	密	外面:口縁～体部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ 内面:口縁～体部回転ナデ	
420	173	SS3 床面直上	ミニチュ ア土器 坏	ほぼ完形	口径: 3.9 器高: 2.4 底径: 1.4	良	褐色	密	内外面:指頭調整→ナデ	
421	173	SS3 床面直上	ミニチュ ア土器 坏	ほぼ完形	口径: 5.3 器高: 3.1 底径: 1.7	良	淡褐色	密 石英・白色 粒	内外面:指頭調整→ナデ	
422	173	SS3 床面直上	ミニチュ ア土器 高坏	完形	口径: 3.3 器高: 4.8 底径: 2.4	良	淡褐色	密	内外面:指頭調整→ナデ、脚部ヘラ状工具による刺突文2 個	
423	173	SS3 床面直上	ミニチュ ア土器 高坏	脚部	器高(2.7) 底径: 2.6	良	黄橙色	密 石英・白色 粒	外面:指頭調整、底面ナデ 内面:指頭調整	外面工具痕
424	176	SS4	土師器 甕	体部 破片	器高(4.1)	良	橙色～黒褐 色	密	外面:叩き目 内面:指頭調整・ナデ	外面煤付着
425	176	SS4 床面直上	須恵器 蓋	完形	口径:14.1 器高: 3.3	良	青灰色	密	外面:口縁～体部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ、つま み部ナデ 内面:口縁～体部回転ナデ、天井部ナデ	
426	183	SS23 P5	須恵器 蓋	口縁部 1/5	口径(12.8) 器高(2.4)	良好	灰色	密	内外面:回転ナデ	
427	183	SS23 P132	須恵器 蓋	破片	口径(11.6) 器高(1.8)	良好	青灰色	密	内外面:回転ナデ	
428	183	SS23 P132	須恵器 坏	口縁～体 部 1/5	口径(12.8) 器高(3.2)	良好	青灰色	密	内外面:回転ナデ	内面口縁部タール 付着
429	183	SS23 床面直上	須恵器 坏	破片	口径(13.0) 器高(1.9)	良	灰茶色	密	内外面:回転ナデ	内面口縁部タール 付着
430	183	SS23 P98	須恵器 坏	破片	口径(10.8) 器高(2.1)	良好	青灰色	密	内外面:回転ナデ	
431	184	SD5	土師器 坏	1/6	口径(13.7) 器高(4.7)	やや良	黄灰白色	密 雲母・石英	外面:口縁部横ナデ、体部下半ヘラケズリ→ナデ 内面:横ナデ	
432	188	SS26 床面直上	土師器 甕	1/3	口径(18.2) 器高:16.9 胴径(19.0)	良好	淡橙褐色	密 角閃石・雲 母・石英	外面:口頭部横ナデ、体部ハケメ 内面:口頭部横ハケメ、体部ヘラケズリ→ナデ	外面一部煤付着
433	188	SS26 中層	土師器 甕	口縁～体 部 1/4	口径(15.8) 器高(13.0) 胴径(16.8)	やや良	淡橙褐色	密 角閃石・石 英	外面:調整不明 内面:口縁部調整不明、体部ヘラケズリ	
434	188	SS26 下層	土師器 甕	口縁～体 部 1/6	口径(19.2) 器高(9.6) 胴径(20.2)	良	橙褐色	密 角閃石・雲 母・石英	外面:口縁部横ナデ、頸部縦ハケメ→ナデ、体部縦ハケメ 内面:口頭部横ナデ、体部斜めヘラケズリ	
435	188	SS26 床面直上	土師器 甕	口縁～体 部 1/8	口径(15.9) 器高(7.4)	良	淡褐色	密 石英・白色 粒	外面:口縁部横ナデ、頸部以下縦ハケメ 内面:口頭部横ナデ、肩部以下横ヘラケズリ	

436	188	SS26 中層	土師器 甕	口頸部 1/8	口径(33.2) 器高(7.7)	やや良	褐色	やや密 雲母・石英	外面:調整不明 内面:口頸部調整不明、肩部ヘラケズリ	外面頸部煤付着
437	188	SS26 上層	土師器 甕	口縁部 破片	口径(26.8) 器高(3.9)	良好	淡橙褐色	密 石英・白色 粒	外面:口縁部横ナデ、頸部指頭調整・縦ハケメ 内面:口縁部横ナデ、頸部横ハケメ	
438	188	SS26 上層	土師器 甕	口頸部 1/8	口径(15.6) 器高(3.7)	良好	橙褐色	密 白色粒	外面:指頭調整→ナデ 内面:ナデ	
439	188	SS26	土師器 甕	口頸部 破片	口径(14.8) 器高(2.8)	やや良	淡橙褐色～ 淡褐色	やや密 雲母・石英	外面:横ナデ 内面:口頸部横ハケメ→ナデ、肩部横ヘラケズリ	
440	188	SS26	土師器 甕	口縁部 破片	口径(23.7) 器高(3.4)	良好	淡橙褐色	密 雲母・石英	外面:横ナデ 内面:横ハケメ→ナデ	内面コゲ
441	188	SS26	土師器 甕	口縁部 破片	口径(22.6) 器高(3.0)	良	淡褐色	密 石英・白色 粒	外面:調整不明 内面:ハケメ→ナデ	
442	188	SS26	土師器 坏	1/8	口径(15.8) 器高: 5.0	良	淡黄褐色	密 石英・白色 粒	外面:口縁部横ナデ、体部以下ヘラケズリ→ナデ 内面:ナデ	全面茶系赤彩
443	188	SS26 中層	土師器 皿	1/3	口径(15.8) 器高: 2.3	良好	橙褐色	密 雲母・石英	内外面:ナデ	全面茶系赤彩
444	188	SS26	手捏ね 土器	底部 1/4	器高(1.3) 底径(4.0)	良好	淡褐色	密 石英・白色 粒	外面:ナデ、底面指頭調整 内面:指頭調整・ナデ	
445	188	SS26 下層	土師器 移動式甕	掛口 1/8	口径(21.0) 器高(5.5)	良好	淡褐色	密 雲母・石英	外面:指頭調整・ハケメ→ナデ 内面:掛口部指頭調整・ヘラケズリ→ナデ、肩部ハケメ	
446	188	SS26 上層	須恵器 坏	1/6	口径(9.6) 器高: 3.3 底径(6.6)	良好	青灰色	密 白色粒	外面:口縁～体部回転ナデ、底部ヘラ切り→ナデ 内面:口縁～体部回転ナデ、底部ナデ	外面底面焼成前線 刻
447	188	SS26 中層	須恵器 蓋	1/4	口径(11.8) 器高(3.1)	良好	青灰色	密	内外面:回転ナデ	外面自然降灰
448	188	SS26	須恵器 蓋	破片	口径(12.8) 器高(1.9)	良好	灰色	密	内外面:回転ナデ	外面自然降灰
449	188	SS26	須恵器 蓋	破片	口径(10.8) 器高(2.1)	良好	青灰色	密	外面:口縁～体部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ	
450	188	SS26	須恵器 坏	破片	口径(11.8) 器高(2.4)	不良	灰色	やや密	外面:口縁～体部回転ナデ、底部ヘラ切り→ナデ 内面:回転ナデ	
451	188	SS26	須恵器 坏	破片	口径(9.8) 器高(1.8)	良好	灰色	密	内外面:回転ナデ	外面自然降灰?
452	188	SS26 上層	須恵器 坏	底部 1/8	器高(2.2) 底径(8.8)	良好	暗茶褐色	密 白色粒	外面:回転ナデ、貼付高台 内面:ナデ	外面自然降灰
453	188	SS26 上層	土師器 移動式甕	把手部	長さ(5.0) 幅 (4.5) 厚さ(4.0)	良	淡橙褐色	密 雲母・石英	ヘラケズリ・ハケメ・指頭調整	
454	188	SS26 下層	土師器 移動式甕	把手部	長さ(4.2) 幅 (4.5) 厚さ(4.0)	良	淡黄褐色～ 淡橙褐色	密 石英・白色 粒	外面:ハケメ・工具によるナデ・指頭調整 内面:ヘラケズリ	
455	188	SS26 床面直上	土師器 移動式甕	袖部	器高(9.7) 底径(38.2)	良	淡黄褐色～ 淡橙褐色	密 角閃石・雲 母・石英	外面:ハケメ、底面指頭調整・ヘラケズリ 内面:ヘラケズリ	
456	190	SS27 中層	土師器 鉢	口頸部 1/8	口径(31.3) 器高(3.9)	良好	褐色	密 雲母・白色 粒	外面:口縁端部横ナデ、頸部指頭調整・ハケメ→ナデ 内面:指頭調整・ハケメ→ナデ	
457	190	SS27	土師器 甕	口頸部 破片	口径(23.0) 器高(2.9)	良好	外面:灰褐色 内面:褐色	密	外面:指頭調整・ハケメ 内面:指頭調整→ナデ	
458	191	SS28	土師器 直口壺	口頸部 1/8	口径(10.6) 器高(4.7)	良好	外面:灰褐色 内面:褐色	密	外面:指頭調整・ナデ→ハケメ 内面:指頭調整・ナデ→ヘラミガキ	
459	191	SS28 床面直上	土師器 甕	口頸部 破片	口径(32.2) 器高(3.3)	良好	褐色	密	外面:口縁部指頭調整・ナデ、頸部ハケメ 内面:口頸部指頭調整・ナデ、肩部ヘラケズリ	
460	191	SS28 中層	土師器 甕	口頸部 破片	口径(27.2) 器高(6.1)	良好	橙褐色	密 雲母・白色 粒	外面:ハケメ 内面:口頸部ナデ、肩部ヘラケズリ	
461	191	SS28 床面直上	土師器 甕	口縁～体 部1/8	口径(14.6) 器高(9.2)	良好	橙褐色～ 褐色	密	外面:口頸部指頭調整・ナデ、頸部以下ハケメ 内面:口頸部指頭調整・ナデ、肩部以下ヘラケズリ	
462	191	SS28 下層	須恵器 甕	口縁部 1/4	口径(19.4) 器高(3.7)	良好	暗灰白色	密	内外面:回転ナデ	内外面自然降灰
463	193	SS30 (新)	土師器 甕	口縁～体 部 破片	口径(13.9) 器高(10.1) 胴径(15.4)	良	褐色	密 石英・白色 粒	外面:口頸部横ナデ、体部縦ハケメ 内面:口頸部横ナデ、肩部以下ヘラケズリ	
464	193	SS30 (新)	土師器 甕	口頸部 破片	口径(23.8) 器高(4.6)	良	橙褐色	密 石英・白色 粒	外面:指頭調整・縦ハケメ 内面:横ハケメ、肩部ヘラケズリ	
465	193	SS30 (古)	土師器 甕	口頸部 破片	口径(17.4) 器高(3.9)	良	褐色	密 石英・白色 粒	外面:口縁端部横ナデ、頸部指頭調整→ナデ 内面:口頸部指頭調整→ナデ、肩部横ヘラケズリ	外面炭化物付着
466	193	SS30 (古)	須恵器 蓋	破片	口径(11.6) 器高(2.6)	良好	灰色	密	外面:口縁～体部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ 内面:口縁～体部回転ナデ、天井部ナデ	
467	195	SD7	土師器 坏	底部 1/4	器高(1.4) 底径(6.8)	やや良	橙褐色	密	外面:回転ナデ、底面回転糸切り 内面:体部回転ナデ、底部ナデ	
468	195	SD7 下層	土師器 坏	ほぼ完形	口径:11.4 器高:5.8 底径:6.5	良	褐色	密 石英・白色 粒	外面:口縁～体部回転ナデ、底面指頭押圧、貼付高台 内面:ナデ、底部指頭押圧	
469	195	SD7 床面直上	土師器 坏	1/3	器高(5.4) 底径(8.2)	良	褐色～ 赤褐色	密 石英・白色 粒	外面:体部回転ナデ、底面指頭押圧、貼付高台 内面:回転ナデ、底部指頭押圧→ナデ	高台内面以外赤彩
470	195	SD7	土師器 坏	2/3	器高(4.9) 底径(8.0)	良	褐色	密 石英・白色 粒	外面:体部回転ナデ、底面ヘラ切り→指頭押圧・ナデ、貼 付高台 内面:回転ナデ	
471	195	SD7 下層	土師器 甕	1/3	口径(26.3) 器高(20.1) 胴径(25.4)	良	褐色～ 橙褐色	密 石英・白色 粒	外面:口縁部ナデ、頸部指頭調整、体部ヘラケズリ→ハケ メ 内面:口頸部ナデ、体部横ヘラケズリ	外面体部層状炭化 物付着
472	195	SD7 下層	土製品 支脚	1/4	器高(8.8) 底径(12.0)	良	橙褐色	密 石英・白色 粒	外面:ヘラケズリ→指頭調整→ナデ 内面:ヘラケズリ→指頭調整	
473	195	SD7	須恵器 壺	頸部～体 部 1/4	器高(20.0) 胴径(19.4)	良好	灰色	密	外面:口頸部回転ナデ、肩部ヘラケズリ→ナデ、体部ナデ 内面:口頸部回転ナデ、体部指頭調整・ナデ	
474	197	SK18 土坑A	土師器 甕	口縁～肩 部 1/10	口径(35.6) 器高(7.7)	良	褐色	密 石英・白色 粒	内外面:指頭調整・ハケメ	

475	197	SK18 土坑A	土師器 坏	1/2	口径:10.5 器高:3.8 底径:4.7	良	淡橙褐色	密 石英・白色 粒 やや粉質	外面:口縁~体部回転ナデ、底面静止糸切り 内面:口縁~体部回転ナデ、底部ナデ	
476	197	SK18 土坑A	土師器 坏	ほぼ完形	口径:10.3 器高:4.4 底径:5.1	良	淡橙褐色	密 石英・白色 粒 やや粉質	外面:口縁~体部回転ナデ、底面回転糸切り 内面:口縁~体部回転ナデ、底部ナデ	
477	197	SK18 土坑A	土師器 坏	破片	口径(9.6) 器高:4.1 底径:4.8	やや良	淡橙褐色	密 石英・白色 粒 やや粉質	調整不明	
478	197	SK18 土坑A	土師器 坏	2/3	口径:10.2 器高:4.0 底径:4.7	良	淡橙褐色~ 淡黄褐色	密 石英・白色 粒 やや粉質	外面:口縁~体部回転ナデ、底面回転糸切り→板状圧痕 内面:口縁~体部回転ナデ、底部ナデ	
479	197	SK18 土坑A	土師器 坏	口縁~体 部 1/6	口径(11.8) 器高(3.0)	良	淡橙褐色	密 石英・白色 粒 やや粉質	内外面:回転ナデ	
480	197	SK18 土坑A	土師器 坏	体部~底 部 1/4	器高(3.4) 底径(5.1)	やや良	淡橙褐色	密 白色粒 やや粉質	外面:調整不明、底面板状圧痕 内面:調整不明	
481	197	SK18 土坑A	土師器 坏	1/2	口径(10.0) 器高:2.9 底径(4.9)	良	灰褐色	密 石英・白色 粒 やや粉質	外面:口縁~体部回転ナデ、底面回転糸切り 内面:口縁~体部回転ナデ、底部ナデ	
482	197	SK18 土坑A	土師器 坏	1/2	口径(11.0) 器高:3.3 底径(5.4)	良好	淡橙褐色	密 石英・白色 粒 やや粉質	外面:口縁~体部回転ナデ、底面回転糸切り 内面:口縁~体部回転ナデ、底部ナデ	
483	197	SK18 土坑A	土師器 坏	口縁~体 部 1/6	口径(11.7) 器高(2.8)	良	淡橙褐色	密 石英・白色 粒 やや粉質	内外面:回転ナデ	
484	197	SK18 土坑A	土師器 坏	ほぼ完形	口径:10.7 器高:4.3 底径:5.3	良好	外面:橙褐色 内面:黄褐色	密 石英・白色 粒 やや粉質	外面:口縁~体部回転ナデ、底面回転糸切り 内面:口縁~体部回転ナデ、底部ナデ	
485	197	SK18 土坑A	土師器 坏	ほぼ完形	口径:13.2 器高:5.4 底径:6.1	良	橙褐色	密 石英・白色 粒 砂質	外面:口縁~体部回転ナデ、底面静止糸切り 内面:口縁~体部回転ナデ、底部ナデ	
486	197	SK18 土坑A	土師器 坏	口縁~体 部 1/8	口径(11.9) 器高(3.0)	良好	灰褐色	密 やや粉質	内外面:回転ナデ	
487	197	SK18 土坑A	灯明皿	完形	上端径:8.7 器高:2.6 下端径:6.1	良好	灰褐色	密 雲母・石英 やや粉質	外面:回転ナデ、貼付高台 内面:回転ナデ	土師器転用 外面底部煤・ター ル付着
488	197	SK18 土坑A	手捏ね 土器	口縁部 破片	口径(4.8) 器高(1.9)	良	橙褐色	密 石英・白色 粒	指頭調整・ナデ	
489	199	SX1	土師質土 器 塊	ほぼ完形	口径:12.8 器高:3.7 底径:5.6	良	黄灰白色	密 石英・砂粒	外面:口縁~体部回転ナデ、底面静止糸切り 内面:口縁~体部回転ナデ、底部ナデ	

遺構出土鉄製品観察表

遺物 No	挿図 No	遺構・地区 出土層位	種類	部位 残存率	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	材質	備考
F1	29	SS35床面直上	鏃	ほぼ完形	全長(148) 刃部:110 茎部(38)	刃部:22 茎部:6	刃部:2 茎部:2	38.6	鉄	
F2	47	SI3	鏃	1/2	(56)	(7)	(5)	12.5	鉄	
F3	47	SI3上層	刀子	破片	(17)	(10)	(3)	1.7	鉄	茎部
F4	62	SI8上段	刀子	破片	(32)	(17)	(2)	4.2	鉄	
F5	70	SS6中層	刀子	1/2	全長(86) 刃部(70) 茎部(16)	刃部:15 茎部:12	刃部:3 茎部:3	25.1	鉄	
F6	108	SI10床面直上	鏃	1/3	(153)	(31)	(4)	64.6	鉄	
F7	112	早里17号墳 周溝下層	刀子	1/2	全長(85) 刃部(40) 茎部(45)	刃部:11 茎部:8	刃部:3 茎部:3	2.6	鉄	
F8	122	早里18号墳 周溝上層	鏃	1/2	(77)	13	8	52.3	鉄	
F9	122	早里18号墳 周溝上層	不明鉄製品	2/3	(56)	23	3	14.1	鉄	穿孔
F10	122	早里18号墳 周溝中層	刀子?	破片	(16)	(15)	(3)	4.6	鉄	
F11	137	早里19号墳 周溝中層	棒状不明品	破片	(43)	(3)	(3)	4.3	鉄	
F12	143	早里20号墳 周溝上層	刀子?	破片	(14)	(9)	2	4.9	鉄	
F13	173	SS3	鏃先	1/3	(89)	(30)	(14)	63.9	鉄	
F14	183	SS23 P126	フック状鉄製品	ほぼ完形	43	17	4	15.9	鉄	穿孔
F15	189	SS26 下層	釘	1/2	(34)	(4)	(3)	2.9	鉄	

遺構出土石器・石製品観察表

遺物 No.	挿図 No.	遺構・地区 出土層位	種類	遺存状態	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	石材	備考
S1	25	SS29 中層	台石	1/3	(143)	(106)	48	904.7	角礫凝灰岩	廃棄後被熱
S2	27	SS34 床面直上	砥石	破片	(46)	(22)	(42)	42.5	凝灰岩	
S3	29	SS35 下層	石鎌	完形	23	18	4	1.1	黒曜石	刃部角50度
S4	29	SS35 下層	楔	完形	21	11	6	1.4	黒曜石	
S5	29	SS35 下層	磨製石斧	破片	(59)	(40)	(8)	25.4	安山岩	
S6	29	SS35	台石	4/5	(207)	(118)	70	1800.0	角礫凝灰岩	廃棄後被熱
S7	36	SK27	二次加工剥片	完形	44	24	9	6.4	黒曜石	
S8	40	SI1 上段	砥石	1/2	(86)	(78)	(54)	543.1	凝灰岩	被熱
S9	40	SI1 上層	磨石	完形	58	46	30	107.2	安山岩	
S10	40	SI1 上段	磨石・敲石	2/3	(123)	76	34	611.2	デイサイト	
S11	47	SI3 中層	砥石	完形	52	34	32	8.7	軽石	
S12	47	SI3 上層	砥石	完形	44	37	22	5.6	軽石	
S13	48	SI3 上段	砥石	1/3	(72)	(58)	58	300.5	凝灰岩	
S14	48	SI3 中層	磨石・凹石	完形	99	63	48	563.6	溶岩	
S15	48	SI3 中層	磨石・敲石	1/8	(51)	(41)	(25)	59.8	安山岩	
S16	48	SI3 中層	磨石	1/8	(40)	(40)	(38)	78.4	安山岩	
S17	48	SI3 上段	磨石・敲石	完形	158	125	23	211.7	凝灰岩	
S18	48	SI3 中層	台石	1/4	(172)	(165)	(58)	1635.5	角礫凝灰岩	
S19	48	SI3 中層	台石	1/2	(178)	(122)	76	2425.7	デイサイト	
S20	59	SI7 上層	砥石	1/2	(49)	(39)	(3)	7.3	軽石	
S21	62	SI8 下層	台石	1/2	108	(81)	(64)	610.0	角礫凝灰岩	被熱
S22	68	SS5	砥石	2/3	(42)	(20)	(14)	19.3	粘板岩	
S23	68	SS5 床面直上	台石	1/2	(143)	(132)	(44)	1141.8	デイサイト	被熱
S24	68	SS5 床面直上	台石	1/3	(159)	(127)	(123)	2754.1	デイサイト	
S25	68	SS5 床面直上	台石	1/4	(132)	(112)	(66)	1397.0	安山岩	
S26	68	SS5	台石	1/6	(135)	(80)	(47)	523.0	デイサイト	
S27	70	SS6	砥石	完形	42	42	24	5.1	軽石	
S28	70	SS6 床面直上	砥石	完形	61	45	34	15.9	軽石	
S29	70	SS6 床面直上	砥石	1/3	(52)	(36)	(21)	4.8	軽石	
S30	70	SS6 床面直上	砥石	完形	36	36	33	11.6	軽石	
S31	70	SS6 下層	砥石	1/2	(59)	56	48	267.0	角閃石安山岩	
S32	70	SS6 下層	台石	1/2	(305)	(124)	77	4580.0	角礫凝灰岩	
S33	76	SS14 下層	台石	1/3	127	(84)	41	673.5	角礫凝灰岩	
S34	76	SS14 下層	砥石	2/3	(154)	80	64	1033.5	凝灰岩	
S35	78	SS17 P33	磨石	1/2	158	(129)	50	1470.1	安山岩	
S36	78	SS17 P33	台石	2/3	(245)	(205)	84	5300.0	凝灰岩	
S37	93	SS25 下層	砥石	1/2	(117)	(89)	(86)	851.8	デイサイト	
S38	96	SS12 中層	皿?	完形	44	44	21	46.1	凝灰岩	
S39	97	SS33 床面直上	石鎌	ほぼ完形	84	49	12	54.1	デイサイト	
S40	97	SS33 中層	石鎌	1/2	123	(104)	22	338.3	安山岩	研磨痕
S41	97	SS33 下層	台石	1/4	(136)	(132)	(80)	2209.5	角閃石安山岩	
S42	104	SI6 中層	勾玉	完形	12	7	3	0.4	滑石	孔径 1mm
S43	104	SI6-P1	砥石	2/3	(62)	52	33	163.2	角礫凝灰岩	
S44	108	SI10	砥石	1/3	(106)	(35)	(25)	134.3	デイサイト	
S45	112	早里17号墳 周溝	磨石・敲石	ほぼ完形	147	107	73	1570.3	デイサイト	
S46	114	早里17号墳 SX9	標石	完形	327	174	74	4640.0	デイサイト	赤彩?
S47	119	早里17号墳 SX13	磨製石斧	ほぼ完形	(136)	44	26	228.2	珪化木	研磨痕
S48	137	早里19号墳 周溝中層	管玉未成品	完形	31	14	12	7.5	緑色凝灰岩	分割片
S49	171	SS1 中層	砥石	1/2	(82)	(65)	(41)	230.4	角礫凝灰岩	外面被熱
S50	172	SS2	砥石	完形	80	45	47	219.7	珪岩	
S51	176	SS4 竈内	砥石	2/3	(143)	(82)	58	1163.8	花崗岩	
S52	189	SS26 中層	砥石	2/3	(134)	(97)	(41)	717.8	花崗岩	被熱
S53	189	SS26 P18	砥石	破片	(76)	(50)	(51)	227.7	角閃石安山岩	
S54	189	SS26	砥石	破片	(35)	(16)	(19)	13.8	花崗岩	
S55	189	SS26 床面直上	砥石	1/3	(43)	(40)	(32)	44.6	花崗岩	上面溝状擦痕

遺構外出土突帯文土器観察表

遺物 No.	挿図 No.	地層 区 位	器 種	部 位 残存率	法 量 (cm)	焼 成	色 調	胎 土	文 様 ・ 特 徴	外面調整	内面調整	分類	備考
490	200	L-1	深鉢	破片	口径(21.0) 器高(4.7)	良好	黒茶色	密 雲母・砂粒	貼付突帯部上下押さえナデ→ ヘラ状工具によるV字刻目	捺痕の残るナデ	捺痕の残るナデ	II a2-1	
491	200	L-2	深鉢	破片	口径(20.2) 器高(6.0)	良好	茶褐色	密 石英・白色 粒	貼付突帯部上下押さえナデ→ ヘラ状工具によるV字刻目	貝殻腹縁によるナデ	貝殻腹縁によるナデ	II a2-1	
492	200	L-2	深鉢	破片	口径(25.2) 器高(4.0)	良好	灰茶色	密	貼付突帯部上下押さえナデ→ ヘラ状工具によるV字刻目	ナデ	貝殻腹縁によるナデ	II a2-1	外面煤付着
493	200	M-1	深鉢	破片	口径(22.2) 器高(3.3)	良	橙褐色	密 白色粒	貼付突帯部上下押さえナデ→ ヘラ状工具によるV字刻目	ナデ	ナデ	II a2-1	
494	200	M-1	深鉢	破片	口径(30.0) 器高(2.5)	良好	褐色	密 石英・砂粒	貼付突帯部上下押さえナデ→ ヘラ状工具によるV字刻目	ナデ	ナデ	II a2-1	
495	200	k-1	深鉢	破片	器高(3.9)	良好	橙色	密 石英	貼付突帯部上下押さえナデ→ ヘラ状工具によるV字刻目	貝殻腹縁によるナデ	指頭調整→ナデ	II a2-1	
496	200	L-1	深鉢	破片	器高(3.0)	やや良	褐色	やや粗 石英・砂粒	貼付突帯部上下押さえナデ→ ヘラ状工具によるV字刻目	ナデ	ナデ	II a2-1	
497	200	C-9	深鉢	破片	器高(4.4)	良	褐色	密 石英・白色 粒	貼付突帯部上下押さえナデ→ ヘラ状工具によるV字刻目	ヘラ状工具によるナ デ→指頭調整	ヘラ状工具によるナ デ→指頭調整	II a2-1	内傾接合
498	200	M-1	深鉢	破片	器高(4.3)	良好	橙褐色	密	貼付突帯部上下押さえナデ→ ヘラ状工具によるV字刻目	指頭調整→貝殻腹縁 によるハケメ→ナデ	指頭調整→貝殻腹縁 によるハケメ→ナデ	II a2-1	
499	200	K-1	深鉢	破片	器高(2.7)	良	褐色	密 角閃石・石 英	貼付突帯部上下押さえナデ→ ヘラ状工具によるV字刻目	ナデ	ヘラ状工具によるナ デ→指頭調整	II a2-1	
500	200	K-2	深鉢	破片	器高(2.9)	やや良	褐色	密 雲母・石英	貼付突帯部上下押さえナデ→ ヘラ状工具によるV字刻目	ナデ	調整不明	II a2-1	
501	200	L-1	深鉢	破片	器高(2.6)	良	褐色	密 角閃石・石 英	貼付突帯部上下押さえナデ→ ヘラ状工具によるV字刻目	貝殻腹縁による粗い ナデ	ヘラ状工具による横 ナデ・指頭調整	II a2-1	
502	200	L-2	深鉢	破片	器高(1.5)	良	褐色	密 石英・白色 粒	貼付突帯部上下押さえナデ→ ヘラ状工具によるV字刻目	ヘラ状工具によるナ デ	ヘラ状工具によるナ デ	II a2-1	
503	200	K-2	深鉢	破片	器高(2.8)	やや良	灰褐色	粗 石英・砂粒	貼付突帯部上下押さえナデ→ ヘラ状工具によるV字刻目	ナデ	指頭調整→ナデ	II a2-1	
504	200	K-2	深鉢	破片	器高(2.3)	良	褐色	密 白色粒	貼付突帯部上下押さえナデ→ ヘラ状工具によるV字刻目	粗いナデ	ヘラ状工具によるナ デ	II a2-1	内傾接合
505	200	K-1	深鉢	破片	器高(3.4)	良	黄灰褐色	密 白色粒	貼付突帯部上下押さえナデ→ ヘラ状工具によるV字刻目	指頭調整・ナデ	指頭調整・ナデ	II a2-1	
506	200	J-2	深鉢	破片	器高(4.3)	やや良	褐色	密 石英	貼付突帯部上下押さえナデ→ ヘラ状工具によるV字刻目	調整不明	ナデ?	II a2-1	
507	200	J-2	深鉢	破片	器高(2.0)	良好	褐色～ 橙褐色	密 石英	貼付突帯部上下押さえナデ→ ヘラ状工具によるV字刻目	ナデ	ナデ	II a2-1	
508	200	L-1	深鉢	破片	器高(2.7)	良好	灰褐色	密 石英(φ6mm)	貼付突帯部上下押さえナデ→ ヘラ状工具によるV字刻目	粗いナデ	ナデ	II a2-1	
509	200	L-2	深鉢	破片	器高(4.7)	良好	赤茶色	密 石英・白色 粒	貼付突帯部上下押さえナデ→ ヘラ状工具によるV字刻目	ナデ	ナデ	II a2-1	
510	200	L-1	深鉢	破片	器高(2.4)	良好	褐色	密	貼付突帯部上下押さえナデ→ ヘラ状工具によるV字刻目	ナデ	ナデ	II a2-1	内傾接合
511	200	J-1	深鉢	破片	器高(1.8)	良好	褐色	密 雲母・石英	貼付突帯部上下押さえナデ→ ヘラ状工具によるV字刻目	横ナデ	横ナデ	II a2-1	
512	200	K-2	深鉢	破片	器高(3.6)	良	褐色	密 石英・白色 粒	貼付突帯部上下押さえナデ→ ヘラ状工具によるV字浅い刻 目	ヘラ状工具によるナ デ	貝殻腹縁によるケズ リ	II a2-1	
513	200	K-2	深鉢	破片	器高(4.1)	良	浅黄橙 色	密 雲母・石英	貼付突帯部上下押さえナデ→ ヘラ状工具によるD字刻目	指頭調整・ナデ	指頭調整・ナデ	II a2-1	
514	200	L-1	深鉢	破片	器高(3.1)	良	橙色	密 白色粒	貼付突帯部上下押さえナデ→ ヘラ状工具によるD字刻目	ナデ	ナデ	II a2-1	
515	200	K-2	深鉢	破片	器高(2.8)	良	灰褐色	密 石英・砂粒	貼付突帯部上下押さえナデ→ ヘラ状工具によるD字刻目	横ナデ	ナデ	II a2-1	
516	200	M-2	深鉢	破片	器高(2.8)	良	黄褐色	密 砂粒	貼付突帯部上下押さえナデ→ ヘラ状工具によるD字刻目	横ナデ	ナデ	II a2-1	
517	200	K-1	深鉢	破片	器高(3.0)	良	淡褐色	密 石英・白色 粒	貼付突帯部上下押さえナデ→ 指による刻目	貝殻腹縁による粗い ナデ	ヘラ状工具によるナ デ	II a2-1	
518	200	L-2	深鉢	破片	器高(4.0)	良好	褐色	密 雲母・石英	貼付突帯部上下押さえナデ→ 二枚貝による刻目	貝殻腹縁によるナデ	指頭調整→貝殻腹縁 によるナデ	II a2-2	
519	200	M-1	深鉢	破片	器高(2.2)	良好	淡橙色 ～ 淡黄灰 色	密 雲母・褐色 粒	貼付突帯部上下押さえナデ→ ヘラ状工具によるV字刻目	横ナデ	ナデ	II a2-1	二条突帯?
520	200	L-1	深鉢	破片	器高(4.4)	良好	橙褐色 ～ 灰褐色	密	貼付突帯部上下押さえナデ→ ヘラ状工具によるV字刻目	ナデ	ナデ	II c2-2	二条突帯
521	201	K-2	深鉢	破片	口径(24.1) 器高(4.0)	良	褐色	密 雲母・石英	貼付突帯部上下押さえナデ→ ヘラ状工具による浅いV字刻目	粗い捺痕の残るナデ	指頭調整・貝殻腹縁 によるナデ	II c2	
522	201	K-2	深鉢	破片	器高(2.1)	やや良	褐色	密 砂粒	貼付突帯部上下押さえナデ→ ヘラ状工具による浅いV字刻目	ナデ	調整不明	II c2	
523	201	K-1	深鉢	破片	器高(2.0)	良	褐色	密 石英・白色 粒	貼付突帯部上下押さえナデ→ ヘラ状工具によるV字刻目	ヘラ状工具による粗 いナデ	ヘラ状工具によるナ デ	II c2	
524	201	K-2	深鉢	破片	器高(2.5)	良	褐色	密 雲母・石英	貼付突帯部強い上押さえナ デ→ヘラ状工具による浅い鋭 いV字刻目	ナデ	ヘラ状工具によるナ デ	II c2	
525	202	J-1	深鉢	破片	器高(3.6)	良好	褐色	密 白色粒	貼付突帯部上下押さえナデ→ ヘラ状工具によるV字刻目	指頭調整→横ナデ	ナデ	II d2	

526	202	J-2	深鉢	破片	器高(2.3)	良好	褐色	密 雲母・石英	貼付突帯部ヘラミガキ・下部ナデ→ヘラ状工具によるV字刻目	ナデ	貝殻腹縁による調整	II d2	
527	203	K-2	深鉢	破片	器高(3.9)	良好	褐色	密 雲母・石英	貼付突帯部上下押さえナデ	粗い擦痕の残るナデ	ナデ	III a2-1	
528	203	L-1	深鉢	破片	器高(3.3)	良好	褐色	密 雲母・石英	貼付突帯部上下押さえナデ	擦痕の残るナデ	丁寧なナデ	III a2-1	
529	203	K-2	深鉢	破片	器高(1.8)	良好	褐色～暗褐色	密	貼付突帯部上下押さえナデ	ナデ	ナデ	III a2-1	
530	203	K-2	深鉢	破片	器高(2.1)	良好	褐色～暗褐色	密	貼付突帯部上下押さえナデ	ナデ	ナデ	III a2-1	
531	203	M-1	深鉢	破片	口径(20.4) 器高(5.5)	良好	灰褐色	密 雲母・石英	貼付突帯部上下押さえナデ	貝殻腹縁による調整 →ナデ・指頭調整	貝殻腹縁による調整 →ナデ・指頭調整	III a2-1	内傾接合
532	203	G-7	深鉢	破片	器高(5.3)	良	黄橙色	密 雲母・石英	貼付突帯部上下押さえナデ	ナデ	ナデ・指頭調整	III a2-1	
533	203	L-2	深鉢	破片	器高(2.5)	良好	淡褐色	密 石英・褐色粒	貼付突帯部上下押さえナデ	粗い擦痕の残るナデ	粗い擦痕の残るナデ	III a2-1	内傾接合
534	203	J-2	深鉢	破片	器高(2.3)	良好	褐色	密	貼付突帯部上下押さえナデ	ナデ	ナデ	III a2-1	
535	203	K-2	深鉢	破片	器高(2.0)	良好	黒茶色	密 雲母・石英	貼付突帯部上下押さえナデ	ナデ	ナデ	III a2-1	
536	203	K-2	深鉢	破片	器高(2.3)	良好	褐色	密	貼付突帯部上下押さえナデ	ナデ・指頭調整	ナデ・指頭調整	III a2-1	
537	203	M-1	深鉢	破片	器高(3.5)	良好	褐色～灰褐色	密 雲母・白色粒	貼付突帯部上下押さえナデ	粗い擦痕の残るナデ	粗い擦痕の残るナデ	III a2-1	
538	203	K-2	深鉢	破片	器高(3.2)	良好	褐色～暗褐色	密 雲母・石英	貼付突帯部上下押さえナデ	粗い擦痕の残るナデ	ナデ・指頭調整	III a2-1	
539	203	M-1	深鉢	破片	器高(2.5)	良好	橙色	密	貼付突帯部上下押さえナデ	ナデ	ナデ・指頭調整	III a2-1	
540	203	K-2	深鉢	破片	器高(2.4)	良好	褐色～灰褐色	密	貼付突帯部上下押さえナデ	ナデ	ナデ	III a2-1	内傾接合
541	203	L-1	深鉢	破片	器高(3.1)	良好	褐色～暗褐色	密 雲母・石英	貼付突帯部上下押さえナデ	粗い擦痕の残るナデ	ナデ	III a2-1	
542	203	J-2	深鉢	破片	器高(3.4)	良好	赤褐色	密	貼付突帯部上下押さえナデ	粗い擦痕の残るナデ	丁寧なナデ	III a2-1	
543	203	L-2	深鉢	破片	器高(2.8)	良好	灰褐色	密	貼付突帯部上下押さえナデ	擦痕の残るナデ	ナデ	III a2-1	
544	203	L-2	深鉢	破片	器高(4.0)	良	淡橙色	密 雲母・石英	貼付突帯部上下押さえナデ	貝殻腹縁による粗い擦痕の残るナデ	貝殻腹縁による粗い擦痕の残るナデ	III a2-1	
545	203	L-2	深鉢	破片	器高(3.2)	やや良	灰褐色	密 石英・白色粒	貼付突帯部上下押さえナデ	粗い擦痕の残るナデ	粗い擦痕の残るナデ	III a2-1	
546	203	J-2	深鉢	破片	器高(3.0)	良好	褐色	密	貼付突帯部上下押さえナデ	ナデ	ナデ	III a2-1	
547	203	L-2	深鉢	破片	器高(1.8)	良好	淡褐色	密 白色粒	貼付突帯部上下押さえナデ	粗い擦痕の残るナデ	粗い擦痕の残るナデ	III a2-1	
548	203	L-2	深鉢	破片	器高(2.2)	良	灰褐色	密 雲母・石英	貼付突帯部上下押さえナデ	ナデ	ナデ	III a2-1	
549	203	E-7	深鉢	破片	器高(2.8)	良好	灰褐色	密	貼付突帯部上下押さえナデ	ヘラ状工具によるケズリ	擦痕が残るナデ・指頭調整	III a2-1	内傾接合
550	203	L-2	深鉢	破片	器高(2.3)	良好	褐色～灰褐色	密 石英・砂粒	貼付突帯部上下押さえナデ	粗い擦痕の残るナデ	丁寧なナデ	III a2-1	
551	203	L-1	深鉢	破片	器高(2.0)	良好	暗褐色	密 石英・砂粒	貼付突帯部上下押さえナデ	ナデ	ナデ	III a2-1	外面一部煤付着
552	203	M-1	深鉢	破片	器高(2.0)	良好	橙褐色	密	貼付突帯部上下押さえナデ	ナデ?	ナデ?	III a2-1	
553	203	G-6	深鉢	破片	口径(27.0) 器高(2.2)	良好	褐色	密 石英・砂粒	貼付突帯部上下押さえナデ	ナデ・指頭調整	ナデ・指頭調整	III a2-1	
554	203	L-1	深鉢	破片	口径(26.1) 器高(4.2)	良好	褐色	密 石英・砂粒	貼付突帯部上下押さえナデ	ナデ	ナデ	III a2-1	外面一部層状煤付着
555	203	J-2	深鉢	破片	口径(14.9) 器高(2.5)	良好	黄灰白色	密 石英・砂粒	貼付突帯部上下押さえナデ	調整不明	調整不明	III a2-1	
556	203	L-2	深鉢	破片	器高(2.5)	良好	褐色	密 雲母・石英	貼付突帯部上下押さえナデ	ナデ・指頭調整	ナデ・指頭調整	III a2-1	
557	203	L-3	深鉢	破片	器高(2.7)	良好	茶褐色	密	貼付突帯部上下押さえナデ	ナデ	ナデ	III a2-1	
558	203	L-1	深鉢	破片	器高(2.4)	良好	暗褐色	密 雲母・石英	貼付突帯部上下押さえナデ	ナデ	ナデ・指頭調整	III a2-1	
559	203	K-2	深鉢	破片	器高(3.0)	良好	橙褐色	密	貼付突帯部上下押さえナデ	ナデ・指頭調整	ナデ・指頭調整	III a2-1	
560	203	L-2 下層	深鉢	破片	器高(2.7)	良好	褐色～黒茶色	密 雲母・石英	貼付突帯部上下押さえナデ	ナデ	丁寧なナデ	III a2-1	
561	203	L-1	深鉢	破片	器高(1.6)	良好	褐色～暗褐色	密	貼付突帯部上下押さえナデ	ナデ	ナデ・指頭調整	III a2-1	
562	203	K-1	深鉢	破片	器高(2.1)	良好	褐色～黒茶色	密	貼付突帯部上下押さえナデ	ナデ	丁寧なナデ	III a2-1	
563	203	K-2	深鉢	破片	器高(3.9)	良好	灰褐色	密 雲母・石英	貼付突帯部上下押さえナデ	粗い擦痕の残るナデ	ナデ・指頭調整	III a2-1	
564	203	L-1	深鉢	破片	器高(2.6)	良好	褐色	密 雲母	貼付突帯部上下押さえナデ	ナデ	ナデ	III a2-1	
565	203	J-2	深鉢	破片	器高(1.5)	良好	褐色	密 石英・白色粒	貼付突帯部上下押さえナデ	調整不明	調整不明	III a2-1	
566	203	L-2	深鉢	破片	器高(1.2)	良	褐色	密 雲母・石英	貼付突帯部上下押さえナデ	ナデ・指頭調整	ナデ・指頭調整	III a2-1	
567	204	G-6	深鉢	破片	口径(28.8) 器高(2.8)	良好	褐色～暗褐色	密	貼付突帯部上下押さえナデ	ナデ・指頭調整	ナデ・指頭調整	III a2-1	
568	204	K-1	深鉢	破片	口径(22.4) 器高(3.0)	良好	灰褐色	密 雲母・石英	貼付突帯部上下押さえナデ	ナデ・指頭調整	ナデ・指頭調整	III a2-1	
569	204	J-2	深鉢	破片	口径(27.2) 器高(3.5)	良好	灰褐色	密	貼付突帯部上下押さえナデ	粗い擦痕の残るナデ	丁寧なナデ・指頭調整	III a2-1	内傾接合
570	204	L-2	深鉢	破片	口径(29.6) 器高(3.6)	良好	淡橙色	密 石英・白色粒	貼付突帯部上下押さえナデ	粗い擦痕の残るナデ	粗い擦痕の残るナデ・指頭調整	III a2-1	
571	204	L-2 下層	深鉢	破片	口径(32.0) 器高(5.1)	良好	褐色	密	貼付突帯部上下押さえナデ	擦痕の残るナデ・指頭調整	擦痕の残るナデ・指頭調整	III a2-1	

572	204	J-2	深鉢	破片	口径 (27.2) 器高 (3.9)	良好	褐色	密 石英・砂粒	貼付突帯部上下押さえナデ	捺痕の残るナデ・指頭調整	丁寧なナデ・指頭調整	Ⅲa2-1	
573	204	E-6	深鉢	破片	口径 (20.1) 器高 (6.8)	良	褐色	密	貼付突帯部上下押さえナデ	ヘラ状工具によるナデ・指頭調整	ヘラ状工具によるケズリ→ナデ・指頭調整	Ⅲa2-1	外面層状炭化物付着
574	204	J-2	深鉢	破片	口径 (18.6) 器高 (3.6)	良好	褐色～暗褐色	密 雲母・石英	貼付突帯部上下押さえナデ	ナデ・指頭調整	貝殻腹縁による調整→ナデ・指頭調整	Ⅲa2-1	
575	204	J-1	深鉢	破片	器高 (5.0)	良好	灰褐色	密	貼付突帯部上下押さえナデ	工具による調整→指頭調整・ナデ	工具による調整→指頭調整・ナデ	Ⅲa2-1	内傾接合 外面層状煤付着
576	204	L-2	深鉢	破片	器高 (3.8)	良好	褐色	密 雲母・石英	貼付突帯部上下押さえナデ	粗い捺痕の残るナデ・指頭調整	粗い捺痕の残るナデ・指頭調整	Ⅲa2-1	
577	204	J-2	深鉢	破片	器高 (3.9)	良好	褐色～灰褐色	密 石英・砂粒	貼付突帯部上下押さえナデ	粗い捺痕の残るナデ	丁寧なナデ・指頭調整	Ⅲa2-1	
578	204	K-3	深鉢	破片	器高 (2.8)	良好	褐色	密 石英・砂粒	貼付突帯部上下押さえナデ	ナデ・指頭調整	ナデ・指頭調整	Ⅲa2-1	
579	204	M-1	深鉢	破片	器高 (2.4)	良好	灰褐色	密	貼付突帯部上下押さえナデ	ヘラケズリ→指頭調整・ナデ	ヘラケズリ→指頭調整・ナデ	Ⅲa2-1	
580	204	J-2	深鉢	破片	器高 (4.6)	良好	灰褐色	密 雲母・石英	貼付突帯部上下押さえナデ	ヘラケズリ→指頭調整・ナデ	指頭調整・ナデ	Ⅲa2-1	
581	204	J-2	深鉢	破片	器高 (4.4)	良	褐色	密 石英・白色粒	貼付突帯部上下押さえナデ	調整不明	ナデ	Ⅲa2-1	
582	204	K-2	深鉢	破片	器高 (2.1)	良好	褐色	密 石英・砂粒	貼付突帯部上下押さえナデ	ナデ	ナデ	Ⅲa2-1	
583	204	J-2	深鉢	破片	器高 (2.9)	良好	褐色	密 雲母・石英	貼付突帯部上下押さえナデ	ヘラケズリ→ナデ	ナデ	Ⅲa2-1	
584	204	J-1	深鉢	破片	器高 (2.5)	良好	灰褐色	密 雲母・石英	貼付突帯部上下押さえナデ	工具による調整→指頭調整・ナデ	工具による調整→指頭調整・ナデ	Ⅲa2-1	
585	204	J-2	深鉢	破片	器高 (2.9)	良好	橙褐色	密 石英・白色粒	貼付突帯部上下押さえナデ	ナデ・指頭調整	ナデ・指頭調整	Ⅲa2-1	
586	204	J-3	深鉢	破片	器高 (4.1)	良好	褐色	密 石英・砂粒	貼付突帯部上下押さえナデ	ナデ・指頭調整	ナデ・指頭調整	Ⅲa2-1	
587	204	J-3	深鉢	破片	器高 (3.3)	良好	褐色	密 雲母・砂粒	貼付突帯部上下押さえナデ	ナデ・指頭調整	ナデ・指頭調整	Ⅲa2-1	
588	204	K-2	深鉢	破片	器高 (3.7)	良好	褐色	密	貼付突帯部上下押さえナデ	粗い捺痕が残るナデ	ナデ・指頭調整	Ⅲa2-1	
589	204	K-2	深鉢	破片	器高 (4.0)	良好	褐色～暗褐色	密 石英・砂粒	貼付突帯部上下押さえナデ	ナデ・指頭調整	ナデ・指頭調整	Ⅲa2-1	外面層状煤付着
590	204	L-1	深鉢	破片	器高 (2.7)	良好	褐色	密 雲母・石英	貼付突帯部上下押さえナデ	捺痕の残るナデ	ナデ・指頭調整	Ⅲa2-1	
591	204	L-1	深鉢	破片	器高 (3.2)	良好	褐色～暗褐色	密 雲母・石英	貼付突帯部上下押さえナデ	ナデ・指頭調整	ナデ・指頭調整	Ⅲa2-1	
592	204	J-2	深鉢	破片	器高 (2.7)	良好	灰褐色	密 石英・砂粒	貼付突帯部上下押さえナデ	ナデ・指頭調整	ナデ	Ⅲa2-1	
593	204	G-7	深鉢	破片	器高 (2.8)	良好	橙褐色	密	貼付突帯部上下押さえナデ	粗い捺痕の残るナデ	丁寧なナデ・指頭調整	Ⅲa2-1	
594	204	J-2	深鉢	破片	器高 (2.3)	良好	褐色	密	貼付突帯部上下押さえナデ	ナデ・沈線一条	ナデ・指頭調整	Ⅲa2-1	
595	204	L-2	深鉢	破片	器高 (3.2)	良好	灰褐色	密 雲母・砂粒	貼付突帯部上下押さえナデ	粗い捺痕の残るナデ・指頭調整	粗い捺痕の残るナデ・指頭調整	Ⅲa2-1	
596	204	J-2	深鉢	破片	器高 (3.5)	良好	褐色	密 雲母・石英	貼付突帯部上下押さえナデ	粗い捺痕の残るナデ	丁寧なナデ・指頭調整	Ⅲa2-1	
597	204	K-1	深鉢	破片	器高 (1.8)	良好	灰褐色	密 石英・砂粒	貼付突帯部上下押さえナデ	ナデ・指頭調整	ナデ・指頭調整	Ⅲa2-1	
598	204	J-2	深鉢	破片	器高 (1.4)	やや良	暗褐色	やや粗	貼付突帯部上下押さえナデ	ナデ	ナデ	Ⅲa2-1	
599	204	K-2	深鉢	破片	器高 (2.4)	良好	黒茶色	密	貼付突帯部上下押さえナデ	ナデ	貝殻腹縁による調整	Ⅲa2-1	外面一部煤付着
600	204	K-2	深鉢	破片	器高 (2.0)	良好	灰褐色	密	貼付突帯部上下押さえナデ	ナデ	ナデ・指頭調整	Ⅲa2-1	
601	204	J-2	深鉢	破片	器高 (3.9)	良好	褐色	密 雲母・石英	貼付突帯部上下押さえナデ	ナデ・指頭調整	ナデ・指頭調整	Ⅲa2-2	
602	204	J-2	深鉢	破片	器高 (3.9)	良好	褐色	密 石英・白色粒	貼付突帯部上下押さえナデ	ヘラケズリ→ナデ・指頭調整	ヘラケズリ→ナデ・指頭調整	Ⅲa2-2	
603	204	M-1	深鉢	破片	器高 (1.2)	良	灰褐色	密	貼付突帯部上下押さえナデ	ナデ	ナデ	Ⅲa2-2	
604	205	L-1	深鉢	破片	器高 (3.2)	良好	灰褐色	密	貼付突帯部上下押さえナデ	ヘラケズリ→ナデ	ナデ・指頭調整	Ⅲa4-1	
605	205	K-2	深鉢	破片	器高 (3.6)	良	橙褐色	密 石英・白色粒	貼付突帯部上下押さえナデ	ヘラ状工具によるナデ	ヘラ状工具によるナデ	Ⅲa4-1	内傾接合
606	205	L-1	深鉢	破片	器高 (2.0)	良好	褐色	密 雲母・石英	貼付突帯部上下押さえナデ	ヘラケズリ→ナデ	ヘラケズリ→ナデ・指頭調整	Ⅲa4-1	
607	206	L-2	深鉢	破片	口径 (22.5) 器高 (4.9)	良好	褐色	密 雲母	貼付突帯部上下押さえナデ	粗い捺痕が残るナデ・指頭調整	丁寧なナデ・指頭調整	Ⅲc2	
608	206	L-2	深鉢	破片	口径 (23.0) 器高 (4.4)	やや良	灰褐色	やや密 石英・砂粒	貼付突帯部上下押さえナデ	粗い捺痕が残るナデ	丁寧なナデ・指頭調整	Ⅲc2	
609	206	K-1	深鉢	破片	口径 (24.0) 器高 (4.1)	良好	褐色	密 雲母・石英	貼付突帯部上下押さえナデ	ナデ	ナデ・指頭調整	Ⅲc2	
610	206	L-2	深鉢	破片	器高 (3.9)	やや良	淡褐色	やや密 雲母・石英	貼付突帯部上下押さえナデ	粗い捺痕が残るナデ・指頭調整	指頭調整	Ⅲc2	
611	206	K-2	深鉢	破片	器高 (3.7)	良好	褐色	密 雲母・石英	貼付突帯部上下押さえナデ	粗い捺痕が残るナデ・指頭調整	ナデ・指頭調整	Ⅲc2	
612	206	K-1	深鉢	破片	器高 (2.7)	良好	灰褐色	密 雲母・石英	貼付突帯部上下押さえナデ	ナデ	ナデ	Ⅲc2	
613	206	L-3	深鉢	破片	器高 (3.2)	良	茶色	密 砂粒	貼付突帯部上下押さえナデ	ナデ	ナデ	Ⅲc2	
614	207	L-2	深鉢	破片	器高 (2.0)	良好	褐色	密	貼付突帯部上下押さえナデ	ハケメ	指頭調整・ヘラケズリ→ナデ	Ⅲd2	
615	207	J-1	深鉢	破片	器高 (2.5)	良好	灰褐色	密 雲母・石英	貼付突帯部上下押さえナデ	工具による調整→指頭調整・ナデ	工具による調整→指頭調整・ナデ	Ⅲd2	
616	207	K-2	深鉢	破片	器高 (2.4)	良好	褐色～暗褐色	密	貼付突帯部上下押さえナデ	ナデ	ナデ・指頭調整	Ⅲd2	

617	208	J-2	深鉢	破片	器高 (4.0)	良好	黒茶色	密 雲母・石英	口縁部端部刻み 貼付突帯部上下押さえナデ	粗い擦痕が残るナデ	丁寧なナデ・指頭調整	IVa2-1	内傾接合
618	209	L-2	深鉢	口縁～ 体部 破片	口径 (24.4) 器高 (12.6) 胴径 (24.2)	良	明黄褐色	密 角閃石・雲 母	口縁部端部刻み?、口縁部・体 部貼付突帯上下押さえナデ、 口縁部浅い刻み、突帯間4条 以上のヘラ描沈線による山形 文	ナデ	ナデ・指頭調整	中部瀬 戸内系	内傾接合
619	209	K-2	深鉢	破片	器高 (3.6)	良	黄褐色	密 石英・白色 粒	貼付突帯部上下押さえナデ、 斜め刻み、体部5条以上のヘ ラ描沈線による山形文	ナデ	ナデ・指頭調整	中部瀬 戸内系	
620	210	M-1	浅鉢	口縁～ 体部 破片	口径 (20.0) 器高 (5.4)	良好	褐色	密		貝殻腹縁によるナ デ・指頭調整	貝殻腹縁によるナ デ・指頭調整		内傾接合
621	210	E-5	浅鉢	破片	口径 (15.4) 器高 (4.4)	良好	褐色～ 黒茶色	密 雲母・石英		貝殻腹縁による調整 →ナデ	貝殻腹縁による調 整・ハケメ→ナデ		
622	210	K-2	浅鉢	口縁～ 体部 破片	口径 (15.4) 器高 (3.5)	良好	赤茶褐 色	密		ナデ	指頭調整→ナデ		
623	211	J-2	壺	頸部・ 体部 破片	胴径 (30.4)	良	橙色	密 雲母・石英	頸部一条・体部二条の貼付突 帯上下押さえナデ、刻目	横ヘラミガキ	ハケメ・指頭調整		
624	211	L-1	壺	口縁 破片	口径 (15.2) 器高 (2.5)	良好	褐色	密	貼付突帯上押さえ	ヘラミガキ	指頭調整→ナデ		
625	211	K-2	壺	頸部 破片	器高 (2.8)	良	褐色	密 石英・白色 粒	貼付突帯部上下押さえナデ→ ヘラ状工具によるV字刻目	貝殻腹縁によるナデ	貝殻腹縁によるナデ		
626	211	L-1	壺	頸部 破片	器高 (3.0)	良好	黄灰白 色	密	貼付突帯部下押さえナデ	横ヘラミガキ	指頭調整→ナデ		

遺構外出土土器・土製品観察表

遺物 No	挿図 No	遺構・地区 出土層位	器種	部位 残存率	法量 (cm)	焼成	色調	胎土	調整・文様	備考
627	212	J-2	弥生土器 甕	破片	器高 (1.8)	良好	褐色	密 雲母・白色 粒	外面：貼付突帯部下押さえナデ→具殻状工具による横ナデ →下端にヘラ状工具によるV字刻み 内面：横ナデ	遠賀川式土器
628	212	K-2	弥生土器 甕	口縁部 破片	口径 (15.9) 器高 (3.5)	良	外面：褐色 内面：橙褐色	密 雲母・石英	外面：貼付突帯部下押さえナデ 内面：指頭調整→横ヘラミガキ	外面層状煤付着 内面コケ
629	212	D-5	弥生土器 甕	口縁～体 部 1/2	口径 (27.8) 器高 (18.9)	良好	灰褐色	密	外面：口縁部ヘラ状工具による刻み、頸部指頭調整、体部 凹線8条・棒状工具による列点文・ナデ・ハケメ→ ヘラミガキ 内面：指頭調整・ヘラケズリ→ナデ	外面煤付着・一部 層状煤付着
630	212	L-1	弥生土器 甕	口縁～体 部 破片	口径 (28.2) 器高 (3.8)	良	橙色	密 雲母	外面：口縁部ヘラ状工具による刻み、頸部ハケメ、体部凹 線4条 内面：口頭部横ハケメ→ナデ、体部指頭調整→ナデ	
631	212	K-2	弥生土器 甕	口縁～体 部 破片	口径 (20.3) 器高 (4.7)	良	褐色	密 角閃石・雲 母・石英	外面：口縁部ヘラ状工具による刻み、体部指頭調整・ヘラ ミガキ→凹線3条 内面：指頭調整→ナデ	
632	212	K-1	弥生土器 甕	口縁～体 部 破片	口径 (21.6) 器高 (4.6)	良好	橙褐色	密 石英・白色 粒	外面：口縁部ヘラ状工具による刻み、頸部指頭調整→ナデ、 体部ナデ・ヘラ状工具による直線文・波状文 内面：指頭調整→ナデ	
633	212	M-2	弥生土器 甕	口縁～体 部 破片	口径 (21.2) 器高 (4.6)	良	橙色	密 雲母・石英	外面：口縁部幅広の工具による刻み、頸部横ナデ、体部縦 ハケメ→凹線5条 内面：指頭調整→ナデ	
634	212	J-2	弥生土器 甕	口縁～体 部 破片	口径 (18.6) 器高 (3.0)	やや 不良	灰褐色	密 石英・砂粒	外面：口縁部ナデ、頸部指頭調整→ヘラミガキ、体部飾 状工具による直線文 内面：ヘラミガキ	
635	212	K-2	弥生土器 甕	口縁～体 部 破片	口径 (25.9) 器高 (4.3)	良	橙褐色	密 石英・白色 粒	外面：指頭調整→縦ヘラミガキ、体部凹線1条 内面：口縁部ヘラミガキ、体部ヘラケズリ→ハケメ→ナデ	
636	212	K-1	弥生土器 甕	1/4	口径 (16.4) 底径 (5.6)	良	淡褐色	密 角閃石・雲 母	外面：指頭調整→ナデ→ヘラミガキ、底面指頭調整→ナデ 内面：指頭調整→ナデ→ヘラミガキ、底面ヘラケズリ→ナ デ	外面煤付着
637	212	J-2	弥生土器 甕	口縁～体 部 1/5	口径 (19.6) 器高 (22.7)	良	暗橙褐色	密 雲母・石英	外面：口縁部指頭調整→ナデ、体部指頭調整→ヘラミガキ 内面：指頭調整→ヘラミガキ	外面煤付着・一部 層状煤付着
638	212	J-2	弥生土器 甕	1/3	口径 (14.1) 器高：21.0 底径：5.2	良	暗橙褐色	密 雲母・石英	外面：口縁部ナデ、体部ハケメ→ヘラミガキ、底面ヘラケ ズリ→ナデ 内面：指頭調整→ヘラミガキ	
639	212	K-2	弥生土器 甕	口縁～体 部 破片	口径 (16.4) 器高 (4.5)	良	褐色	密 石英・白色 粒	外面：口縁部ナデ、頸部指頭調整、体部ハケメ 内面：口頭部指頭調整→ナデ、体部ハケメ→指頭調整	外面煤付着
640	212	K-2	弥生土器 甕	口縁～体 部 破片	口径 (21.2) 器高 (8.4)	良	暗灰色	密 角閃石・石 英	外面：ヘラミガキ、体部ヘラ状工具による連続刺突文 内面：ヘラミガキ	外面煤付着 内面コケ
641	212	J-2	弥生土器 甕	口縁～体 部 1/8	口径 (17.0) 器高 (6.1)	良	灰褐色	密 雲母・石英	外面：口縁部ナデ、体部指頭調整・ハケメ→ヘラミガキ 内面：指頭調整→ヘラミガキ	
642	212	K-1	弥生土器 甕	口縁～体 部 1/8	口径 (18.4) 器高 (8.1)	良	淡褐色	密 雲母・石英	外面：口頭部ナデ→指頭調整、体部指頭調整→ナデ→ハケ メ 内面：口縁部ナデ、体部指頭調整→ナデ→ハケメ	外面煤付着
643	212	K-2	弥生土器 甕	口縁～体 部 破片	口径 (10.0) 器高 (3.7)	良	褐色	密 石英・白色 粒	調整不明	
644	212	G-7	弥生土器 鉢	口縁～体 部 1/8	口径 (11.9) 器高 (5.7)	良好	淡橙褐色	密 角閃石・雲 母	外面：指頭調整→ヘラミガキ 内面：指頭調整・ヘラケズリ→ナデ	
645	212	K-2	弥生土器 鉢	口縁～体 部 1/5	口径 (14.4) 器高 (5.4)	良好	橙褐色	密 石英・白色 粒	内外面：指頭調整→ヘラミガキ	
646	212	J-2 K-1	弥生土器 甕	体部～底 部 1/2	器高 (12.8) 底径 (6.0)	良	外面：橙褐色 内面：灰褐色	密 角閃石・石 英	外面：ナデ→ヘラミガキ、底面ヘラケズリ→ナデ 内面：指頭調整→ナデ	
647	212	K-1	弥生土器 壺？	底部	器高 (4.1) 底径：5.0	やや良	橙褐色	密 石英・白色 粒	ヘラケズリ→ナデ	遠賀川式土器 工具痕
648	212	E-6	弥生土器 甕	底部 破片	器高 (3.7) 底径 (7.0)	良	褐色	密 角閃石・石 英	外面：指頭調整→ヘラミガキ、底面指頭調整→ナデ、貼付 高台 内面：指頭調整→ナデ	内面コケ
649	213	K-2	弥生土器 壺	口縁～体 部 1/4	口径 (14.0) 器高 (28.5) 胴径 (27.0)	良	褐色	密 角閃石・雲 母・石英	外面：指頭調整→ハケメ→ヘラミガキ、頸部～体部ハケ状 工具による列点文5条 内面：口頭部指頭調整→横ヘラミガキ、体部ヘラケズリ→ 指頭調整→ナデ	内面体部下半コケ
650	213	K-2	弥生土器 壺	口頭部 1/6	口径 (14.8) 器高 (5.7)	良好	橙褐色	密	外面：ハケメ→ヘラミガキ、頸部凹線3条以上 内面：指頭調整→ヘラミガキ	
651	213	K-2	弥生土器 壺	口頭部 1/8	口径 (14.3) 器高 (5.1)	良	橙褐色	密 雲母・石英	外面：指頭調整→ハケメ→ヘラミガキ、頸部凹線1条以上 内面：指頭調整→ヘラミガキ	
652	213	K-2	弥生土器 広口壺	口頭部 1/8	口径 (28.1) 器高 (5.8)	良	褐色	密 雲母・石英	外面：口縁部ヘラ状工具による刻み、頸部指頭調整→ハケ メ→ヘラミガキ・ハケメ状工具による斜め刺突痕 内面：指頭調整→ヘラミガキ	
653	213	J-2	弥生土器 壺	口縁部 破片	口径 (11.0) 器高 (1.1)	良好	淡灰褐色	密 石英・白色 粒	外面：口縁部斜格子文、頸部指頭調整 内面：ヘラミガキ？	
654	213	E-6	弥生土器 壺	口縁部 破片	口径 (16.2) 器高 (1.4)	良	橙褐色	密 石英・白色 粒	外面：口縁部羽状文、頸部ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	内外面赤彩
655	213	L-1	弥生土器 壺	口縁部 破片	口径 (18.0) 器高 (1.0)	良	橙色	密 雲母・白色 粒	外面：口縁部ヘラ状工具による山形文、頸部横ナデ 内面：縦ハケメ→横ナデ	
656	213	M-1	弥生土器 壺	口縁部 破片	口径 (26.6) 器高 (2.7)	良	橙色	密	外面：口縁部凹線1条→上下ヘラ状工具による刻み、頸部 横ナデ 内面：横ナデ	
657	213	K-1	弥生土器 裝飾壺	口縁部 破片	口径 (28.5) 器高 (3.5)	不良	橙褐色	密 雲母・石英	外面：口縁部飾状工具による波状文、頸部ハケメ 内面：ナデ・貼付文	内面口縁部穿孔2 個（未貫通）
658	213	E-6	弥生土器 壺	口縁部 1/10	口径 (22.0) 器高 (2.7)	良好	灰褐色	密	外面：口縁部刻み、頸部ナデ・貼付突帯2条 内面：ナデ	

659	213	K-2	弥生土器壺	口縁部 1/8	口径 (22.2) 器高 (7.0)	良	淡褐色	密 石英・白色粒	外面：調整不明・頸部貼付突帯2条 内面：調整不明	
660	213	K-2	弥生土器壺	口縁部破片	口径 (18.5) 器高 (3.0)	良	褐色	密 雲母・石英	外面：口縁部櫛状工具による直線文・頸部指頭調整→ヘラミガキ・ヘラ状工具による直線文 内面：指頭調整→ヘラミガキ	
661	213	J-2	弥生土器壺	頸部～体部 2/5	器高 (19.3) 胴径 (29.6)	良	淡黄褐色	密 石英・白色粒	外面：頸部貼付突帯→指頭押さえ、肩部ハケメ→櫛状工具による連続刺突文3条、体部ヘラミガキ 内面：ハケメ→ナデ	
662	213	L-2	弥生土器壺	肩部 1/6	器高 (11.7)	良	外面：褐色 内面：橙褐色	密 雲母・石英	外面：指頭調整→ハケメ、肩部櫛状工具による波状文・ヘラ状工具による凹線文 内面：指頭調整・ヘラケズリ	
663	213	L-1	弥生土器壺	肩部 1/10	器高 (4.4)	良	橙色	密 雲母・白色粒	外面：ハケメ・板状工具小口による押引文・横ヘラミガキ 内面：ハケメ→ヘラミガキ	
664	213	J-2	弥生土器裝飾壺	頸部破片	器高 (8.4)	良	灰褐色	密 雲母・石英	外面：縦ヘラミガキ・貼付突帯2条→指頭押さえ 内面：ハケメ・調整不明	外面一部煤付着
665	213	K-1	弥生土器裝飾壺	頸部破片	器高 (4.4)	良	灰褐色	密 雲母・石英	外面：貼付突帯→指頭押さえ・ナデ 内面：ナデ	
666	213	L-1	弥生土器壺	頸部破片	器高 (3.3)	良	浅黄褐色	密 石英	外面：ハケメ・ナデ 内面：ハケメ・ヘラケズリ→ナデ	外面頸部線刻
667	213	K-2	弥生土器壺	突帯部 1/5	器高 (1.5)	良	橙褐色	密	貼付突帯部上下押さえ・刻み	
668	213	L-1	弥生土器壺	肩部 1/6	器高 (4.3)	良	橙色	密 雲母・白色粒	外面：櫛状工具による直線文・鋸歯文？ 内面：指頭調整→ナデ	
669	213	K-2	弥生土器壺	肩部破片	器高 (3.0)	良	褐色	密 石英・白色粒	外面：貼付突帯3条・上部突帯間棒状浮文・下部突帯間竹管文？ 内面：指頭調整・ヘラケズリ	
670	214	J-2	弥生土器裝飾壺	肩部破片	器高 (4.8)	良	灰褐色	密 石英・砂粒	外面：ハケメ→櫛状工具による直線文・山形文・棒状工具による連続刺突文 内面：ハケメ	
671	214	K-1	弥生土器裝飾壺	肩部破片	器高 (4.9)	良	灰褐色	密 角閃石・石英	外面：櫛状工具による直線文・波状文 内面：ヘラケズリ	
672	214	J-3	弥生土器壺	肩部破片	器高 (4.5)	良好	淡黄褐色	密 雲母・石英	外面：ナデ 内面：頸部ナデ、肩部ヘラケズリ→ナデ	外面線刻
673	214	K-2	弥生土器短頸壺	口頸部 1/6	口径 (13.2) 器高 (4.0)	良	褐色	密 雲母・石英	外面：櫛状工具による波状文・直線文・竹管文 内面：指頭調整→横・縦ヘラミガキ	
674	214	L-1	弥生土器無頸壺	口縁～体部 破片	口径 (12.0) 器高 (2.6)	良	黄褐色	密 雲母・砂粒	外面：横ナデ 内面：口縁部横ナデ、体部横ヘラケズリ	
675	214	J-2	弥生土器無頸壺	口縁～体部 1/8	口径 (8.6) 器高 (4.2)	良	淡褐色	密 角閃石・石英	外面：指頭調整→ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ・指頭調整→ヘラミガキ	口縁部穿孔2個
676	214	L-2	弥生土器無頸壺	体部破片	器高 (2.9)	良	橙色	密 雲母・砂粒	外面：凹線？・ハケメ→ナデ・円形浮文 内面：指頭調整・ハケメ	
677	214	L-3	弥生土器無頸壺	口縁部破片	口径 (9.4) 器高 (4.2)	良	褐色	密 雲母・石英	内外面：指頭調整→ナデ	口縁部穿孔2個
678	214	K-3	弥生土器無頸壺	口縁～体部 1/5	口径 (7.7) 器高 (5.0)	良	橙色	密	外面：ヘラミガキ 内面：指頭調整→ヘラミガキ・ナデ	口縁付近穿孔2個？ 外面茶系赤彩
679	214	L-2	弥生土器甕	口縁～体部 2/3	口径 (21.5) 器高 (12.8)	良	橙色	密 雲母・石英	外面：口縁部横ナデ、頸部指頭調整、体部工具によるナデ→ヘラミガキ 内面：指頭調整→ハケメ・工具によるナデ	外面層状煤付着
680	214	J-2	弥生土器甕	口縁～体部 1/8	口径 (17.4) 器高 (6.3)	良好	淡橙褐色	密 石英・白色粒	外面：調整不明 内面：横ヘラミガキ	
681	214	K-2	弥生土器甕	口縁～体部 破片	口径 (14.6) 器高 (3.9)	良	褐色	密 石英・白色粒	外面：口縁部調整不明、体部縦ヘラミガキ 内面：横ヘラケズリ	
682	214	M-1	弥生土器甕	口縁～体部 破片	口径 (12.8) 器高 (2.8)	良	淡褐色	密 石英・白色粒	内外面：調整不明	
683	214	L-2 黒色土上面	弥生土器甕	口縁～体部 破片	口径 (26.6) 器高 (3.2)	良	灰褐色	密 雲母・石英	外面：口縁部横ナデ・ヘラ状工具による刻み、体部凹線8条 内面：指頭調整→ナデ？	
684	214	K-2	弥生土器甕	口縁～体部 破片	口径 (18.7) 器高 (3.1)	良	橙色	密 石英・白色粒	外面：口縁部横ナデ、頸部以下指頭調整→縦ヘラミガキ 内面：指頭調整→横ヘラミガキ	外面煤付着
685	214	K-2	弥生土器甕	口縁～体部 破片	口径 (19.4) 器高 (4.0)	良	橙色	密 角閃石・雲母	外面：口縁部ヘラ状工具による刻み、体部指頭調整・ヘラミガキ 内面：口頸部ナデ、体部指頭調整→ハケメ	
686	214	K-1・2	弥生土器甕	口縁～体部 1/4	口径 (19.0) 器高 (12.8)	良	暗橙褐色	密 雲母・石英	外面：口縁部横ナデ、体部ハケメ→櫛状工具による直線文、ヘラ状工具による連続刺突文 内面：口頸部指頭調整→ヘラミガキ、体部指頭調整・ハケメ	外面煤・層状煤付着
687	214	L-1	弥生土器甕	口縁～体部 1/3	口径 (15.4) 器高 (10.9)	良	橙色	密 雲母・白色粒	外面：口頸部横ナデ、体部縦ハケメ→体部下半ヘラミガキ 内面：口頸部指頭調整→ハケメ・ヘラミガキ	
688	214	M-2	弥生土器甕	口縁～体部 1/5	口径 (19.8) 器高 (15.0)	良	橙色	密 雲母・石英	外面：口頸部横ナデ、体部縦ハケメ・連続刺突文・縦ヘラミガキ 内面：指頭調整→ハケメ・ナデ→ヘラミガキ	外面一部層状煤付着
689	214	J-2	弥生土器甕	口縁～体部 破片	口径 (16.4) 器高 (12.0)	やや良	赤褐色	やや密 石英・白色粒	外面：ナデ？ 内面：指頭調整→ナデ？	内外面煤付着
690	214	J-2	弥生土器甕	口縁～体部 1/4	口径 (13.8) 器高 (10.7)	良	褐色	密 角閃石・雲母	外面：口縁部ヘラミガキ、体部ナデ・指頭調整・ハケメ・ヘラミガキ 内面：指頭調整・ナデ、体部下半ヘラケズリ・ヘラミガキ	
691	214	L-2	弥生土器甕	口縁～体部 1/4	口径 (18.4) 器高 (6.1)	良	橙褐色	密 白色粒	外面：口頸部指頭調整→ヘラミガキ、体部縦ハケメ 内面：指頭調整→ハケメ→ヘラミガキ	
692	214	J-2	弥生土器甕	口縁～体部 1/5	口径 (26.8) 器高 (9.7)	良	淡褐色	密 雲母・石英	外面：口頸部横ナデ、体部縦ハケメ 内面：口頸部横ナデ、体部指頭調整→ナデ	外面煤付着
693	214	L-1	弥生土器甕	口縁～肩部 1/5	口径 (19.8) 器高 (6.0)	良	橙色	密 雲母・砂粒	外面：口頸部横ナデ、体部指頭調整→縦ハケメ 内面：口頸部横ナデ、体部指頭調整→ナデ	
694	215	K-2	弥生土器甕	口頸部破片	口径 (19.3) 器高 (3.7)	良	褐色	密 角閃石・石英	外面：口縁部凹線4条、頸部ハケメ→ヘラミガキ・貼付突帯・ハケメ状工具による粗い刻み 内面：口頸部横ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ→ナデ	内外面赤彩

695	215	J-2	弥生土器 甕	口頸部 破片	器高 (2.7)	良	淡黄褐色	密 雲母・石英	外面：口縁部凹線5条以上→斜行文、頸部連続刺突文・凹線1条 内面：ナデ	外面赤彩
696	215	K-1	弥生土器 甕	口頸部 破片	器高 (2.8)	良	灰褐色	密 石英・砂粒	外面：口縁部凹線3条、頸部貼付突帯指頭押さえ・ナデ 内面：口頸部ナデ、肩部ヘラケズリ	
697	215	E-6	弥生土器 甕	口縁～体 部1/3	口径 (14.8) 器高 (11.2)	良好	褐色	密 雲母・石英	外面：口縁部横ナデ、頸部以下指頭調整→ハケメ 内面：口頸部指頭調整→ナデ、体部指頭調整→ハケメ	焼成後穿孔有 外面層状煤附着 オキ火上転がし痕
698	215	K-3	弥生土器 甕	口縁～肩 部1/5	口径 (16.8) 器高 (6.3)	良	灰褐色	密 石英・砂粒	外面：口頸部横ナデ、肩部ハケメ→ナデ 内面：口頸部横ナデ、肩部ヘラケズリ→ナデ	
699	215	C-9	弥生土器 甕	口頸部 破片	口径 (13.8) 器高 (5.1)	良	褐色	やや粗	外面：口縁部貝殻腹縁による波状文、頸部連続刺突文 内面：口頸部横ナデ、肩部ヘラケズリ	外面口縁部煤附着
700	215	K-2	弥生土器 甕	口頸部 1/8	口径 (25.6) 器高 (6.2)	良	褐色	密 角閃石・石 英	内外面：指頭調整→ナデ→ヘラミガキ	
701	215	E-7	弥生土器 甕	口縁～肩 部1/2	口径 (13.8) 器高 (6.8)	やや良	黄褐色	やや粗 角閃石・雲 母	外面：口縁部櫛状工具による直線文、肩部押引文 内面：口頸部横ナデ、肩部ヘラケズリ	外面口縁部煤附着
702	215	E-6	弥生土器 注口土器	注口部	口径：1.5 注口長 (7.4)	良好	灰褐色	密 雲母・石英	外面：ハケメ・ナデ	
703	215	K-1	弥生土器 甕	体部 破片	器高 (8.5)	良	灰褐色	密 石英・砂粒	外面：縦ハケメ・竹管文1条 内面：指頭調整→ナデ	
704	215	G-6	弥生土器 甕	体部 破片	器高 (4.5) 胴径 (26.0)	良	褐色	密 石英・白色 粒	外面：ハケメ→連続竹管文2条・櫛状工具による直線文 内面：指頭調整・ヘラケズリ→ナデ	
705	215	J-2	弥生土器 甕	体部 破片	器高 (5.3) 胴径 (29.2)	良好	橙褐色	密 角閃石・石 英	外面：櫛状工具による直線文・ハケ状工具端部による連続 刺突文2条・ヘラミガキ 内面：指頭調整・ハケメ→ナデ	
706	215	K-2	弥生土器 裝飾壺	肩部 破片	器高 (2.3)	良	外面：橙褐 色 内面：褐色	密	外面：櫛状工具による直線文、半葎竹管文、直線文、斜行 文 内面：ヘラケズリ→ナデ	
707	215	I-5	弥生土器 裝飾壺	体部 破片	器高 (2.4)	良好	褐色	密	外面：貼付突帯2条、櫛状工具による直線文、斜行文、爪 型刺突文、直線文 内面：ヘラケズリ→ナデ	外面赤彩
708	215	L-2	弥生土器 甕	体部 破片	器高 (2.7)	良	橙色	密	外面：ハケメ→ナデ 内面：工具によるナデ	内面粉痕有
709	215	K-2	弥生土器 甕	底部 1/5	器高 (10.2) 底径 (16.2)	良	淡褐色	密 雲母・石英	外面：ハケメ→ヘラミガキ、底面ヘラケズリ→ハケメ→ナ デ 内面：ヘラケズリ→ハケメ	
710	215	L-2	弥生土器 甕	底部 1/4	器高 (11.5) 底径 (13.4)	良	褐色～ 灰褐色	密 石英・砂粒	外面：ハケメ→ヘラミガキ、底面ヘラケズリ→ヘラミガキ 内面：縦・横ヘラミガキ、底面指頭調整	
711	215	K-1	弥生土器 甕	底部 1/4	器高 (9.3) 底径 (4.4)	良	褐色	密	外面：ハケメ、底面ヘラケズリ→ナデ 内面：指頭調整・ヘラケズリ→ナデ	外面煤附着
712	215	E-5	弥生土器 甕	底部 1/8	器高 (8.9) 底径 (4.0)	良好	灰褐色	密	外面：指頭調整→ヘラミガキ、底面ヘラケズリ→ナデ 内面：指頭調整・ヘラケズリ→ナデ	外面一部煤附着
713	215	L-2	弥生土器 甕	底部 1/3	器高 (4.2) 底径 (4.0)	良	浅黄橙色	密 雲母・石英	外面：指頭調整、底面指頭押圧→ナデ 内面：指頭押圧・指頭調整	
714	215	E-6	弥生土器 甕	底部 1/8	器高 (3.4) 底径 (7.0)	良好	外面：黒茶 色 内面：橙褐 色	密 石英・白色 粒	外面：ヘラミガキ 内面：指頭調整・ヘラケズリ→ナデ	
715	215	M-2	弥生土器 甕	底部 1/2	器高 (3.0) 底径 (8.2)	良	外面：橙色 内面：黄橙 色	密	外面：指頭調整、底面ナデ 内面：指頭調整→ナデ	外底面種子痕有
716	215	L-2	弥生土器 甕	底部 1/4	器高 (2.6) 底径 (10.0)	良	灰白色	密 雲母・石英	外面：指頭調整・ハケメ、底面指頭押圧・ナデ 内面：指頭調整	外底面粉痕有 内底面工具痕
717	215	L-2 上層	弥生土器 甕	底部 1/2	器高 (2.8) 底径 (7.6)	良	橙色	密 雲母・石英	外面：ナデ?、底面ヘラケズリ→ナデ・強い指頭押圧 内面：ハケメ・ナデ	内底面工具痕
718	215	K-2	弥生土器 甕	底部 1/6	器高 (1.0) 底径 (7.0)	良	橙褐色	密 角閃石・石 英	外面：工具によるナデ 内面：剥離調整不明	外底面粉痕3個有
719	216	J-2	弥生土器 蓋	天井部	天井部径：5.3 器高 (8.5)	良	褐色	密 雲母・石英	外面：天井部ナデ→指頭調整→ヘラミガキ、体部指頭調整 →ハケメ→ヘラミガキ 内面：指頭調整→縦・横ヘラミガキ	内外面一部コゲ・ 被熱痕 焼成前穿孔3個
720	216	J-2	弥生土器 高坏?	坏部 破片	口径 (12.8) 器高 (2.4)	良	淡褐色	密 角閃石・雲 母	外面：口縁部ヘラケズリ→ヘラミガキ、体部ナデ→ヘラミ ガキ 内面：指頭調整→ナデ→ヘラミガキ	内外面赤彩
721	216	F-5	弥生土器 高坏	坏部 破片	器高 (3.4)	良	淡褐色	密 石英・白色 粒	外面：同心円状スタンプ文4個、櫛状工具による直線文 内面：調整不明	
722	216	F-6	弥生土器 高坏	坏部 1/8	口径 (13.4) 器高 (4.9)	良	橙褐色	密 雲母・石英	内外面：指頭調整→ナデ	口縁部煤附着
723	216	E-6	弥生土器 器台	脚部 1/8	器高 (6.6) 底径 (17.6)	良	褐色	密 石英・白色 粒	外面：接合部ヘラミガキ、脚部櫛状工具による直線文 内面：指頭調整・ヘラケズリ	外面赤彩
724	216	M-1	弥生土器 器台	接合部 破片	器高 (3.6)	良	橙色	密 砂粒	外面：凹線4条 内面：ヘラケズリ	外面赤彩
725	216	E-6	弥生土器 壺?	体部 破片	器高 (4.1)	良好	赤褐色	密 石英・砂粒	外面：ハケメ調整、輪状浮文貼付 内面：ヘラケズリ→指頭調整・ナデ	
726	217	E-6	土師器 直口壺	口縁部 1/6	口径 (9.7) 器高 (5.6)	良好	橙褐色	密 白色粒・砂	内外面：指頭調整・ハケメ	
727	217	C-9	土師器 器台	受部 1/4	口径 (9.8) 器高 (5.4)	良	橙褐色	密 角閃石・雲 母	内外面：縦ヘラミガキ	
728	217	J-2	土師器 甕	口縁～体 部4/5	口径 (21.8) 器高 (15.1) 胴径 (25.6)	良好	淡褐色	密 雲母・石英	外面：口頸部ハケメ→ナデ、体部指頭調整・ハケメ 内面：口頸部ハケメ→ナデ、体部ヘラケズリ→ナデ	
729	217	M-1	土師器 甕	口縁～肩 部破片	口径 (24.6) 器高 (9.1)	良	黒色	密 雲母・白色 粒	外面：口頸部横ナデ、肩部ハケメ→ナデ 内面：口頸部剥離調整不明、肩部ヘラケズリ	
730	217	F-6	土師器 甕	口縁～肩 部1/6	口径 (25.2) 器高 (6.5)	良	橙褐色	密 石英・白色 粒	外面：ハケメ 内面：口頸部調整不明、肩部ヘラケズリ	内外面一部煤附着
731	217	B-7	土師器 甕	口縁～肩 部1/4	口径 (26.4) 器高 (8.3)	良	褐色	密 雲母・石英	外面：口縁部指頭調整・ナデ、頸部以下ハケメ 内面：口頸部指頭調整・ナデ、肩部指頭調整・ヘラケズリ	

732	217	G-5	土師器 甕	口頸部 1/8	口径(30.8) 器高(6.0)	良好	外面:橙褐色 内面:褐色	密	外面:口頸部指頭調整→ナデ、肩部ハケメ 内面:口頸部ナデ、肩部ヘラケズリ	
733	217	J-3	土師器 甕	口頸部 1/6	口径(20.0) 器高(6.6)	良好	淡橙褐色	密 石英・白色 粒	外面:横ナデ 内面:口頸部横ナデ、肩部ヘラケズリ	
734	217	F-6	土師器 甕	口縁~肩 部 破片	口径(17.6) 器高(6.8)	良	橙褐色	密 白色粒	外面:口頸部指頭調整・ナデ、肩部縦ハケメ 内面:口頸部横ナデ、肩部ヘラケズリ	
735	217	F-5	土師器 甕	口縁~肩 部 1/3	口径(19.6) 器高(6.2)	良	橙褐色	密 石英・白色 粒	外面:口頸部横ナデ、肩部縦ハケメ 内面:口頸部横ナデ、肩部ヘラケズリ	
736	217	J-2	土師器 甕	口縁~肩 部 1/5	口径(21.8) 器高(8.5)	良	黄褐色	密 角閃石・雲 母	外面:口頸部指頭調整→横ナデ、肩部指頭調整→ハケメ→ ナデ 内面:口縁部指頭調整→ナデ、肩部指頭調整→横ナデ	
737	217	E-4	土師器 甕?	体部 破片	器高(5.4)	良	暗褐色	密 角閃石	外面:縦ヘラケズリ 内面:指頭調整→ハケメ→ナデ	
738	217	J-2	土師器 甕	口頸部 1/5	口径(13.6) 器高(3.3)	良	淡褐色	密 角閃石・雲 母	外面:指頭調整・ナデ・ハケメ→ヘラミガキ 内面:口頸部ナデ→横ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ→ナデ	
739	217	K-2	土師器 坏	1/8	口径(11.0) 器高(6.1)	やや良	淡褐色	密 白色粒	内外面:調整不明	
740	217	I-5	土師器 坏	1/4	口径(12.4) 器高(4.4)	良好	橙褐色	密 雲母・砂粒	内外面:指頭調整・ナデ→ヘラミガキ	
741	217	F-6	土師器 坏	破片	口径(14.4) 器高(2.7) 底径(9.0)	良	橙褐色	密 白色粒	内外面:調整不明	内面赤彩
742	217	G-7	土師器 坏	口縁~体 部 破片	口径(17.1) 器高(3.6)	良	淡橙褐色	密 白色粒	外面:口縁~体部ヘラミガキ、体部下半ヘラケズリ→ナデ 内面:ヘラミガキ	内外面茶系赤彩
743	217	G-7	土師器 皿	破片	口径(20.8) 器高(1.7)	良	淡黄褐色	密 石英・白色 粒	外面:口縁~体部ナデ、底部ヘラケズリ→ナデ 内面:ナデ	内外面茶系赤彩
744	217	G-6	土師器 皿	2/3	口径(21.8) 器高(2.7)	良	赤褐色	密 石英・砂粒	外面:横ナデ、体部以下ヘラケズリ・指頭調整→ナデ 内面:指頭調整→ナデ	内外面赤彩
745	217	F-5	土師器 皿?	底部 破片	器高(0.7)	良	橙褐色	密 石英・白色 粒	内外面:ヘラミガキ	内外面赤彩 底面焼成後線刻
746	218	K-2	土師器 瓶	狭口部 1/8	狭口径(12.2) 器高(4.3)	良	褐色	密 角閃石・石 英	外面:狭口部横ナデ、体部指頭調整・ハケメ→ナデ 内面:狭口部横ナデ、体部ヘラケズリ→ナデ	
747	218	E-6	土師器 把手?	把手部?	長さ(5.6) 幅:0.9	良好	褐色	密	指頭調整→ナデ	
748	218	J-2	土師器 瓶?	把手部	長さ(4.4) 幅:4.7	良	褐色	密 角閃石・雲 母	指頭調整→ナデ	一部煤付着
749	218	J-3	土師器 瓶?	把手部 2/3	高さ(4.2) 幅(4.0)	良	淡褐色	密 角閃石・雲 母	指頭調整・ナデ	
750	218	J-4	土師器 瓶	把手部	長さ:3.4 幅:4.0	良	淡褐色	密 石英・白色 粒	外面:ヘラケズリ・指頭調整→ナデ 内面:ヘラケズリ	
751	218	L-2	土師器 瓶	把手部	長さ:6.0 幅:3.5	良	橙色	密 雲母・石英	外面:指頭調整・工具による調整・ナデ 内面:ヘラケズリ	被熱
752	218	L-1	土師器 瓶	把手部	長さ:3.2 幅:2.0	良	橙色	密 雲母・石英	外面:指頭調整・ハケメ	
753	218	F-6	土製品 支脚	突起部	長さ:8.5 幅:3.5	良	褐色	密 石英・白色 粒	指頭調整・ナデ	一部煤付着
754	218	J-2	土製品 支脚	突起部	長さ(7.2) 幅:3.9	良	黄褐色	密 角閃石・雲 母	指頭調整・ナデ	煤付着 被熱
755	218	K-1	土製品 支脚	突起部	長さ(7.6) 幅:3.6	良	橙褐色	密 雲母・石英	ヘラケズリ→ナデ	被熱
756	218	H-6	土製品 支脚	把手部	長さ(4.0) 幅:2.8	良	褐色	密	指頭調整・ヘラケズリ→ナデ	
757	218	F-6	土師器 移動式甕	庇部	器高(3.5) 幅(18.5) 厚さ(6.0)	良	褐色	密 石英・白色 粒	外面:工具によるナデ 内面:剥離調整不明	
758	218	F-6	土師器 移動式甕	庇部	器高(4.2) 幅(12.5) 厚さ(5.5)	良	橙褐色	密 石英・白色 粒	上面:指頭調整・工具によるナデ 下面:ヘラ状工具によるナデ 内面:剥離調整不明	
759	218	K-2	土師器 移動式甕	左袖部	器高(13.4) 幅(2.9) 厚さ(5.5)	良	褐色	密 角閃石・雲 母	外面:ヘラ状工具によるナデ・指頭調整 内面:指頭調整・ナデ	
760	218	J-3	土師器 移動式甕	左袖部	器高(12.2) 幅(5.0) 厚さ(7.0)	良	淡橙褐色	密 角閃石・雲 母	袖部外面:ハケメ→ナデ 袖部内面:ヘラ状工具によるナデ 内面:縦ヘラケズリ	
761	218	G-6	土師器 移動式甕	庇部	器高(6.0) 幅(9.2) 厚さ(6.0)	良好	灰褐色	密 雲母・石英	上面:指頭調整・ナデ→ハケメ 下面:ヘラケズリ→指頭調整・ナデ	
762	218	J-3	土師器 移動式甕	庇部	器高(5.0) 幅(11.7) 厚さ(6.1)	良	淡黄褐色	密 角閃石・石 英	上面:ナデ 下面:ハケメ→ナデ	庇下面一部煤付着
763	218	F-5	土師器 移動式甕	庇部	器高(3.3) 幅(6.1) 厚さ(6.1)	良	橙褐色	密	上面:ナデ 下面:ナデ・ヘラ状工具によるナデ 内面:ナデ	
764	218	G-7	土師器 移動式甕	裾部 破片	器高(7.2) 幅(10.0) 厚さ(1.8)	良	淡褐色~ 淡灰褐色	密 角閃石・雲 母	外面:指頭調整・ナデ、底面ナデ 内面:ヘラケズリ→ナデ	
765	219	E-6	ミニチュ ア土器 坏	ほぼ完形	口径:3.2 器高:3.5	良	褐色	密 石英・白色 粒	内外面:指頭調整→ナデ	
766	219	J-2	ミニチュ ア土器 坏	完形	口径:3.2 器高:2.3	良	橙褐色	密 角閃石・石 英	内外面:指頭調整→ナデ	
767	219	J-2	ミニチュ ア土器 坏	完形	口径:3.3 器高:2.0	良	褐色	密 石英・白色 粒	内外面:指頭調整→ナデ	

768	219	K-2	ミニチュア土器 壊	口縁 破片	口径 (4.8) 器高 (1.9)	良	褐色	密	外面：指頭調整 内面：指頭調整→ナデ	
769	219	J-2	ミニチュア土器 壊	底部 破片	器高 (1.8) 底径 (2.6)	良	黄褐色	やや密 石英・砂粒	内外面：指頭調整→ナデ	
770	219	K-1	ミニチュア土器 高坏	脚部 1/4	器高 (2.1) 底径 (4.0)	良	淡褐色	密 角閃石・石英	外面：指頭調整→ナデ 内面：ヘラケズリ→指頭調整	
771	219	E-6	ミニチュア土器 器台	ほぼ完形	口径：2.4 器高：3.2 底径：2.1	良	褐色	密 石英・白色粒	内外面：ヘラケズリ→指頭調整	
772	219	E-6	ミニチュア土器 瓶	ほぼ完形	口径：1.6 器高：4.6 底径：3.0	良	褐色	密	内外面：指頭調整→ナデ	
773	219	E-6	ミニチュア土器 竈	完形	口径：3.1 器高：4.0 幅：4.7 奥行：4.0	良	褐色	密 石英・白色粒	内外面：指頭調整→ナデ	
774	219	E-6	ミニチュア土器 支脚	ほぼ完形	器高：3.4 幅：1.9 厚さ：2.0	良	褐色	密 石英・白色粒	指頭調整→ナデ	
775	219	K-3	ミニチュア土器 不明品	ほぼ完形	器高：3.3 幅：3.7 厚さ：2.1	良	褐色	密 石英・白色粒	指頭調整→ナデ	
776	219	K-2	土製品 紡錘車？	1/2	円盤径 (4.6) 厚さ：0.4	良	黄灰白色	密 石英・白色粒	指頭調整→ナデ	穿孔径 (0.7cm)
777	219	J-3	円盤状土 製品	4/5	長径 (7.9) 短径 (7.4) 厚さ (1.1)	良	淡橙褐色	密 角閃石・雲母・石英	指頭調整	焼成前穿孔2個 工具痕
778	219	H-3	須恵器 ミニチュア土器 壊	破片	口径 (5.0) 器高：2.8	良	灰茶色	密 砂粒	内外面：回転ナデ	
779	220	D-8	須恵器 脚付壺	頸部～ 脚接合部	器高 (8.3) 胴径：13.4	良好	青灰色	密	外面：肩部回転ナデ、体部上半沈線区画の櫛状工具端部による押引文、体部下半回転ヘラケズリ→ナデ、脚部台形透し2ヶ所 内部：回転ナデ	外面肩部自然降灰 内面火ぶくれ
780	220	B-8・9	須恵器 壺	頸部～体 部1/8	器高 (11.0) 胴径 (18.6)	良好	灰色	密	外面：回転ナデ、体部上半沈線区画の櫛状工具による波状文・押引文、体部下半調整痕 内面：回転ナデ	外面肩部自然降灰
781	220	L-1	須恵器 壺	肩部 1/8	器高 (3.3)	良	灰色	密 白色粒	外面：回転ナデ・肩部円形浮文 内面：回転ナデ	外面自然降灰
782	220	H-3	須恵器 壺	頸部～体 部1/6	器高 (6.7) 胴径 (15.5)	良	灰色	密	内外面：回転ナデ	内面漆付着
783	220	F-6	須恵器 短頸壺	口縁～体 部1/4	口径 (8.0) 器高 (4.0)	良	灰色	密 角閃石	内外面：指頭調整・回転ナデ	外面自然降灰
784	220	F-5	須恵器 短頸壺	口縁～体 部1/5	口径 (9.8) 器高 (8.4)	良好	青灰色	密 白色粒	内外面：回転ナデ	外面自然降灰
785	220	F-6	須恵器 提瓶	ほぼ完形	口径 (8.0) 器高：22.1 胴径：19.0 厚さ：13.7	良	暗灰色	密 白色粒	外面：口頸部回転ナデ、体部前面・背面円形カキ目・指頭調整、把手部指頭調整・ナデ 内面：口頸部回転ナデ、体部指頭調整→ナデ	外面頸部焼成前ヘ ラ記号？ 外面自然降灰
786	220	A-7	須恵器 横瓶	口縁～肩 部1/6	口径 (12.6) 器高 (5.2)	良好	暗赤灰色	密	外面：口頸部回転ナデ、肩部平行叩き目 内面：口頸部回転ナデ、肩部当具による青海波文	
787	220	F-6	須恵器 横瓶	口頸部 1/3	口径 (13.0) 器高 (3.3)	良	灰色	密 白色粒	外面：回転ナデ 内面：口頸部回転ナデ、肩部当具による青海波文	外面頸部煤付着 内面自然降灰
788	220	K-1	須恵器 横瓶	体部 1/6	器高 (16.4)	良	灰色	密 白色粒	外面：平行叩き目→ナデ 内面：当具による青海波文	
789	220	I-5	須恵器 壺	体部 破片	器高 (9.2)	良	外面：暗灰色 内面：灰色	密 白色粒	外面：平行叩き目→ナデ 内面：当具による青海波文	土器2個付着
790	220	M-1	須恵器 壺	体部 破片	器高 (3.0)	良	灰色	密	外面：平行叩き目 内面：当具による青海波文	内面漆付着
791	221	F-5	須恵器 高坏？	坏部 1/4	口径 (10.7) 器高 (3.1)	良	灰色～ 暗灰色	密 白色粒	外面：口縁～体部回転ナデ、坏底部ヘラ切り→ナデ 内面：口縁～体部回転ナデ、坏底部ナデ	
792	221	K-1	須恵器 高坏	坏部 1/4	口径 (13.4) 器高 (3.9)	良	灰色	密 石英・白色粒	外面：回転ナデ 内面：口縁～体部回転ナデ、坏底部ナデ	
793	221	K-2	須恵器 高坏	体部～脚 部2/3	器高 (3.9)	良	灰色～ 暗灰色	密	外面：回転ナデ 内面：体部回転ナデ、坏底部ナデ、脚部回転ナデ 脚部二方透かし	外面自然降灰
794	221	K-1	須恵器 高坏	体部～脚 部2/3	器高 (7.1)	良	灰色～ 暗灰色	密 白色粒	外面：回転ナデ 内面：坏部ナデ、脚部指頭調整・回転ナデ 脚部二方線状透かし	外面自然降灰 被熱痕 透し一部未貫通
795	221	J-2	須恵器 高坏	裾部 1/8	器高 (4.0) 底径 (16.1)	良	灰色	密 白色粒	外面：回転ナデ・カキ目 内面：回転ナデ	
796	221	F-5	須恵器 蓋	1/4	口径 (11.8) 器高 (1.6)	良	灰褐色	密 石英・砂粒	外面：回転ナデ 内面：口縁部回転ナデ、天井部ナデ	
797	221	J-2	須恵器 蓋	2/3	口径 (10.0) 器高：2.8	良	灰色	密 白色粒	外面：口縁～体部回転ナデ、天井部ヘラ切り 内面：口縁～体部回転ナデ、天井部ナデ	
798	221	K-2	須恵器 蓋	1/2	口径 (9.4) 器高：3.6	良	灰色	密 石英・白色粒	外面：口縁～体部回転ナデ、天井部ヘラ切り→ナデ 内面：口縁～体部回転ナデ	
799	221	G-6・7	須恵器 蓋	1/4	口径 (16.8) 器高 (3.2)	良好	灰茶色	密	外面：口縁～体部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ→ナデ 内面：口縁部回転ナデ、天井部ナデ	
800	221	E-6	須恵器 蓋	2/3	口径 (13.8) 器高：3.0	やや良	灰色	密	外面：口縁～体部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ→ナデ 内面：回転ナデ？	
801	221	E-6	須恵器 蓋	ほぼ完形	口径：14.9 器高：3.4	良	灰色～ 暗灰色	密	外面：口縁部ナデ、体部回転ヘラケズリ、天井部回転糸切り 内面：口縁～体部回転ナデ、天井部ナデ	焼成後穿孔？
802	221	F-6	須恵器 蓋瓶用甕	天井部 1/3	器高 (1.6)	良	灰色	密 角閃石	外面：回転ナデ 内面：ナデ	口縁部打ち欠き 内面墨付着
803	221	H-3	須恵器 壊	1/4	口径 (10.4) 器高：4.0	良	灰茶色	密	外面：口縁～体部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ、底面ヘ ラ切り→ナデ 内面：口縁～体部回転ナデ、底部ナデ	

804	221	J-2	須恵器 坏	ほぼ完形	口径:10.4 器高:3.3 底径:3.2	良	灰色	密	外面:口縁~体部回転ナデ、底部ヘラケズリ→ナデ、底面 回転ナデ 内面:口縁~体部回転ナデ、底部ナデ	外面口縁~体部・ 内面口縁~かえり 部漆付着
805	221	H-6	須恵器 坏	1/4	口径(9.8) 器高:3.0 底径(6.0)	良好	灰色	密	外面:口縁~体部回転ナデ、底部ヘラケズリ→ナデ、底面 ヘラケズリ→ナデ 内面:口縁~体部回転ナデ、底部ナデ	
806	221	F-6	須恵器 坏	口縁~底 部 破片	口径(11.4) 器高(3.9) 底径(7.0)	良	灰色	密	外面:口縁~体部回転ナデ、底面回転糸切り 内面:回転ナデ	
807	221	B-9	須恵器 坏	1/2	口径(10.6) 器高:3.8 底径(7.4)	良好	青灰色	密	外面:口縁~体部回転ナデ、底面回転糸切り 内面:口縁~体部回転ナデ、底部ナデ	
808	221	G-7	須恵器 坏	3/4	口径(13.6) 器高:4.5 底径(8.0)	良	灰茶色	密	外面:口縁~体部回転ナデ、底部ヘラケズリ→ ナデ 内面:口縁~体部回転ナデ、底部ナデ	
809	221	F-6	須恵器 坏	1/6	口径(12.0) 器高:3.4 底径(8.2)	良	灰色~ 暗灰色	密	外面:口縁~体部回転ナデ、底面回転糸切り 内面:口縁~体部回転ナデ、底部ナデ	
810	221	F・G-5	須恵器 坏	1/4	口径(12.6) 器高:3.9 底径(8.4)	良好	青灰色	密 白色粒・黒 色粒	外面:口縁~体部回転ナデ、底面静止糸切り 内面:回転ナデ	
811	221	B-7	須恵器 坏	1/8	口径(11.2) 器高:3.1 底径(6.0)	良好	赤褐色	密	外面:口縁~体部回転ナデ、底面回転糸切り 内面:口縁~体部回転ナデ、底部ナデ	
812	221	G-6	須恵器 坏	3/4	口径(14.0) 器高:4.8 底径(7.6)	良好	青灰色	密	外面:回転ナデ、貼付高台 内面:口縁~体部回転ナデ、底部磨耗	
813	221	G-7	須恵器 坏	2/3	口径(14.2) 器高:5.3 底径(8.6)	良好	青灰色	密 白色粒	外面:口縁~体部回転ナデ、底面回転糸切り、貼付高台 内面:口縁~体部回転ナデ、底部磨耗	
814	221	G-7	須恵器 坏	1/2	口径(14.0) 器高:4.8 底径(8.8)	良好	青灰色	密 白色粒・砂 粒	外面:口縁~体部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ→ナデ、 底面ナデ、貼付高台 内面:口縁~体部回転ナデ、底部磨耗	
815	221	C-8・9	須恵器 坏	1/3	口径(14.6) 器高:4.7 底径(8.6)	良好	青灰色	密	外面:口縁~体部回転ナデ、底面静止糸切り、貼付高台 内面:口縁~体部回転ナデ、底部ナデ	
816	221	E-6・7	須恵器 坏	2/3	口径(13.8) 器高:5.2 底径(8.9)	良好	青灰色~ 暗灰白色	密	外面:口縁~体部回転ナデ、体部回転ヘラケズリ→ナデ、 底面回転ナデ、貼付高台 内面:口縁~体部回転ナデ、底部ナデ	外面自然降灰
817	221	C-8	須恵器 坏	4/5	口径(14.8) 器高:4.9 底径(10.9)	良好	青灰色	密	外面:回転ナデ、貼付高台 内面:回転ナデ	
818	221	M-1	須恵器 坏転用規	底部 1/2	器高(0.7) 底径(6.0)	良	灰色	密	外面:回転ナデ、底面回転糸切り 内面:回転ナデ、底部磨耗	坏転用
819	233	I-5	青磁 碗	体部 破片	器高(1.9)	良好	胎土:灰白 色 釉:灰オリー ブ	密	外面:縦櫛目文 内面:劃花文	同安窯系統I-1b類
820	233	E-6	青磁 碗	口縁~体 部 破片	口径(9.6) 器高(4.0)	良好	胎土:灰白 色 釉:灰オリー ブ	密	外面:貫入 内面:貫入	
821	233	D-6	陶器 碗	口縁~体 部 1/6	口径(16.6) 器高(5.3)	良好	胎土:灰白 色 釉:灰オリー ブ	密	外面:体部下半露胎・貫入 内面:貫入	古瀬戸中皿期
822	233	I-3	陶器 鉢	口縁~体 部 破片	口径(38.8) 器高(5.3)	良好	灰褐色	密	外面:口縁部回転ナデ、体部ヘラケズリ 内面:回転ナデ	東播焼(魚住・神 出窯)
823	233	C-6	中世須恵 器 甕	体部 破片	器高(7.9)	良	灰褐色	密 石英・白色 粒	外面:格子目状工具による叩き目 内面:ヘラケズリ→ナデ	在地系
824	233	D-6	中世須恵 器 甕	体部 破片	器高(4.0)	良	灰褐色	密 石英・白色 粒	外面:格子目状工具による叩き目 内面:ヘラケズリ→ナデ	在地系
825	233	C-6	中世須恵 器 甕	体部 破片	器高(3.4)	良	灰褐色	密 石英・白色 粒	外面:格子目状工具による叩き目 内面:ヘラケズリ→ナデ	在地系
826	233	D-6	中世須恵 器 甕	体部 破片	器高(3.3)	良	灰褐色	密 石英・白色 粒	外面:格子目状工具による叩き目 内面:調整不明	在地系
827	233	H-3	土師質土 器 鍋	頸部~体 部 破片	器高(9.7) 胴径(33.0)	良好	灰褐色	密	外面:縦・横ハケメ→指頭調整 内面:ハケメ	外面一部煤・層状 煤付着
828	233	G-3	土師質土 器 鍋	口頸部 破片	器高(3.4)	良好	灰褐色	密 雲母・石英	外面:調整不明、頸部ハケメ 内面:調整不明	
829	233	J-3	土師質土 器 鉢	体部~底 部 1/4	器高(5.2) 底径(12.2)	良	淡灰白色~ 淡灰褐色	密 白色粒	外面:調整不明 内面:回転ナデ	
830	233	D-5	土師質土 器 皿	ほぼ完形	口径(6.9) 器高:1.7 底径:3.5	良好	淡灰褐色	密 石英・白色 粒	外面:口縁~体部回転ナデ、底面静止糸切り 内面:口縁~体部回転ナデ、底部ナデ	
831	233	I-5	土師質土 器 皿	3/4	口径:7.3 器高:2.0 底径:4.0	良好	淡灰褐色	密 雲母・石英	外面:口縁~体部回転ナデ、底面静止糸切り 内面:口縁~体部回転ナデ、底部ナデ	
832	233	K-1	土師質土 器 皿	1/2	口径(9.0) 器高:1.7 底径(5.2)	良	橙褐色	密 石英・白色 粒	外面:口縁~体部回転ナデ、底面回転糸切り 内面:口縁~体部回転ナデ、底部ナデ	
833	233	F-6	土師質土 器 皿	4/5	口径:11.8 器高:3.3 底径:5.3	良	橙褐色	密	外面:口縁~体部回転ナデ、底面静止糸切り→板状圧痕 内面:口縁~体部回転ナデ、底部ナデ	
834	233	I-5	土師質土 器 皿	2/3	口径(12.3) 器高:3.0 底径:5.0	良好	灰褐色	密 石英・白色 粒	外面:口縁~体部回転ナデ、底面静止糸切り 内面:口縁~体部回転ナデ、底部ナデ	
835	233	I-6	土師質土 器 皿	体部~底 部	器高(1.6) 底径:4.1	良好	橙褐色	密 砂粒	外面:体部回転ナデ、底面静止糸切り 内面:体部回転ナデ、底部ナデ	
836	233	D-8	土師質土 器 皿	底部 1/4	器高(0.8) 底径(4.8)	良	淡褐色	密	外面:体部回転ナデ、底面回転糸切り 内面:体部回転ナデ、底部ナデ	
837	233	G-3	土師質土 器 皿	底部 3/4	器高(1.2) 底径(5.3)	良好	橙褐色	密 雲母・白色 粒	外面:体部回転ナデ、底面回転糸切り 内面:回転ナデ	

838	233	I-6	土師質土器 皿	体部~底部 1/4	器高 (1.5) 底径 (6.0)	良好	橙褐色	密 石英・白色 粒	外面：体部回転ナデ、底面回転糸切り 内面：体部回転ナデ、底部ナデ	
839	233	H-3	土師質土器 皿	体部~底部 1/2	器高 (1.7) 底径 (6.2)	良好	橙褐色	密 白色粒	外面：体部回転ナデ、底面回転糸切り 内面：体部回転ナデ、底部ナデ	
840	233	I-5	土師質土器 皿	体部~底部 1/6	器高 (1.5) 底径 (5.1)	やや良	淡橙褐色	密 石英・白色 粒	外面：体部回転ナデ、底面回転糸切り 内面：調整不明	外面底部粘土塊付着
841	233	J-2	土師質土器 皿	体部~底部	器高 (2.3) 底径：5.3	良	灰褐色	密 石英・白色 粒	外面：体部回転ナデ、底面回転糸切り 内面：体部回転ナデ、底部ナデ	
842	233	I-2	土師質土器 皿	体部~底部	器高 (2.3) 底径：5.8	良好	黄灰白色	密 石英・白色 粒	外面：体部回転ナデ、底面回転糸切り 内面：ナデ	
843	233	D-5	土師質土器 碗	体部~底部 1/8	器高 (1.8) 底径 (6.4)	良	淡橙褐色	密 石英 粉質	外面：体部回転ナデ、底面回転糸切り 内面：回転ナデ	
844	233	D-5	土師質土器 碗	体部~底部 1/6	器高 (2.8) 底径 (6.8)	良好	橙褐色	密 石英・白色 粒	外面：体部回転ナデ、底面糸切り 内面：回転ナデ	
845	234	I-6	磁器 染付皿	ほぼ完形	口径：10.0 器高：2.6 底径：5.0	良好	白色	密	外面：三方幾何学文、高台部二重圏線・畳付露胎・砂付着、 削り出し高台、貫入 内面：菊花文、貫入	肥前 内底面・口縁・高 台部使用痕顕著
846	234	L-1	陶器 灯明皿	1/5	口径 (8.7) 器高：2.1 底径 (4.7)	良好	赤褐色	密	外面：口縁部鉄軸、体部下半露胎、底面回転糸切り 内面：鉄軸	
847	234	J-3	陶器 灯明皿	底部	器高 (1.1) 底径：2.7	やや良	淡橙褐色	密	外面：体部錆軸、底面回転糸切り 内面：錆軸	内面自然降灰 内面脈付着
848	234	G-4	陶器 片口鉢	ほぼ完形	口径：19.4 器高：9.8 底径：10.0	良好	黄灰白色	密	外面：白釉、高台~底部露胎、削り出し高台 内面：白釉	石見焼 見込ハマ目痕 見込使用痕
849	234	L-3	陶器 大皿	体部~底部 1/8	器高 (5.2) 底径 (10.2)	良好	淡橙褐色	密	外面：銅緑釉、体部下半~高台部露胎、削り出し高台 内面：銅緑釉、見込軸剥	砂目積痕 使用による摩耗 二次焼成
850	234	C-10	陶器 搦鉢	体部~底部 破片	器高 (6.5) 底径 (12.4)	良	赤褐色	密	外面：体部回転ナデ、底部糸切り 内面：搦目	二次焼成
851	235	表土	須恵器 坏	口縁~体部 破片	口径 (13.0) 器高 (3.1)	不良	黄灰白色	密 白色粒	外面：口縁~体部回転ナデ、底部ヘラ切り 内面：調整不明	
852	235	表土	土製品 支脚	把手部	長さ (5.5) 幅 (4.0) 厚さ (3.5)	良好	褐色	密	外面：ヘラケズリ・指頭調整→ナデ	
853	236	表土	青磁碗	完形	口径：14.4 器高：6.8 底径：5.2	良好	胎土：淡灰 白色 釉：青緑色	密	外面：蓮弁文、貫入、削り出し高台 内面：印花文、貫入	被熱 高台内粘土粒付着
854	236	表土	青磁碗	破片	器高 (1.8)	良好	胎土：灰褐色 釉：灰オリーブ	密	外面：貫入、削り出し高台 内面：櫛目文、貫入	龍泉窯系統 I-3a 類
855	236	表土	白磁碗	口縁部 破片	口径 (18.6) 器高 (2.5)	良好	胎土：灰白 色 釉：灰オリーブ	密	外面：- 内面：-	白磁碗 V 類

遺構外出土鉄製品観察表

遺物 No	挿図 No	遺構・地区 出土層位	種 類	部 位 残存率	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重 量 (g)	材 質	備 考
F16	222	K-1	紡錘車	ほぼ完形	軸部 (109)	円盤径：68	軸部：6 円盤部：4	103.2	鉄	
F17	222	K-1	刀子	ほぼ完形	全長：227 刃部：179 茎部：48	刃部：25 茎部：13	刃部：3 茎部：4	132.6	鉄	茎部目釘孔
F18	222	K-1	雁股鎌	3/4	全長 (109) 刃部 (62) 茎部 (47)	刃部 (27) 茎部：4	刃部：3 茎部：3	19.1	鉄	
F19	222	I-3	鉈	2/3	(85)	10	4	18.4	鉄	
F20	222	E-6	不明鉄製品	ほぼ完形	64	43	7	92.8	鉄	
F21	222	K-2	釘	ほぼ完形	95	8	7	46.5	鉄	
F22	222	J-3	釘	2/3	(43)	4	4	3.7	鉄	
F23	222	I-4	釘	1/3	(25)	4	4	1.7	鉄	
F24	235	表土	刀子	ほぼ完形	全長 (226) 刃部 (182) 茎部 (44)	刃部 (22) 茎部：17	刃部：4 茎部：2	72.9	鉄	茎部目釘孔

遺構外出土石器・石製品観察表

遺物 №a	挿図 №a	遺構・地区 出土層位	種 類	遺存状態	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重 量 (g)	石 材	備 考
S56	223	I-3	石製品	完形	21	22	15	5.0	凝灰岩	
S57	223	F-4	石製品	ほぼ完形	45	37	6	13.2	花崗岩	孔径5mm
S58	223	K-1	尖頭器	完形	59	29	10	16.1	サヌカイト	
S59	223	E-6	石鎌	ほぼ完形	19	(13)	4	0.5	黒曜石	刃部角38度
S60	223	E-5	石鎌	ほぼ完形	18	(14)	3	0.5	黒曜石	刃部角53度
S61	223	M-1	石鎌	ほぼ完形	14	11	3	0.3	黒曜石	刃部角51度
S62	223	G-6	石鎌	完形	14	12	3	0.4	黒曜石	刃部角42度
S63	223	E-6	石鎌	完形	19	14	4	0.6	黒曜石	刃部角32度
S64	223	L-1	石鎌	ほぼ完形	(19)	(18)	3	0.7	黒曜石	刃部角46度
S65	223	I-4	石鎌	ほぼ完形	20	(12)	2	0.5	サヌカイト	刃部角33度
S66	223	L-2	石鎌	ほぼ完形	(24)	16	4	1.2	サヌカイト	刃部角45度
S67	223	M-1	石鎌	1/2	(13)	(8)	(3)	0.2	黒曜石	
S68	223	L-1	石鎌未成品	完形	20	14	4	0.9	黒曜石	
S69	223	F-6	スクレイパー	完形	40	28	16	8.7	黒曜石	
S70	224	E-6	スクレイパー	完形	34	25	4	3.7	サヌカイト	
S71	224	F-4	スクレイパー	完形	47	38	9	13.9	黒曜石	
S72	224	K-2	スクレイパー	完形	33	51	13	22.1	黒曜石	
S73	224	L-2	スクレイパー	完形	75	35	11	23.6	黒曜石	
S74	224	K-2	スクレイパー	完形	63	52	17	54.3	黒曜石	
S75	225	K-2	石錐	先端部欠損	(26)	13	5	1.5	黒曜石	
S76	225	E-7	楔形石器	完形	24	16	5	1.2	黒曜石	
S77	225	M-1	楔形石器	完形	28	17	6	2.6	黒曜石	
S78	225	I-5	楔形石器	完形	20	14	10	2.1	玉髄	
S79	225	J-3	楔形石器	完形	18	17	8	1.8	黒曜石	
S80	225	K-1	楔形石器	完形	34	21	11	7.0	黒曜石	
S81	225	C-7	楔形石器	完形	34	17	11	5.2	黒曜石	
S82	225	L-2 下層	楔形石器	完形	32	24	13	8.1	黒曜石	
S83	225	K-2	楔形石器	完形	41	33	10	14.5	黒曜石	
S84	225	M-2	楔形石器	完形	34	26	15	10.6	黒曜石	
S85	226	M-2	楔形石器	完形	40	31	15	17.9	黒曜石	
S86	226	K-2	二次加工剥片	完形	40	30	8	6.7	黒曜石	
S87	226	K-2	二次加工剥片	完形	29	15	3	1.3	黒曜石	
S88	226	I-5	二次加工剥片	完形	28	25	7	4.1	黒曜石	
S89	226	K-3	二次加工剥片	完形	35	29	9	8.2	黒曜石	
S90	226	L-1	石核	完形	29	20	13	6.6	黒曜石	
S91	226	L-1	石核?	完形	42	30	14	11.0	黒曜石	
S92	227	K-3	石核	完形	23	20	14	5.8	黒曜石	
S93	227	G-5	石核	完形	25	25	20	12.0	黒曜石	
S94	227	D-7	石核	完形	24	21	15	6.2	黒曜石	
S95	227	K-2	石核	完形	24	23	13	7.6	黒曜石	
S96	227	L-2	石核	完形	23	20	16	6.7	黒曜石	
S97	227	J-2	石核	完形	34	30	21	20.3	黒曜石	
S98	228	J-2	石匙	完形	83	41	7	24.6	緑色片岩	
S99	228	J-5	石匙	完形	95	68	20	109.4	安山岩	
S100	228	L-2	石鎌	1/2	(84)	(73)	(22)	165.0	安山岩	
S101	228	M-2	石鎌	1/2	(104)	(77)	(16)	121.5	安山岩	
S102	228	J-2	石鎌	2/3	(141)	(82)	(23)	271.9	安山岩	
S103	228	L-2	石鎌	2/3	(114)	(76)	(30)	265.2	安山岩	
S104	229	E-6	石鎌	2/3	(106)	(77)	(20)	197.3	安山岩	一部磨痕
S105	229	L-2	石鎌	1/2	(97)	(66)	(15)	99.5	安山岩	
S106	229	J-2	石鎌	2/3	(123)	(79)	(34)	403.3	安山岩	
S107	229	I-5	石鎌	2/3	(128)	(81)	(44)	489.4	安山岩	一部磨痕
S108	229	J-2	石鎌	1/2	(100)	(100)	(21)	240.8	安山岩	
S109	229	J-2	石鎌	1/3	(129)	(113)	(20)	414.1	安山岩	

S110	229	M-2	石楯	1/3	(76)	(67)	(22)	153.5	安山岩	
S111	229	K-3	石楯	1/4	(56)	(46)	(11)	29.5	安山岩	
S112	229	L-1	石楯	1/4	(70)	(42)	(16)	49.9	安山岩	一部磨痕
S113	230	K-2	挟入磨製石斧	2/3	(87)	42	29	167.7	結晶片岩	
S114	230	L-2	磨製石斧	1/3	(72)	(47)	(42)	143.1	テイスサイト	
S115	230	F-6	石鋸	1/4	(51)	(35)	(4)	13.2	結晶片岩	
S116	230	E-6	磨製石剣	破片	(39)	(28)	(6)	8.0	粘板岩	
S117	230	K-1	石包丁未成品	1/3	(51)	(36)	(10)	16.2	安山岩	穿孔未貫通
S118	230	G-3	砥石	ほぼ完形	35	25	10	16.2	緑色凝灰岩	
S119	230	I-5	砥石	1/3	(62)	46	20	74.8	粘板岩	
S120	230	H-6	砥石	2/3	(79)	(44)	(48)	185.0	花崗岩	
S121	230	K-1	砥石	1/2	(78)	(64)	(39)	251.4	花崗岩	
S122	230	K-2	砥石	1/4	(51)	(46)	(28)	64.8	角閃石安山岩	被熱
S123	231	L-2 下層	砥石	1/2	(71)	(61)	(47)	301.4	凝灰岩	上面溝状研磨痕
S124	231	F-4	砥石	破片	(96)	(87)	(59)	474.5	花崗岩	
S125	231	A-7	砥石	1/2	(119)	(78)	(58)	642.3	凝灰岩	
S126	231	F-6	砥石	1/6	(115)	(72)	(38)	298.3	テイスサイト	
S127	231	H-3	砥石	ほぼ完形	(183)	67	40	622.8	花崗岩	
S128	231	E-6	砥石	ほぼ完形	79	50	35	23.7	軽石	
S129	231	M-1	磨石	ほぼ完形	107	(104)	62	789.9	角閃石安山岩	
S130	231	L-1	磨石・敲石	完形	135	40	16	108.8	テイスサイト	
S131	231	M-2	磨石・敲石	ほぼ完形	130	94	88	1326.9	角閃石安山岩	
S132	232	F-6	磨石・敲石	完形	150	78	55	858.5	角閃石安山岩	
S133	232	L-2 上層	磨石・敲石	完形	95	79	74	722.0	テイスサイト	
S134	232	K-3	石錘	完形	136	82	59	847.6	角閃石安山岩	左打欠幅27mm 右打欠幅29mm
S135	232	J-2	台石	1/3	(221)	(110)	(81)	2945.3	安山岩	
S136	232	E-5	台石	2/3	(147)	(141)	(59)	1645.1	角礫凝灰岩	
S137	234	F-5	上臼	1/6	直径(35.0)	器高:7.4	供給口径(3.0)	2069.7	安山岩	上面廃棄後被熱 底面使用による磨耗

写真図版



調査前状況（南から）



調査区中央部全景

図版2



調査区遠景 (法勝寺川流域を望む)



調査区北側全景



調査区南壁土層堆積状況



中央深掘りトレンチ土層断面



SK2



SK3



SK7 半裁状況



SK10



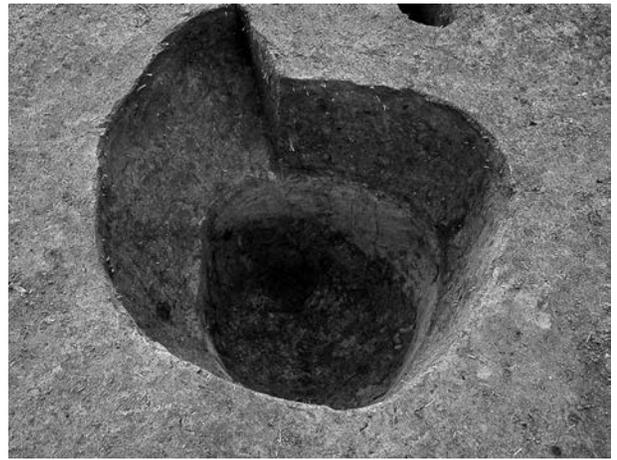
SK11



SK12



SK14



SK17



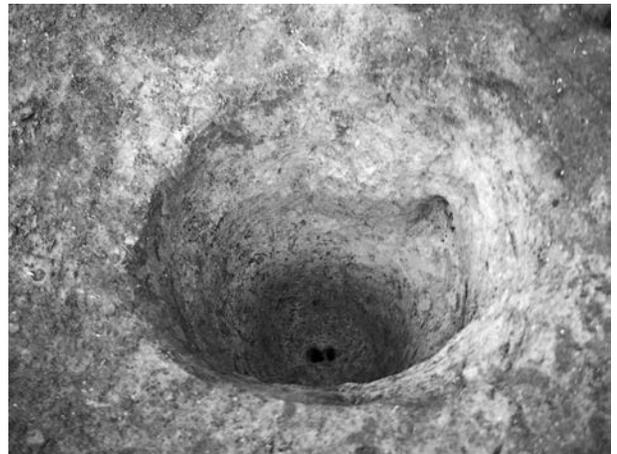
SK21



SK22



SK26



SK28

図版4



SK29



SS29



SS31-a・SS34



SS35



SK13



SK15半裁状況



SI1・SI2



SI3 (南から)

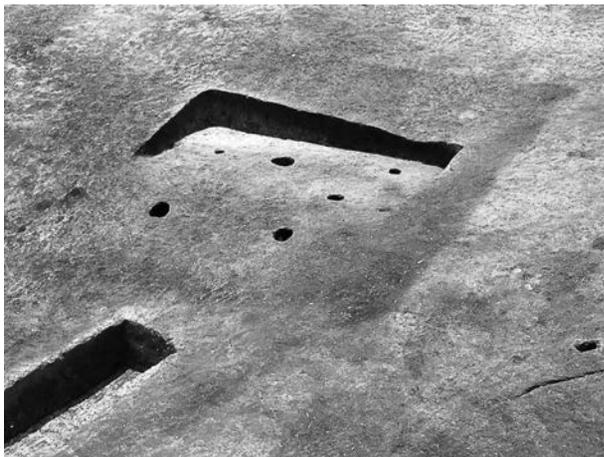


SI1



SI3 (貼床除去後)

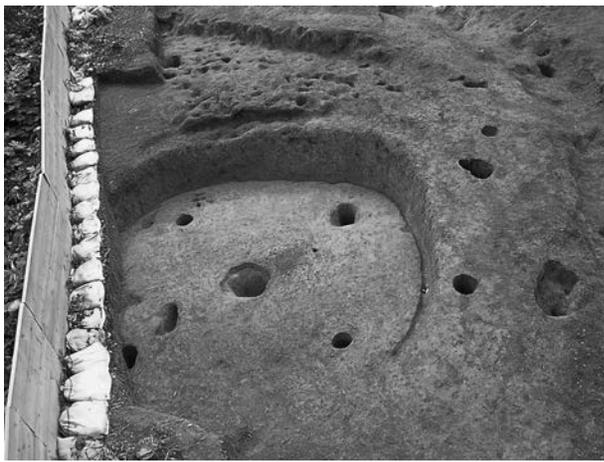
図版6



SI2



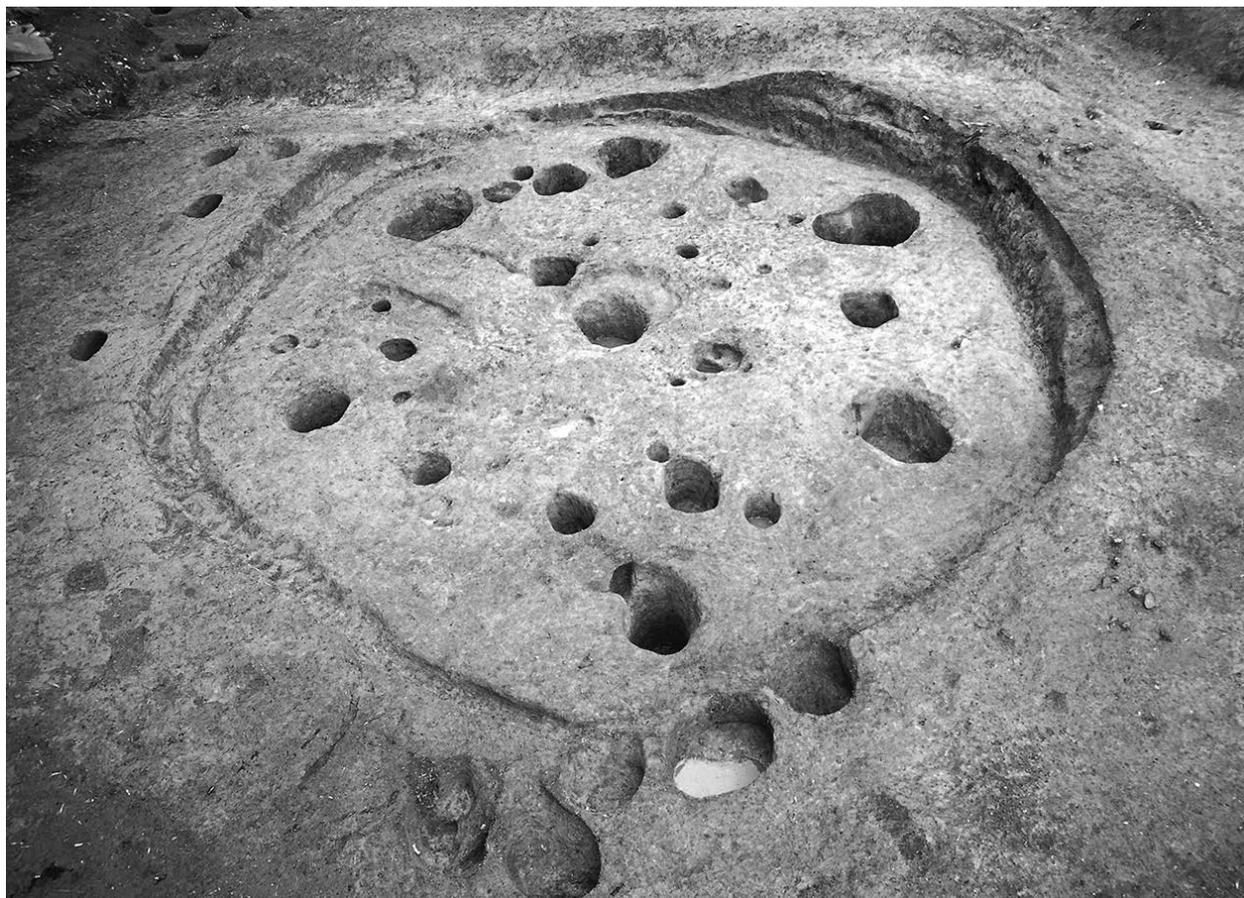
SI5



SI4 · SS20



SI8



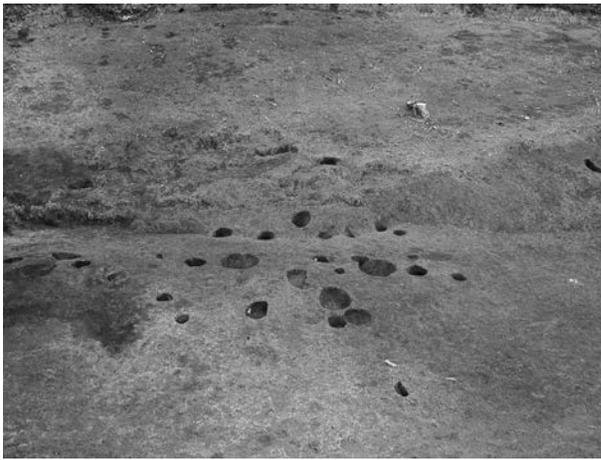
SI7



SS5~7・13~17



SS5~7 (南側)



SS5~7 (北側)



SS13~15



SS13・16



SS10・18 (東から)



SS9



SS10・18



SK 5



SK 5 甕棺



SS 5 の埋土に掘り込まれるSK 5



SS19



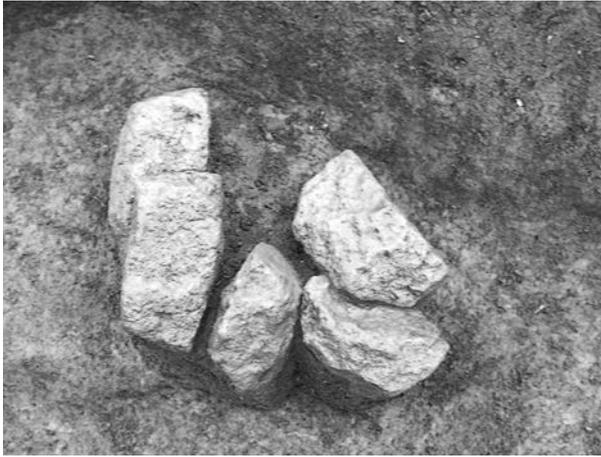
SS21



SS22・SD 2



SS24・25



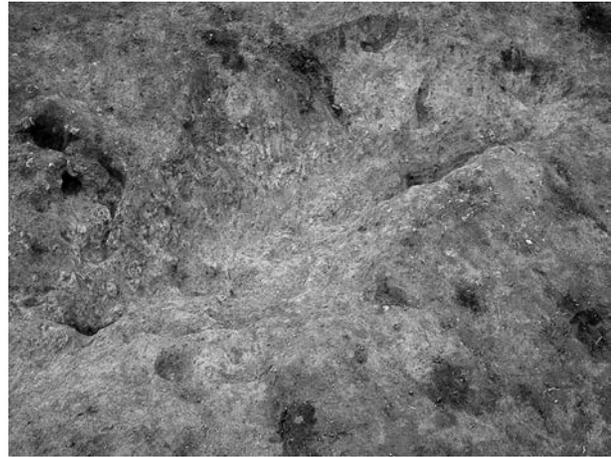
SS24石組出土状況



SS12・33



SS12内SB 3



SK 4



SK23

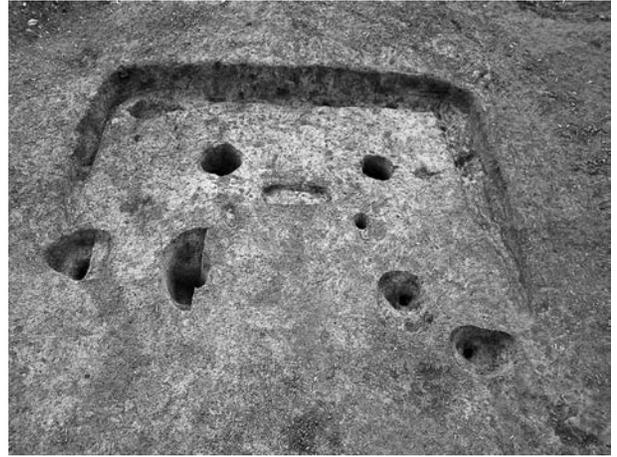


SK24

图版10



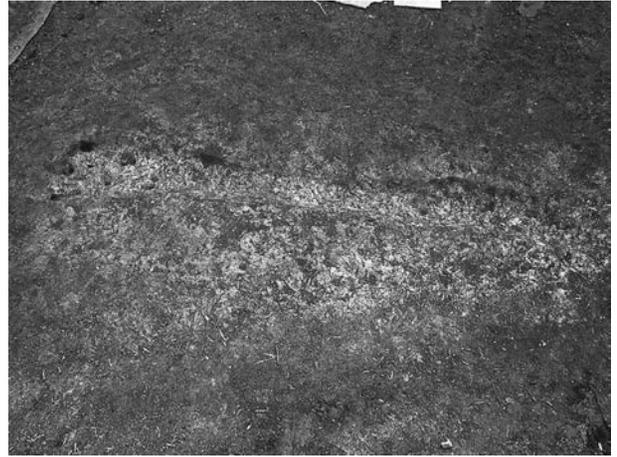
SI6



SI9



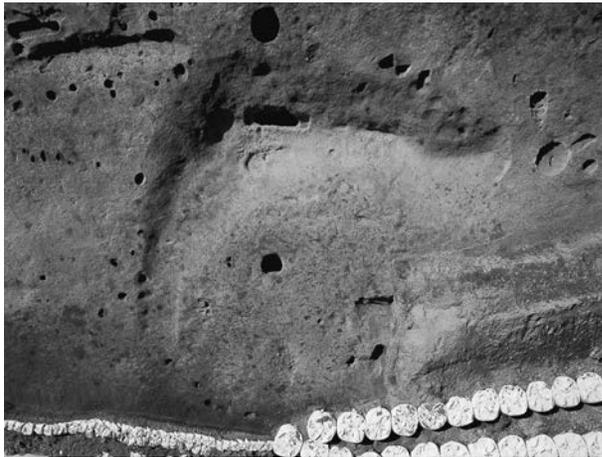
SI10



SD8



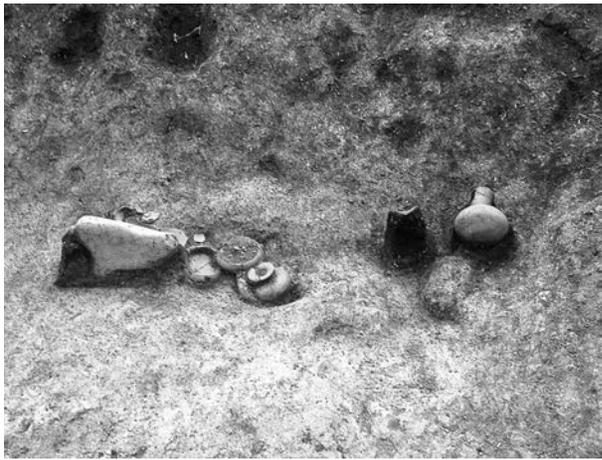
早里17·18号墳



早里17号墳



SX9 遺物出土状況 (北から)



SX9 遺物出土状況 (東から)



SX9 遺物出土状況



SX10



SX12



SX13



早里18号墳



SX5・SX6



SX2 遺物出土状況



SX6 遺物出土状況 (一部)



SX6



SX8



SX4



SX14



早里19号墳



早里19号墳周溝内遺物出土状況



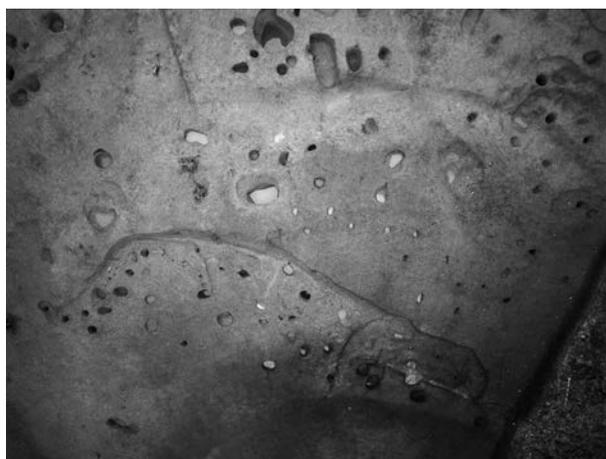
SX18



SX19



SK16



早里20号墳



早里20号墳周溝内遺物出土状況



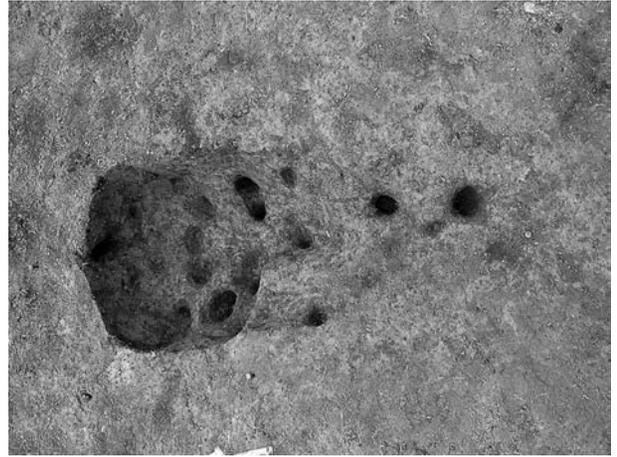
SX17



SX3・SD3



SX11



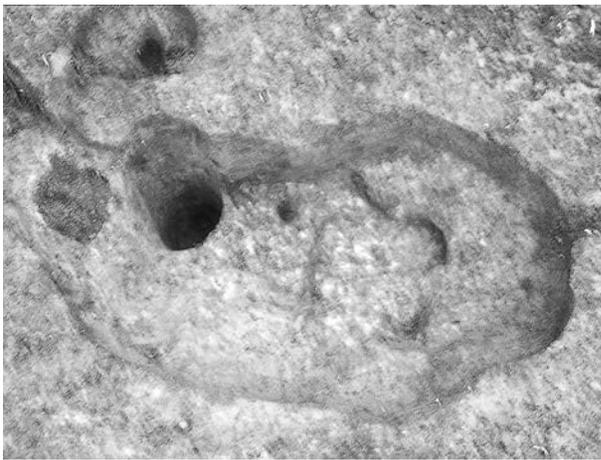
SX7



SX15



SX20



SX21



SX22



SK1



SK8



SK 8 遺物出土状況



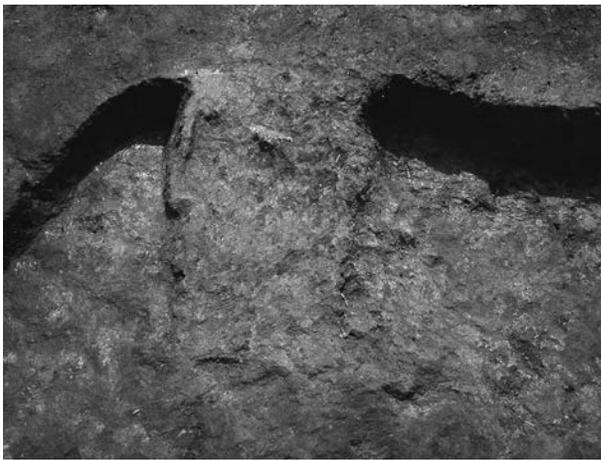
SB 4 ~ 6



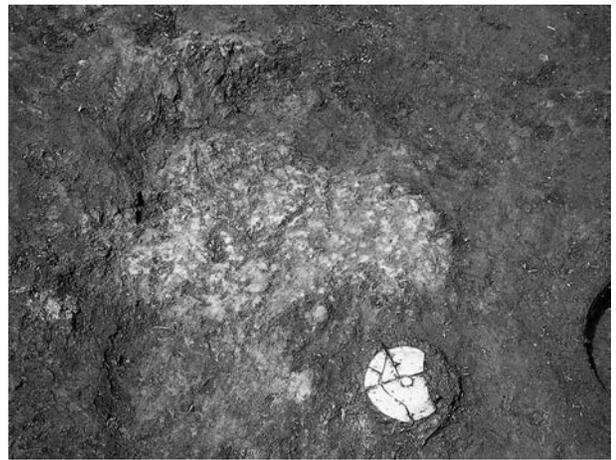
SS 1 ~ 4



SS 4



SS 4 竈



SS 4 炉



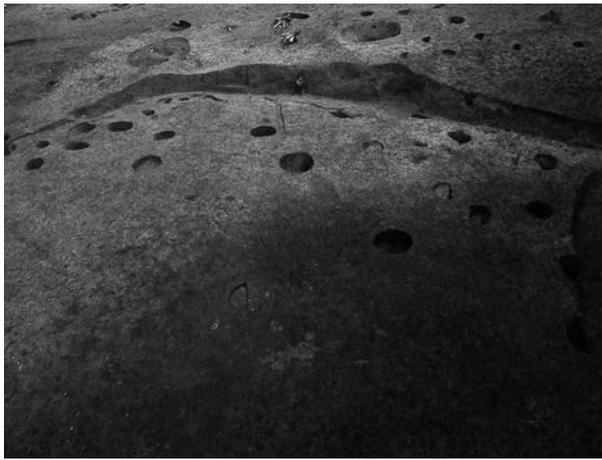
SS 8



SS 11



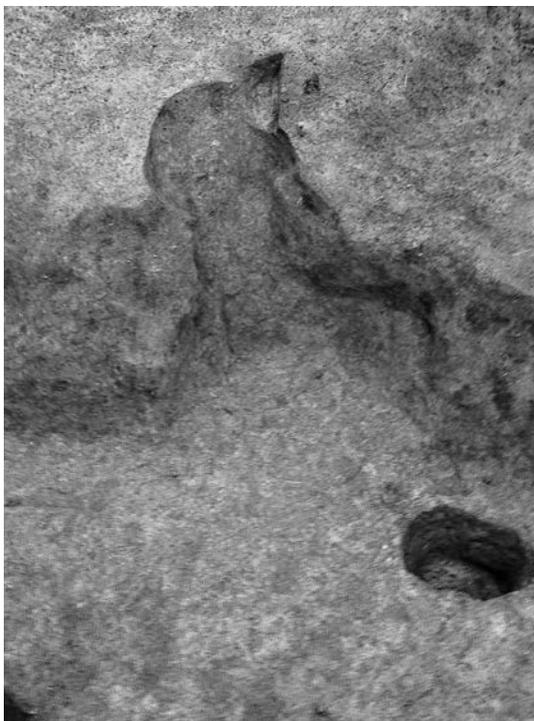
SS23



SS26~28 (北から)



SS26~28 (東から)



SS26竈完掘状況



SS26竈検出状況



SS26竈燃焼部断面



SS27・28



SS30



SD7



SD7 遺物出土状況



SK18



SX1

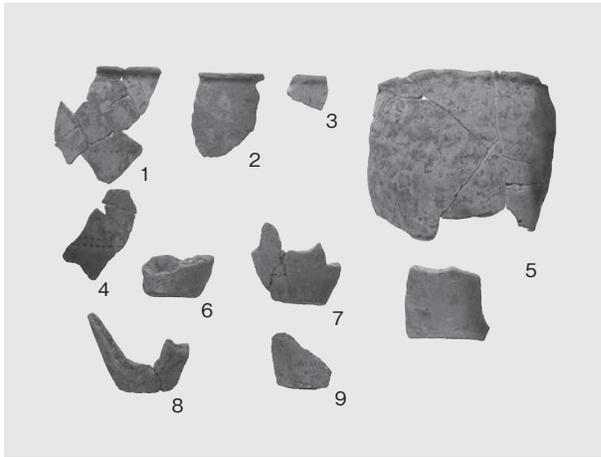


境矢石遺跡（調査後）より境内海道西遺跡を望む



南部バイパス（境内海道西遺跡現況）

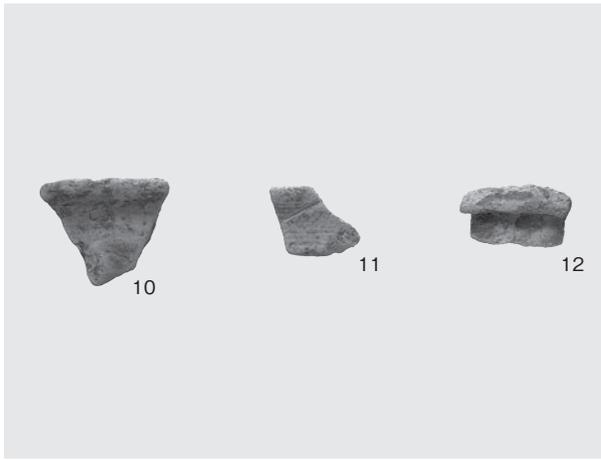
图版18



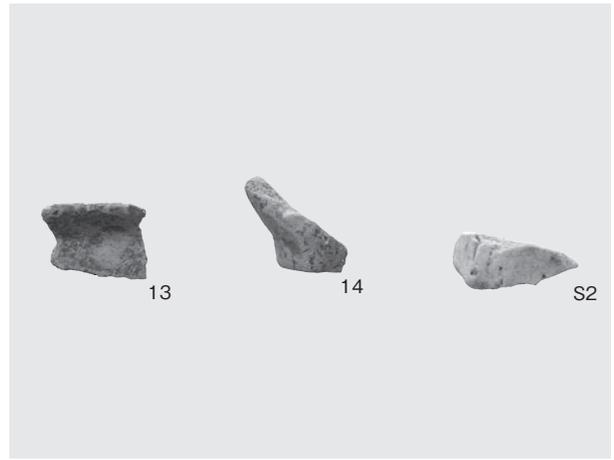
SS29



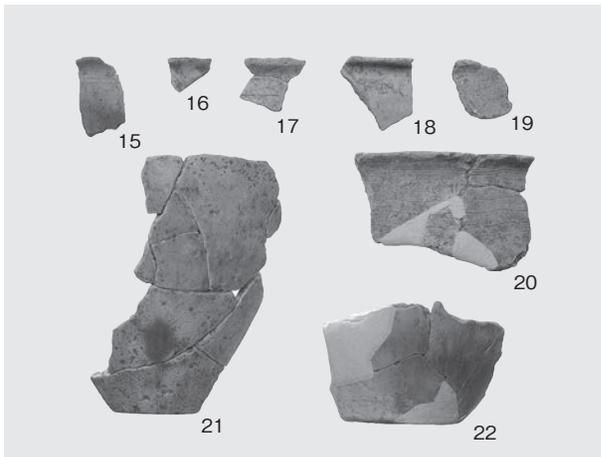
SS29



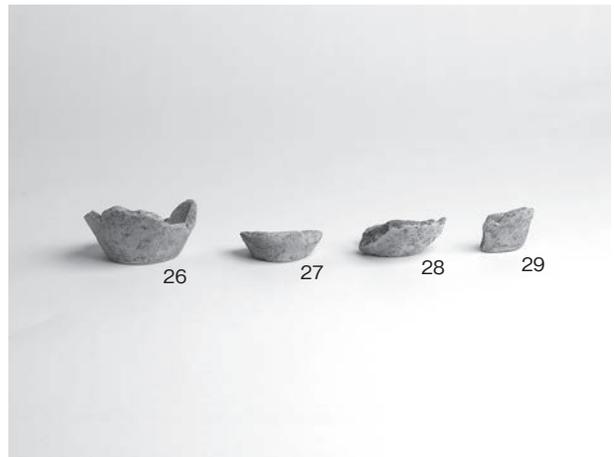
SS31



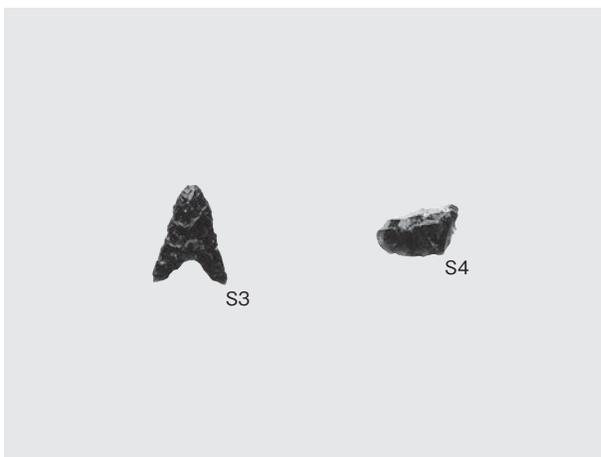
SS34



SS35



SS35



SS35



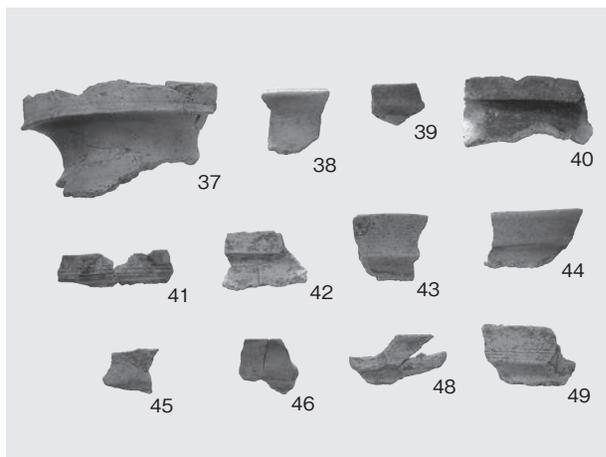
SS35



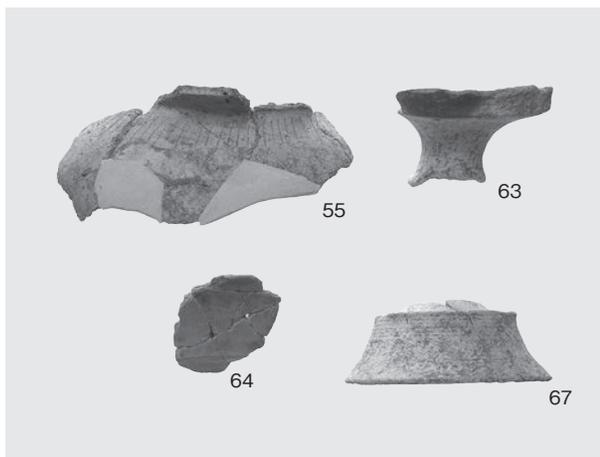
SK13



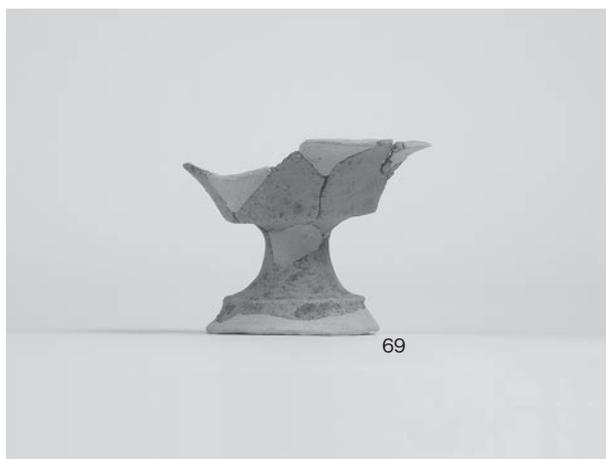
SK27



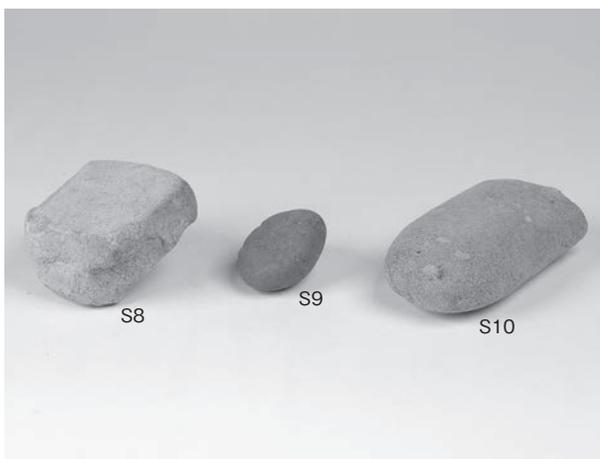
SI 1



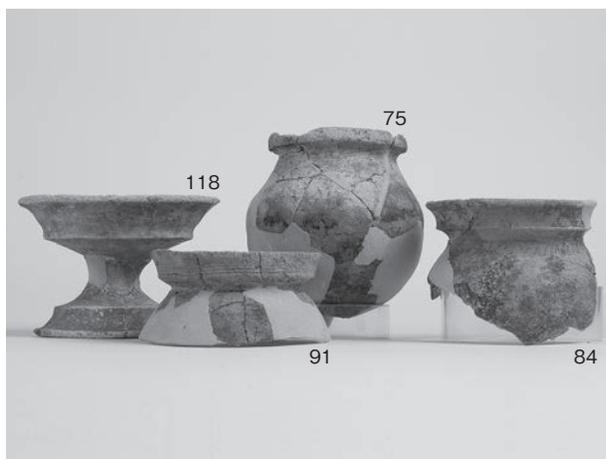
SI 1



SI 1



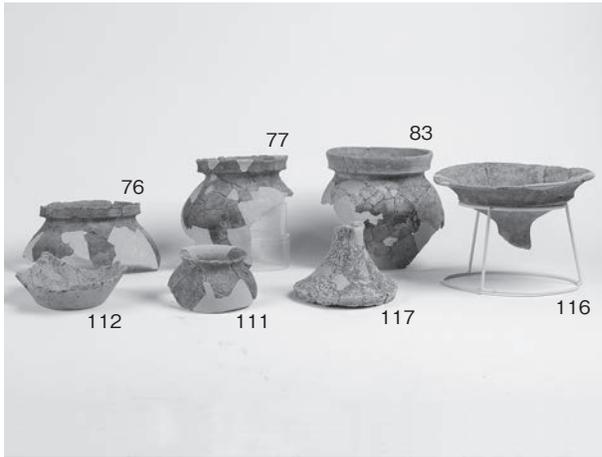
SI 1



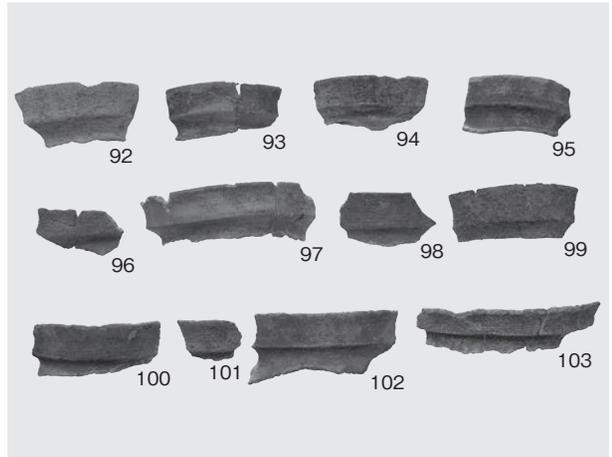
SI 3



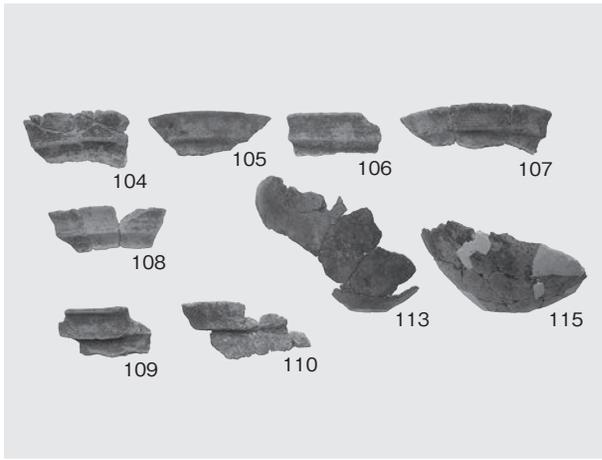
SI 3



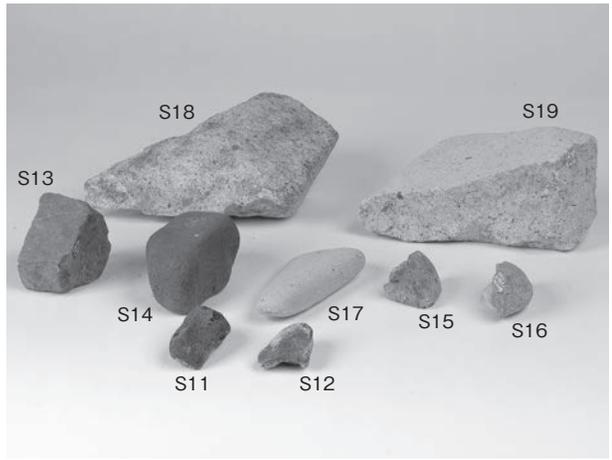
SI 3



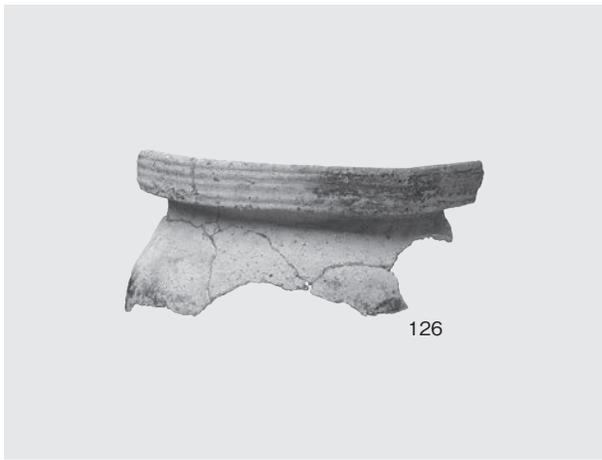
SI 3



SI 3



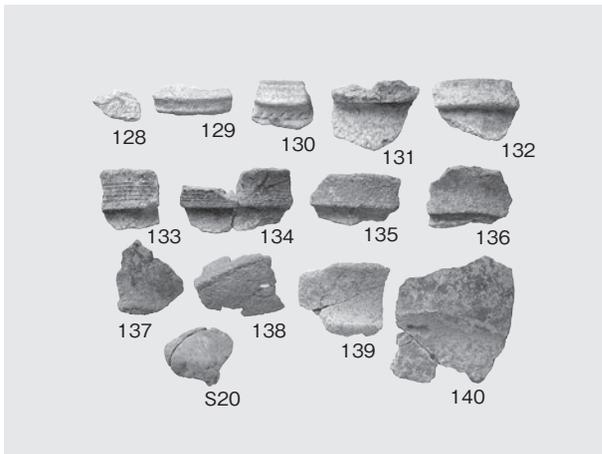
SI 3



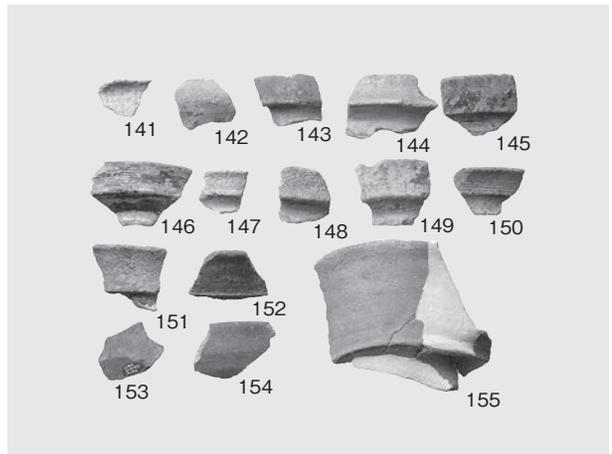
SI 4



SI 5



SI 7



SI 8



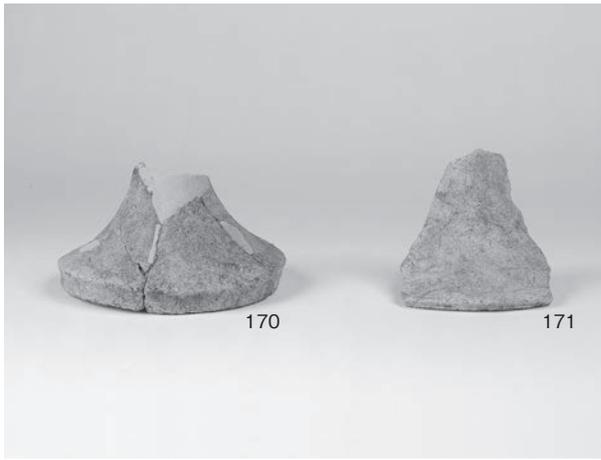
156

SD6



159

SS5



170

171

SS5



176

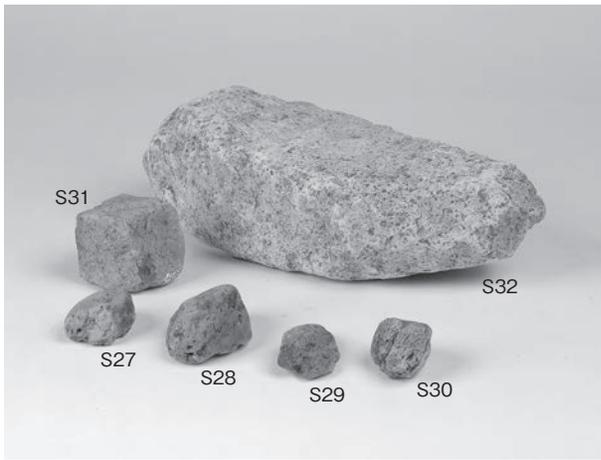
199

204

196

177

SS6



S31

S32

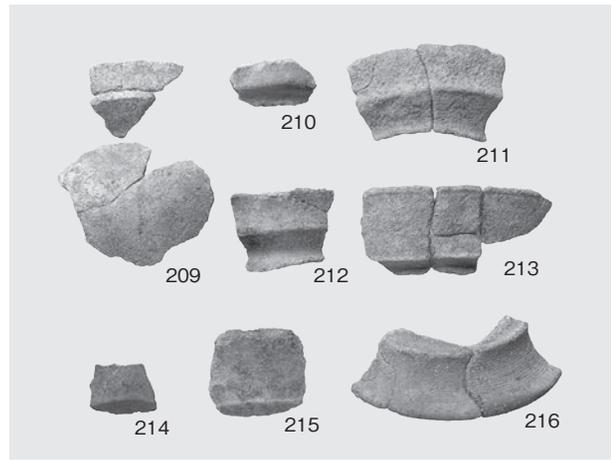
S27

S28

S29

S30

SS6



210

211

209

212

213

214

215

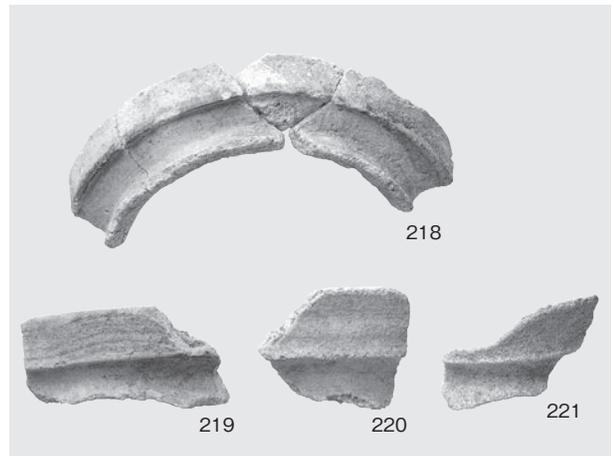
216

SS7



217

SS13



218

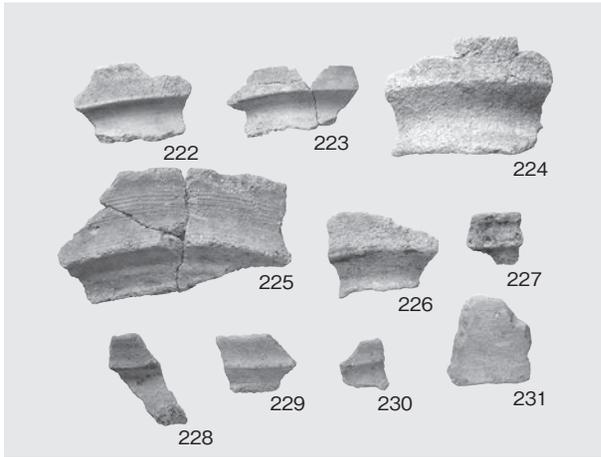
219

220

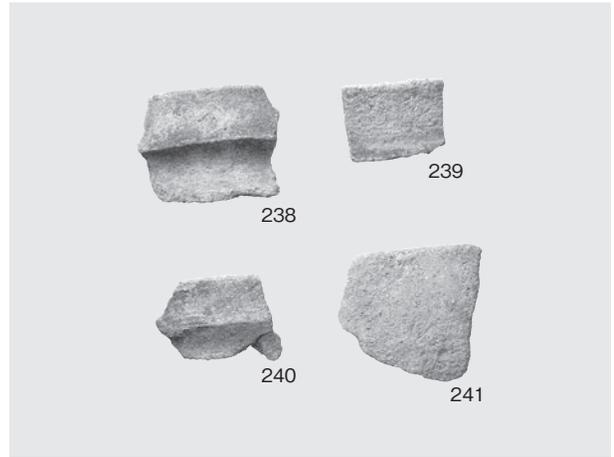
221

SS13

图版22



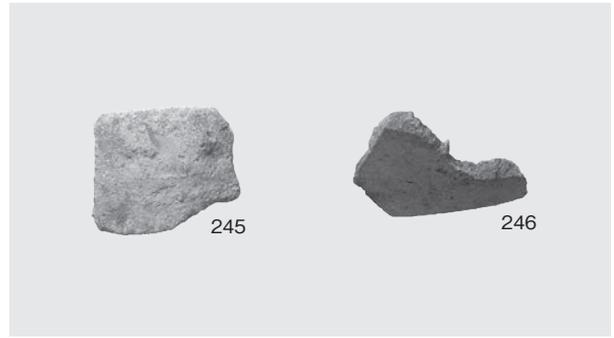
SS14



SS15



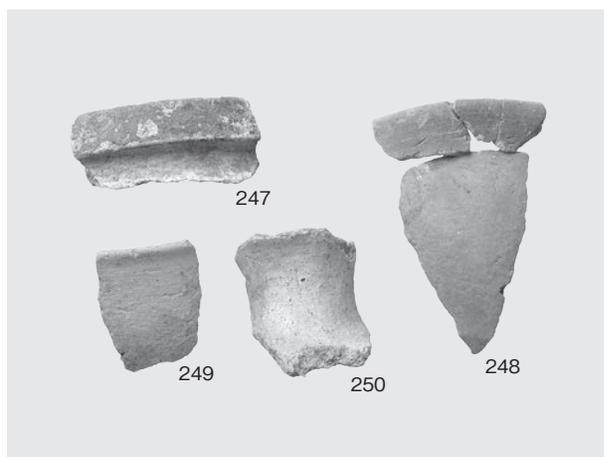
SS17



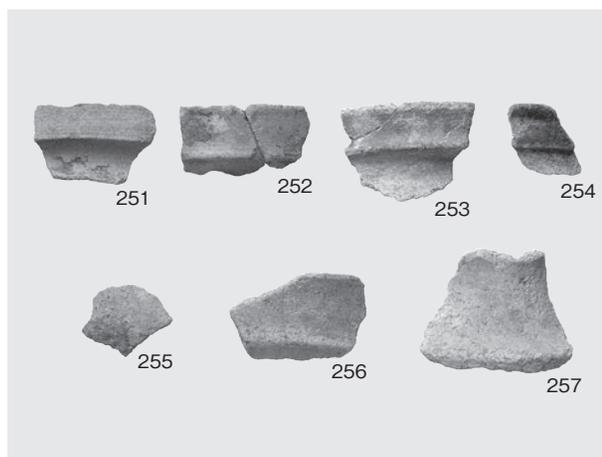
SS10



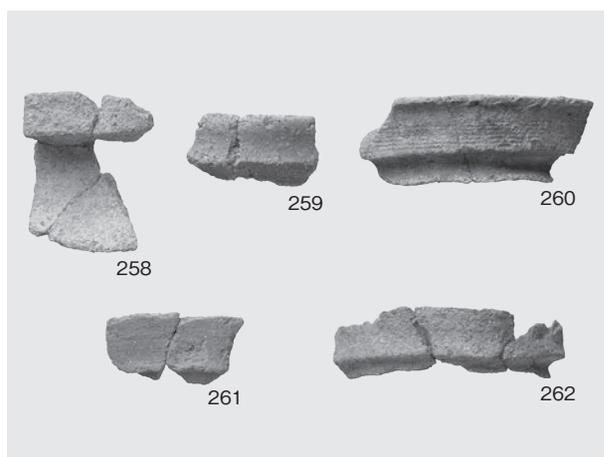
SK 5



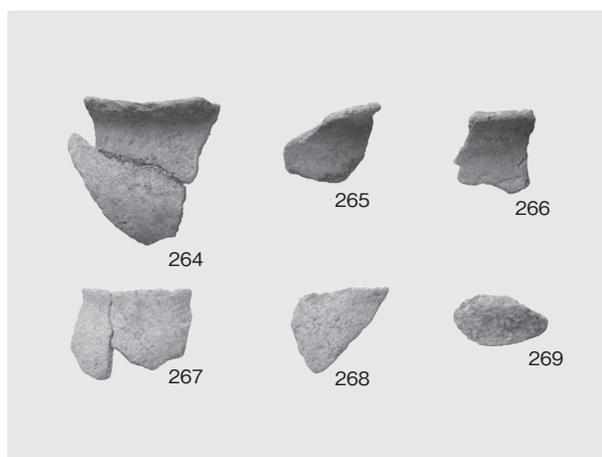
SS18



SS24



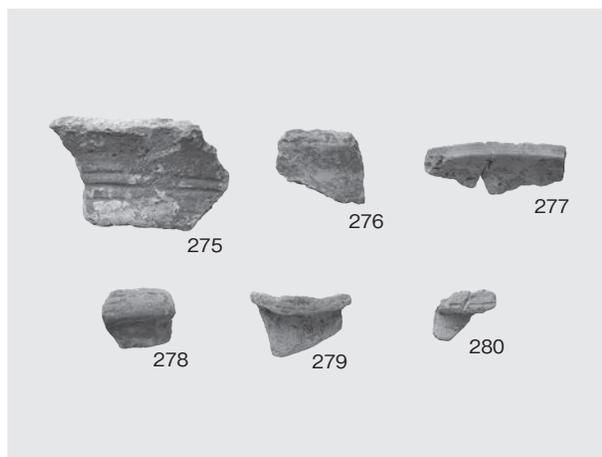
SS25



SS12



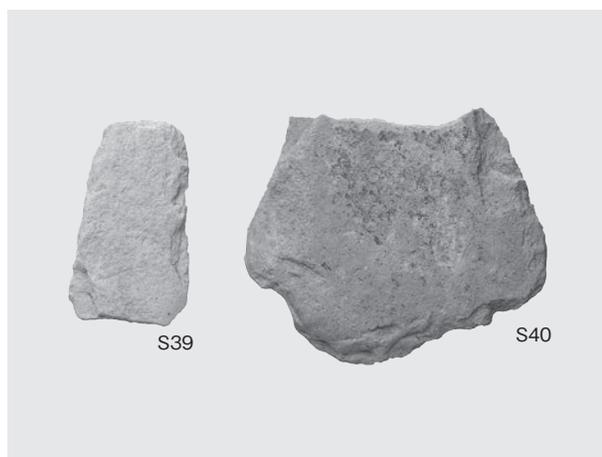
SS12



SS33



SS33



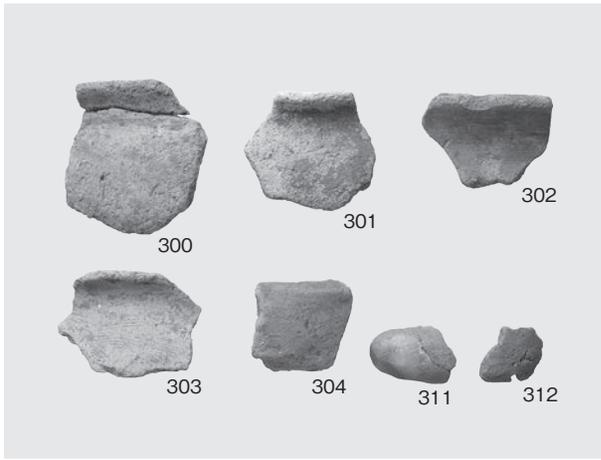
SS33



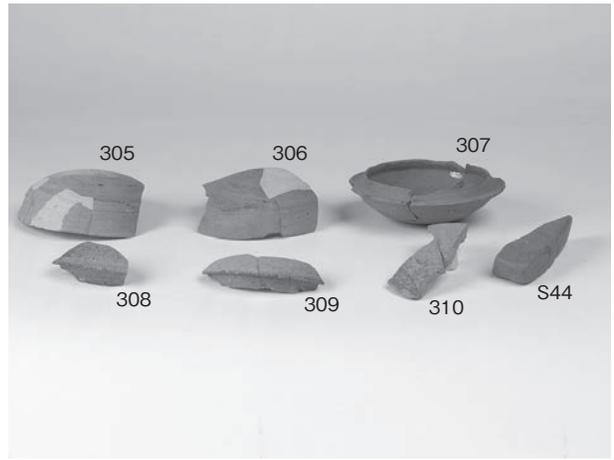
SI6



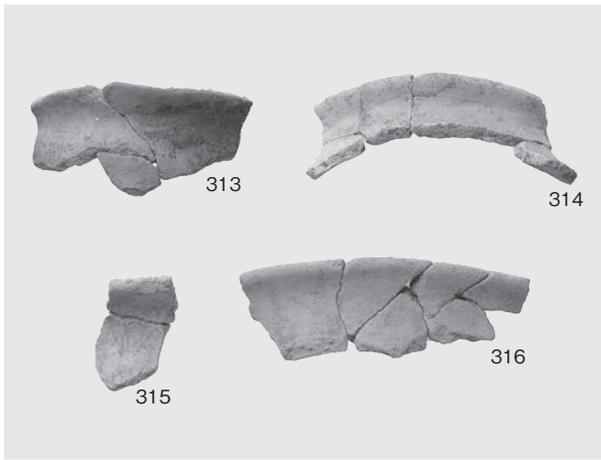
SI6



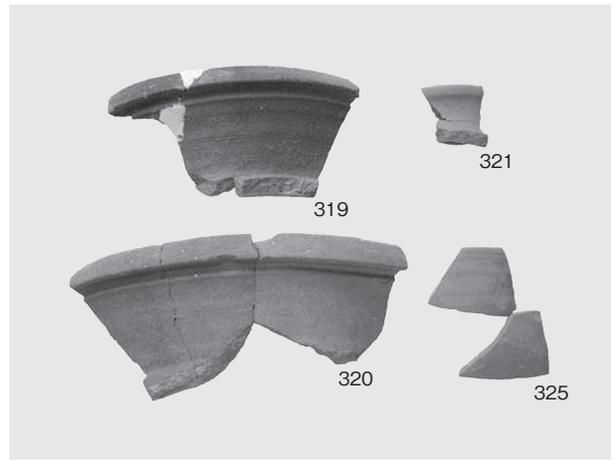
SI10



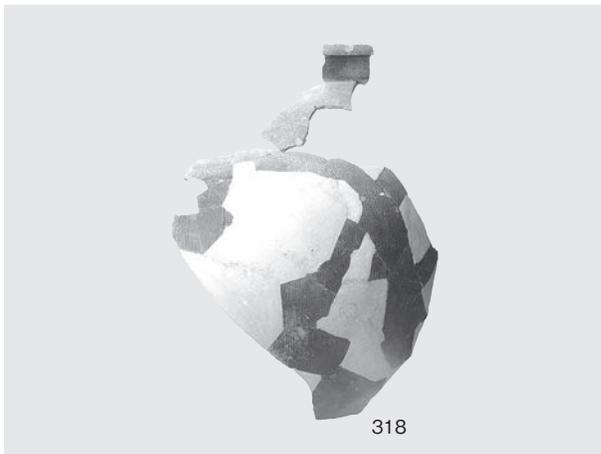
SI10



早里17号墳



早里17号墳



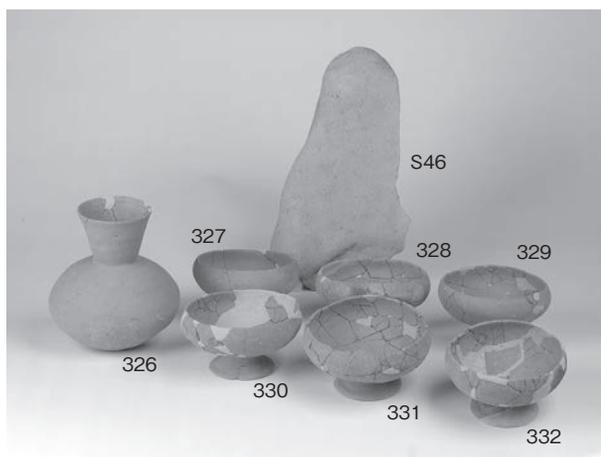
早里17号墳



早里17号墳



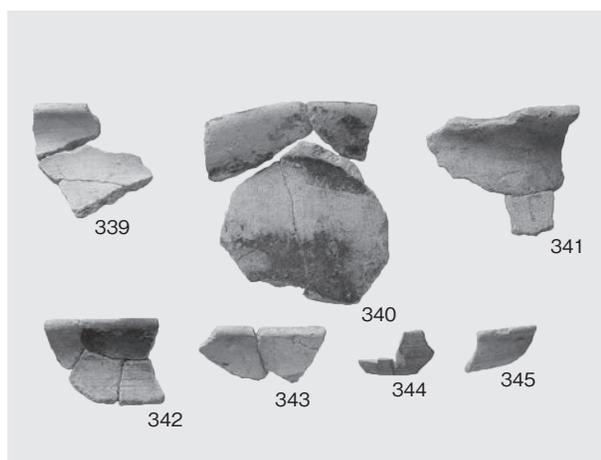
早里17号墳



早里17号墳 SX9



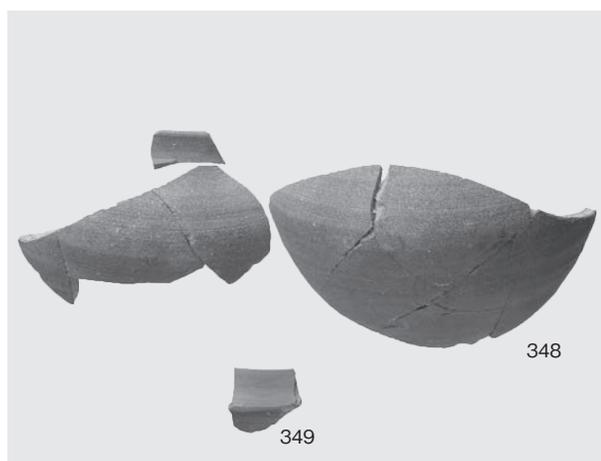
早里17号墳 SX13



早里18号墳



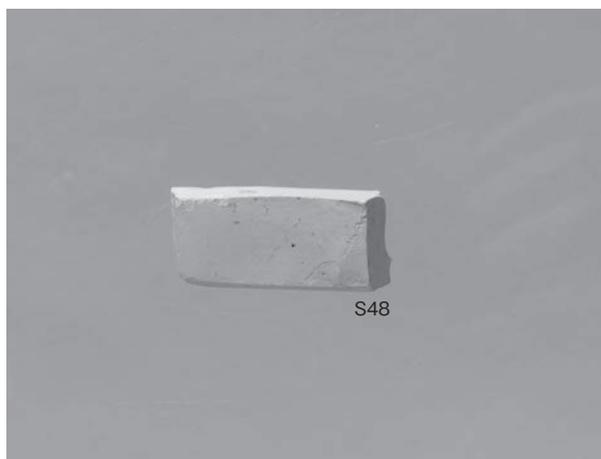
早里18号墳



早里18号墳



早里19号墳



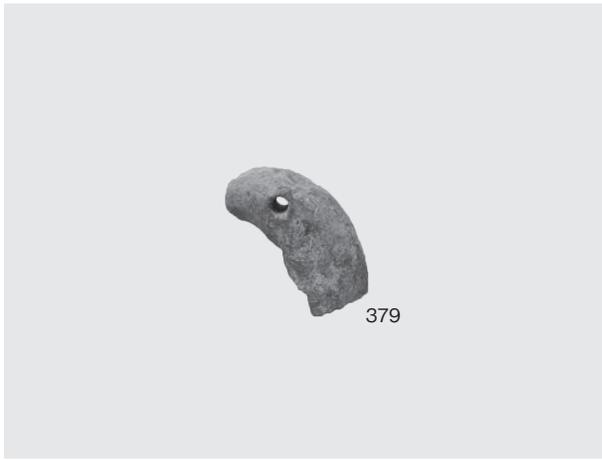
早里19号墳



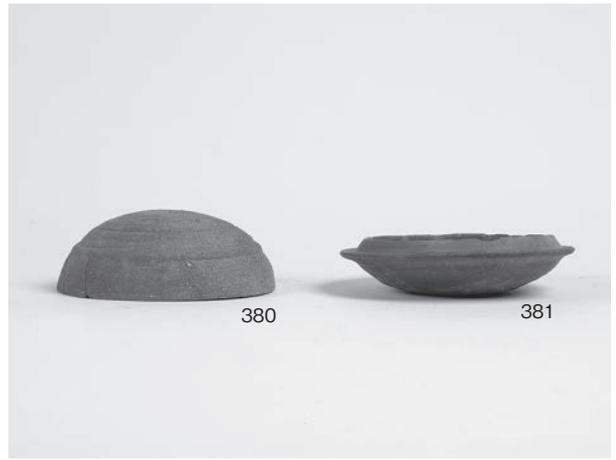
早里19号墳 SK16



早里20号墳



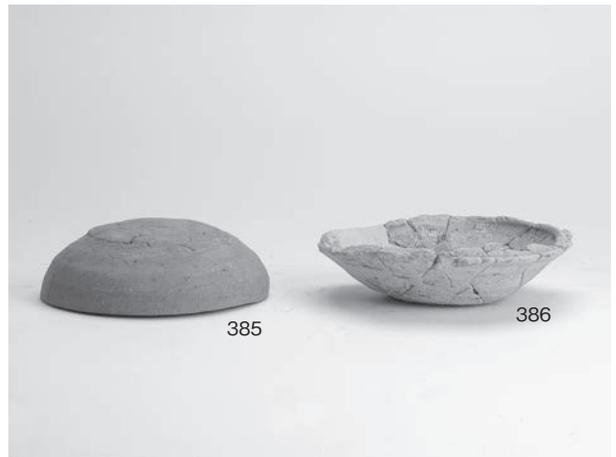
SX3



SX7



SX15



SK1



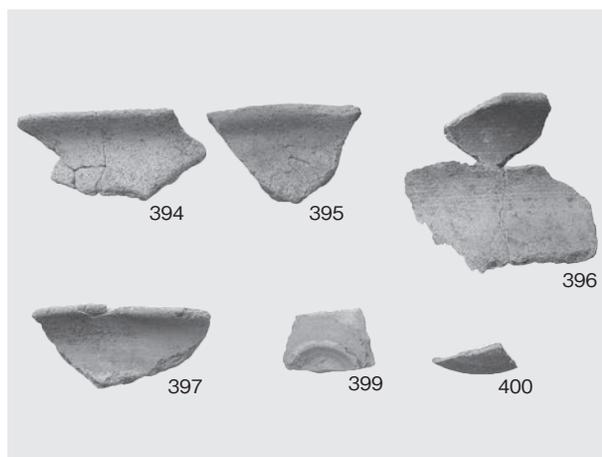
SK8



SK19



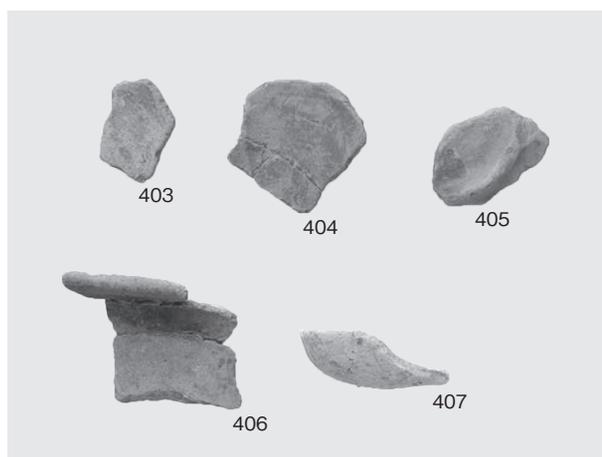
SB5



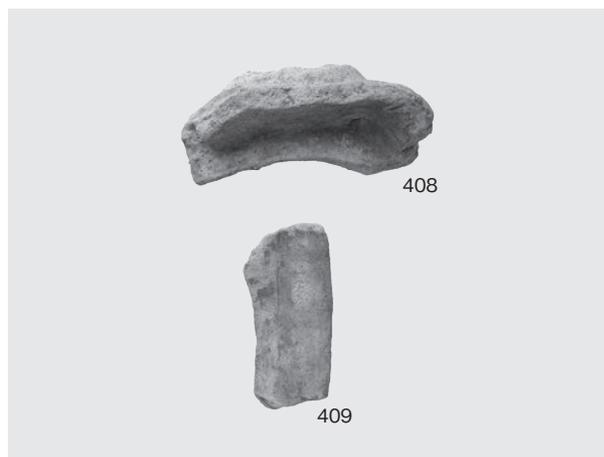
SS1



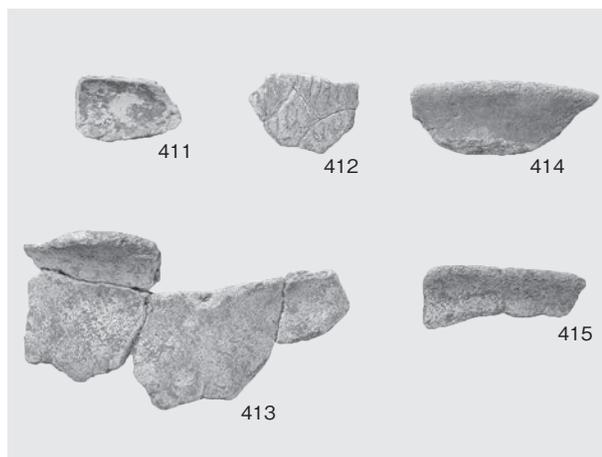
SS1



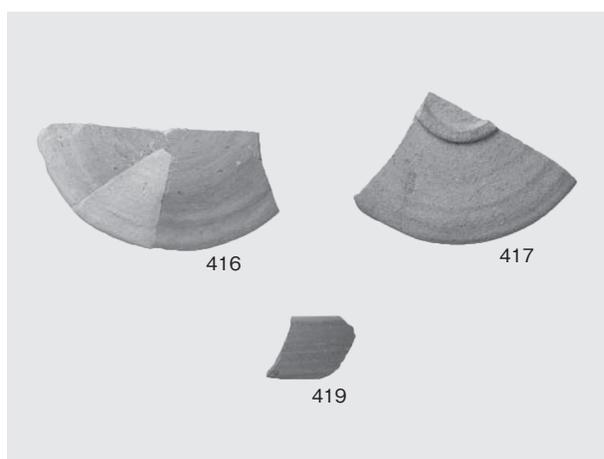
SS2



SS2



SS3

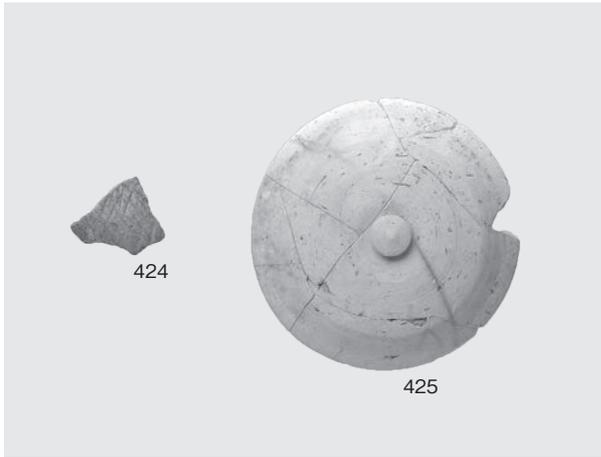


SS3

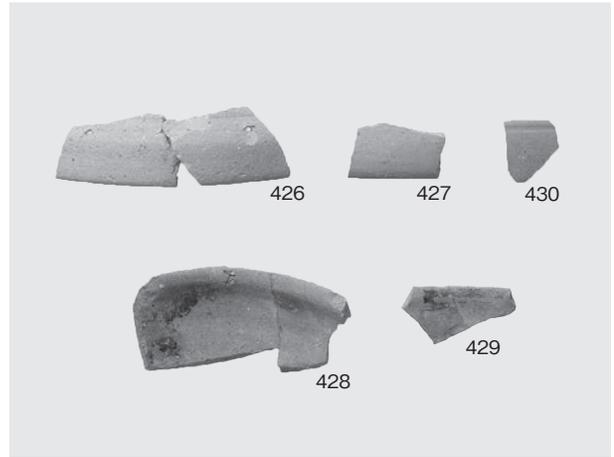


SS3

图版28



SS4



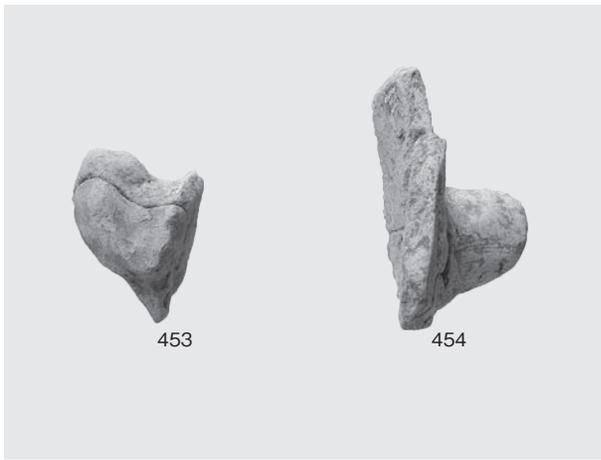
SS23



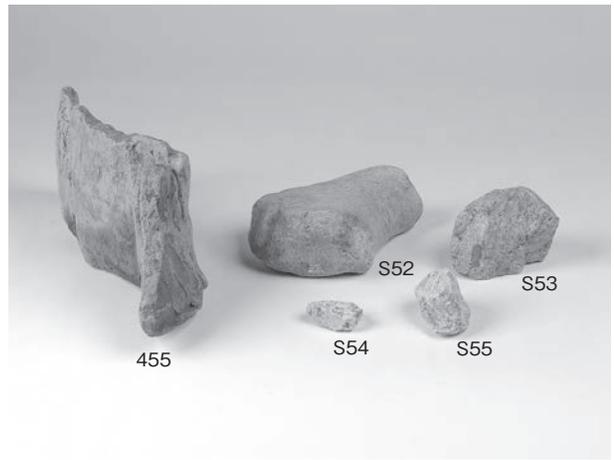
SS26



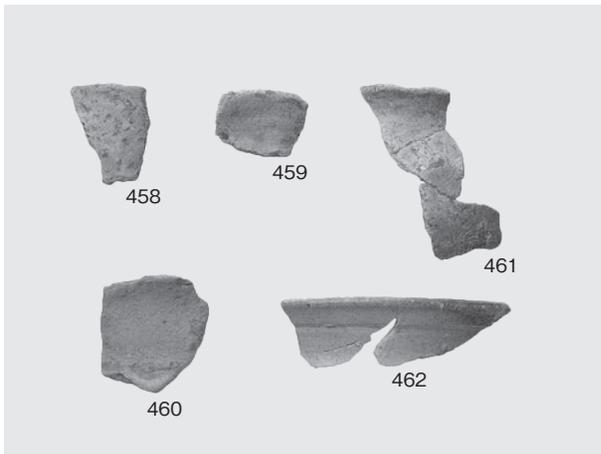
SS26



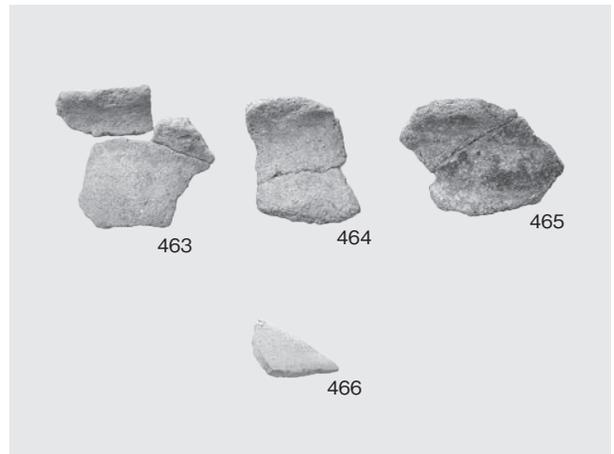
SS26



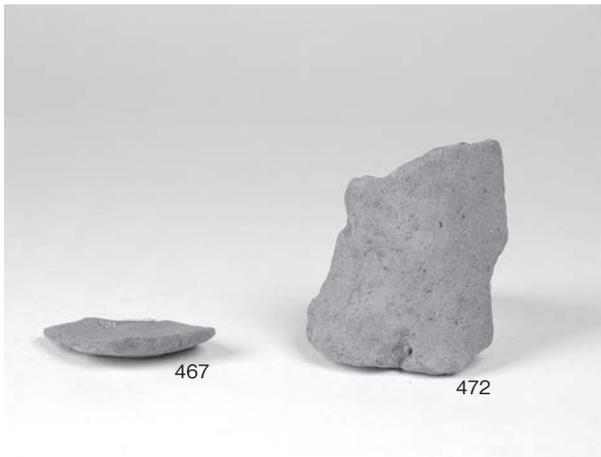
SS26



SS28



SS30



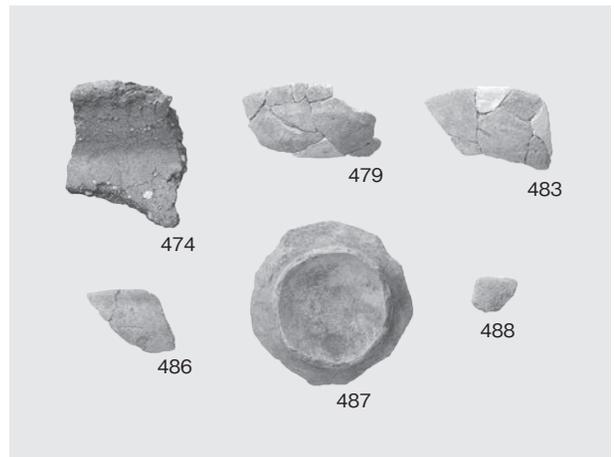
SD 7



SD 7



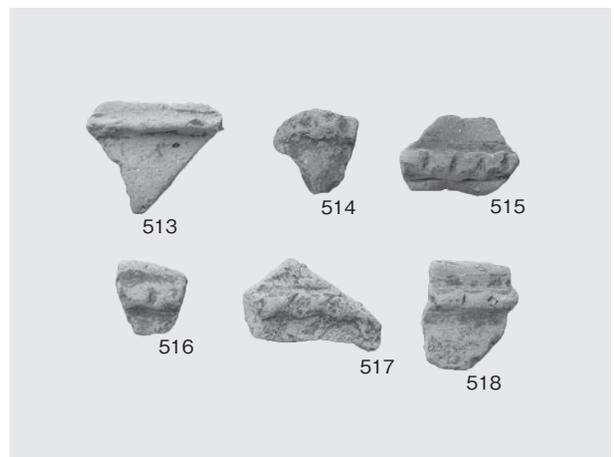
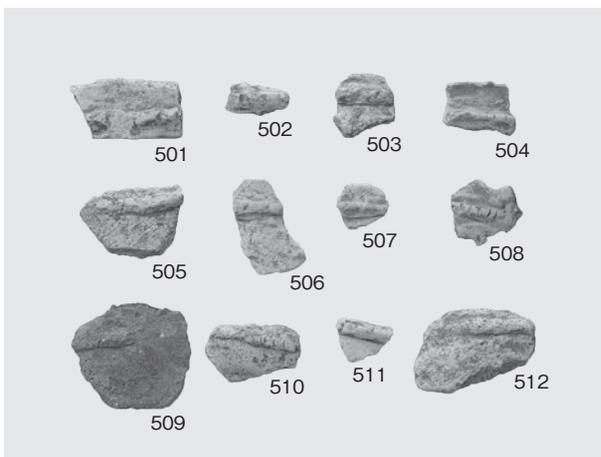
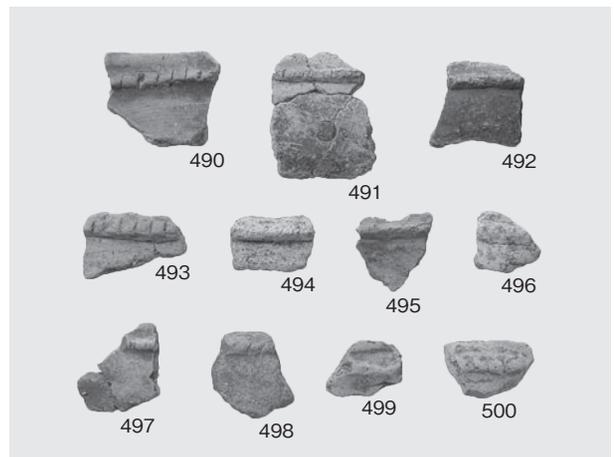
SK18



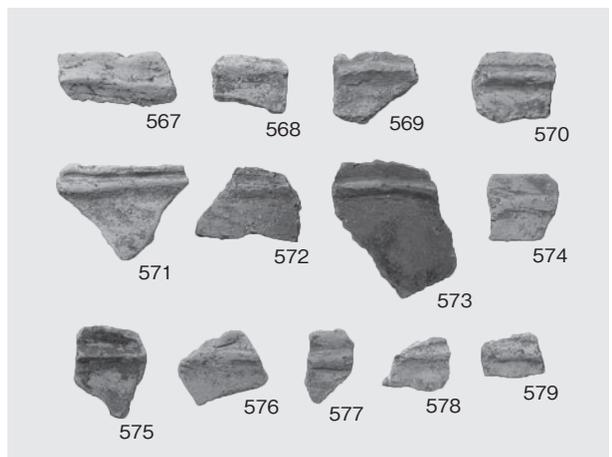
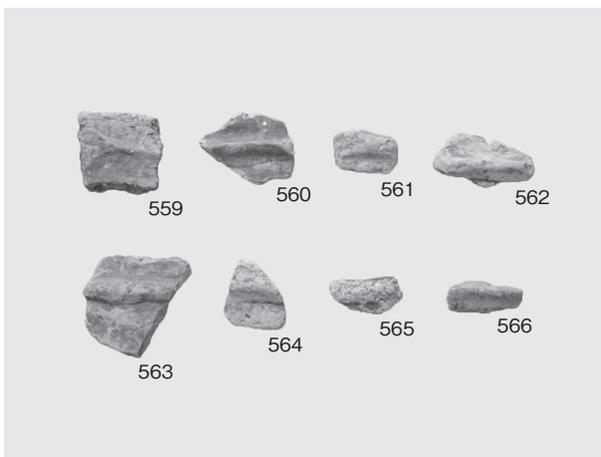
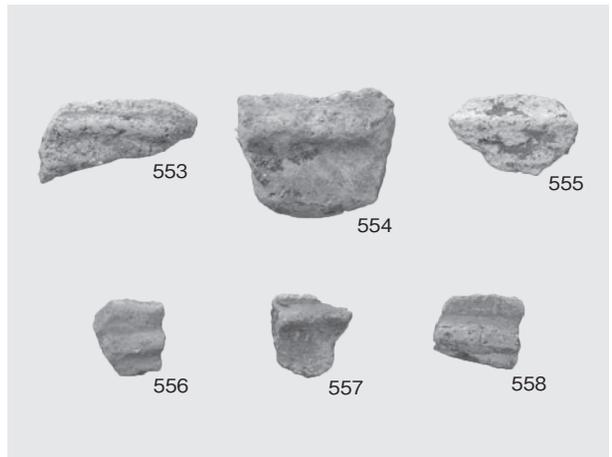
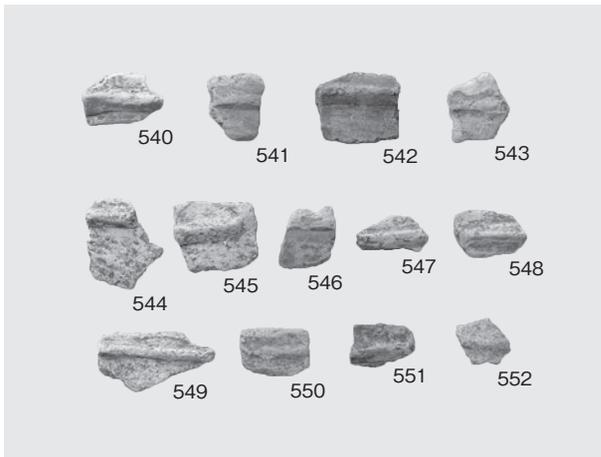
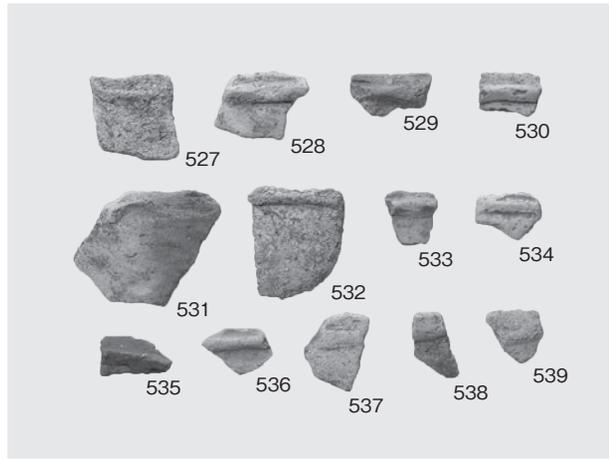
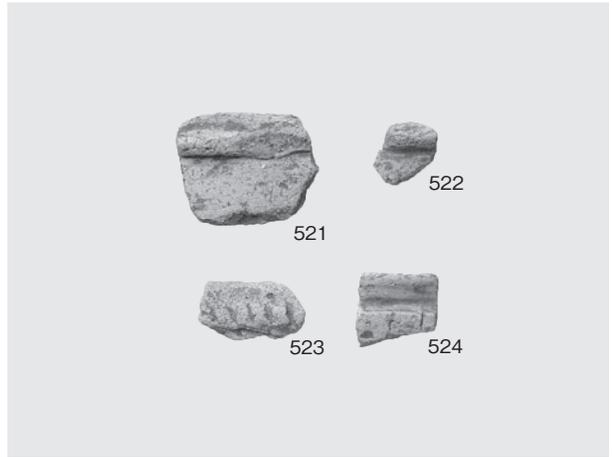
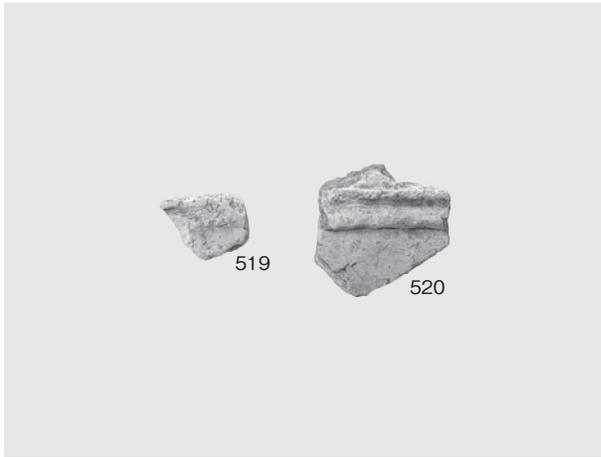
SK18



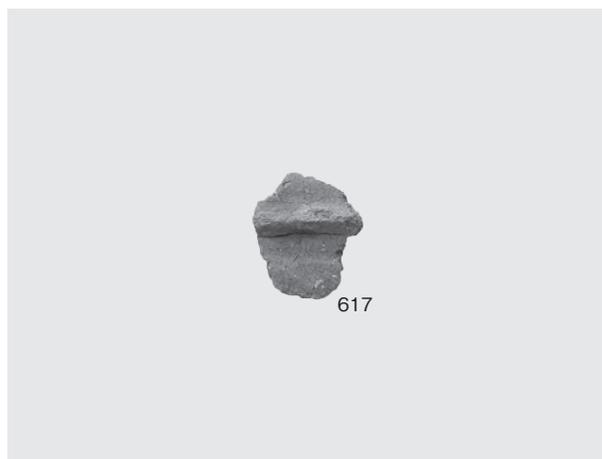
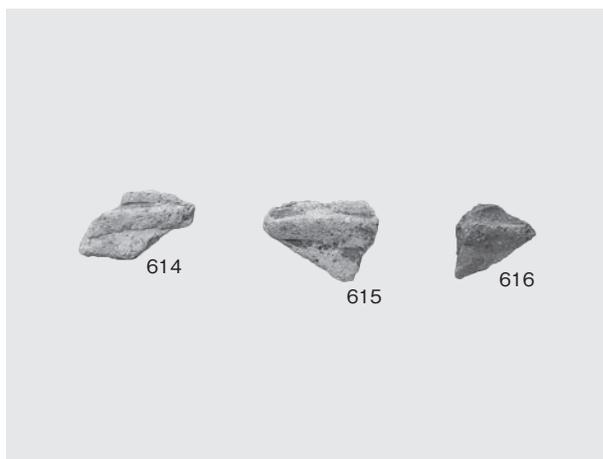
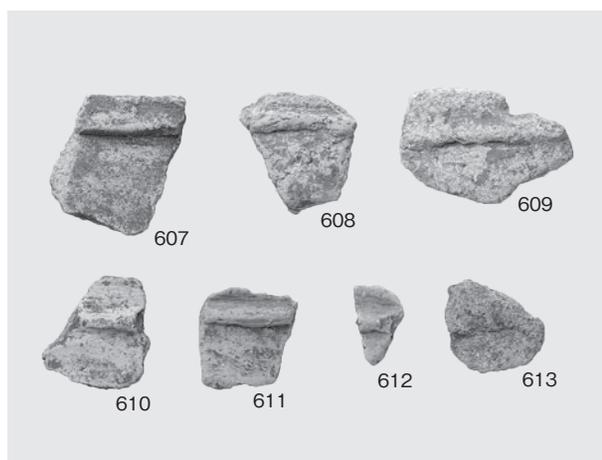
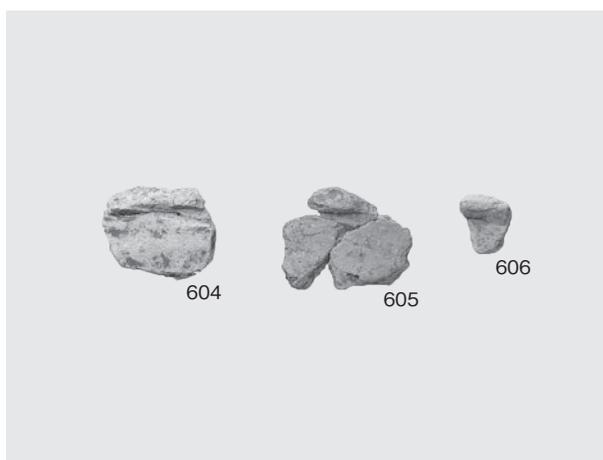
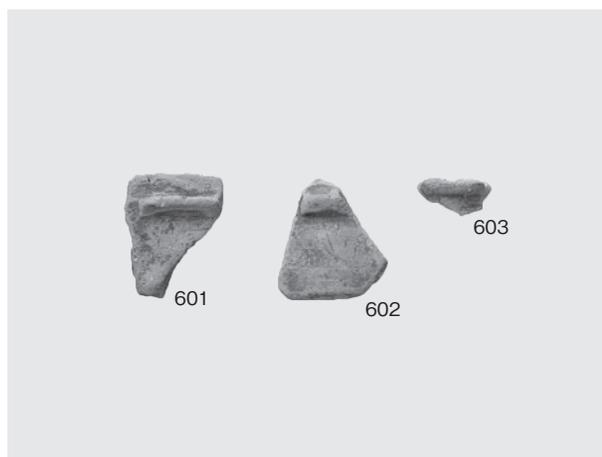
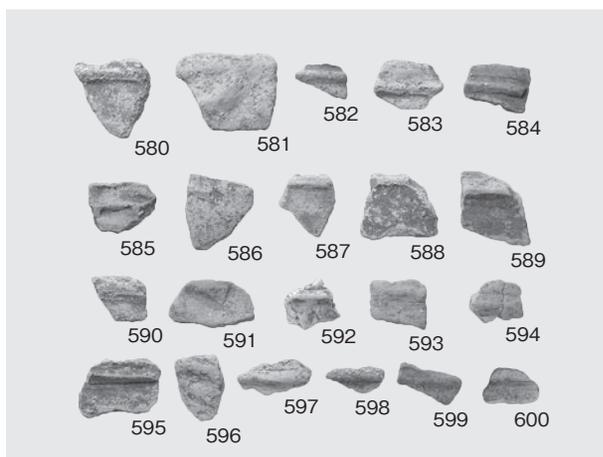
SX 1

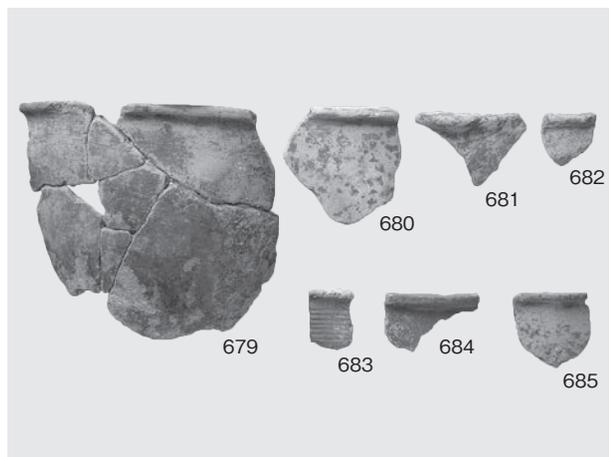
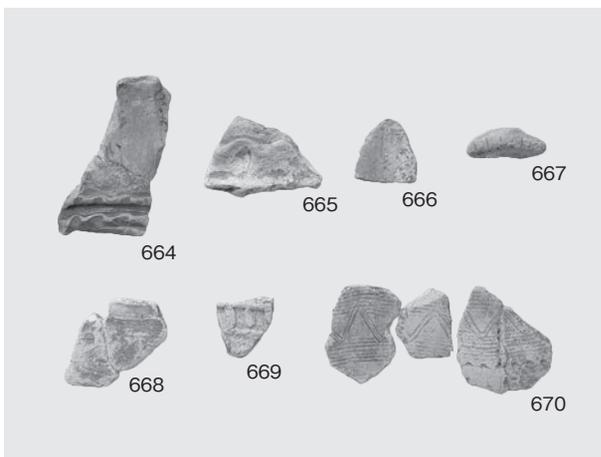
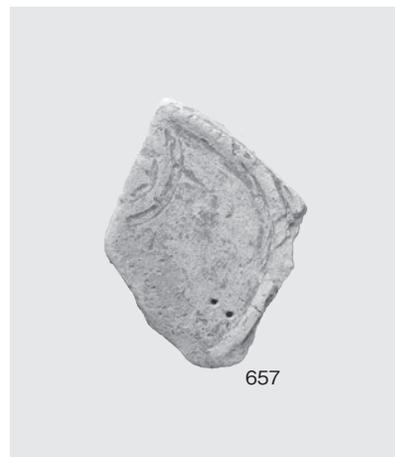
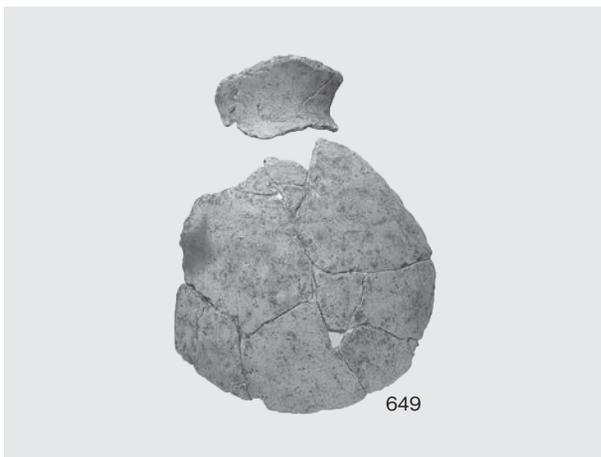
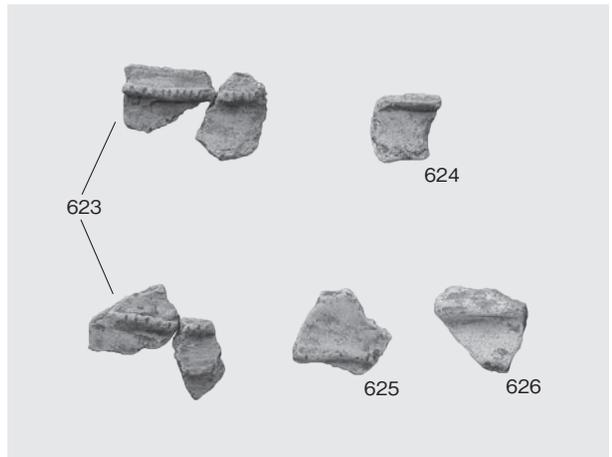
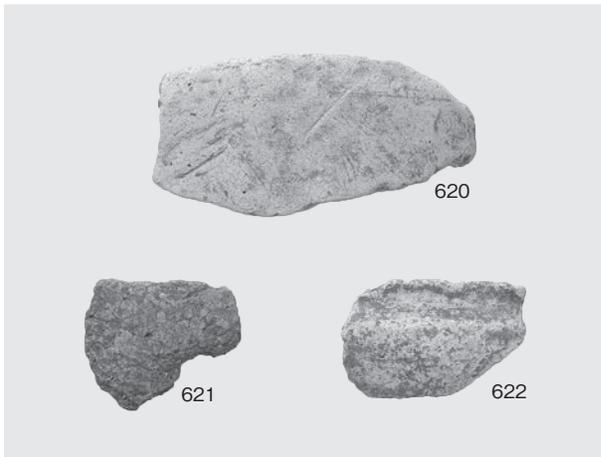


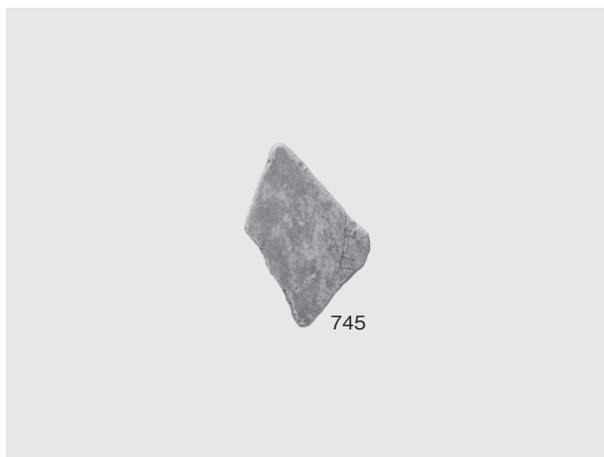
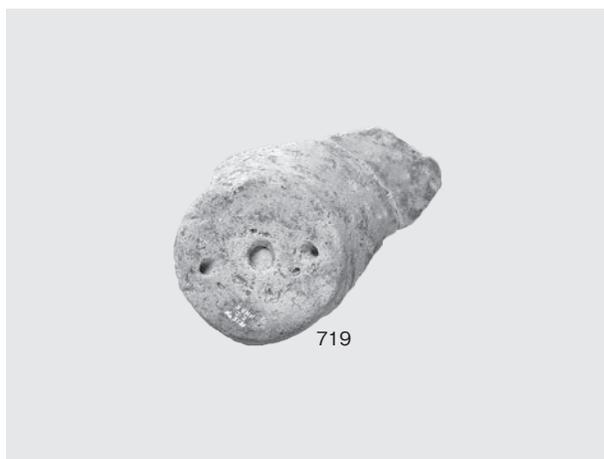
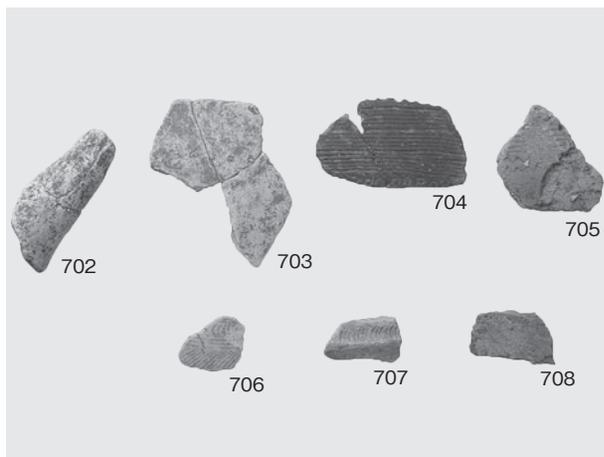
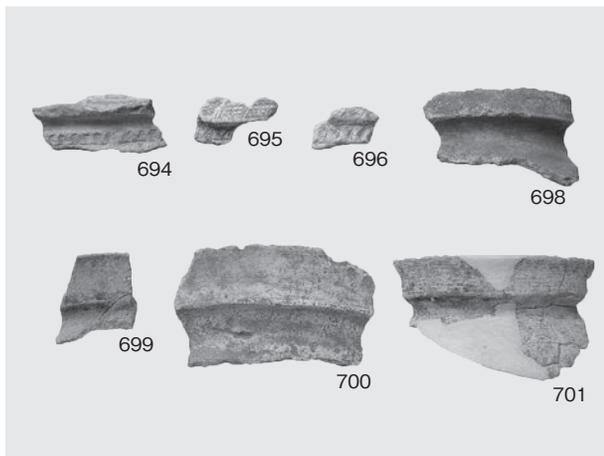
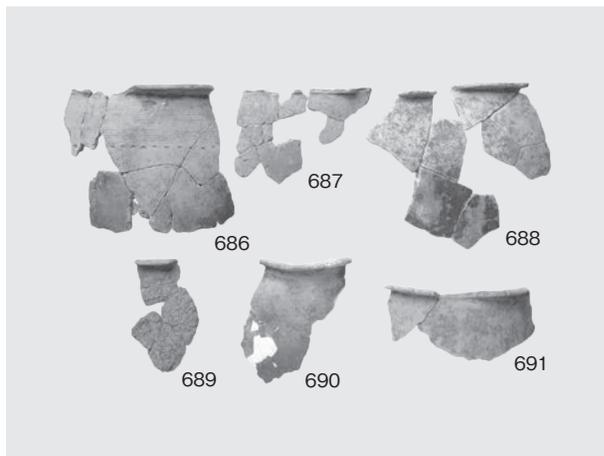
圖版30



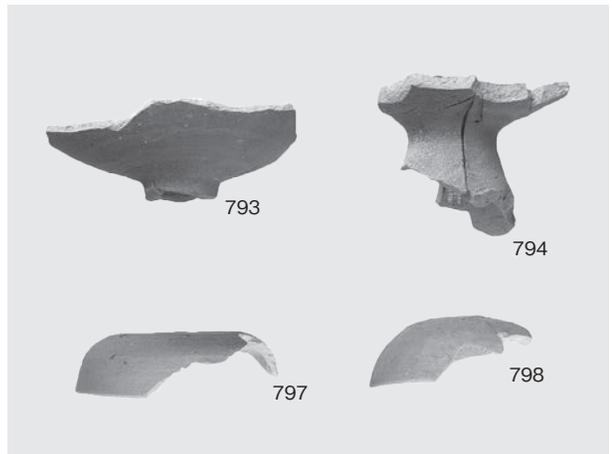
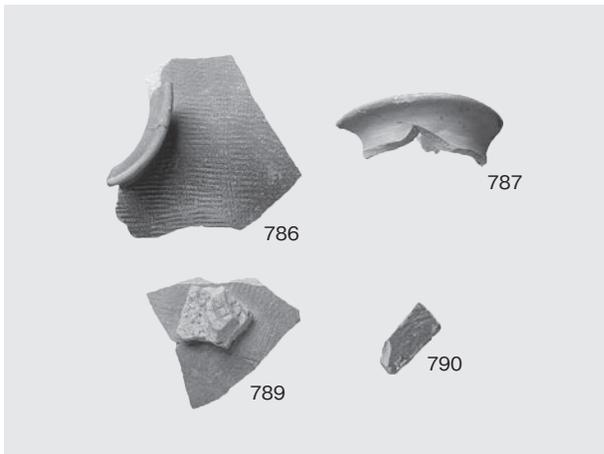
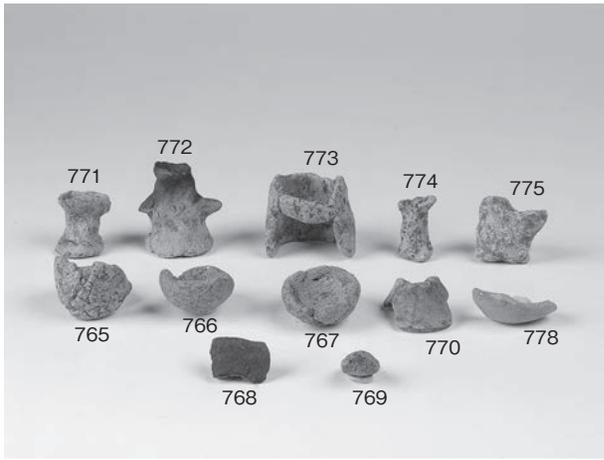
遺構外出土遺物

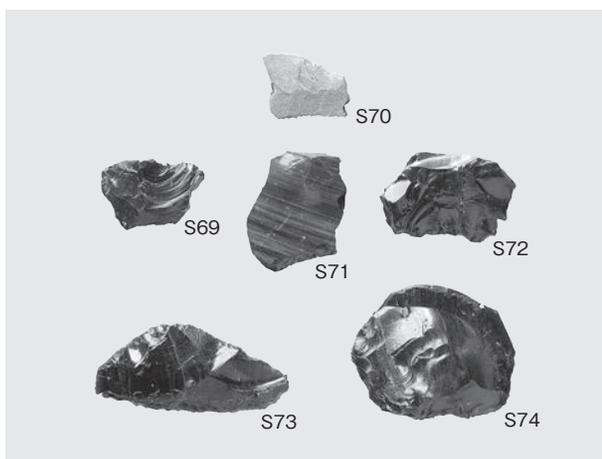
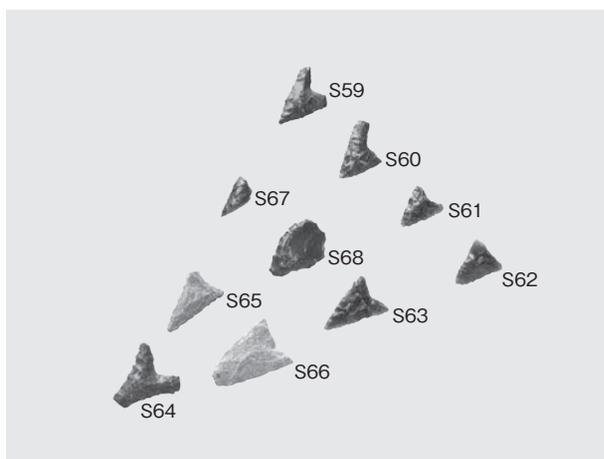
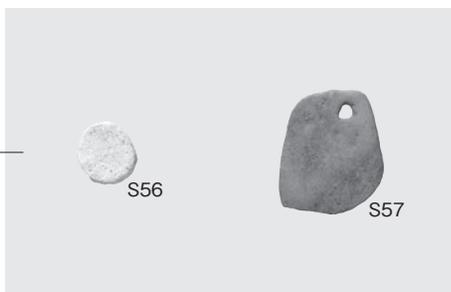
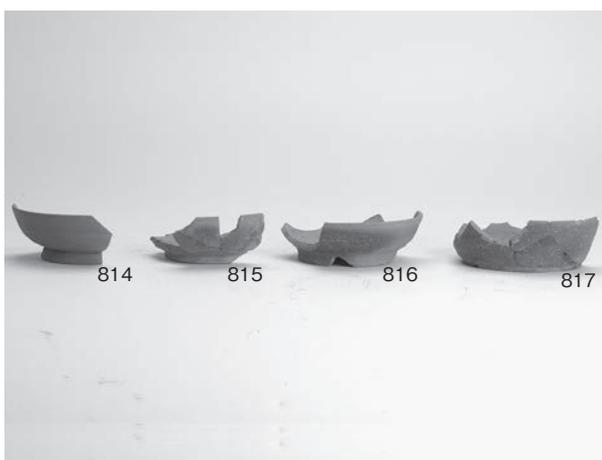
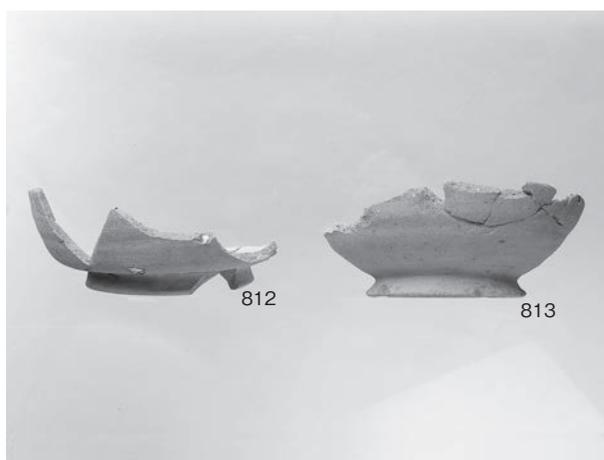
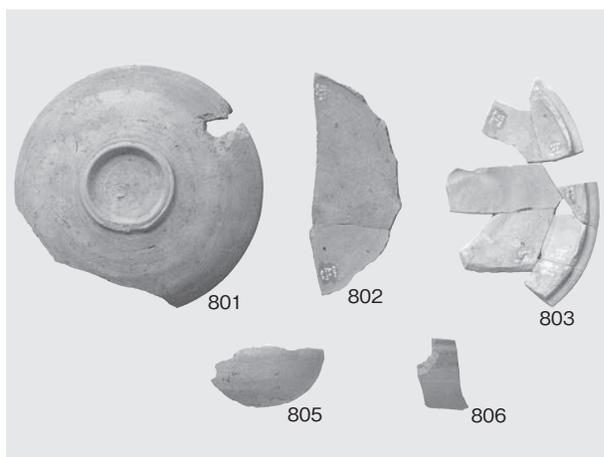






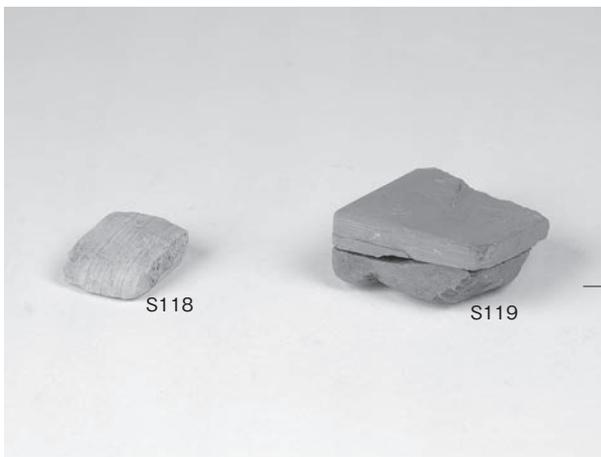
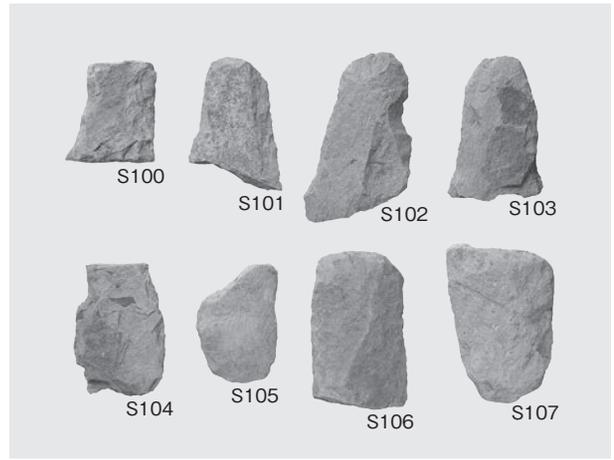
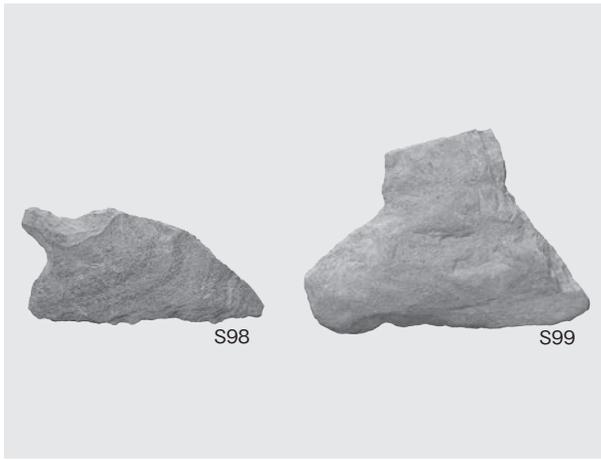
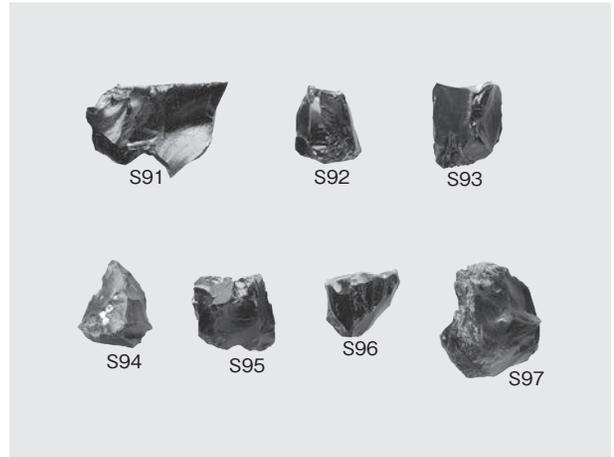
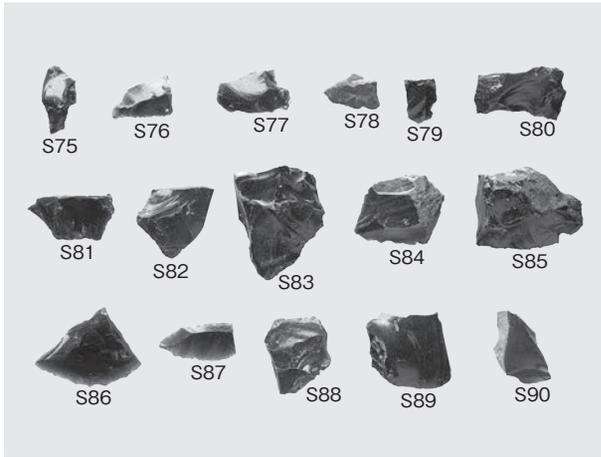
遺構外出土遺物



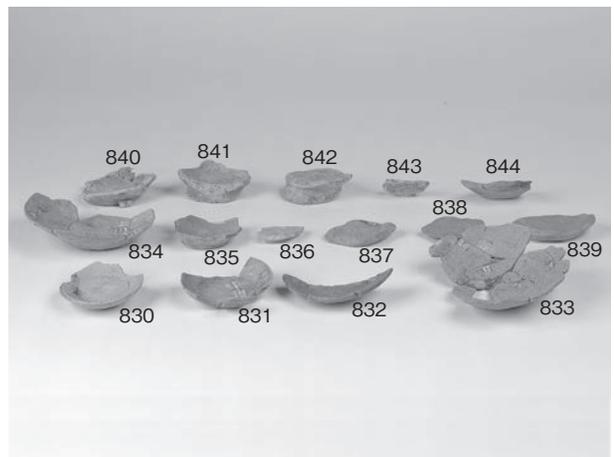
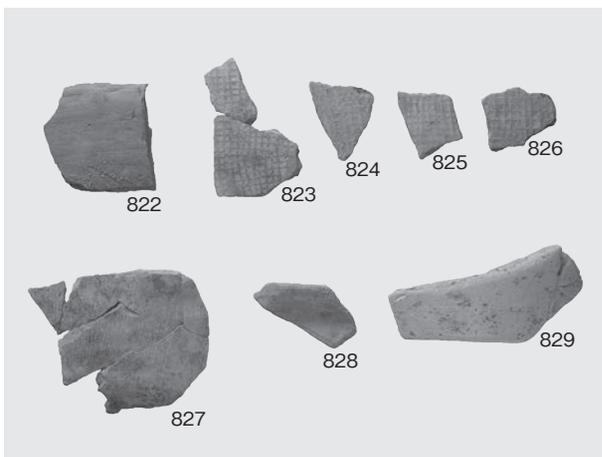
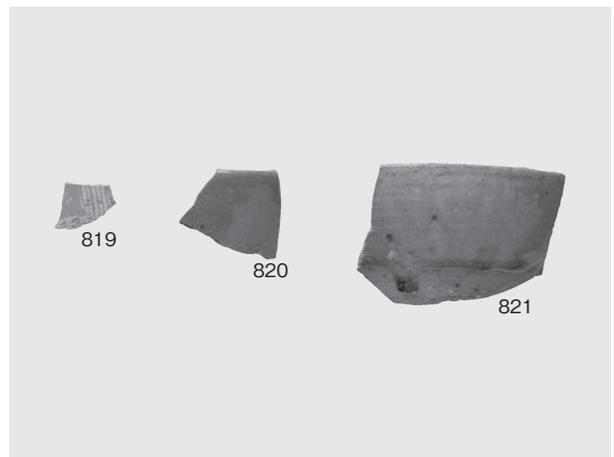
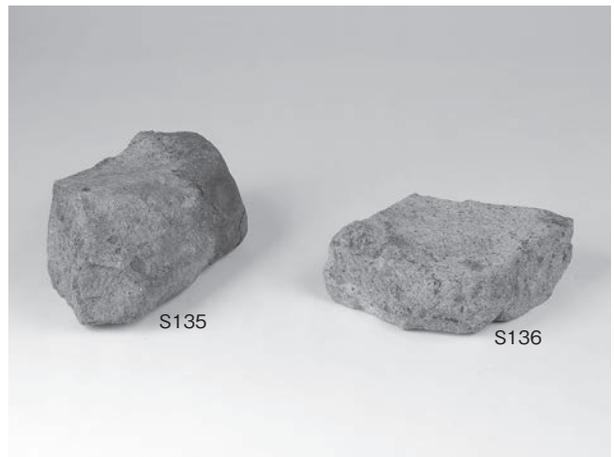
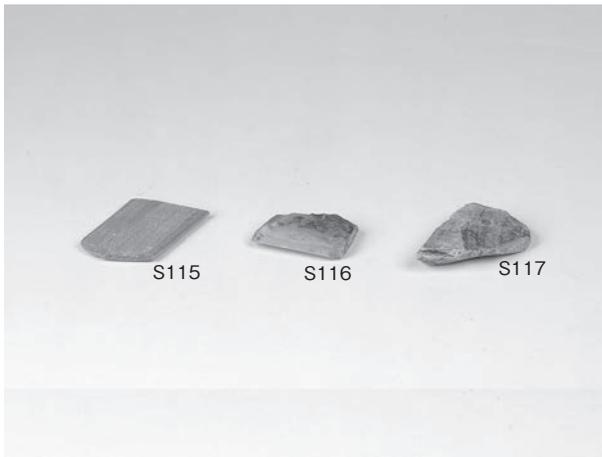


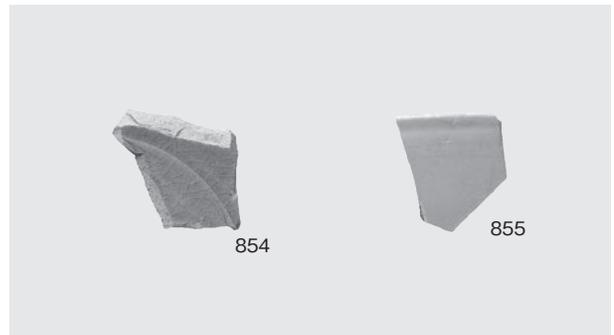
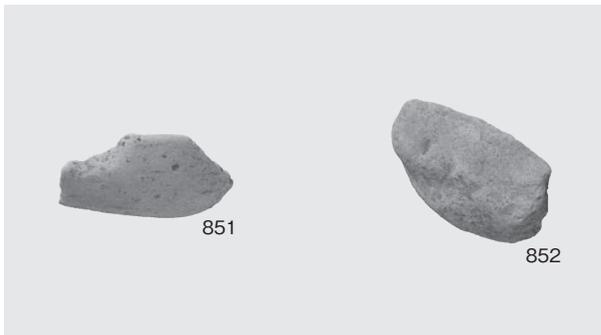
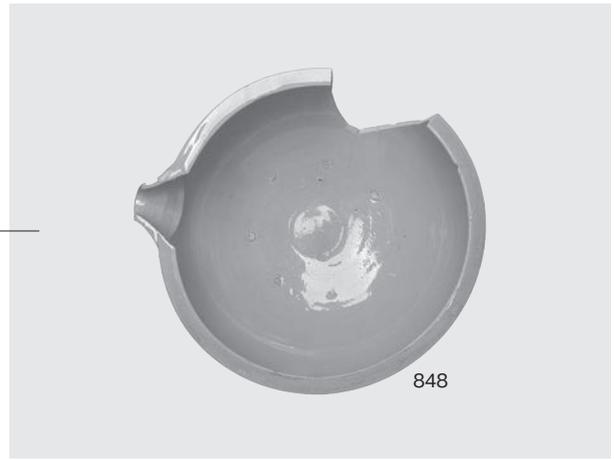
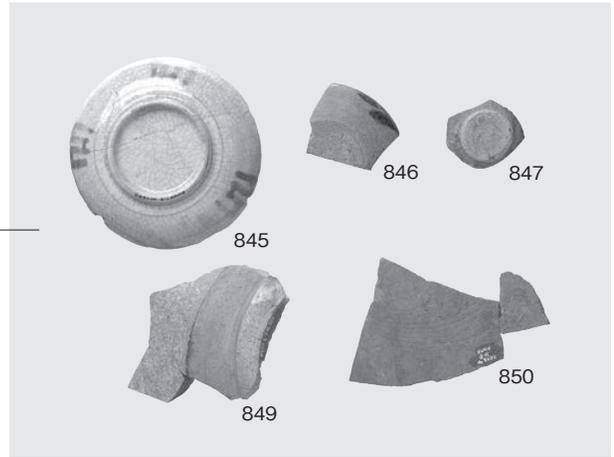
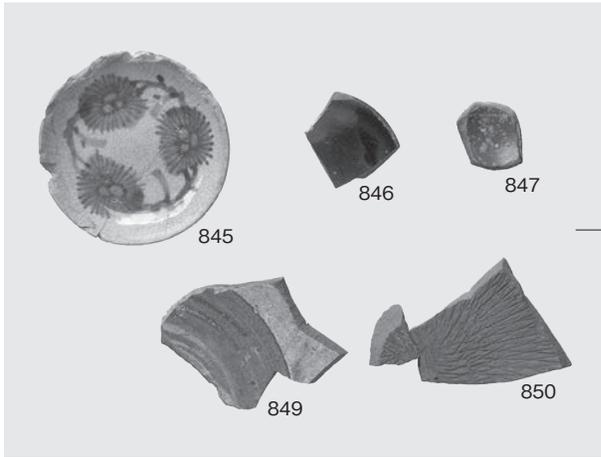
遺構外出土遺物

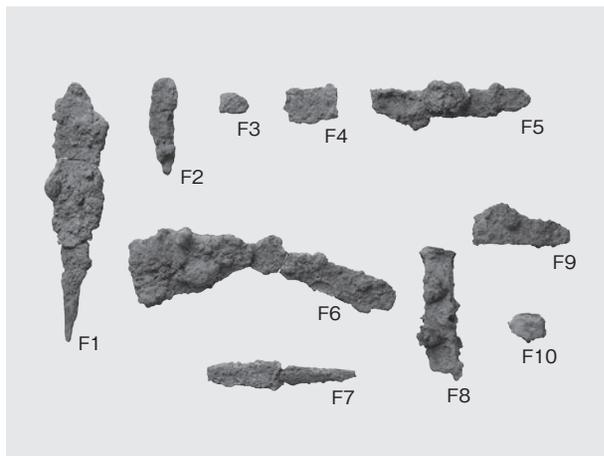
圖版36



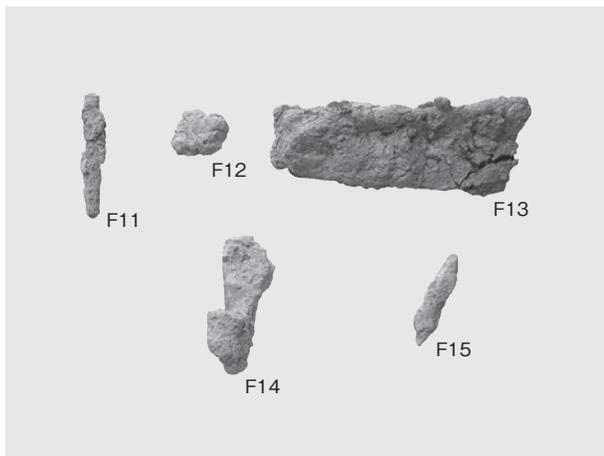
遺構外出土遺物



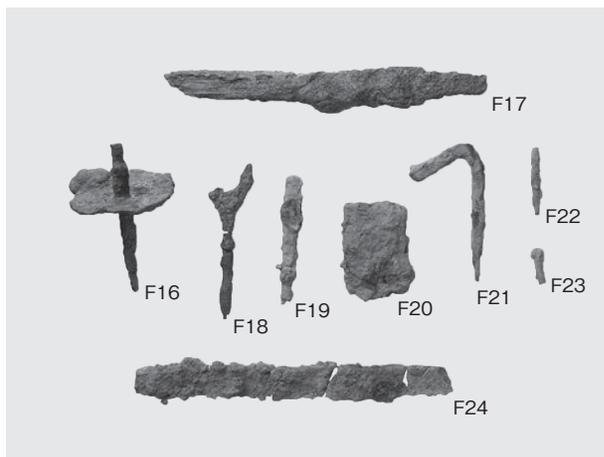




鉄製品



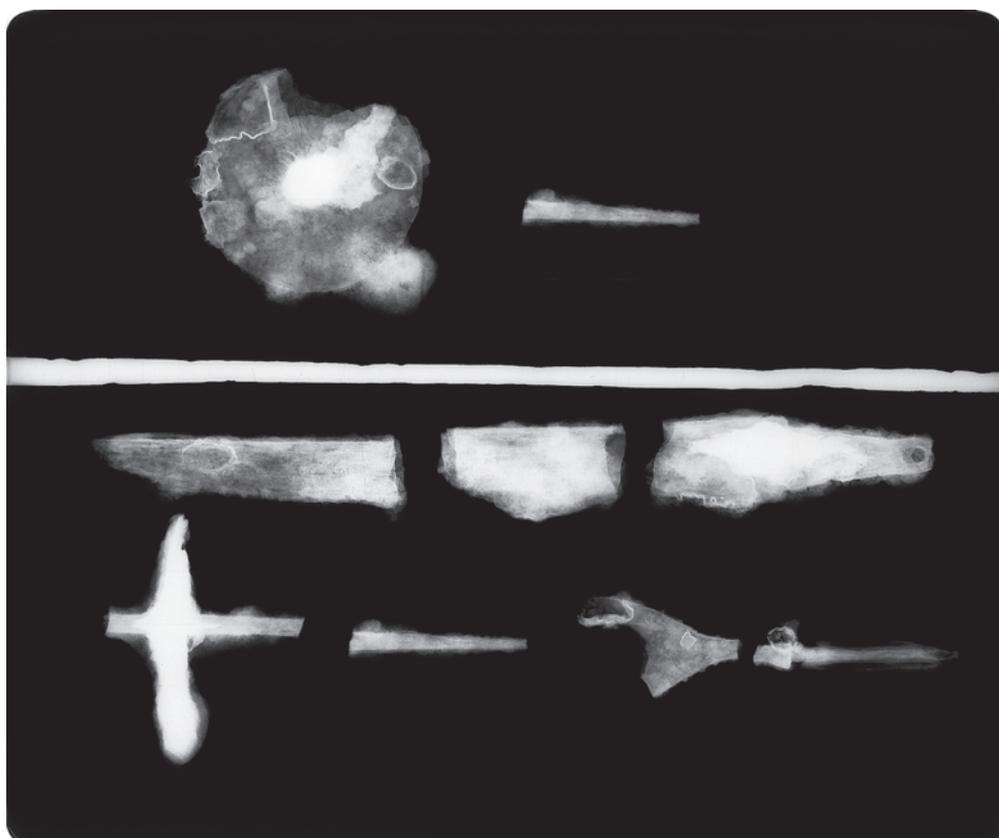
鉄製品



鉄製品



縄文土器



F16

鉄製品X線

F16

F17

F18

報 告 書 抄 録

ふりがな	さかいうちかいどうにしいせき							
書名	境内海道西遺跡							
副書名	一般国道180号（南部バイパス）道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	IV							
シリーズ名	一般財団法人米子市文化財団埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	5							
編著者名	濱野浩美							
編集機関	一般財団法人米子市文化財団 埋蔵文化財調査室							
所在地	〒683-0011 鳥取県米子市福市281番地 TEL・FAX 0859-26-0455 eメールアドレス yonagomaibun@clear.ocn.ne.jp							
発行年月日	西暦2014年11月30日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
境内海道西遺跡	鳥取県西伯郡南部町境	31389	南部町 411	35度 22分 42秒	133度 20度 42秒	平成24年 4月5日 ） 平成25年 1月24日	4,800㎡	道路建設 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
境内海道西遺跡	集落跡 古墳	縄文時代 弥生時代 古墳時代 古代 中世	円墳 土壙墓 竪穴建物 掘立柱建物 段状遺構 貯蔵穴 陥穴、土坑	弥生土器、須恵器、 土師器、土製品、 石器、石製品、鉄器、 陶磁器		早里17～20号墳の 検出。		
要 約								
<p>境内海道西遺跡は、法勝寺川左岸の丘陵斜面に位置する弥生時代から中世に亘る複合遺跡である。弥生時代後期から古墳時代前期にかけて集落域、古墳時代中期から後期の古墳群、そして奈良時代から平安時代にかけては再び集落域となった遺跡は、平安時代末に祭祀的な遺構が作られた後中世には墓域に転換していく。このような丘陵遺跡の土地利用の変遷を明らかにすることができた。特筆すべきものとして、4基の円墳のうち早里17・18号墳の周溝内埋葬墓から出土した供献土器は、当時の葬送儀礼の一端を示すものとして興味深く、また土師器と須恵器のセット関係として、編年資料としても注目すべきものであると思われる。</p>								

一般財団法人米子市文化財団埋蔵文化財発掘調査報告書 5

鳥取県西伯郡南部町

境内海道西遺跡

2014年11月

編集・発行 一般財団法人 米子市文化財団

〒683-0011 鳥取県米子市福市281番地

TEL 0859-26-0455

印刷 勝美印刷株式会社